

県道多度津丸亀線道路改築事業(多度津工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

庄八尺遺跡

2009.2

香川県教育委員会

序 文

庄八尺遺跡は、香川県仲多度郡多度津町庄に所在する遺跡です。県道多度津丸亀線道路改築事業（多度津工区）に伴い、香川県埋蔵文化財センターが平成17年度に発掘調査を行いました。

その結果、弥生時代から古代にかけての灌漑水路や、中世後半から近世初頭にかけての村落などを検出しました。遺跡周辺ではこれまで本格的な発掘調査は実施されておらず、今回の調査によって、遺跡周辺が比較的早くから開発され、人々の生活の基盤となっていたことが明らかとなりました。

また、遺跡周辺は安樂寿院領多度庄の荘園として早くから注目されており、調査によって中世村落が確認されたことは、今後の多度荘の研究に大きく寄与するものと思われます。

整理作業は、香川県埋蔵文化財センターにおいて平成19年7月から6か月の期間で実施し、ここに「県道多度津丸亀線道路改築事業（多度津工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 庄八尺遺跡」として刊行することになりました。

本報告書が香川県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間、関係機関並びに地元関係者各位には多大なご援助とご協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成21年2月

香川県埋蔵文化財センター
所長 大山 真充

例　　言

1. 本報告書は、県道多度津丸亀線道路改築事業（多度津工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で、香川県仲多度郡多度津町庄字八尺に所在する庄八尺遺跡（しょうはっしゃくいせき）の報告を収録した。
2. 発掘調査は、香川県教育委員会が香川県土木部道路課から委託され、香川県教育委員会が調査主体、香川県埋蔵文化財センターが調査担当として実施した。
3. 発掘調査は、平成17年4月1日から同年10月30日まで実施した。調査の担当は以下のとおりである。
　　蔵本晋司・小野秀幸・中嶋将史
4. 調査に当たって、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）
　　香川県土木部道路課、香川県中讃土木事務所、多度津町教育委員会、地元自治会、地元水利組合
5. 報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。本報告書の編集は蔵本が担当し、執筆は下記のとおり分担した。また遺構図のデジタルトレース作成は、主に森下英治が担当した。

第I～III・V章	蔵本
第IV章第1節	新山雅広（パレオ・ラボ）
第IV章第2節	株式会社 古環境研究所
第IV章第3節	株式会社 吉田生物研究所
第IV章第4節	藤根久・米田恭子・中村賢太郎（パレオ・ラボ）
第IV章第5節	富岡直人（岡山理科大学）

6. 報告書の作成に当たっては、下記の方々のご教示を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）
　　大橋康二、富山直人、藤澤良祐、松田朝由、松本和彦、森岡秀人
7. 本書挿図中の座標は、日本測地系第4系国土座標値に基づき、標高は東京湾平均海水位（T.P.）を基準としている。

また、遺構は下記の略号により表示している。

SB　掘立柱建物跡　SD　溝状遺構　SK　土坑　　SP　柱穴跡　　SR　自然河川跡
SX　出水遺構・不明遺構

8. 報告書の作成に当たっては、下記の方々・機関等に鑑定・分析を依頼・委託した。

花粉分析・土器胎土分析	株式会社 パレオ・ラボ
樹種同定	株式会社 古環境研究所・株式会社 吉田生物研究所
動物遺体	岡山理科大学教授 富山直人

また、出土金属器・木製品の保存処理を下記の機関に委託した。

金属器（アクリル系樹脂含浸法・290）　株式会社 吉田生物研究所
木製品（高級アルコール法・907～909）　同 上

9. 挿図の一部に国土交通省国土地理院発行の1/25,000地形図を使用した。
10. 遺構断面図の水平線上の数値は、水平線の標高値（単位m）を示している。
11. 石器実測図中、平面図中の濃いトーン部分及び輪郭線の周りの実線は摩滅痕を、輪郭線の周りの点線は潰れを表す。なお、現在の折損は黒く塗り潰している。また、木製品の年輪は、見かけ上の向きを模式図的に示している。
12. 遺物観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1994年度版』による。
13. 出土遺物の記述や観察表の作成については、各研究者のご教示や、下記文献を参照した。

〔在地産土師質土器〕 佐藤竜馬 1995「楠井産土器の編年」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第18冊 国分寺

- 楠井遺跡』、香川県教育委員会
- 佐藤竜馬 2000 「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 空港跡地遺跡IV』、香川県教育委員会
- 佐藤竜馬 2003 「近世在地土器の検討」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 高松城跡（西の丸町地区）II』、香川県教育委員会
- 乗松真也 2004 「14～15世紀の土師質土器・杯編年」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 浜ノ町遺跡』、香川県教育委員会
- 〔吉備系土師質土器〕 山本悦世 2007 「鹿田遺跡における土師質土器・椀の編年について」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊 鹿田遺跡5』、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 〔瓦器〕 尾上実 1983 「南河内の瓦器・椀」『藤澤一夫先生古稀記念 古文化論叢』
- 〔東播系須恵器〕 森田稔 1986 「東播系中世須恵器生産の成立と展開」『神戸市立博物館研究紀要』第3号
- 〔備前焼〕 乘岡実 1999 「中近世の備前焼・擂鉢の編年案」『第11回関西考古学研究会大会レジメ』
乘岡実 2000 「中世の備前焼・擂鉢（壺）の編年案・紀年銘資料にみる大甕（壺）の変遷」『第2回中近世備前焼研究会資料』
乘岡実 2002 「近世備前焼・擂鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡』、岡山市教育委員会
- 〔中国陶磁器〕 横田賢次郎・森田勉 1978 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』4
森田勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2
上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2
小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2
森毅 1995 「16・17世紀における陶磁器の様相とその流通－大阪の資料を中心に－」『ヒストリア』第149号
- 〔朝鮮王朝陶磁〕 茶道資料館編 1990 「遺跡出土の朝鮮王朝陶磁－名碗と考古学－」、茶道資料館・関西近世考古学研究会
- 〔肥前系陶磁器〕 大橋康二 1984 「肥前陶磁の変遷と出土分布－発掘資料を中心として－」『国内出土の肥前陶磁』、佐賀県立九州陶磁文化館
九州近世陶磁学界編 2000 『九州陶磁の編年』
- 〔瀬戸・美濃系陶器〕 藤澤良祐 2007 「総論」『愛知県史 別編窯業2』、愛知県
- 〔京・信楽系陶器〕 徳島城下町研究会編 1999 『京焼－消費地出土の様相－』
畠中英二 2007 「信楽焼の編年と技法」『続・信楽焼の考古学的研究』、サンライズ出版
- 〔堺・明石産陶器〕 白神典之 1988 「堺擂鉢について」『堺環濠都市遺跡（SKT79）発掘調査報告』、堺市教育委員会
- 〔土錐〕 真鍋篤行 1996 「瀬戸内地方の網漁業技術史の諸問題」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第9号
- 〔瓦〕 坪根利弘 1976 『日本の瓦屋根』、理工学社
森田克行 1984 「屋瓦」『摂津高槻城』、高槻市教育委員会
山崎信二 2000 『中世瓦の研究』、奈良国立文化財研究所
- 〔錢貨〕 兵庫埋蔵錢調査会編 1996 『日本出土錢総覽』

目 次

第Ⅰ章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査・整理の経過	1

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4

第Ⅲ章 発掘調査の成果

第1節 I区の調査	17
第2節 II区の調査	56
第3節 III区の調査	106
第4節 IV区の調査	148
第5節 V区の調査	170

第IV章 自然科学的分析

第1節 庄八尺遺跡の花粉化石群集	180
第2節 香川県庄八尺遺跡における樹種同定	187
第3節 香川県庄八尺遺跡出土木製品の樹種調査結果	192
第4節 庄八尺遺跡出土土器の胎土材料	196
第5節 香川県庄八尺遺跡出土動物遺存体	204

第V章 まとめ

第1節 遺構の変遷	205
第2節 弥生時代後期～古墳時代初頭の土器について	211

挿図目次

第 1 図 遺跡位置図	1	第 57 図 SD07 出土遺物実測図 7	51
第 2 図 調査区割図	2	第 58 図 SD07 出土遺物実測図 8	52
第 3 図 丸龜平野西縁部の地形分類略図	5	第 59 図 SD07 出土遺物実測図 9	53
第 4 図 周辺遺跡分布図	8	第 60 図 I 区包含層等出土遺物実測図	53
第 5 図 那珂・多度郡条里図 (金田 1988 を一部改変)	11	第 61 図 II 区調査区壁面土層断面図	55 ~ 56
第 6 図 I 区調査区壁面土層断面図	15 ~ 16	第 62 図 SB23 平・断面図、出土遺物実測図	57
第 7 図 SB01 平・断面図	17	第 63 図 SB24 平・断面図	58
第 8 図 SB02 平・断面図	18	第 64 図 SB25 平・断面図、出土遺物実測図	59
第 9 図 SB03 平・断面図	18	第 65 図 SB26 平・断面図	60
第 10 図 SB04 平・断面図、出土遺物実測図	19	第 66 図 SB27 平・断面図	60
第 11 図 SB05 平・断面図	20	第 67 図 SB28 平・断面図、出土遺物実測図	61
第 12 図 SB06 平・断面図	20	第 68 図 SB29 平・断面図	61
第 13 図 SB07 平・断面図、出土遺物実測図	21	第 69 図 SB30 平・断面図、出土遺物実測図	62
第 14 図 SB08 平・断面図	21	第 70 図 SB31 平・断面図	62
第 15 図 SB09 平・断面図、出土遺物実測図	22	第 71 図 SB32 平・断面図	63
第 16 図 SB10 平・断面図	23	第 72 図 SB33 平・断面図	64
第 17 図 SB11 平・断面図	23	第 73 図 SB34 平・断面図、出土遺物実測図	64
第 18 図 SB12 平・断面図	24	第 74 図 SB35 平・断面図、出土遺物実測図	65
第 19 図 SB13 平・断面図、出土遺物実測図	24	第 75 図 SB36 平・断面図	65
第 20 図 SB14 平・断面図	25	第 76 図 SB37 平・断面図	66
第 21 図 SB15 平・断面図	25	第 77 図 SB38 平・断面図、出土遺物実測図	66
第 22 図 SB16 平・断面図	26	第 78 国 SB39 平・断面図、出土遺物実測図	67
第 23 図 SB17 平・断面図	26	第 79 国 SB40 平・断面図、出土遺物実測図	67
第 24 国 SB18 平・断面図、出土遺物実測図	27	第 80 国 SB41 平・断面図	68
第 25 国 SB19 平・断面図、出土遺物実測図	27	第 81 国 SB41 出土遺物実測図	69
第 26 国 SB20 平・断面図	28	第 82 国 SB42 平・断面図、出土遺物実測図	70
第 27 国 SB21 平・断面図	28	第 83 国 SB43 平・断面図、出土遺物実測図 1	71
第 28 国 SB22 平・断面図、出土遺物実測図	29	第 84 国 SB43 出土遺物実測図 2	72
第 29 国 I 区柱穴出土遺物実測図	29	第 85 国 SB44 平・断面図、出土遺物実測図	73
第 30 国 SK01 平・断面図	30	第 86 国 SB45 平・断面図、出土遺物実測図	74
第 31 国 SK02 平・断面図、出土遺物実測図	30	第 87 国 SB46 平・断面図、出土遺物実測図	74
第 32 国 SK05 平・断面図	31	第 88 国 SB47 平・断面図、出土遺物実測図	75
第 33 国 SK08 平・断面図、出土遺物実測図	31	第 89 国 SB48 平・断面図、出土遺物実測図	76
第 34 国 SK10 平・断面図、出土遺物実測図	32	第 90 国 SB49 平・断面図	76
第 35 国 SK11 平・断面図	33	第 91 国 SB49 出土遺物実測図	77
第 36 国 SK11 出土遺物実測図	34	第 92 国 SB50 平・断面図、出土遺物実測図	77
第 37 国 SK12 平・断面図、出土遺物実測図	34	第 93 国 SB51 平・断面図、出土遺物実測図	78
第 38 国 SK14・15 平・断面図	34	第 94 国 SB52 平・断面図	79
第 39 国 SK16 平・断面図、出土遺物実測図	35	第 95 国 SB53 平・断面図、出土遺物実測図	79
第 40 国 SK17 平・断面図	36	第 96 国 II 区柱穴出土遺物実測図 1	81
第 41 国 SK17 出土遺物実測図	37	第 97 国 II 区柱穴出土遺物実測図 2	82
第 42 国 SK18 平・断面図	38	第 98 国 II 区柱穴出土遺物実測図 3	83
第 43 国 SK21 平・断面図、出土遺物実測図	38	第 99 国 SP2327 銅錢出土状況・出土遺物実測図	84
第 44 国 SD01・SD02 土層断面図	38	第 100 国 SK23 平・断面図、出土遺物実測図	84
第 45 国 SD03 土層断面図	39	第 101 国 SK26 平・断面図、出土遺物実測図 1	85
第 46 国 SD03 出土遺物実測図 1	40	第 102 国 SK26 出土遺物実測図 2	86
第 47 国 SD03 出土遺物実測図 2	41	第 103 国 SK27 平・断面図、出土遺物実測図	86
第 48 国 SD03 出土遺物実測図 3	42	第 104 国 SK28 ~ SK32 平・断面図、出土遺物実測図	87
第 49 国 SD04・05 土層断面図	43		
第 50 国 SD06 土層断面図、出土遺物実測図	44	第 105 国 SK33 平・断面図、出土遺物実測図 1	88
第 51 国 SD07 土層断面図、出土遺物実測図 1	45	第 106 国 SK33 出土遺物実測図 2	89
第 52 国 SD07 出土遺物実測図 2	46	第 107 国 SK33 出土遺物実測図 3	90
第 53 国 SD07 出土遺物実測図 3	47	第 108 国 SK34 平・断面図、出土遺物実測図	91
第 54 国 SD07 出土遺物実測図 4	48	第 109 国 SK35 平・断面図、出土遺物実測図	92
第 55 国 SD07 出土遺物実測図 5	49	第 110 国 SK36 平・断面図、出土遺物実測図	92
第 56 国 SD07 出土遺物実測図 6	50	第 111 国 SK38 平・断面図、出土遺物実測図	93
		第 112 国 SK39 平・断面図、出土遺物実測図	93

第 113 図 SK40 平・断面図	94
第 114 図 SK41 平・断面図、出土遺物実測図	94
第 115 図 SK42 平・断面図、出土遺物実測図	95
第 116 図 SK43 平・断面図	95
第 117 図 SK44 平・断面図、出土遺物実測図	95
第 118 図 SE01 平・断面図、出土遺物実測図	96
第 119 図 SX03 平・断面図、出土遺物実測図 1	98
第 120 図 SX03 出土遺物実測図 2	99
第 121 図 SX03 出土遺物実測図 3	100
第 122 図 SX04・SD08 平・断面図	101
第 123 図 SX04・SD18 出土遺物実測図	102
第 124 図 SX05 平・断面図、出土遺物実測図	102
第 125 図 SX06 平・断面図、出土遺物実測図	103
第 126 図 SD09 土層断面図、出土遺物実測図	104
第 127 図 SD10 土層断面図、出土遺物実測図	104
第 128 図 SD12 土層断面図	105
第 129 図 SD13 土層断面図、出土遺物実測図	105
第 130 図 II 区包含層等出土遺物実測図	106
第 131 図 III 区調査区壁面土層断面図	107 ~ 108
第 132 図 SB54 平・断面図、出土遺物実測図	109
第 133 図 SB55 平・断面図	110
第 134 図 SB56 平・断面図、出土遺物実測図	110
第 135 図 SB57 平・断面図、出土遺物実測図	111
第 136 図 SB58 平・断面図	112
第 137 図 SB59 平・断面図、出土遺物実測図	112
第 138 図 SB60 平・断面図	113
第 139 図 SB61 平・断面図、 SP3474 平・断面図、出土遺物実測図	114
第 140 図 SB62 平・断面図	115
第 141 図 SB63 平・断面図、出土遺物実測図	115
第 142 図 SB64 平・断面図	116
第 143 図 SB64 出土遺物実測図	117
第 144 図 SB65 平・断面図、出土遺物実測図	117
第 145 図 SB66 平・断面図	118
第 146 図 SB67 平・断面図、出土遺物実測図	119
第 147 図 III 区柱穴出土遺物実測図 1	120
第 148 図 III 区柱穴出土遺物実測図 2	121
第 149 図 III 区柱穴出土遺物実測図 3	122
第 150 図 III 区柱穴出土遺物実測図 4	123
第 151 図 III 区柱穴出土遺物実測図 5	124
第 152 図 III 区柱穴出土遺物実測図 6	125
第 153 図 SK45 平・断面図	126
第 154 図 SK46 平・断面図	126
第 155 図 SK47 平・断面図	127
第 156 図 SK48 平・断面図	127
第 157 図 SK49 平・断面図、出土遺物実測図	127
第 158 図 SK50 平・断面図、出土遺物実測図 1	128
第 159 図 SK50 出土遺物実測図 2	129
第 160 図 SK51 平・断面図	129
第 161 図 SK52 平・断面図、出土遺物実測図	130
第 162 図 SK53 平・断面図、出土遺物実測図	130
第 163 図 SK55 ~ 58・60・61 平・断面図、出土遺物実測図	131
第 164 図 SK62 平・断面図、出土遺物実測図	132
第 165 図 SK63 平・断面図、出土遺物実測図	132
第 166 図 SK64 平・断面図	133
第 167 図 SK65 平・断面図、出土遺物実測図	133
第 168 図 SK66 平・断面図、出土遺物実測図	134
第 169 図 SK67 平・断面図	134
第 170 図 SK68 平・断面図、出土遺物実測図	134
第 171 図 SE02 平・断・立面図	135
第 172 図 SE02 出土遺物実測図	136
第 173 図 SP2447 平・断面図、出土遺物実測図	137
第 174 図 SP3405 平・断面図、出土遺物実測図	137
第 175 図 SX07 平・断面図	138
第 176 図 SX07 出土遺物実測図	139
第 177 図 SX08 平・断面図、出土遺物実測図	140
第 178 図 SX09 平・断面図、出土遺物実測図	141
第 179 図 SD14 土層断面図、出土遺物実測図	142
第 180 図 SD15 土層断面図、出土遺物実測図 1	143
第 181 図 SD15 出土遺物実測図 2	144
第 182 図 SD15 出土遺物実測図 3	145
第 183 図 SR01 土層断面図	146
第 184 図 SR01 出土遺物実測図	147
第 185 図 III 区包含層出土遺物実測図	148
第 186 図 IV 区調査区壁面土層断面図	149 ~ 150
第 187 図 SB68 平・断面図	151
第 188 図 SB69 平・断面図、出土遺物実測図	152
第 189 図 SB70 平・断面図、出土遺物実測図	153
第 190 図 SB71 平・断面図、出土遺物実測図	154
第 191 図 SB72 平・断面図、出土遺物実測図	155
第 192 図 SB73 平・断面図、出土遺物実測図	156
第 193 図 IV 区柱穴出土遺物実測図	156
第 194 図 SK72 平・断面図、出土遺物実測図 1	157
第 195 図 SK72 出土遺物実測図 2	158
第 196 図 SK73 平・断面図、出土遺物実測図	159
第 197 図 SK74 平・断面図、出土遺物実測図	159
第 198 図 SK75 平・断面図	160
第 199 図 SK75 出土遺物実測図	160
第 200 国 SX11 土層断面図、出土遺物実測図 1	161
第 201 国 SX11 出土遺物実測図 2	162
第 202 国 SX12 平・断面図、出土遺物実測図	163
第 203 国 SX13 平・断面図、出土遺物実測図	164
第 204 国 SX14 平・断面・模式図	165
第 205 国 SX14 出土遺物実測図	166
第 206 国 SD17 土層断面図、出土遺物実測図	166
第 207 国 SD18 土層断面図、出土遺物実測図	167
第 208 国 SD19 土層断面図、出土遺物実測図	167
第 209 国 SD20 土層断面図、出土遺物実測図	168
第 210 国 SD21 土層断面図測図	168
第 211 国 SD21 出土遺物実測図	169
第 212 国 IV 区包含層出土遺物実測図	170
第 213 国 V 区調査区壁面土層断面図	171 ~ 172
第 214 国 SB74 平・断面図	173
第 215 国 SB75 平・断面図	173
第 216 国 SB76 平・断面図	174
第 217 国 SB74・75・IV 区柱穴出土遺物実測図	174
第 218 国 SK77 平・断面図、出土遺物実測図	175
第 219 国 SE03 平・断面図、出土遺物実測図 1	176
第 220 国 SE03 出土遺物実測図 2	177
第 221 国 SE03 出土遺物実測図 3	178
第 222 国 古代試料の花粉化石分布図	182
第 223 国 中世後半試料の花粉化石分布図	183
第 224 国 香川県の領家帶地質概略図 (日本の地質『四国地方』編集委員会編、 1991 より引用)	201
第 225 国 庄八尺遺跡遺構変遷図 1	207 ~ 208
第 226 国 庄八尺遺跡遺構変遷図 2	209 ~ 210
第 227 国 土器胎土分析試料実測図	213

表目次

第1表 周辺遺跡地名表	9	土器観察表 (9)	239
第2表 花粉化石産出一覧表	181	土器観察表 (10)	240
第3表 庄八尺遺跡における樹種同定結果	189	土器観察表 (11)	241
第4表 庄八尺遺跡における樹種同定結果	192	土器観察表 (12)	242
第5表 胎土材料を検討した土器とその特徴	196	土器観察表 (13)	243
第6表 土器胎土中の粘土および砂粒の特徴	199	土器観察表 (14)	244
第7表 胎土中の岩石片と組み合わせ	199	土器観察表 (15)	245
第8表 出土動物遺存体属性表	204	土器観察表 (16)	246
掘立柱建物一覧 (1)	216	土器観察表 (17)	247
掘立柱建物一覧 (2)	217	土器観察表 (18)	248
掘立柱建物一覧 (3)	218	土器観察表 (19)	249
掘立柱建物一覧 (4)	219	土器観察表 (20)	250
掘立柱建物一覧 (5)	220	土器観察表 (21)	251
掘立柱建物一覧 (6)	221	土器観察表 (22)	252
掘立柱建物一覧 (7)	222	土器観察表 (23)	253
掘立柱建物一覧 (8)	223	土器観察表 (24)	254
掘立柱建物一覧 (9)	224	土玉観察表	255
掘立柱建物一覧 (10)	225	土錐観察表	255
掘立柱建物一覧 (11)	226	土製円盤観察表	255
掘立柱建物一覧 (12)	227	土製品等観察表	255
土坑一覧 (1)	227	軒丸瓦観察表	256
土坑一覧 (2)	228	軒平瓦観察表	256
土坑一覧 (3)	229	丸瓦観察表	256
井戸一覧	230	平瓦等観察表	257
性格不明遺構・地鎮遺構一覧	230	石器・石製品観察表 (1)	257
土器観察表 (1)	231	石器・石製品観察表 (2)	258
土器観察表 (2)	232	石器・石製品観察表 (3)	259
土器観察表 (3)	233	木器・木製品観察表	259
土器観察表 (4)	234	金属器観察表 (1)	260
土器観察表 (5)	235	金属器観察表 (2)	261
土器観察表 (6)	236	錢貨観察表	261
土器観察表 (7)	237	煙管観察表	261
土器観察表 (8)	238	銅鋤観察表	261

写真図版目次

図版 1	産出した花粉化石	I b 区調査区東壁土層断面（西より）
図版 2	庄八尺遺跡の木材 I	I a 区 SP520 遺物出土状況（西より）
図版 3	庄八尺遺跡の木材 II	I b 区 SP593 遺物出土状況（南より）
図版 4	庄八尺遺跡の木材 III	I b 区 SP576 柱材出土状況（南より）
図版 5	庄八尺遺跡の木材 IV	I b 区 SP618 柱材出土状況（南より）
図版 6	庄八尺遺跡の木材 V	I b 区 SP640 貝出土状況（東より）
図版 7	土器胎土の偏光顕微鏡写真	I b 区 SP698 詰石出土状況（南より）
図版 8	土器胎土の偏光顕微鏡写真	I b 区 SP727 柱材出土状況（東より）
図版 9	遺跡付近空中写真	I b 区 SP766 柱材出土状況（南より）
図版 10	I ~IV区調査前状況（西より）	I b 区 SP783 柱材出土状況（南より）
	I ~V区調査前状況（東より）	I b 区 SP773 砥石出土状況（南より）
	調査区より丸亀平野東部遠望（西より）	I a 区 SK02 遺物出土状況（南より）
	調査区より丸亀平野南部遠望（北より）	I a 区 SK02 土層断面（北西より）
	遺跡遠景（北西より）	I a 区 SK02 遺物出土状況細部（南より）
図版 11	大麻山からみた丸亀平野西部と瀬戸内海（南より）	I a 区 SK02 遺物出土状況（南より）
	多度津の旧市街と多度津港（南西より）	図版 15
図版 12	I a 区全景（西より）	I a 区 SK10 全景（東より）
	I b 区全景（西より）	I a 区 SK10 土層断面細部（南より）
図版 13	I a 区調査区北壁土層断面（南より）	I a 区 SK11 土層断面（東より）
		I b 区 SK12 土層断面（西より）

図版 16	I b 区 SK15 全景 (南より) I b 区 SK15 土層断面 (西より) I b 区 SK16 全景 (南より) I b 区 SK16 土層断面 (南より) I b 区 SK17 遺物出土状況 (南より) I b 区 SK17-b 土層断面 (東より) I b 区 SK17 遺物出土状況細部 (南より) I b 区 SK17 全景 (西より) I b 区 SK18 全景 (南より) I b 区 SK18 土層断面 (南より) I b 区 SK21 全景 (南より) I b 区 SK21 土層断面 (南より)	II a 区 SP1981 根石出土状況 (南より) II a 区 SK23 遺物出土状況 (南西より) II a 区 SK28 土層断面 (南より) II a 区 SK26 遺物出土状況 (南より) II a 区 SK26 土層断面 (西より) II a 区 SK29 土層断面 (南より) II a 区 SK29 全景 (南より) II a 区 SK27 土層断面 (南より) II a 区 SK32 土層断面 (南より) II a 区 SK33A・B 全景 (南より) II a 区 SX03 銅製品出土状況 (北より) II a 区 SK33B 用途不明銅製品出土状況 (南より) II a 区 SK33A・B 東西土層断面 (南より) II a 区 SK33A・B 南北土層断面 (東より)
図版 17	I a 区 SD03 全景 (西より) I b 区 SD03 (調査区東壁) 土層断面 (西より) I b 区 SD03-c 土層断面 (東より) I b 区 SD03-b 土層断面 (西より) I a 区 SD07 全景 (西より) I a 区 SD07 遺物出土状況 (北より) I a 区 SD07 遺物出土状況 (北東より) I a 区 SD07 遺物出土状況細部 (南より)	II a 区 SK30 土層断面 (南より) II a 区 SK30 全景 (南より) II a 区 SK35 土層断面 (南より) II a 区 SK35 全景 (南より) II a 区 SE01 土層断面 (南より) II a 区 SX05 土層断面 (西より) II a 区 SX04 遺物出土状況 (南より) II a 区 SX04 土層断面 (南より)
図版 18	II a 区全景 (西より) II a 区 SP952 柱材出土状況 (南より) II a 区 SP953 柱材出土状況 (南より) II a 区 SP961 柱材出土状況 (南より) II a 区 SP991 遺物出土状況 (北より)	II a 区 SX03 全景 (南より) II a 区 SX03 土層断面 (南より) II a 区 SX03 遺物出土状況 (南より) II a 区 SX03 遺物出土状況細部 (南より)
図版 19	II a 区 SP1101 検出状況 (南より) II a 区 SP1326 柱材出土状況 (南より) II a 区 SP1129 遺物出土状況 (南より) II a 区 SP1129 遺物出土状況細部 (南より)	II a 区 SD03-e 土層断面 (西より) II a 区 SD08 土層断面 (北より) II a 区 SD11 土層断面 (北より) II a 区 SD10-a 土層断面 (北より) II a 区 SD10-b 土層断面 (東より)
図版 20	II a 区 SP1231 遺物出土状況 (南東より) II a 区 SP1242 根石出土状況 (南東より) II a 区 SP1262 遺物出土状況 (北より) II a 区 SP1359 柱材出土状況 (西より) II a 区 SP1378 柱材出土状況 (南西より) II a 区 SP1408 遺物出土状況 (南西より) II a 区 SP1426 遺物出土状況 (北より) II a 区 SP1428 柱材出土状況 (北東より) II a 区 SP1469 柱材出土状況 (南西より) II a 区 SP1480 検出状況 (東より) II a 区 SP1481 根石出土状況 (南より)	II a 区 SD13-c 土層断面 (南東より) II b 区全景 (西より) II b 区全景 (西より)
図版 21	II a 区 SP1507 遺物出土状況 (南より) II a 区 SP1503 柱材出土状況 (北東より) II a 区 SP1513 柱材出土状況 (南より) II a 区 SP1520 遺物出土状況 (南より) II a 区 SP1542 遺物出土状況 (南西より) II a 区 SP1548 貝出土状況 (東より) II a 区 SP1553 柱材出土状況 (南東より) II a 区 SP1575 根石出土状況 (南より) II a 区 SP1614 根石出土状況 (南より)	II b 区 SP1049 根石出土状況 (南より) II b 区 SP1078 根石出土状況 (西より) II b 区 SP1079 遺物出土状況 (北より) II b 区 SP1091 根石出土状況 (東より) II b 区 SP1701 柱材出土状況 (東より) II b 区 SP1702 柱材出土状況 (東より)
図版 22	II a 区 SP1671 柱材出土状況 (東より) II a 区 SP1709 柱材出土状況 (西より) II a 区 SP1724 柱材出土状況 (北より) II a 区 SP1736 柱材出土状況 (東より) II a 区 SP1740 柱材出土状況 (西より) II a 区 SP1851 遺物出土状況 (南より) II a 区 SP1898 調査区西壁土層断面 (東より) II a 区 SP1905 根石出土状況 (南より) II a 区 SP1909 柱材出土状況 (西より) II a 区 SP1945 遺物出土状況 (東より)	II b 区 SP1703 柱材出土状況 (東より) II b 区 SP1993 柱材出土状況 (南東より) II b 区 SP2028 遺物出土状況 (南より) II b 区 SP2018 遺物出土状況 (北より) II b 区 SP2084 柱材出土状況 (南より) II b 区 SP2086 柱材出土状況 (東より) II b 区 SP2098 根石出土状況 (南より) II b 区 SP2094 根石出土状況 (北より) II b 区 SP2141 柱材出土状況 (北西より)
図版 23	II a 区 SP1956 遺物出土状況 (北西より)	II b 区 SP2142 根石出土状況 (北より) II b 区 SP2176 遺物出土状況 (西より) II b 区 SP2292 柱材出土状況 (東より) II b 区 SP2295 柱材出土状況 (南より) II b 区 SP2325 柱材出土状況 (北より) II b 区 SP2326 遺物出土状況 (南より) II b 区 SP2349 遺物出土状況 (南より) II b 区 SP2352 柱材出土状況 (西より) II b 区 SP2358 柱材出土状況 (東より) II b 区 SP2363 柱材出土状況 (東より)

	II b 区 SP2370 柱材出土状況（南より）	III a 区 SK57 土層断面（南より）
	II b 区 SP2374 柱材出土状況（東より）	III a 区 SX07 土層断面細部（南より）
	III a 区 SP2390 遺物出土状況（西より）	III a 区 SD14-a 土層断面（北より）
	III a 区 SP2411 遺物出土状況（南より）	III a 区 SD14-b 土層断面（北より）
図版 33	III a 区 SP2447 遺物出土状況（東より）	III a 区 SD15-a 土層断面（北より）
	III a 区 SP2447 遺物出土状況細部（東より）	III a 区 SD15-b 土層断面（南より）
	II b 区 SK34 土層断面（東より）	III b 区 全景（東より）
	II b 区 SK34 土層断面（西より）	III b 区 全景（西より）
	II b 区 SK34 上層遺物出土状況（南より）	III b 区 調査区北壁土層断面（南より）
	II b 区 SK34 全景（南より）	III b 区 SP3301 遺物出土状況（東より）
	II b 区 SK36 土層断面（東より）	III b 区 SP3330 遺物出土状況（西より）
	II b 区 SK36 全景（南より）	III b 区 SP3351 遺物出土状況（南より）
図版 34	II b 区 SK39 土層断面（南より）	III b 区 SP3363 遺物出土状況（西より）
	II b 区 SK39 全景（南より）	III b 区 SP3364 遺物出土状況（西より）
	II b 区 SK39 植物遺体出土状況（南より）	III b 区 SP3377 遺物出土状況（東より）
	II b 区 SK39 植物遺体出土状況細部（南より）	III b 区 SP3405 遺物出土状況（南より）
	II b 区 SK40 土層断面（南より）	III b 区 SP3474 遺物出土状況（東より）
	II b 区 SK40 全景（南より）	III b 区 SP3484 遺物出土状況（西より）
	II b 区 SK41 土層断面（南より）	III b 区 SP3590 遺物出土状況（南より）
	II b 区 SK41 全景（南より）	III b 区 SK58 土層断面（南より）
図版 35	II b 区 SK42 土層断面（南より）	III b 区 SK60 土層断面（南より）
	II b 区 SK42 木製品出土状況（南より）	III b 区 SK61 土層断面（南より）
	II b 区 SK42 植物遺体出土状況（南より）	III b 区 SK61 全景（南より）
	II b 区 SK42 植物遺体出土状況細部（南より）	III b 区 SK62 土層断面（南より）
	II b 区 SK42 木片出土状況（南より）	III b 区 SK64 土層断面（東より）
	II b 区 SK42 木製品出土状況（南より）	III b 区 SK63 土層断面（東より）
	II b 区 SK43 土層断面（南より）	III b 区 SK63 遺物出土状況（北より）
	II b 区 SK43 全景（南より）	III b 区 SK65 土層断面（南より）
図版 36	II b 区 SX06 土層断面（南東より）	III b 区 SK66 土層断面（西より）
	II b 区 SX06 全景（東より）	III b 区 SX08 土層断面（東より）
	II b 区 SD03-f 土層断面（西より）	III b 区 SX08 遺物出土状況（南より）
	II b 区 SD03-g 土層断面（西より）	III b 区 SX09 土層断面（東より）
	II b 区 SD12-b 土層断面（北より）	III b 区 SX09 全景（東より）
図版 37	II b 区 SD12-a 土層断面（南より）	III b 区 SX09・SE02 全景（東より）
	II b 区 SD12 北壁土層断面（南より）	III b 区 SE02 上層遺物出土状況（南より）
	II b 区 SD13 西壁土層断面（北東より）	III b 区 SE02 石組断面（南より）
	II b 区 SD13-d 土層断面（北より）	III b 区 SE02 全景（東より）
	III a 区 調査区北壁土層断面（南より）	III b 区 SE02 上層土層断面（南より）
	III a 区 調査区北壁（SD14）土層断面（南より）	III b 区 SF01 全景（東より）
	III a 区 調査区北壁（SP2831）土層断面（南より）	III b 区 SF01 土層断面（東より）
図版 38	III a 区 全景（西より）	III b 区 SF01 上面検出状況（北より）
	III a 区 全景（南より）	III b 区 SR01-a 土層断面（西より）
図版 39	III a 区 SP2796 遺物出土状況（南より）	III b 区 SR01-b 土層断面（東より）
	III a 区 SP2840 遺物出土状況（西より）	IV a 区 SR01-c 土層断面（東より）
	III a 区 SK46 土層断面（西より）	IV a 区 SR01-e 土層断面（西より）
	III a 区 SK46 全景（西より）	IV a 区 SR01-d 土層断面（西より）
	III a 区 SK47 土層断面（東より）	IV a 区 全景（西より）
	III a 区 SK47 全景（東より）	IV a 区 全景（東より）
	III a 区 SK48 土層断面（南より）	IV a 区 調査区北壁土層断面（南より）
	III a 区 SK48 全景（南より）	IV a 区 調査区北壁土層断面（南より）
図版 40	III a 区 SK49 土層断面（南より）	IV a 区 SP2962 遺物出土状況（南より）
	III a 区 SK50 土層断面（北より）	IV a 区 SP2973 遺物出土状況（南より）
	III a 区 SK51 土層断面（南より）	IV a 区 SP2962 遺物出土状況（南より）
	III a 区 SK51 全景（南より）	IV a 区 SP2962 遺物出土状況細部（東より）
	III a 区 SK52 土層断面（南より）	IV a 区 SK72 全景（南より）
	III a 区 SK52 全景（南より）	IV a 区 SK73 土層断面（南より）
	III a 区 SK55 土層断面（南東より）	IV a 区 SK74 土層断面（南より）
	III a 区 SK55 全景（北より）	IV a 区 SK74 全景（南より）
図版 41	III a 区 SK56 土層断面（南より）	IV a 区 SK75 土層断面（南より）
	III a 区 SK56 全景（東より）	IV a 区 SK75 遺物出土状況（南より）

	IV a 区 SX12 土層断面（東より）	図版 69	土器・陶磁器・土製品 (345, 346, 347, 348, 351, 352, 353, 354, 356, 357, 358)
図版 52	IV a 区 SX12 遺物出土状況（南より）		
	IV a 区 SX13 土層断面（東より）	図版 70	土器・陶磁器・土製品 (364, 365, 368, 371, 378, 379, 380, 381, 382, 385, 388, 389, 392, 393, 396, 397)
	IV a 区 SX13 遺物出土状況（南より）		
図版 53	IV a 区 SX14 土層断面（東より）	図版 71	土器・陶磁器・土製品 (399, 400, 412, 413, 414, 416, 417, 420, 424, 425, 426)
	IV a 区 SX14 全景（北より）	図版 72	土器・陶磁器・土製品 (432, 435, 438, 439, 450, 451, 452, 453, 454, 455, 456, 477)
	IV a 区 SX14 遺物出土状況（南より）	図版 73	土器・陶磁器・土製品 (478, 479, 480, 481, 491, 495, 496, 497, 498)
図版 54	IV a 区 SD17-a 土層断面（東より）	図版 74	土器・陶磁器・土製品 (499, 501, 504, 505, 506, 509, 510, 511, 516, 524, 525)
	IV a 区 SD19 調査区北壁土層断面（南より）	図版 75	土器・陶磁器・土製品 (536, 537, 538, 540, 542, 546, 547, 549, 551, 560, 563)
	IV a 区 SD19-a 土層断面（北より）	図版 76	土器・陶磁器・土製品 (561, 568, 569, 572, 573, 574, 575, 580, 614, 624)
図版 55	IV a 区 SD19-b 土層断面（南より）	図版 77	土器・陶磁器・土製品 (616, 620, 625, 626, 627, 628, 630, 632, 644, 645, 646, 647, 649, 652, 653)
	IV a 区 SD20-a 土層断面（東より）	図版 78	土器・陶磁器・土製品 (654, 655, 656, 657, 671, 678, 679, 680, 681, 682)
図版 56	IV a 区 SD21-a 土層断面（西より）	図版 79	土器・陶磁器・土製品 (683, 684, 685, 686, 687, 688, 700, 701, 742, 751)
	IV b 区全景（西より）	図版 80	土器・陶磁器・土製品 (752, 755, 756, 770, 771, 789, 795, 796, 797, 798, 799)
図版 57	IV b 区全景（東より）	図版 81	土器・陶磁器・土製品（800, 801, 809, 833, 834）
	IV b 区調査区北壁土層断面（南より）	図版 82	土器・陶磁器・土製品 (835, 836, 837, 838, 839, 840, 841, 842)
図版 58	IV b 区調査区北壁土層断面（北より）	図版 83	土器・陶磁器・土製品 (844, 845, 846, 847, 848, 868, 873, 886, 894)
	V a 区全景（東より）	図版 84	石器・石製品 (17, 24, 109, 110, 111, 179, 180, 181, 182)
	V a 区全景（西より）	図版 85	石器・石製品（183, 184, 185, 186, 187, 188, 189, 190）
図版 59	V b 区全景（西より）	図版 86	石器・石製品（191, 192, 193, 215, 324, 325, 407, 408）
	V b 区 SK77 土層断面（南より）	図版 87	石器・石製品（409, 459, 520, 526, 527, 529, 534, 535）
	V b 区 SK77 全景（西より）	図版 88	石器・石製品（554, 555, 565, 566, 582, 724, 750）
	V b 区 SE03 全景（南より）	図版 89	石器・石製品（765, 774, 775, 776）
図版 60	V b 区 SE03 上層土層断面（南より）	図版 90	木器・木製品（214, 223, 227, 228, 234, 235）
	V b 区 SE03 下層土層断面（南より）	図版 91	木器・木製品（241, 270, 271, 272, 273, 274, 275, 277）
	V b 区 SE03 曲物出土状況（東より）	図版 92	木器・木製品（276, 390, 533, 605, 903, 906, 908）
	V b 区 SE03 曲物出土状況（東より）	図版 93	木器・木製品（906）
図版 61	説明会風景	図版 94	木器・木製品（909）
	土器・陶磁器・土製品	図版 95	金属器・錢貨
	(2, 4, 9, 12, 16, 33, 34, 35, 43, 47)		(209, 212, 213, 226, 238, 247, 290, 291, 292)
図版 62	土器・陶磁器・土製品	図版 96	錢貨（300, 301, 302, 303, 304, 305, 306）
	(48, 49, 50, 51, 52, 54, 56, 59, 60, 61, 65, 89)	図版 97	金属器・錢貨
図版 63	土器・陶磁器・土製品		(337, 384, 410, 441, 464, 474, 482, 557, 607, 633, 743)
	(80, 85, 90, 91, 92, 93, 95, 97, 98)		動物遺体（217, 327, 360, 422, 431, 559, 748, 757, 859）
図版 64	土器・陶磁器・土製品		
	(119, 122, 172, 197, 198, 199, 200, 202, 203, 207)		
図版 65	土器・陶磁器・土製品		
	(220, 225, 229, 231, 236, 239, 240, 242, 243, 246, 251)		
図版 66	土器・陶磁器・土製品		
	(252, 253, 254, 255, 256, 257, 258, 259, 260, 261, 262, 264)		
図版 67	土器・陶磁器・土製品		
	(263, 266, 267, 268, 269, 307, 310)		
図版 68	土器・陶磁器・土製品		
	(314, 315, 317, 319, 323, 329, 331, 332, 335, 342, 344)		

第Ⅰ章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

香川県土木部道路課（以下、道路課と略称）では、丸亀市と仲多度郡多度津町を結ぶ新規路線として、県道多度津丸亀線の整備を平成元年度に計画した。これを受け香川県教育委員会では、路線予定地内の埋蔵文化財包蔵地の有無を確認するために、周辺の遺跡分布や対象地の地形環境等を総合的に判断し、必要箇所について試掘調査を実施してきた。

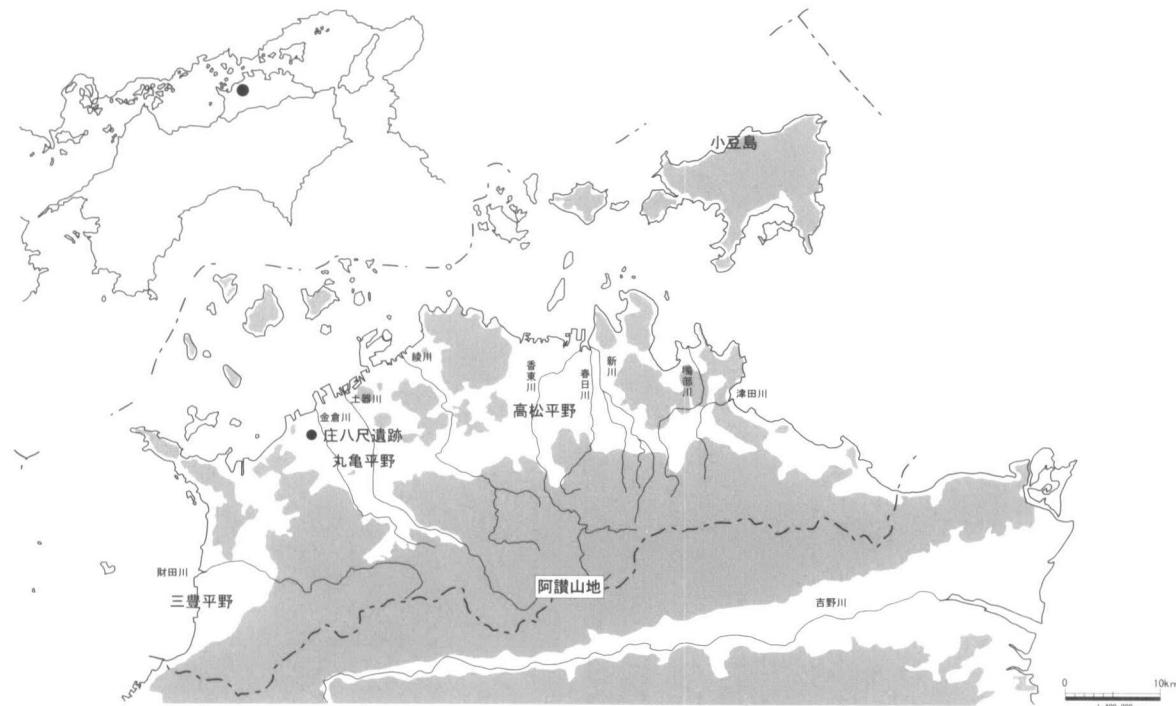
平成元年12月には、路線予定地内に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地である丸亀市金倉町の「道下遺跡」の確認調査を実施した。調査の結果、弥生時代後期を中心とする遺構・遺物が確認されたため、翌平成2年度には香川県埋蔵文化財調査センターによる発掘調査が実施された。さらに、平成10年度以降には、奥白方工区や多度津工区においても、路線内の試掘調査を順次実施して、埋蔵文化財の適切な保護に努めてきた。

庄八尺遺跡は、平成16年度の試掘調査の結果、新たに確認された遺跡である。試掘調査は、事前の現地踏査によって、遺物の散布状況や地形環境等を調査・観察し、必要と判断された範囲について、14箇所のトレーンチを設定し実施した。試掘調査の詳細については、既に報告されている（香川県教育委員会編2004）。

第2節 調査・整理の経過

発掘調査は、試掘調査の結果、事前の保護処置が必要と判断された5,598m²について、平成17年4月1日より平成17年10月30日の7ヶ月間実施した。調査は、香川県土木部から依頼され、香川県教育委員会が調査主体となり、香川県埋蔵文化財センターが担当した。調査は、現場作業員をセンターが直接雇用する直営方式で行った。

調査は、現状での地割りによって調査区を東よりI～V地区と呼称することとし、さらに全体の調査工程や遺構の広がり等を考慮して、各地区をa・bの小調査区に区分した。したがって調査区は、I a～V b区まで



第1図 遺跡位置図

の 10 小区となった（第 2 図）。

調査はまず、調査事務所や安全柵等の諸条件が整った 4 月 13 日に、I a 区より開始した。順次西へ調査を展開し、9 月頃には中世後半期を中心とした村落遺跡としての内容が概ね判明してきた。そこで、調査も終盤となった 10 月 22 日、III b 区についての説明会を実施した。説明会には町内外より 200 名を超える参加者があり、考古学的な関心の高さが窺えた。10 月 27 日には、現場での調査を終え、31 日に事務所を撤収し、すべての現地業務を終了した。

なお、現地調査については、I 区を主に小野が担当し、II～V 区を蔵本が担当した。遺構の写真撮影は小野が、トータルステーションでの遺構実測については蔵本がそれぞれ分担した。遺構の内容や土層序について、現地で両者が協議をしつつ調査を進めたが、土層序の記載内容については、各自の判断に任せ統一することはあえてしていない。

発掘調査の体制は、以下のとおりである。

平成 17 年度

香川県教育委員会事務局文化行政課

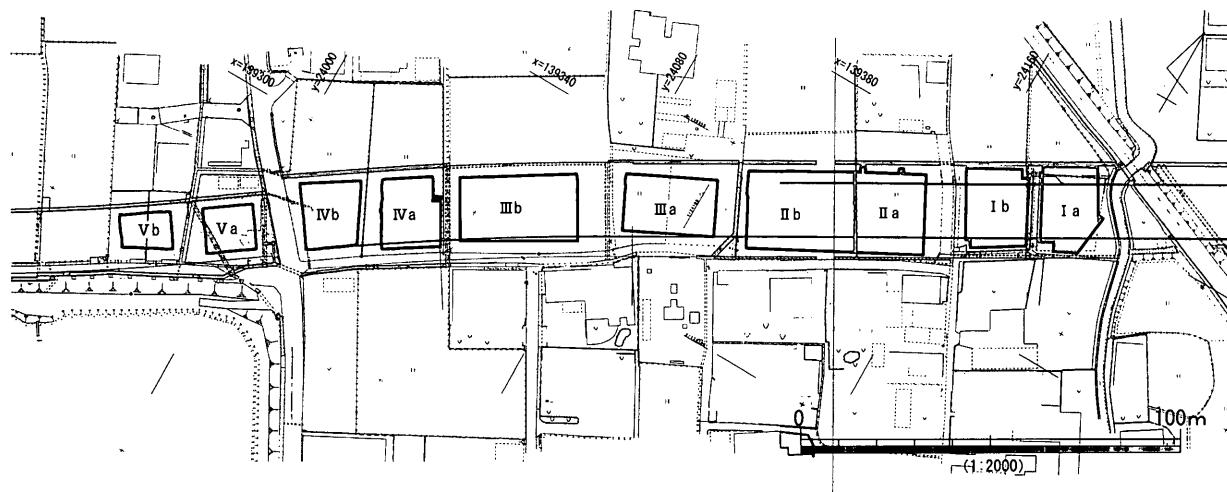
総括	課長	吉田 光成
	課長補佐	中村 穎伸
総務・振興グループ	副主幹	河内 一裕
	主任主事	八木 秀憲
文化財グループ	課長補佐	藤好 史郎
	文化財専門員	山下 平重
	文化財専門員	信里 芳紀

香川県埋蔵文化財センター

総括	所長	渡部 明夫
	次長	榎原 正人
総務課	副主幹	松崎 曜出穂
	主査	塩崎 かおり
調査課	主査	田中 千晶
	課長	廣瀬 常雄
	文化財専門員	蔵本 晋司
	文化財専門員	小野 秀幸
	嘱託	中嶋 将史

整理作業は、平成 19 年 7 月 1 日から 12 月 28 日までの 6 ヶ月の期間で行った。遺物の接合・図化・写真撮影と遺構図の浄書、遺構写真の整理等を行い、本書にまとめた。出土遺物量は、28 ツル入りコンテナ 177 箱である。遺構出土遺物の図化を最優先とし、遺構外出土遺物については特に必要と認めるもののみ図化することとした。

整理作業の体制は、以下のとおりである。



第 2 図 調査区割図

平成 19 年度

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

総括・生涯学習推進グループ

課長 鈴木 健司
課長補佐 武井 壽紀
主任 林 照代

文化財グループ

課長補佐 藤好 史郎
文化財専門員 森 格也
文化財専門員 信里 芳紀

香川県埋蔵文化財センター

総括	所長	渡部 明夫
	次長	廣瀬 常雄
総務課	課長	野口 孝一
	主任	宮田 久美子
	主任	嶋田 和司
資料普及課	課長	廣瀬 常雄（兼務）
	文化財専門員	森下 英治
	文化財専門員	歳本 晋司
	嘱託整理作業員	榑谷 京子
		佐々木 博子
		谷本 譲
		徳永 貴美
		富岡 恵美
		鳥谷 真希子

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

庄八尺遺跡は、丸亀平野北西部の平地上に立地する遺跡である。

県央部に位置する丸亀平野（東西約13km、南北約10km、平均勾配8%程度）は、主に平野中央部を北流する一級河川の土器川（延長33km、流域面積140km）によって形成された扇状地性の海岸平野である。平野部東西は、それぞれ瀬戸内海に突出した標高400m級の五色台山地や弥谷山丘陵等の山塊によって画され、また南縁は岡田・高屋原・仲南といった上位及び下位台地が取り巻き、北の瀬戸内海に開けた、平面楔形のまとまった地形環境を呈する。平野部内には海岸部を中心に、標高50～400m程度のビュートと呼ばれる中小独立丘陵が散在するほか、大束川、金倉川、弘田川等の中小河川が瀬戸内海へ注ぐ。

丸亀平野を流下する最大の河川は土器川であるが、その流路は時代により大きく変化していたようである。かつての流路痕跡は、現地表面に痕跡を残し、その埋没した旧流路の復元によって、一部は北西方向へ流下して金倉川に合流し、さらに金倉川を介して、弘田川や桜川に流入していたとされる。つまり、現河川や埋没旧流路（用水路化した流路を含む）等が複雑に分岐・合流して、網目状に丸亀平野を流下して瀬戸内海に流入していたと考えられる。これら土器川及びその旧流路群で縁取られた紡錘形の微高地のいくつかには、後述するように弥生時代以降の生活痕跡が残され、人々の生活の舞台となった。

現在、平野部内を流下する河川流域には、比高約1～2mの崖面が観察される。この崖面は、河床の低下により形成されたいわゆる河岸段丘であり、その時期は古代末～中世初頭頃と考えられている（木下1995）。この段丘崖の形成により、既述した流路の固定化と同時に微高地縁辺の旧流路の埋没が進捗したようである。こうした微細な自然環境の変化が、少なくとも農耕を生業とするようになった以後の人々の生活に、大きな影響を与えてきたことにも目を向ける必要があると考えられる。

さて、庄八尺遺跡は、近代以前の旧海岸線より約1.7km内陸で、東西を金倉川と弘田川に挟まれた、幅3.5km程度の平地部のほぼ中央に立地する。遺跡周辺の現地表面の標高は6.7m前後で、緩やかに北に下る。遺跡周辺には、周囲の水田の灌漑に供される溜池群が築造されており、その多くは皿池の形状を呈する。そのうちのいくつかは、桜川や弘田川の旧流路を利用した谷池ないしは谷池的な構造を呈しており、中世以前に築造された可能性も考えられる。

また、遺跡周辺の微高地を縁取る桜川は、既述した段丘化により現地表下1.5～2mを流下しており、主として排水路として利用されている。溜池群より耕地に供給された用水の余剰水を集めて瀬戸内海へ流しており、こうした用水体系の基本的な姿は中世に遡る可能性がある。段丘化による影響は、用水体系の変更とともに、それまで氾濫原面で耕地化が困難か、もしくは湿田として収量の劣る低地を乾燥地化し、農業生産性の増大にどのような影響を及ぼしたのかという観点からも、追求する必要がある。

こうした周辺地域の既存の研究成果や空中写真の判読、現地の踏査等を踏まえて、第3図に丸亀平野西縁部の地形環境の復元試案を提示した。今後さらに発掘調査や現地踏査等を重ねて、細部について修正する余地はあるが、遺跡周辺の地形の概要については概ね示されたと考えており、本図をもとに歴史的環境以下、検討を進めることとする。

第2節 歴史的環境

遺跡周辺地域では、これまで発掘調査例が乏しく、詳細が明らかな遺跡は皆無に近い状況である。近年ようやく調査例が増加しつつあるが、隣接する丸亀市や善通寺市域では、1990年代以降大規模開発が集中し、数多くの遺跡で調査資料が蓄積されていることと対照的である。こうした発掘調査の空疎な状況は、実態とは乖離した部分で、表面的には開発行為による遺跡破壊が低く抑えられているという状況を顕現しているが、一

第3図 丸亀平野西縁部の地形分類略図



方で、考古学資料を用いた歴史著述は著しく貧困なものとならざるをえない負の側面も併せ持つ。本地域のような場合、勢い文献史料からの歴史の組み立てが奔流となるが、史料の欠落する時代への対応や、考古資料からの実証的裏付け、史料に登場しない低い階層への目配り等に、大きな課題を抱えることにもなる。こうした点に配慮しながら、本地域の歴史的環境について述べて行くが、個々の歴史的事実をどのように結び付けて理解し、著述へと高めて行くかは、以下の記述に示されるように、現状では制限されたものとならざるを得ない。

旧石器・縄文時代

平成19年度に調査が行われた西白方瓦谷遺跡の谷部より、縄文時代中期の土器が出土した。それ以外には、当該期の遺跡について知られている例は管見の限りない。

弥生時代

桜川流域に位置する三井遺跡では、平成4・7年度に行われた範囲確認調査により、弥生時代前期の溝状遺構等が検出されている（多度津町教育委員会編 1993・1995）。遺跡の内容については不詳ながら、遺物の広範な散布が確認されている。また近年の調査では、弘田川下流の奥白方中落遺跡や西白方瓦谷遺跡において、中期～終末期頃の集落跡が検出されている。奥白方中落遺跡では、中期後半期～後期前半期かけて断続的に集落が営まれ、とくに中期の竪穴住居跡3棟からは磁着微細粒資料が出土し、鉄器生産の可能性が指摘されている（香川県教育委員会編 2008）。その他、御産盤山や天霧山の山麓部、笠屋や中又、南鳴等の平地部から、土木工事等に伴い、中～後期の土器や石器等が採集され、臨海砂州上に立地する木下遺跡からは終末期頃の土器棺が出土する等（多度津町 1963・松本 1980）、当該期には比較的広範に人々の生活が営まれていたことが想像される。

古墳時代

集落遺跡は、西白方瓦谷遺跡において、後期終末頃の住居跡が確認され、漁労具等の遺物が出土しており、遺跡の性格的一面を示している。また、南鳴遺跡からは、TK208期の須恵器類（壺・甕・器台・磯・大形高杯）や後期の漁具・須恵器類が採集されており（松本 1980）、当該期の集落が存在した可能性が考えられる。

古墳は、弘田川下流域の白方地区を中心に分布する。白方地区では、舶載三角縁四神四獸鏡が出土した西山古墳（消滅）や、全長30mの前方後円墳である黒藤山4号墳、同48mの御産盤山古墳等、前期を通じて首長墓墳の築造が継続される。また多度津山西麓の鳥打古墳では、詳細は不明ながら葺石が散在し、埴輪が出土している（多度津町 1963）ことから、当該期もしくは中期の古墳と考えられる。こうした首長墓墳とは異なり、経尾山（標高138m）から黒藤山（同122m）の山麓には、箱式石棺等を埋葬施設とする小規模な円墳や無墳丘の古墳が、いくつか知られている。こうした古墳からの副葬品は、既述の首長墓墳群のそれと比較すると貧弱である。つまり、本地域の前期の被葬者集団には、集団内部の階層秩序は明確に整備されつつも、なお墓域を共有する等の特徴を読み取ることができる。

弘田川下流域は、中世以降に陸化したと想定される氾濫原面が広がり、安定した微高地は周囲の山塊縁辺や山階地区以南の内陸部に展開する（木下 1998）。可耕地に乏しい本地域に、これほどまでの前期古墳の集中がなされた要因には、やはり瀬戸内海の海上交通との関係を想定しなければならない。本地域で「やまじ」や「わいた」等と呼ばれた季節風を遮る経尾山（標高138m）や黒藤山（同122m）が西に屹立し、弘田川河口部は大きく内湾して入り江をなし、入り江奥部に港津としての流通拠点が形成されていたことを想像したい。臨海部に立地する御産盤山古墳等は、海上を航行する船舶からは、ランドマークとなったことも想像できる。一方で、桜川・金倉川下流域にはこうした前期古墳の分布は稀薄であり、両地域間の相違がどのような質的要因で生じたのかについて、今後追及する必要がある。

弘田川下流域の港津機能を背景とした優位性は、中期にも継続する。現状では既述した前期の首長墓系列と

断絶する可能性が高いが、段丘Ⅱ面上に径約42mで二段築成の円墳、盛土山古墳が築造される。埋葬施設は組合せ式石棺とされ、大正四（1915）年に、舶載画文帶環状乳神獸鏡1、鉄刀1、瑪瑙勾玉1、硬玉勾玉2、銅鈴1等が出土している。近年の調査により、二重周溝が確認され、円筒・蓋等の埴輪が出土した（香川県教育委員会編1998・多度津町教育委員会編1999）。出土した埴輪等から、5世紀中頃の築造が想定される。盛土山古墳から西へ約60m離れて、一辺約10mの方墳、中東1号墳がある。平成11年度の発掘調査により、墳丘は中世以前に削平されていたが、周溝から円筒・朝顔形埴輪が出土している（香川県教育委員会編2003a）。出土遺物より盛土山古墳とほぼ同時期に築造されたと推定され、陪冢的な性格を有する古墳と評価される。また北浦山古墳からは、箱式石棺より仿製捩文鏡や勾玉が出土したとされる。西白方瓦谷遺跡では、墳丘は削平されていたが、数基の小規模な円墳に伴う周溝が検出され、須恵器等が出土している。

後期古墳も、弘田川流域を中心に展開する。天霧山北東麓に向井原古墳、黒藤山南麓に北ノ前古墳、多度津山南西麓に宿地古墳、同北西麓に向山古墳等が知られており、いずれも6世紀後半期～7世紀前半期の横穴式石室を埋葬施設とする古墳である。向井原古墳は、一墳丘に二石室を有する古墳として著名である。これらの古墳は、玄室長約3.8mの宿地古墳を最大として、いずれも中・小の石室墳であり、弘田川上流、善通寺地域の王墓山古墳、菊塚古墳、宮が尾古墳、大塚池古墳等とは、大きな格差を見ることができる。丸龜平野西縁部の集団において、より広域的な政治的編成がなされたことを反映していると考えられる。

生産遺跡としては、黒藤山北東麓に黒藤窯跡がある。本窯跡は、TK10型式期の須恵器窯であり、周辺では同時期の首長墓墳は現状では知られていない。弘田川を遡った王墓山古墳と時期的に近接し、おそらくは王墓山古墳の被葬者がその操業に関与していた可能性も考えられる。王墓山古墳の横穴式石室では、九州系の石屋形が採用されており、本窯の導入の契機についても、今後畿内及び九州との関係の中で検証する必要があろう。

古代

当遺跡周辺は、令制下多度郡に属し、多度郡に置かれた8郷（近年、奈良県石神遺跡より「多土評難田」と記された7世紀代の木簡が出土し、8郷にはない「難（方）田郷」の存在を想定する意見もある）のうちの三井郷に含まれる（『和名類聚抄』）。多度郡の郡司には、国造級豪族として佐伯直氏が、中・下級豪族として伴良田連氏が、『類聚国史』等の史料に散見される。郡司層ではないが、『日本三代実録』にみえる因支首氏も、多度郡に住した中小豪族である。いずれも多度郡南部を基盤とする豪族とみられ、即断はできないが、既述した古墳時代後期の首長墓墳の偏在を反映している可能性も考えられる。

調査がなされた当該期の遺跡には、弘田川下流域に位置する奥白方中落遺跡（香川県教育委員会編2008）がある。中落遺跡では、8～9世紀代の掘立柱建物跡6棟が検出されている。特筆すべきは、それら建物遺構の周辺から、明確な遺構に伴うものではないが、皇朝十二錢のひとつ「隆平永寶」10枚が重ねられて出土した。何らかの祭祀儀礼に使用された可能性が想定されるが、出土状況から明確なことは断定できない。隣接する奥白方南原遺跡（香川県教育委員会編2008）では、綠釉陶器碗が出土しており、周辺に下級官人もしくは富農層が居住していたことが想像される。そのほか南鴨遺跡周辺で、奈良～平安時代の土器が採集され（松本1980）、近在に当該期の集落の存在が予想される。

遺跡周辺の平地部には、南北方向の徑溝が約30°西に偏した、いわゆる一町方格の条里型地割が広範に展開する。こうした地割が、古代の土地表示システムに起源を有することは論を待たないが、郡内を一律にはほぼ同時期に施工されたものでもないことも、最近明らかとなってきた。また、多度郡の条里プランの復原は、宮内庁書陵部所蔵の久安元（1145）年讃岐国善通曼荼羅寺寺領注進状をもとに、第5図のように復原されている（金田1988）。この復原案によれば、庄八尺遺跡は、三条13里22～24坪に位置する。既述したように、本地域の条里型地割のすべてが、古代に施工されたものであるとは断言できないが、今回の調査によって遺跡周辺ではその施工が遅くとも9世紀代に遡ることが明らかとなった。一方、段丘Ⅱ面上に位置する奥白方南原遺跡では、七条13里内部の坪界溝が検出され、溝より出土した最も古い遺物の一群は12～13世紀に下る。しかし、約

500 m西に位置する奥白方中落遺跡で検出された8世紀中頃の掘立柱建物跡SB09・SB14は、地割の方向と合致するという。条里プランが一定の面を対象に施工されたものであるなら、中落遺跡の建物設置時には施工されていたことは確実であり、南原遺跡の坪界溝は中世段階での改修の可能性を示唆していると考えられる。このように、近接した地域内においても施工時期に差が認められ、また改修等の変更が加えられたことも調査によって具体的に検証されるようになった。

古代南海道の位置については、残念ながら正確なことはわからない。那珂郡の推定ラインより直線的に西へ延長し、多度郡の6里と7里の里界線に求める意見がある（金田 1988）。那珂郡における南海道の推定には、余剰帶の存在が大きな根拠とされている。また、善通寺文書の宝治3（1249）年の讃岐国司庁宣にある「北限善通寺領五嶽山南麓大道」について、「五嶽山」を香色山・筆の山、我拝師山に擬することによって、推定南海道のライン上に「大道」が矛盾なく合致することも、その有力な傍証とされている。しかしながら余剰帶の成因が、官道敷設に伴うものではなく、条里プランの施工時期差や地形環境等によって生じた僅かな誤差等に起



第4図 周辺遺跡分布図

番号	遺跡名	時代	内容	所在地
1	鶴尾山1号墳	古墳	古墳	多度津町西白方
2	御座巖山古墳	古墳	古墳	多度津町西白方
3	経納山古墳	古墳	古墳	多度津町西白方
4	鶴尾谷1号墳	古墳	古墳	多度津町西白方
5	西白方瓦谷遺跡	縄文～古代	集落	多度津町西白方
6	鶴尾谷2号墳	古墳	古墳	多度津町西白方
7	東北浦古墳	古墳	古墳	多度津町東白方
8	朝日山古墳	古墳	古墳	多度津町東白方
9	黒藤廻跡	古墳	生産	多度津町東白方
10	黒藤山5号墳	古墳	古墳	多度津町東白方
11	黒藤山4号墳	古墳	古墳	多度津町東白方
12	黒藤山2号墳	古墳	古墳	多度津町東白方
13	黒藤山1号墳	古墳	古墳	多度津町東白方
14	黒藤山3号墳	古墳	古墳	多度津町東白方
15	鳥越1号墳	古墳	古墳	多度津町見立
16	鳥越3号墳	古墳	古墳	多度津町見立
17	鳥越2号墳	古墳	古墳	多度津町見立
18	黒戸山古墳	古墳	古墳	多度津町東白方
19	西山古墳	古墳	古墳	多度津町東白方
20	北ノ前古墳	古墳	古墳	多度津町東白方
21	東白方中落遺跡	弥生～中世	集落	多度津町東白方
22	寺前古墳	古墳	古墳	多度津町東白方
23	中東2号墳	古墳？	古墳？	多度津町東白方
24	中東3号墳	古墳？	古墳？	多度津町東白方
25	中東1号墳	古墳	古墳	多度津町東白方
26	盛土山古墳	古墳	古墳	多度津町東白方
27	東白方南原遺跡	弥生～中世	集落	多度津町東白方
28	向井原1号墳	古墳	古墳	多度津町東白方
29	向井原2号墳	古墳	古墳	多度津町東白方
30	八王寺古墳	古墳	古墳	多度津町東白方
31	弥谷山古墳	古墳	古墳	多度津町東白方
32	天霧城跡	中世	山城	多度津町東白方
33	熊手八幡宮	中世～	神社	多度津町西白方
34	仏母院		寺院	多度津町西白方
35	西谷古墳	古墳	古墳	多度津町東白方
36	御公塚古墳	古墳	古墳	多度津町東白方
37	鳥打古墳	古墳	古墳	多度津町東白方
38	向山1号墳	古墳	古墳	多度津町東白方
39	向山2号墳	古墳	古墳	多度津町東白方
40	前山廻古墳	古墳	古墳	多度津町東白方
41	米付1号墳	古墳	古墳	多度津町山階
42	米付2号墳	古墳	古墳	多度津町山階
43	宿地古墳	古墳	古墳	多度津町菅木
44	公鶴寺跡	中世	寺院	多度津町山階
45	田中大明神		その他	多度津町菅木
46	船石古墳	古墳	古墳	多度津町菅木
47	有絆塚	中世	塚	多度津町菅木
48	野津古墳	中世	塚	多度津町影浦
49	木下道跡	弥生	集落？	多度津町木本通
50	多度津（本台山）城跡	中世	城館	多度津町桃山
51	笠地廻跡	中世？	塚	多度津町木本通
52	船塚	中世？	塚	多度津町木本通
53	水掉塚	中世？	塚	多度津町菅木
54	綱巣塚	中世？	塚	多度津町菅木
55	いかり塚	中世？	塚	多度津町菅木
56	崩成寺跡	中世	寺院	多度津町庄
57	五段岡碑	中世	その他	多度津町庄
58	観音堂跡	中世	寺院	多度津町庄
59	中又廻跡	弥生	集落	多度津町道福寺
60	庄八尺廻跡	弥生～近世	集落	多度津町庄
61	薬師堂跡	中世	寺院	多度津町山階
62	桑木古墳	古墳？	古墳？	多度津町山階
63	泉屋敷跡	中世？	城館？	多度津町山階
64	西村塚2号墳	古墳？	古墳？	多度津町山階
65	西村塚1号墳	古墳？	古墳？	多度津町山階
66		古墳？	古墳？	普通寺市碑殿町
67	東西神社古墳群	古墳	古墳	普通寺市吉原町
68	天霧山麓シスト群	古墳	古墳	普通寺市碑殿町
69		古墳？	古墳？	普通寺市吉原町
70		古墳？	古墳？	普通寺市吉原町
71		古墳？	古墳？	普通寺市吉原町
72		古墳？	古墳？	普通寺市吉原町
73	鬼塚	古墳？	古墳？	普通寺市弘田野町
74	いか塚	古墳？	古墳？	普通寺市弘田野町
75	多度津条里「四ノ坪」		配石	普通寺市吉原町
76	ヨートはん	古墳？	古墳？	普通寺市弘田野町
77	三井遺跡	弥生	集落	多度津町三井ほか
78		古墳？	古墳？	普通寺市弘田野町
79		古墳？	古墳？	普通寺市弘田野町
80		古墳？	古墳？	普通寺市金蔵寺町
81		古墳？	古墳？	普通寺市中村町

82		古墳？	古墳？	普通寺市弘田野町
83	永井北遺跡	古代～中世	集落	普通寺市中村町
84	筋木北遺跡	古代	官衙	普通寺市船木町
85		古墳？	古墳？	普通寺市金蔵寺町
86		古墳？	古墳？	普通寺市中村町
87		古墳？	古墳？	普通寺市中村町
88		古墳？	古墳？	普通寺市中村町
89		古墳？	古墳？	普通寺市中村町
90		古墳？	古墳？	普通寺市中村町
91		古墳？	古墳？	普通寺市中村町
92		古墳？	古墳？	普通寺市中村町
93		古墳？	古墳？	普通寺市中村町
94	やまし塚（伊豆玉神社）	古墳？	古墳？	普通寺市中村町
95		古墳？	古墳？	普通寺市中村町
96		古墳？	古墳？	普通寺市中村町
97	佐伯行道の墓	古墳？	古墳？	普通寺市中村町
98		古墳？	古墳？	普通寺市中村町
99		古墳？	古墳？	普通寺市中村町
100		古墳？	古墳？	普通寺市中村町
101	七十五膳塚	古墳？	古墳？	普通寺市中村町
102	中村城跡	中世	城館	普通寺市中村町
103	鬼塚	中世？	塚	多度津町栄町
104	梅ノ木塚	中世？	塚	多度津町堀江
105	ねこ塚	中世？	塚	多度津町堀江
106	親王1号塚	中世？	塚	多度津町堀江
107	親王2号塚	中世？	塚	多度津町北鷗
108	仮田塚	中世？	塚	多度津町北鷗
109	親王3号塚	中世？	塚	多度津町北鷗
110	道隨寺	中世～	寺院	多度津町北鷗
111	東林坊塚	中世？	塚	多度津町北鷗
112	躰屋敷跡	中世？	城館？	多度津町北鷗
113	入道屋敷跡	中世？	城館？	多度津町北鷗
114	北鷗I・II遺跡	弥生	集落？	多度津町北鷗
115	山神塚	中世？	塚	多度津町堀江
116	八幡塚	中世？	塚	多度津町道福寺
117	中津城跡	中世	城館	丸山市中津町
118	経塚	中世？	塚	多度津町南鷗
119	鶴神社	中世～	神社	多度津町南鷗
120	西蒲星敷跡	中世？	城館？	多度津町南鷗
121	浦屋敷跡	中世？	城館？	多度津町南鷗
122	西屋敷跡	中世？	城館？	多度津町南鷗
123	法泉寺跡	中世	寺院	多度津町南鷗
124	南鷗遺跡	弥生～古代	集落？	多度津町南鷗
125	葛原大木東屋敷跡	中世？	城館？	多度津町葛原
126	姫塚	古墳？	古墳？	九州市金倉町
127	道下遺跡	弥生～近世	集落	九州市金倉町
128	一里塚旧址	中世	その他	多度津町葛原
129	寒塚	中世？	塚？	多度津町葛原
130	堀塚	中世？	塚？	多度津町葛原
131		古墳？	古墳？	普通寺市金蔵寺町
132		古墳？	古墳？	普通寺市金蔵寺町
133		古墳？	古墳？	普通寺市金蔵寺町
134		古墳？	古墳？	普通寺市金蔵寺町
135		古墳？	古墳？	普通寺市金蔵寺町
136	一文塚	古墳？	古墳？	普通寺市金蔵寺町
137	伊州神社	古墳？	古墳？	普通寺市金蔵寺町
138		古墳？	古墳？	普通寺市金蔵寺町
139		古墳？	古墳？	普通寺市金蔵寺町
140		古墳？	古墳？	普通寺市金蔵寺町
141		古墳？	古墳？	普通寺市金蔵寺町
142	古荒神さん	古墳？	古墳？	普通寺市金蔵寺町
143	いか塚	古墳？	古墳？	普通寺市金蔵寺町
144		古墳？	古墳？	普通寺市金蔵寺町
145	猫塚	古墳？	古墳？	普通寺市金蔵寺町
146	畠田屋敷跡	中世？	城館？	多度津町葛原
147	小原遺跡	弥生～近世	集落	普通寺市下吉田町
148		古墳？	古墳？	普通寺市金蔵寺町
149		古墳？	古墳？	普通寺市金蔵寺町
150	金蔵寺跡所跡	中世	城館	普通寺市金蔵寺町
151	金倉寺跡	古代	寺院	普通寺市金蔵寺町
152	若宮祠遺跡		祭祀	普通寺市下吉田町
153	本村東古墳	古墳？	古墳？	普通寺市下吉田町
154		古墳？	古墳？	普通寺市下吉田町
155		古墳？	古墳？	普通寺市下吉田町
156		古墳？	古墳？	普通寺市下吉田町
157	吉田八幡古墳	古墳？	古墳？	普通寺市下吉田町
158	みこし休め	古墳？	古墳？	普通寺市船木町
159	どうらん塚遺跡		墓	普通寺市下吉田町
160	五社はん	古墳？	古墳？	普通寺市船木町
161	石川古墳	古墳？	古墳？	普通寺市船木町
162		古墳？	古墳？	普通寺市船木町
163		古墳？	古墳？	普通寺市船木町

第1表 周辺遺跡地名表

因する可能性も考えられ、また「大道」が南海道であることの論証や中世の史料を古代に遡らせることの妥当性も慎重に再検討されなければならないと考えられる。

こうした歴史地理学からの検討とは別に、考古学の立場からは、善通寺市四国学院大学構内遺跡の調査において検出された7世紀代の直線溝 SD01・13・14・16について、調査担当者はこれを南海道の側溝に比定する（海邊 2003）。その主要な根拠は、やはり上述した歴史地理学の復原案に大きく依拠しているのが現状だ。この遺構を考古学的に道路と断定するためには、路面状況の詳細な観察や、各溝の安定しない平・断面形状の合理的な解釈等、なお検討を必要とする。いずれにせよ古代南海道が、国造佐伯氏の本拠とされる弘田郷や仲村郷、あるいは有岡古墳群を擁する生野郷内を東西に横断していたであろうことは間違いないが、四国学院大学構内遺跡で確認された直線溝の再検討とともに、さらなる考古学的な調査を待つ必要がある。

多度津地域で確実に古代まで遡る寺院の存在は知られていない。やや範囲を広げて多度郡内では、出土した古瓦から、古代寺院として善通寺、仲村廃寺、曼荼羅寺等が知られ、曼荼羅寺を除き、その創建は白鳳期に遡る（高松市歴史資料館編 1996）。問題は、金倉寺である。善通寺市金蔵寺町に所在する金倉寺は、古代那珂郡金倉郷に属し、智証大師円珍誕生の地に建立されたことを伝える（金田 1988）。しかし、金田氏による丸龜平野の条里遺構復原案によれば、金倉寺は多度郡に属し、氏の記述内容に矛盾が生じることになる。現金倉寺からは奈良期に遡る古瓦が採集され（安藤 2002）、寺域の大きな移動は想定できない（既述した円珍との関係については、考古学資料での創建時期が円珍誕生より遅り、おそらくは円珍にあやかって後に付託された伝説と想像される）。那珂・多度郡境を西へ約 500 m 移せば、金倉寺の問題は解消され、さらに郡境ラインが金倉川の旧河道西岸と一致し、また那珂郡六条が 6 坪まで復原される等、一定の合理的な復原が可能となる。しかし、先の讃岐国善通曼荼羅寺領注進状記載の善通寺の位置とは整合がとれず、後述する中世の堀江庄・葛原庄の一部が那珂郡に属してしまうという課題が残る。郡境ラインの形状や古代金倉寺の所在地等、なお検討すべき課題は多く、ここでは問題点の指摘に留める。

多度津という地名に関して、それを多度郡の郡津、郡家所管の港津としての機能を備えた公的施設を指すとの意見がある（高重 1966・千田 2001）。文献史料上に「郡津」の標記がみられないこと等から、制度として「郡津」が定められていたことは断定できないが、物資輸送の利便のため、陸上交通とともに水上交通が頻用されたことは疑いなく、多度郡臨海部に郡家正倉との物資出納に使用された港津が所在したことは想定される（金田 1988）。文献史料上での「多度津」は、土佐国香美郡楠目村吉祥寺所蔵の涅槃像表装の裏書にある「奉施入讃岐国多度津毘沙門堂…嘉元三季十月日 絵師都大夫法眼筆」が初見とされ（竹内編 1985）、古代に遡ることはできず、また後述する「多度庄」の港津を意図して記載された可能性も考えられる。また「多度津」の具体的な位置も特定しがたいが、古代においては既述した弘田川河口部などがその有力な候補地である。

これに関して、「日本三代実録」貞觀 6 (864) 年 10 月 15 日に「讃岐国正六位上屋栗神・梶州・天川・宇夫志奈神・賀富良津神等竝從五位下」との神階奉授の記載がある。このうち「屋栗神」以外は『延喜式』に掲載されず、具体的な鎮座地等は未詳である。「賀富良津神」は、熊手八幡神社に比定する説があり（多度津町 1963）、おそらくは弘田川下流に創祀された神社と考えられ、平安期においても本地域が港津としての機能を有していたことを示唆している。こうした弘田川下流域の港津としての性格が、既述した奥白方中落遺跡周辺での富農層の存在と結びつく可能性は充分に想定される。

中世

調査がなされた遺跡には、中東遺跡、奥白方中落遺跡、奥白方南原遺跡がある（前掲）。これら 3 遺跡は東西約 600 m の範囲内に近接して所在し、時期的にも 13 ~ 14 世紀前半期を中心とした時期と概ね共通することから、中世村落として捉えられる。とくに中東遺跡からは、副葬品は欠けるものの石棺墓が検出され、また南原遺跡では白磁碗を副葬した木棺墓や梵字等が書かれた卒塔婆が出土している。これら遺構・遺物より、名主クラスの富農層が村落内に居住していた可能性が想定される。



第5図 那珂・多度郡条里図（金田 1988 を一部改変）

多度津の港津としての機能は中世にも維持される。道隆寺や多度津（本台山）城跡が臨海部に立地するのは、こうした流通拠点の掌握を意図したものであったと考えられる。中世の多度津の具体像については、なお資史料に乏しい。細川家文書にある正安3（1301）年の沙弥孝忍奉書に「堀江庄」とあり、鎌倉幕府地頭の補任地であったとされる（香川県 1987 a）。莊域には「堀江津」を含み、幕府の強い影響下にあったようだ。おそらく中世には、この「堀江津」が多度郡の中心的な港津として機能していたと考えられる。

古代までは、弘田川下流域が多度郡の港津として機能していたことを既述したが、文献史料からは、中世にはその役割が金倉川下流域に移動していることが読み取れる。弘田川下流域の事跡は、管見の範囲で史料上に見出すことができない。おそらく弘田川下流域は、古代末以降完新世段丘の形成により、氾濫原の陸化・河口部の埋積が進行し、港津としての機能が維持できなくなったと考えられる。一方、金倉川下流域では、砂州・潟の形成が進み、内陸部に港津が形成されていったと考えられる。

しかし「堀江津」の具体的な場所については不詳である。現在、金倉川の河口付近の西岸に、「堀江」の地名があり、「堀江津」の遺称地とされる。第3図に示した旧地形の復元により、多度津山より砂州が北東方向に長く伸び、一部途切れているもののその東端は、金倉川西岸に達する。この砂州の南側は、海水が流入して潟となつており、内陸部より桜川が緩やかに流入する。おそらくは内陸部側に港湾施設が設けられ、「堀江津」と呼ばれていたと考えられる。内陸北端に位置する道隆寺は、海上部からのランドマークとしての機能と、港津の管理施設としての機能を兼備していたのかも知れない。道隆寺より南進する町道は、鴨神社・金倉寺を経て、中世南海道にアクセスしていたと想像される。

貞治4（1365）年讃岐守護細川頼之に宛てた足利義詮御教書には、「讃岐国葛原庄、堀江津両所公文職云々」とあり、葛原庄と堀江津の公文職は兼務されていたようだ。後述するように、葛原庄は賀茂神社領となっており、両所の公文職が兼務されていたことは、鎌倉幕府滅亡後は堀江津が賀茂社の管理下に置かれていたことを想像させる。

鴨脚文書「賀茂社社領目録」の寛治4（1090）年7月13日官符に、讃岐國葛原庄田地60町が御供田として寄進されたことが見え、以後弘安9（1286）年の鴨御祖大神宮政所下文の頃までには、現在の北鴨・南鴨の一帯は、賀茂社領葛原庄として立庄されていたと考えられる。南鴨に所在する鴨神社からは、鎌倉時代の亀山焼巴文軒丸瓦が出土（香川県 1987 a）しているほか、室町期以前に移されたとされる紙本大般若波羅蜜多経が所蔵されている。さらに、昭和22（1947）年本殿北側の老松の根元より出土した5,898枚の銅錢は、漢の五銖錢を最古錢とし、開元通寶や北宋～元錢等が含まれるとされ（多度津町 1991）、鎌倉時代終末期～室町時代前期の中世埋蔵錢の一例である。やや時代は下るが、南鴨の三宝荒神境内には、文安二（1445）年の銘のある砂岩製の宝篋印塔があり、鴨神社の神宮寺とされる法泉寺より出土したものと伝える。こうした諸資料より神社の創祀が鎌倉時代に遡ることは間違いない、鴨神社の勧進が、賀茂社領莊園の成立と無縁ではないと思われる。その後、長亨2（1488）年賀茂社祝鴨秀顯當知行分所々注文案に至るまで、賀茂社による当庄の支配が続いているとされる（香川県 1987 a）。

安樂寿院は、鳥羽法皇が離宮の東殿を寺として、莊園14箇所を寄進して成立したが、その莊園のなかに郡名を冠した「多度庄」がある。多度庄の位置は、安樂寿院文書の康治2（1143）年の太政官牒をもとに「三井郷の内の、大字三井の大部分を除いた地域全体」とされ、同時にこの莊域は、東白方に所在する熊手八幡宮の氏子の範囲と一致するという（多度津町 1990）。現在、西白方仏母院の境内には、熊手八幡宮境内より移転したことを伝える、嘉暦元（1326）年銘のある凝灰岩製五重石塔があり、熊手八幡宮の創祀が、鎌倉時代以前に遡る可能性を示唆する。上述した氏子圈が、同時に鎌倉時代にまで遡ることを史料上実証することはできない。しかし、12世紀後半には莊園の鎮守社が史料上に頻出するようになり、「そこでは莊や村の住民の經營によって恒例の神事＝稻作農耕儀礼が挙行される一方、その信仰は住民の精神世界までも捉えるような段階まで達」したことが指摘されている（木村 2003）。こうした指摘を踏まえるなら、多度庄の成立を契機として、その莊民の精神的支柱として熊手八幡宮が多度庄の鎮守社に取り込まれたと考えることも許されるのではないかと思

われる。なお、第5図に示したように、庄八尺遺跡も多度庄の庄域に含まれる。

その後「多度庄」は、高野山文書の天福2（1234）年の多度荘所當米請文などにみえ、鎌倉時代後期までは存続したと考えられる。室町時代には伝領不詳となり、「永源師檀紀年録」に地頭領の一部である得武名地頭職が建仁寺塔頭瑞應庵領となり、応永34（1427）年6月に他の所領とともに安堵されていることを伝える（竹内編1985）のを最後に、史料上から姿を消す。

道隆寺の開創から貞享3年までの寺歴を記した「道隆寺温故記」は、天正16年頃、旧蔵していた古記録をもとに、住持良田により記されたものとされる。それによれば、創建は平安時代初期に遡るとされるが、それを実証する考古資料は未見である。史料や既述した「堀江津」との関係、あるいは寺に伝わる鎌倉時代作とされる絹本着色星曼荼羅図等から、中世前期には建立されていたことは確実と考えられる。「堀江津」の成立と道隆寺の創建もしくは再興が密接に関係することが考えられ、今後周辺の考古学的な調査の進展に期待するものである。その他中世寺院として、道福寺、徳公寺、法泉寺等が史料上に散見されるが、現状では考古学的調査はなされておらず、場所や内容を詳細に知ることはできない。

城館はいくつか知られている。山城には、天霧城跡があり、昭和49・51（1974・1976）年に一部の曲輪について発掘調査が実施されている。曲輪の総数70余を数える、県下最大規模の中世山城で、讃岐守護代香川氏の詰城とされる。城主の香川氏は、文献史料上には『永源記』所収文書の永徳元（1381）年香川景義寄進状に初見し、石清水文書の応永7（1400）年細川満元遵行状より、香川帶刀左衛門尉が守護代として西讃を統治していたことが想定されている（橋詰2003）。以後、15世紀末～16世紀初頭の守護細川京兆家の内部抗争による衰退を契機に、守護料所の押領・所領化や、国人領主層の被官化等を進め、戦国領主として西讃地域に勢力を大きく伸張させる。既述した多度庄や葛原庄が史料上から姿を消していく時期と、香川氏の伸張時期が重なることは、偶然とは考えられない。現在残る天霧城跡のアウトラインは、おそらくこの頃に成立したものと考えられる。本城跡の各曲輪には、堀や土塁、石塁、井戸、枱形虎口等の多数の防御施設が確認されている。これらの施設は、おそらく永禄6（1563）年頃の阿波守護三好実休や天正元（1573）年の金倉氏、天正6（1578）年頃の土佐守護長宗我部元親らとの合戦への備えとして、順次増設されたものと考えられる。

一方海浜部に立地し、香川氏の居館とされる多度津城跡（香西1719、橋詰2003）は、公園として早くに開発されたため、明確な遺構の残存は認められない。香川氏が海浜部に居館を築いた理由として、港津である多度津を掌握し、過書船による利益の獲得が大きな目的であり、香川氏の勢力伸張の原資となったことが説かれている（橋詰2003）。多度津の築城時期は不詳ながら、おそらくは守護代として西讃を領有した14世紀終末期～15世紀初期以後のことと思われる。この頃には未だ賀茂社による葛原庄の支配は継続しており、堀江津が多度郡内の港津機能の大きな部分を担っていたことが想像される。香川氏の勢力伸張期にあたる15世紀末以降、多度津城に近接する位置へ港津機能は移動したことが想像され、それは『兵庫北関入船納帳』に「堀江津」ではなく、「多々津」と記載されていることとも関係するものと考えられる。

平地居館としては、入道屋敷跡や鍋屋敷跡、西浦屋敷跡等が知られている。地理的には、道隆寺周辺と鴨神社周辺に集中する。前者は道隆寺との関係が、後者は葛原庄々官との関係が説かれている（香川県教育委員会編2003b）。城館の可否を含め、考古学的な調査が今後必要である。

さて16世紀後半、阿波三好義賢や土佐守護長宗我部元親の勢力拡張により、一時讃岐は三好氏や長宗我部氏の領するところとなる。天正10（1582）年、豊臣秀吉は仙石秀久を四国へ遣わし、長宗我部氏と合戦となる。天正13年には、仙石秀久ら四国征討軍と長宗我部氏との間に和議が成立し、讃岐国は秀久に与えられ、讃岐の中世は終焉を迎える。その後香川氏は、長宗我部氏に従い土佐に下ったため、天霧・多度津両城は、廃城となつた。

近世

既述したように、秀吉により讃岐は仙石秀久に与えられるが、その後に入部した尾藤知宣も、九州の島津氏

攻略の失策により、短期間で讃岐国を没収される。天正 15(1587)年に生駒親正が讃岐に入部し、翌年高松城を、慶長 2 (1597) 年には西讃の拠点として丸亀城を築城し、讃岐支配を進めていく。慶長年間には、領内で検地が実施され、その後寛永年間（1624～44）には、溜池の修築を行う等、讃岐支配の基盤整備に尽力する（木原 1997）。しかし、徳川幕府下では、外様大名であった生駒氏は、家臣間の主導権争いを端緒とした生駒騒動により、寛永 17 (1640) 年に改易となる。

翌年肥後天草藩主山崎家治が、多度郡を含む西讃 5 万石余に移封され、元和元（1615）年の一国一城令により廃城となっていた丸亀城を再建し居城とする。山崎氏による西讃支配も長続きはせず、明暦 3 (1657) 年には世継ぎ断絶により没収される。

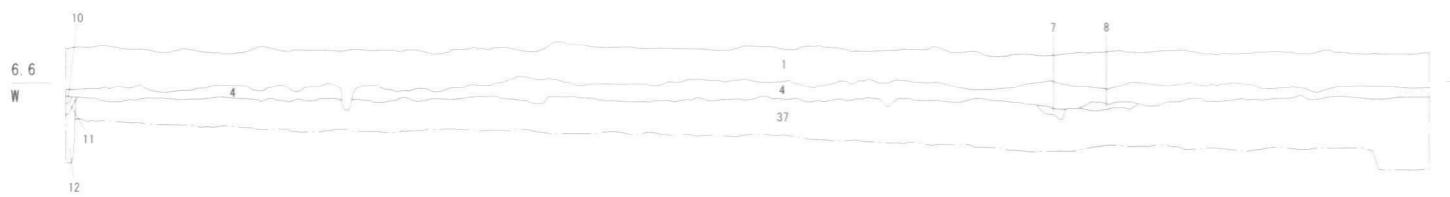
翌万治元年には播磨竜野藩主京極高和が入部し、寛文 10 (1670) 年には丸亀城が完成する。延宝から寛文にかけて領内に検地が実施されたらしく、多度郡山階村等の検地帳が現存する。おそらく寛文年間には、京極氏による西讃支配が確立したと考えられている（木原 1997）。

元禄 7 (1697) 年には、二代藩主京極高豊の遺言により、庶子喜内（高通）が分家独立し、支藩多度津藩が 1 万石余として成立する。当初、丸亀城内の西屋敷を多度津藩邸・藩庁としたが、文政 11 (1828) 年には、海浜部に多度津陣屋が完成し、翌年藩主が入部した。

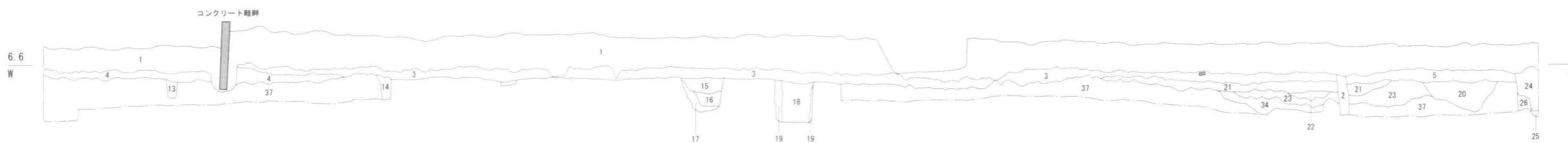
多度津藩では、寛保 2 (1742) 年の駿河加番以降、藩財政は不安定化する。こうした中、寛延 3 (1750) 年には百姓一揆が勃発し、三井村大庄屋須藤猪兵衛宅が打ち壊される等、庄八尺遺跡周辺も騒乱の舞台となる。

さて、庄八尺遺跡周辺は、近世においては多度郡三井郷庄村に属した。既述したように、生駒氏領、山崎丸亀藩領、京極丸亀藩領を経て、元禄 7 年以降は多度津藩領となる。庄村の村高は、「寛永 17 年生駒氏惣高覚帳」で 708 石余とされ、多度津藩成立時には 639 石余とやや減少している。安政 5 (1858) 年に完成した『西讃府志』によれば、耕地（反別）は 54 町 3 反余（畑 1 町 4 反余・屋敷 2 町 9 反余）、貢租は米 308 石余・大麦 1 石余・小麦 5 斗余・大豆 5 石余、戸数 125・人口 555（男 283・女 272）、牛 75・馬 2 等であったという（竹内編 1985）。遺跡周辺は、近世には水田稲作を中心とした農村として、近代を迎えた。

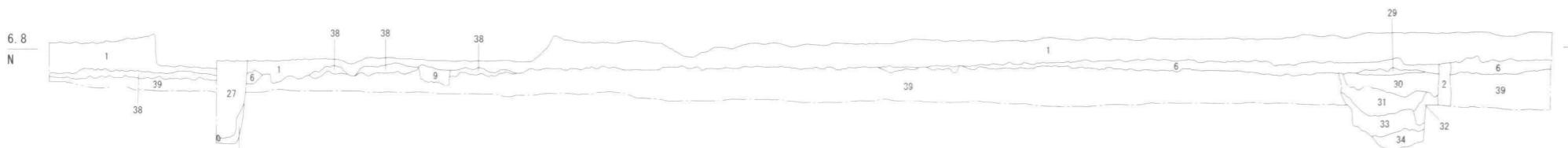
① I a 区北壁



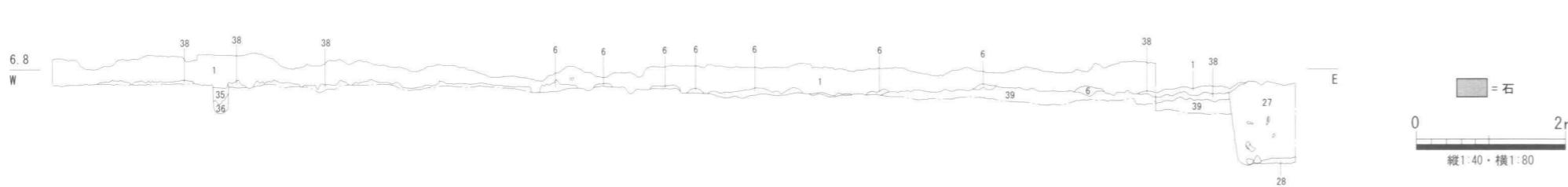
② I a 区東壁



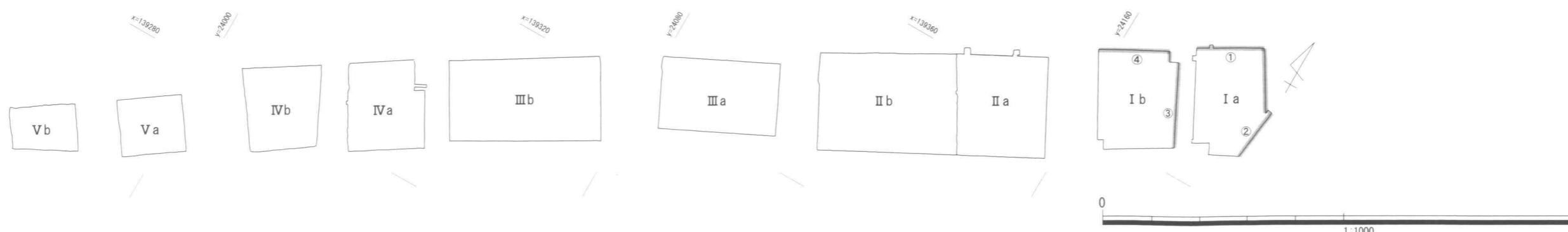
③ I b 区東壁



④ I b 区北壁



1 耕作土
2 捜乱
3 濃褐色粘性細砂（床土）
4 濃灰色粘性細砂（床土）
5 淡褐色粘性細砂（床土）
6 淡黃茶色粘性細砂（床土）
7 濃褐色粘性細砂
8 濃褐色粘性細砂（SD08 埋土）
9 濃灰色粘性細砂
10 (SP110 埋土)
11 (SP110 埋土)
12 (SP110 埋土)
13 (柱穴埋土)
14 濃灰色粘性細砂（SK01 埋土）
15 (SK05 埋土)
16 (SK05 埋土)
17 (SK05 埋土)
18 暗褐色粘質土（SK06 埋土）
19 暗褐色粘質土（SK06 埋土、濁暗褐色粘質土ブロック多含）
20 茶灰色粘性細砂（SK11 上層）
21 濃褐色粘性細砂（SK11 中層）
22 濃褐色粘性細砂（SK11 中層、濁黃褐色粘質土小ブロック多含）
23 濃灰色粘性細砂（SK11 中層、濁黃褐色粘質土小ブロック多含）
24 茶灰色混様粘性細砂（SX02 埋土？）
25 濃褐色粘性細砂（SX02 埋土？）
26 濃黃褐色粘性細砂（地山ブロック？）
27 (SK12 埋土)
28 (SK12 埋土)
29 濃灰黃色粘性細砂（SD03 上層、暗褐色粘質土小ブロック若干量含）
30 濃灰黃茶色粘性細砂（SD03 上層）
31 灰褐色粘性細砂（SD03 中層、濁黃灰色粘質土ブロック若干量含）
32 濃灰黃色粘性細砂（SD03 中層）
33 濃褐色粘性細砂（SD03 中層、灰白色細砂ラミナ含）
34 灰色細砂（SD03 下層、褐褐色粘質土ラミナ含）
35 濃灰色粘性細砂（柱穴埋土、ベースブロック少量含）
36 濃灰色粘性細砂（柱穴埋土、ベースブロック多量含）
37 明黃色粘性細砂（地山）
38 濃黃灰褐色粘質土（地山）
39 濃黃褐色粘質土（地山）



第6図 I区調査区壁面土層断面図

第III章 発掘調査の成果

第1節 I 区の調査

概要と基本土層

I 区は、最も東に位置する調査区で、東は用水路化した東小桜川が北流し、西は調査区に隣接する民家への進入路を挟んでII区と接する。対象地の面積は、約 863.6m²である。調査前は5筆程度の水田等の耕作地として利用されていた。調査区中央部を南北に細い里道が走向し、この里道の東方3筆をI a区、西方2筆をI b区として調査を進めた。現地表面の標高は、両区とも 6.8 ~ 6.9 m 前後である。

土層序の観察は、調査区の北及び東壁面において行った。現耕作土（第6図1層）の下位には、1~2層に细分される床土層（同図3~6層）の薄い水平堆積が認められ、これらの耕土層を取り除くと、古代以降の遺構面となる黄～褐色系粘質土（同図37~39層）が露出する。遺構面は、上位耕土層による影響を除いては、ほぼ水平に検出された。遺構面の標高は、I a区で 6.45 m 前後、I b区で 6.65 m 前後を測り、I a区がやや低く、東小桜川へ向けて下降する旧地形を反映していると考えられる。

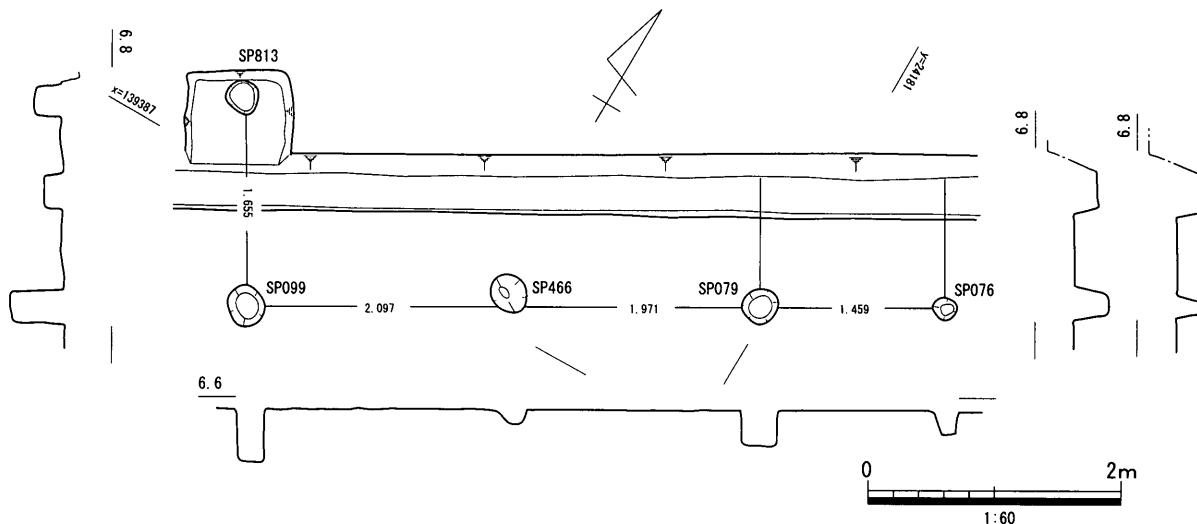
本調査区では、古代の幹線水路（SD03）および掘立柱建物跡 22 棟などから構成される中世後半期を主体とする屋敷地が検出された。中世掘立柱建物柱穴跡の残存深度は、概ね 0.1 ~ 0.5 m と浅く、遺構面は近世以降に強い削平を被っていると考えられる。以下、各遺構について報告する。

掘立柱建物跡

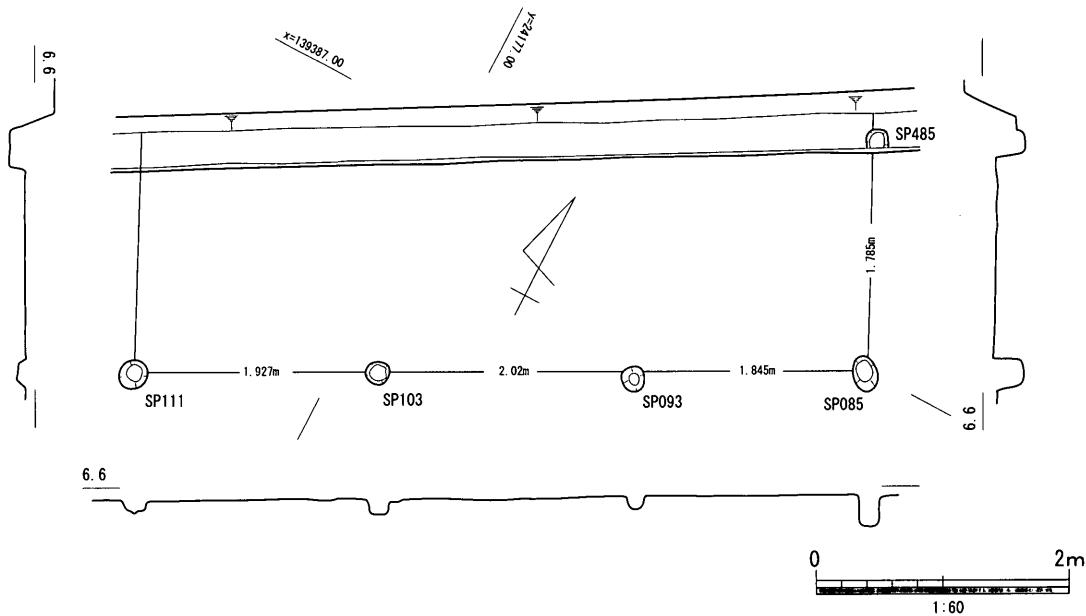
I 区では、22 棟の掘立柱建物を復元した。柱穴と考えられる遺構は 865 基を検出し、そのうちの約 16.5% について建物が復元された計算になる。なお残余の柱穴は多く、本来はさらに多くの建物が建てられていた可能性が想定される。建物の復元が困難な要因として、調査上の問題のほか、攪乱や前述したように遺構面が顕著な削平を蒙っていることなどが考えられる。本報告では、下述の復元案を報告するが、再検討の余地は十分にあり、今後の課題としておきたい。また、梁間もしくは桁行の一部が確認され、本来は柵列等として報告すべき遺構も、柱間間隔が揃い、企画的に柱穴が配される点等を重視して、建物遺構として報告しているものもある。

SB01（第7図）

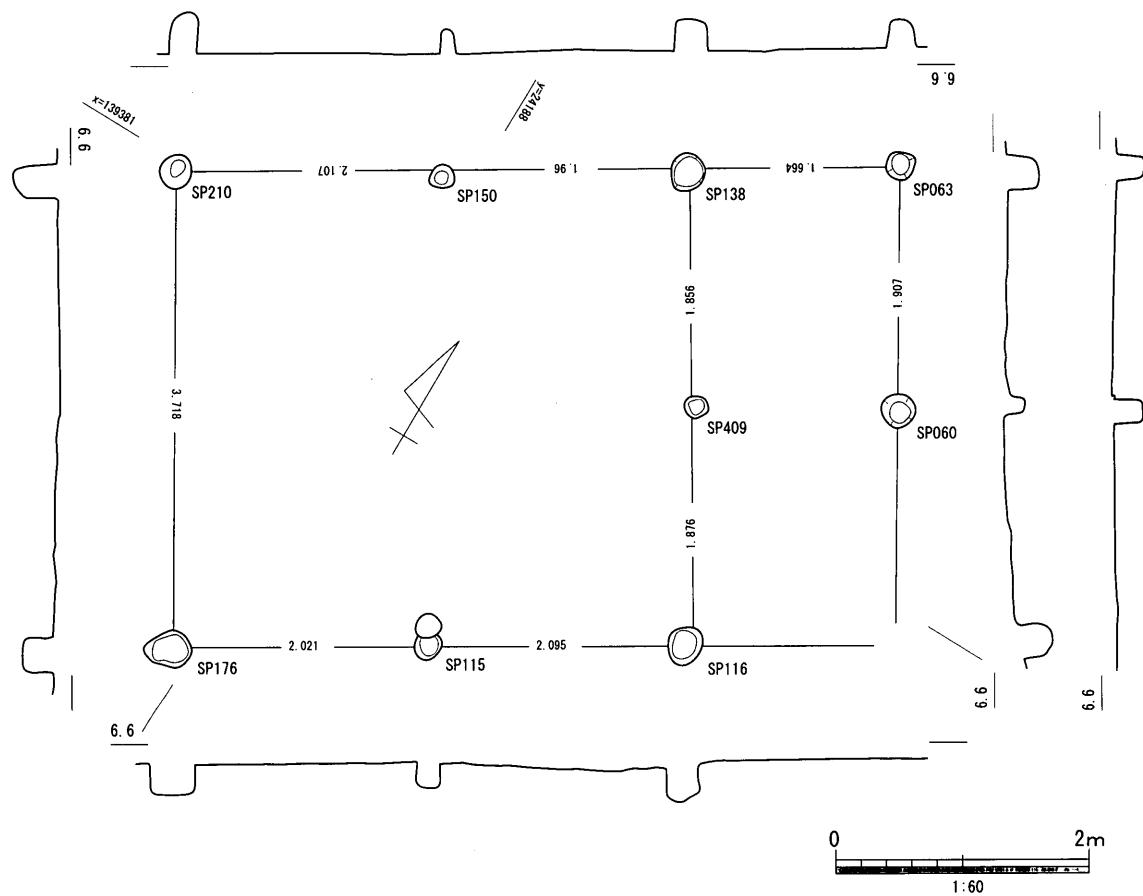
I a 区北端で検出。北半部は調査区外へ延長し、全形は不詳である。SB02 と重複するが、柱穴跡に切り合



第7図 SB01 平・断面図



第8図 SB02 平・断面図



第9図 SB03 平・断面図

い関係ではなく、先後関係は不明である。柱間間隔の広狭から、東西方向の柱列を桁行とし、また東端の柱穴跡は、模がやや小さく、柱間間隔も狭いことから、東面に庇を伴う東西棟側柱建物として復元した。

遺物は、土師質土器片が少量出土したのみであり、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。

SB02 (第8図)

I a 区北端で検出。北半部は調査区外へ延長し、全形は不詳である。柱間間隔の広狭から、東西方向の柱列を平行とし、東西棟側柱建物として復元した。

遺物は、土師質土器片が少量出土したのみであり、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。

SB03 (第9図)

I a 区南東部で検出。東面に庇を有する、東西棟側柱建物として復元した。SD02 より後出する。また SB04 ~ 06・08 と重複するが、柱穴跡に切り合い関係はなく、先後関係は不明である。梁間西列の中央柱及び庇南端柱を欠く。

遺物は、土師質土器小皿等の小片が少量出土したのみであり、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。

SB04 (第10図)

I a 区南東部で検出。SK08 より後出する。また SB05・06 と重複するが、柱穴跡に切り合い関係はなく、先後関係は不明である。梁間東列南 2 柱を欠く。

遺物は、図示した以外には、土師質土器の小片が少量出土したのみである。出土遺物や遺構の切り合い関係より、16世紀後半を中心とする時期に位置付けられる。

SB05 (第11図)

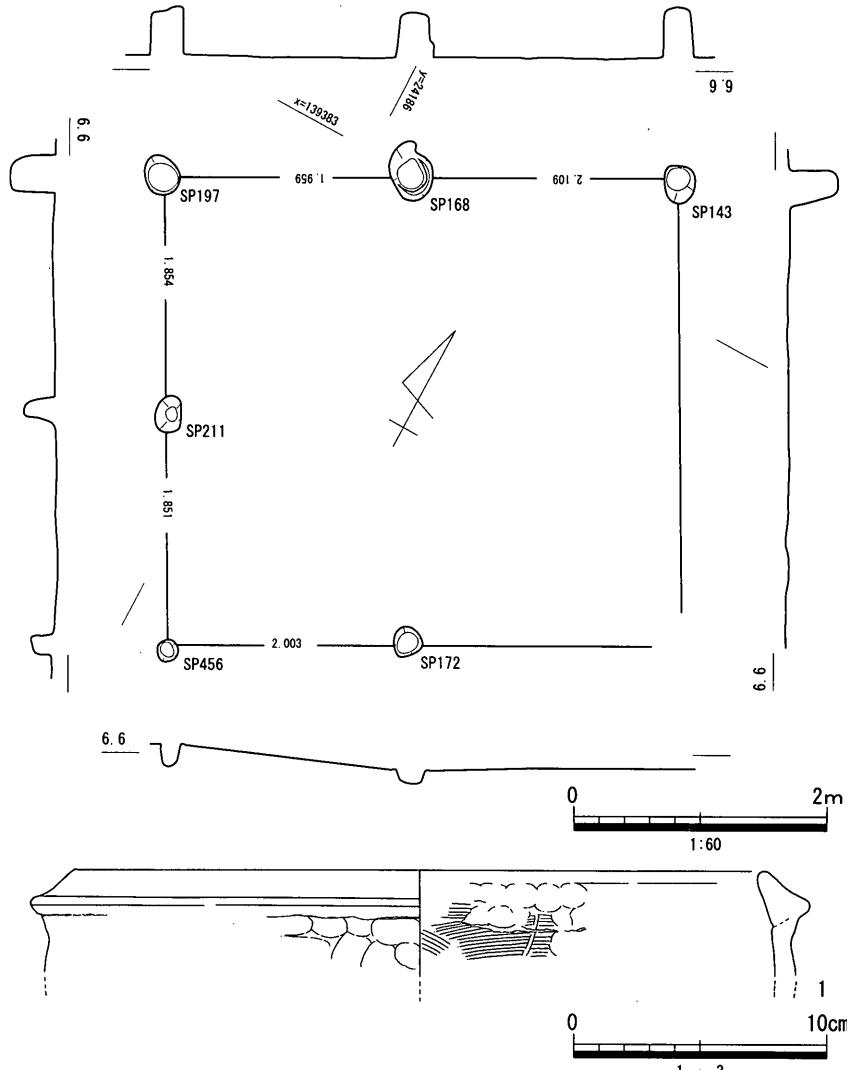
I a 区中央部で検出。南東隅柱を欠く。SK08 より後出する。SB06 ~ 09 と重複するが、柱穴跡に切り合い関係はなく、先後関係は不明である。

遺物は、土師質土器小片が少量出土したのみであり、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。

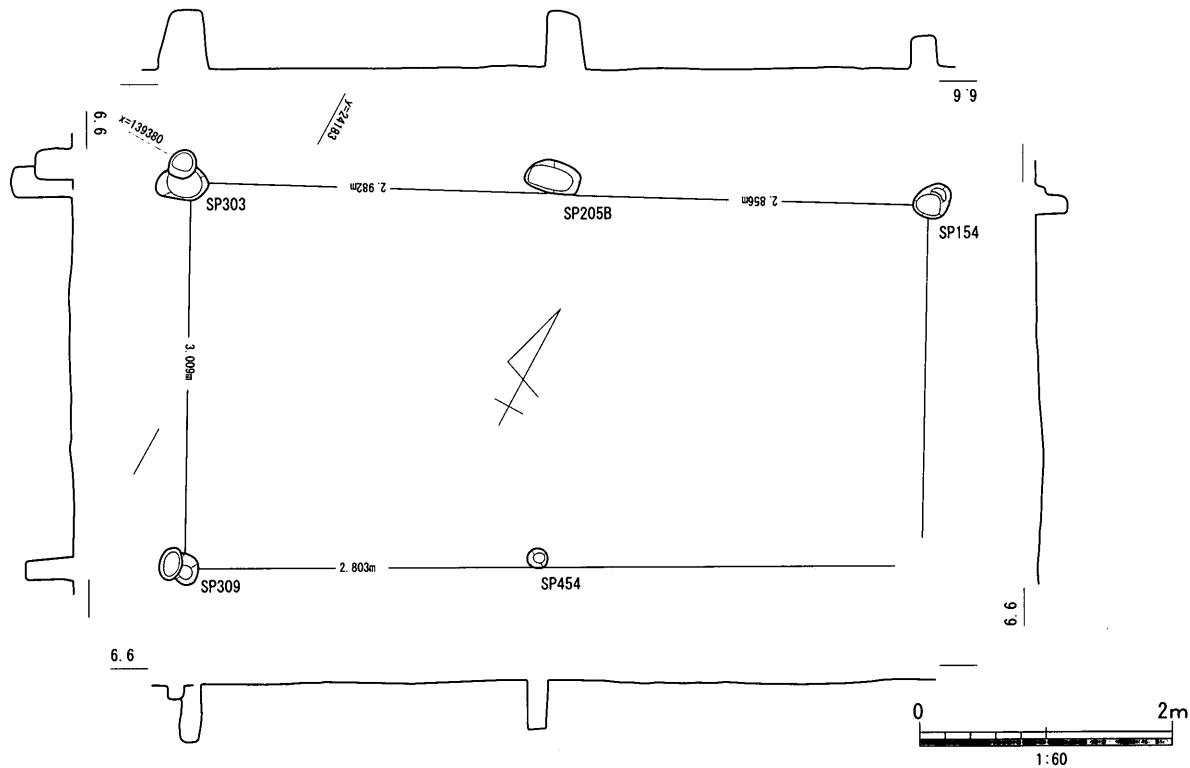
SB06 (第12図)

I a 区中央部で検出。南西隅柱を欠く。SB07・09 と重複するが、柱穴跡に切り合い関係はなく、先後関係は不明である。

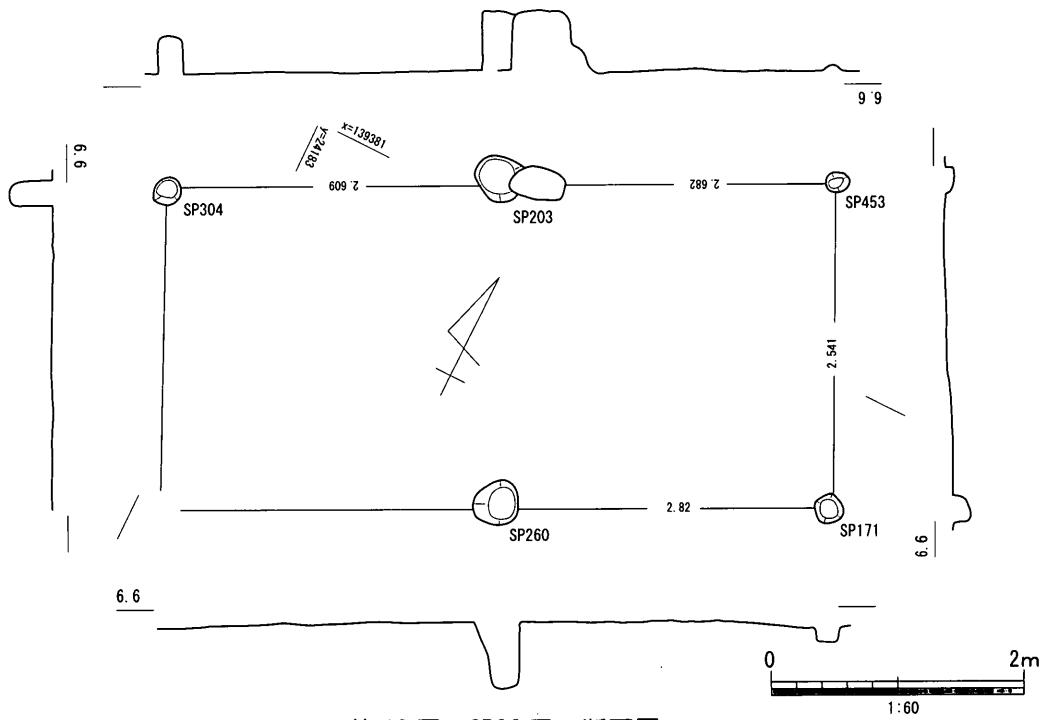
遺物は、土師質土器小皿等の小片が少量出土したのみで、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期



第10図 SB04 平・断面図、出土遺物実測図



第11図 SB05 平・断面図



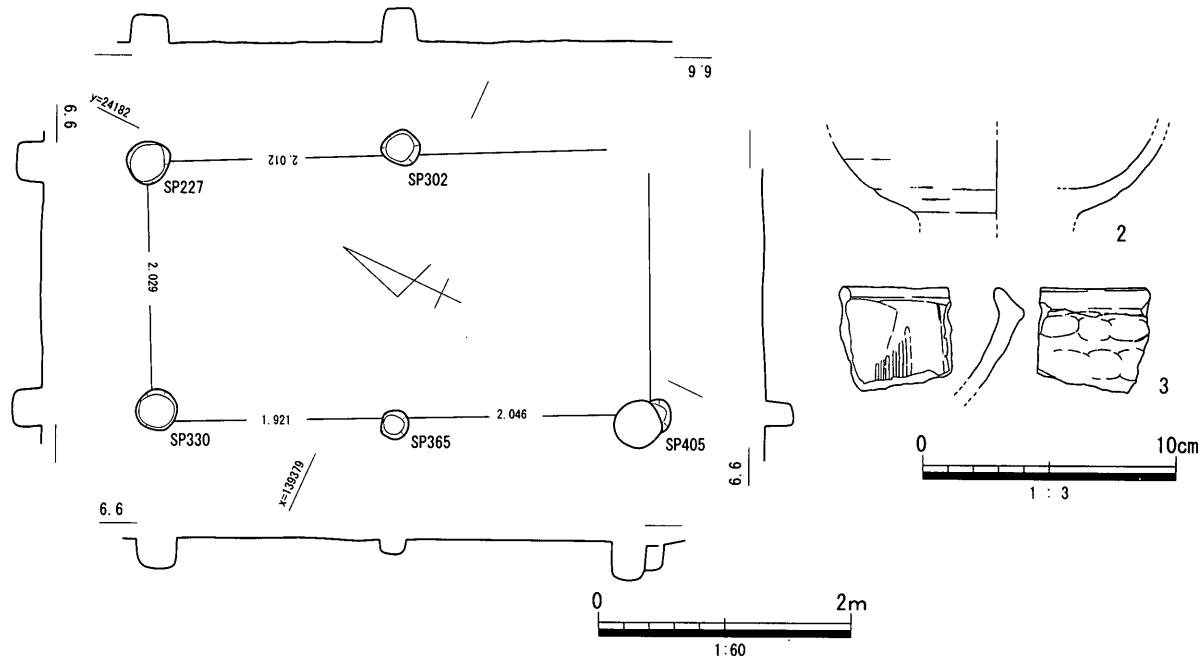
第12図 SB06 平・断面図

を特定することは困難である。

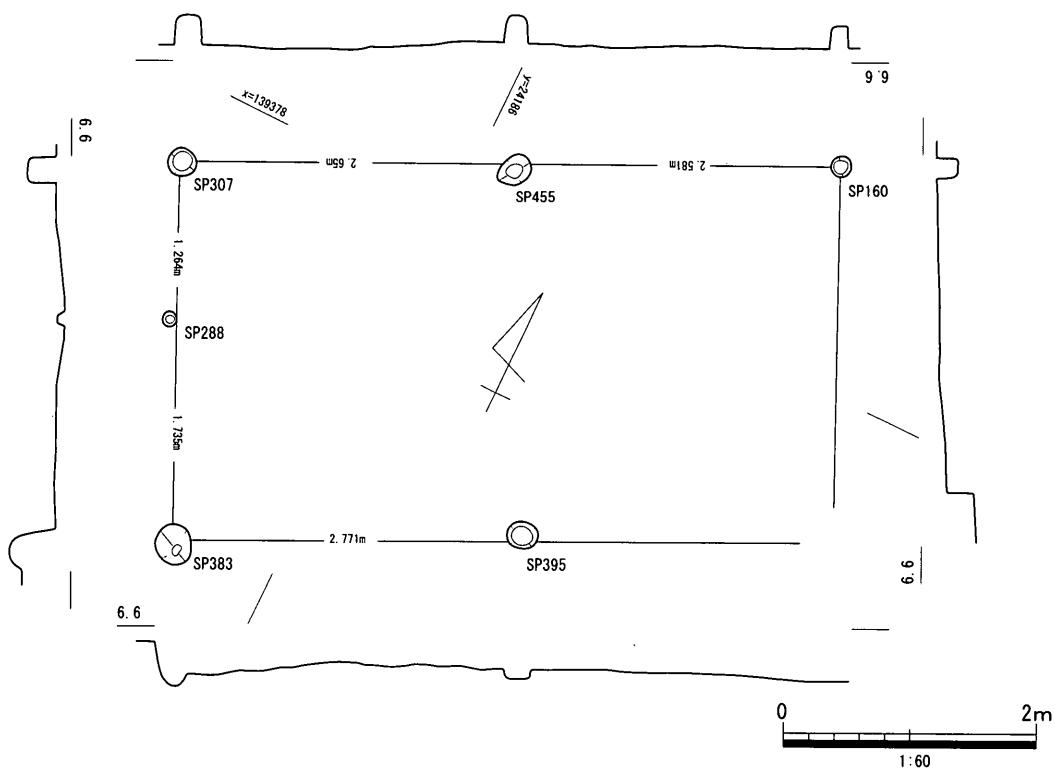
SB07（第13図）

I a 区西部で検出。SB09～11等と重複する。柱穴跡の切り合い関係より、SB11より先行するが、SB09・10等とは切り合い関係ではなく、先後関係は不明である。

遺物は、図示した以外には土師質土器等の小片が少量出土したのみである。2は、中国龍泉窯系青磁碗。上



第13図 SB07 平・断面図、出土遺物実測図



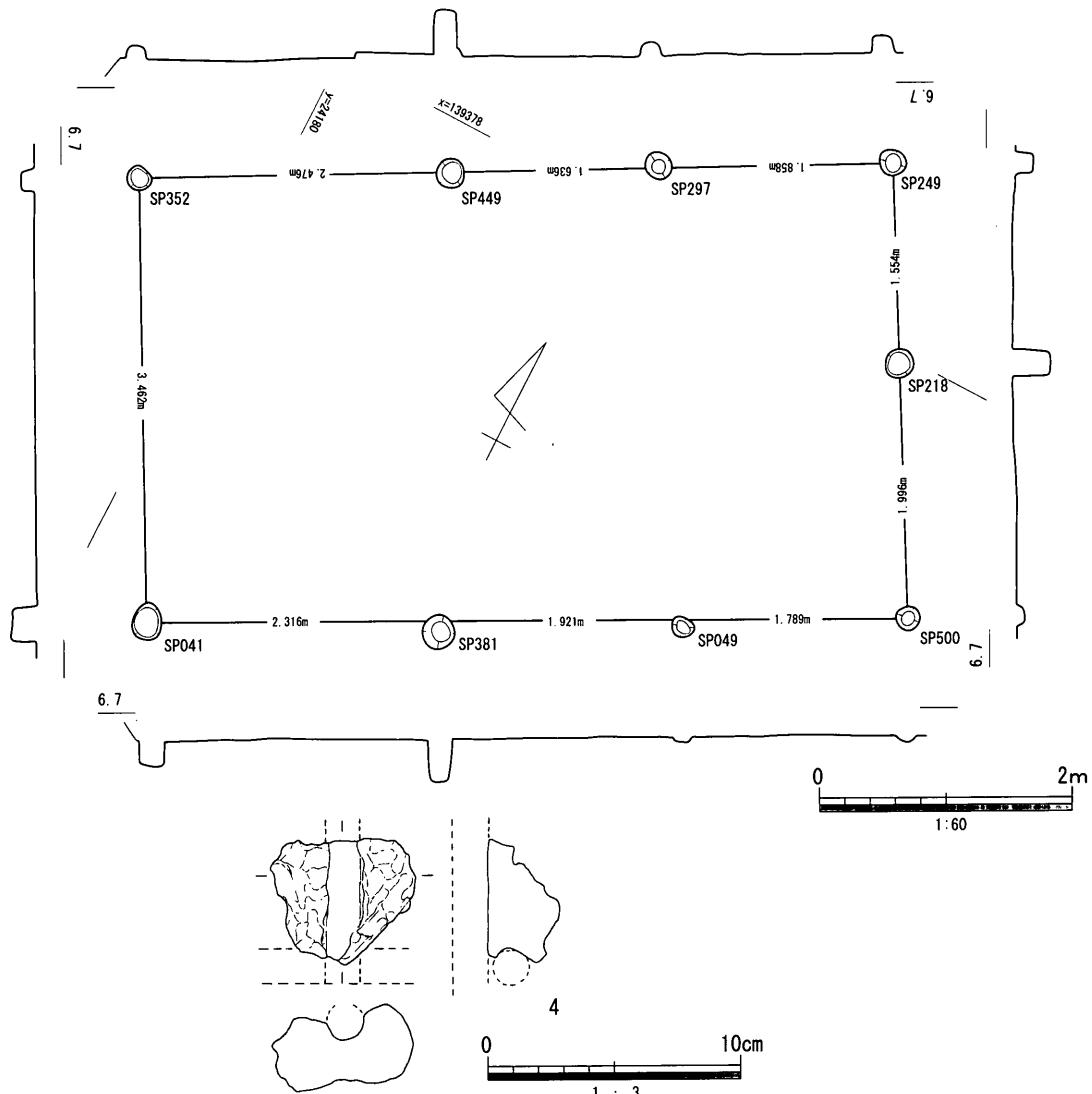
第14図 SB08 平・断面図

田E類か。出土遺物より、16世紀後半を中心とした時期に位置付けられる。

SB08(第14図)

I a区中央部で検出。梁間東列南2柱を欠く。SB09・12、SK08と重複する。柱穴跡の切り合い関係より、SK08より後出するが、SB09・12とは切り合い関係ではなく、先後関係は不明である。

遺物は、土師質土器小皿等の小片が少量出土したのみであり、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。



第15図 SB09 平・断面図、出土遺物実測図

SB09(第15図)

I a区西部で検出。梁間西列中央柱を欠く。さらに西に延長する可能性も考えられるが、図示した復元案で報告する。SB10・11、SK09と重複する。柱穴跡の切り合い関係より、SK09より後出するが、SB10・11とは切り合い関係ではなく、先後関係は不明である。

遺物は、図示した以外に器種不詳の土師質土器小片が少量出土した。4は、壁土とみられる焼土塊。十字に組まれた木舞の痕跡が認められる。時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。

SB10(第16図)

I a区西部で検出。南西隅柱を欠く。SB11等と重複するが、柱穴跡に切り合い関係ではなく、先後関係は不明である。

遺物は、土師質土器小皿等の小片が少量出土したのみであり、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。

SB11(第17図)

I a区西端で検出。西半部は調査区外へ延長するため、全形は不詳である。柱間間隔の広狭等から、南北方向の柱列を桁行として、南北棟側柱建物として復元した。SB13と重複するが、柱穴跡に切り合い関係ではなく、

先後関係は不明である。

遺物は、土師質土器皿等の小片が少量出土した。出土遺物より16世紀後葉を中心とした時期に位置付けられる。

SB12(第18図)

I a区南部で検出。SB13、SK10・11と重複する。柱穴跡の切り合い関係よりSK10・11よりは先行するが、SB13とは切り合い関係ではなく、先後関係は不明である。SK11により南東隅柱を欠く。

遺物は、土師質土器碗等の小片が少量出土した。出土遺物より14世紀を中心とした時期に位置付けられる。

SB13(第19図)

I a区南西部で検出。北列中央穴を欠くが、南北棟総柱建物として復元した。遺物は、図示した以外にも土師質土器等の小片が少量出土した。出土遺物より、14世紀を中心とした時期に位置付けられる。

SB14(第20図)

I b区北部で検出。梁間西列中央柱を欠く。SK13・15・17等と重複し、柱穴跡の切り合い関係よりSK13より後出し、SK15・17より先行する。

遺物は、土師質土器小皿等の小片が少量出土した。出土遺物より13世紀を中心とした時期に位置付けられる。

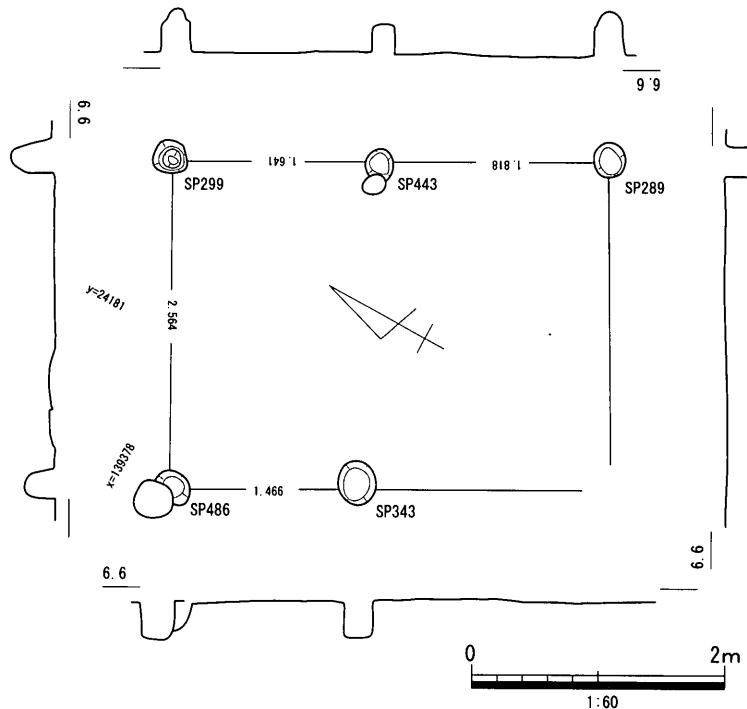
SB15(第21図)

I b区中央部で検出。SB16・17と重複する。柱穴跡の切り合い関係より、SB16より後出するが、SB17とは切り合い関係ではなく、先後関係は不明である。

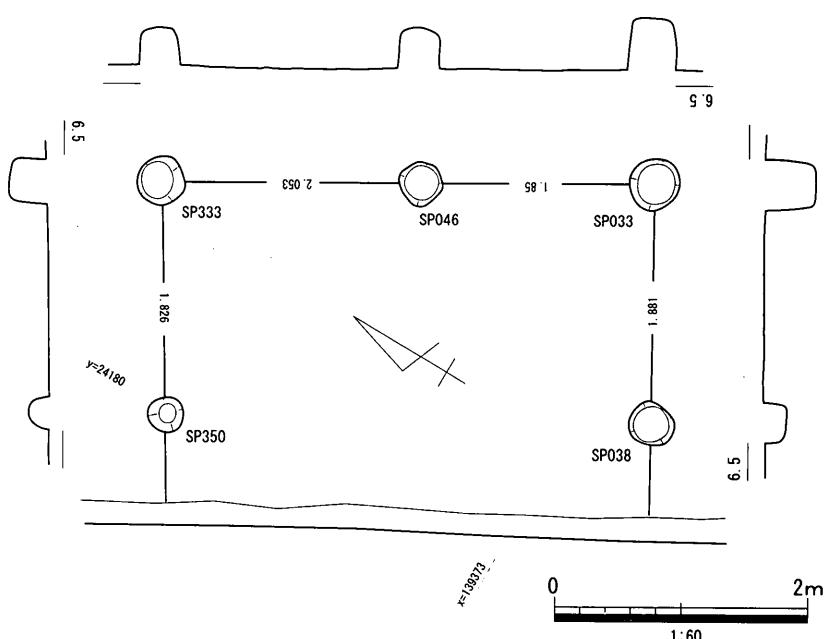
遺物は土師質土器の小片が少量出土したのみで、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。

SB16(第22図)

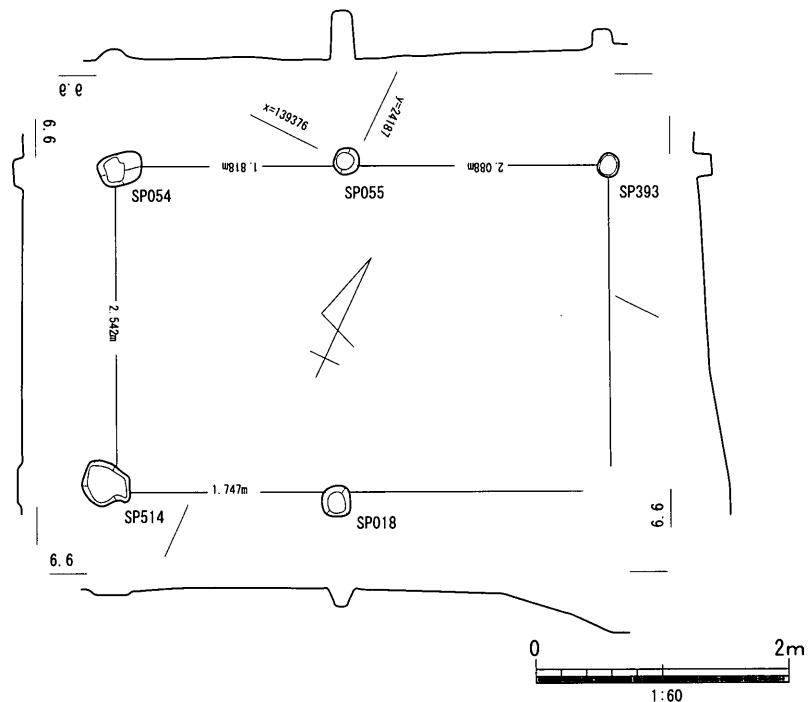
I b区中央部で検出。SB17と重複するが、柱穴跡に切り合い関係ではなく、先後関係は不明である。



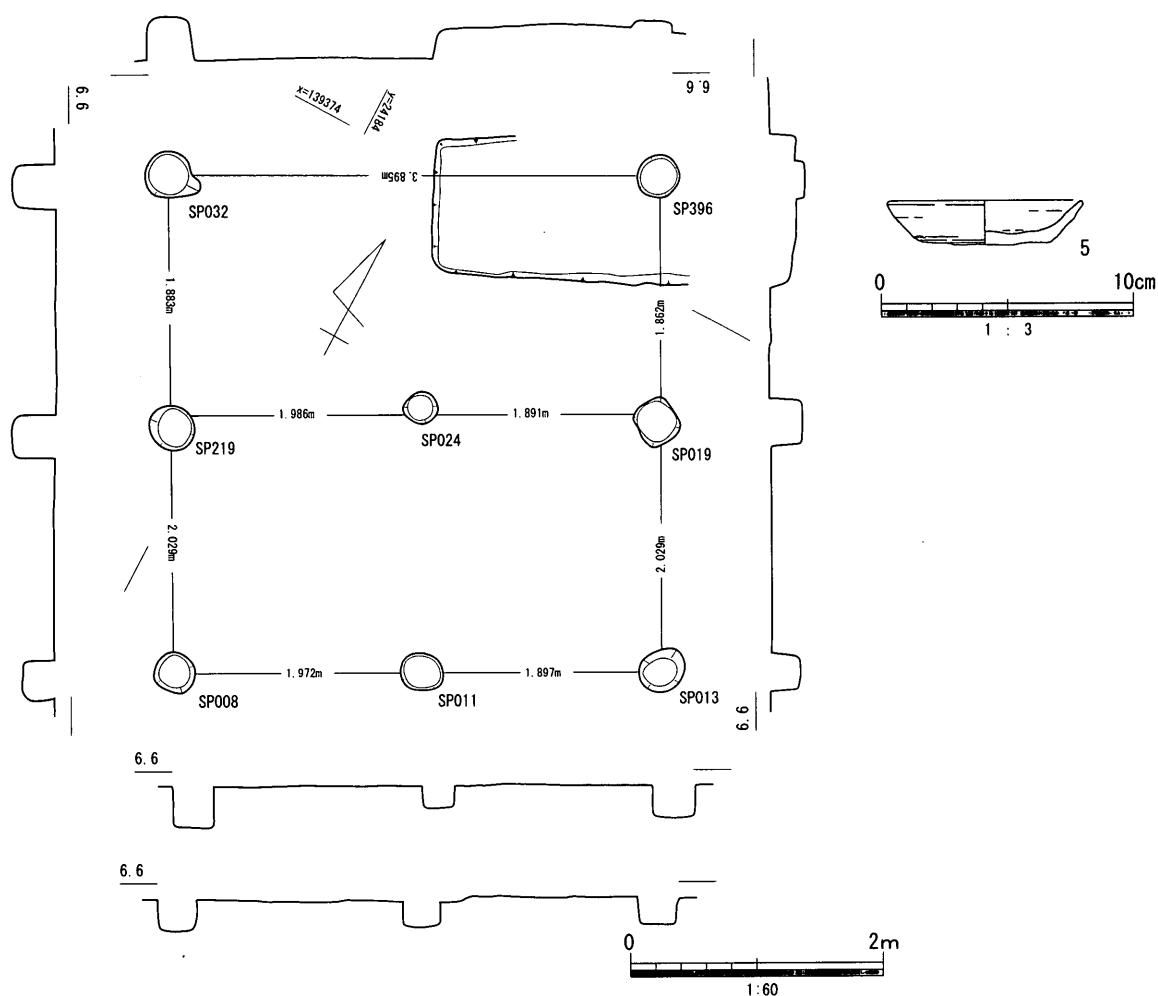
第16図 SB10平・断面図



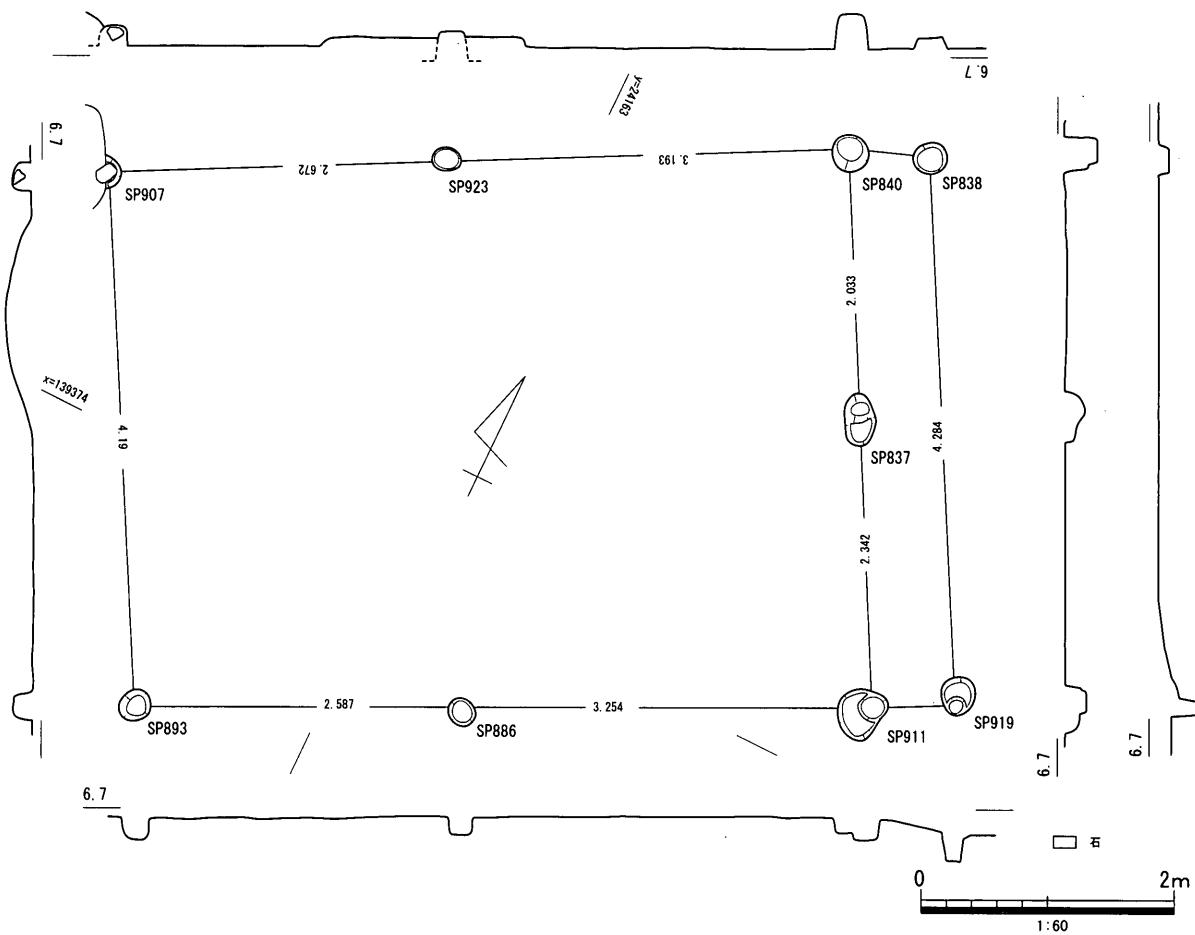
第17図 SB11平・断面図



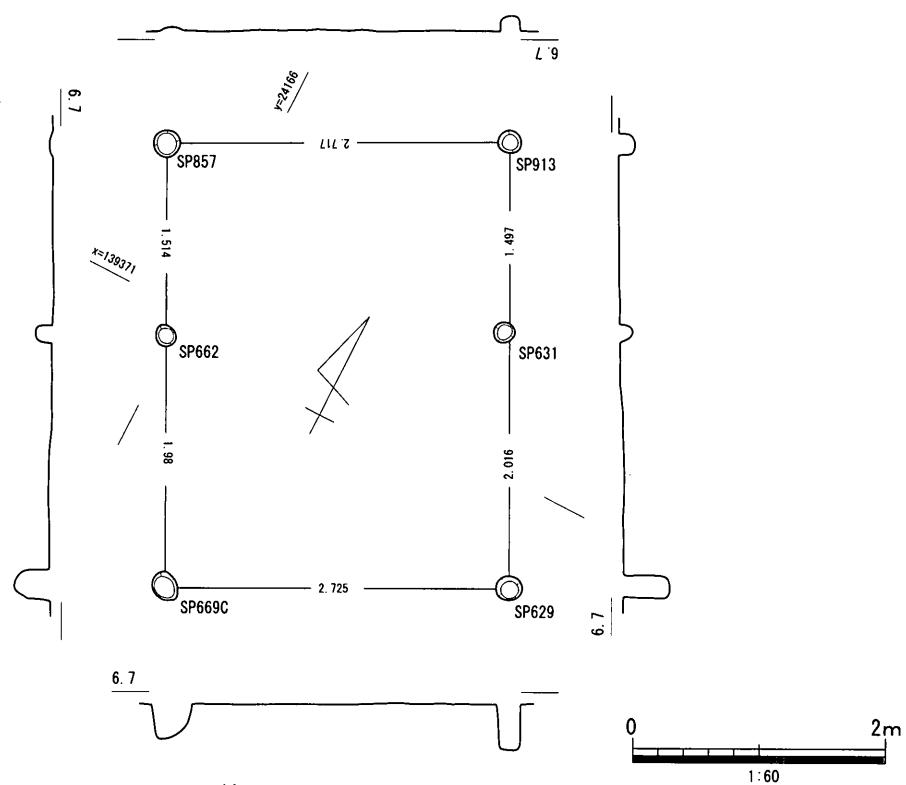
第18図 SB12 平・断面図



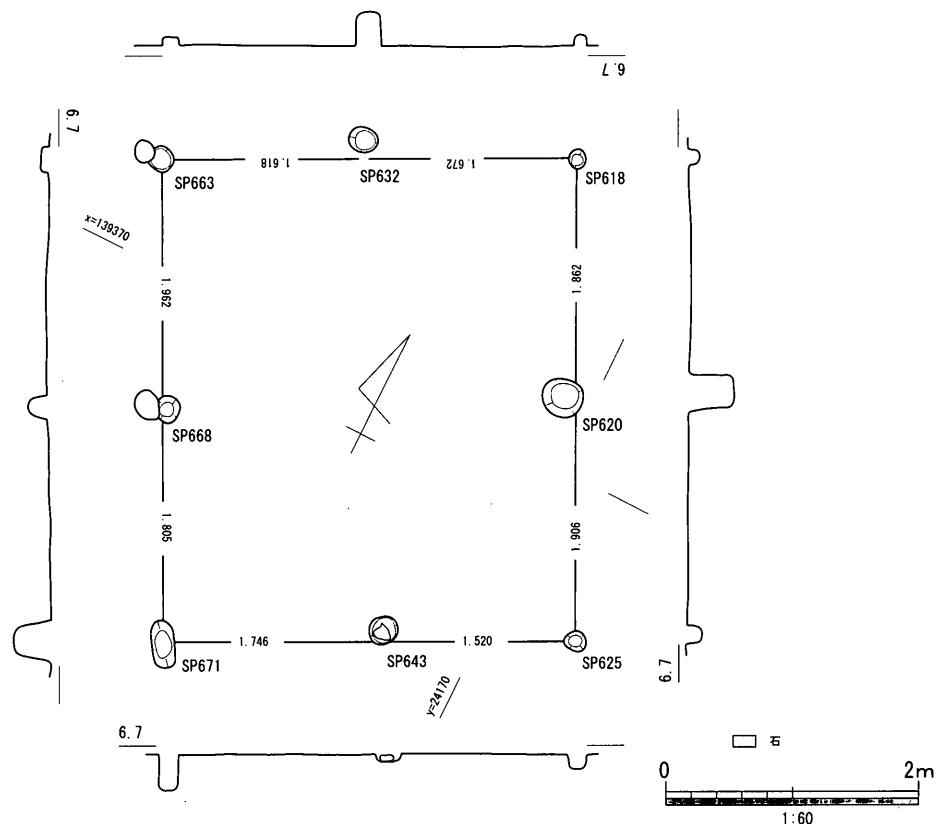
第19図 SB13 平・断面図、出土遺物実測図



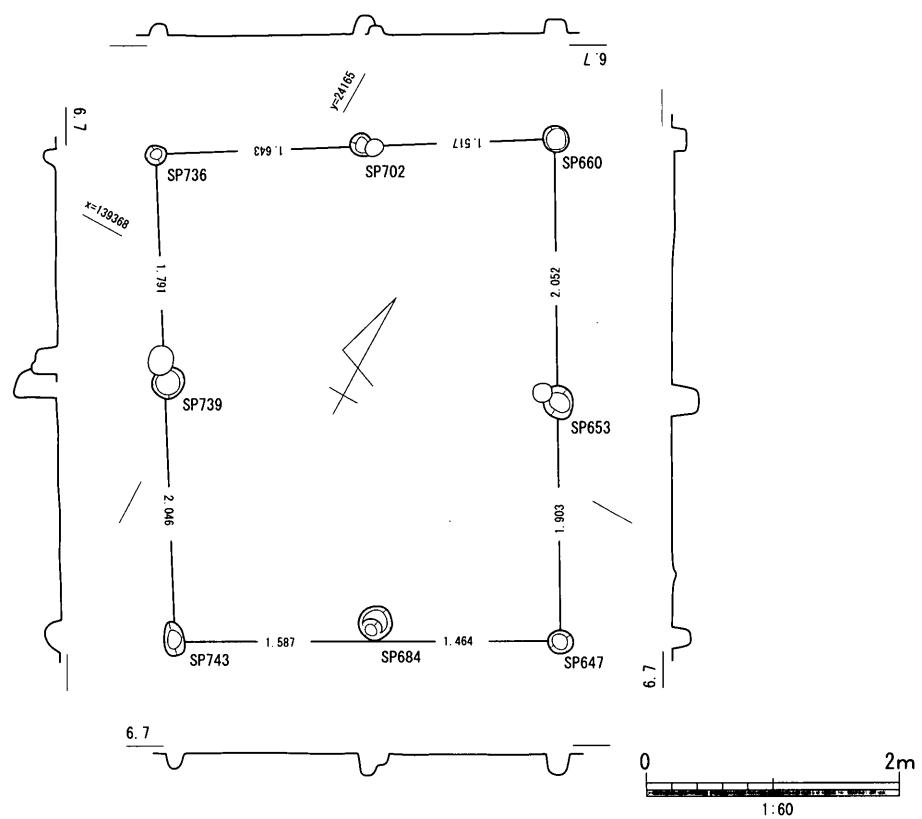
第20図 SB14平・断面図



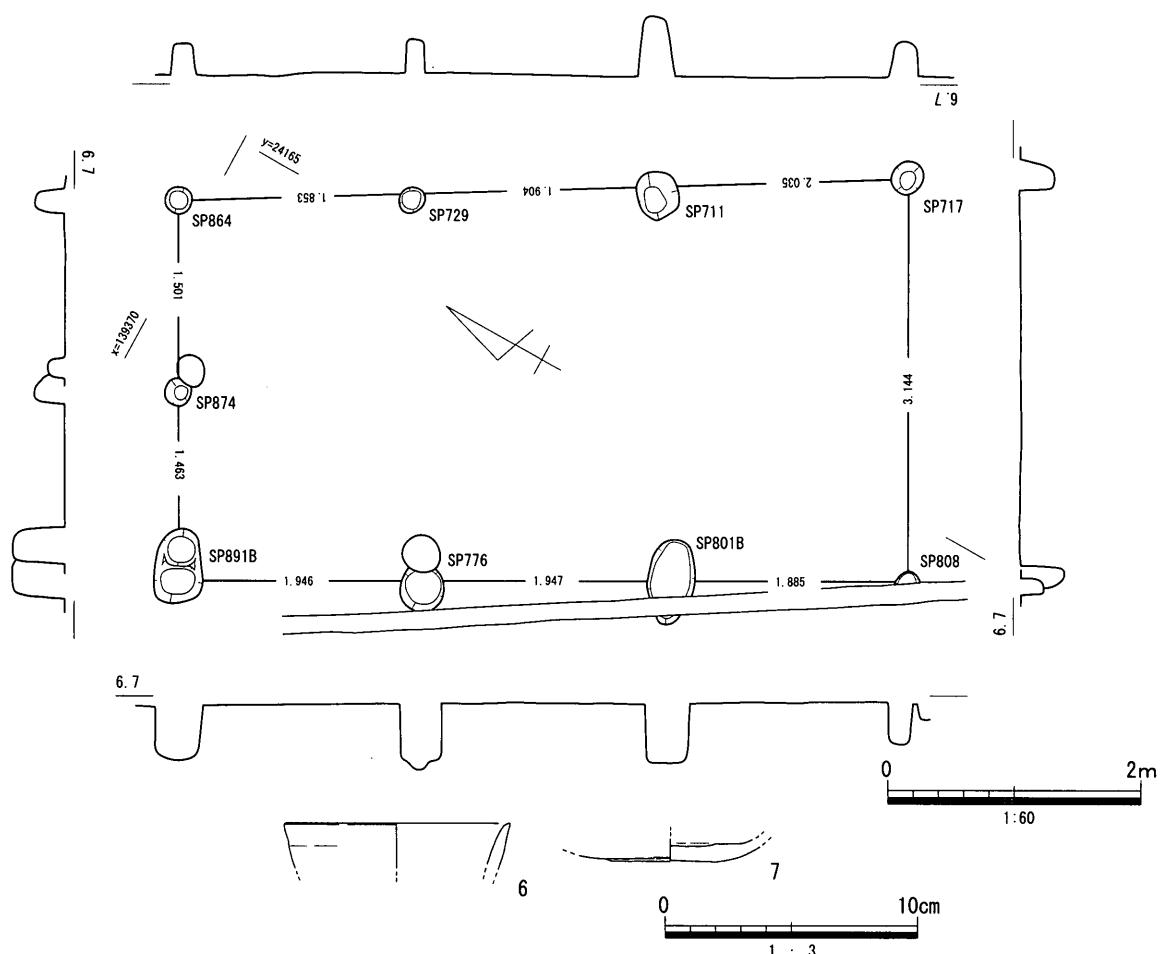
第21図 SB15平・断面図



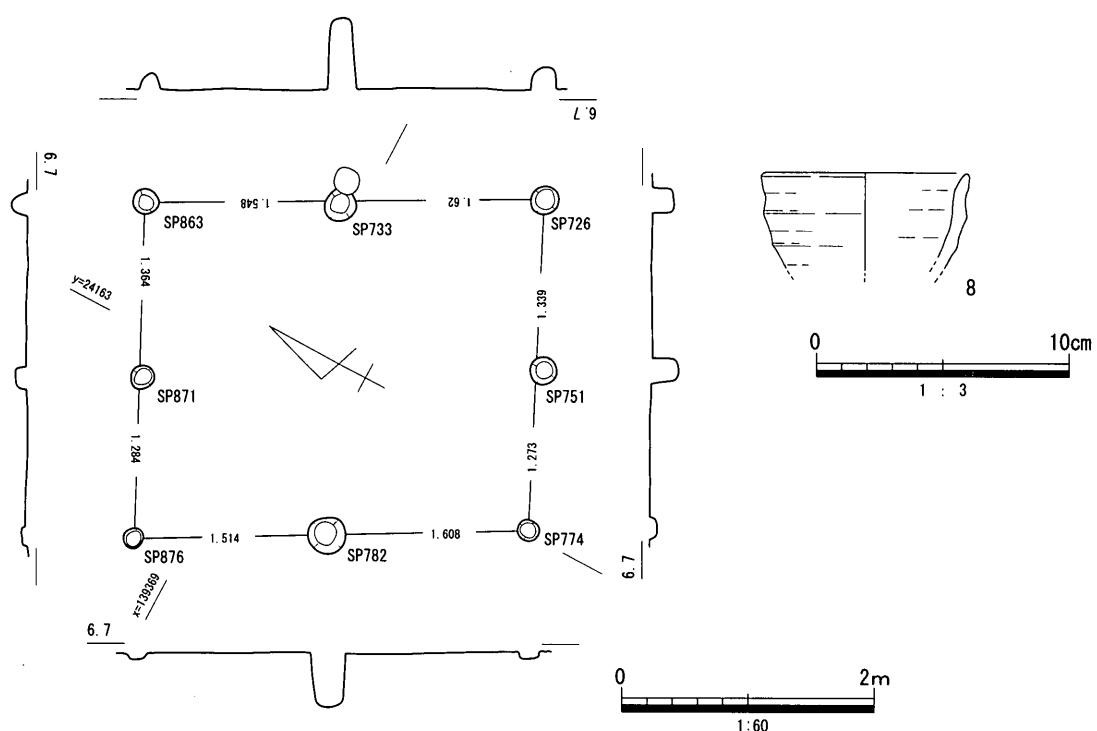
第22図 SB16 平・断面図



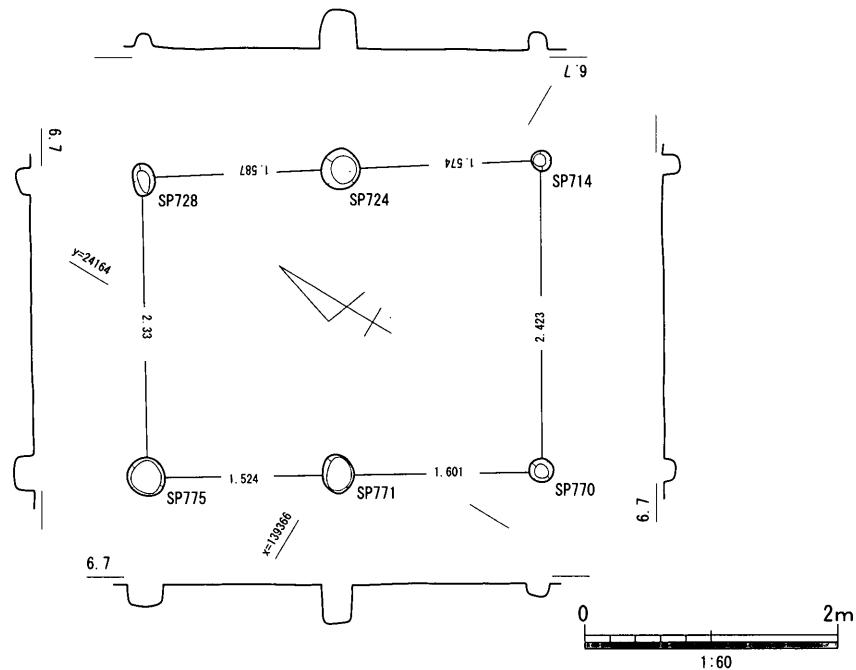
第23図 SB17 平・断面図



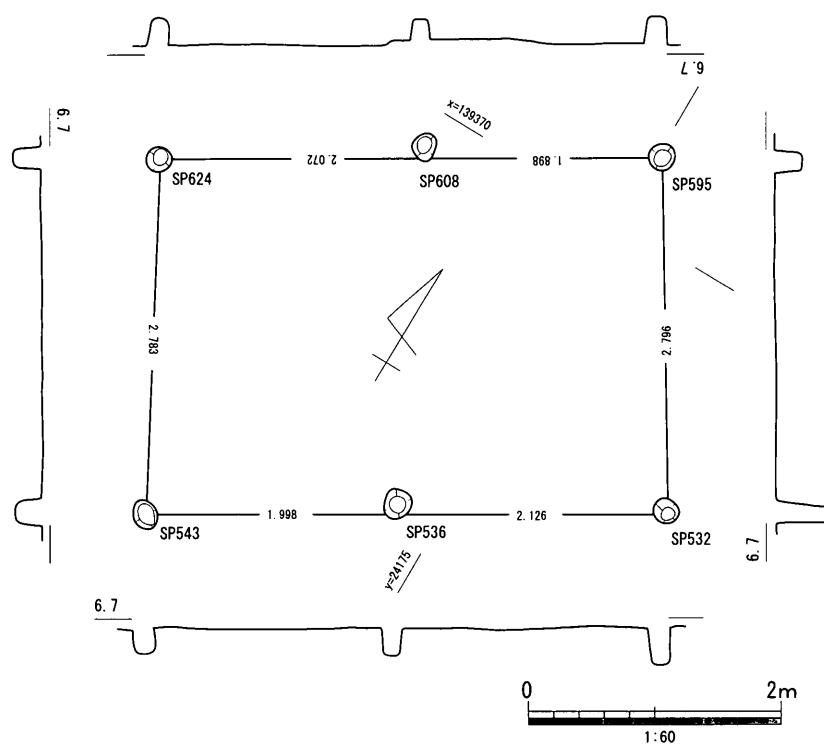
第24図 SB18 平・断面図、出土遺物実測図



第25図 SB19 平・断面図、出土遺物実測図



第26図 SB20 平・断面図



第27図 SB21 平・断面図

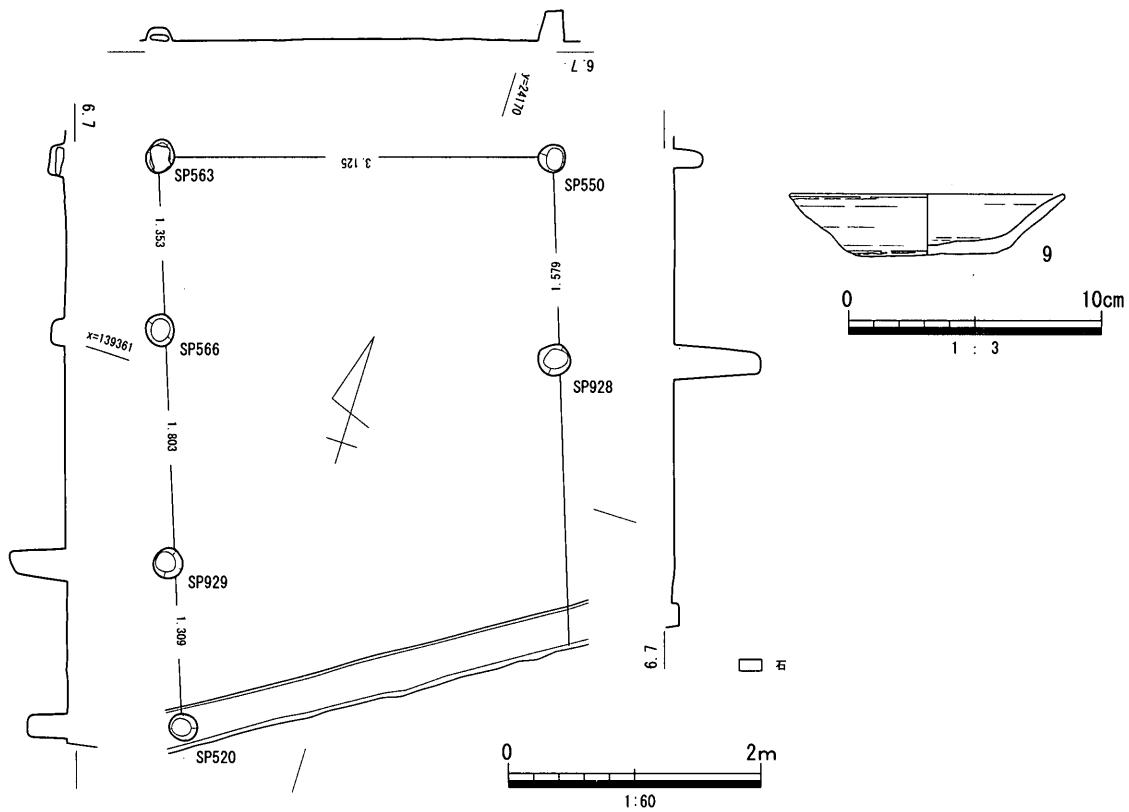
遺物は、土師質土器小皿などの小片が少量出土したのみで、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。

SB17(第23図)

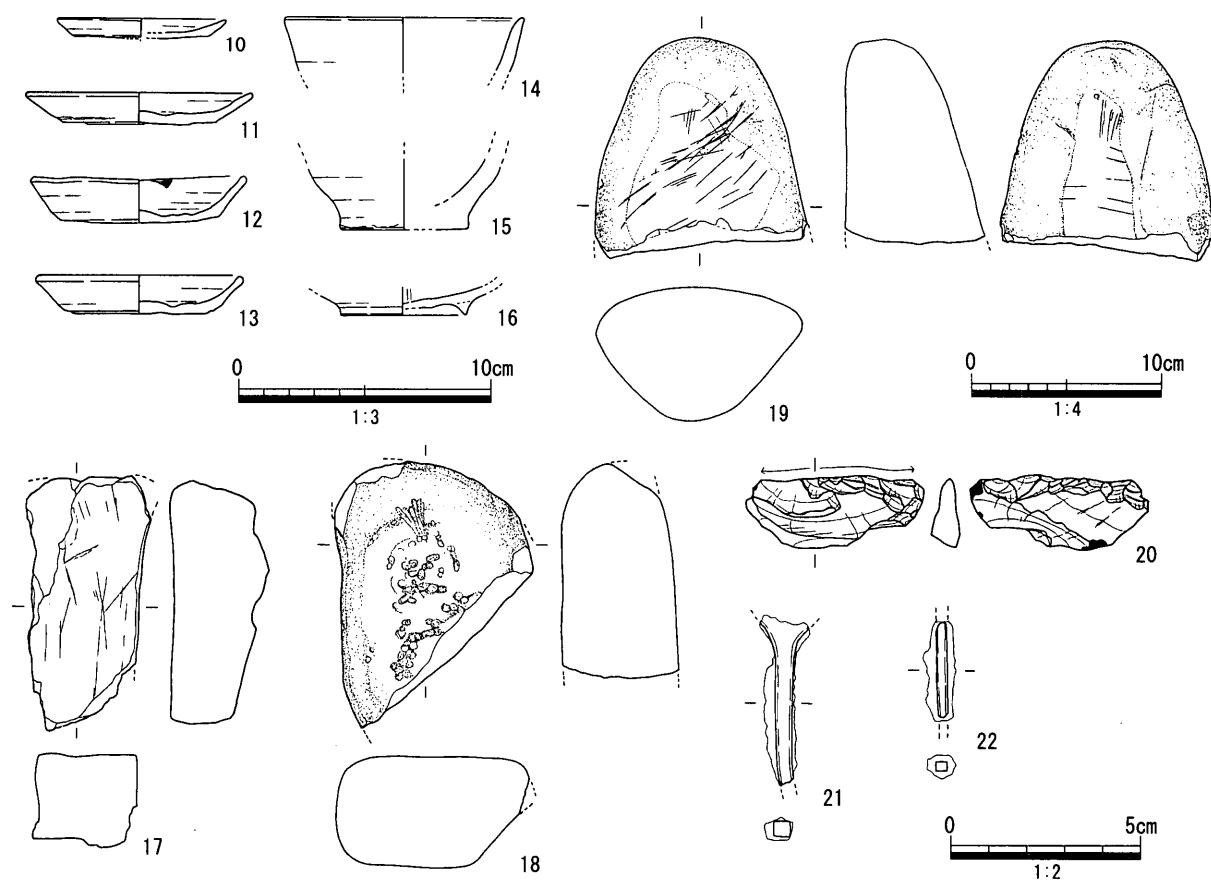
I b区西部で検出。SB19～20と重複するが、柱穴跡に切り合い関係ではなく、先後関係は不明である。

遺物は、器種不詳の肥前系陶器等の小片が出土しており、17世紀前半を中心とした時期に位置付けられる。

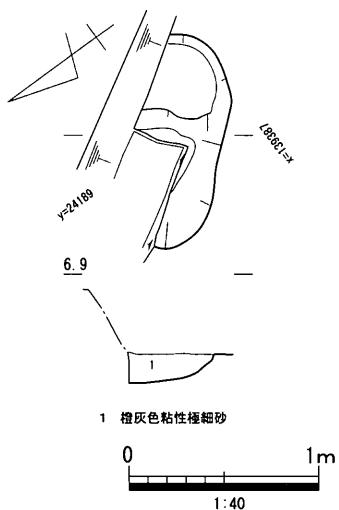
SB18(第24図)



第28図 SB22 平・断面図、出土遺物実測図



第29図 I区柱穴出土遺物実測図



第30図 SK01 平・断面図

I b 区西部で検出。SB19・20と重複する。柱穴跡の切り合い関係より、SB20より先行するが、SB19とは切り合い関係ではなく、先後関係は不明である。

遺物は、図示した以外に土師質土器小皿等の小片が少量出土したのみである。出土遺物より、16世紀後半～17世紀前半を中心とした時期に位置付けられる。

SB19（第25図）

I b 区西部で検出。SB20と重複するが、柱穴跡に切り合い関係ではなく、先後関係は不明である。

遺物は、図示した以外には器種不詳の土師質土器小片等が少量出土したのみである。出土遺物より、16世紀後半～17世紀前半を中心とした時期に位置付けられる。

SB20（第26図）

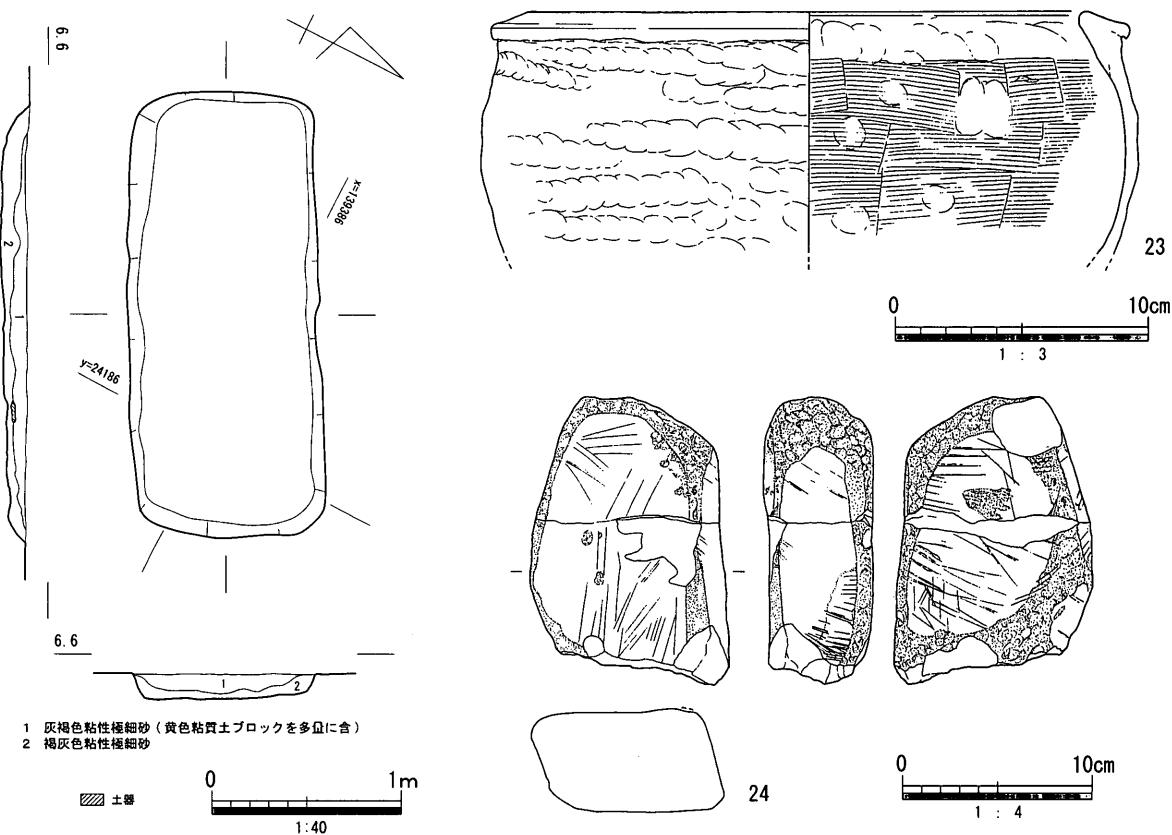
I b 区西部で検出。遺物は、土師質土器小皿等の小片が少量出土したのみであり、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。

SB21（第27図）

I b 区南東部で検出。遺物は、器種不詳の土師質土器小片等が少量出土したのみであり、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。

SB22（第28図）

I b 区南西隅部で検出。南半部は調査区外へ延長し、全形は不明である。9は、SP520より出土したほぼ完形に復元される土師質土器皿である。口縁部を上に据えられた状態で出土（図版13）していることから、地鎮



第31図 SK02 平・断面図、出土遺物実測図

のため据え置かれた可能性が考えられる。出土遺物より、16世紀後半～17世紀前半を中心とした時期に位置付けられる。

柱穴跡

第29図には、I区で検出された柱穴跡のうち、建物を構成しなかった柱穴跡より出土した遺物を掲載した。12は、SP593より出土したほぼ完形の土師質土器小皿である。底部を上に、やや斜めになって出土（図版13）しており、柱材に立てかけるように埋め置かれた可能性も考えられる。地鎮に伴う遺物の可能性が高い。16は、和泉型瓦器碗で、尾上III—2～3期に所属するものである。17は、SP318より出土した花崗岩製砥石で、破断面を含め強い被熱痕を認める。打ち割られて詰石として転用されたと考えられる。18は、SP460より出土した砂岩製台石である。19は、SP460より出土した砂岩製砥石で、破断面にも被熱痕を認める。詰石として転用されたものである。20は、SP138より出土したサヌカイト製楔形石器碎片で、摩滅痕より打斧の転用品であることがわかる。

土坑

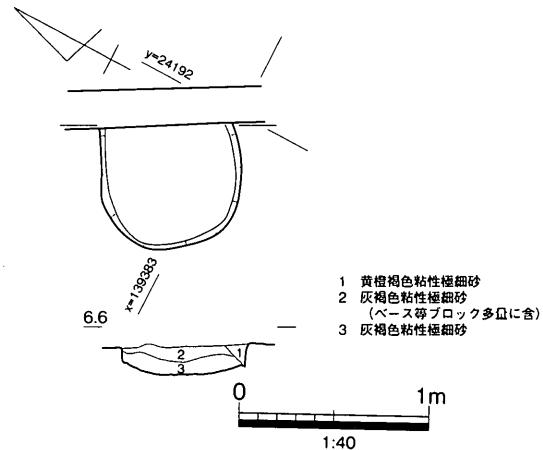
SK01（第30図）

Ia区北東隅部で検出。東半は調査区外へ延長するため、全形は不詳である。埋土は単層（1層）で、その特徴から、中世後半期に位置付けられると考えるが、遺物は出土しておらず、詳細な時期を特定することは困難である。

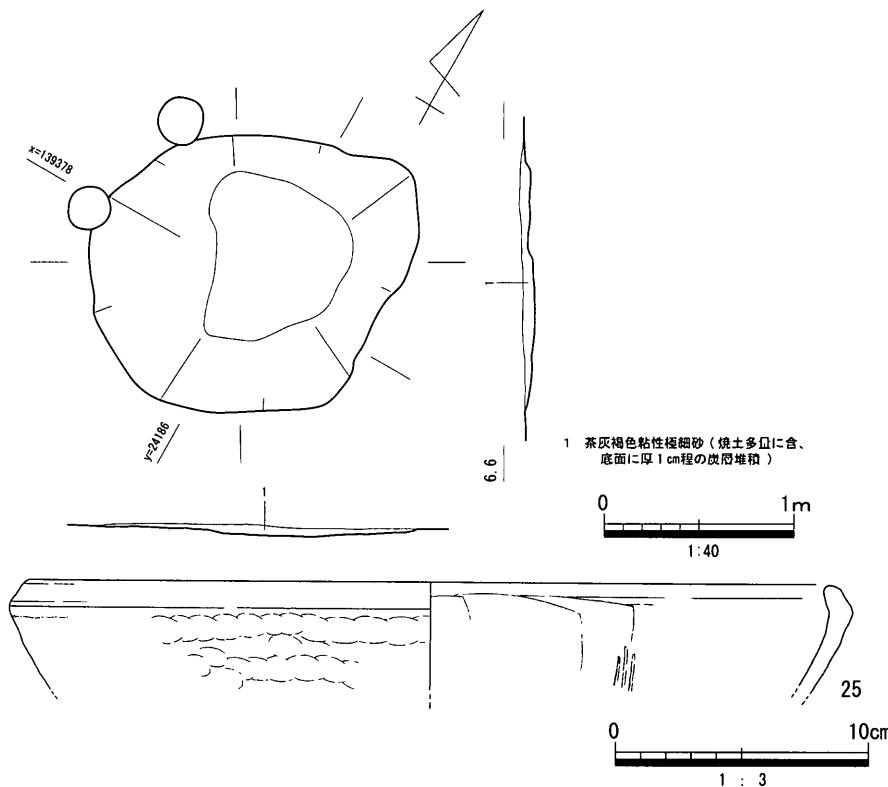
SK02（第31図）

Ia区北東部で検出。
平・断面プランは整った
矩形を呈し、埋土は2層
に細分された。下層（2
層）は均質な粘質土で、
土坑掘り方周縁及び底面
に堆積する。検出状況よ
り、箱状の木製容器が土
壌に置き換わった可能性
が考えられる。上層（1
層）は、ブロック土を多
量に含み、人為的な埋め
戻し土と考えられる。

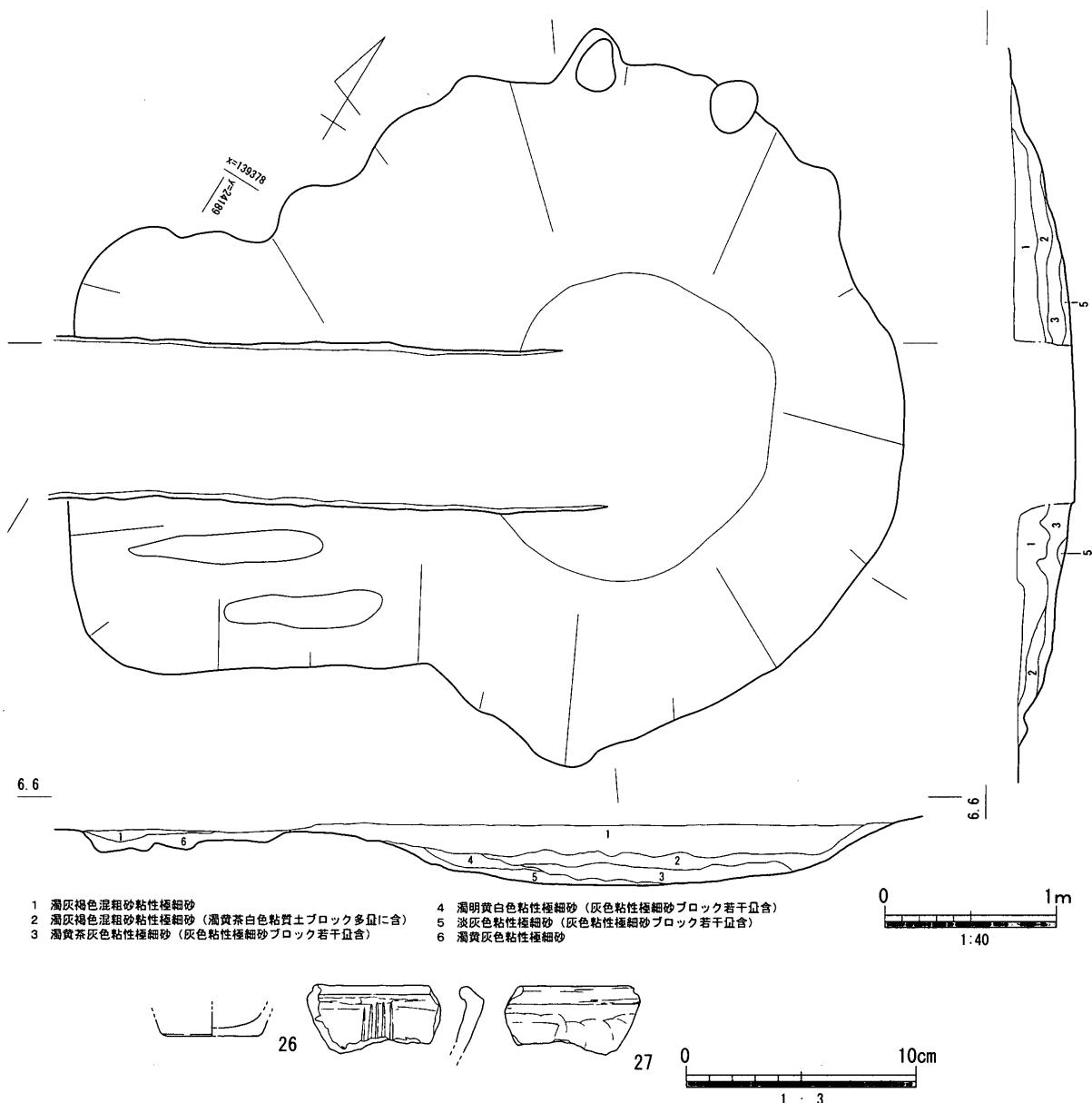
遺物は上層を中心に出
土した。大半の遺物は小
片化しており、土坑埋め
戻しに際し、廃棄したも
のと判断される。24は
砂岩製砥石で、図下端面
を中心に、黒化や剥離等
の強い被熱痕を認める。



第32図 SK05 平・断面図



第33図 SK08 平・断面図、出土遺物実測図



第34図 SK10 平・断面図、出土遺物実測図

出土遺物より16世紀後半～17世紀前半を中心とした時期に位置付けられる。

SK05(第32図)

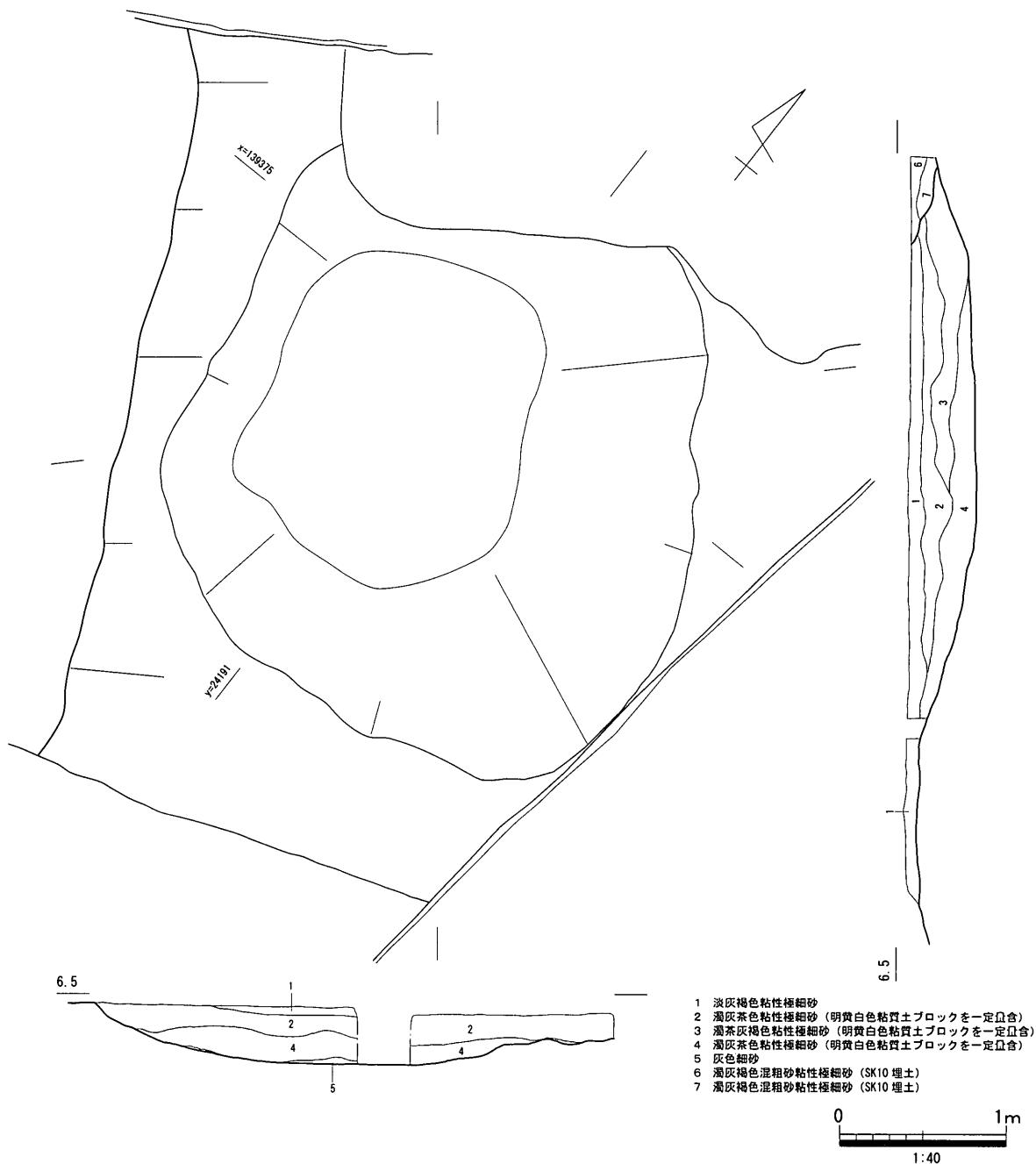
I a区東端で検出。東半は調査区外へ延長するため、全形は不詳である。埋土は3層に細分された。いずれもブロック土を多量に含み、人為的に埋め戻された土壤である。

遺物は、器種不詳の土師質土器と瓦質土器の小片が数点出土しているのみであり、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。

SK08(第33図)

I a区中央部で検出。掘立柱建物との重複が多く、柱穴跡との切り合い関係より、SB04・05・08より後出し、SB09より先行する。埋土は単層（1層）で、焼土粒を多量に含み、下底には層厚約1cmの炭層が堆積していた。土坑底面には被熱痕は認められず、これらの炭・焼土粒は遺構内へ投棄されたものと思われる。

遺物は、土師質土器片等が少量出土したのみで、詳細な時期決定の根拠に乏しいが、概ね16世紀後半～17世紀前半を中心とした時期に位置付けられる。

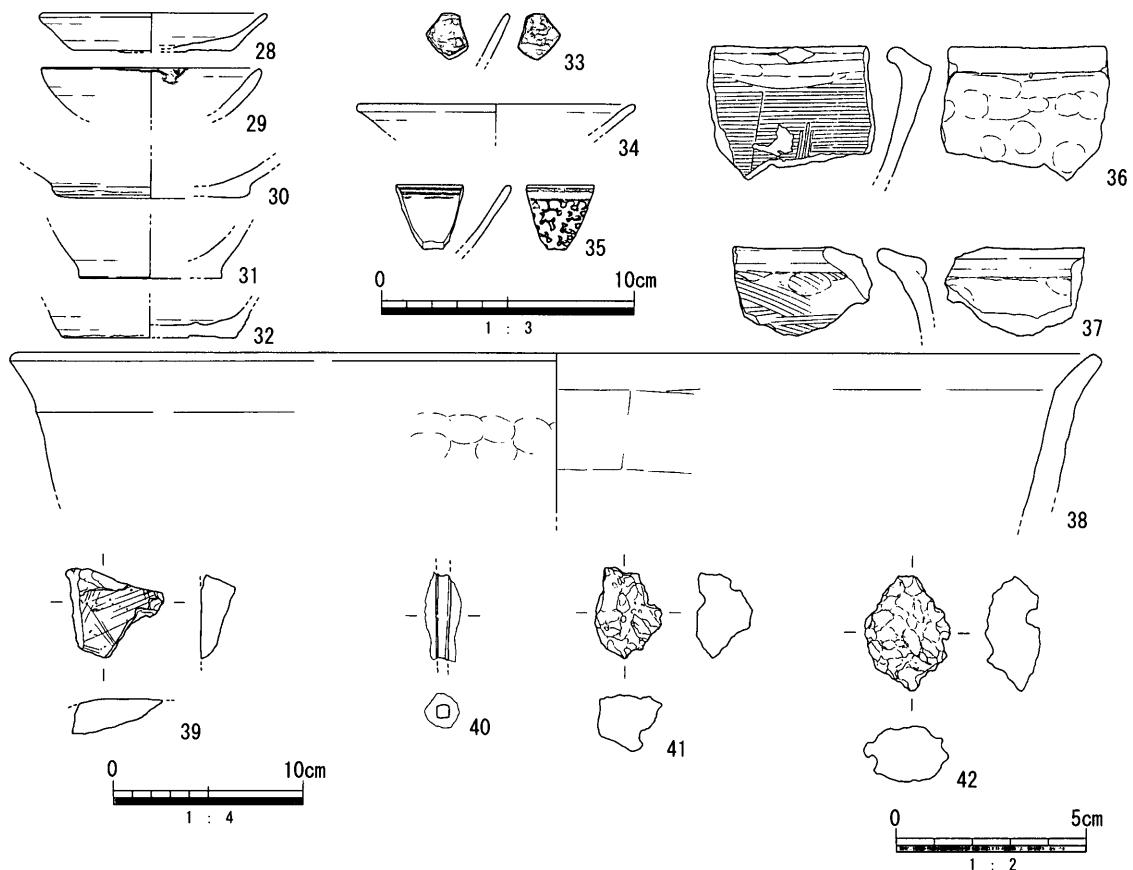


第35図 SK11 平・断面図

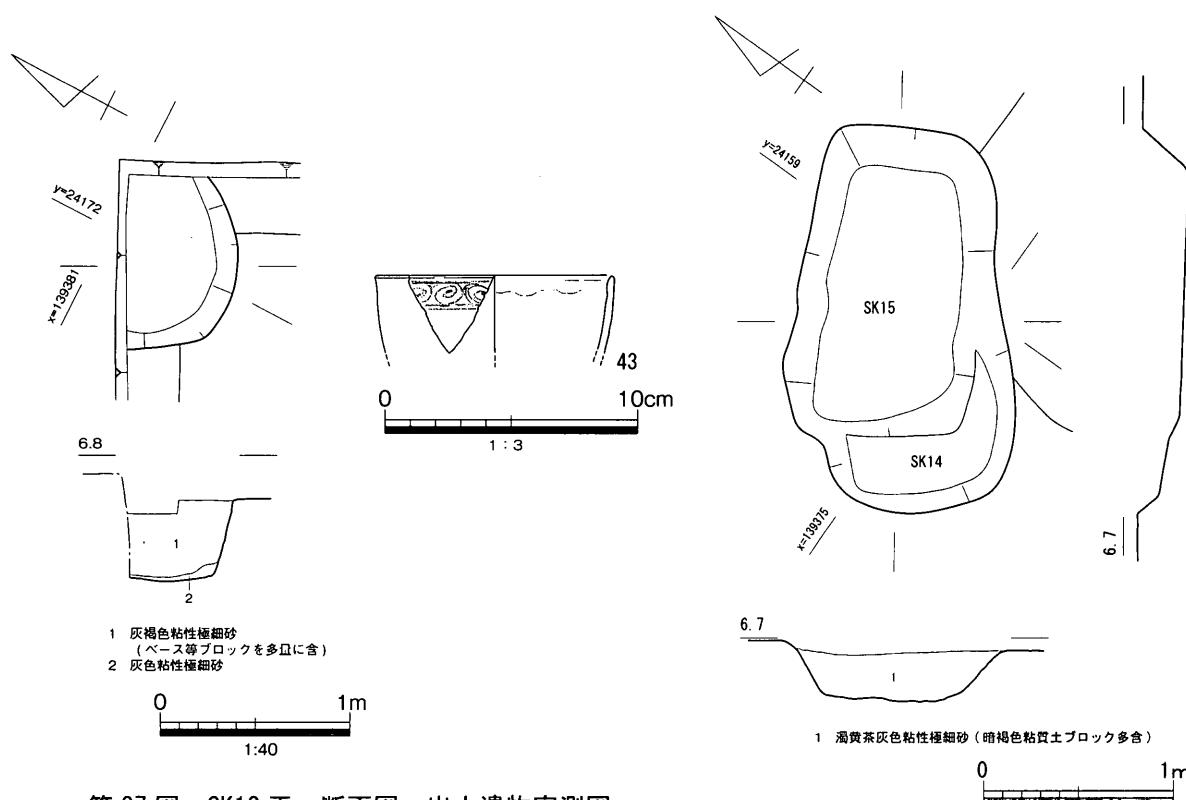
SK10（第34図）

I a 区南東部で検出。平面プランは不定形を呈するが、西部矩形状の張り出し部分は、土層断面の堆積状況からも別遺構となる可能性もあり、本来は隅丸方形を呈する大型の遺構であったと考えられる。SK11 とは、切り合い関係より後出する。埋土は、5層に細分された。上層（1層）は、遺構上面を覆う均質な土壤で、中層堆積後に生じた窪地を埋める自然堆積層の可能性が高い。中層（2～4層）は、ベース等のブロック土を多量に含み、人為的な埋め戻し土と考えられる。下層（5層）は、底面に薄く堆積した土壤で、ややグライ化して灰味を帯び、滯水下に堆積した可能性がある。埋土の状況より、土坑掘削後一定期間は開口した状態であり、その後人為的に埋め戻されたと考えられる。

遺物は、土師質土器を中心にコンテナ約 1/4 箱出土した。上・中層出土の遺物が主体を占めることと、いずれも小片化していることから、埋め戻しに際し、投棄されたものと考えられる。出土遺物から詳細な時期を特

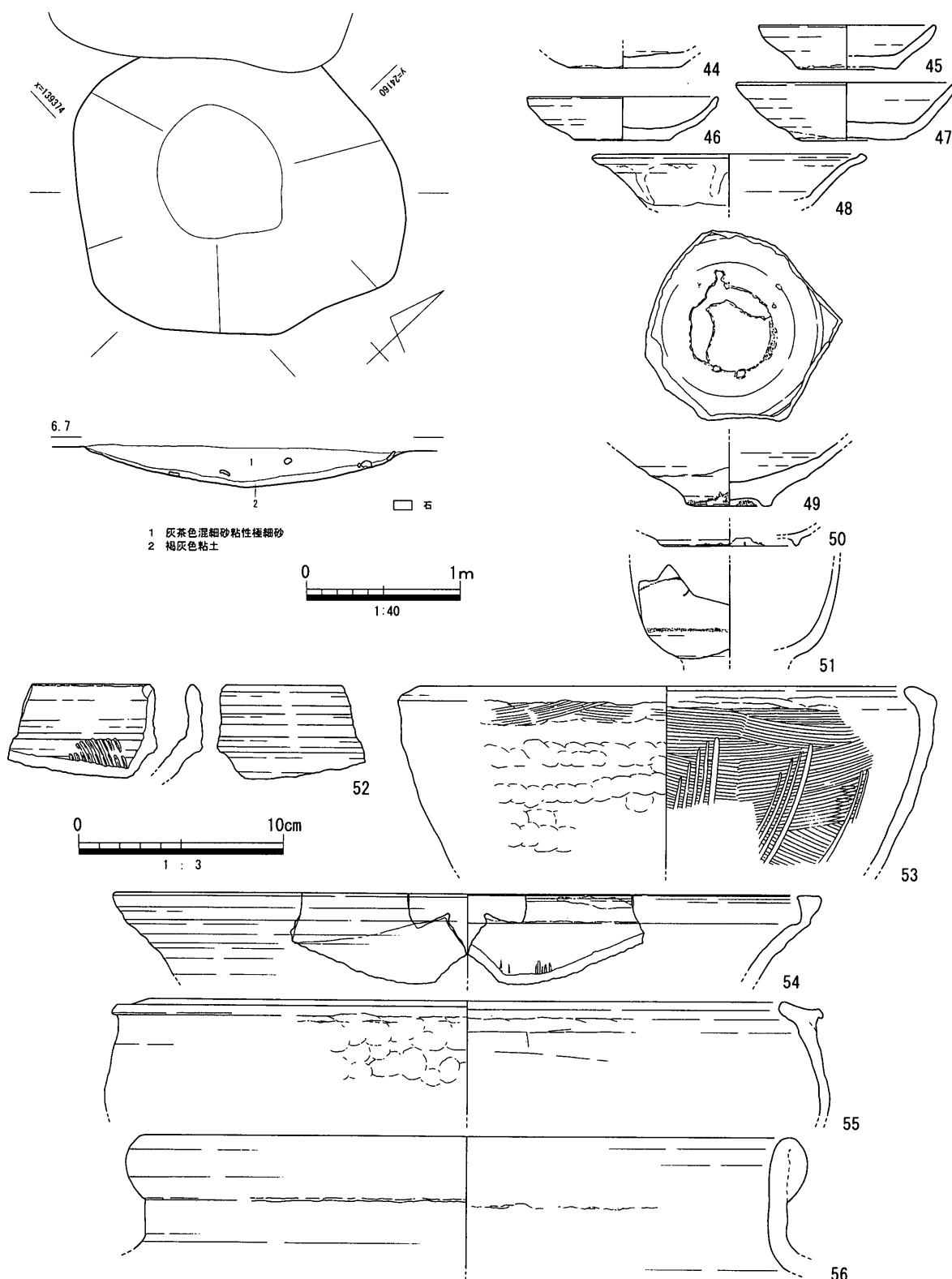


第36図 SK11出土遺物実測図



第37図 SK12平・断面図、出土遺物実測図

第38図 SK14・15平・断面図

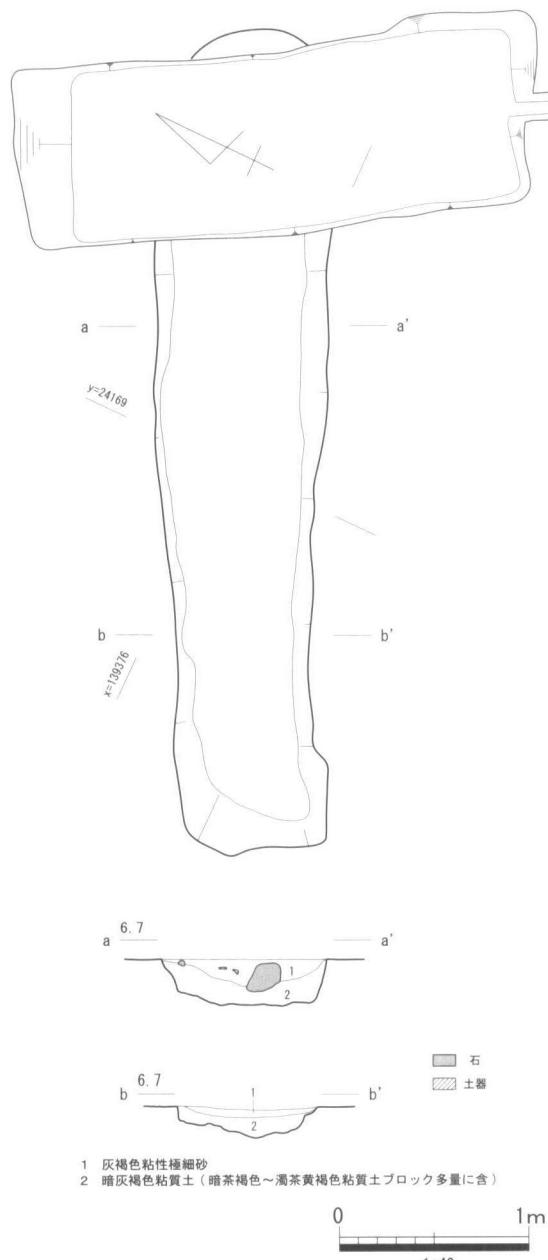


第39図 SK16平・断面図、出土遺物実測図

定する根拠に乏しいが、概ね17世紀前半を下限とした時期に位置付けられる。

SK11(第35・36図)

I a 区南東部、SK10の南で検出。SK10と形状や埋土等に共通する内容を有する遺構で、近接した位置関係にあることからも、近似した性格を持つ遺構と考えられる。本遺構も、平面プランは安定しないが、遺構上面



第40図 SK17平・断面図

考えられる。

遺物は主に上層より出土しているが、遺物量は少なく土器小片が主体を占める。43は肥前系磁器碗で、大橋Ⅱ期後半に所属する。この遺物を下限として、17世紀中頃を前後する時期に位置付けられる。

SK14・15(第38図)

I b区北西隅部で検出。調査時に遺構の重複に気付かず掘り下げたため、一部の遺物については、確実な所属遺構が不詳となったものもある。土層の堆積状況より、SK14が先行し、SK14埋め戻し後にやや東に寄つてSK15が掘削されたとみられる。

SK14は、調査時の所見から埋土は単層で、多量のブロック土を含むことから、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。遺物は、土師質土器足釜、備前焼、焼土塊等が少量出土したが、一部はSK15に伴う可能性がある。

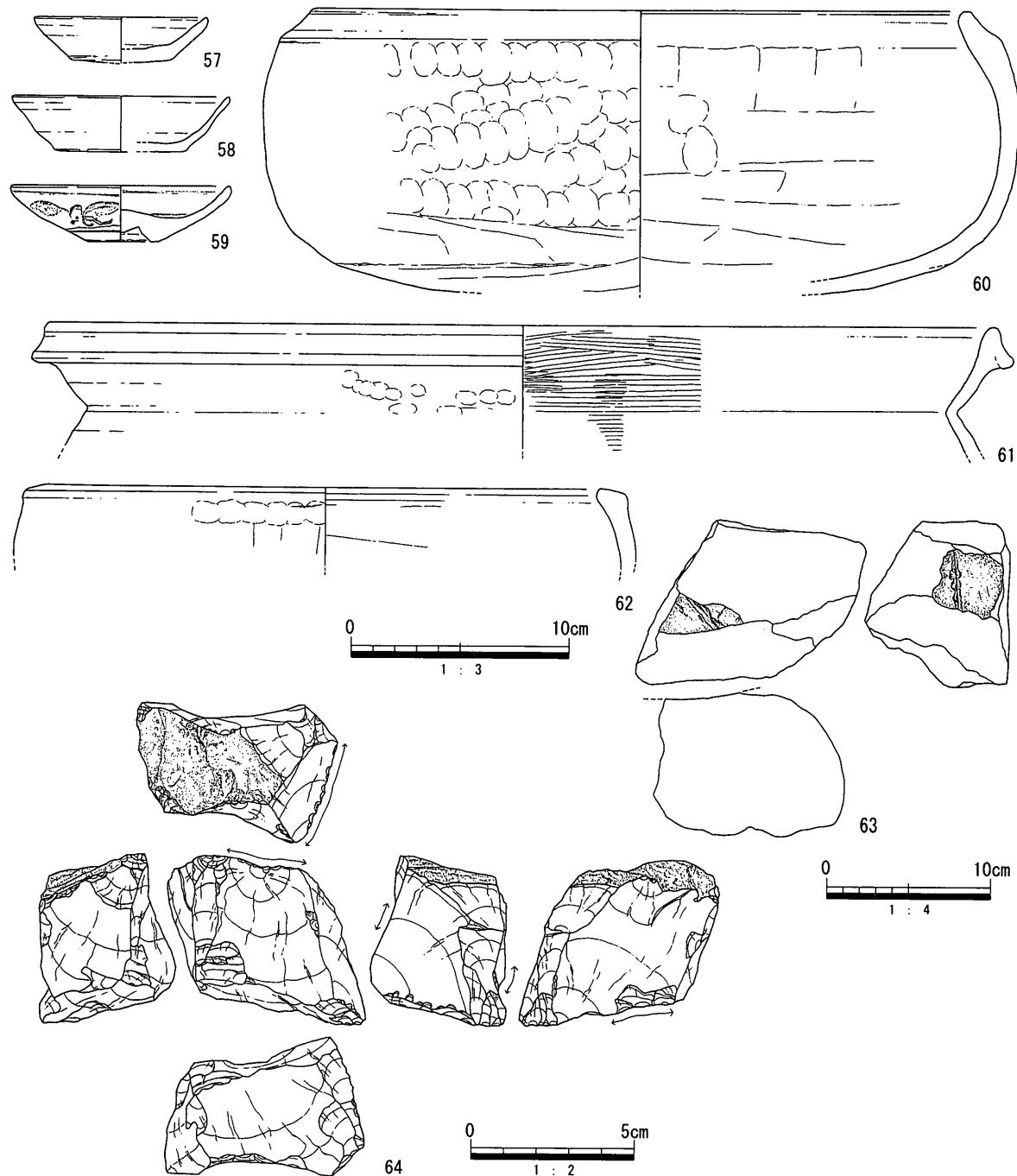
SK15は、SK14との重複部分で掘り方上面プランを失したが、ほぼ全形は判断できる。埋土はSK14と同様に、

の包含層状の堆積層（上層・1層）を除去すると、遺構本来の平面プランと考えられる南北長3.2m程度の平面隅丸長方形の掘り方が確認された。切り合関係より、SK10・SD06より先行し、SD03～05より後出する。埋土は4層に細分された。中層（2～3層）は、ベース等のブロック土を一定量含み、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。下層（5層）は、遺構底面に薄く堆積した細砂層で、遺構掘削後一定期間は開口した状態であった可能性を示唆する。上層は上述したように、埋め戻し後に生じた窪地に自然堆積した土壤であろう。

遺物は、土師質土器を中心に土器類のみでコンテナ約1箱出土した。上・中層から出土した遺物が過半を占めることと、いずれも小片化していることから、遺構廃絶時に投棄されたものと考えられる。33は藤澤後期3～4の古瀬戸碗である。35は、中国景德鎮窯系青花碗で、小野染付碗C群II類である。39は安山岩製砥石で、被熱後細かく打ち砕かれている。41・42は鉄滓である。これら出土遺物より、16世紀末～17世紀前半を中心とした時期に位置付けられ、SK10よりはわずかに先行すると考える。

SK12(第37図)

I b区北東隅部で検出。北・東半は調査区外へ延長するため、全形は不詳である。埋土は2層に細分された。上層（1層）は、土坑の大半を埋める土層で、ブロック土を多量に含み、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。下層（2層）は、ややグライ化した土壤で、滯水下堆積の可能性が考えられる。埋土の状況より、本土坑は廃絶後一定期間放置され、その後人為的に埋め戻されたと

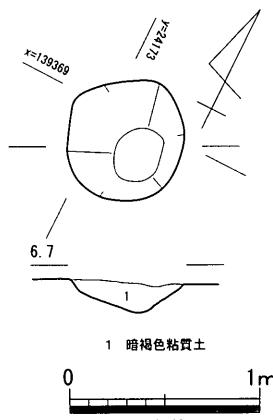


第41図 SK17出土遺物実測図

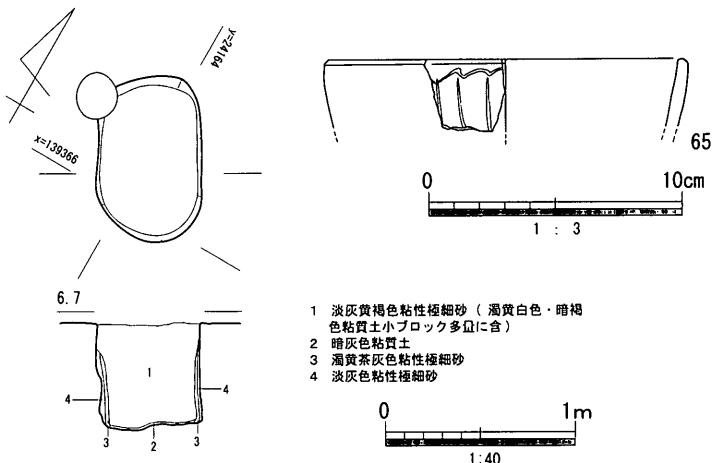
人為的に埋め戻された可能性が考えられる。遺物は、土師質土器小皿・擂鉢・土鍋等が出土している。両土坑は、埋土や遺物の内容が近似することから、近接した時期に相前後して掘削されたと考えられる。両土坑とも出土遺物が乏しく、明確な時期決定の根拠に乏しいが、SK16より後出することと、出土遺物、埋土の特徴等から、18世紀代に位置付けられる。

SK16(第39図)

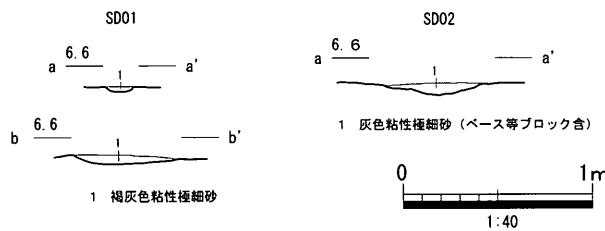
I b区北西隅部で検出し、切り合い関係よりSK14より先行する。埋土は2層に細分された。上層(1層)はブロック土を一定量含み、人為的に埋め戻された可能性が、下層(2層)はややグライ化した粘土層で、滞水下堆積の可能性がそれぞれ考えられる。遺構掘削後一定期間オープンな状態で放置ないしは使用され、その



第42図 SK18 平・断面図



第43図 SK21 平・断面図、出土遺物実測図



第44図 SD01・SD02 土層断面図

後埋め戻されたと考えられる。

遺物は上層を中心に、土器類のみでコンテナ約1箱出土している。44・46・47は土師質土器皿で、いずれも外面を中心に煤が付着する。48・49は、肥前系陶器皿で、いずれも大橋II期前半に所属する。50は中国景德鎮窯系白磁皿で、森田皿E—2の可能性が高い。51は肥前系磁器碗で、接合はしないが、

II a区 SD09より出土した439と、文様や磁胎が近似しており、同一個体の可能性がある。大橋II期前半に所属するものである。52は備前焼擂鉢で、乗岡中世6期に所属する。54は肥前系施釉陶器擂鉢で、大橋II期に所属する。県下での類例に乏しく、農村部での出土は現状では本例のみである。56は備前焼甕で、乗岡中世4～5期に所属する。出土遺物より、17世紀中頃を中心とした時期に位置付けられる。

SK17(第41図)

I b区北東部で検出。一部近・現代の搅乱を被るが、概ね全形を確認できた。平面プランはやや細長く、底面にはわずかな起伏が認められ、遺構の機能を反映した形状を呈していると考えられるが、その性格については特定できなかった。埋土は2層に細分され、下層（2層）はブロック土を多量に含み、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。土坑機能時の堆積層が確認されなかったことから、掘削後短期間のうちに埋め戻されたものと考えられる。上層（同図1層）は、下層埋め戻し後に生じた、浅い窪地を埋める自然堆積層と考えられる。

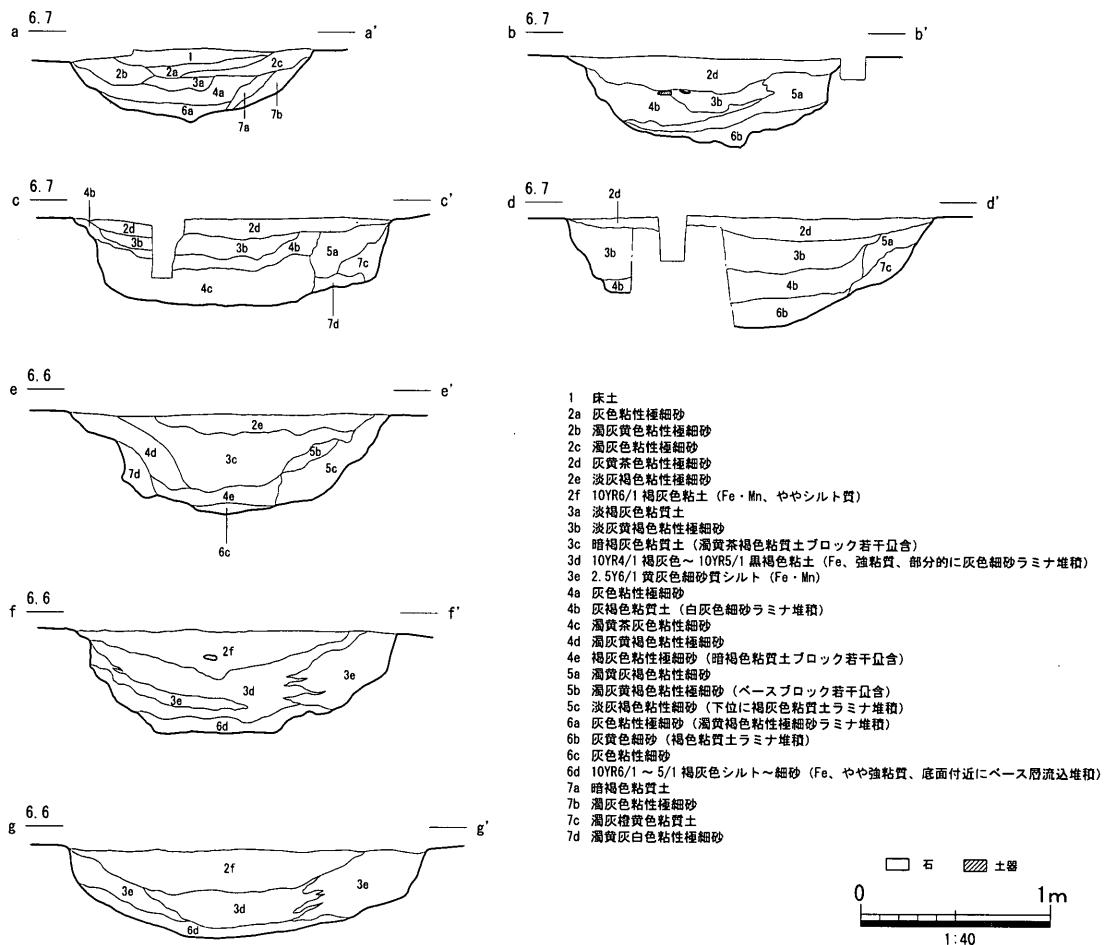
遺物は下層を中心に、土器類のみでコンテナ約1箱出土した。59は中国漳州窯系青花皿で、小野染付皿C群である。焼成は不十分で、磁胎は陶器質を呈する。63は、砂岩製砥石で、使用後に打ち割られており、破断面にも被熱痕を認める。64はサヌカイト製火打ち石。これら出土遺物より、16世紀末～17世紀前半を中心とした時期に位置付けられる。

SK18(第42図)

I b区南東部で検出。埋土は単層（1層）である。埋土の特徴から、中世後半期に位置付けられると考えるが、遺物は出土しておらず、詳細な時期を特定することは困難である。

SK21(第43図)

I b区西部で検出。SB20の建物内に位置し、主軸方向は概ね一致することから、SB20の屋内貯蔵穴の可能性も考えられる。埋土は4層に細分された。上層（1層）は、土坑の大半を埋める埋土で、ブロック土を多量に含み、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。中層（2・3層）は、土坑底面と周壁に沿って薄く堆積



第45図 SD03 土層断面図

した粘質土で、検出状況より箱型の木製容器が土壤に置き換わった可能性が考えられる。したがって下層（同図4層）は、木製容器の据え付け時に置かれた裏込め土と判断される。

遺物は上層より少量出土しているのみで、明確な時期決定の根拠に乏しい。65は龍泉窯系青磁碗で、上田B-I~IV類である。出土遺物や周辺の遺構の内容を踏まえると、16世紀末～17世紀前半を中心とした時期に位置付けられる。

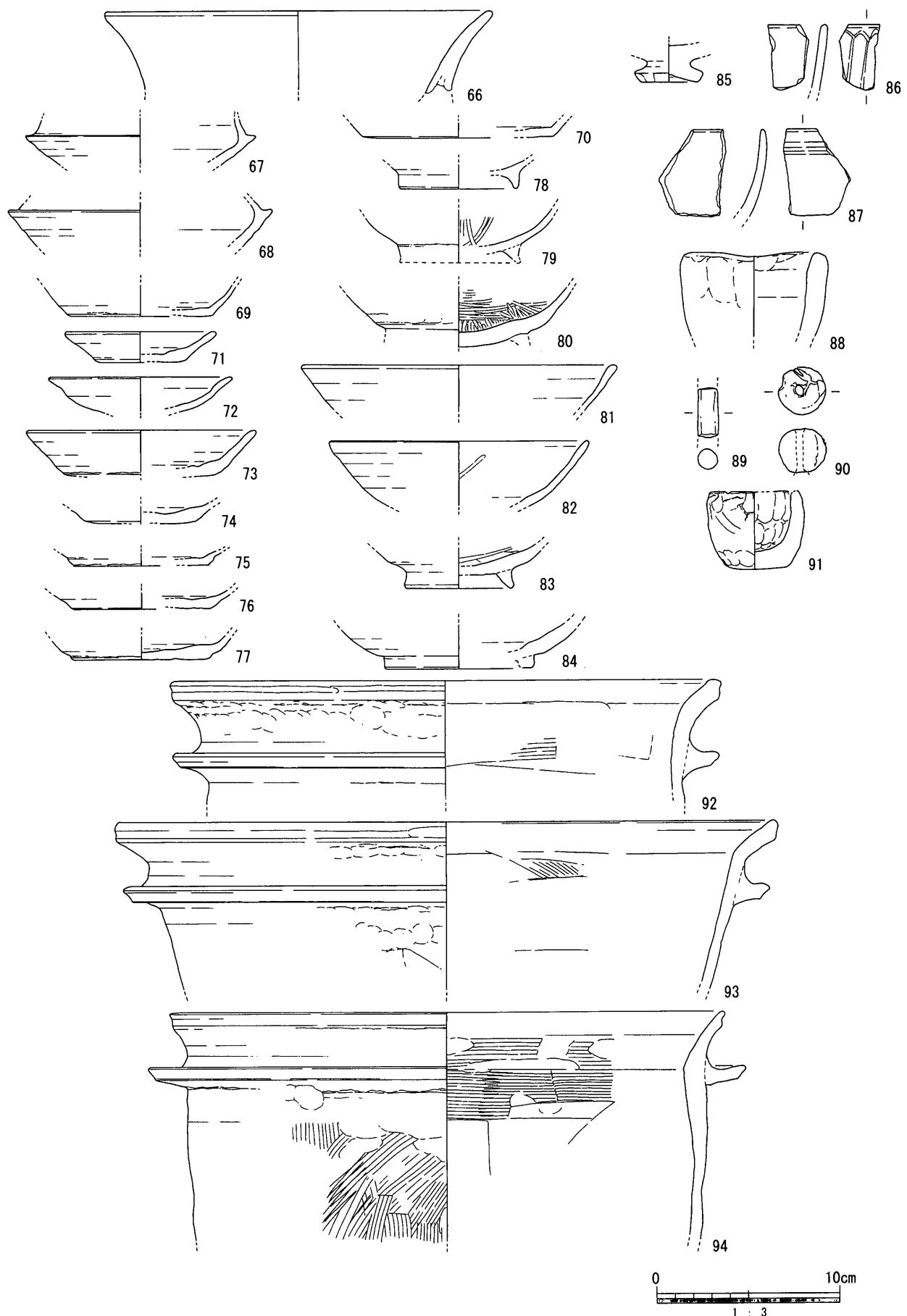
溝状遺構

SD01（第44図）

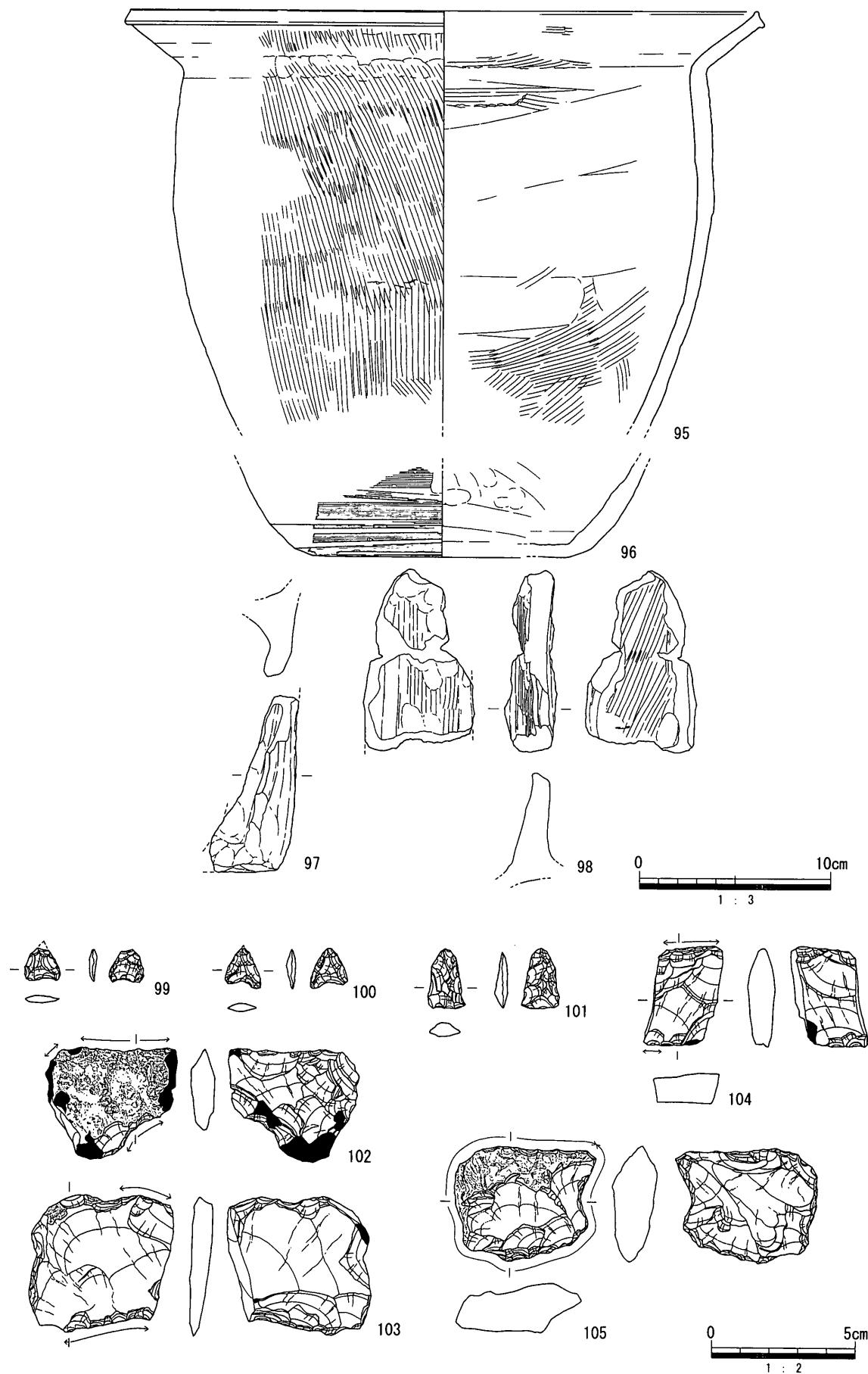
I a区北東隅で検出。一部途切れるものの平面L字状に配され、北・東端は調査区外へ延長する。東西溝状遺構は、延長2.85m、南北溝状遺構は、延長3.20mを検出。各遺構の流路方向は、東西溝N 64.555°E、南北溝N 46.355°Wと、直交はしない。底面最深部の標高は6.41～6.46mにあり、わずかな高低差を評価すれば、北へ流下すると考えられる。溝幅は、東西溝0.17～0.22m、南北溝0.41～0.57mと、南北溝がやや広い。残存深は0.03～0.05mで、断面形は概ね皿状を呈する。埋土は単層（1層）で、一定量のブロック土を含み、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は出土しておらず、詳細な時期決定の根拠を欠く。埋土の特徴等から、中世後半期には位置付けられる。建物の雨落ち溝もしくは屋敷地内を区分する小区画溝の可能性が考えられるが、検出範囲が狭小なため判断できなかった。

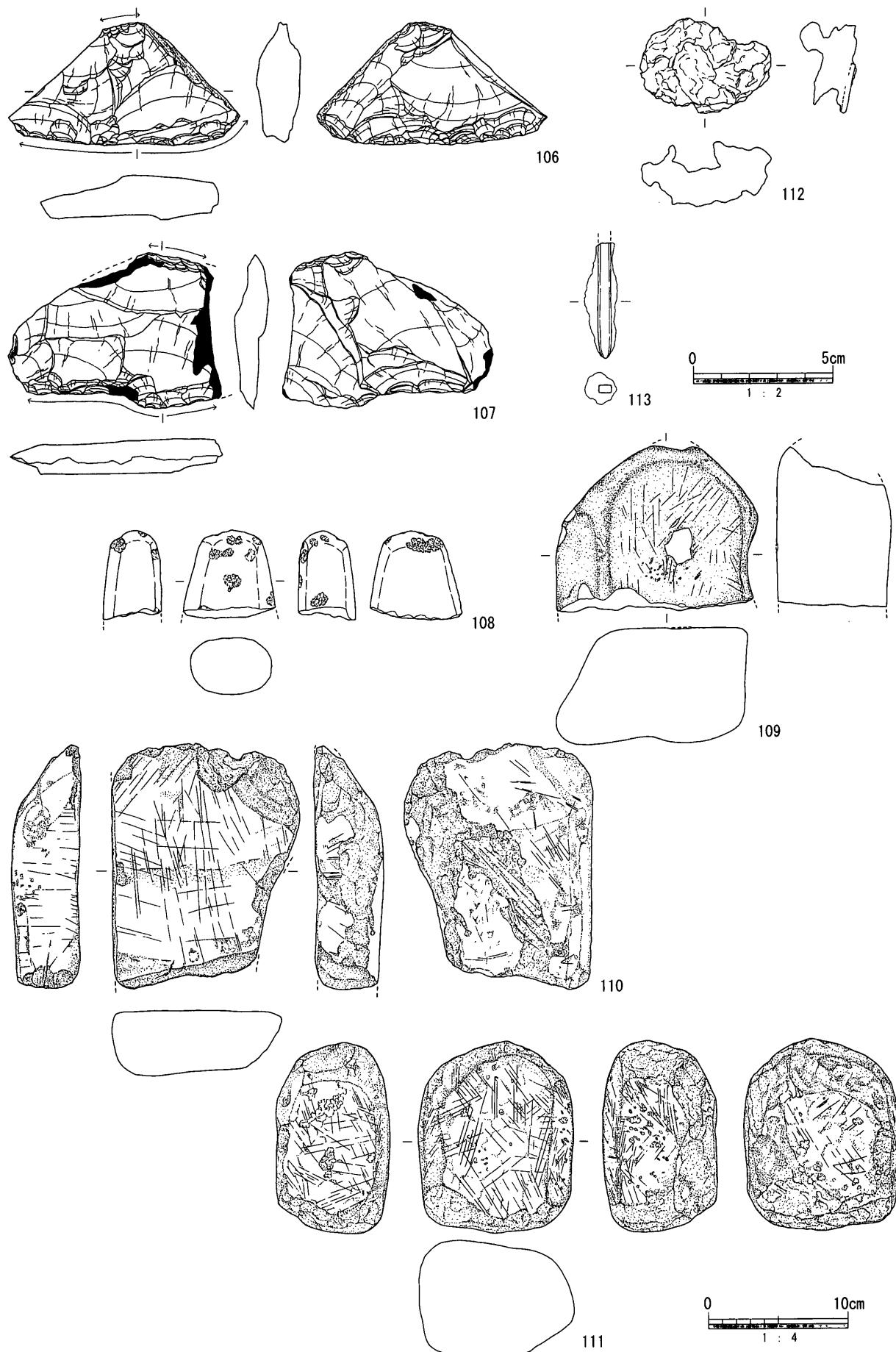
SD02（第44図）



第46図 SD03出土遺物実測図1



第47図 SD03出土遺物実測図2



第48図 SD03出土遺物実測図3

I a 区東部で検出。逆 L 字状に配された小溝で、西端は調査区内で途切れ、南端は SK10 に切られる。総延長約 4.1 m を確認した。切り合い関係より SB03 より後出し、SK10 より先行する。南北溝の流路方向 N 37.238°W、底面の標高は 6.37 ~ 6.50 m あり、高低差から南へ流下するとみられる。溝幅は 0.27 ~ 0.66 m、残存深 0.12 m 前後、断面形は皿状を呈する。埋土は単層（1 層）で、ベース等のブロック土を含み、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は、器種不詳の土師質土器片が 1 点出土したのみであり、詳細な時期決定の根拠を欠く。遺構の切り合い関係より、17 世紀前半を下限とする。

SD03（第 45 ~ 48 図）

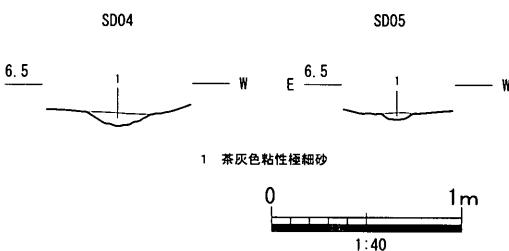
I 区から II 区南端を東西走する大型幹線水路である。東・西両端は調査区外へ延長し、約 88.9 m を確認した。I 区については流路内をほぼ完掘したが、II 区については、トレンチによる調査に留めた。わずかな蛇行を取り捨すれば、概ね流路方向 N 59.821°E に配された直線溝である。丸龜平野条里型地割の坪界ラインと概ね合致して開削されており、調査区周辺での現状地割の施行の開始時期を特定する資料となる。溝は、幅 1.26 ~ 1.98 m、残存深 0.36 ~ 0.57 m、最深部底面の標高は東端部で 6.18 m 前後、西端部で 5.92 m 前後を測り、高低差より西流していたと考えられる。

埋土は、各土層観察位置でそれぞれ 4 ~ 8 層に細分された。各層の対応関係を直接確認することはできなかつたが、後述する中層を鍵層として、上～下の 3 層に大別する。上層（2 層群）は、溝上面を覆う堆積層で、溝機能停止後の窪地を埋める自然堆積層と考えられる。中層（3・4 層群）は、細砂～粘土のラミナ堆積を伴う溝機能時の堆積層と考えられ、c ~ e 断面を中心に明瞭な改修の痕跡が窺える。下層（5 ~ 7 層群）は、中層に切られ溝肩部にかろうじて残存した土層及び底面に薄く堆積した細砂を中心とした溝機能時の堆積層を一括する。検出範囲での溝埋没時期の上限を示す堆積層である。

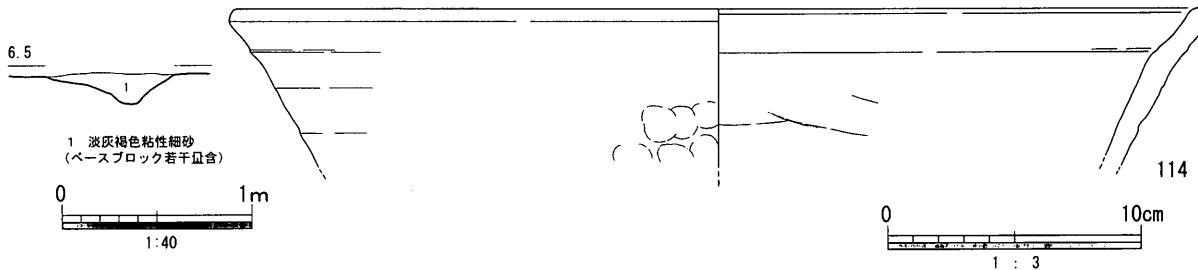
遺物の出土量は、溝の規模に比するとやや乏しい印象を受ける。以下、既述の層位ごとに見ていくこととする。86 は、龍泉窯系青磁碗で、上田 B - IV 類に所属する。87 は、肥前系陶器碗で、大橋 I 期に所属する。102・105 は、サヌカイト製火打石で、113 は、鉄釘である。これらの遺物は、SK11 との重複部より出土した遺物で、本来は SK11 の遺物であった可能性が高い。明代の中国龍泉窯系青磁高脚杯（85）も、溝上面より出土しており、本来は旧耕土層等の遺物と考えられる。その他の上層から出土している遺物には、調査時に確認できなかつた柱穴跡からの遺物が混在している可能性も考えられる。上層からは、土器類のみでコンテナ 1/2 箱と、各層位の中で出土量は最も多い。溝機能停止後、生活残滓の廃棄場所として使用された可能性が考えられる。90 は土玉で、出土時に一部欠損した。中層出土のミニチュア土器 91 とともに、何らかの祭祀に使用された可能性が考えられる。109 ~ 111 は砂岩製砥石である。109・111 は破断面を含め、やや顕著な被熱痕を認め、110 の右端図には、台石として使用された敲打痕が顕著に認められる。上層より出土した遺物より、11 世紀中頃を前後する時期には埋没が一定度進行していたとみられる。中層出土の遺物も、上層出土の遺物と大きな時期差は認められない。土器類のみでコンテナ 1/4 箱と遺物量は乏しく、遺構の性格を反映しているとみられる。下層から出土した遺物には、弥生土器や須恵器（67・68）、サヌカイト製石器類（99 ~ 101・103・104・106）、磨製石斧（108）等、弥生～古墳時代に遡る遺物が含まれ、周辺で当該時期の遺跡が存在した可能性が窺える。それ以外の時期の遺物となると、出土量は極めて乏しい。いずれも細片化しており、明確な時期決定の根拠とするにはやや躊躇されるが、遅くとも 9 世紀代には開削・機能していた可能性を指摘することができる。

なお、本遺構中層の土壤について花粉分析を実施した。分析結果の詳細は後掲するが、イネ科の花粉が高率で確認される等の点から、周辺に水田の存在が推定されている。本遺構の性格を示唆する分析結果と考える。

SD04（第 49 図）



第 49 図 SD04 · 05 土層断面図



第 50 図 SD06 土層断面図、出土遺物実測図

I a 区南東隅で検出した南北走する直線溝。既述した SK11 上層を掘り下げて検出した。北端は SK11 に、南端は SD06 に切られ、延長 1.35 m を確認したに留まる。流路方向 N 22.92°W、幅 0.40 m 前後、残存深 0.06 m 前後、断面形は皿状を呈する。底面最深部の標高は 6.28 m 前後で一定し、流下方向は不明。埋土は单層（1 層）で、溝機能停止後の自然堆積層とみられる。

遺物は土師質土器碗等の小片が数点出土したのみであり、詳細な時期決定の根拠を欠く。SK11 との重複関係より、16 世紀末頃を下限とする。

SD05（第 49 図）

I a 区南東隅で検出した南北走する直線溝。SD04 同様に SK11 上層を掘り下げて検出した。北端は SK11 に、南端は SD06 に切られ、延長 0.86 m を確認したに留まる。流路方向 N 15.424°W、幅 0.15 ~ 0.29 m、残存深 0.04 m 前後、断面形は皿状を呈する。底面最深部の標高は 6.32 m 前後で一定し、流下方向は不明。埋土は单層（1 層）で、溝機能停止後の自然堆積層とみられる。

遺物は出土しておらず、明確な時期決定の根拠を欠く。本遺構も SK11・SD06 との重複関係より、16 世紀末を下限としよう。

SD06（第 50 図）

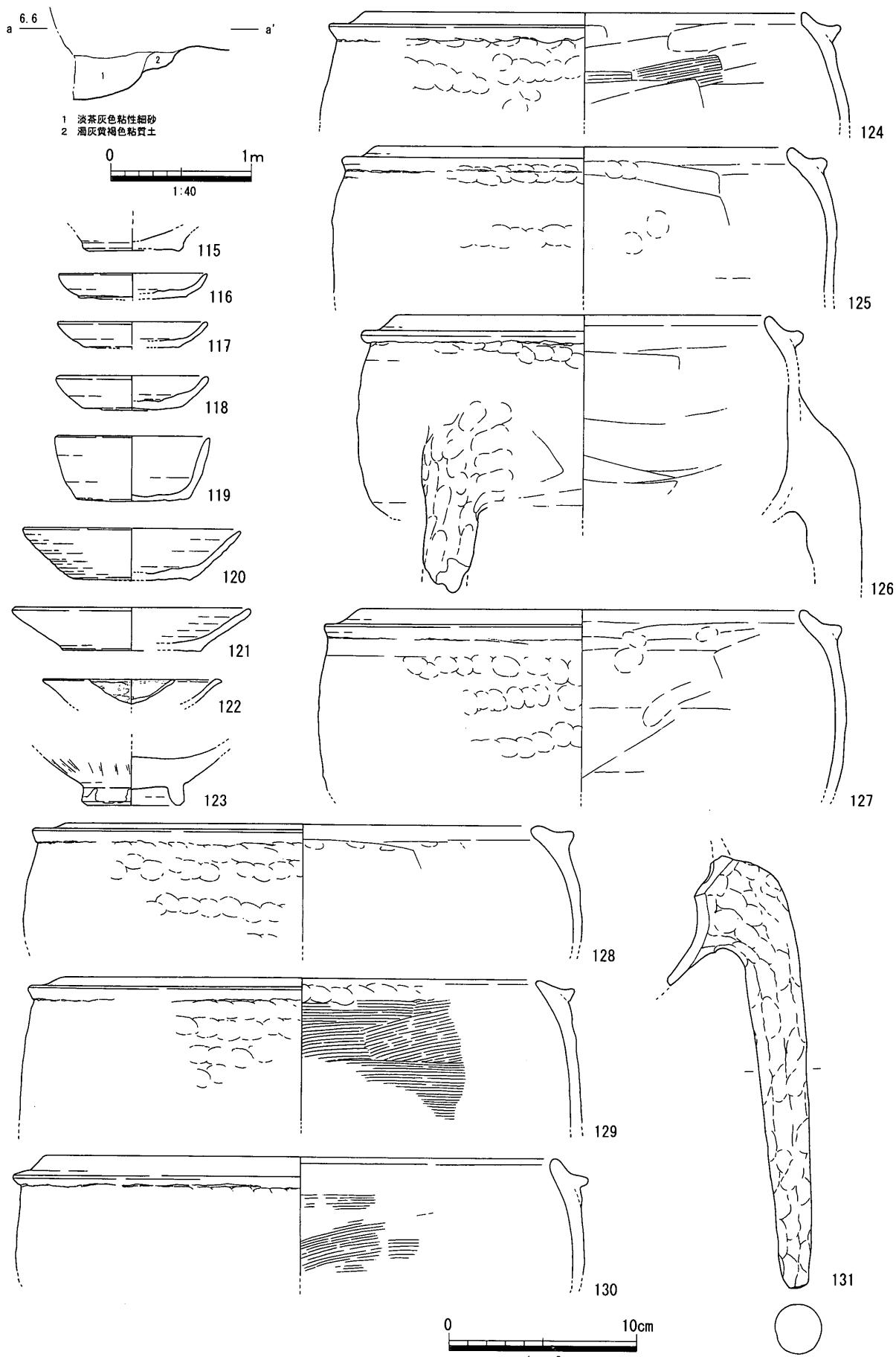
I a 区南部で検出した東西走する直線溝。東西両端は調査区外へ延長し、約 6.2 m を確認した。東半部流路方向 N 75.517°E、西半部 N 64.73°E と、調査区内でわずかに屈曲して流路方向を変える。幅 0.28 ~ 0.86 m、残存深 0.07 ~ 0.17 m、断面形は皿状を呈する。底面最深部の標高は、西端で 6.39 m 前後、東端で 6.23 m 前後を測り、高低差より東へ流下するとみられる。埋土は单層（1 層）で、溝機能停止後の自然堆積層とみられる。

遺物は、図示した以外に、土師質土器小皿・擂鉢・足釜、亀山焼、肥前系白磁皿、焼土塊、鉄滓、サヌカイト剥片等が、土器類のみでコンテナ 1/4 箱出土した。土器類はいずれも小片化していることから、遺構廃棄時に投棄されたものと考えられる。出土した遺物より、17 世紀中頃を中心とした時期に位置付けられる。

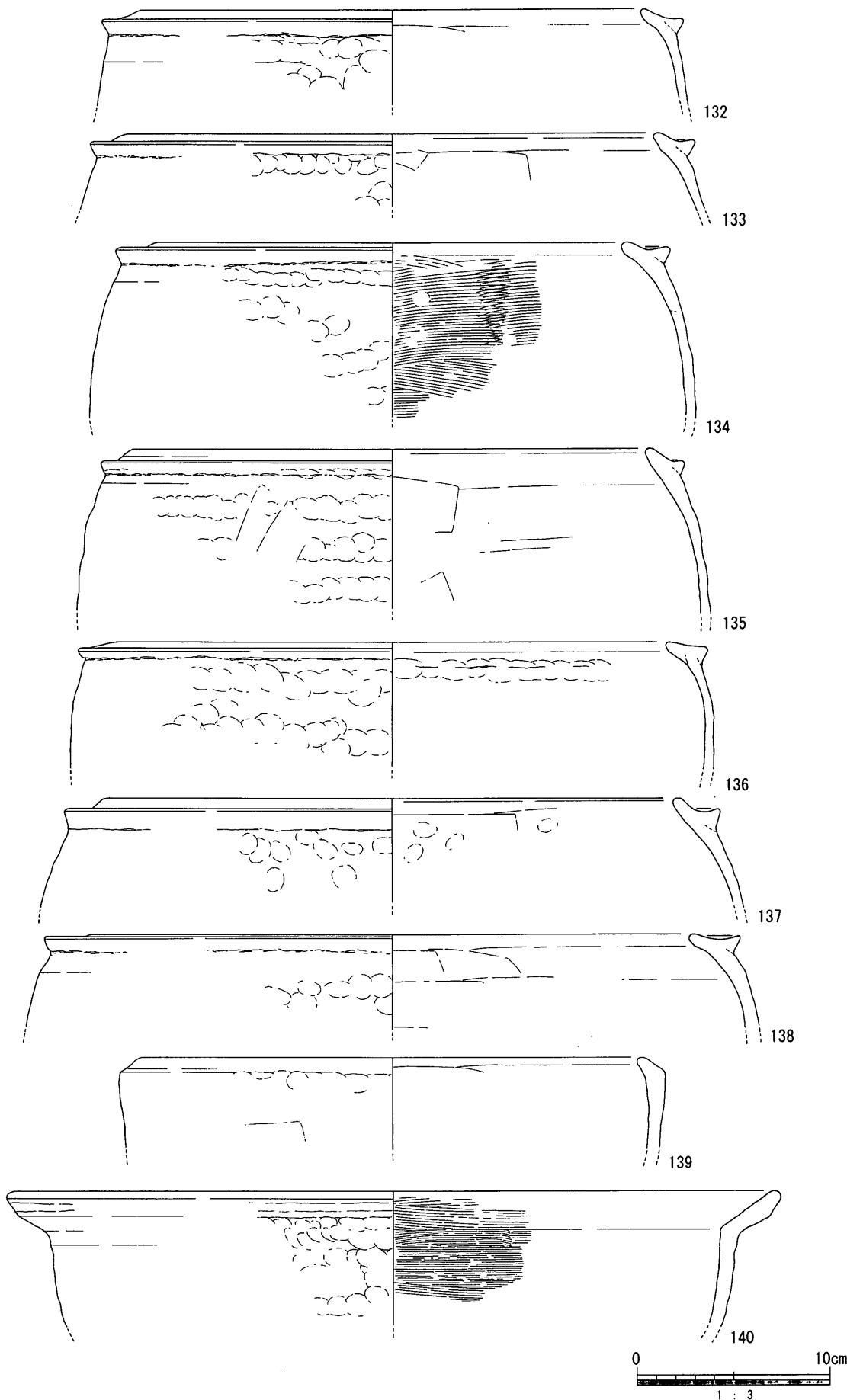
SD07（第 51 ~ 59 図）

I a 区南端で検出。遺構の北肩部を検出したのみで、全形については不詳である。調査時の所見から東西走する溝状遺構として報告する。調査区中央部付近で緩やかに張り出し、この部分で最大幅 1 m 以上を測る。底面最深部の標高 5.63 m 前後、残存深 0.83 m と深く、断面形は概ね逆台形状を呈するとみられる。埋土は、土層断面の観察を行った調査区西壁際で 2 層（1・2 層）に細分され、調査区中央部付近ではさらに数層に細分可能であった。

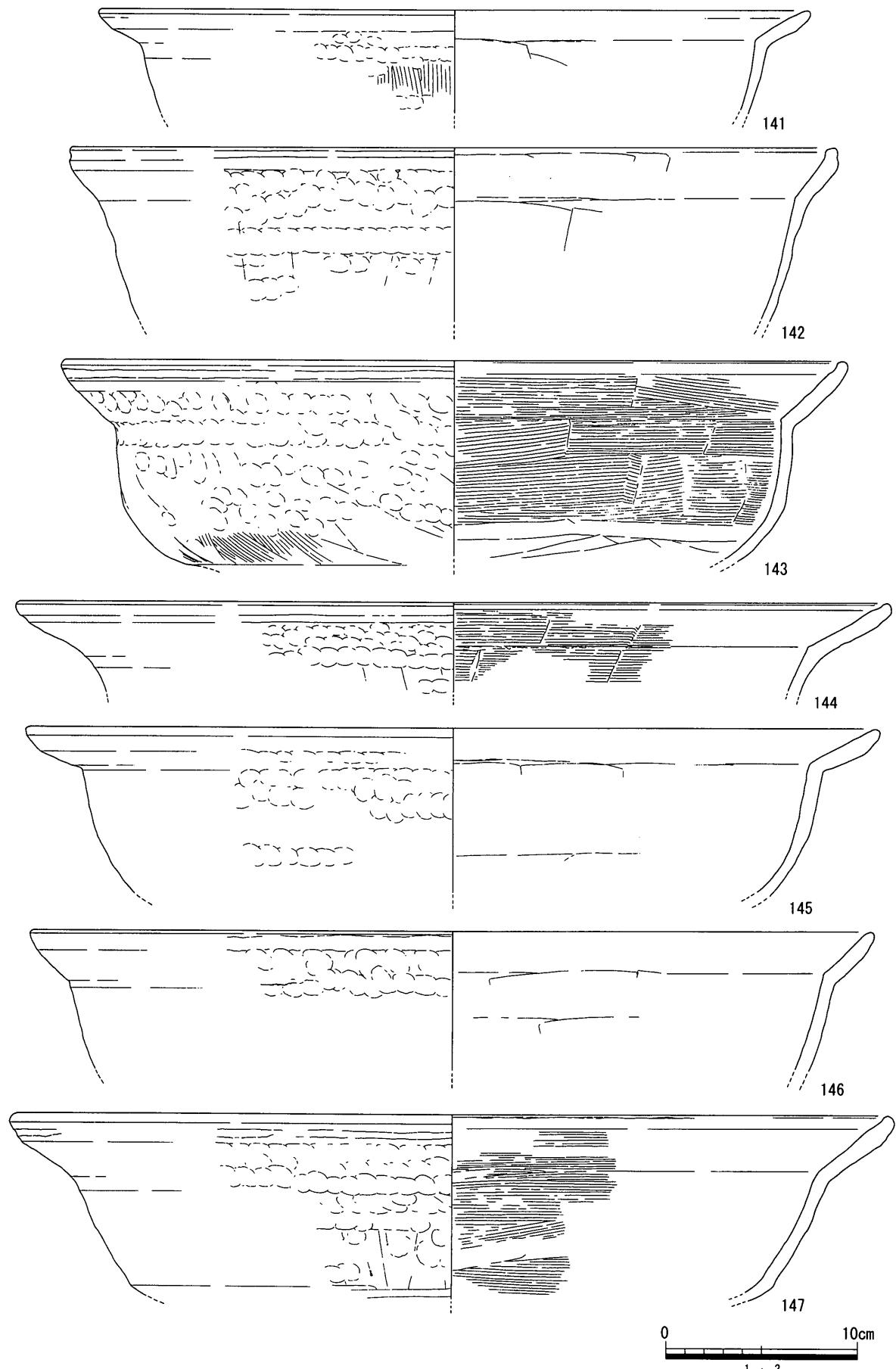
遺物は、遺構上面に堆積した粘質土以下より、多数の土師質土器を中心とした土器類や石製品等が折り重なるように出土した。遺物には図示した以外に、弥生土器、須恵器、土師質土器碗、東播系須恵器捏鉢、備前焼甕、中国漳州窯系白磁皿（森田皿 E-2）、同青花碗、サヌカイト製剥片、結晶片岩礫等があり、土器類のみでコンテナ 3 箱出土している。遺物は、北側より投棄された出土状況を示し、また土器類はいずれも小片化し、鍋や足釜類は外面に煤が付着する等使用された痕跡が窺え、石製品も破損したものが多く、焼けた礫や焼土塊、炭化物等も出土していることから、火災後の片付けに際し、投棄された可能性も考えられる。底面付近より出土した遺物と、上面付近より出土した遺物に顕著な時期差は認められず、比較的短期間に埋め戻されたことがわ



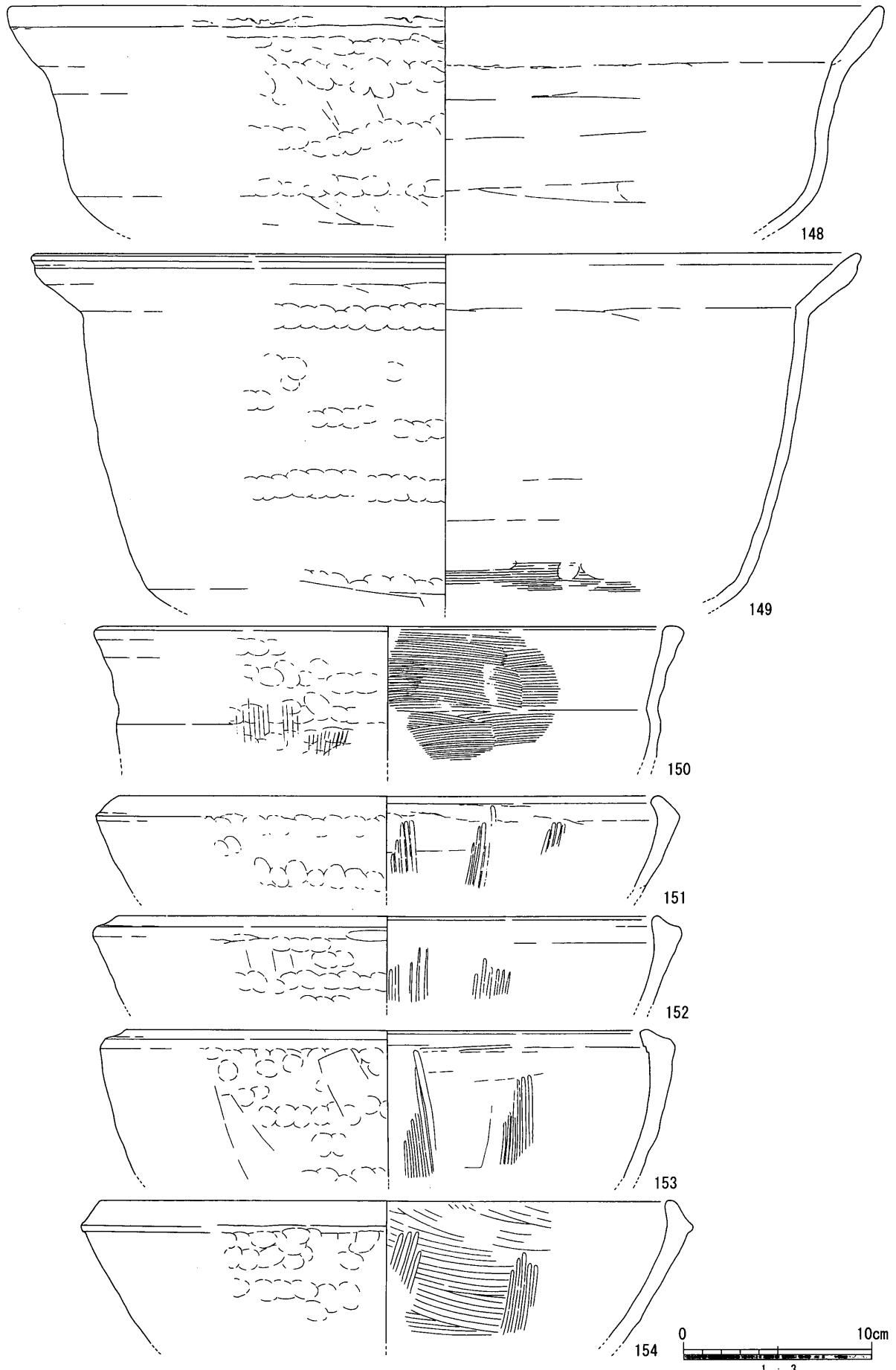
第51図 SD07 土層断面図、出土遺物実測図1



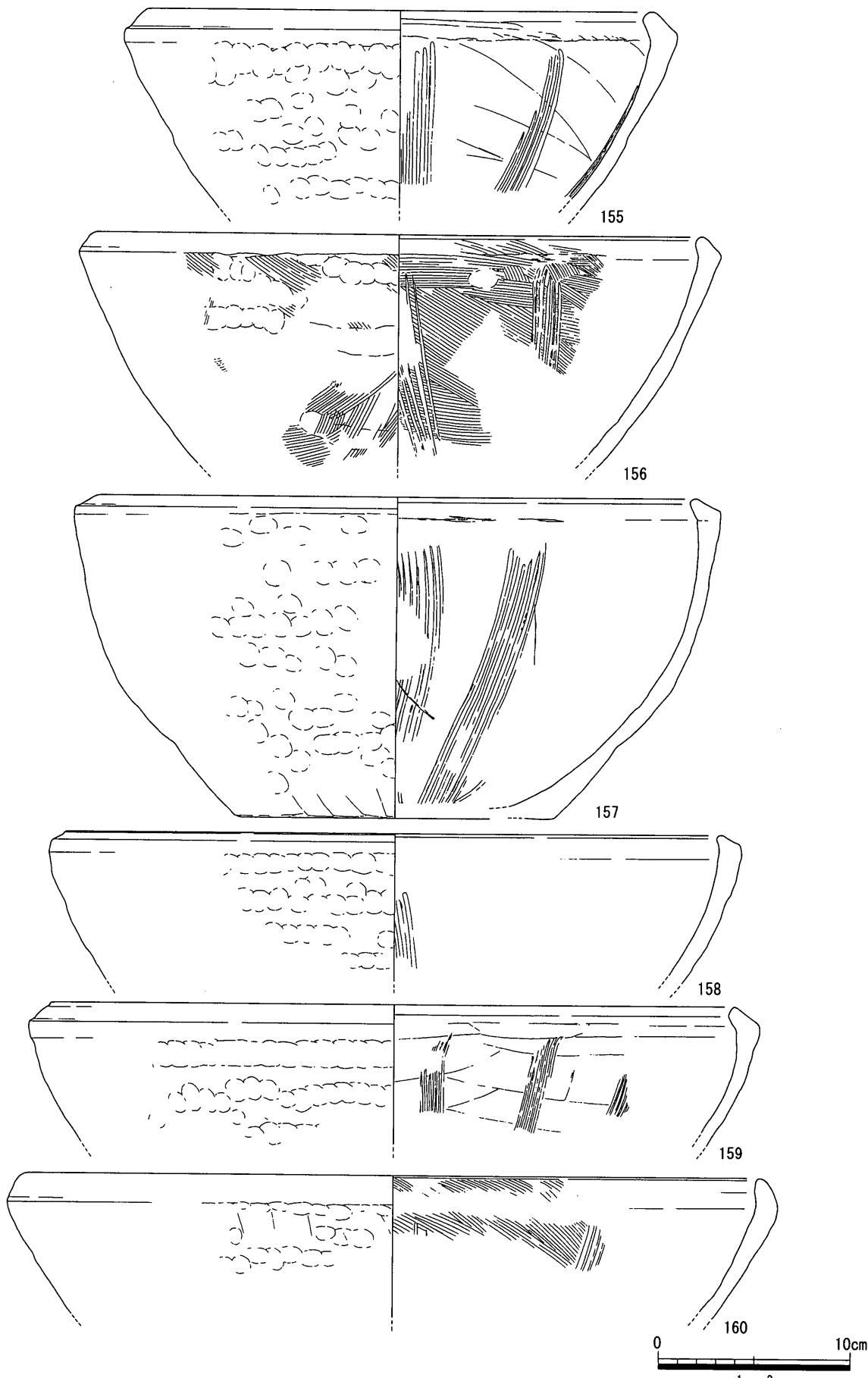
第 52 図 SD07 出土遺物実測図 2



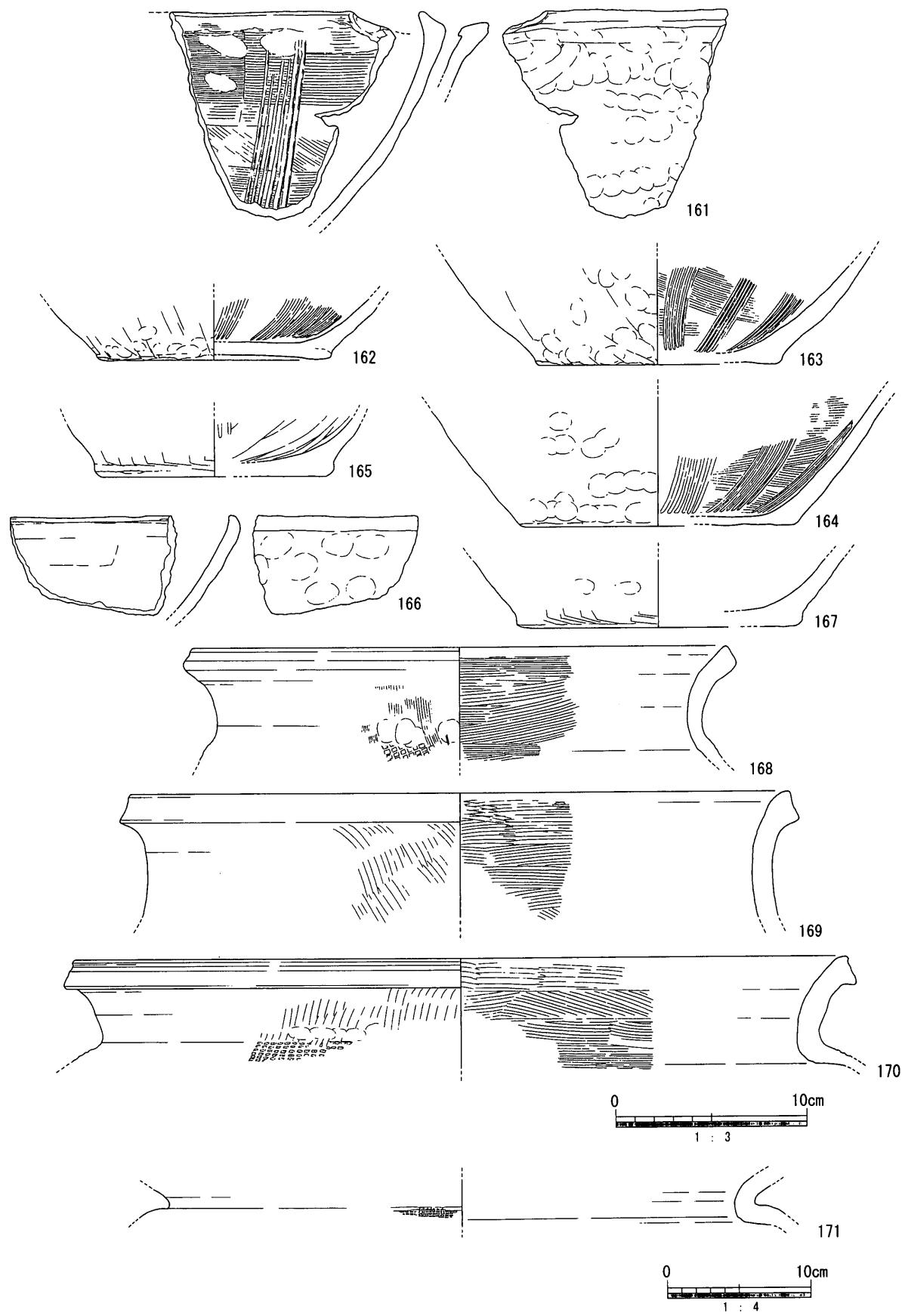
第53図 SD07出土遺物実測図3



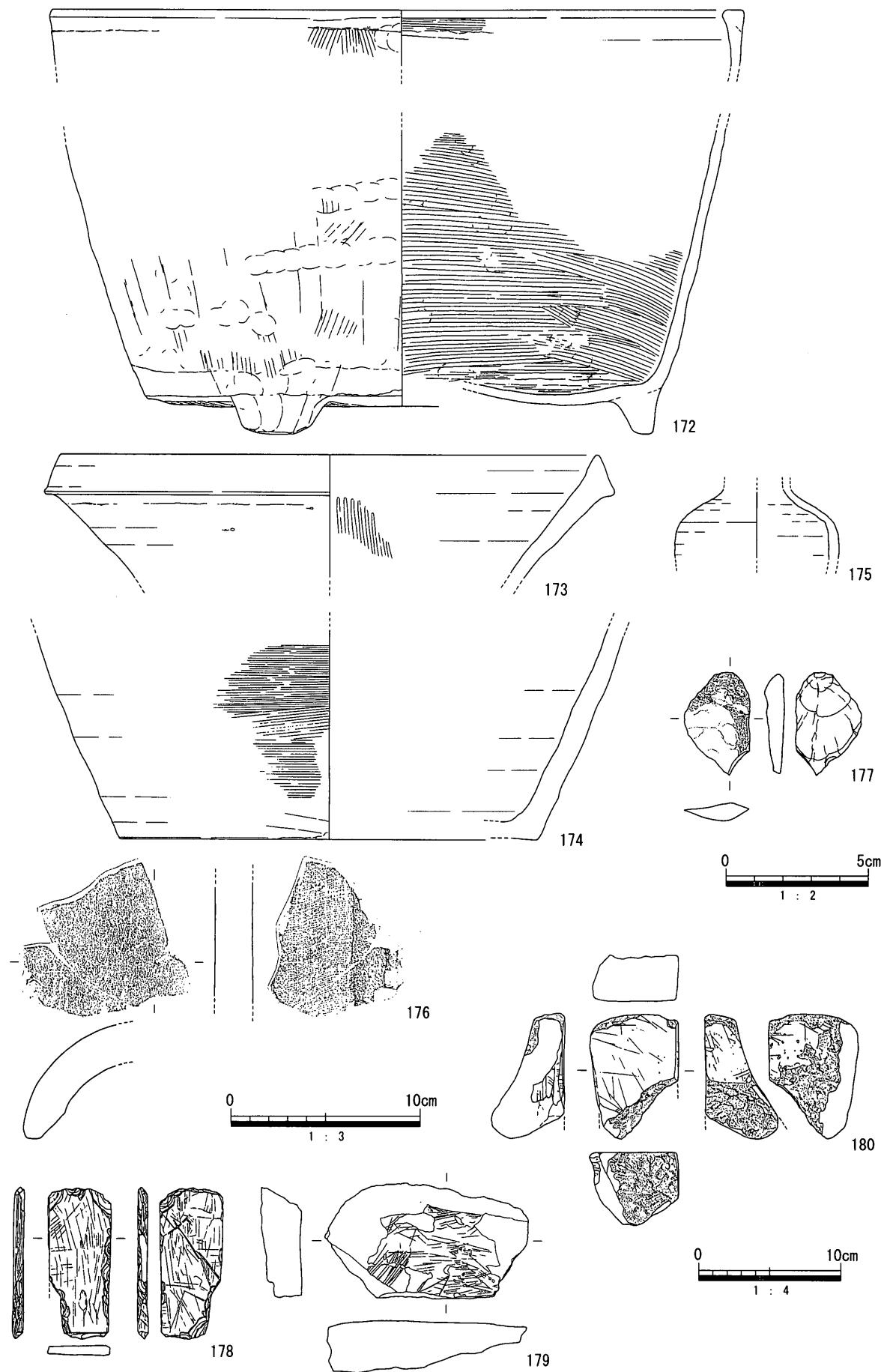
第 54 図 SD07 出土遺物実測図 4



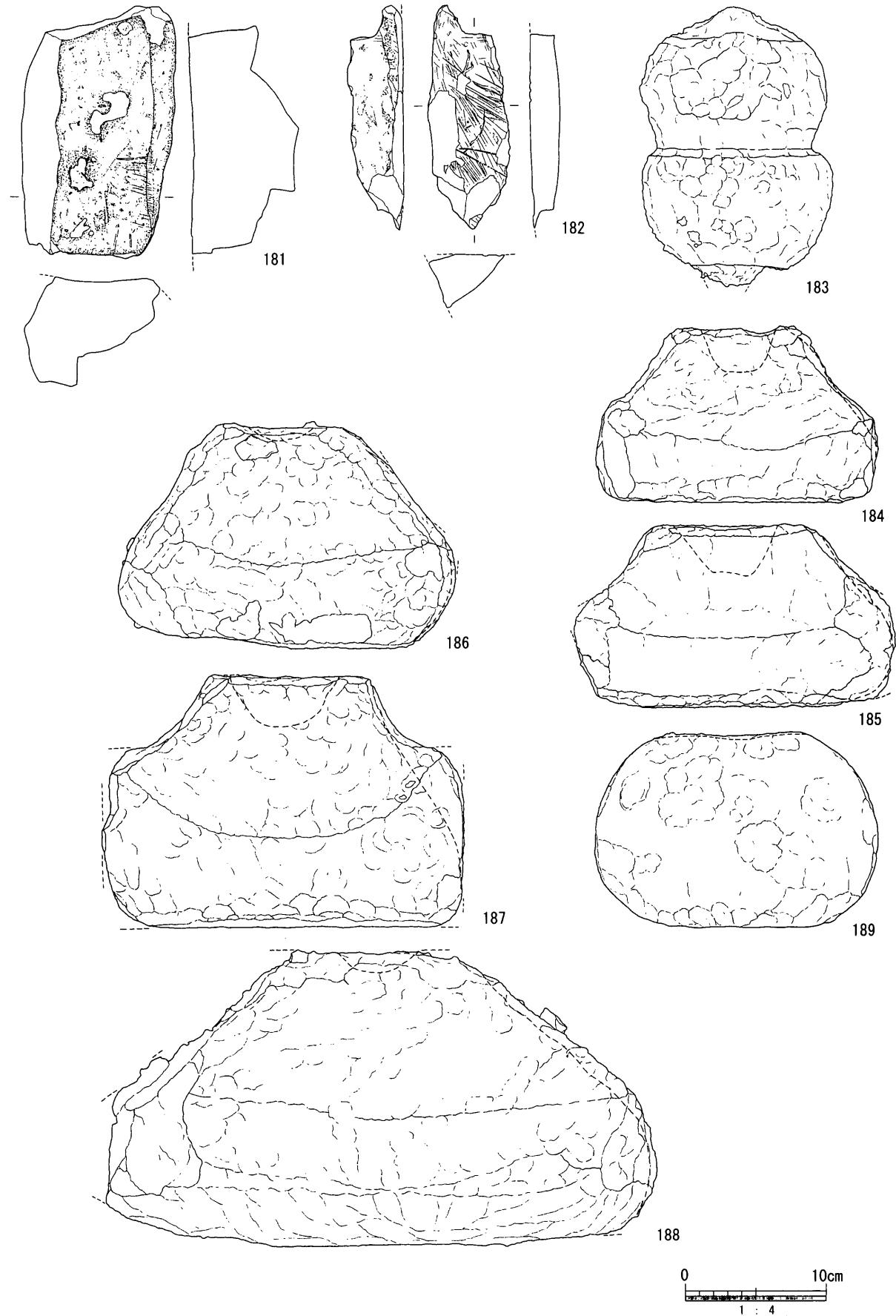
第55図 SD07出土遺物実測図5



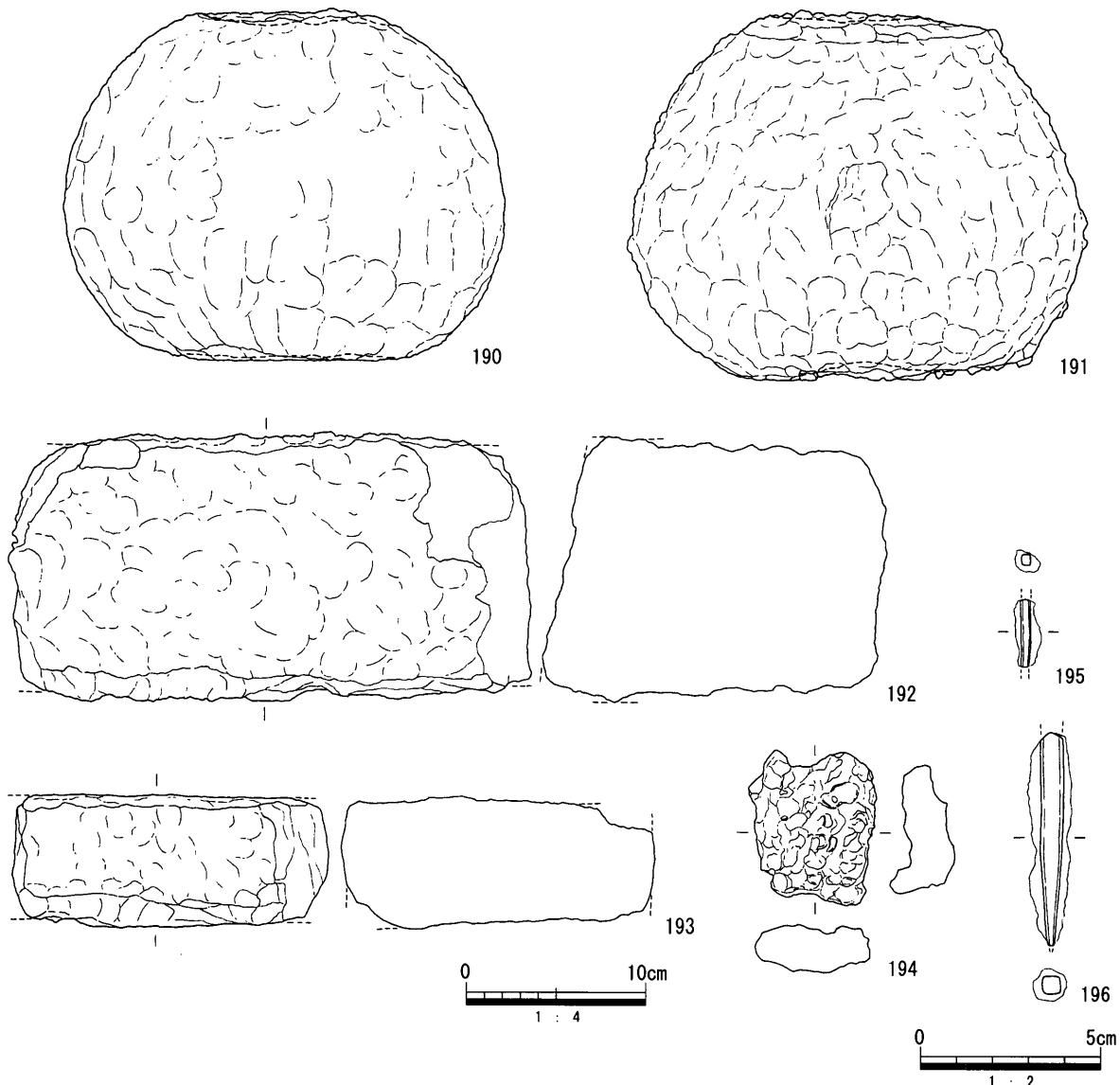
第 56 図 SD07 出土遺物実測図 6



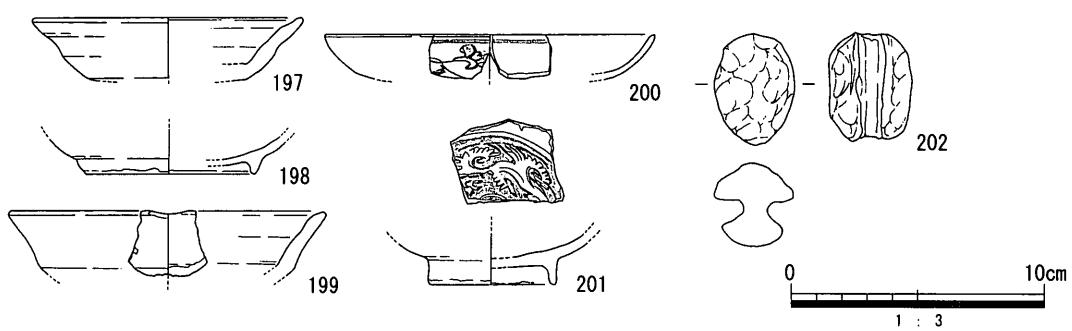
第 57 図 SD07 出土遺物実測図 7



第 58 図 SD07 出土遺物実測図 8



第59図 SD07出土遺物実測図9



第60図 I区包含層等出土遺物実測図

かる。122は、中国景德鎮窯系青花皿で、小野染付皿B1群に所属する。123は、龍泉窯系青磁碗で、上田B-I-V類に所属する。168～171は亀山焼である。172は瓦質土器火鉢で、口縁部と体・底部の破片は接合しなかつたが、胎土や調整等から同一個体と考えられるため、図上で復元した。口縁部の口径は、小片のため任意である。173は備前焼擂鉢で、乗岡中世3b期に所属する。176は丸瓦片で、調整等から古代に遡る可能性がある。179・181・182は、安山岩製砥石で、被熱状況には強弱があるが、いずれも被熱後に大きく欠損する。

180は、方柱状を呈する流紋岩製砥石で、大きく欠損し、欠損部も一部砥面として使用している。砥石類は表面にいずれも使用に伴う線条痕を認めるが、その頻度は個体により大きく相違する。183～191は角礫凝灰岩製五輪塔の各部材。地輪以外は出土しているが、セット関係については断定できない。いずれもほぼ完形品だが、188は溝への投棄時に下端部の一部を折損する。また、全体に風化が顕著である。形態より188は14世紀代に遡り、187は17世紀前半に下る可能性がある。これら2点以外は、16世紀後半を中心とした時期でまとまるようである。192は、角礫凝灰岩製の方柱状の加工石材で、両端を破損し、破断面を含め被熱痕を認める。地覆石の可能性が考えられる。193も板状を呈する角礫凝灰岩製加工石材で、弱く被熱し、また両端を折損する。192同様、地覆石の可能性が考えられる。古代～中世後期に遡る遺物は、出土量も乏しく混入の可能性が考えられる。したがってこれらを除いた出土遺物より、17世紀前半を中心とする比較的短期間に、投棄・埋め戻しがなされたと考えられる。

包含層等

第60図に示した遺物は、I区での遺構検出時等に出土した遺物である。一部は旧耕作土に包含されていた遺物も含まれるが、大半は遺構より遊離した遺物であり、特にI区での遺構の性格を補足する上で必要と考えられるものを図示した。197は備前焼杯で、乗岡近世1期前半と考えられる。198は中国景德鎮窯系白磁皿で、森田皿E-2に所属する。200も景德鎮窯系青花皿(小野染付皿E群)、201は同碗(小野染付碗C群?)である。199は龍泉窯系青磁小碗で、大宰府分類I-3類と考えられる。202は真鍋分類有溝土錘C b類である。

第2節 II区の調査

概要と基本土層

調査区の北に隣接する民家への進入路をそれぞれ東・西限とする範囲をII区とした。対象地の面積は、約1,375m²である。調査前は東西に2筆に分筆された耕作地として利用されており、調査区の設定も旧地割りにしたがって、東をIIa区、西をIIb区とした。IIa区の現地表面の標高は6.97m前後、IIb区のそれは6.86m前後で、やや西に傾斜する。

土層断面の観察(第61図⑤～⑦)により、IIa区では現耕作土下に、2～4層に細分される床土・旧耕作土の水平堆積(同図4～7層)が確認され、弥生時代～近代の遺物が出土している。出土遺物より、近世以降は耕作域として利用されていたことが推定される。これら旧耕作土層群下に、無遺物層である黄褐色系粘土層(同図39・40層)が堆積し、本層をベースとして、弥生時代以降の遺構が検出された。遺構面の標高は6.45～6.65mであり、調査区南半部がやや低い。こうした遺構面の微妙な高低差は、近世以降の耕地化による削平を考慮しなければならないが、おそらくは一定程度の旧地形を反映していると考えられる。つまり、本調査区の南に後述する旧流路跡SR01が延長し、SR01へ向けて緩やかに傾斜する地形であったことが想定される。

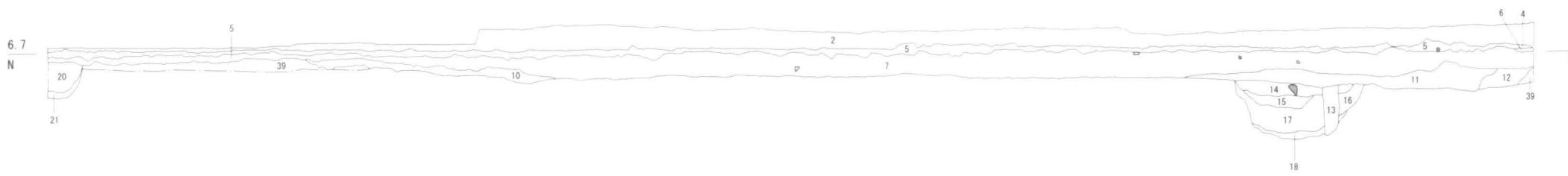
IIb区もIIa区とほぼ同様な層序を示し、現耕作土下で1～2層に細分される床土・旧耕作土の水平堆積(同図8～9層)が確認され、これらの旧耕作土層群下で、弥生時代以降の遺構面が検出された。遺構面の標高は6.39～6.55mで、南半部がやや低く、IIa区同様、SR01へ向けて緩やかに下る緩斜面状を呈していたと考えられる。

本調査区からは、弥生時代後期の溝状遺構、中世の掘立柱建物群で構成される屋敷地が検出された。以下、各遺構について報告する。

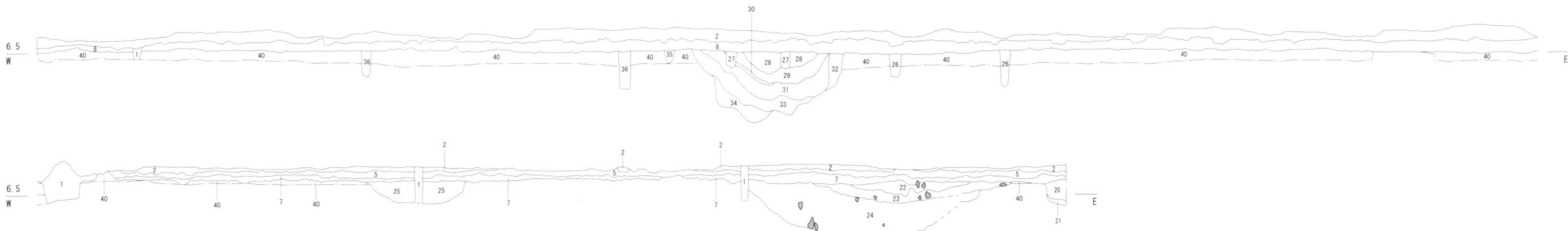
掘立柱建物跡

II区では、31棟の掘立柱建物跡を復元した。柱穴と考えられる遺構は、IIa区で1,007基を、IIb区で440基をそれぞれ検出し、そのうちの約15.5%について建物が復元された計算になる。IIa区において、とくに密集した様相を呈し、頻繁な建物の建替えや長期に亘る屋敷地としての土地利用を反映している可能性が

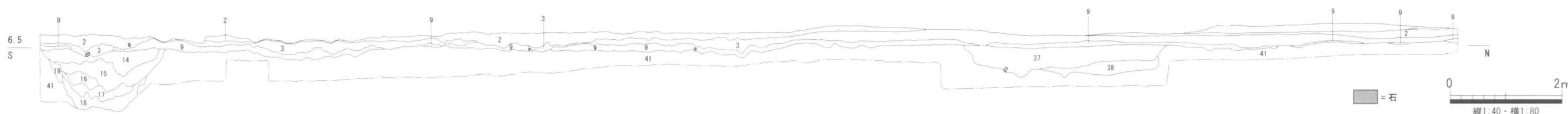
⑤ IIa区東壁



⑥ IIa・b区北壁



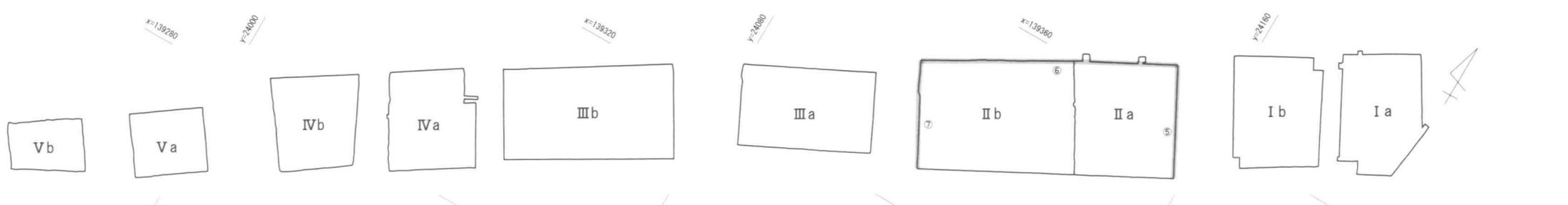
⑦ IIb区西壁



1 捜乱
2 新作土
3 盛土（花崗土）
4 淡灰色粘性極細砂（床土）
5 濁黃褐色粘性極細砂（床土）
6 濁黃色粘性極細砂（床土）
7 淡灰黄色粘性極細砂（旧耕作土 or 床土、濁黃色粘質土小ブロック若干量含）
8 黄灰色 2.5Y6/1 粘土。（旧耕作土 or 床土、ややシルト質、Fe・粒径 1 ~ 4 cm のベースブロックを底面付近に多量混）
9 濁黃茶灰色粘性極細砂（床土）
10 濁灰黃茶灰色粘性極細砂
11 暗茶褐色粘性極細砂（SD09 墓土、Mn）
12 暗褐色粘性極細砂（SD09 墓土、Mn）
13 暗茶褐色粘性極細砂（柱穴埋土、5 ~ 10 mm の濁明黃白色粘性極細砂ブロック含、炭化物粒多含）
14 淡茶灰色粘性細砂（SD03 中層、Fe・Mn、5 mm 前後の橙茶色粘性極細砂ブロック多含）

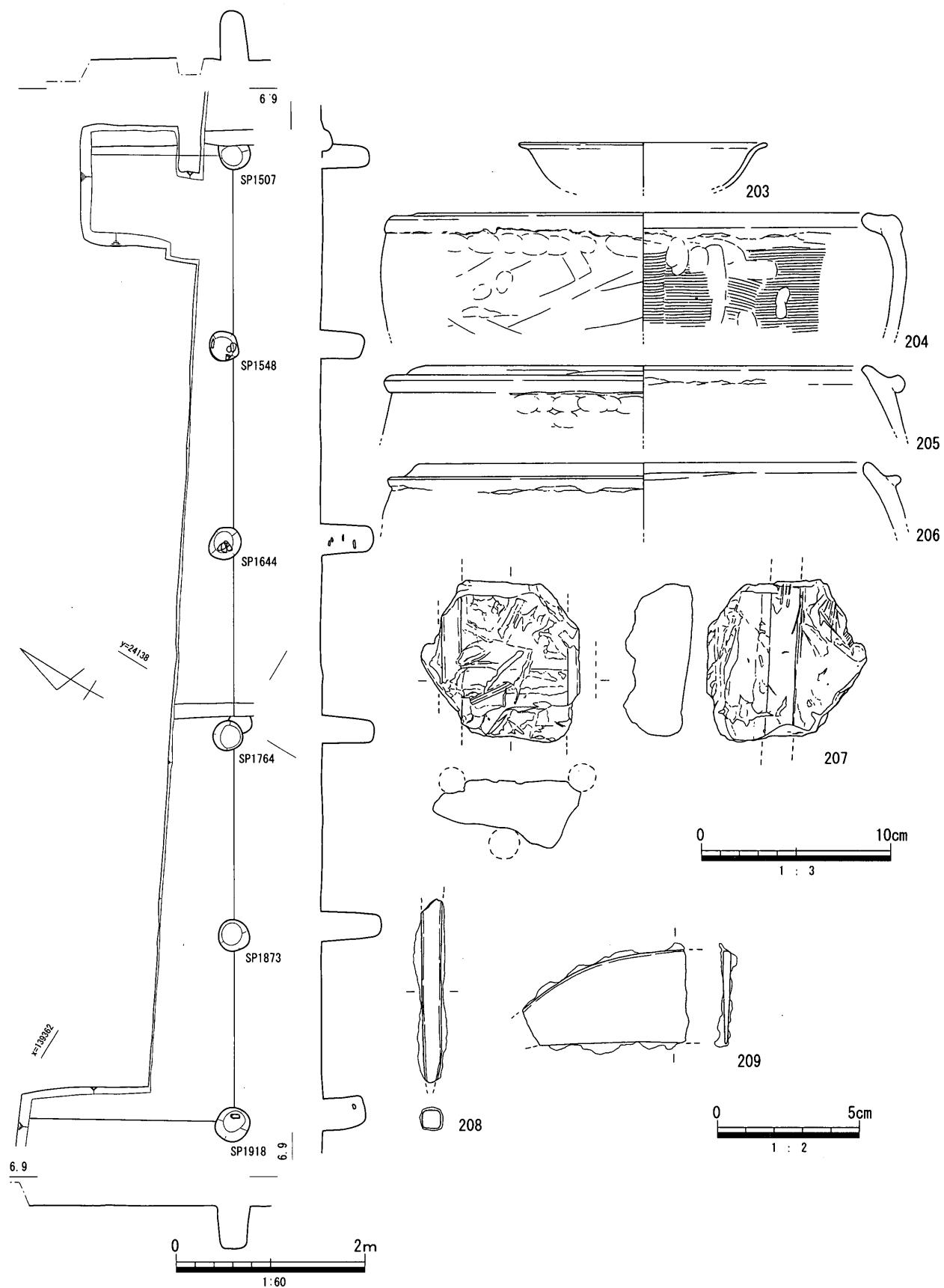
15 淡灰褐色粘性極細砂（SD03 中層、10 cm 程度の淡茶灰色粘性細砂ブロック若干含、炭化物粒含）
16 淡褐灰色粘性極細砂（SD03 中層、明黄灰色粘質土小ブロック若干含）
17 淡灰色粘性極細砂（SD03 中層、淡灰色粘性極細砂をラミナ状に含）
18 灰色細砂（SD03 下層、やや粘性あり）
19 濁黃褐色粘性極細砂（SD03 下層）
20 濁黃灰茶色粘性極細砂（SK23 上層、Fe・Mn、5 ~ 30 mm の濁橙黃色粘性極細砂ブロックやや多量に含）
21 濁灰色粘性極細砂（SK23 下層、濁黃色粘性極細砂ブロック若干含）
22 濁黃色粘性極細砂（SX03 上層、褐灰色粘性極細砂小ブロック若干量含、炭化物粒含）
23 濁黃茶灰色粘性細砂（SX03 上層、Fe・Mn、橙茶色粘性極細砂ブロック若干含）
24 褐灰色粘性極細砂（SX03 下層、淡茶灰色粘性極細砂～淡黃茶灰色粘性細砂ラミナ堆積）
25 濁灰褐色粘性極細砂（SX05 墓土、Mn、濁灰褐色粘性極細砂ブロックやや多量に含）
26 2.5Y5/1 黄灰色粘土（柱穴埋土、Fe・Mn、粒径 1 ~ 3 cm のベースブロック多量に含）
27 5Y6/1 灰色粘土（柱穴埋土、Fe・Mn、粒径 1 ~ 3 cm のベースブロック多量に含）
28 10YR5/4 ~ 5/6 にひい黄褐色粘土（SD12 上層、やや強粘質、Fe・Mn）

29 10YR4/1 ~ 3/1 褐灰色粘土（SD12 上層、強粘質、Fe・厚 1 mm 以下の炭化物極細層ラミナ状に混、粒径 2 ~ 3 cm のベースブロック少量含）
30 10YR4/1 ~ 3/1 褐灰色粘土（SD12 上層、強粘質、Fe・厚 1 mm 以下の炭化物極細層ラミナ状に混、粒径 2 ~ 3 cm のベースブロック少量含）
31 10YR4/1 ~ 3/1 褐灰色粘土（SD12 中層、強粘質、Fe・厚 1 mm 以下の炭化物極細層ラミナ状に多量混、粒径 2 ~ 3 cm のベースブロック少量含、下位に細砂少量混）
32 10YR4/1 褐灰色粘土（SD12 中層、Fe・Mn、炭化物粒少量含、底面付近に粒径 3 cm 前後のベースブロック斜面堆積、上位に粒径 10 cm 前後の暗灰黃色粘土ブロック含）
33 10YR5/1 褐灰色細～中砂混粘土（SD12 下層、Fe・Mn、粒径 0.5 ~ 1 cm の炭化物粒含、ベース土をブロック状ないしラミナ状に多量含、細～中砂多量に混）
34 2.5Y5/2 / 6/2 濁灰黃色粘土（SD12 下層、やや強粘質、Fe・粒径 2 ~ 8 cm のベースブロックが底面付近に一定量堆積）
35 10YR6/1 褐灰色粘土（柱穴埋土、Fe・Mn、粒径 1 cm 前後のベースブロック少量含）
36 10YR5/1 褐灰色粘土（柱穴埋土、Fe・Mn、粒径 1 ~ 4 cm のベースブロック少量含）
37 2.5Y5/1 黄灰色粘土（SD13 上層、Fe・Mn、強粘質、粒径 1 ~ 8 cm 程度のベースブロックを両面付近に含）
38 10YR7/6 明黃褐色細～中砂混粘土（SD13 下層、Fe・Mn 少、やや強粘質、底面付近に中砂堆積）
39 濁明黃褐色粘質土（地山）
40 10YR7/6 明黃褐色粘土（地山、Fe・Mn、やや強粘質）
41 明黃灰色粘質土（地山）

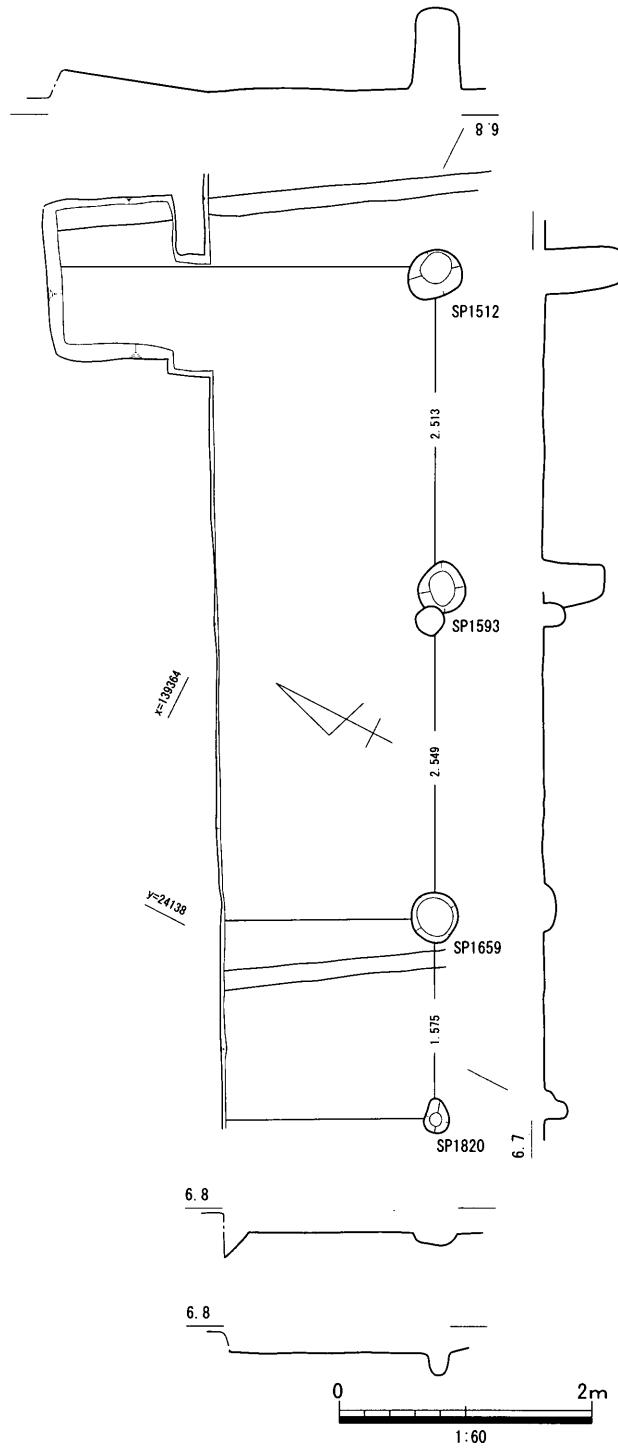


0 10m
1 : 1000

第 61 図 II 区調査区壁面土層断面図



第62図 SB23 平・断面図、出土遺物実測図



第 63 図 SB24 平・断面図

鎌とみられる金属製品である。出土遺物より、16世紀末～17世紀前半を中心とした時期に位置付けられる。

SB24 (第 63 図)

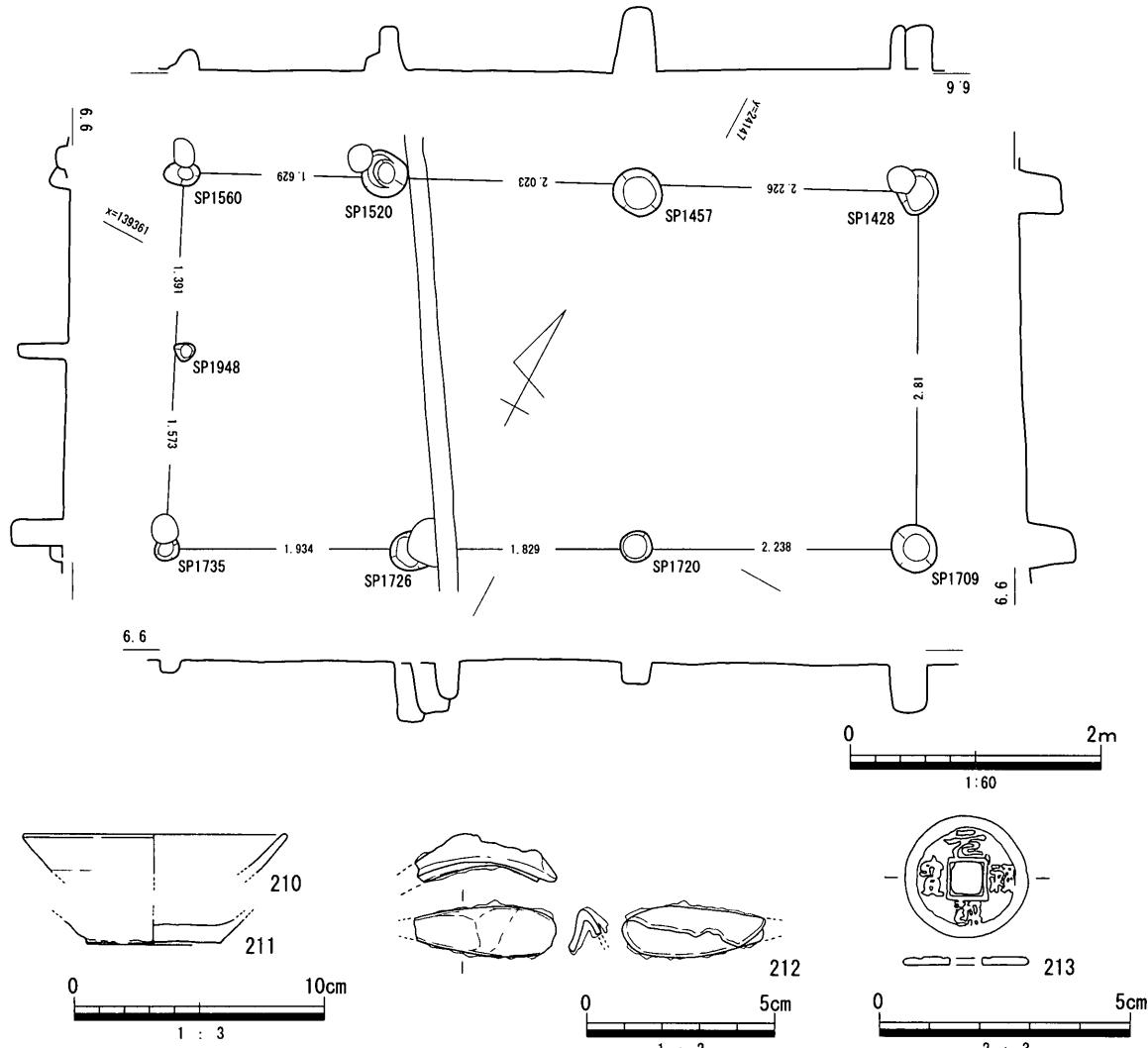
II a 区北端部で検出。SB23 と同様に、北端部で桁行と推定される 3 間分の柱穴跡列が検出され、柱列南側に対応する位置に柱穴跡は検出されず、建物北半部は調査区外へ延長すると考えられる。しかし、調査区北側に設定したサブトレンチに、梁間の柱列は検出されず、梁間の柱間間隔は 2.9m 以上開く。梁間の柱間間隔にやや不自然さが残るが、本遺構も柱穴跡規模や規格的な配置より、東西棟の掘立柱建物として復元する。SB33～35 と重複するが、柱穴跡に切り合い関係はなく、先後関係は不明である。なお、東 2 間の柱間間隔は 2.5

ある。こうした調査内容とは裏腹に、I 区同様かなり限定された条件のなかでの建物遺構の復元には、課題を残すこととなった。本報告で示した屋敷地の様相は、実際のものとはかなり異なった景観を呈しているが、現状での試案として提示しておく。また I 区同様、桁行もしくは梁間の 1 列のみが検出され、本来は柱穴列として報告すべき遺構も、既述した理由から建物遺構として報告している (SB27・29・33・38)。それ以外の建物については、一定の整合性をもって復元が可能であった。以下、個別の建物について報告する。

SB23 (第 62 図)

II a 区北端部で 5 間分の柱穴跡列が確認された。南側で対応する位置に柱穴跡は検出されず、北側へ展開する建物遺構の可能性を想定し、東西両端の柱穴跡の北側にサブトレンチを設け、梁間方向の柱穴跡について検出を試みたが、確認することはできなかった。梁間の柱間間隔が、桁行のそれより若干広くなる (2.16 m 超) 可能性を想定し、また他の建物遺構よりやや柱穴跡の規模が大きい企画的な配置がなされていることより、建物遺構として復元する。SB24・34 と重複するが、柱穴跡に切り合い関係はなく、先後関係は不明である。なお、検出された桁行中央 3 間の柱間間隔は 2.05 m 前後で揃うが、東西両端 1 間の柱間間隔はそれぞれ 1.98 m 前後と若干狭く配される。したがって東西両面に庇が付く可能性も考えられるが、これについては検証することができなかった。

遺物は、他の建物遺構と比して量的に多く、また焼土塊が多量に出土したのが特徴である。203 は SP1507 より出土した中国景德鎮窯系白磁皿で、森田 E-2 類に属する。207 は SP1548 より出土した壁土とみられる焼土塊で、3 条の平行する木舞が認められる。209 は SP1918 より出土した鉄



第 64 図 SB25 平・断面図、出土遺物実測図

m前後で一定するのに対して、東 1 間のそれは 1.5 m と狭く、また南西隅柱は他の柱穴跡より規模がやや小さいことから、西面に庇が付す可能性が想定される。

遺物は、中国龍泉窯系青磁碗等の小片が若干量出土したのみで、詳細な時期を特定することは困難である。柱穴跡径や主軸方向等が SB23 に近似することから、SB23 と近接した時期を想定しておく。

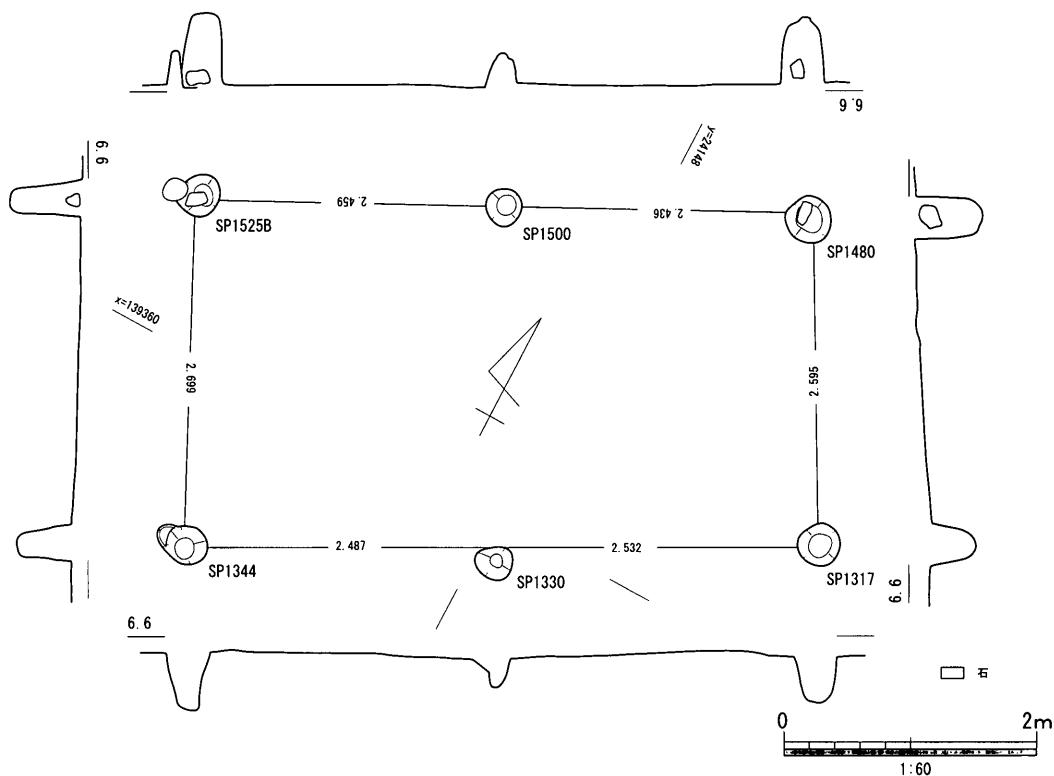
SB25 (第 64 図)

II a 区東部で検出。SB25 ~ 28・31 と重複するが、柱穴跡に切り合い関係はなく、この点で先後関係は不明である。梁間東列の中央柱を欠くが、相当する位置に、後述する SB26 北東隅柱が配されており、SB26 の構築により、本建物の梁間中央柱の掘り方は消失したと推定される。したがって SB26 は本建物より後出すると考えられ、これは後述する両建物の出土遺物の年代観とも矛盾しない。

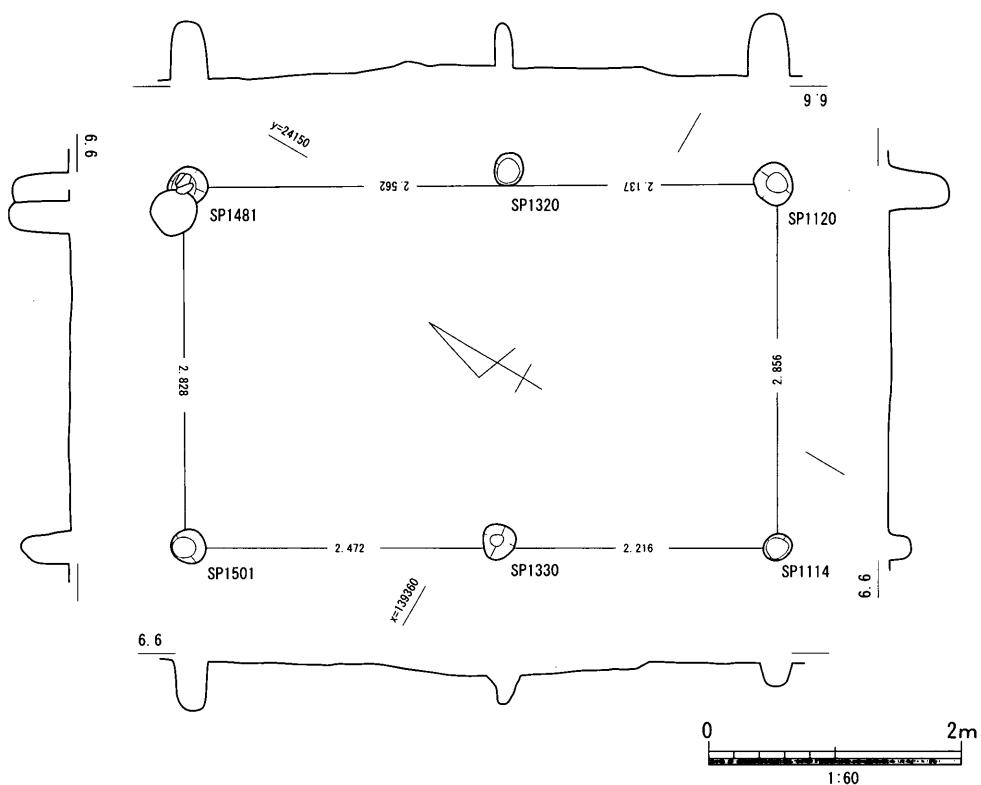
遺物は、図示した以外に肥前系磁器碗等の小片が出土している。212 は SP1726 より出土した用途不明の鉄製品である。213 は、SP1520 より出土した（図版 21）北宋錢の元祐通寶（初鑄 1086 年）。出土遺物より、17 世紀中頃を中心とした時期と推定される。

SB26 (第 65 図)

II a 区東部で検出。SB27・28・31 と重複する。このうち柱穴跡の切り合い関係より、SB27 より後出することが確認された。

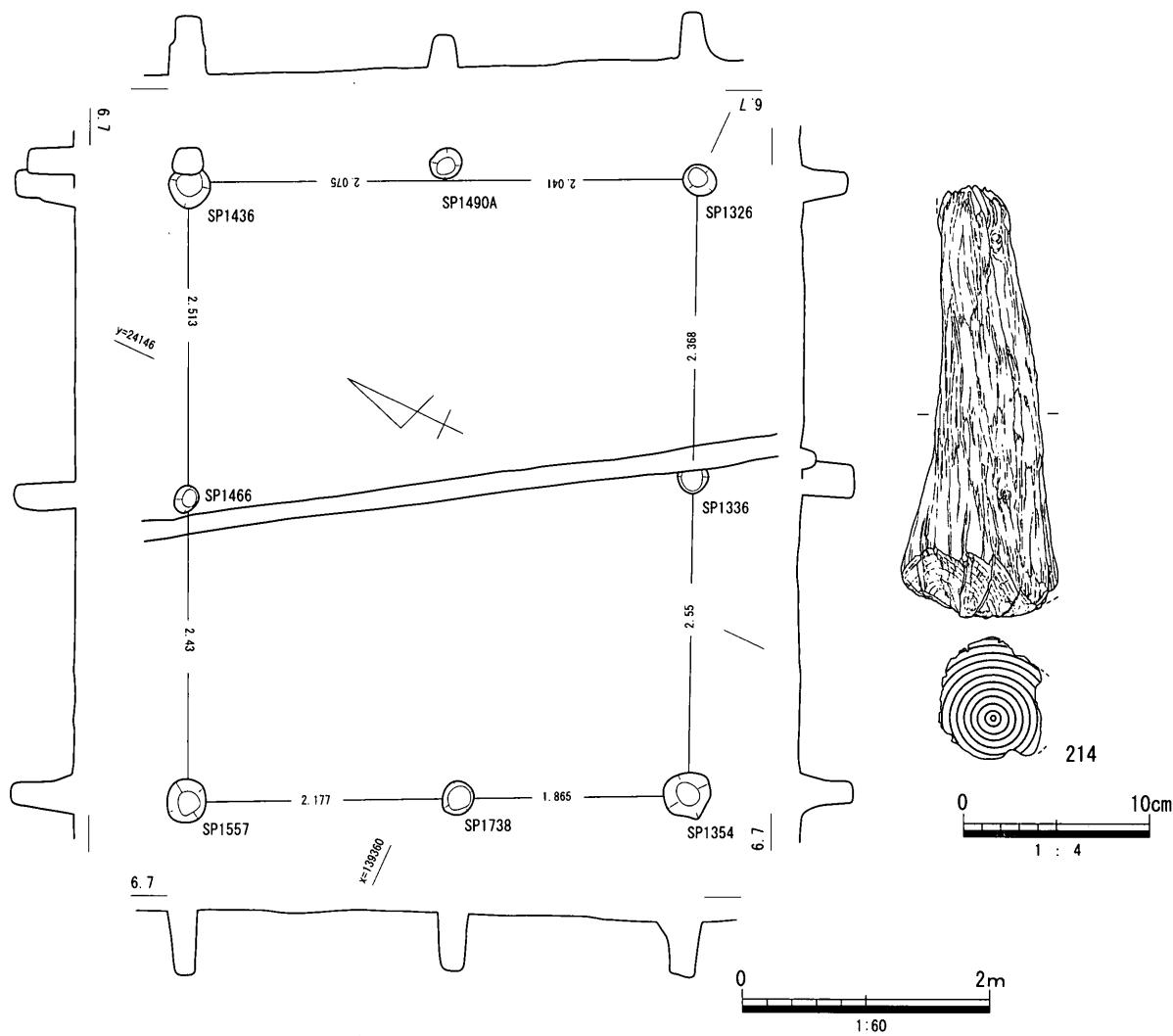


第65図 SB26 平・断面図

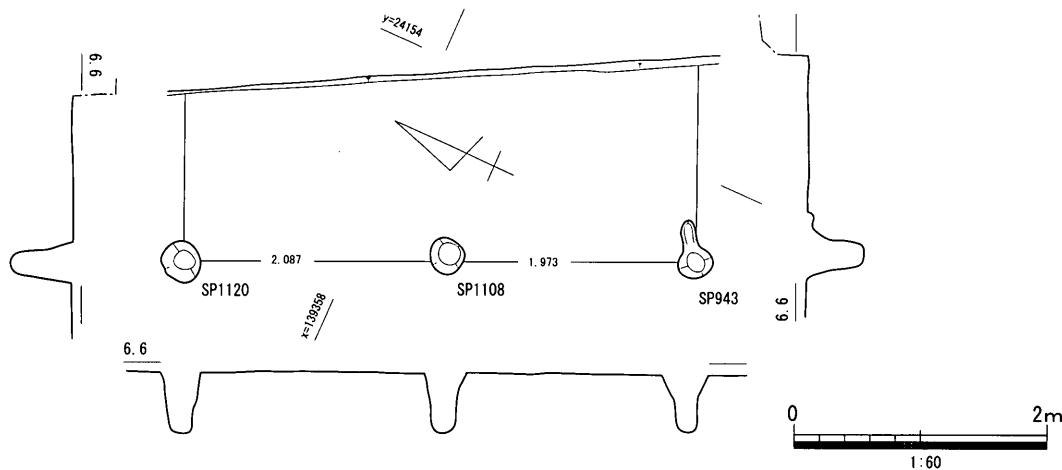


第66図 SB27 平・断面図

遺物は、肥前系陶器皿等の小片が若干量出土しており、17世紀前半を中心とした時期に位置付けられる。
SB27(第66図)



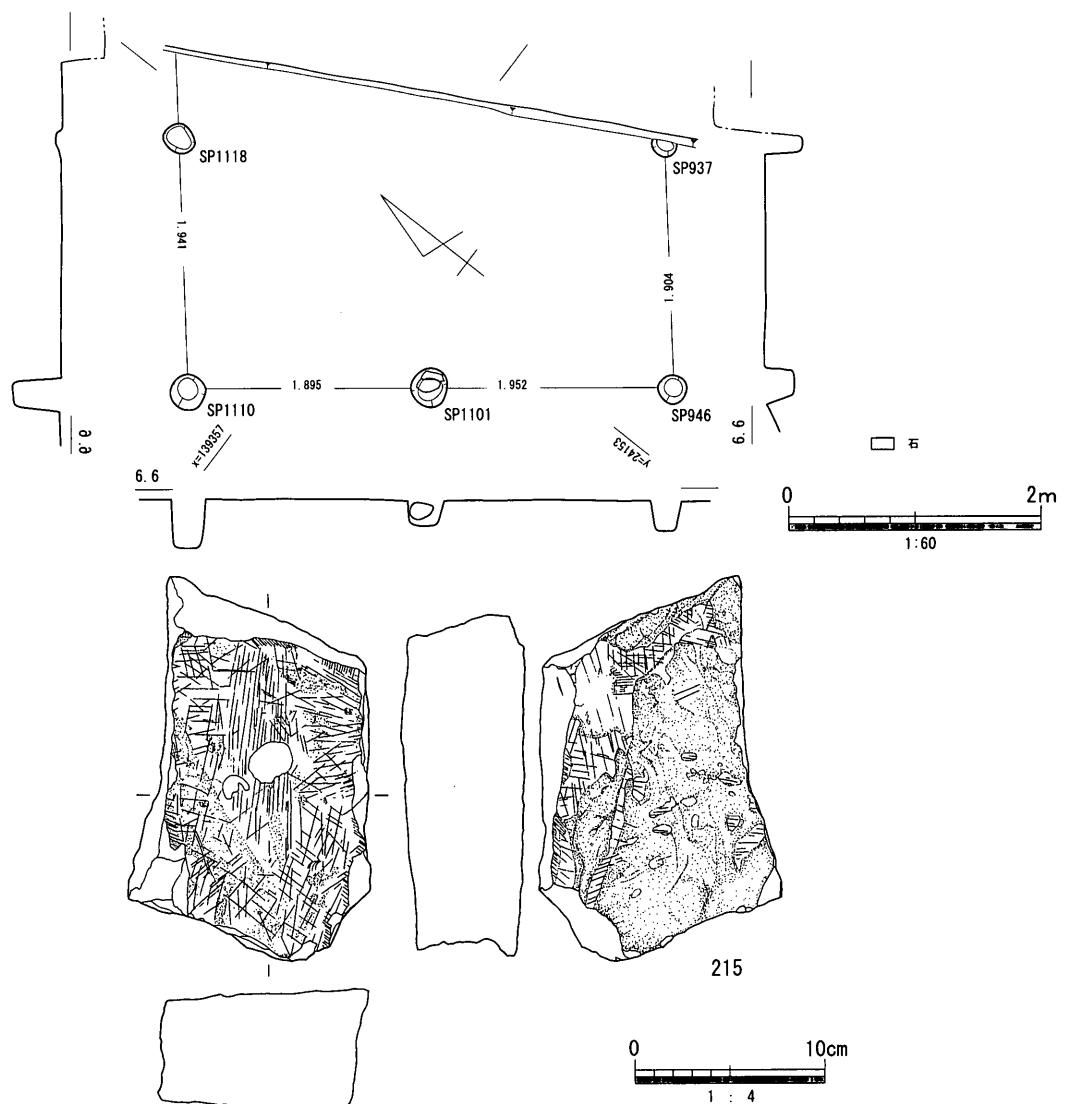
第67図 SB28 平・断面図、出土遺物実測図



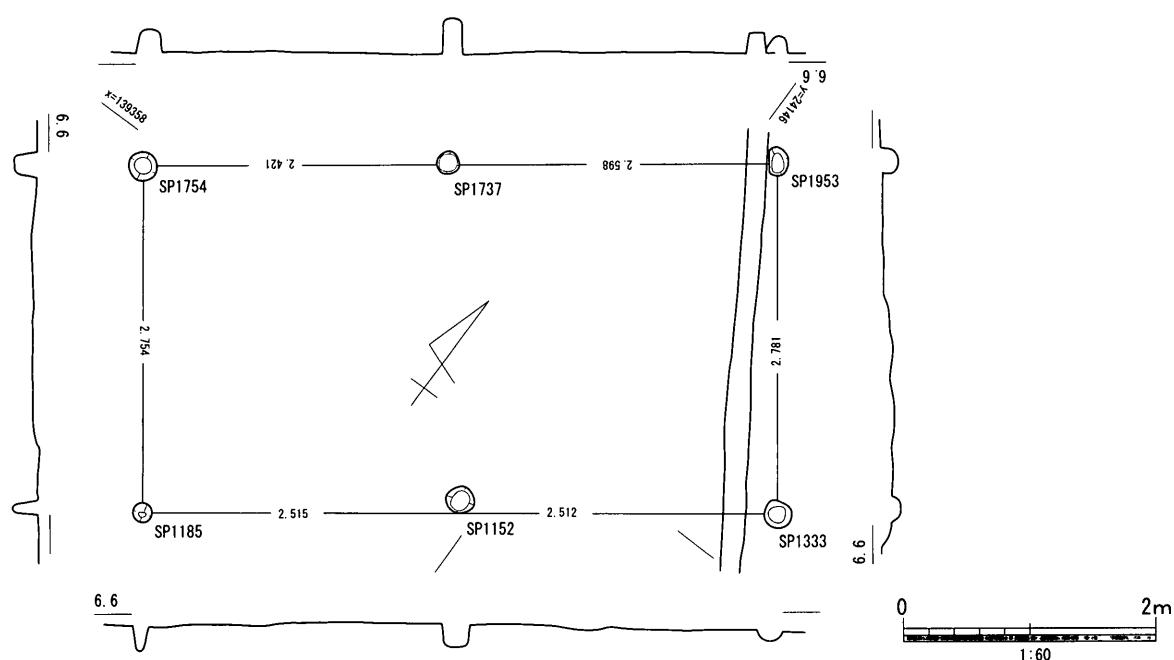
第68図 SB29 平・断面図

II a 区東部で検出。SB28 と重複するが、柱穴跡に切り合い関係がないため、先後関係は不明である。また、南東隅柱を SB29 と共有する。

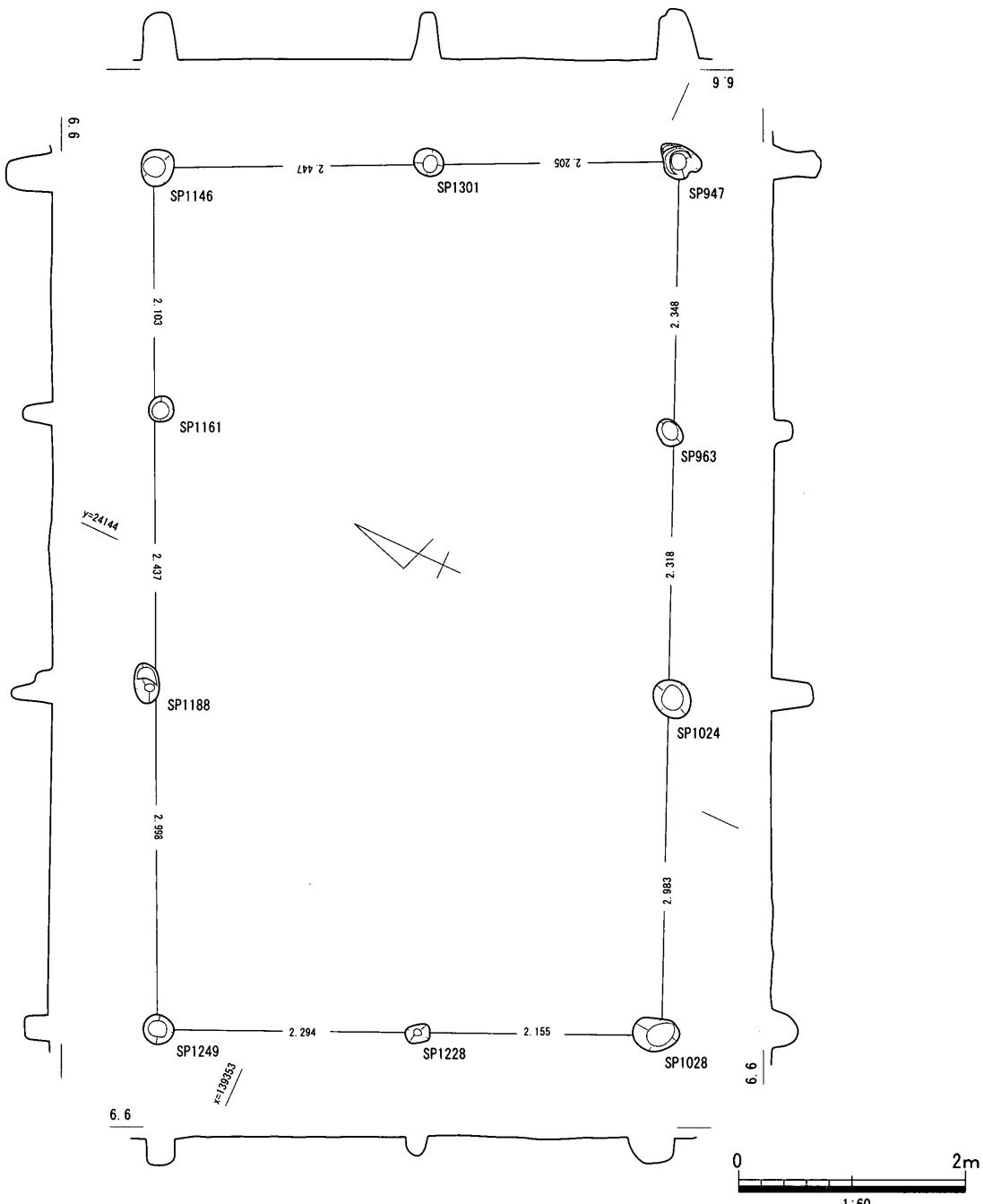
遺物は、器種不明の土師質土器小片が少量出土したのみであり、SB26 との切り合い関係より、17世紀前半を下限とする以上に、詳細な時期を特定することは困難である。



第69図 SB30 平・断面図、出土遺物実測図



第70図 SB31 平・断面図



第 71 図 SB32 平・断面図

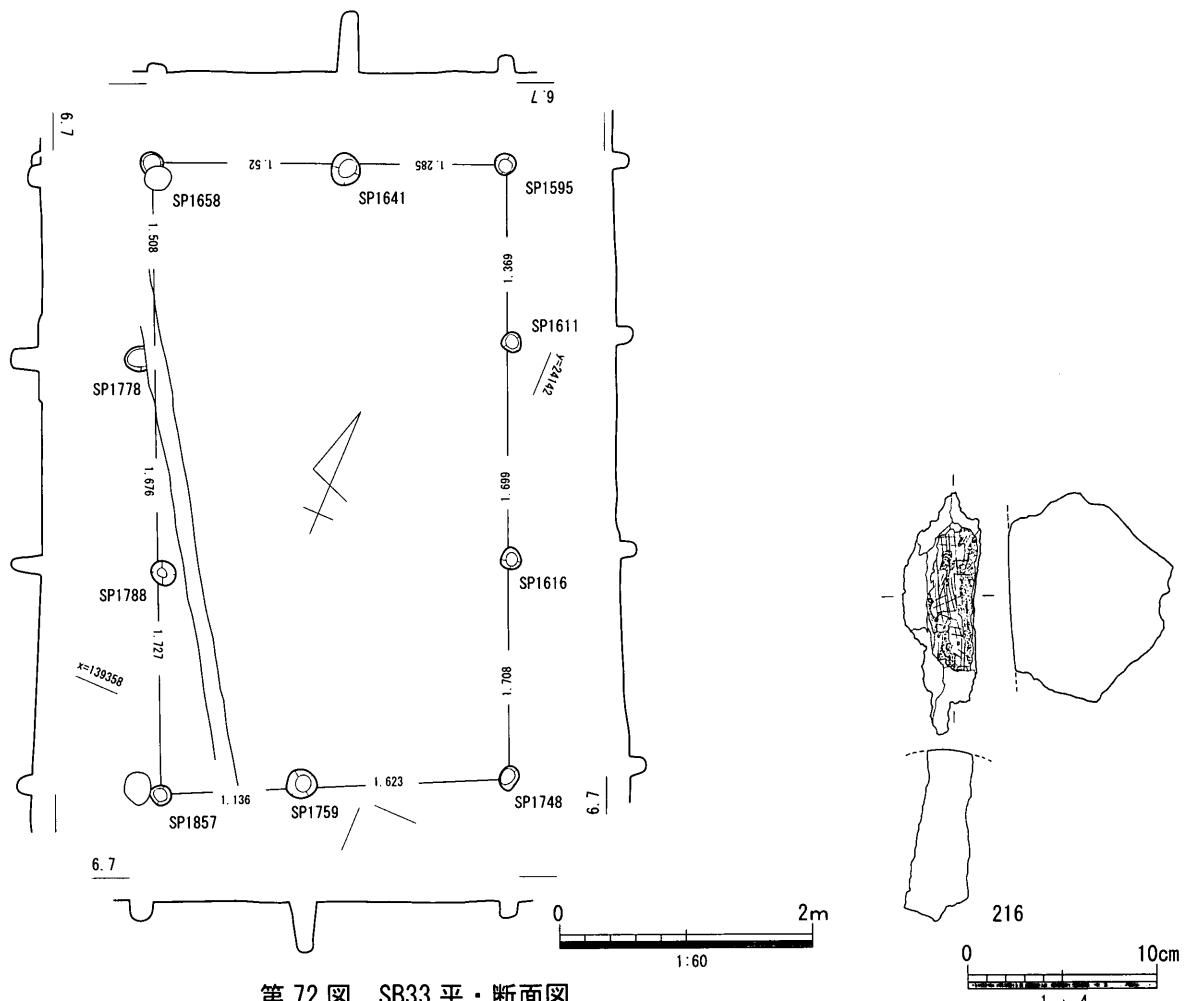
SB28 (第 67 図)

II a 区北東部で検出。SB31 と重複するが、柱穴跡に切り合い関係はなく、先後関係は不明である。

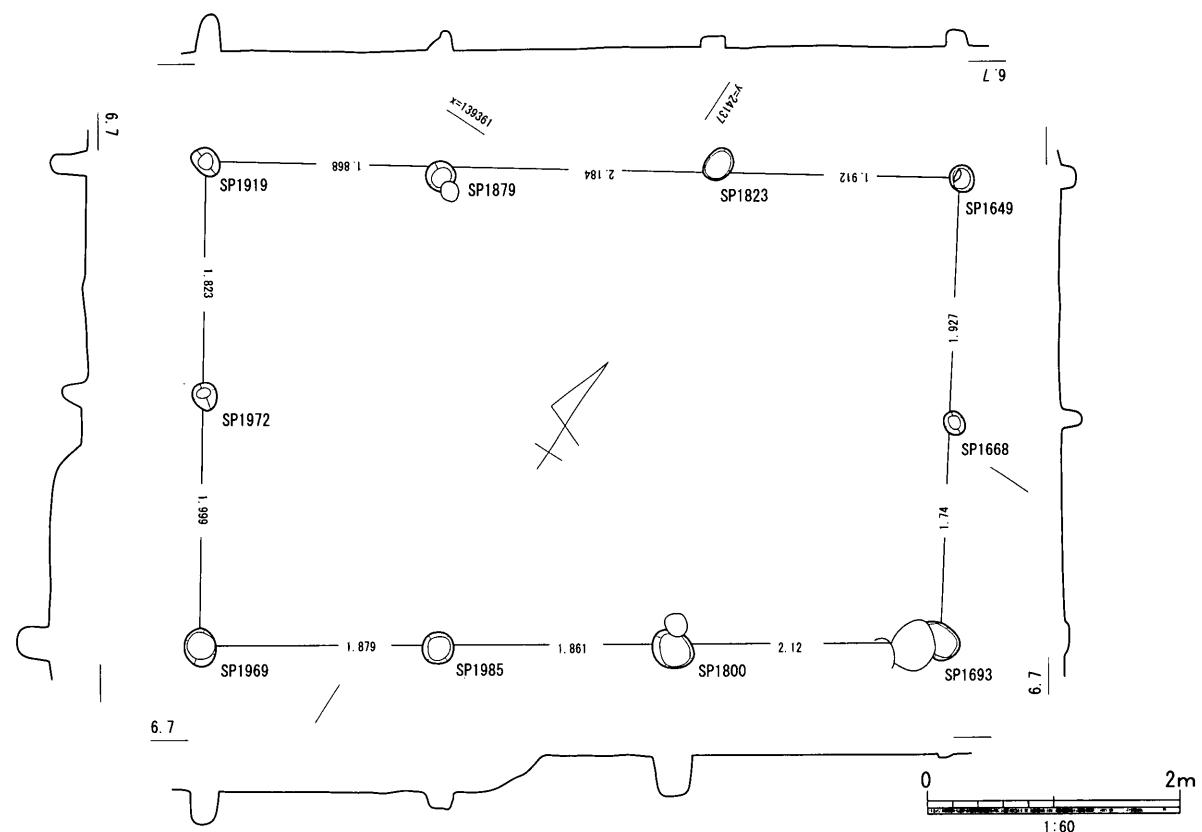
遺物は、図示した以外には土師質土器小皿や焼土塊等の小片が少量出土したのみであり、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。214 は SP1326 より出土した柱材である。マツ属の芯持ち丸太材を使用し、下端は周縁より加工を加え、平坦面を削り出す。側面はほとんど無加工とみられるが、腐食が顕著なため、断定はできない。

SB29 (第 68 図)

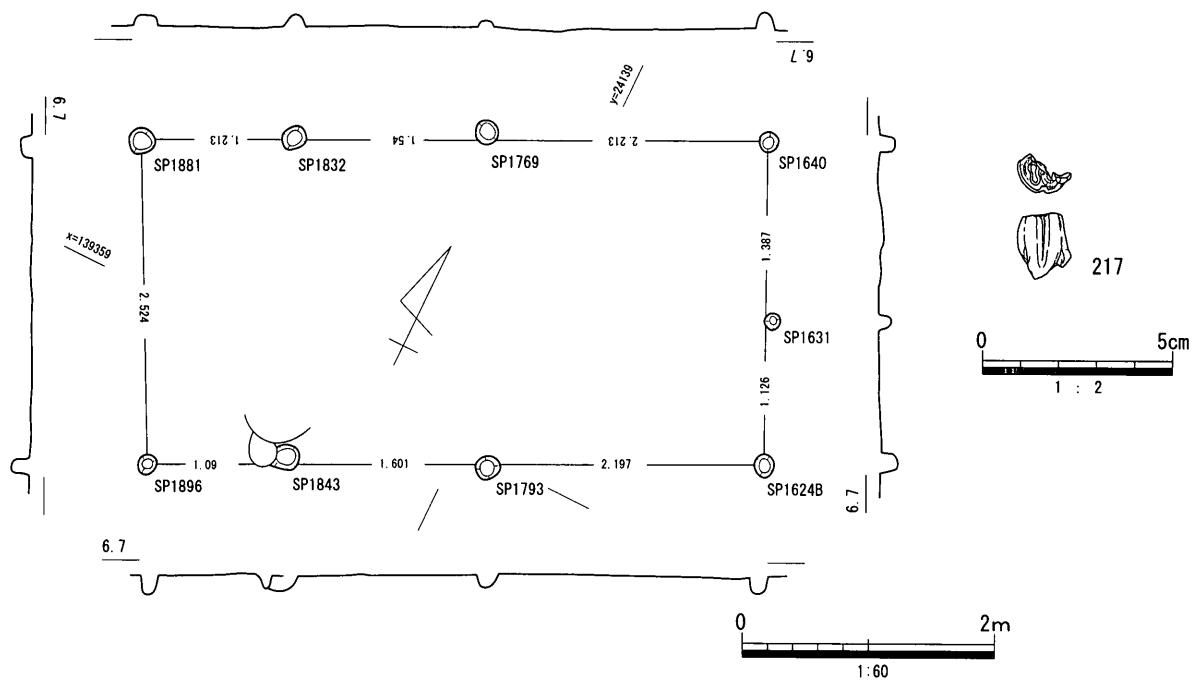
II a 区東端で検出。平行と考えられる柱穴跡が検出されたのみで、建物遺構となる可能性については断定することはできないが、規格的な柱穴跡配置から、南北棟の建物遺構の可能性を想定し報告する。SB30 と重複するが、柱穴に切り合い関係はなく、先後関係については不明である。



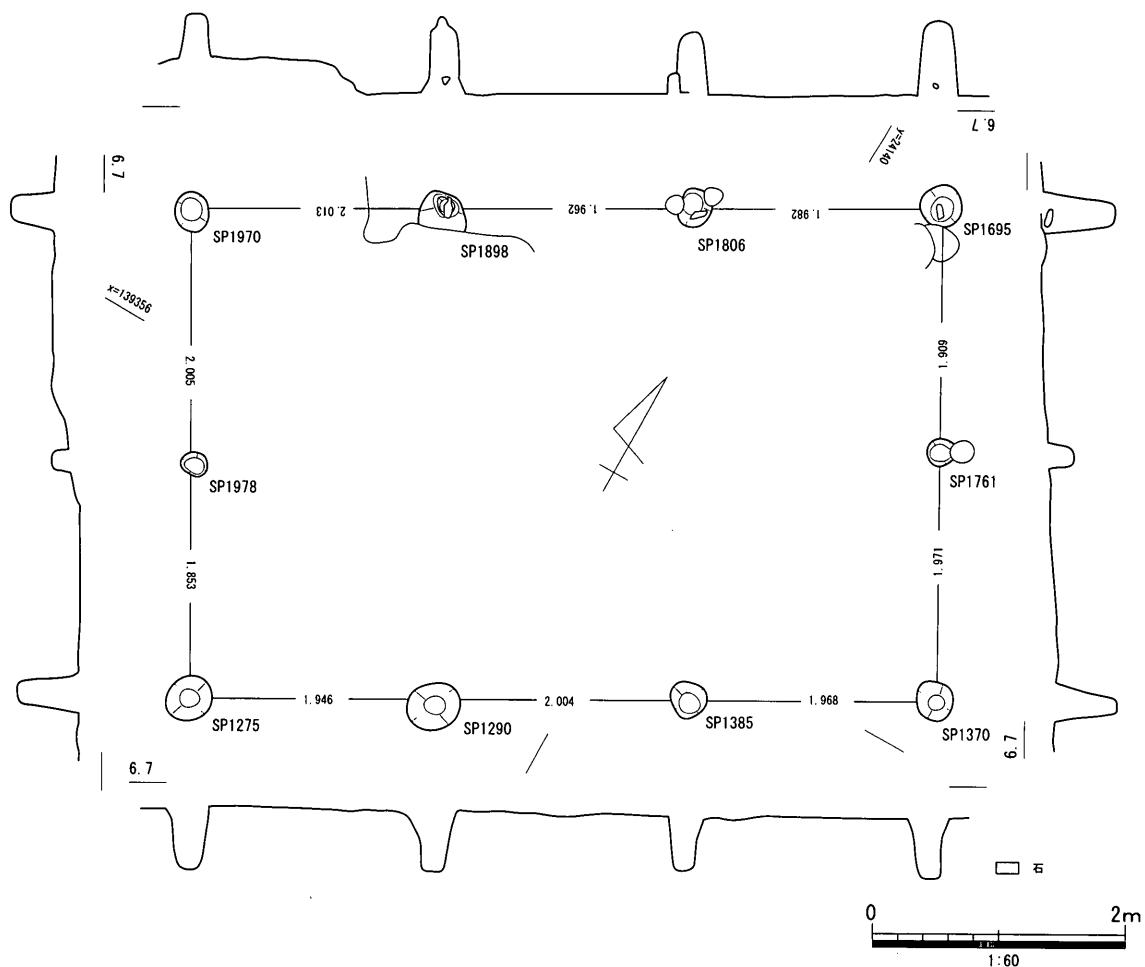
第72図 SB33 平・断面図



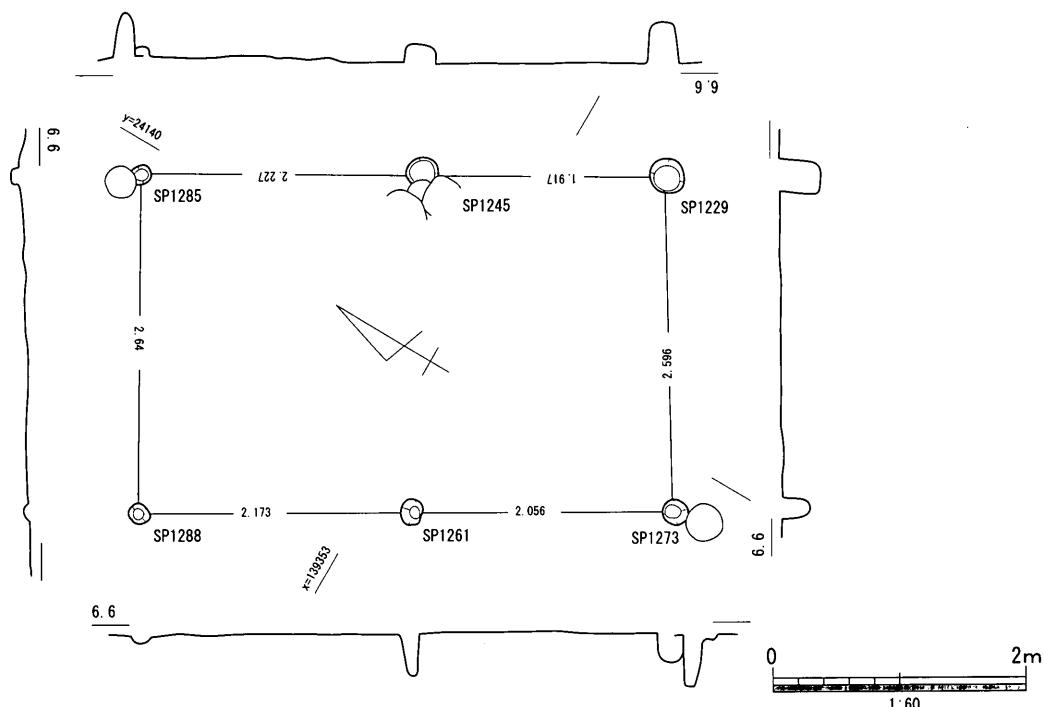
第73図 SB34 平・断面図、出土遺物実測図



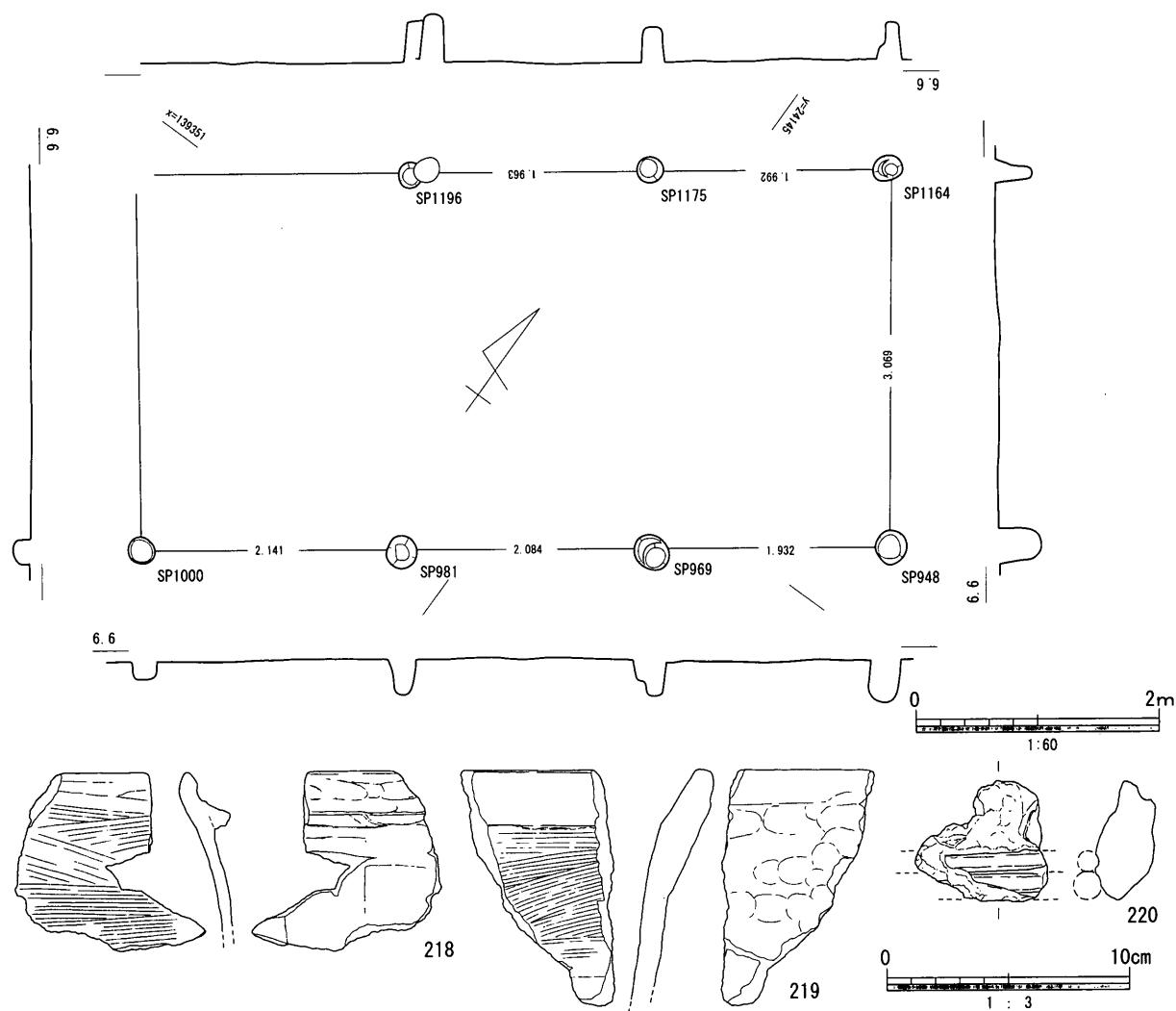
第74図 SB35 平・断面図、出土遺物実測図



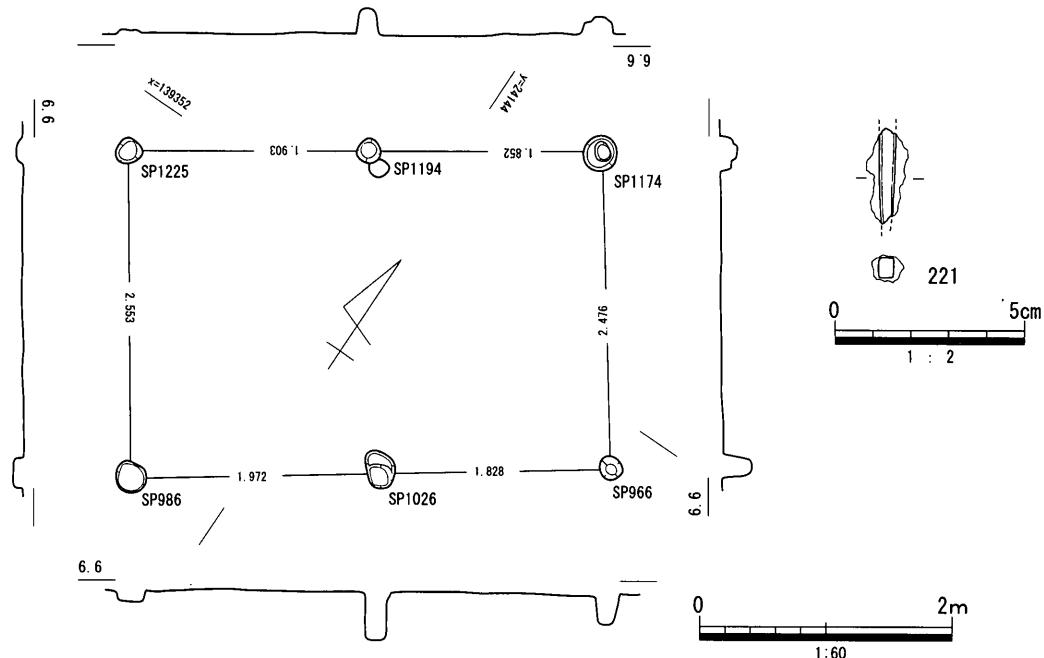
第75図 SB36 平・断面図



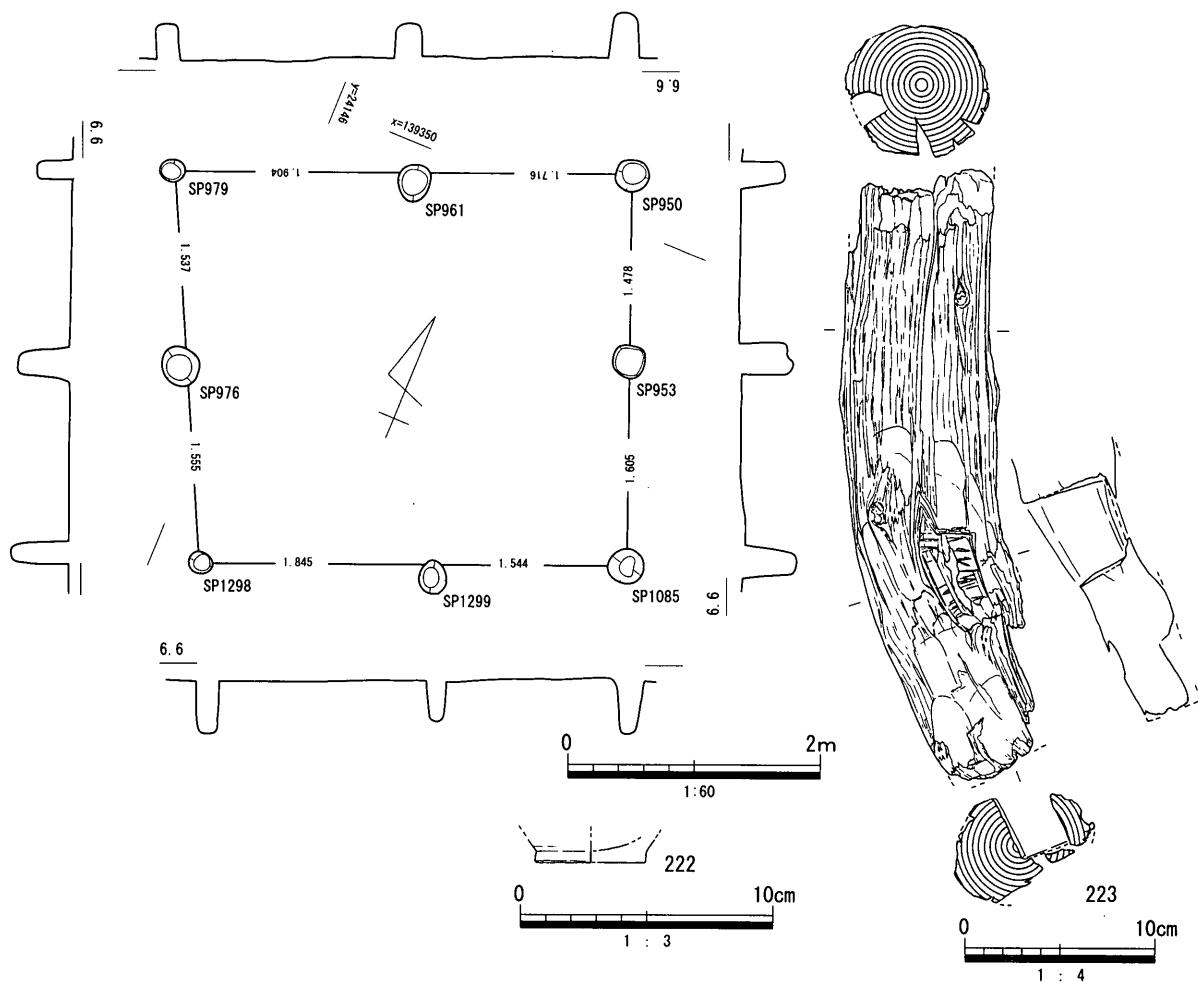
第76図 SB37 平・断面図



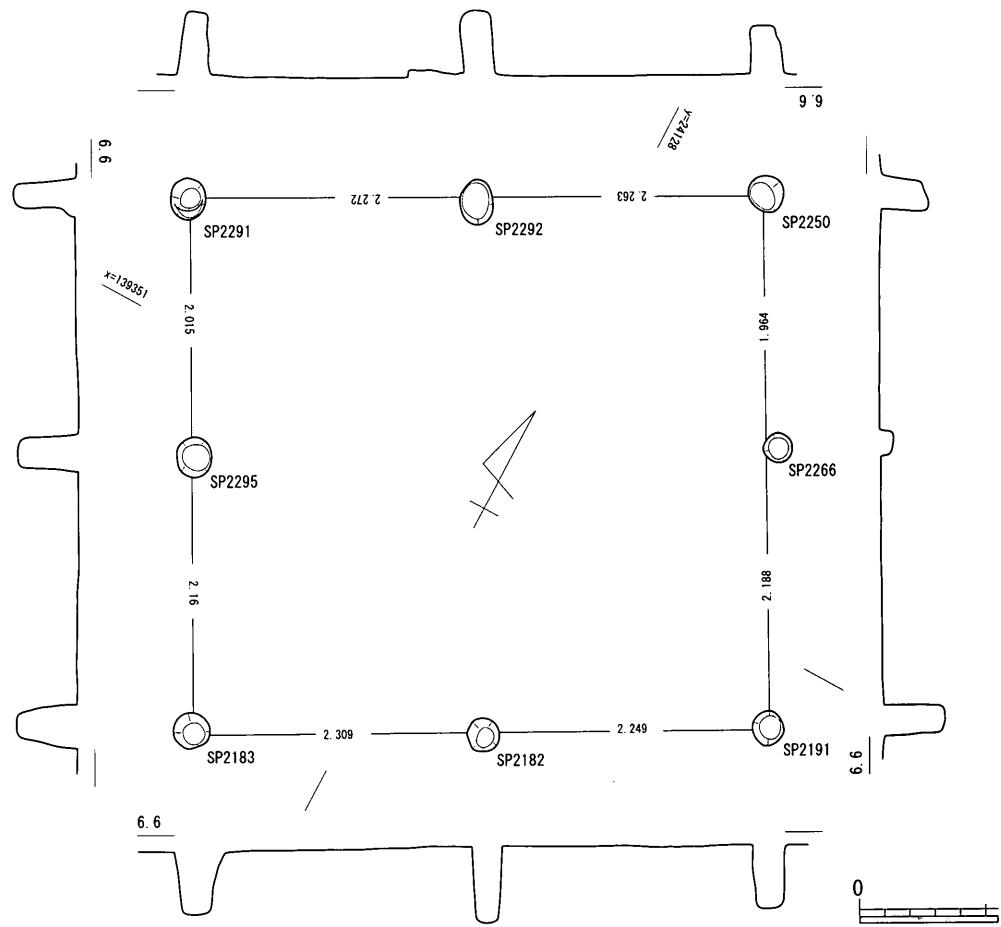
第77図 SB38 平・断面図、出土遺物実測図



第78図 SB39 平・断面図、出土遺物実測図



第79図 SB40 平・断面図、出土遺物実測図



第 80 図 SB41 平・断面図

遺物は、器種不詳の土師質土器小片が少量出土した以外に、焼土塊はやや多量に出土した。時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。

SB30 (第 69 図)

II a 区東端部で検出。東半部は調査区外へ延長するため、全形は不明である。南北方向の柱列の柱間間隔が、東西方向のものよりわずかに広く配されることから、南北棟の建物として復元する。

遺物は、SP1101 より図示した砥石 215 が出土した（図版 19）のみであり、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。215 は安山岩製の砥石で、表裏面に使用に伴う顕著な線条痕を認める。図右面の一部に弱い被熱痕を認め、根石として適当な大きさに破碎され、転用されている。

SB31 (第 70 図)

II a 区中央部で検出。SB32 と重複するが、柱穴跡に切り合い関係はなく、先後関係は不明である。

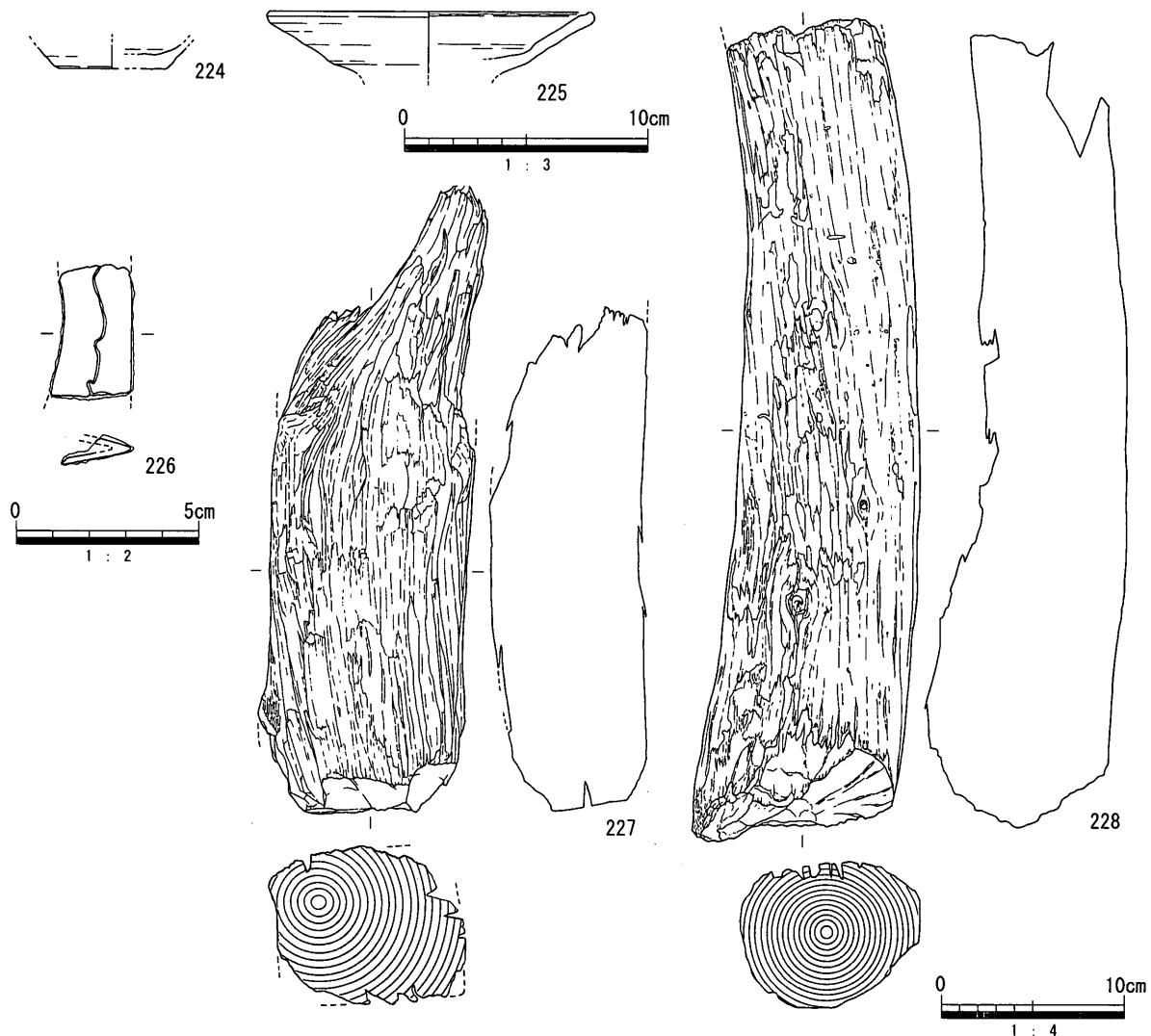
遺物は、土師質土器土鍋等の小片が少量出土したのみであり、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。

SB32 (第 71 図)

II a 区中央部で検出。SB37 ~ 39、SK27 と重複する。このうち柱穴跡の切り合い関係より、SK27 より先行することが確認された。

遺物は、土師質土器小皿等の小片が少量出土しており、16 世紀後半～17 世紀前半を中心とした時期に位置付けられる。

SB33 (第 72 図)



第 81 図 SB41 出土遺物実測図

II a 区北西部で検出。SB34～36 などと重複するが、柱穴跡に切り合い関係はなく、先後関係は不明である。遺物は、備前焼擂鉢等の小片が少量出土しており、16世紀後半～17世紀前半を中心とした時期に位置付けられる。

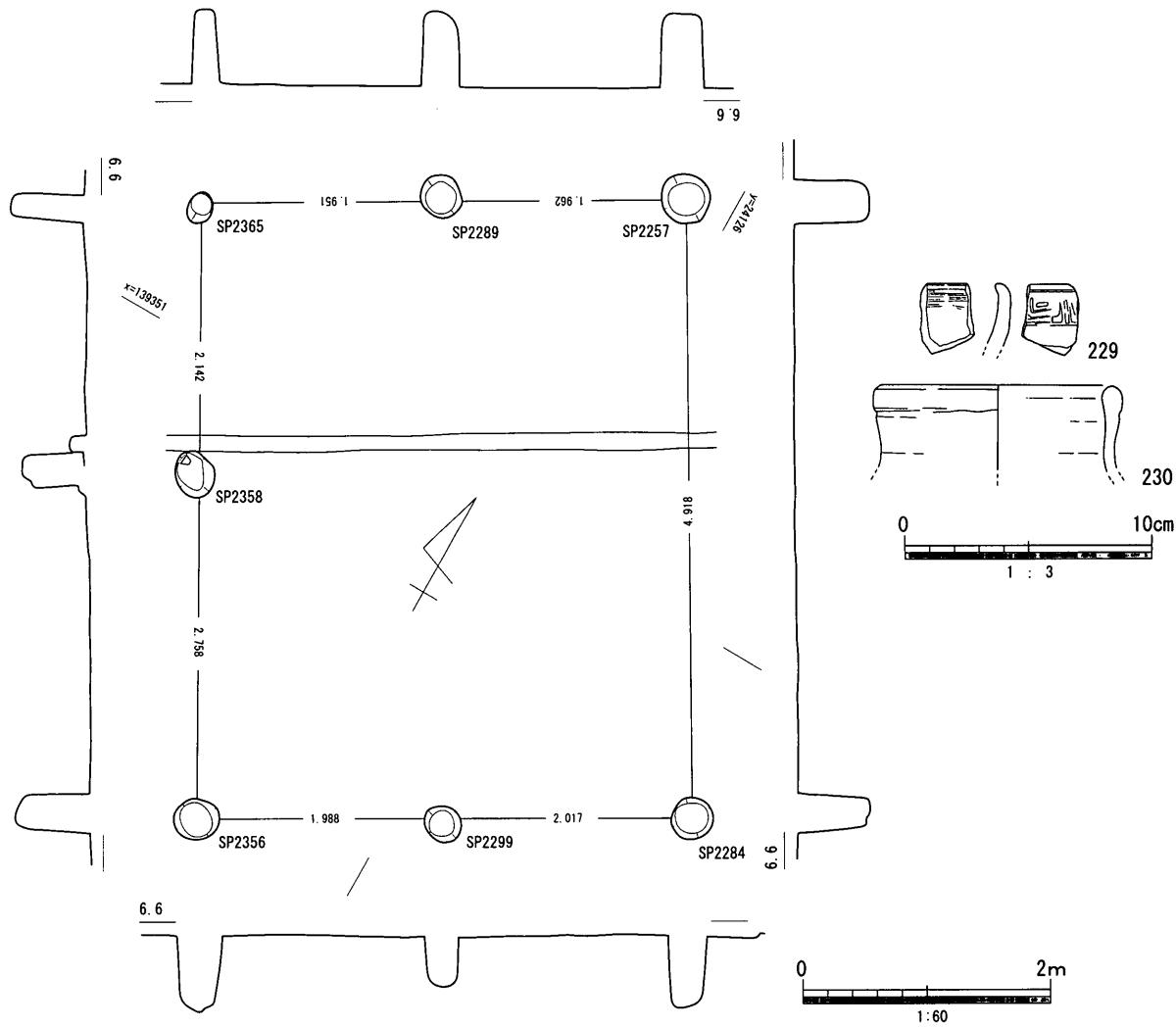
SB34（第 73 図）

II a 区北東部で検出。SB35・36、SK33 A・B と重複し、そのうち柱穴跡の切り合い関係より SB36 より後出し、SK33 A・B より先行することが確認された。

遺物は、図示した以外には土師質土器足釜等の小片が少量出土したのみであり、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。216 は、SP1649 より出土した安山岩製砥石で、砥面を中心強く被熱しており、破碎後柱穴への詰石として転用されていた。

さて本建物跡は、後述する SB36 とほぼ規模が等しく、主軸方向も概ね一致する。近接して配されていることから、両建物が有機的な関係にあることが想像される。つまり、既述した柱穴跡の切り合い関係から、SB36 が廃された後、位置をやや北に偏らせて同じ性格を有する施設として、本建物が建て替えられた可能性を想定したい。また後述するように、SB36 が出土遺物より 16 世紀後半以降に建てられていることから、本建物跡は 16 世紀後半を上限とし、おそらくは 17 世紀前半を中心とした時期に位置付けられる。

SB35（第 74 図）



第 82 図 SB42 平・断面図、出土遺物実測図

II a 区北東部で検出。SB36、SK31・32 と重複し、そのうち柱穴跡の切り合い関係より、SK31 に先行することが確認された。梁間西列中央柱を欠く。

遺物は、図示した以外には器種不詳の土師質土器の小片等が少量出土したのみで、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。217 は、SP1881 より出土した動物遺存体である。鑑定結果については、後掲する。

SB36 (第 75 図)

II a 区北東部で検出。SB37、SK33 A・B と重複し、柱穴跡の切り合い関係より、SK33 A・B より先行することが確認された。

遺物は、図示してはいないが土師質土器足釜等の小片が出土しており、16 世紀後半を上限とする時期に位置付けられる。

SB37 (第 76 図)

II a 区西部で検出。遺物は、器種不詳の土師質土器小片等が少量出土したのみであり、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。

SB38 (第 77 図)

II a 区南西部で検出。北西隅柱を欠くが、その他の柱穴跡は規格的に配されることから、東西棟の建物として報告する。SB39 と重複するが、柱穴跡に切り合い関係はなく、先後関係は不詳である。

遺物は、図示した以外に、土師質土器小皿等の小片が若干量出土しているほか、多量の焼土塊がみられた。220は壁土とみられる焼土塊。平行する2条の木舞の痕跡が認められる。出土した遺物より、16世紀後半を上限とする時期に位置付けられる。

SB39(第78図)

II a区南西部で検出。遺物は、図示した以外に土師質土器碗等の小片が少量出土したのみであり、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。

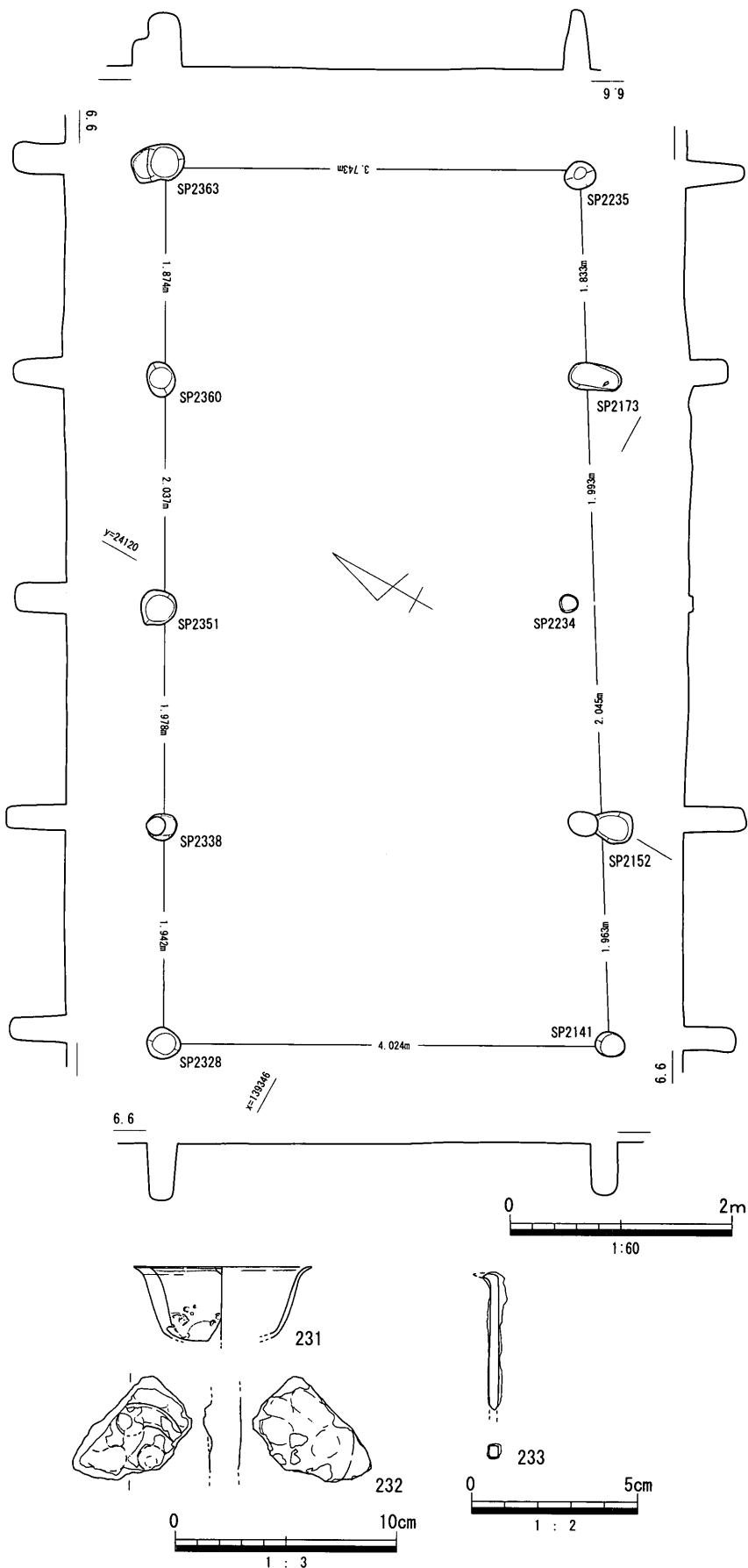
SB40(第79図)

II a区南部で検出。SD09と重複し、切り合い関係より先行する。

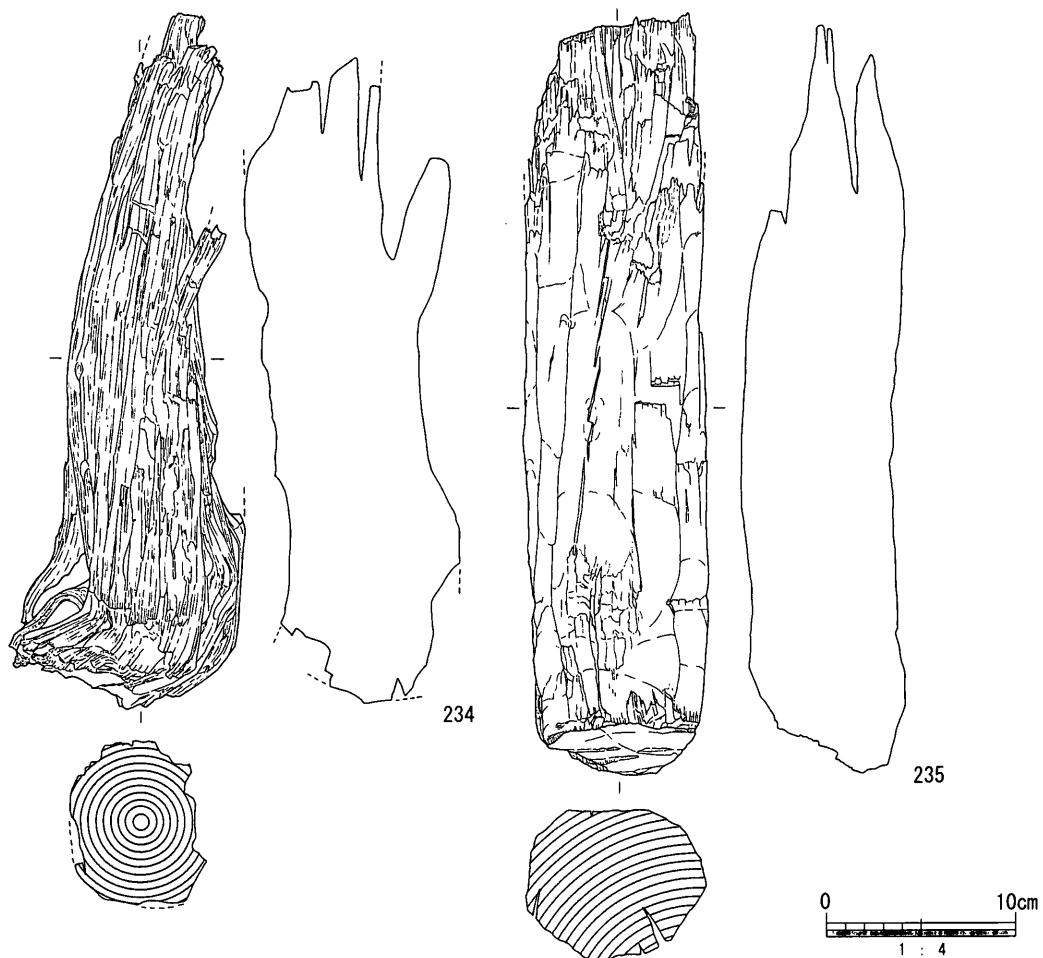
遺物は、図示した以外に土師質土器杯等の小片が少量出土しており、16世紀後葉～17世紀前葉を中心とした時期に位置付けられる。223は、SP953より出土した柱材である。マツ属の芯持ちの丸太材を使用し、側面はほぼ無加工である。下端付近に一部平坦面を削り出し、そこに矩形の臍穴が穿たれている。臍部は土中に埋められた状態で出土したことから、柱材として転用されたと考えられる。

SB41(第80・81図)

II b区北東部で検出。SB42と重複するが、柱穴跡に切り合い関係はなく、



第83図 SB43平・断面図、出土遺物実測図1



第 84 図 SB43 出土遺物実測図 2

先後関係は不詳である。

遺物は、図示した以外には、土師質土器小皿や焼土塊等の小片が少量出土したのみである。225 は、肥前系施釉陶器皿で、大橋Ⅱ期前半に所属する。226 は、SP2250 より出土した鉄製鋤先とみられる小片である。227 は SP2292 より、228 は SP2295 より出土した柱材（図版 31）である。いずれもマツ属の芯持ち材を使用し、下端を周縁より加工して、概ね平坦に仕上げる。腐食が顕著なため断定はできないが、227 は角材として加工されている可能性がある。出土遺物より、17 世紀前半を中心とした時期に位置付けられる。

SB42（第 82 図）

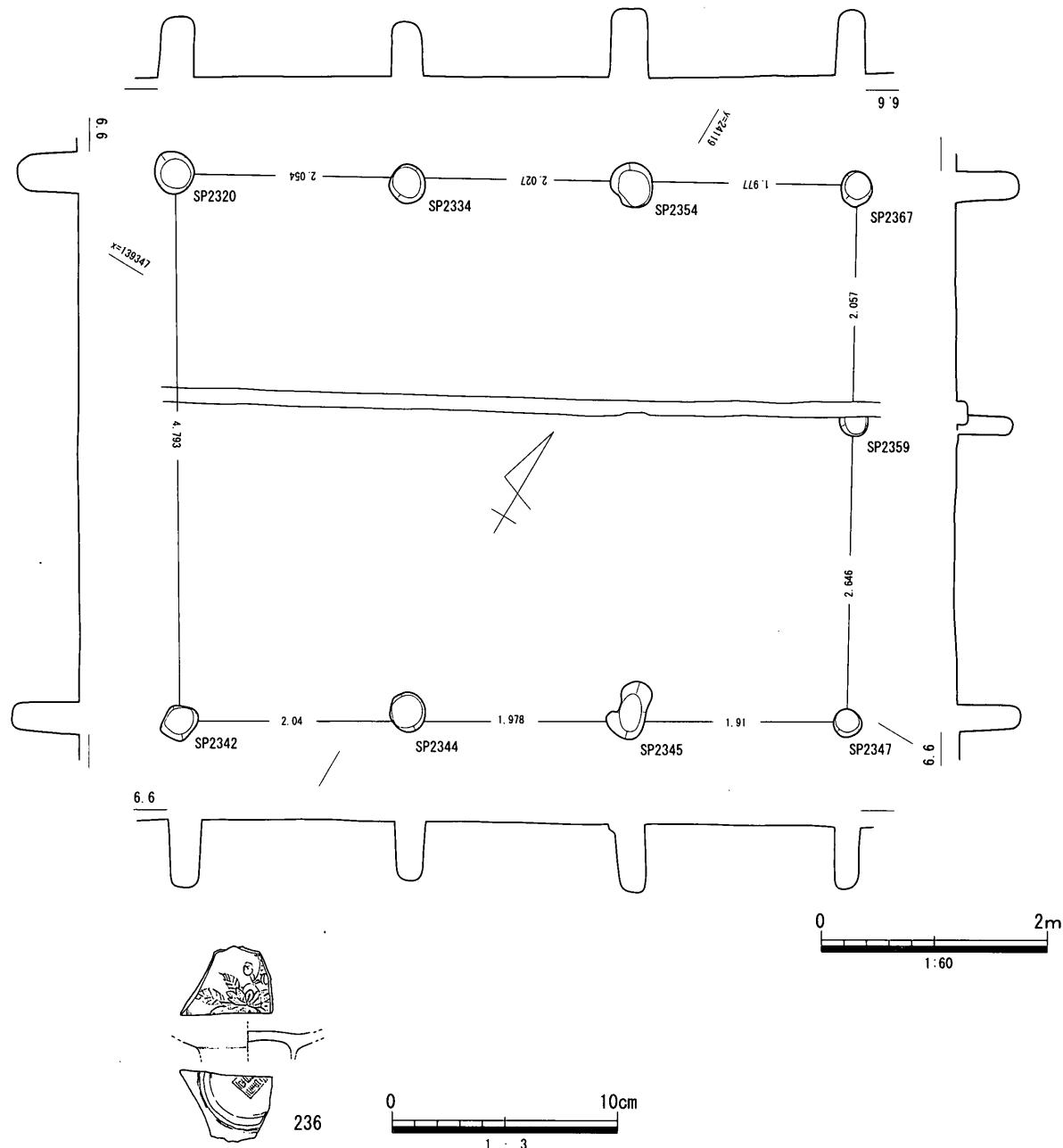
II b 区北東部で検出。桁行東列中央柱を欠く。SB43、SK36 と重複し、そのうち柱穴跡の切り合い関係より、SK36 より後出することが確認された。SP2358 には、柱材が遺存する（図版 32）。

遺物は、図示した以外に、土師質土器小皿・杯・擂鉢・鍋や瓦器碗、焼土塊等の小片が出土している。229 は、SP2289 より出土した口縁部にスタンプ文を有する浅鉢形火鉢である。230 は、SP2257 より出土した備前焼壺で、乗岡中世 5 期か。出土遺物より、16 世紀後半を中心とした時期に位置付けられる。

SB43（第 83・84 図）

II b 区北部で検出。SB44 と重複するが、柱穴跡に切り合い関係はなく、先後関係は不詳である。梁間長は、西列が東列より約 0.3m 長く、平面プランはやや台形状を呈するが、柱列は概ね揃っていることから、図示した復元案により報告する。SP2141・2363 には、柱材が遺存する（図版 31・32）。

遺物は、図示した以外には、土師質土器小皿・足釜や須恵質土器、焼土塊等の小片が少量出土したのみである。231 は、SP2152 より出土した中国景德鎮窯系青花小杯である。232 は、SP2363 より出土した三巴文軒丸瓦



第85図 SB44 平・断面図、出土遺物実測図

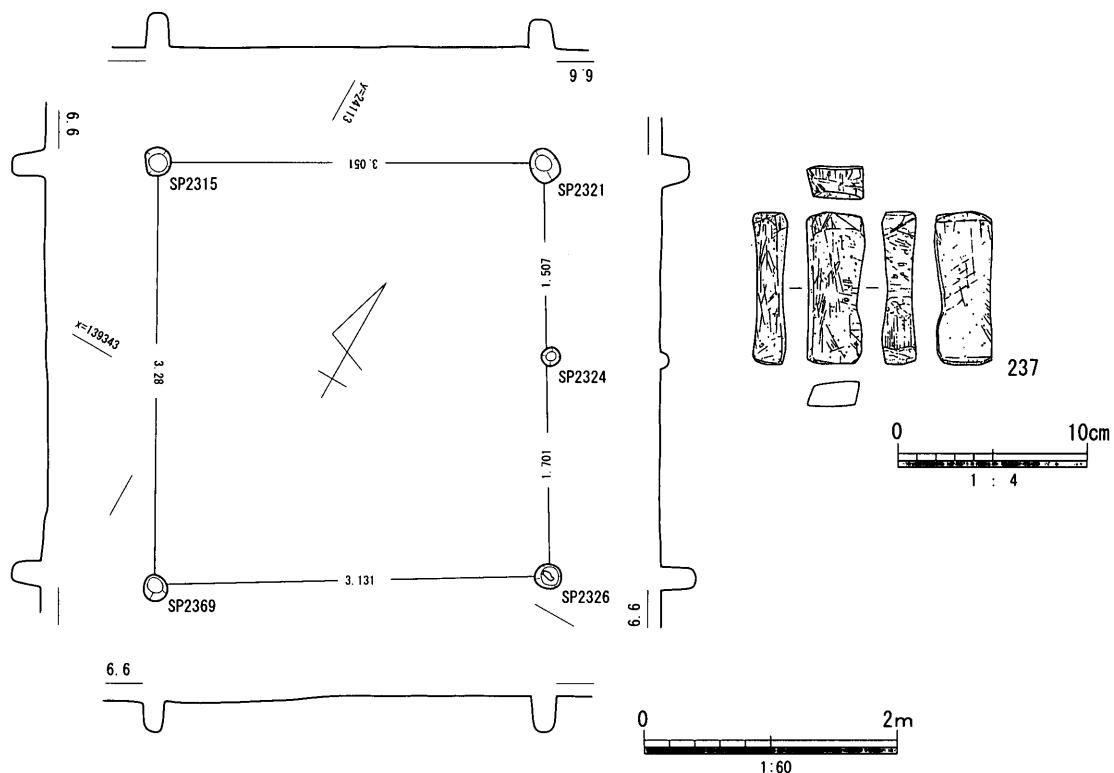
の瓦当部小片である。234はSP2363より、235はSP2141より出土した柱材である。234はツガ属の芯持ち材を使用するが、235は同じツガ属の辺材を使用する。いずれも加工の程度は低い。出土遺物より、17世紀前半を中心とした時期に位置付けられる。

SB44(第85図)

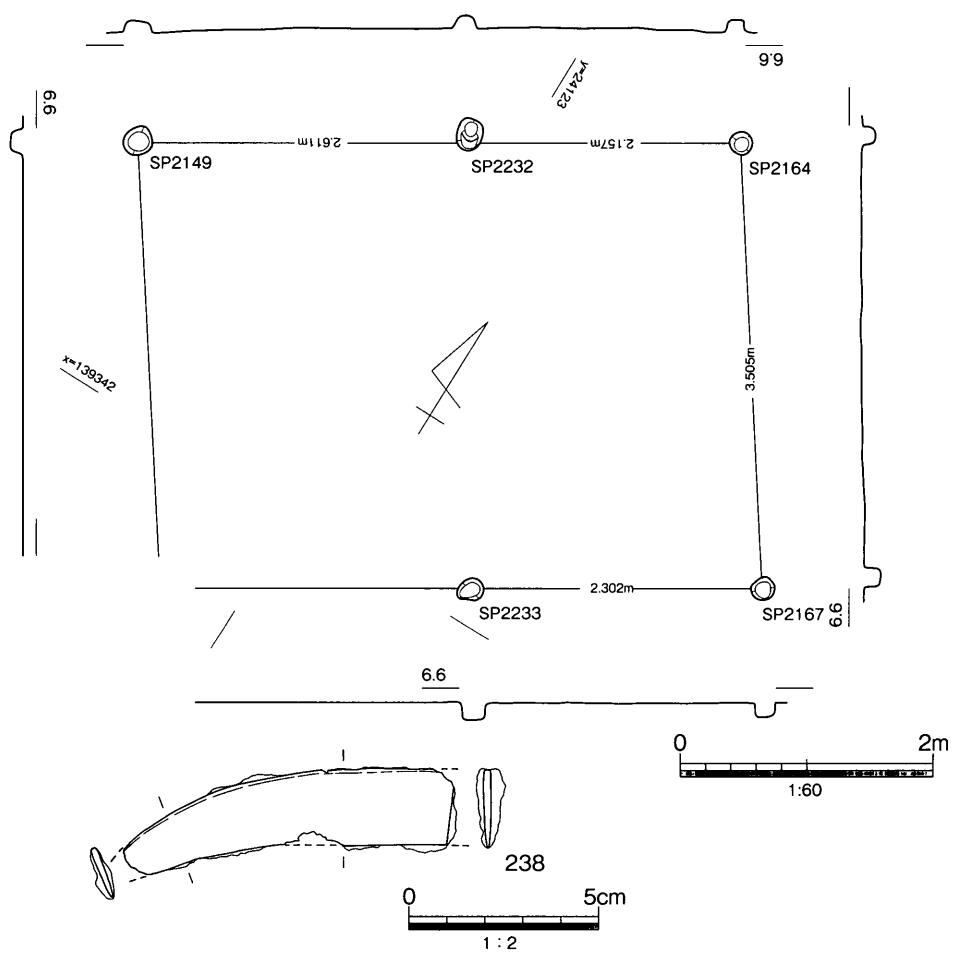
II b区北部で検出。梁間西列中央柱を欠く。遺物は、図示した以外に、土師質土器小皿・足釜・鍋、器種不詳の肥前系陶器等の小片が若干量と、多量の焼土塊が出土した。比較的遺物量は豊富だが、図示可能な遺物は少ない。236は、SP2344より出土した中国景德鎮窯系青花碗で、いわゆる饅頭心タイプの小野碗E群に所属する。出土遺物より、17世紀前半を中心とした時期に位置付けられる。

SB45(第86図)

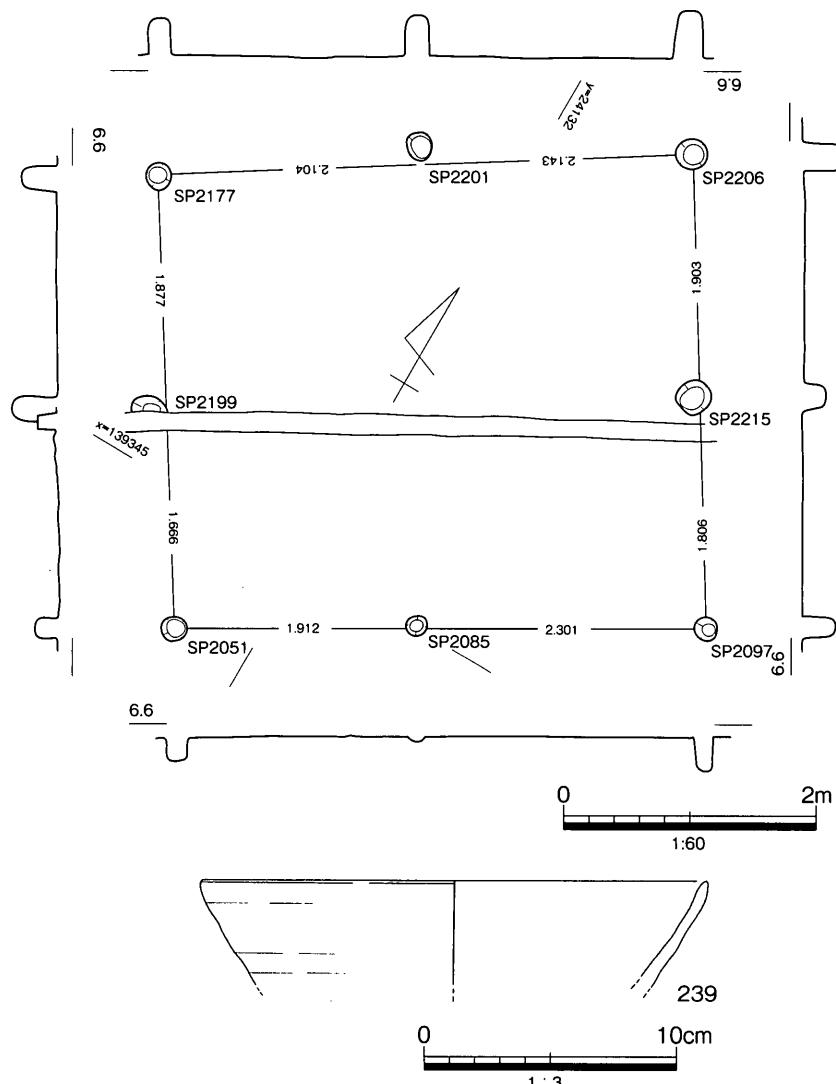
II b区北西部で検出。桁行西列中央柱を欠く。遺物は、図示した以外に、土師質土器小皿等の小片が少量出



第86図 SB45平・断面図、出土遺物実測図



第87図 SB46平・断面図、出土遺物実測図



第 88 図 SB47 平・断面図、出土遺物実測図

土したのみであり、詳細な時期を特定することは困難である。237 は、SP2326 より出土したほぼ完形の流紋岩製砥石で、砥面各面はよく使い込まれている。詰石として転用された状態で出土した（図版 31）。

SB46（第 87 図）

II b 区中央部で検出。南西隅柱を欠くが、それ以外の柱穴は規則的に配されることから、東西棟の側柱建物として報告する。

遺物は、図示した以外に、器種不詳の土師質土器や黒色土器の小片が少量出土したのみであり、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。238 は、SP2167 より出土した鉄鎌片である。

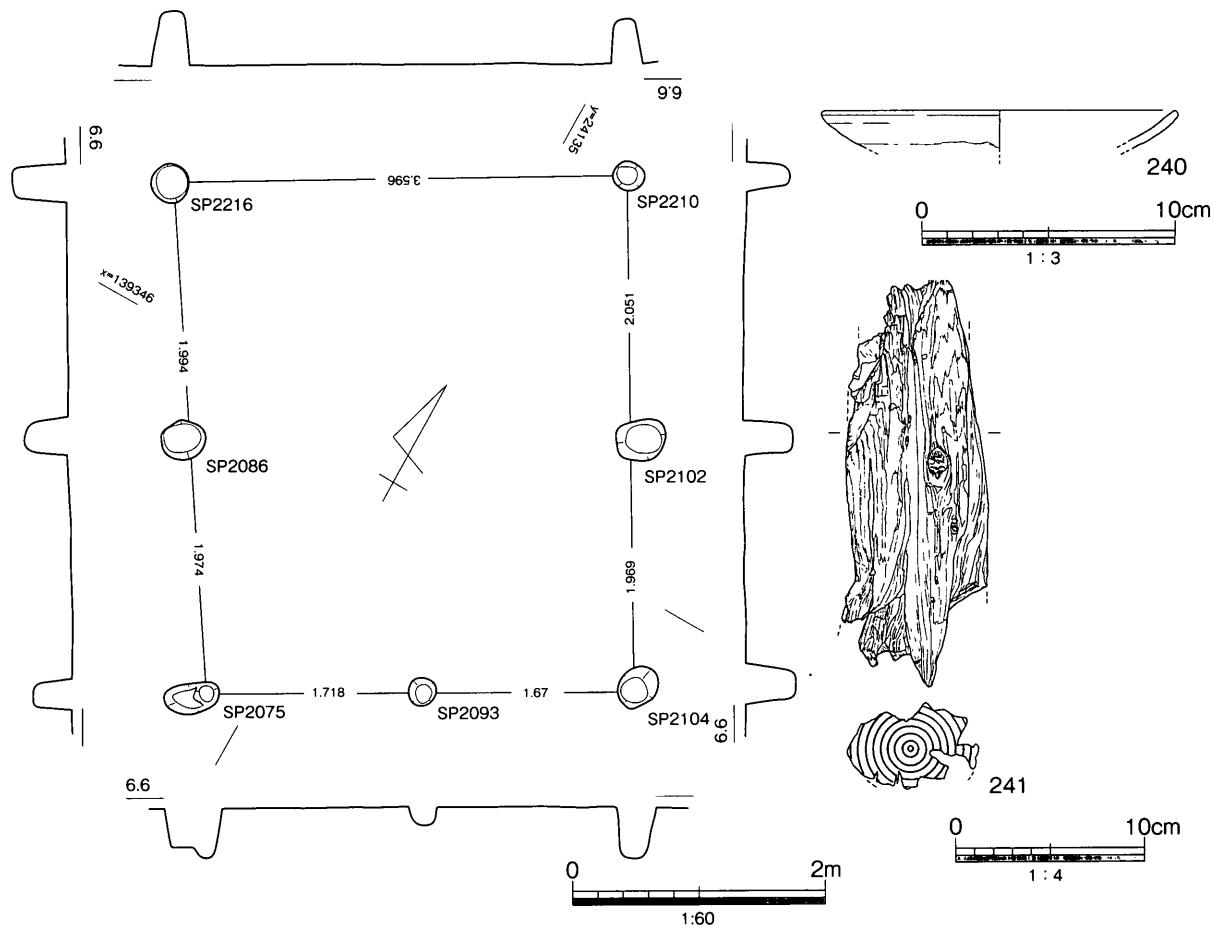
SB47（第 88 図）

II b 区東部で検出。SB48 と重複するが、柱穴跡に切り合い関係はなく、先後関係は不詳である。

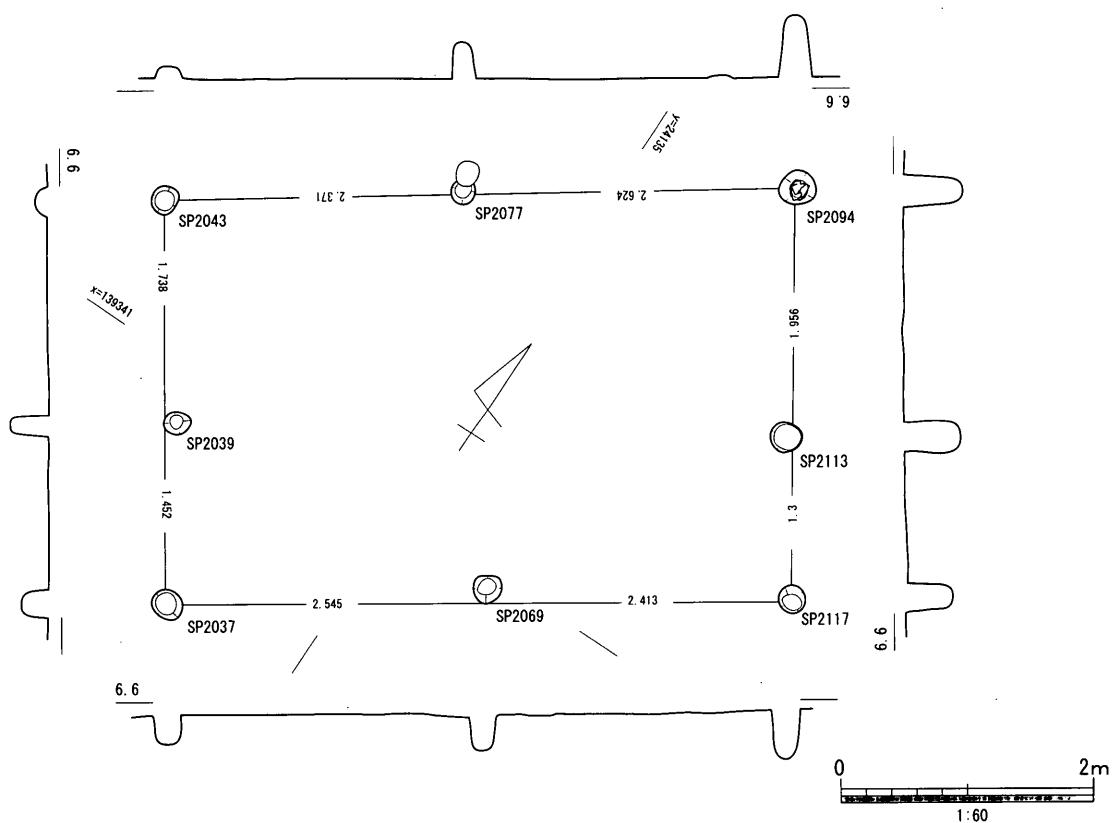
遺物は、図示した以外に、土師質土器小皿・擂鉢や焼土塊等の小片が少量出土した。239 は、SP2177 より出土した朝鮮白磁碗もしくは皿である。高松城下等を除いて、農村部からの朝鮮磁器の出土例は皆無である。出土遺物より、16 世紀後半～17 世紀前半を中心とした時期に位置付けられる。

SB48（第 89 図）

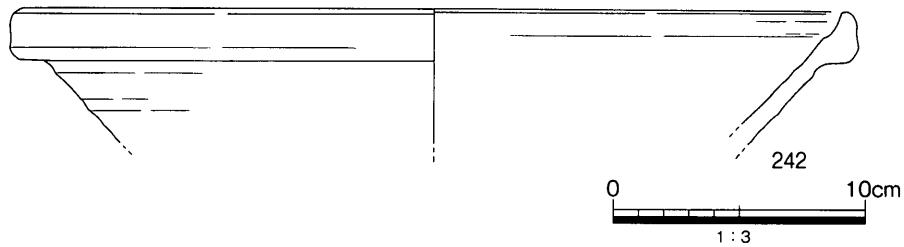
II b 区東部で検出。SB49・50 と重複するが、柱穴跡に切り合い関係はなく、先後関係は不詳である。梁間



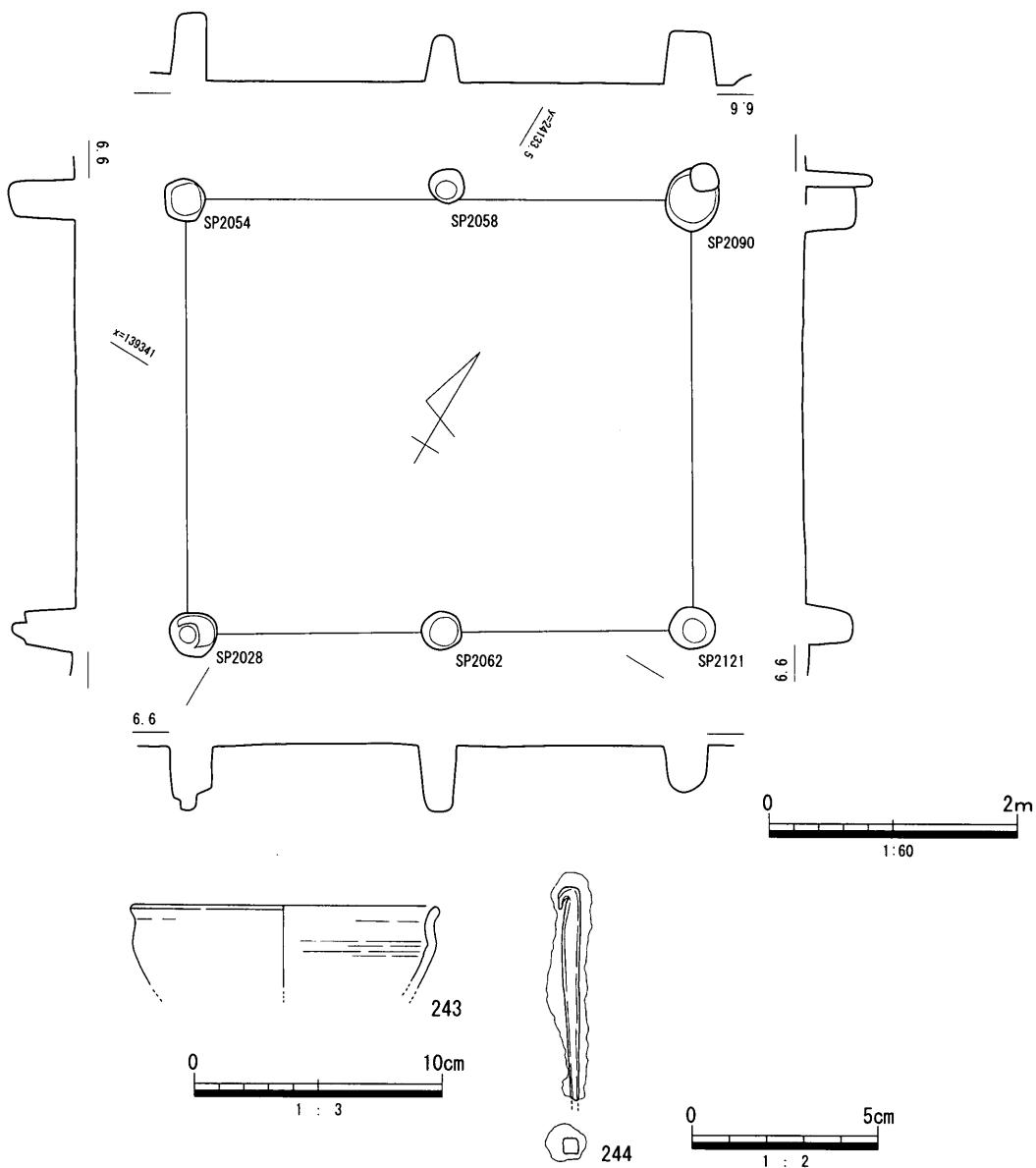
第89図 SB48 平・断面図、出土遺物実測図



第90図 SB49 平・断面図



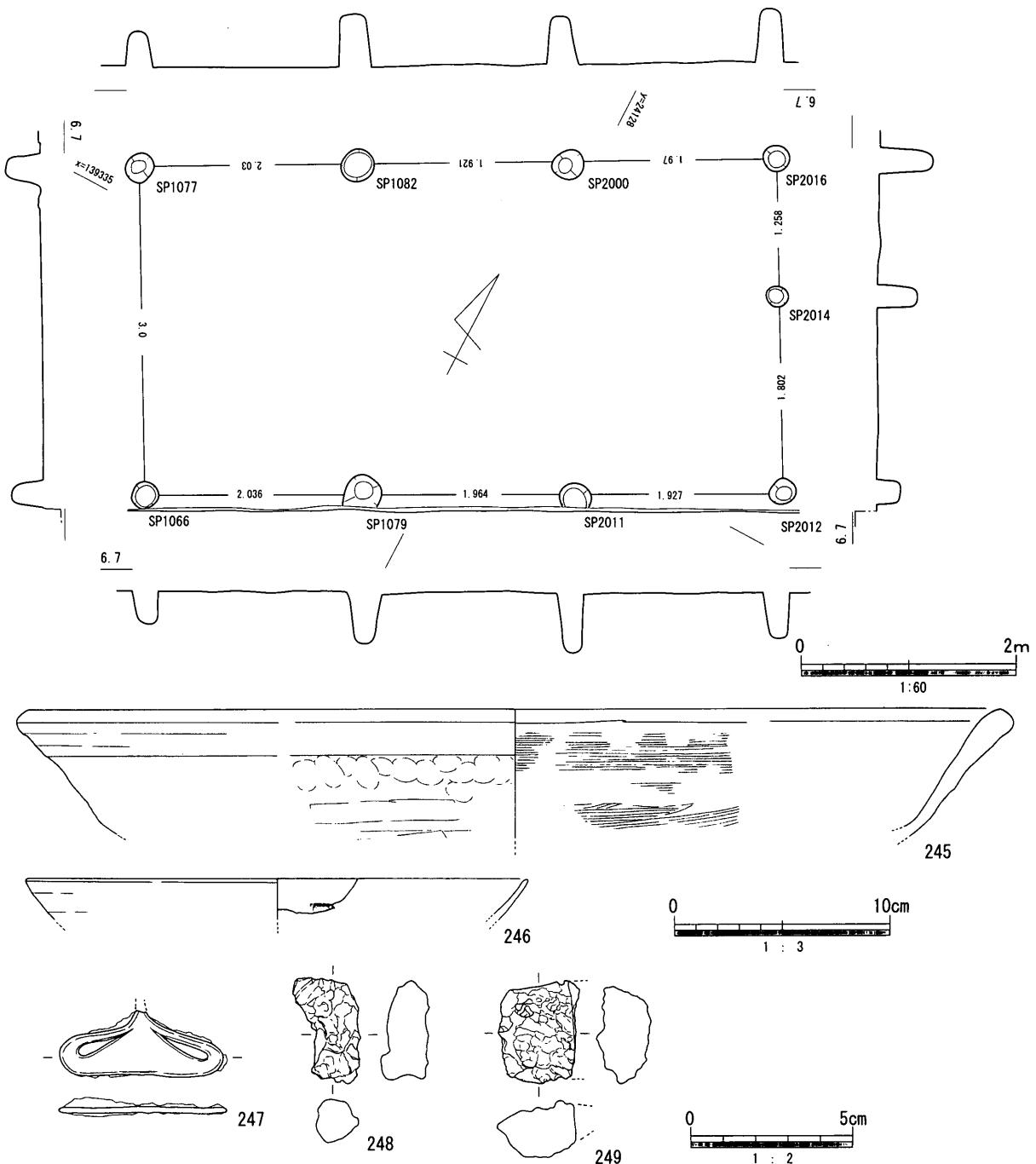
第91図 SB49出土遺物実測図



第92図 SB50平・断面図、出土遺物実測図

北列中央柱を欠く。

遺物は、図示した以外に、土師質土器小皿・杯・足釜や須恵質土器、亀山焼、焼土塊等の小片が少量出土した。240は、SP2104より出土した肥前系施釉陶器皿で、大橋II期前半に所属する。241は、SP2086より出土した柱材（図版30）である。腐食が顕著なため、加工痕等は不明であるが、ツガ属の芯持ち材を使用する。出土遺物より、17世紀前半を中心とした時期に位置付けられる。



第93図 SB51 平・断面図、出土遺物実測図

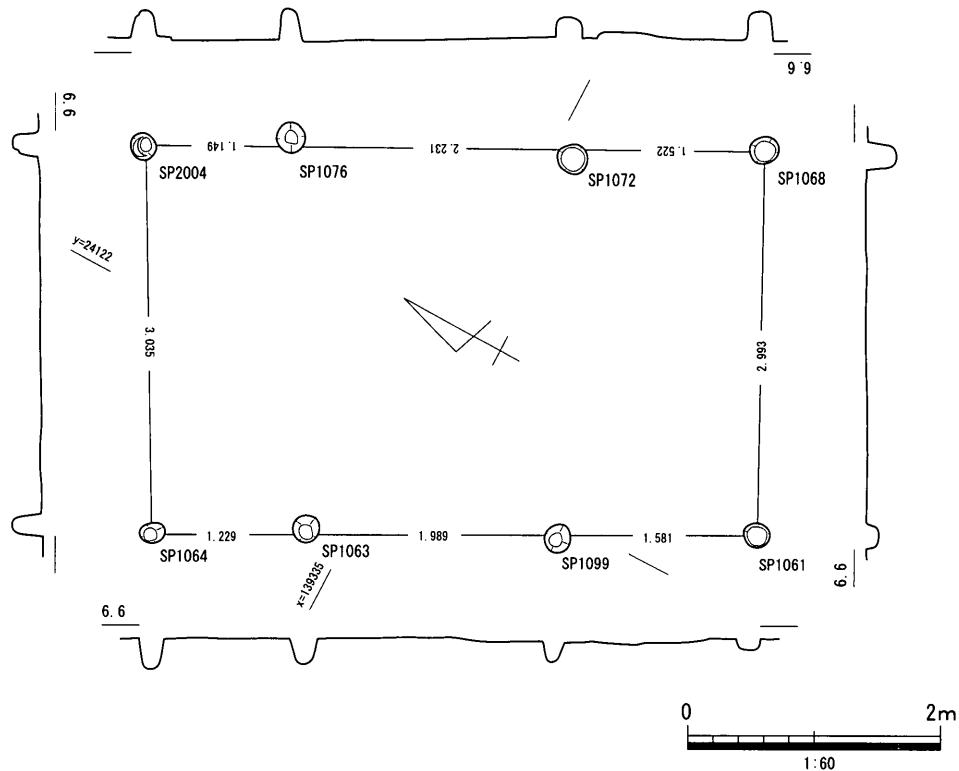
SB49 (第90・91図)

II b 区南東部で検出。SB50 と重複するが、柱穴跡に切り合い関係ではなく、先後関係は不詳である。

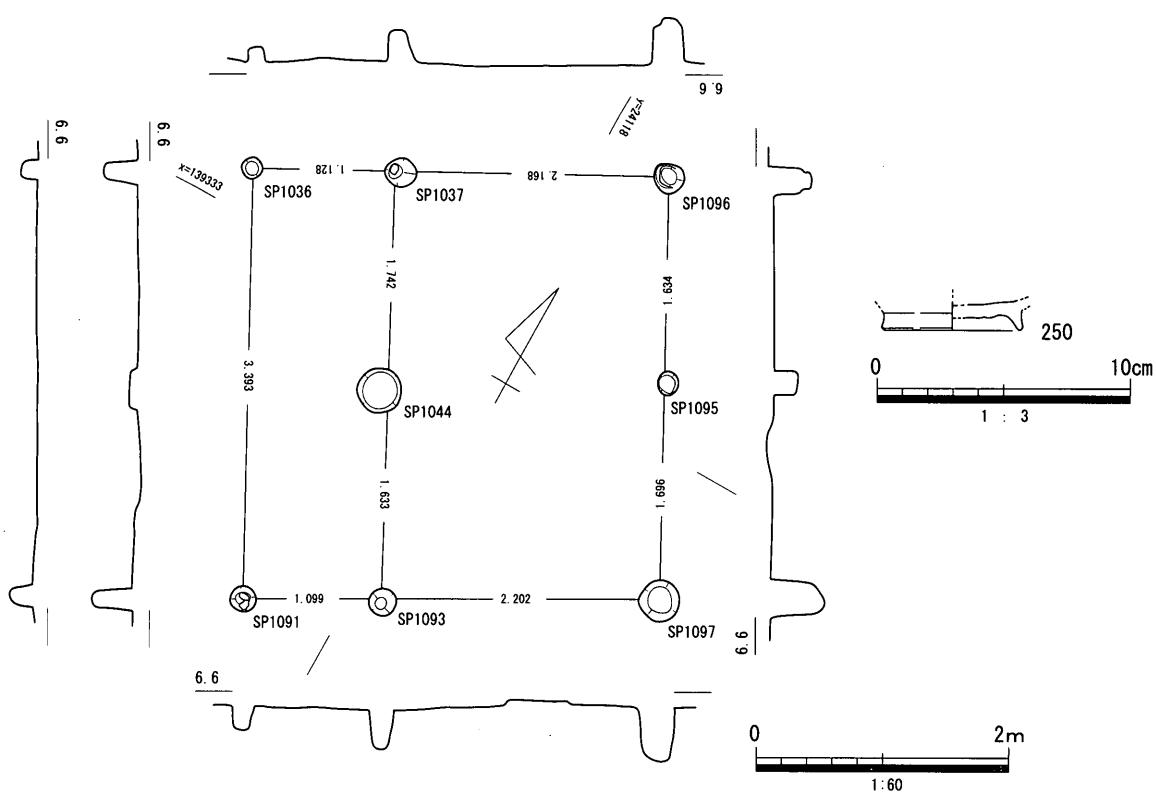
遺物は、図示した以外には、器種不詳の土師質土器等の小片が少量出土したのみである。242 は、東播系須恵器捏鉢で、森田第IX期第2段階に所属することが考えられる。出土遺物より 14世紀中頃を中心とした時期に位置付けられる。

SB50 (第92図)

II b 区南東部で検出。遺物は、図示した以外に、器種不詳の土師質土器や黒色土器、備前焼擂鉢、肥前系陶器皿、瀬戸・美濃系陶器、平瓦、焼土塊等の小片が少量出土した。図示した遺物は、いずれも SP2028 出土の遺物である(図版30)。243 は、柱痕部底面より出土した、肥前系陶器碗。いわゆる天目碗で大橋II期。出土遺物より、



第94図 SB52 平・断面図



第95図 SB53 平・断面図、出土遺物実測図

17世紀前半を中心とした時期に位置付けられる。

SB51(第93図)

II b区南端部で検出。より南に延長する可能性も考えられたが、周辺建物との関係などにより、図示した復元

案により報告する。梁間西列中央柱を欠く。SB52 と重複するが、柱穴跡に切り合い関係ではなく、先後関係は不詳である。

遺物は、図示した以外に、土師質土器小皿・鍋、瓦器、瀬戸・美濃系陶器天目碗等の小片が少量出土している。245・246 は SP2012 より、247～249 は SP1079 より出土した(図版 29)。246 は肥前系磁器皿。大橋 II 期後半。247 は、透かし入り火打金で、頂端部を欠損する以外は、ほぼ完存している。出土遺物より、17 世紀中頃を中心とした時期に位置付けられる。

SB52 (第 94 図)

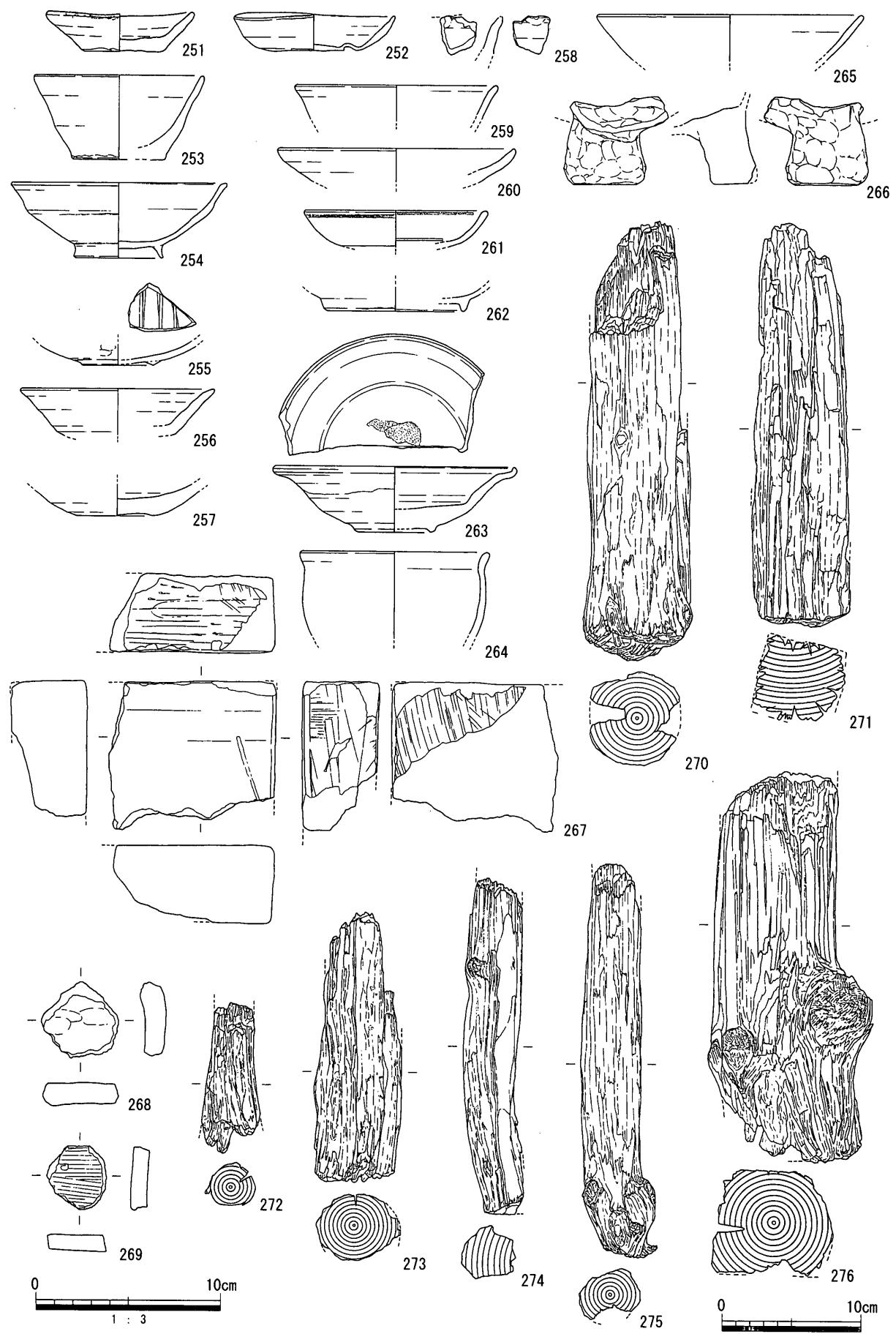
II b 区南西部で検出。遺物は、土師質土器碗等の小片が少量出土したのみで、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。

SB53 (第 95 図)

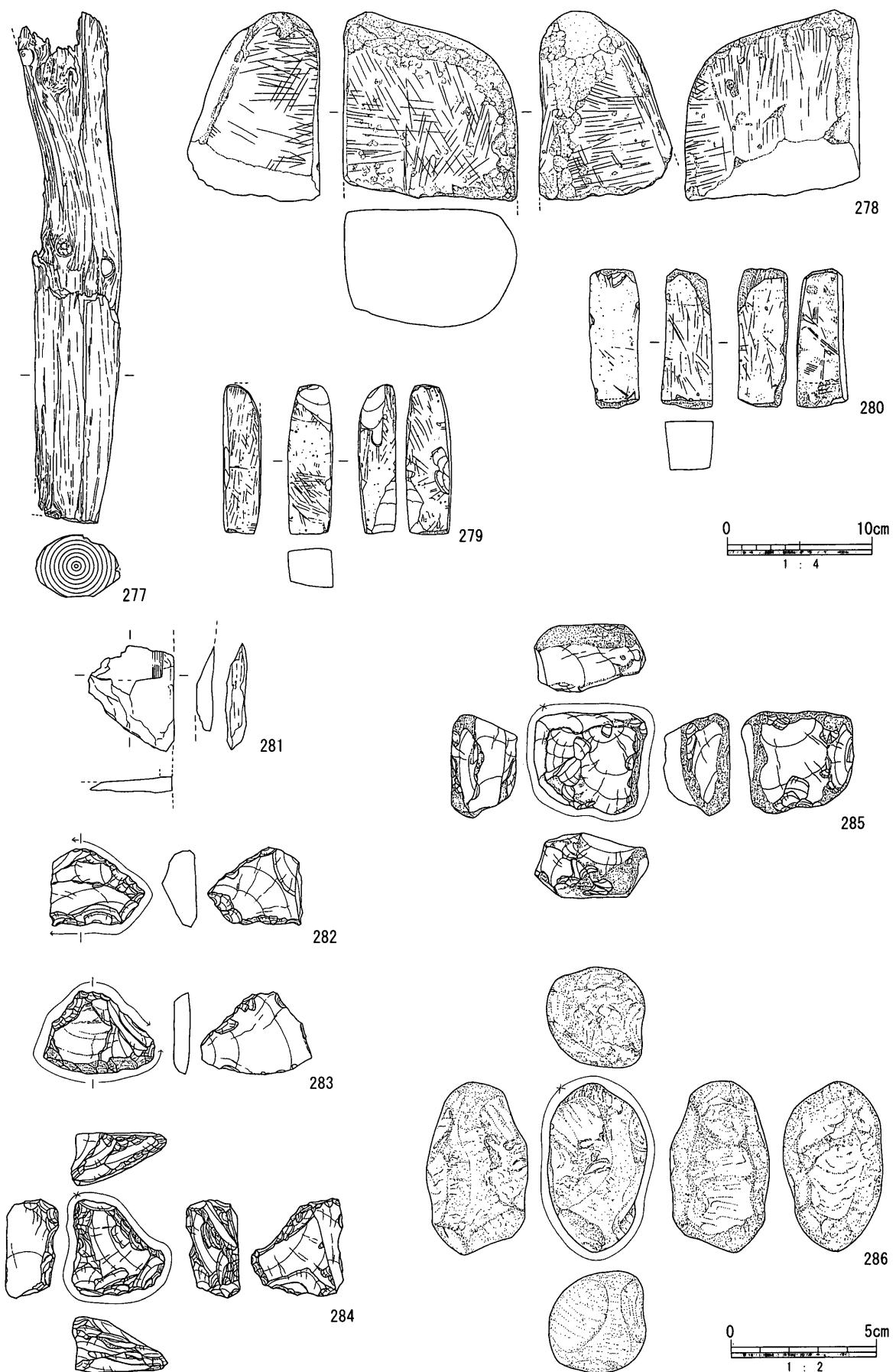
II b 区南西部で検出。遺物は、土師質土器小皿・碗、瓦器、焼土塊等の小片が少量出土したのみであり、詳細な時期を特定することは困難である。

柱穴跡

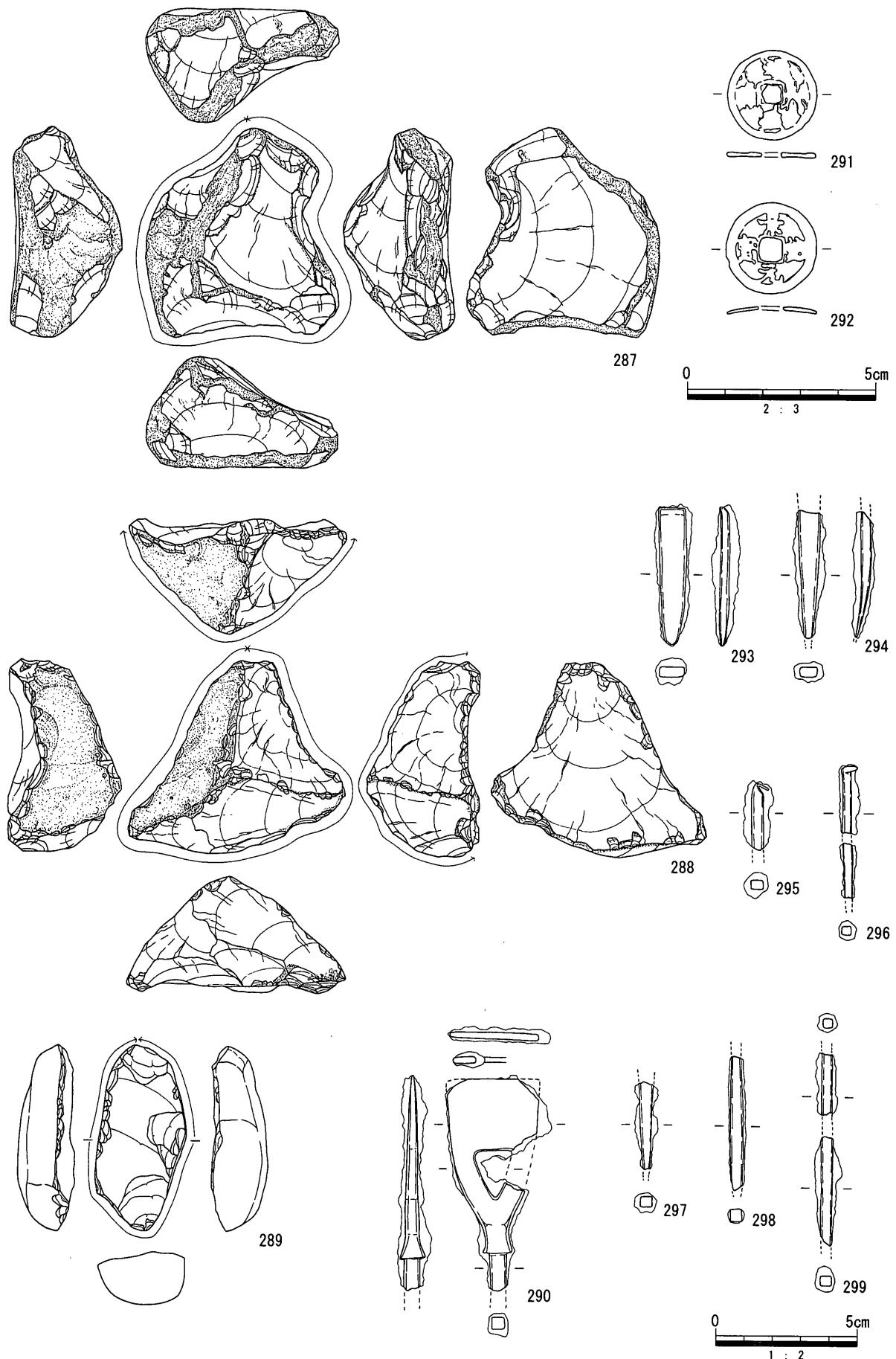
第 96～99 図には、II 区で検出された柱穴跡のうち、建物遺構を構成できなかった柱穴跡から出土した遺物について、II 区の屋敷地の様相を理解する上で、特に必要なものを掲載した。251 は SP2018 より、252 は SP1129 より出土した、ほぼ完存する土師質土器小皿である。いずれも口縁部に煤が付着し、灯明皿として使用され、地鎮具として埋納された可能性がある。254 は、吉備系土師質土器碗で、山本 III-2 期に所属する。255 は、和泉型瓦器碗で、尾上 III-2～3 期に所属する。256 は、備前焼杯で、乗岡近世 I 期に所属する可能性が高い。257 は、肥前系施釉陶器皿で、よく使い込まれており、内面は磨耗する。大橋 I 期に所属する。258 は、瀬戸・美濃系陶器輪花丸皿で、藤澤大窯 3 段階に所属する。259 は肥前系陶器碗、260・263 は同皿で、259・263 は大橋 II 期前半、260 は同 I～II 期前半に所属する。261 は、中国漳州窯系青花皿で、小野皿 E 群に所属する可能性が高い。262 は、中国景德鎮窯系白磁皿で、森田皿 E-2 類に所属する。264 は、肥前もしくは高取系陶器碗で、大橋 II 期に所属する。266 は、土師質土器火鉢脚部で、外面に煤が付着する。267 は、瓦質焼成の埠である。268・269 は、土師質土器を転用した円盤状土製品である。270～277 は柱材である。271・276 の角材を除いて、芯持ち丸太材を利用し、表面の加工に乏しいものが多い。270・272・273・275～277 はマツ属、274 はツガ属を利用する。278～280 は、砥石である。278 は砂岩製で、表面に弱い被熱痕を認める。下半を折損し、柱穴根石として転用された状態で出土した。279・280 は、方柱状の流紋岩製砥石である。281 は、凝灰質頁岩製とみられる硯の小片で、表面は弱く被熱を被っている。282～289 は、いずれもサヌカイト製火打石で、289 は、石英製火打石である。290 は、方頭鎌で、鎌身中央に逆三角形状の透し穴を有する。291 は、SP1542 の検出面近くより銭種面を上に出土(図版 21)した銅銭であるが、摩滅のため銭種は不明である。292 は、SP1851 の検出面近くより立位で出土(図版 22)した。銭種は磨耗により不明瞭ながら、北宋銭の景祐元寶(初鑄 1034 年)の可能性が高い。いずれも地鎮に伴う遺物とみられる。293・294 は、楔状の鉄製品である。295～299 は、角釘である。300～305 は、SP2327 の検出面近くより出土した銅銭である。埋められた当初は、300 を上に 6 枚を重ねた状態で埋置されたとみられるが、300・301 は土圧等により斜めにずれ落ちた状態で出土した。300・302 は銭種面を上に、301・303～305 は下に、重ねられていた(306 は不詳)。なお、306 は銅銭を剥がす際に小片化してしまったが、出土時は完存していた。300・301 は古寛永通寶、302 は北宋銭の元祐通寶(初鑄 1086 年)であり、303 は磨耗が著しく銭種は不明瞭であるが、北宋銭の元祐通寶(初鑄 1086 年)もしくは元符通寶(初鑄 1098 年)と考えられる。304 は明銭の洪武通寶(初鑄 1368 年)、305 も磨耗のため不明瞭ながら洪武通寶とみられる。306 は、銭種不明である。



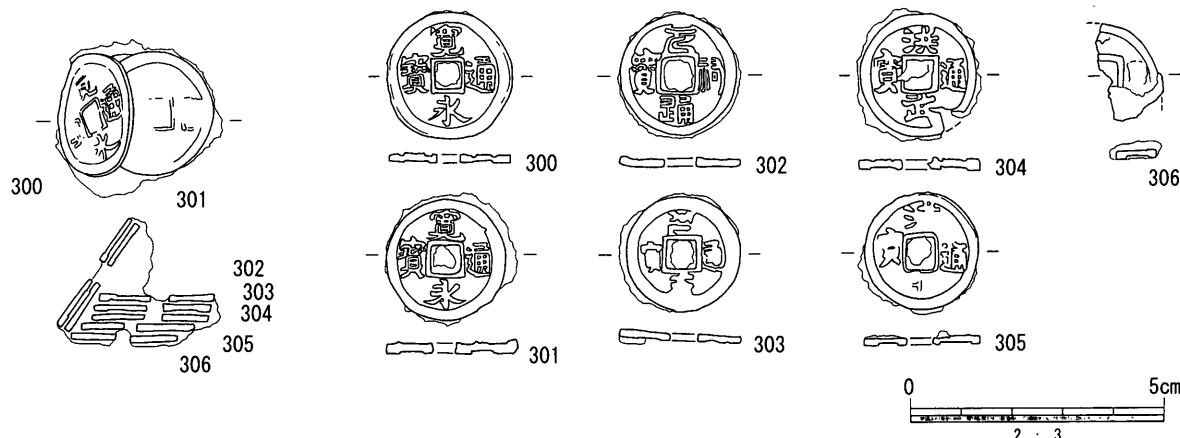
第96図 II区柱穴出土遺物実測図1



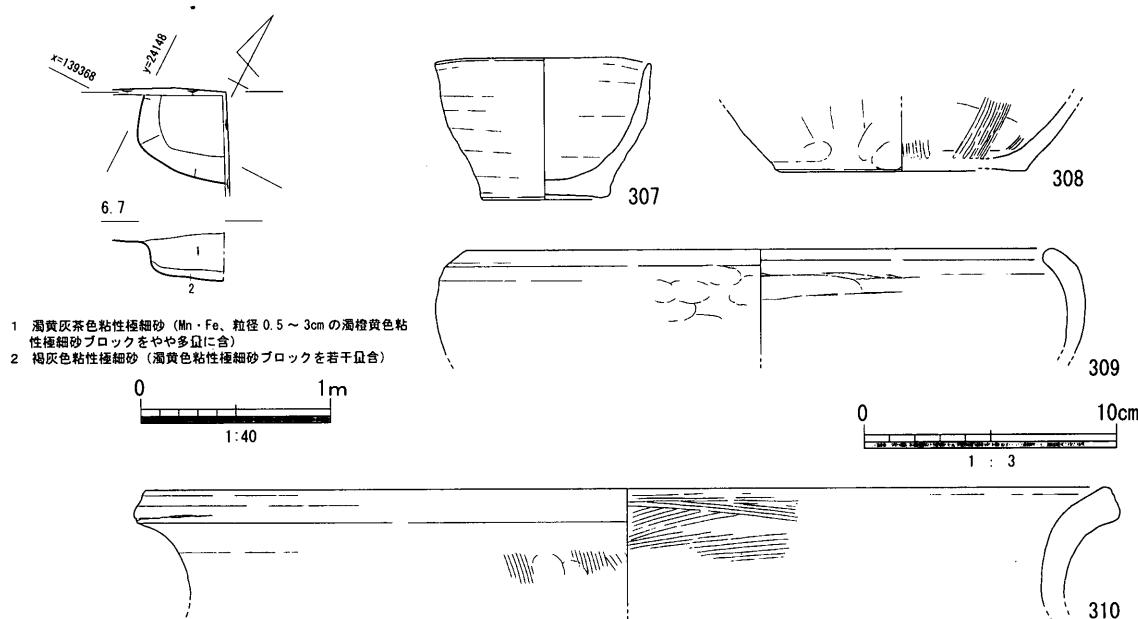
第97図 II区柱穴出土遺物実測図2



第98図 II区柱穴出土遺物実測図3



第99図 SP2327 銅銭出土状況・出土遺物実測図



第100図 SK23 平・断面図、出土遺物実測図

土坑

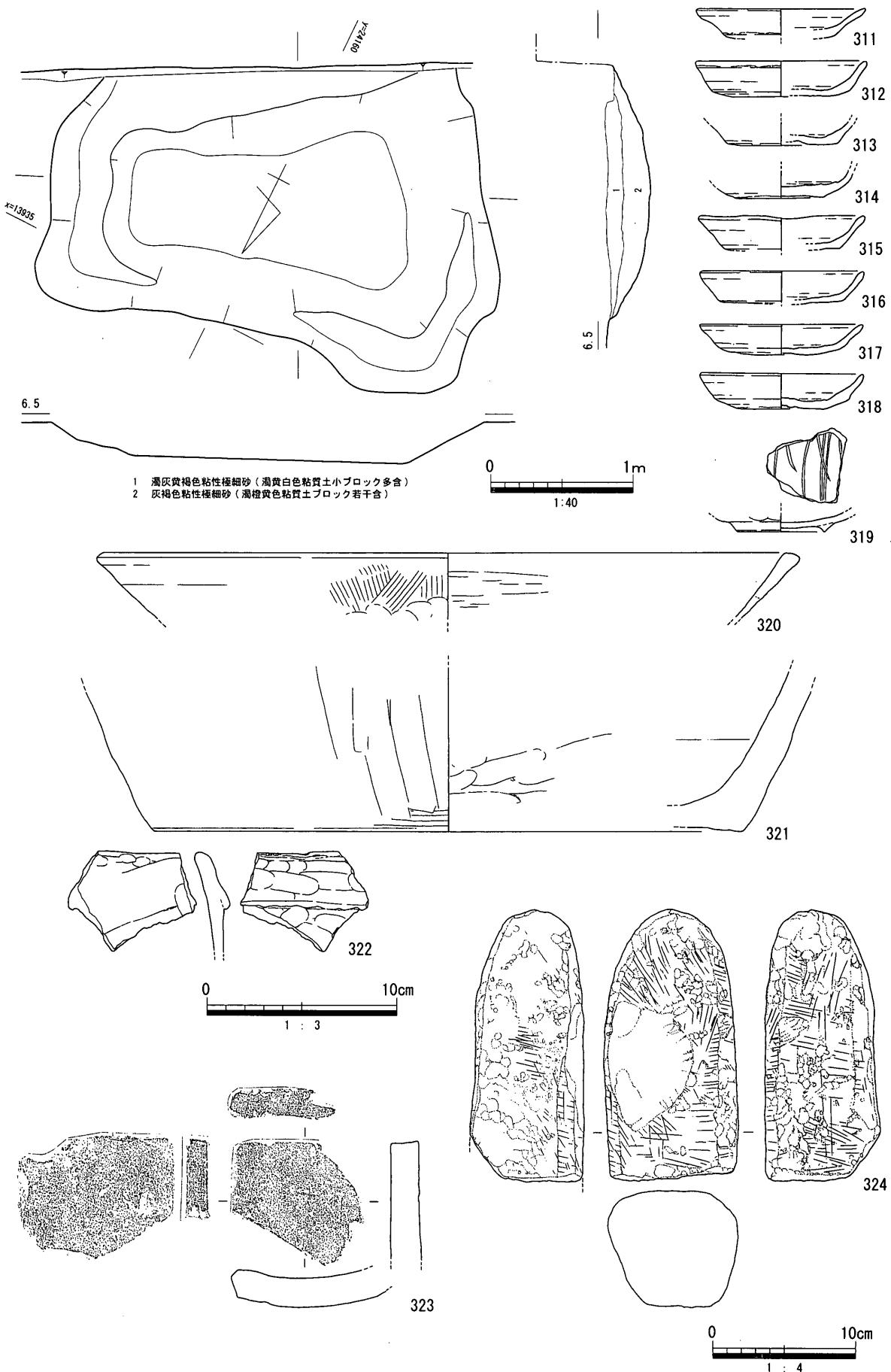
SK23 (第100図)

II a 区北東隅で検出。北・東半は調査区外へ延長するため、全形は不詳である。埋土は2層に細分された。上層（1層）は、ブロック土を多量に含み、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。下層（2層）は、ややグライ化した粘質土で、土坑機能時の堆積層と考えられる。

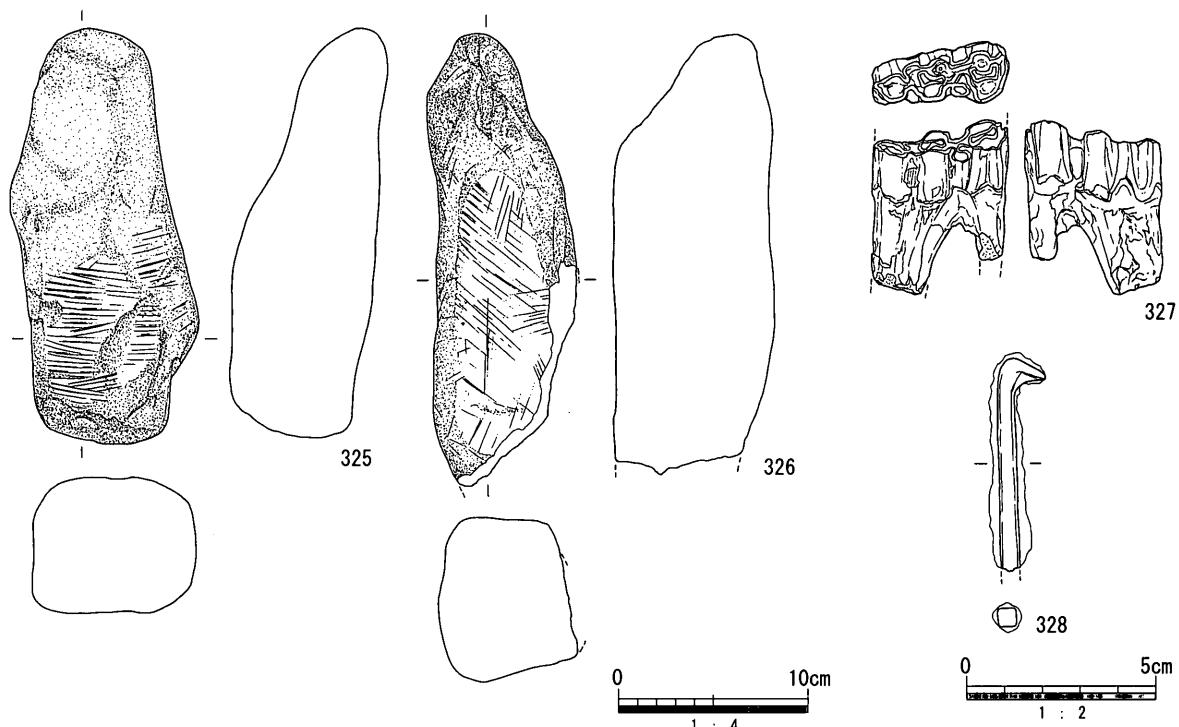
遺物は、上層を中心に少量出土しており、埋め戻し時に廃棄されたと考えられる。上層底面からは、口縁部の一部を欠損した土師質土器杯（307）が、横転して出土した（図版23）。310は、亀山焼甕口縁部である。出土遺物より、16世紀後半を中心とした時期に位置付けられる。

SK26 (第102図)

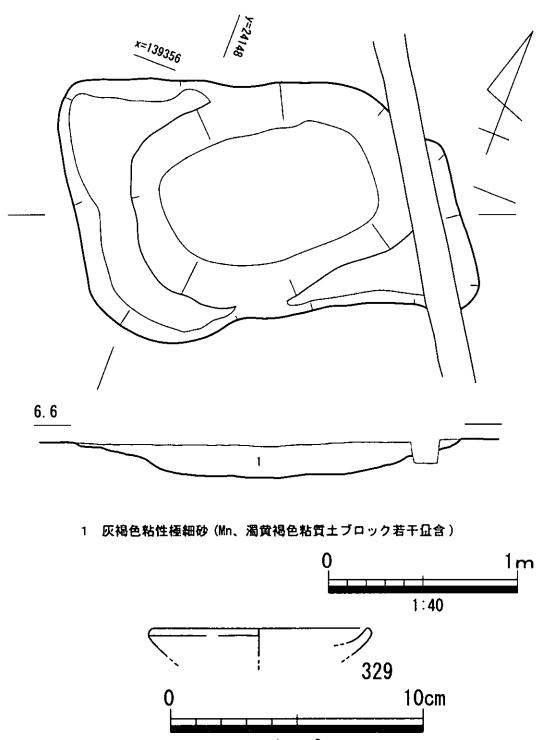
II a 区南東隅、SD09 底面で検出した。南半部は調査区外へ延長するため、全形は不詳である。北西部を中心に浅いテラス面が設けられている。埋土は2層に細分され、上層（1層）は、ブロック土を多量に含むことから、人為的に埋め戻された可能性が考えられ、下層（2層）も同様な性格を有するとみられる。



第101図 SK26 平・断面図、出土遺物実測図1



第102図 SK26出土遺物実測図2



第103図 SK27平・断面図、出土遺物実測図

SK28（第104図）

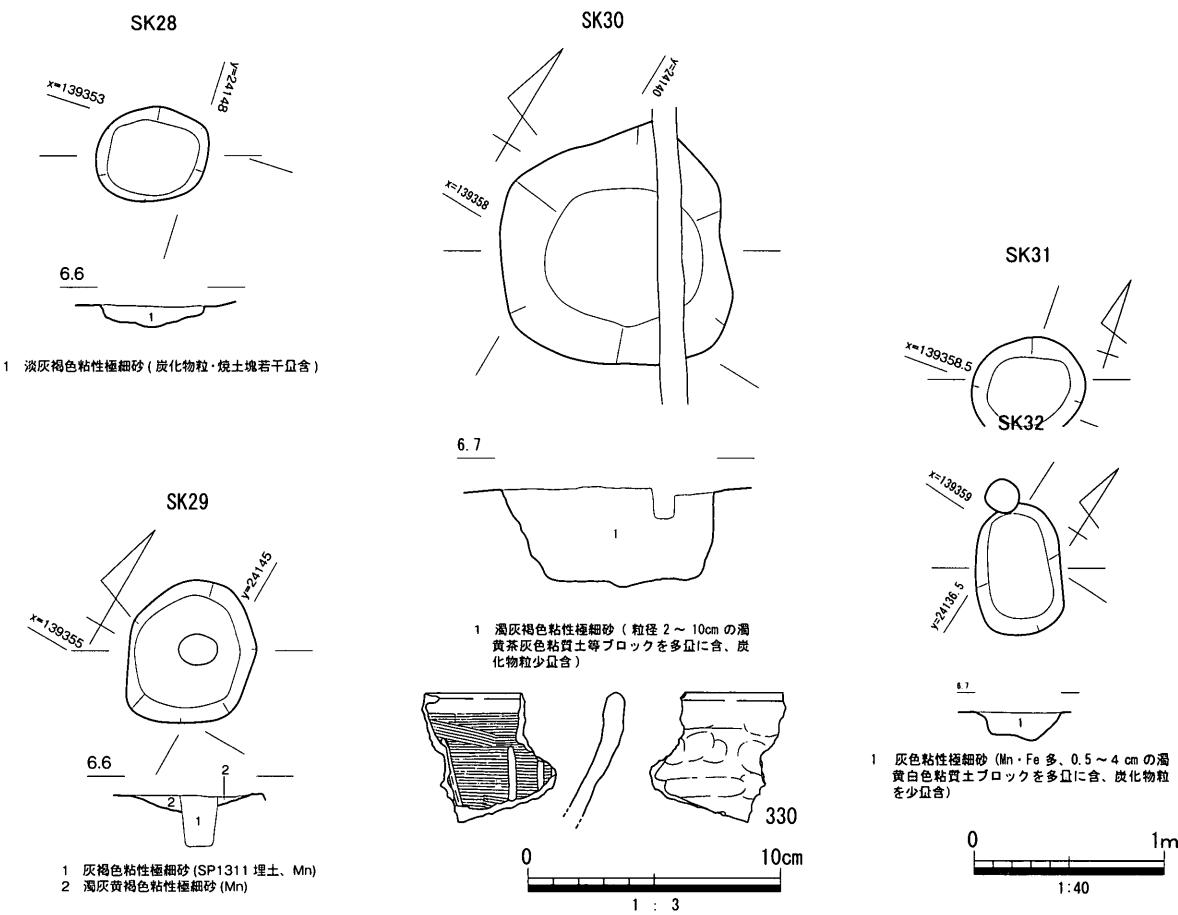
II a区中央部で検出。埋土は単層（1層）で、本層も土坑廃絶後の自然堆積層と考えられる。遺物は、土師質土器などの小片が10点程度出土したのみで、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。

遺物は下層を中心にコンテナ約1/4箱出土した。土師質土器小皿（314・315・317）は、いずれもほぼ完形品に近い状態に復元された。319は、和泉型瓦器碗で、尾上III—2～3期に所属する。321は、備前焼底部である。323は、土師質焼成に近い平瓦片で、表面は磨耗が顕著であるが、凸面には離れ砂の痕跡が認められる。324～326は、砂岩製砥石である。324・325は、やや顕著な被熱痕を認め、324・326は、破損後投棄されていた。327は動物遺体である。出土遺物より、やや時期的に遡る遺物も含まれるが、16世紀後半を中心とした時期に位置付けられる。

SK27（第103図）

II a区中央部で検出。東西両端部に浅いテラス面が設けられている。埋土は単層（1層）で、土坑廃絶後の自然堆積層とみられる。

遺物は、土師質土器等の小片が少量出土したのみである。329は、瀬戸・美濃系陶器丸皿で、藤澤大窯2～3段階に所属する。出土遺物より、16世紀後半を中心とした時期に位置付けられる。



第 104 図 SK28 ~ SK32 平・断面図、出土遺物実測図

SK29（第 104 図）

II a 区中央部で検出。上面より柱穴跡が掘り込まれる。埋土は単層（2 層）で、本層も土坑廃絶後の自然堆積層と考えられる。

遺物は、土師質土器片が 4~5 点出土したのみであり、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。

SK30（第 104 図）

II a 区北東部で検出。埋土は単層（1 層）で、ブロック土を多量に含むことから、人為的な埋め戻し土である。土坑機能時の堆積層が認められないことから、土坑掘削後比較的短期間の内に埋め戻された可能性が高い。

遺物は、図示した以外には、器種不詳の土師質土器等の小片が少量出土したのみである。330 は、土師質土器擂鉢で、破断面を含めて被熱痕を認める。詳細な時期決定は困難ながら、16 世紀後半を上限とした時期に位置付けられる。

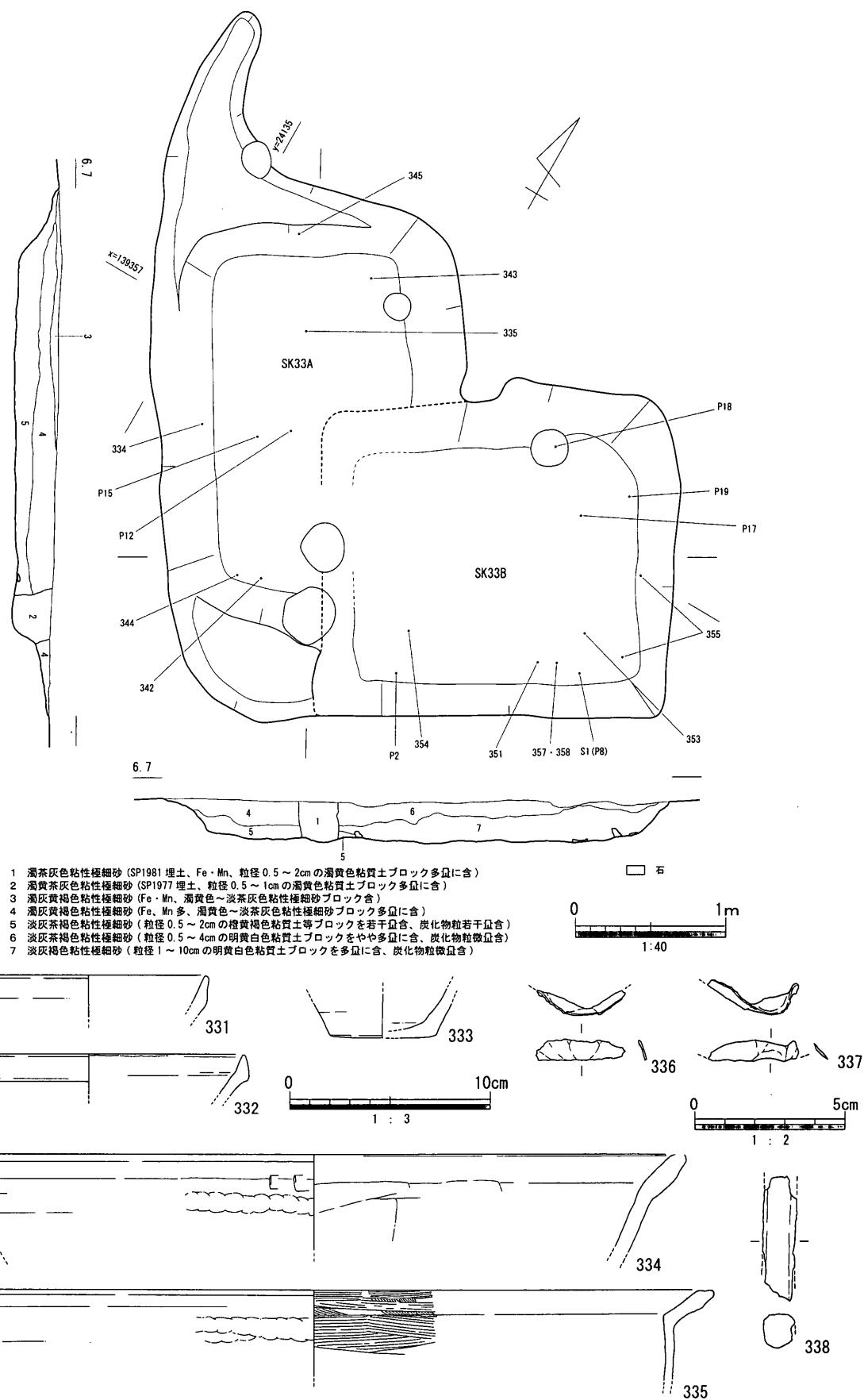
SK31（第 104 図）

II a 区北東部で検出。埋土は単層。遺物は、土師質土器等の小片が 10 点程度出土したのみで、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。

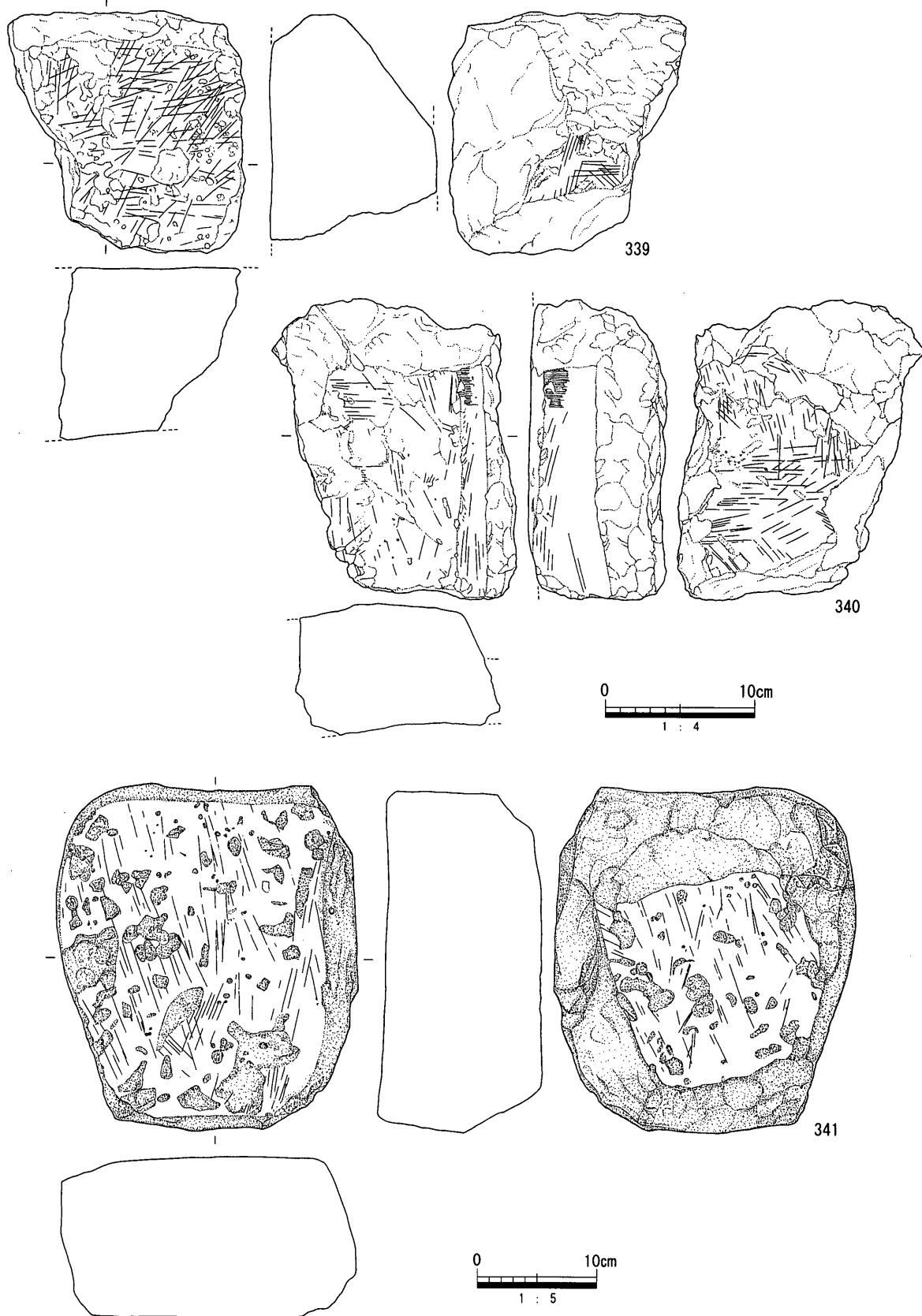
SK32（第 104 図）

II a 区北東部で検出。埋土は単層（1 層）で、ブロック土を多量に含むことから、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。土坑機能時の堆積層が認められないことから、土坑掘削後比較的短期間の内に埋め戻されたことがわかる。

遺物は、土師質土器等の小片が 10 点程度出土した以外に、被熱痕のある安山岩割石が 1 点出土している。

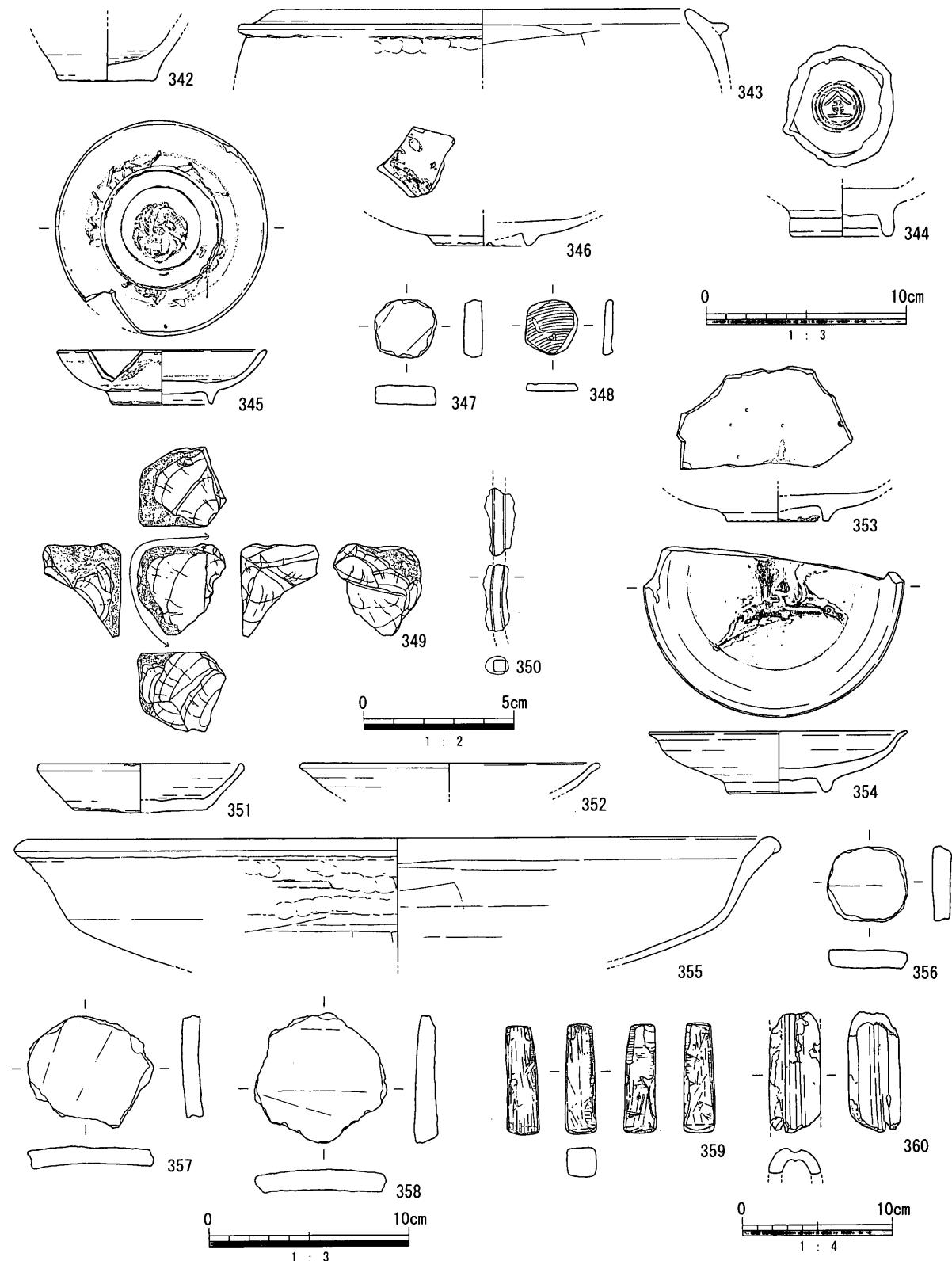


第 105 図 SK33 平・断面図、出土遺物実測図 1



第106図 SK33出土遺物実測図2

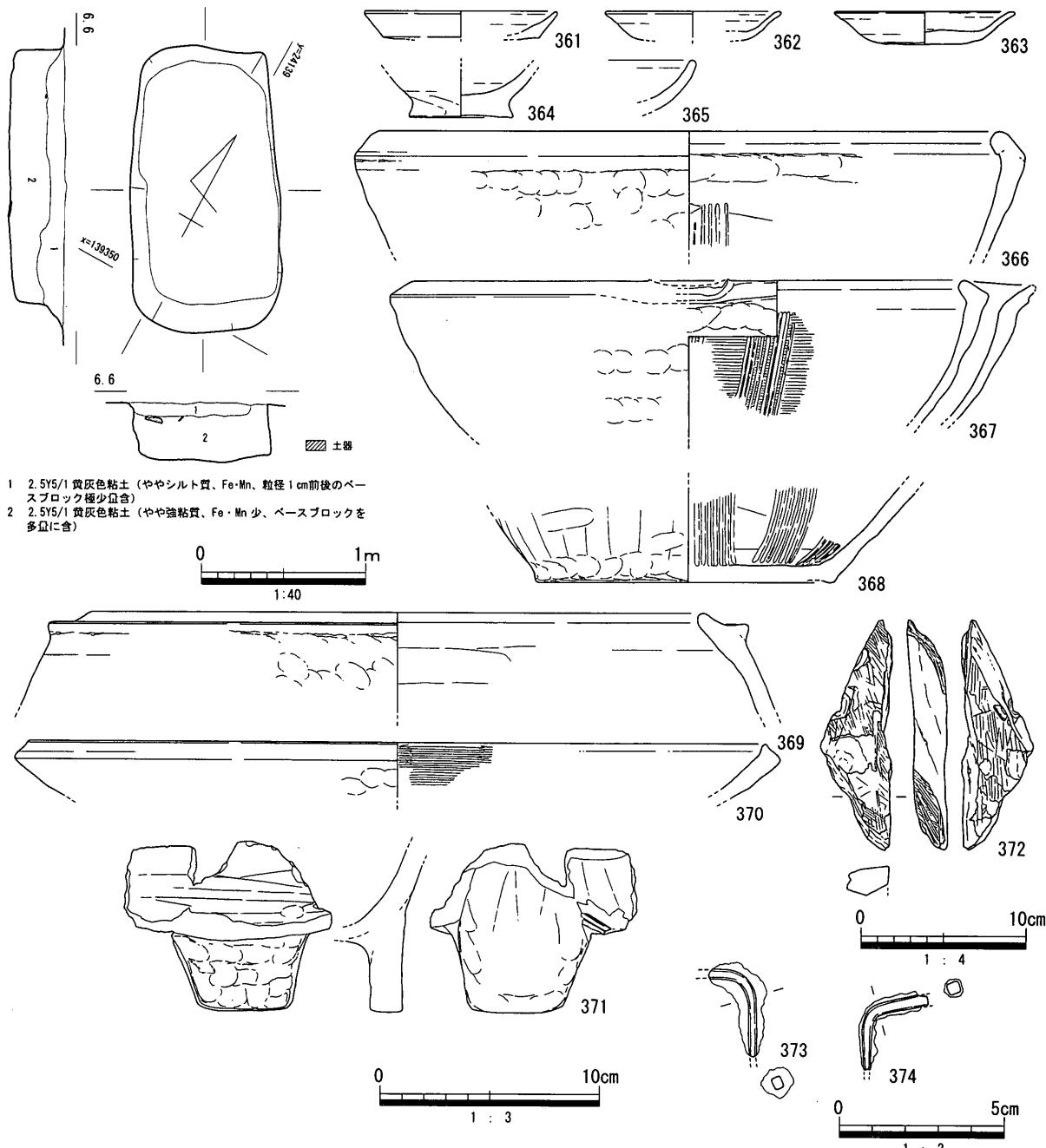
時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。



第107図 SK33出土遺物実測図3

SK33(第105~107図)

IIa区北東部で検出。遺構検出時において、不定形な平面プランを呈しつつも、検出面で複数の遺構の重複状態が確認できなかったことから、十字にトレンチを設定して掘り下げを行った。しかしながら、上面より多

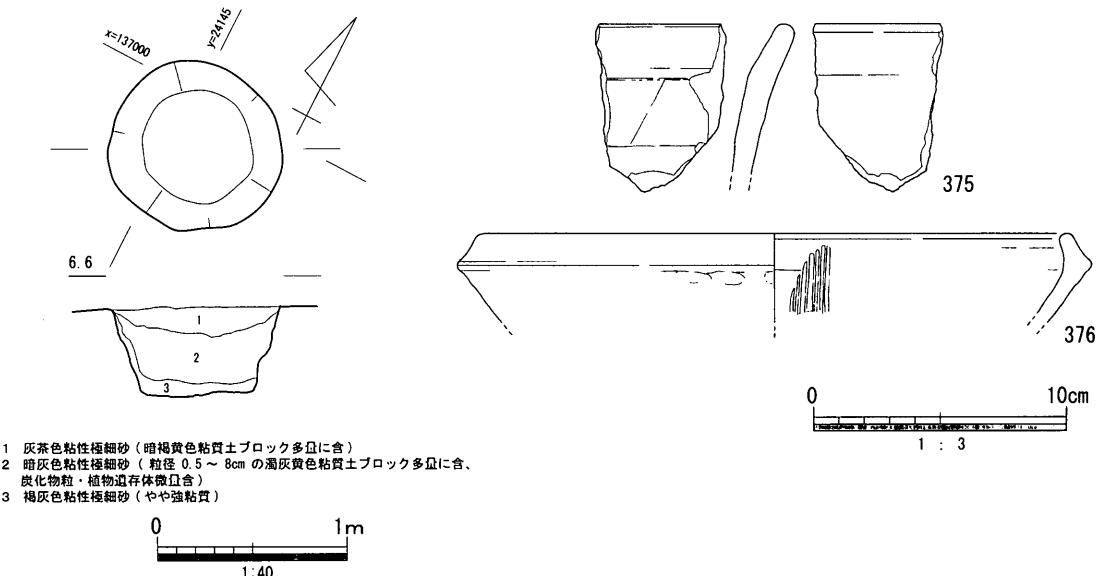


第108図 SK34 平・断面図、出土遺物実測図

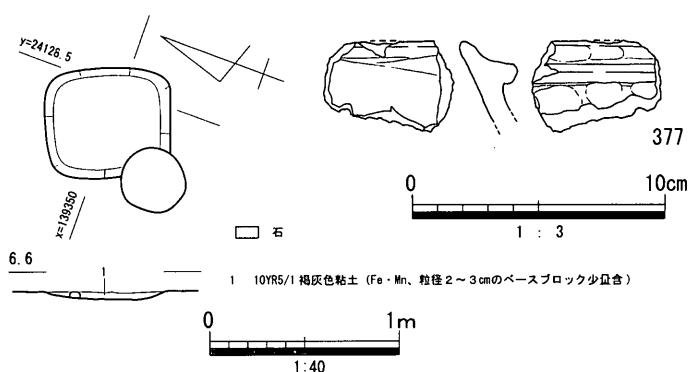
くの柱穴跡が掘り込まれ、トレンチ部分のみでは遺構の切り合いの確認が困難であったことから、トレンチを広げて再度土層断面の確認を行った。その結果、2基の土坑の重複を確認した。トレンチ設定位置の都合で、掘り方ラインの一部が不詳となったが、概ね規模や形状等のデータは得られた。先行する土坑をSK33 A、後出する土坑をSK33 Bとして報告する。また両土坑は、ほぼ同位置に配され、主軸方向は違えるものの、規模等は近似しており、後述するように時期的にも近接していることから、共通する性格を有する遺構と判断される。

SK33 Aの埋土は3層に細分され、上下2層に大別する。上層（3・4層）は、ブロック土を多量に含み、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。下層（5層）は均質な粘質土で、南へ傾斜して堆積しており、土坑廃絶後の流入土と考えられ、土坑廃絶から下層堆積時まで、一定期間開口した状態で放置されたとみられる。

遺物は、土師質土器などの小片が上層を中心に、土器類のみでコンテナ約1/2箱出土した。331～341が



第 109 図 SK35 平・断面図、出土遺物実測図



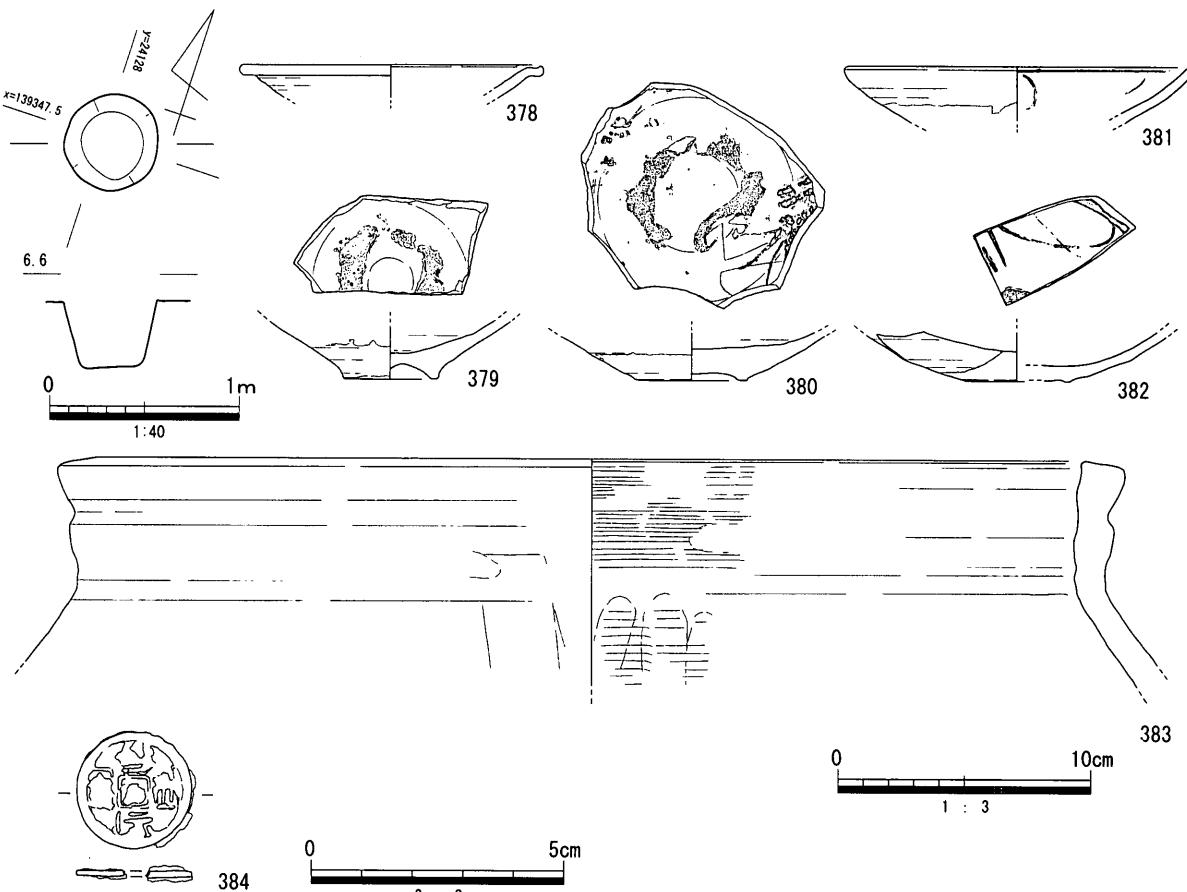
第 110 図 SK36 平・断面図、出土遺物実測図

上層、342 ~ 348 が下層出土の遺物である。331 は、肥前もしくは高取系陶器皿で、大橋 I 期に所属する。332 は、中国白磁碗で、大宰府分類 IV-1 類に所属し、混入品と考えられる。336・337 は、本来は同一個体とみられる銅製品であるが、土圧による変形が顕著で、本来の用途については不詳である。339 は砂岩製、340 は安山岩製の砥石である。341 は花崗岩製の台石・砥石で、表裏面を砥面及び敲打面として使用し、とくに図左面は顕著に使用され光沢を認め

る。これらの石製品には、いずれも表面や破断面等に赤変や剥離などの顕著な被熱痕を認める。344 は、中国龍泉窯系青磁碗で、上田 D または E 群に所属する。345 は、中国漳州窯系青花皿で、口縁部の一部を欠損するのみで、ほぼ完形に復元された。小野皿 E 群に所属する可能性が高い。346 は、肥前系磁器皿で、大橋 II 期後半に所属する。347・348 は、土師質土器を転用した土製円盤である。出土遺物より、17 世紀中頃を中心とした時期に位置付けられる。

SK33 B の埋土は 2 層に細分 (6・7 層) されたが、いずれもブロック土を多量に含む点で共通しており、人為的な埋め戻し土と考えられる。細分された埋土は、微妙な埋め戻しの時期差を反映している可能性がある。また、土坑機能時の堆積層が認められないことから、土坑掘削後比較的短期間のうちに埋め戻されたことが想像される。

遺物は、土師質土器等の小片が下層を中心に、土器類のみでコンテナ約 1/4 箱出土した。349・350 は上層、351 ~ 360 は下層よりそれぞれ出土した遺物である。349 はサヌカイト製火打石である。351 は、口唇部に煤痕を認め、灯明皿として使用されたとみられる。352 は、肥前系陶器皿で、大橋 II 期前半に所属する。353・354 は、肥前系磁器皿である。353 は、後述する SK42 出土 389 と同一個体で、型打製品である。いずれも大橋 II 期後半に所属する。356 ~ 358 は、土師質土器を転用した土製円盤である。359 は、方柱状を呈する流紋岩製砥石で、表面はやや顕著な被熱痕を認める。360 は、動物遺体である。出土遺物より、17 世紀中頃を中心とした時期に位置付けられ、SK33 A の埋め戻しとさほど隔たらない時期に、SK33 B が掘削、埋め戻



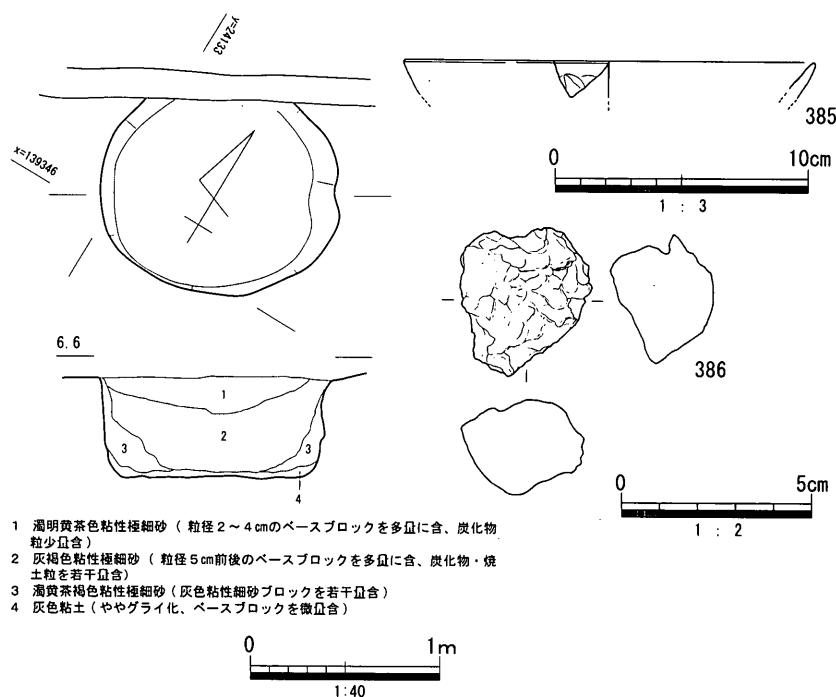
第111図 SK38 平・断面図、出土遺物実測図

されたと考えられる。また、SK33の上面からは、既述したSB34・36の柱穴跡が掘り込まれている。しかし出土遺物から、土坑と建物構との間に大きな時間差が認められず、土坑の埋め戻しが建物構の設置を契機としたものであつた可能性も想定される。

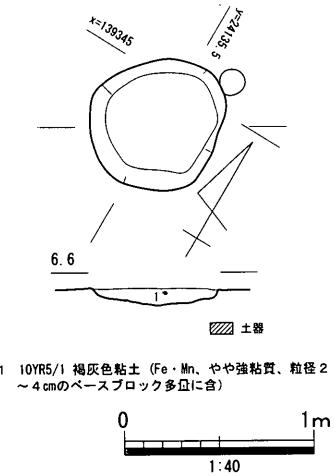
SK34（第108図）

II a区中央西端で検出。埋土は2層に細分された。下層（2層）は、ブロック土を多量に含み、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。上層（1層）は、下層埋め戻し後の窪地に流入した自然堆積土と考えられる。土坑機能時

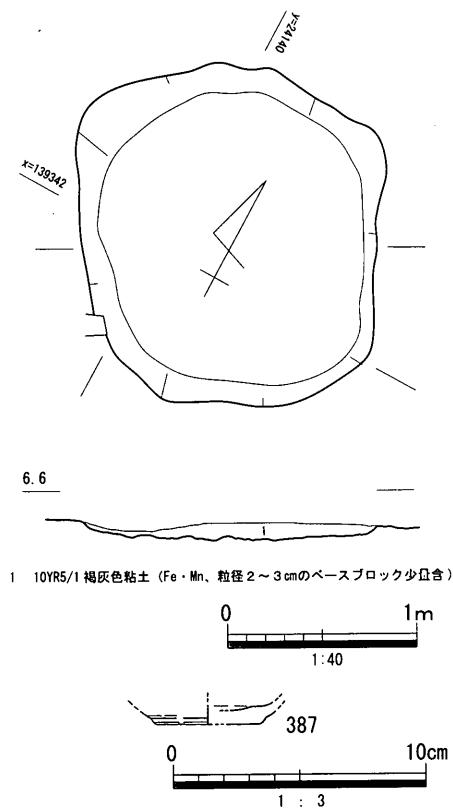
の堆積層が認められないことから、土坑掘削後比較的短期間のうちに埋め戻されたことが想像される。



第112図 SK39 平・断面図、出土遺物実測図



第 113 図 SK40 平・断面図



第 114 図 SK41 平・断面図、出土遺物実測図

出土遺物は、土師質土器足金片 (377) が 1 点出土したのみであり、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。

SK38 (第 111 図)

II b 区中央部で検出。調査時に柱穴跡として掘り下げたため、詳細な埋土の確認は行えていない。遺物は土器類のみでコンテナ 1/4 箱と、比較的多量に出土した。図示した遺物は、いずれも土坑底面付近よりまとまって出土しており、意図的に埋置された可能性も考えられる。378~382 は、肥前系陶器である。380~382 はいわゆる鉄絵皿で、いずれも焼成不良で、同一意匠の文様を描き、同一窯の製品の可能性がある。381 は、文様等から、380 もしくは 382 と同一個体であろう。いずれも大橋 II 期前半に所属するものである。384 は、銅錢であるが、磨耗のため錢種不明である。出土遺物より、17 世紀前半を中心とした時期に位置付けられる。

遺物は、土器類のみで上層よりコンテナ約 1/4 箱、下層より同約 1/2 箱出土している。土器類はすべて小片化しており、土坑埋め戻し時に混入ないし投棄されたものと考えられる。365 は、肥前もしくは高取系陶器皿で、大橋 I 期に所属する。370 は、亀山焼甕である。372 は、流紋岩製砥石である。大きく欠損しており、本来の形状を留めないが、破断面も一部砥面として使用している。出土遺物より、17 世紀前半を中心とした時期に位置付けられる。

SK35 (第 109 図)

II a 区南西隅で検出。埋土は 3 層に細分され、上下 2 層に大別する。上層 (1・2 層) は、ブロック土を多量に含むことから、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。上層は 2 層に細分されるが、埋土の相違は微妙な埋め戻しの時期差を反映していると考えられる。下層 (3 層) は、土坑側面から底面にかけて薄く堆積した粘土層で、検出状況より桶状の木製容器が土壤に置き換わった可能性が考えられる。

遺物量は乏しく、土師質土器等の小片が上層を中心に少量出土したのみである。下層底面には、ウリ科とみられる植物種子が多量に出土した。時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難ながら、16 世紀後半を上限とする時期に位置付けられる。

なお、下層の土壤について花粉分析を実施した。詳細は第 IV 章に譲るが、アブラナ科の花粉がやや多量に確認され、周辺でアブラナ (ナタネ) などの栽培の可能性が想定されている。

SK36 (第 110 図)

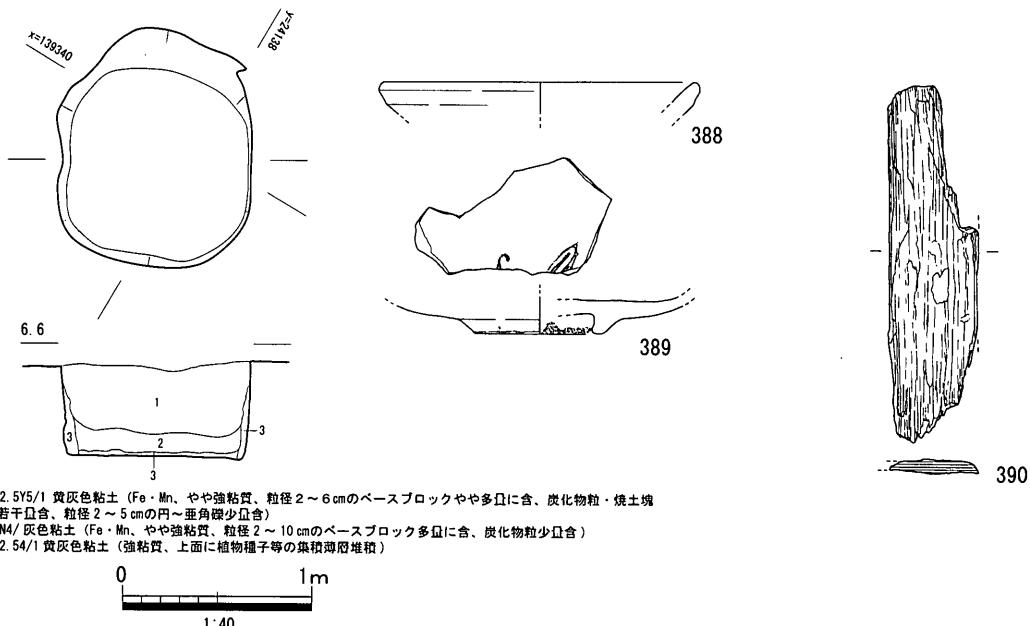
II b 区北東部で検出。切り合い関係より SB42 より先行する。埋土は単層 (1 層) で、粒径 5 cm 程度の焼土塊や炭化物粒を多量に含むことから、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。土坑床面に被熱痕は認められず、焼土塊や炭化物粒は埋め戻し時に投棄されたものと考えられる。

遺物は、土師質土器足金片 (377) が 1 点出土したのみ

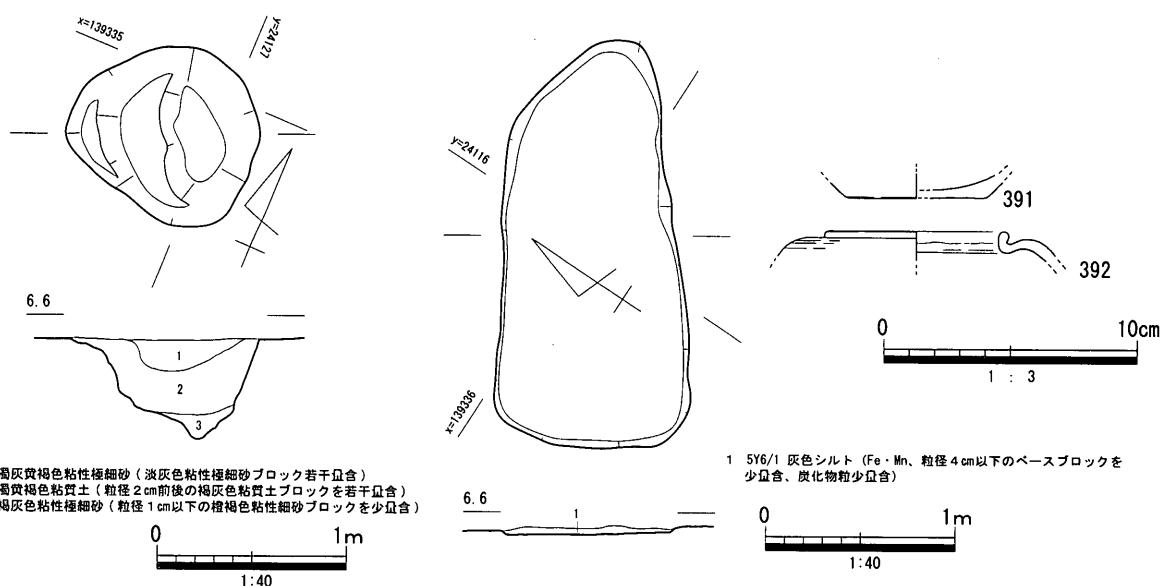
であり、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。

II b 区中央部で検出。調査時に柱穴跡として掘り下げたため、詳細な埋土の確認は行えていない。

遺物は土器類のみでコンテナ 1/4 箱と、比較的多量に出土した。図示した遺物は、いずれも土坑底面付近よりまとまって出土しており、意図的に埋置された可能性も考えられる。378~382 は、肥前系陶器である。380~382 はいわゆる鉄絵皿で、いずれも焼成不良で、同一意匠の文様を描き、同一窯の製品の可能性がある。381 は、文様等から、380 もしくは 382 と同一個体であろう。いずれも大橋 II 期前半に所属するものである。384 は、銅錢であるが、磨耗のため錢種不明である。出土遺物より、17 世紀前半を中心とした時期に位置付けられる。



第 115 図 SK42 平・断面図、出土遺物実測図



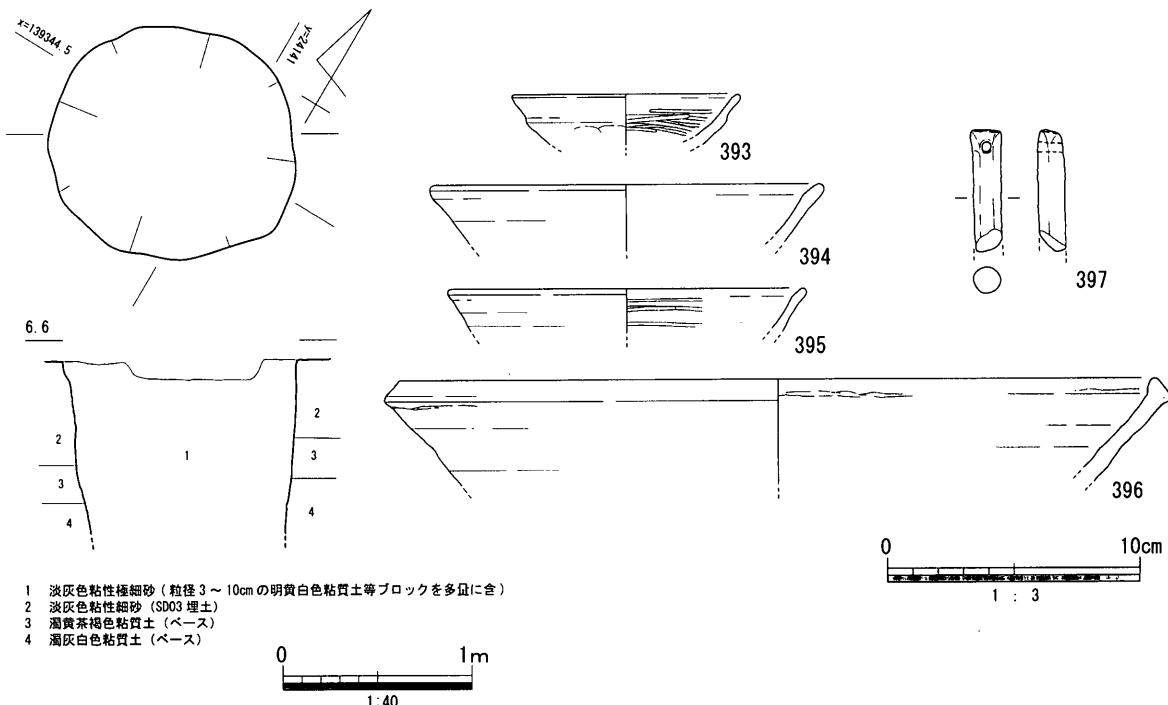
第 116 図 SK43 平・断面図

第 117 図 SK44 平・断面図、出土遺物実測図

SK39 (第 112 図)

II b 区東部で検出。北端上面を搅乱溝に切られる。埋土は 4 層に細分され、上下 2 層に分別される。上層（1~3 層）は、ブロック土を多量に含むことで共通するが、各層の土質や色調には顕著な差異が認められる。また 3 層は土坑周壁に沿って堆積し、その堆積状況から、3 層堆積後に再度土坑が掘削され、1・2 層により埋め戻された可能性も考えられる。下層（4 層）は、土坑機能時の堆積層と考えられ、グライ化した粘土層が最大厚約 5 cm 堆積する。層下端には、板状の木製品が確認され、腐食が顕著なため詳細は確認できなかったが、桶状の木製容器が据え付けられていた可能性が高い。

遺物は、土師質土器等の小片が少量出土したほか、焼土塊が多量に出土しているのが注目される。385 は、龍泉窯系青磁碗で、大宰府分類 I—5 類に所属する。386 は鉄滓である。時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難だが、類似した内容を有する SK35・42 と近接した時期と考えられ、385 は



第 118 図 SE01 平・断面図、出土遺物実測図

混入の可能性がある。

SK40 (第 113 図)

II b 区東部で検出。埋土は単層（1 層）で、ブロック土が多量に混在することから、人為的に埋め戻された土壤と考えられる。土坑機能時の堆積層が認められないことから、掘削後比較的短期間の内に埋め戻されたことが想像される。

遺物は、器種不詳の土師質土器等の小片が 3 点出土したのみで、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。

SK41 (第 114 図)

II b 区南東隅で検出。底面には細かな起伏が顕著に認められる。埋土は単層（1 層）で、土坑機能時の堆積層と考えられる。

遺物は、土師質土器等の小片がコンテナ約 1/4 箱出土した。時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。概ね 16 世紀後半を上限とする時期に位置付けられる。

SK42 (第 115 図)

II b 区南東隅で検出。埋土は 3 層に細分され、上下 2 層に大別する。上層（1・2 層）は、ほぼ土坑を埋める埋土で、ブロック土を多量に含むことから、人為的に埋め戻された土壤と考えられる。土坑機能時の堆積層が乏しいことから、土坑廃絶後比較的短期間の内に埋め戻されたと考えられる。下層（3 層）は、土坑周壁際と底面に薄く堆積する粘土層で、堆積状況より桶状容器の木質部分が土壤に置き換わった可能性が考えられる。3 層上面からは、植物種子が層状に集積して出土（図版 35）している。

遺物は、主に上層より土師質土器等が、土器類のみでコンテナ約 1/2 箱出土した。いずれも小片化しており、土坑埋め戻しに際して、混入ないし投棄されたものと考えられる。388 は、瀬戸・美濃系陶器丸皿で、藤澤大窯 4 段階に所属する。389 は、肥前系磁器皿で、既述したように、SK33 B 出土 353 と同一個体である。大橋 II 期後半に所属する。出土遺物より、17 世紀中頃を中心とした時期に位置付けられる。

SK43 (第 116 図)

II b 区南部で検出。土坑西半部に浅いテラスが設けられている。埋土は 3 層に細分された。下層（3 層）は、

上位2層と土質や色調がやや異なる。調査時には埋土の一部として掘り下げたが、別遺構の埋土である可能性が高いと判断する。上層（1・2層）は、ブロック土が混在し、人為的に埋め戻された土壤である。上層底面はほぼ平坦で、本来の土坑底面と考えられる点も、上述した3層の解釈と矛盾しない。また土坑機能時の堆積層が認められないことから、土坑掘削後比較的短期間のうちに埋め戻されたことが想像される。

遺物は出土しておらず、詳細な時期を特定することは困難である。

SK44（第117図）

II b 区西端部で検出。上面を強く削平された影響からか、安定した平面プランを呈さない。埋土は単層（1層）。遺構上面に堆積した旧耕土層と近似した土壤で、土坑廃絶後の自然堆積層と考えられる。

遺物は、図示した以外に器種不詳の土師質土器や京・信楽系陶器小杉碗等の小片が少量出土した。392は、外面に鉄泥を施す南蛮系施釉陶器小壺（茶入）である。県内では、高松城下を除いて極めて出土例に乏しい。16世紀～17世紀初頭の製作年代が想定され、混入品もしくは伝世品であろう。出土遺物より18世紀後半以降の埋没が想定され、上述した埋土の年代観とも大きな齟齬はない。

井戸跡

SE01（第118図）

II a・b 区境で検出。上面に地境の浅い搅乱溝が南北に縦走する。検出面より1.0m以上掘り下げたが、湧水等により調査の継続は危険だと判断したため、底面は確認できていない。1.0m以上の残存深より、井戸跡として報告するが、断定する根拠が得られているわけではない。確認された埋土は単層（1層）で、ブロック土を多量に含み、人為的に埋め戻された土壤である。遺構廃絶後、1m以上の深さを一気に埋め戻されている点は、何らかの理由で、遺構周辺を平坦地化する必要性が生じたことを強く示唆していると考えられる。既述した地境が遺構上面を縦走していることからすれば、本遺構の埋め戻しが、こうした地割りの変更を契機としたものであった可能性も考えられる。

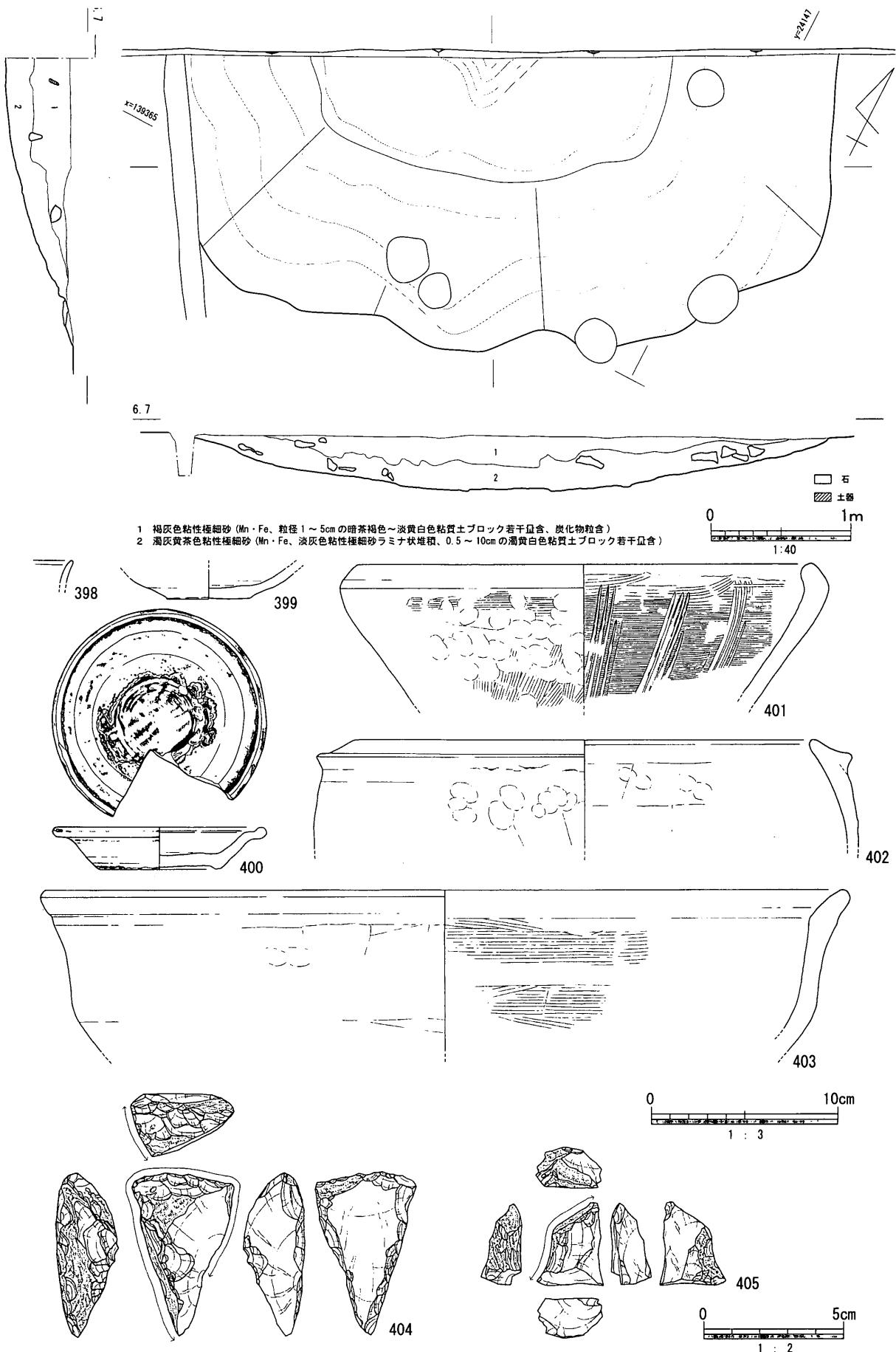
遺物は、土師質土器等の小片が約10点出土しているのみである。393は、和泉型瓦器皿である。395は、尾上III-2～3期に所属する同碗である。396は、東播系須恵器捏鉢で、森田第VII期第2段階に所属する。397は、真鍋棒状土錘Bである。出土遺物の時期は、概ね13世紀代を中心とした年代を示しているが、平・断面形状や埋土の特徴から、近世後半期以降に本地域でしばしば検出される、土製井筒を使用した井戸の可能性が考えられる。時期的に遡るこれら出土遺物は、周辺遺構等に本来含まれていたものが混入したものと考えられる。

性格不明遺構

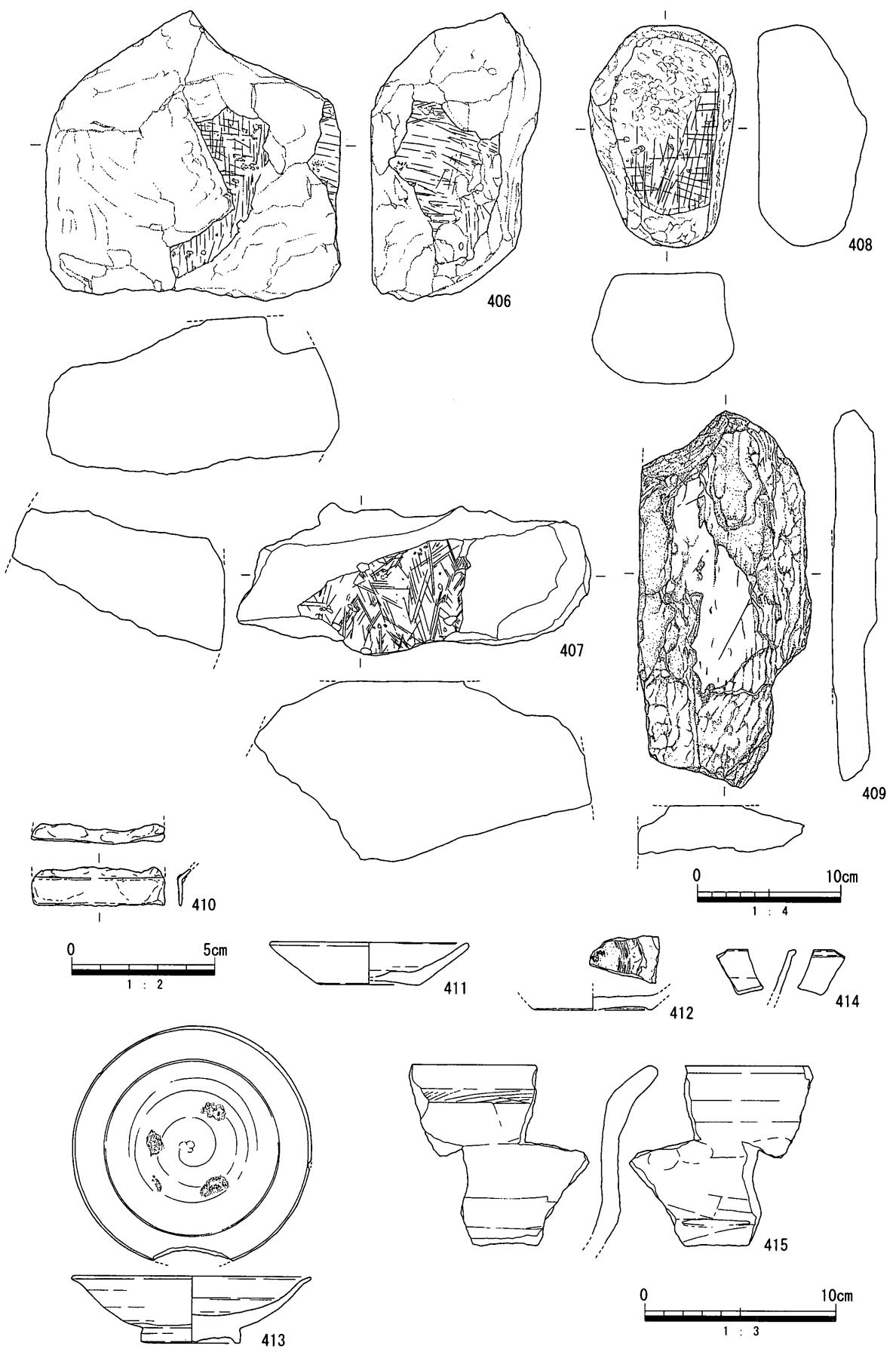
SX03（第119～121図）

II a 区北東隅部で検出。北半部は調査区外へ延長するため、全形は不詳である。数基の柱穴跡が上面より掘り込まれるが、建物遺構を構成するものはない。東西長4.62m以上の比較的規模の大きな掘り方を有することと時期的な点で、I a 区で検出されたSK10・11と近似した性格の遺構と考えられる。埋土は2層に細分された。上層（1層）は、ブロック土を含み、人為的に埋め戻された土壤であろう。下層（2層）は、ややグライ化した均質な埋土で、滯水下堆積の可能性が考えられ、遺構機能時もしくは廃棄後の自然堆積層と考えられる。

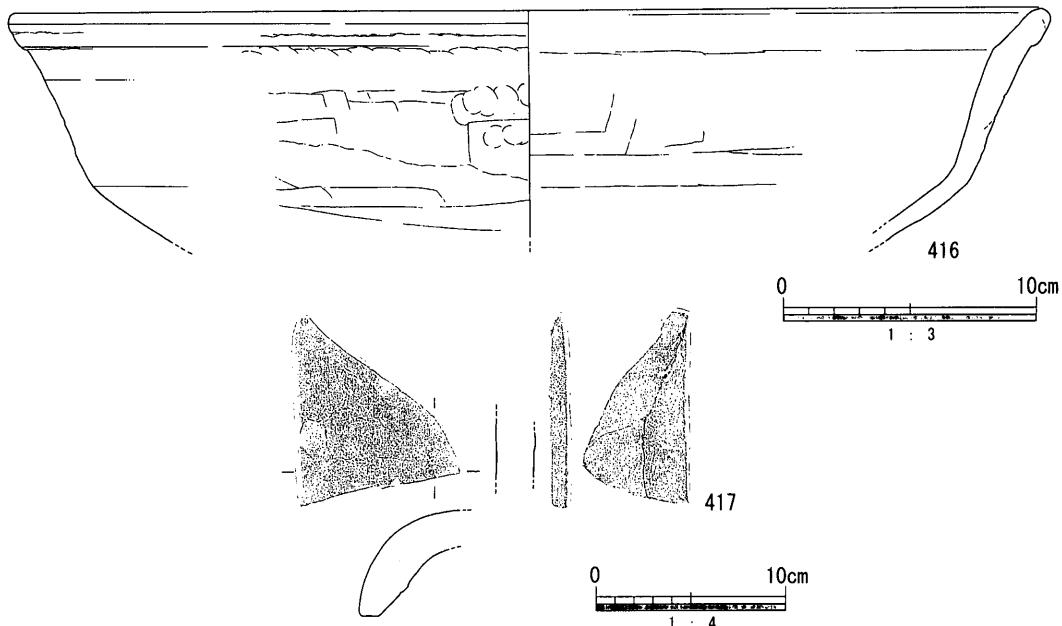
遺物は、土師質土器等が、土器類のみでコンテナ約1箱出土した。やや上層からの出土が多い。小片化した土器類も多く、412・413・416等の陶器皿や土師質土器類、406・407の安山岩製砥石等の被熱痕のある土器や石製品、あるいは焼土塊や炭化物なども一定量出土している。遺構底面に被熱痕が認められないことから、火災後の片付けの可能性を示唆しよう。上下層間で接合する遺物が少量ながら認められ、被熱痕のある石礫も両層から出土しており、さらに遺物の年代にも顕著な差異が認められないことから、両層は比較的短期間に堆積したものと考えられる。398～410が上層、411～417が下層より出土した遺物である。398は、口唇部



第 119 図 SX03 平・断面図、出土遺物実測図 1



第 120 図 SX03 出土遺物実測図 2



第121図 SX03出土遺物実測図3

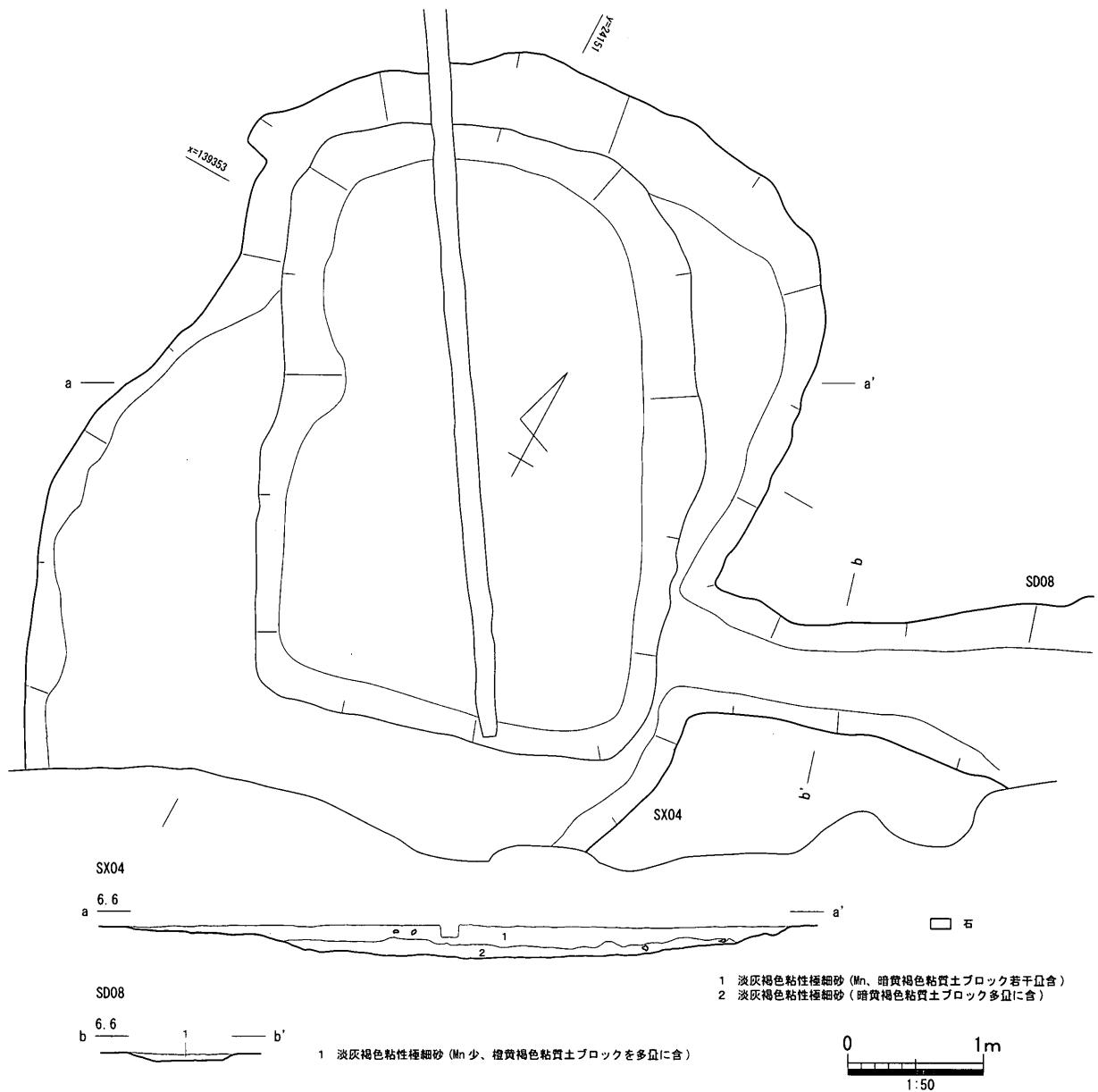
内面を釉剥ぎする白磁碗で、大宰府分類IX類に所属する。400は、完形に近く復元される瀬戸・美濃系陶器折縁皿で、藤澤大窯4段階前半に所属する。404・405は、サヌカイト製火打石である。406～408は、安山岩製砥石で、406・407は、破断面を含め弱い被熱痕を認める。409は、緑泥片岩の板石で、図左端縁は、ほぼ直線状に加工されており、人工的な遺物と考えられるが、用途は不明である。徳島県では、板碑として多用される石材であるが、表面に梵字等の線刻は認められない。なお裏面に、弱い被熱痕を認める。410は、用途不明の銅製品である。412は、瀬戸・美濃系陶器折縁皿である。破断面を含め顕著に被熱しており、藤澤大窯4段階前半に所属する。413は、肥前系陶器皿。口縁部の一部を欠損するのみで、ほぼ完形に復元される。内外面が被熱し、特に高台付近は変色する。大橋II期前半に所属する。414は、中国白磁碗で、大宰府分類VII類に所属する。417は、須恵質焼成の丸瓦である。出土遺物より、17世紀前半を中心とした時期に位置付けられる。

SX04・SD08（第122・123図）

II a区南東部で検出。SD09により南端部を切られるが、全形については概ね推測できる。東肩よりSD08が派生し、東西方向に延長する。埋土は2層に細分された。上層（1層）と下層（2層）でそれぞれ確認された平面プランの主軸方向は、図に示したようにやや異なり、別遺構の重複の可能性が考えられた。しかしながら、埋土の特徴は近似し、遺物の内容にも大きな差異は認められることから、一連の遺構として報告する。埋土は、既述したように2層に細分されたが大差は無く、いずれもブロック土の混入が認められることから、人為的な埋め戻しの可能性が窺える。

遺物は、土師質土器等が、土器類のみでコンテナ約1箱出土しており、上層からの出土がやや多い。土器類を中心小片化しており、内容も既述したSX03と近似することから、同様に火災後の片付けの可能性が示唆される。SD08が付設されることから、遺構本来は水溜等の機能が想定され、遺構廃絶に際して、火災による生活残滓の廃棄場所として利用されたものと考えられる。418～422が上層、423～431が下層より出土した遺物である。420は、土師質土器を転用した土製円盤である。421は鉄滓である。422は動物遺体である。424は、瀬戸・美濃系陶器稜皿で、藤澤大窯2段階に所属する。425は、古瀬戸中期の可能性がある卸皿である。426は、瓦質土器浅鉢型火鉢である。428は、サヌカイト製火打石である。431は動物遺体である。

SD08は、SX04より東に派生する直線溝である。東端は調査区外へ延び、延長約3.1mを確認した。幅0.73～1.22m、残存深0.05m前後、流路方向N 71.4°Eで、断面形は浅い皿状を呈する。底面の標高は、東端部で6.45



第 122 図 SX04・SD08 平・断面図

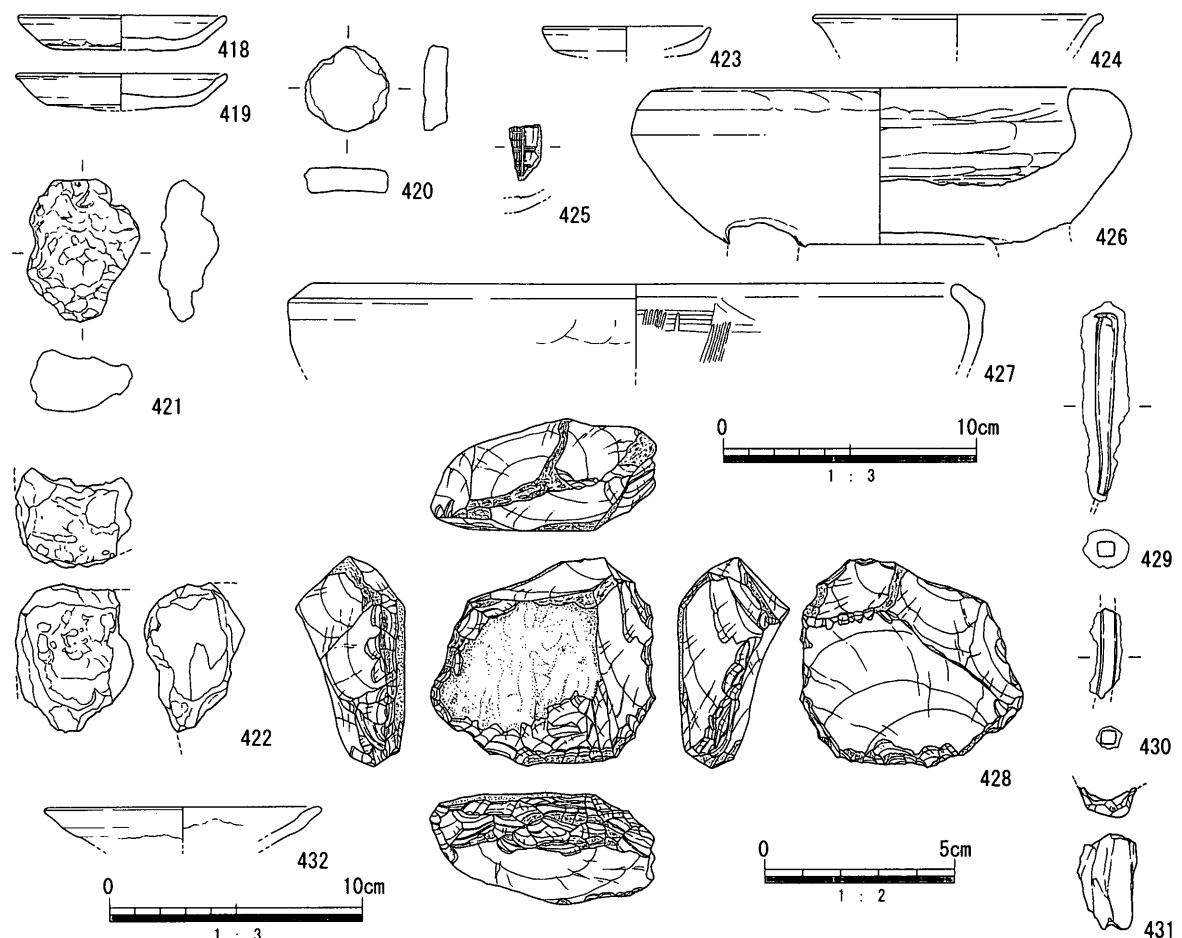
m、SX04 との合流部で 6.40 m を測るために、わずかな高低差が生じることから、西流して SX04 へ流入していた可能性が窺え、SX04 の性格を説明する根拠となる。埋土は単層（1 層）で、SX04 上層と近似し、SX04 廃絶時に本溝も同時に埋め戻されたことが窺える。

遺物は、図示した以外に、土師質土器小皿・杯、肥前系陶器皿等の小片や、サヌカイト剥片が極少量出土したのみである。432 は、灰釉陶器皿で、本来的には、本遺構下位の SD03 に所属する遺物である。出土遺物より、17 世紀前半の埋没が想定され、SX04 の年代とも矛盾はない。

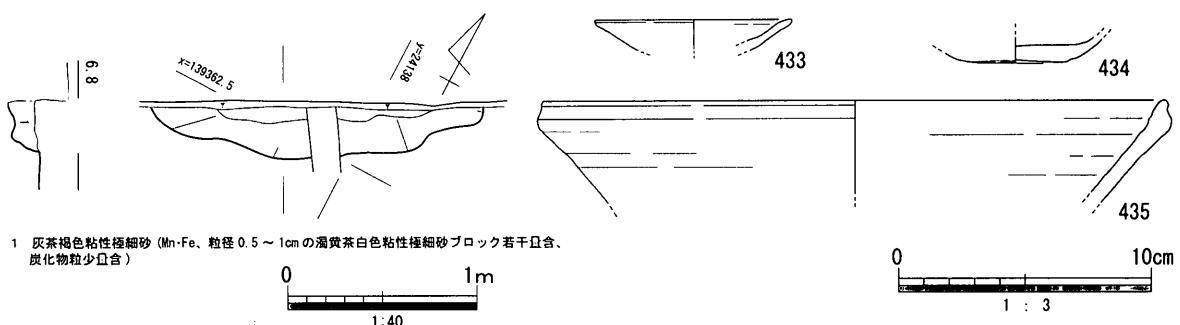
SX05（第 124 図）

II a 区北西隅で検出。遺構の大半は調査区外にあり、その南縁辺を確認したのみで、全形は不詳である。検出範囲が限られるため、不明遺構として報告する。確認される埋土は単層（1 層）で、ブロック土を一定量含むことから、人為的に埋め戻されたことが窺える。

遺物は、土師質土器等の小片や貝が少量出土した。435 は、東播系須恵器捏鉢で、森田第Ⅷ期第 2 段階に所属する。出土遺物より、詳細な時期を特定することは困難であるが、概ね 16 世紀後半を上限とする年代が想



第 123 図 SX04・SD18 出土遺物実測図

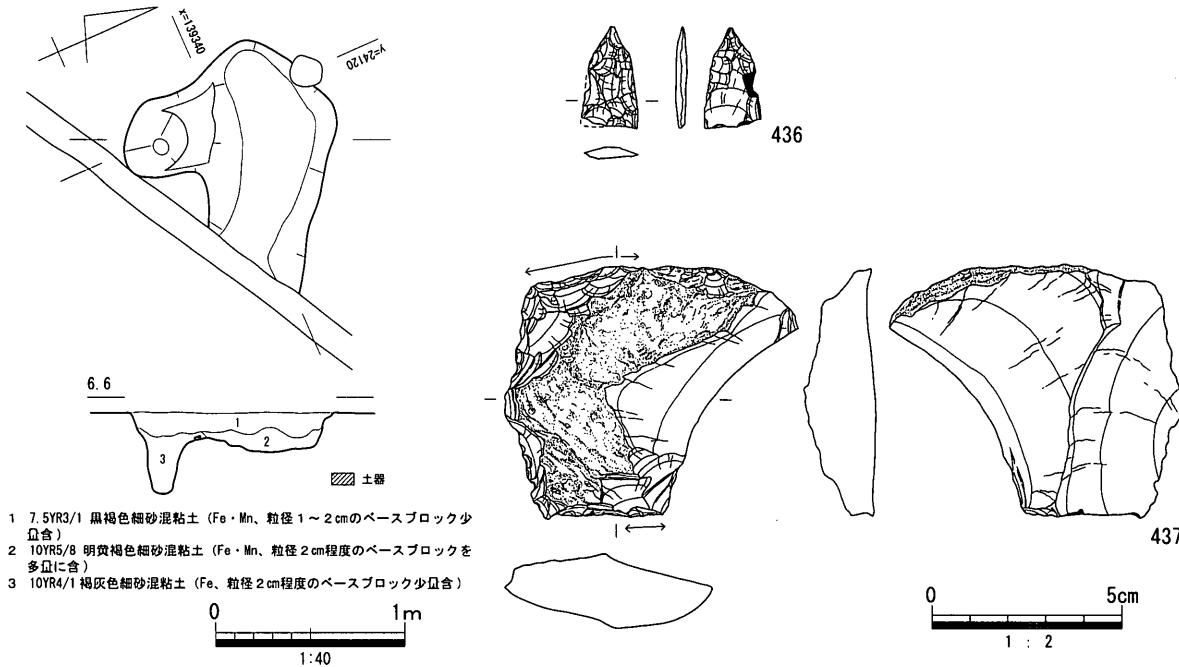


第 124 図 SX05 平・断面図、出土遺物実測図

定される。なお、435 は混入品である。

SX06 (第 125 図)

II b 区西半部で検出。南端部は搅乱溝に切られるが、形状は概ね窺える。平・断面形はいずれも安定せず、底面も起伏が顕著で、人為的に掘削された遺構である可能性は乏しい。埋土は 3 層に細分され、上下 2 層に大別する。上層（1 層）は、均質な粘土層で、下層堆積後に生じた窪地を埋める自然堆積層と考えられる。下層（2・3 層）は、いずれもブロック土の混入が認められ、特に 2 層はブロック土で充填される。こうした平・断面形状や埋土の特徴などから、風倒木痕等の可能性が考えられる。



第 125 図 SX06 平・断面図、出土遺物実測図

遺物は、2層より弥生土器とみられる土器細片数点とサヌカイト製石鏃 436、同剥片 437 等が出土したのみである。埋土の特徴や出土遺物の内容から、弥生時代の遺構と判断されるが、詳細な時期を特定することは困難である。

溝状遺構

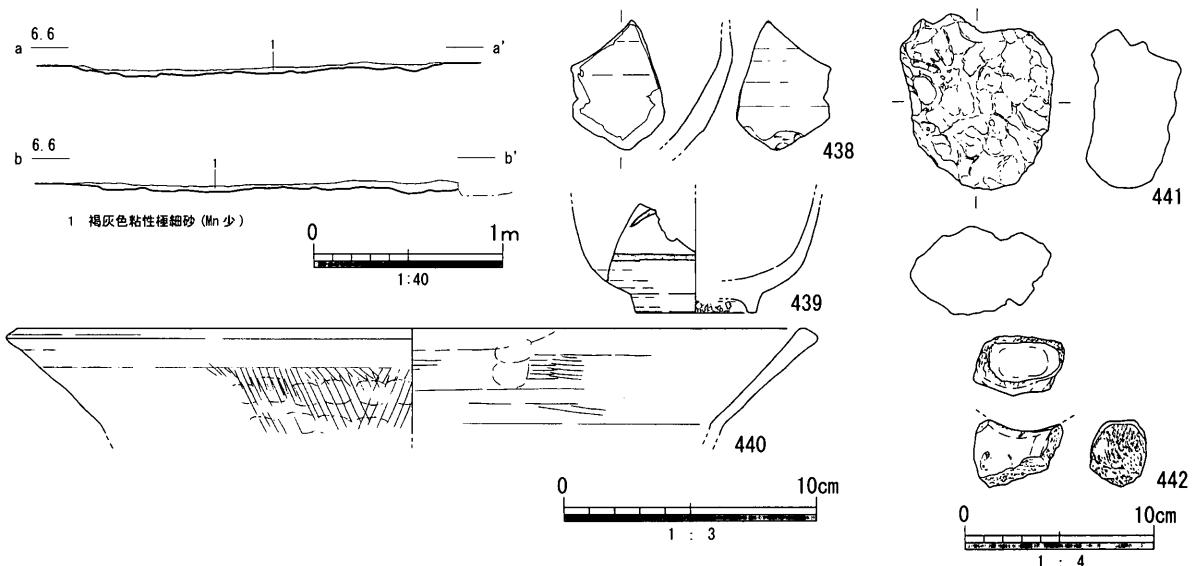
SD09 (第 126 図)

II a 区南東部で検出した、平面逆 L 字状に配された溝状遺構である。検出長 11.97 m、東端は調査区外へ延長し、北端は調査区内で途切れる。切り合ひ関係より、SK26、SX04 より後出する。東西溝の流路方向 N 67.9° E、残存深 0.03 m、断面形は浅い皿状を呈する。東西溝の幅 1.96 m 前後、南北溝の幅 0.28 m 前後と、位置によって流路幅は大きく異なり、平面プランからも複数流路跡の重複の可能性が考えられたが、それを土層断面から検証することは困難であった。おそらくは短期間に開削と埋没が繰り返されたことが要因と考えられる。流路跡底面の標高は、北端部で 6.45 m 前後、東端部で 6.43 m 前後とほぼ一定しているために、流下方向は不明である。埋土は単層（1 層）で、調査区内で確認された旧耕土層と近似しており、耕作域に関係する遺構と考えられる。

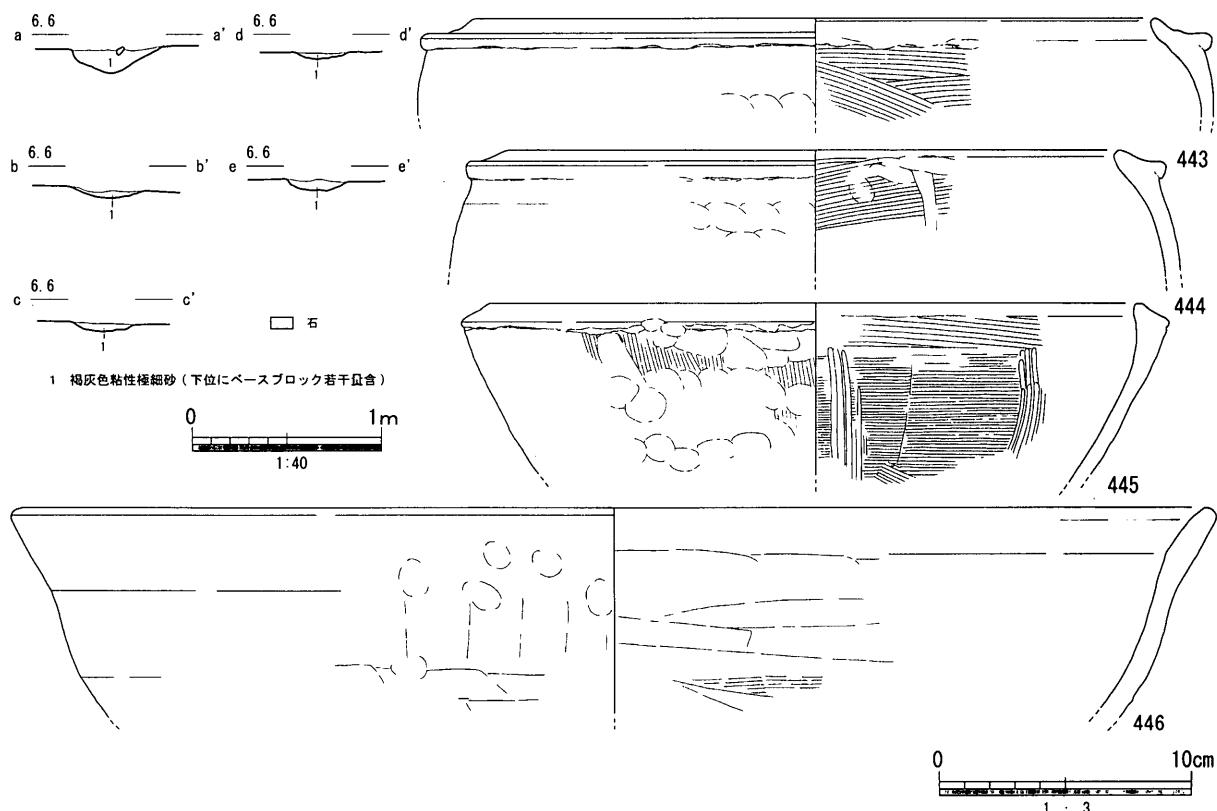
遺物は、図示した以外に、須恵器、土師質土器小皿・碗・杯・足釜・土鍋、和泉型瓦器皿、龜山焼甕、備前焼甕、サヌカイト剥片等が、土器類のみでコンテナ約 1/4 箱出土している。438 は、瀬戸・美濃系陶器天目碗で、藤澤大窯 4 段階に所属する。439 は、肥前系磁器碗で、酸化気味のため釉薬がやや黄色くなっている。大橋 II 期前半に所属する。ただし、これらは混入品と考えられる。441 は、鉄滓である。442 は、動物遺体である。埋土や出土遺物より、18 世紀後半以降の埋没の可能性が想定される。

SD10 (第 127 図)

II a 区南西隅で検出した、概ね南北方向に走行し、クランク状に配された溝状遺構である。検出長 10.2 m、北端は調査区内で途切れ、南端は調査区外へ延長する。流路方向 N 28.7° W、幅 0.26 ~ 0.46 m、残存深 0.03 ~ 0.12 m、断面形は概ね皿状を呈する。流路跡底面の標高は、北端部で 6.49 m 前後、南端部で 6.38 m 前後を測り、高低差より南へ流下する。規模や位置関係より、建物遺構の雨落ち溝等の可能性が想定されたが、相



第126図 SD09 土層断面図、出土遺物実測図



第127図 SD10 土層断面図、出土遺物実測図

当する位置に建物遺構は復元されず、明確な性格については不詳である。埋土は単層（1層）で、遺構廃絶後の自然堆積層とみられる。

遺物は、図示した以外に須恵器、土師質土器小皿、亀山焼甕、備前焼甕・擂鉢、サヌカイト製火打石、鉄滓の可能性が想定される遺物等が、土器類のみでコンテナ約1/2箱出土している。出土遺物より、詳細な時期を特定することは困難だが、概ね17世紀前半を中心とする時期に位置付けられる。

SD12 (第128図)

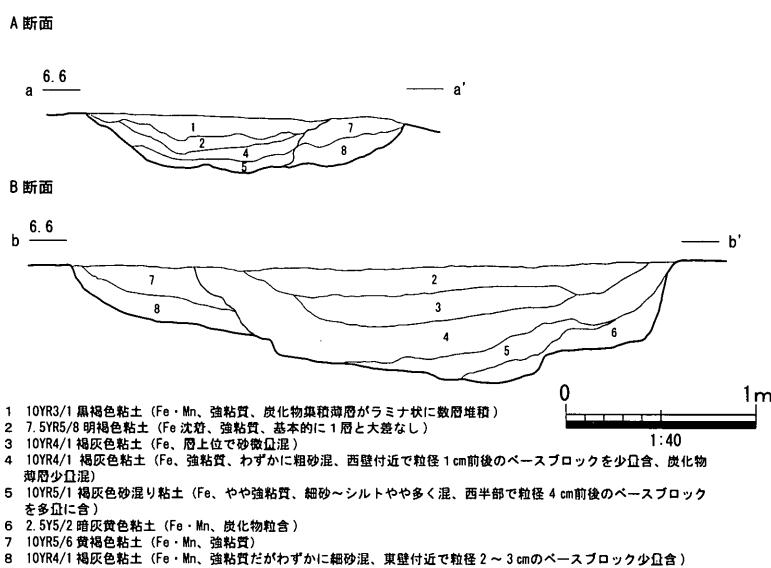
II b 区中央部を緩やかに蛇行しながら南北走する溝状遺構である。流路幅や方向は一定せず、自然流路跡の可能性も考えられたが、後述するように明瞭な改修痕跡が確認されたことから、人工的な開削を伴う溝状遺構として報告する。また、遺物量が乏しく、調査範囲で遺構の堆積状況等のデータが得られることから、全掘はしていない。検出長約 23.4 m、南北両端は調査区外へ延長する。幅 1.59 ~ 3.04 m、残存深 0.31 ~ 0.66 m、断面形は概ね逆台形状を呈する。流路底面の標高は、北端部で 5.82 m 前後、南端部で 6.18 m 前後を測り、高低差より北へ流下する。規模より、幹線水路として位置付けられる。

埋土は 6 ~ 7 層に細分され、上～下層の 3 層に大別する。上層(1 ~ 4 層)は褐色系の粘土層で、穏やかな環境下で徐々に堆積したとみられ、溝廃絶後の自然堆積層と考えられる。中層(5・6 層)は、5 層を中心に細砂～シルトが多く混じり、溝機能時の堆積層である。6 層は、北端部付近にのみ堆積したベース層の流入土とみられ、溝開削後 5 層堆積までに一定期間放置された可能性が考えられる。以上の上・中層が改修後の堆積層である。下層(7・8 層)は改修前の堆積層で、強粘質の粘土層で充填されており、一定期間溝の使用が途絶えた可能性を示していると考えられる。

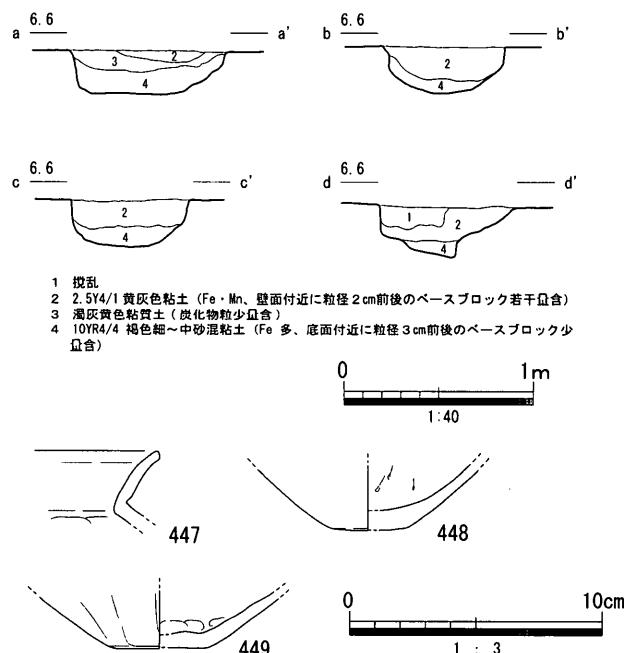
遺物は、上層下位より器種不詳の弥生土器小片が 10 点程度とサヌカイト碎片 1 点が出土したのみである。出土遺物より詳細な時期を特定することは困難ながら、概ね弥生時代後期後半を中心とした時期と考えられる。

SD13 (第 129 図)

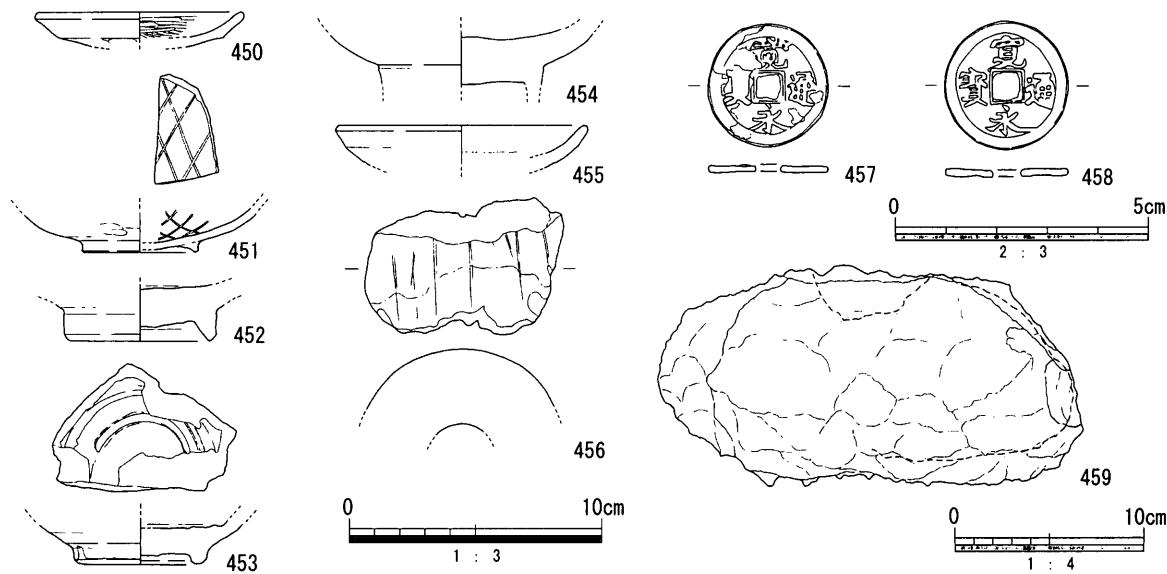
II b 区南西端部で南北走する直線溝である。検出長 17.8 m、南北両端は調査区外へ延長する。流路方向 N 50.3°W、幅 0.62 ~ 0.80、残存深 0.22 ~ 0.25 m、断面形は箱形ないし逆台形状を呈する。流路底面の標高は、北端部で 6.23 m 前後、南端部で 6.28 m 前後を測り、高低差より北へ流下するとみられる。埋土は 2 ~ 3 層に細分され、上下 2 層に大別する。上層(2・3 層)は、溝廃絶後の自然堆積層とみられる粘土層である。下層(4 層)は細～中砂が多量に混じり、溝機能時の堆積層と判断される。



第 128 図 SD12 土層断面図



第 129 図 SD13 土層断面図、出土遺物実測図



第130図 II区包含層等出土遺物実測図

遺物は、弥生土器甕等の小片やサヌカイト剥片が、上層を中心にコンテナ約1/2箱出土した。いずれも小片のため、詳細な時期を特定することは困難ながら、底部径が小さく、器壁が薄い等の特徴から、弥生時代後期後半を中心とした時期と推定され、上述したSD12とほぼ同時期に位置付けられる。両溝が同時併存した可能性は高く、SD13はSD12を幹線水路とした場合、その枝溝となる可能性が高い。

包含層

遺構精査時等に出土した遺物の一部を、包含層出土遺物として第130図に掲載した。I区同様、一部は旧耕作土に含まれていた遺物も含まれるが、大半は遺構より遊離した遺物であり、特にII区での遺構の性格を補足する上で必要と考えられるものを図示した。450は和泉型瓦器皿である。451は同碗で、尾上II-3期に所属する。452～454は中国龍泉窯系青磁碗で、454は全面施釉後、高台内の釉を削り取る。452・454は大宰府分類I類に所属する。453は稜花型の皿で、見込みを円形に釉剥ぎする。455は、瀬戸・美濃系陶器丸皿で、藤澤大窯2段階に所属する。456は、土師質焼成のフイゴ羽口で、使用により下端部表面が灰色に変色する。457・458は、古寛永通寶である。459は、II b区南壁東端旧耕土層より出土した五輪塔火輪で、時期的には大差のないI区SD07出土例と比べても風化が著しく、およそ旧状を留めない。

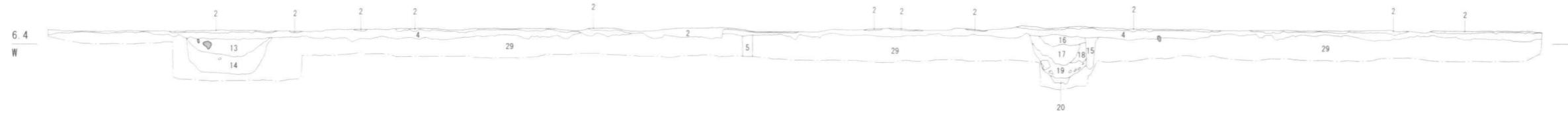
第3節 III区の調査

概要と基本土層

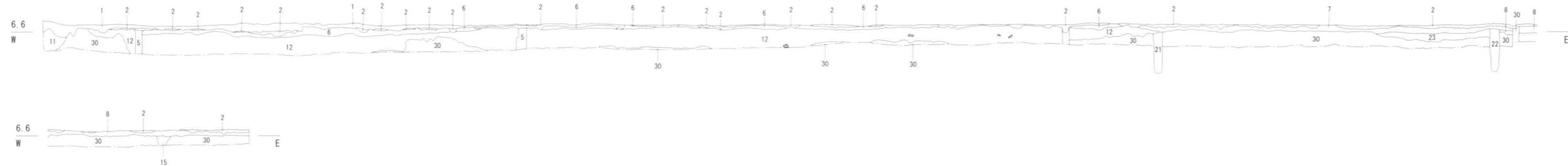
調査対象地のほぼ中央に位置する本区は、II区とは調査地に隣接する民家への進入路によって、IV区とは南北に走向する水路を伴う里道によって隔てられている。対象地の面積は、約1,635.7m²である。調査前は東西に2筆に分筆された耕作地として利用されており、間を里道が南北に走向する。調査区の設定もこうした旧地割りにしたがって、東をIII a区、西をIII b区として調査を進めた。III a区の現地表面の標高は6.67m前後、III b区のそれは6.83m前後で、II区の標高値をも参照すれば、III a区が最も低く窪地状となるが、その要因については調査によっても明らかにできなかった。

III a区では、現表土下に床土もしくは旧耕作土（第131図4層）の水平堆積が認められ、その直下で無遺物層である黄橙色粘土（同図29層）が露出し、本層上面が弥生時代以降の遺構面となる。遺構面の標高は、6.45m前後である。床土もしくは旧耕作土からは、弥生時代～近代前半期の遺物が出土している。

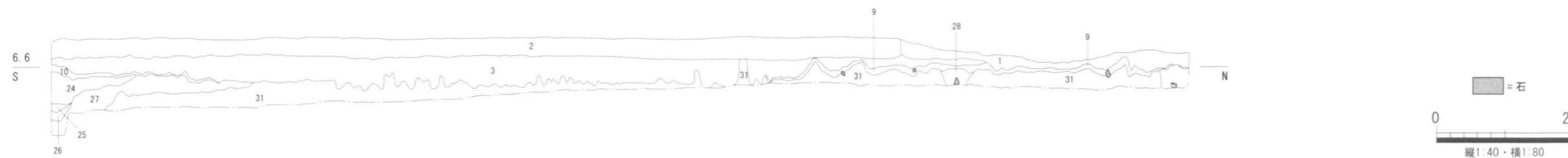
⑧ IIIa 区北壁



⑨ IIIb 区北壁



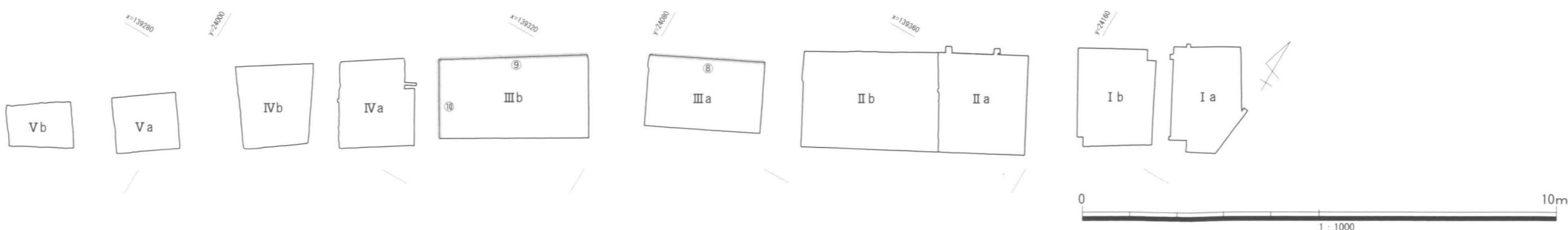
⑩ IIIb 区西壁



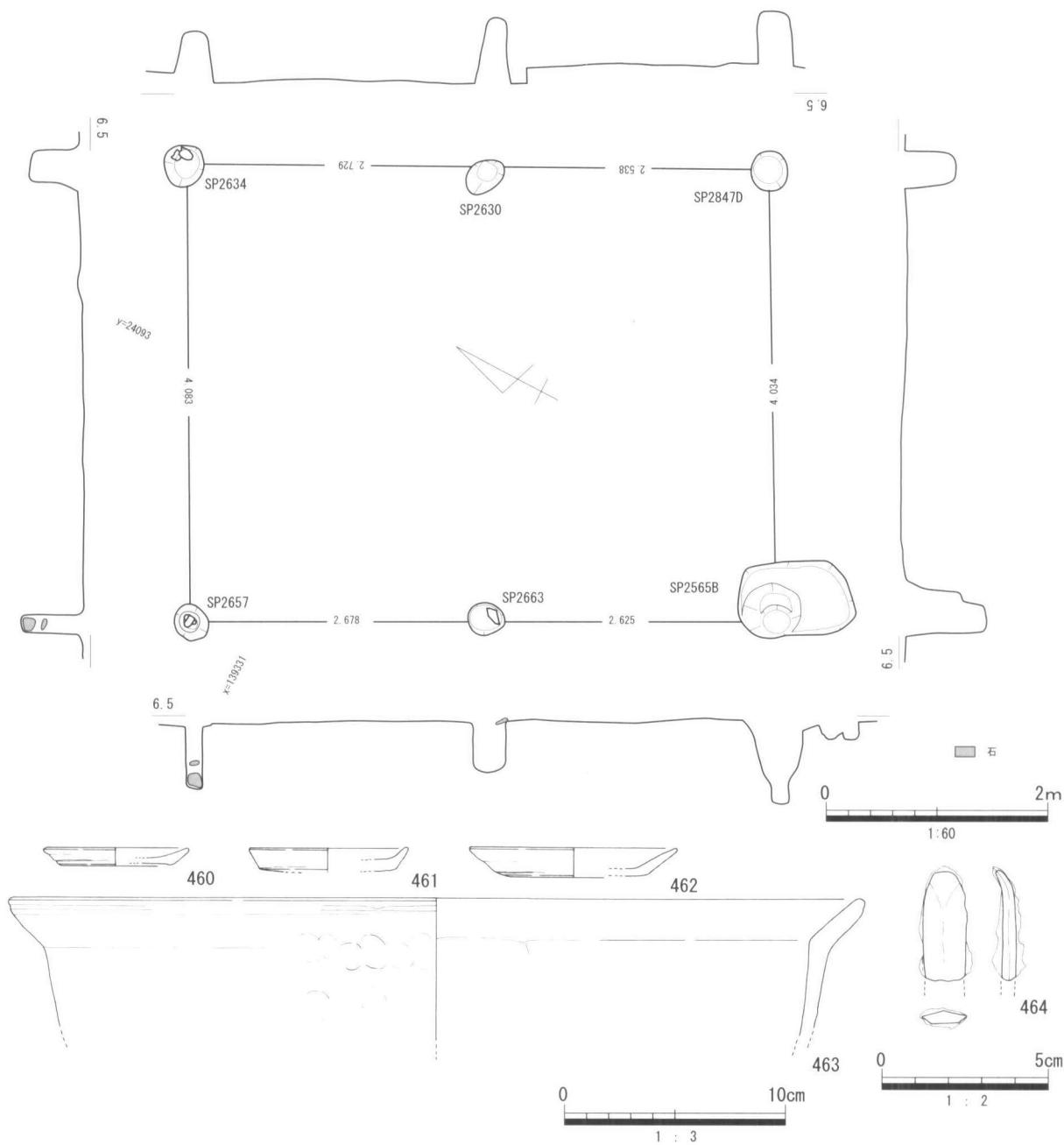
1 花崗土
2 表土・耕作土
3 盛土（花崗土）
4 2.5Y7/2 灰黄色シルト（底土もしくは旧耕作土、Fe・Mn 多、上面に Fe 沈着、粒径 3cm 前後のベースブロックやや多量に含）
5 捜乱
6 10YR5/2 黄褐色粘土（底土、Fe 沈着、Mn 少）
7 10YR7/4 明黄褐色粘土（底土、Fe 沈着、Mn 少、ややシルト質）
8 2.5Y8/2 灰白色シルト（整地土、Fe・Mn、粒径 3 ~ 10 cm のベースブロック多量に含）
9 10YR7/1 灰白色粘土（底土、Fe 沈着、Mn、粒径 2 ~ 3 cm の小石少量混）
10 濁灰灰褐色粘性堆積砂（旧耕作土）

11 2.5Y5/2 灰黄色粘土（近世粘土採掘坑埋土、Fe・Mn、粒径 2 ~ 5 cm のベース等ブロック土若干量含）
12 2.5Y6/2 灰黄色粘土（近世粘土採掘坑埋土、Fe・Mn、粒径 2 ~ 10 cm のベース等ブロック土多量に含）
13 2.5Y7/2 灰黄色粘土（SD15 上層、Fe・Mn、粒径 1 ~ 4 cm のベースブロックやや多量に含）
14 2.5Y5/2 灰灰色粘土（SD15 下層、Fe・Mn、粒径 2 ~ 5 cm のベースブロック多量含）
15 2.5Y6/1 黄灰色粘土（柱穴埋土、Fe・Mn、炭化物細粒少量含、粒径 2 ~ 4 cm のベースブロック多量に含）
16 10YR6/1 灰灰色粘土（SD14 上層、Fe・Mn、ややシルト質、炭化物細粒少量含）
17 10YR7/1 ~ 6/1 灰白色粘土（SD14 上層、Fe・Mn、粒径 3 cm 前後のベースブロック少量含）
18 10YR7/6 明黄褐色粘土（SD14 上層、Fe・Mn、ベースブロック堆積層）
19 10YR3/1 黑褐色粘土～10YR6/1 灰灰色シルトラミナ（SD14 中層、Fe 少、粒径 3 ~ 10 cm のベースブロック多量に含）
20 10YR8/1 ~ 7/1 灰白色砂混り粘土（SD14 下層、Fe 少、細～中砂やや多量に混）

21 10YR5/1 灰灰色粘土（柱穴埋土、Fe・Mn、粒径 2 ~ 5 cm のベースブロック多量に含）
22 2.5Y7/3 濁黃色粘土（柱穴埋土、Fe・Mn、粒径 3 cm 前後のベースブロック多量に含）
23 10YR6/1 灰灰色粘土（中世遺構埋土？ Fe・Mn、粒径 3 cm 前後のベースブロック少量含）
24 淡灰黄茶色粘性堆積砂（SR01 上層、Mn・Fe 沈着 粒径 5 cm 程度の 27 層ブロック若干量含）
25 濁堆黄褐色粘性堆積砂（SR01 上層、Mn・Fe 沈着含）
26 淡灰褐色粘性堆積砂（SR01 下層）
27 濁黃茶褐色粘性堆積砂（SR01 下層）
28 2.5Y5/1 黄褐色粘土（中世？遺構埋土、Fe・Mn、粒径 3 ~ 12 cm のベースブロック多量に含、粒径 7 cm 程度の小砾少量混）
29 10YR8/8 黃褐色粘土（地山、Fe・Mn）
30 10YR7/1 黄色混灰白色粘土（地山、Fe・Mn、やや強粘質）
31 N7/ 黄味混灰色粘土（地山、Fe・Mn、強粘質）



第 131 図 III 区調査区壁面土層断面図



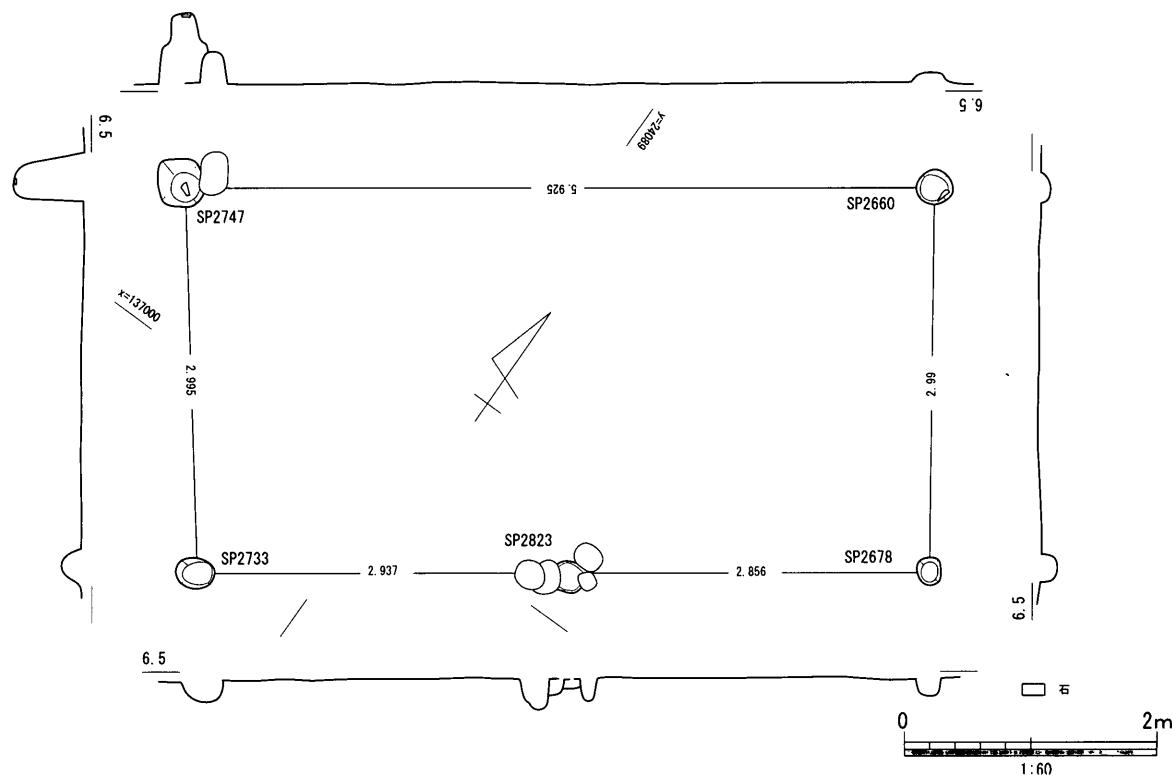
第132図 SB54平・断面図、出土遺物実測図

III b区でも同様に、現表土下に1～3層に細分される床土もしくは整地土の水平堆積（同図6～10層）が認められ、これらの直下に、灰白色粘土（同図30・31層）が堆積し、弥生時代以降の遺構面となる。遺構面の標高は、6.60m前後である。

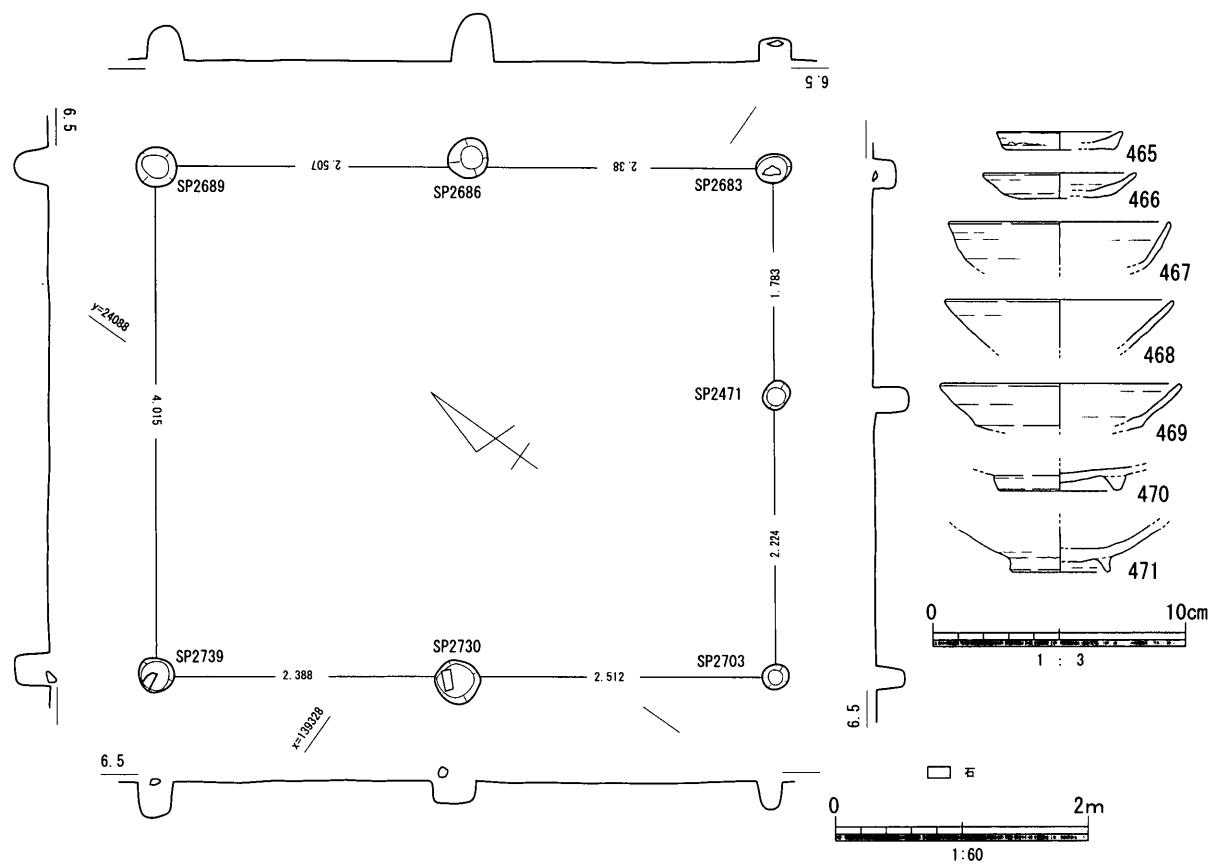
III a区では、中世後半期と近世後半期の屋敷地が確認された。III b区でも中世後半期の屋敷地の広がりが確認されたが、近世以降と推定される粘土採掘によるとみられる広範な搅乱により、遺構は大きく損壊を被っている。

掘立柱建物跡

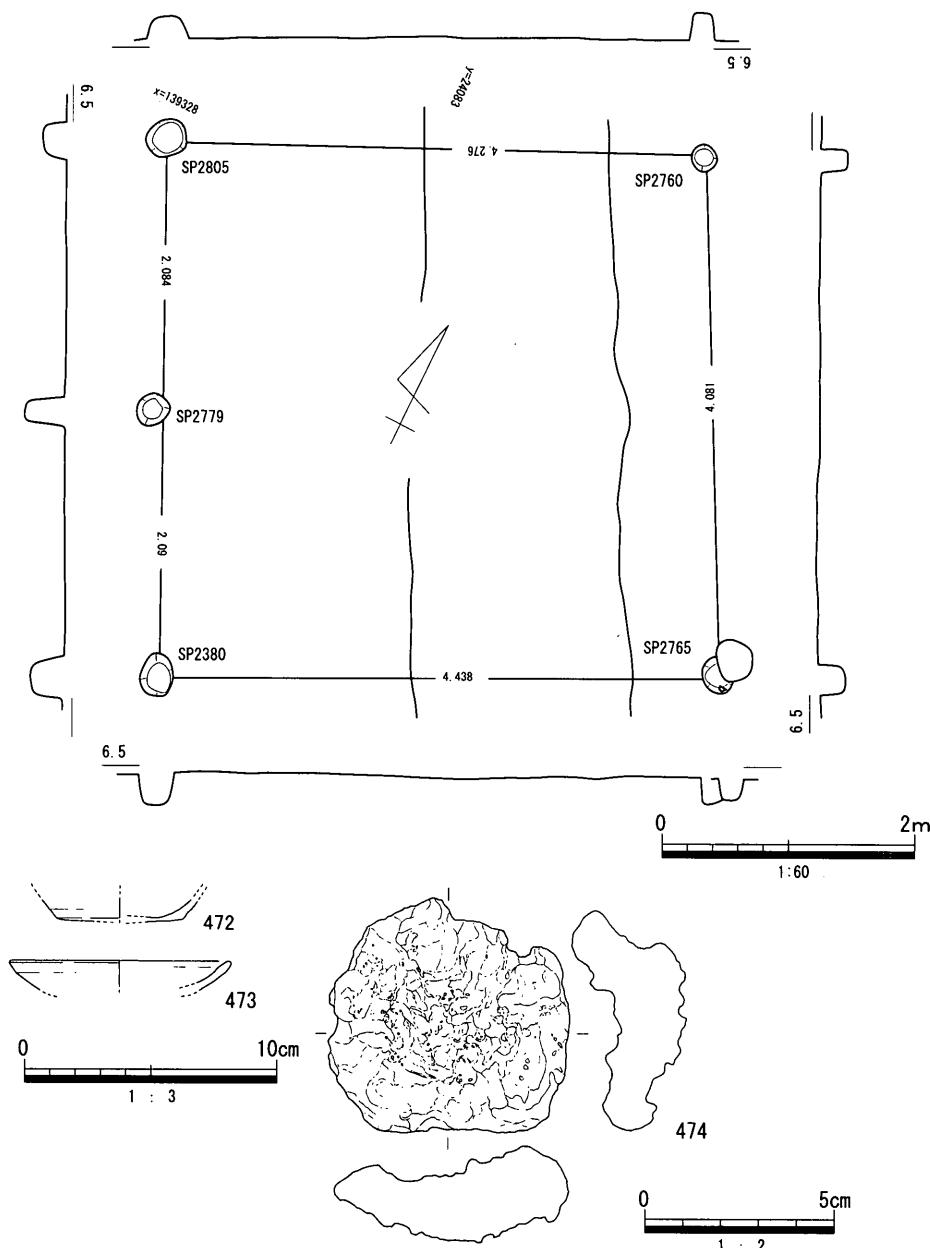
III区では、14棟の掘立柱建物跡を復元した。柱穴跡と考えられる遺構は、III a区で466基を、III b区で497基を検出し、そのうちの約9.1%について建物が復元された計算になる。柱穴跡の分布は、III a区西半よ



第133図 SB55平・断面図



第134図 SB56平・断面図、出土遺物実測図



第135図 SB57 平・断面図、出土遺物実測図

りⅢb区東半にかけてやや密集状況を呈するが、特にⅢb区において近世後半期～近代と推定される粘土採掘坑群による搅乱により、建物の復元に大きな支障が生じている。

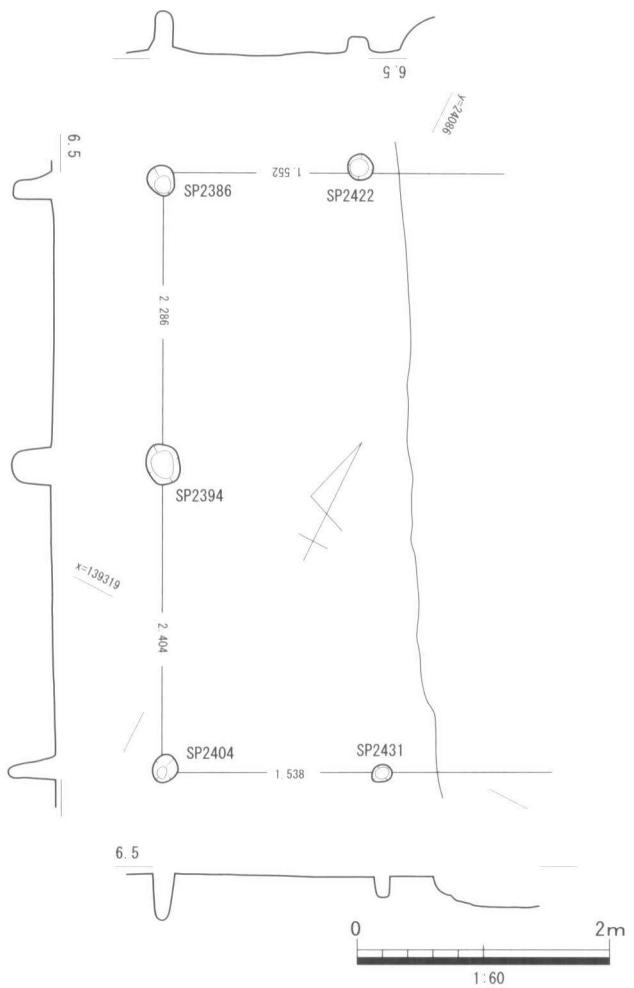
SB54(第132図)

Ⅲa区中央部で検出。SB55、SK50・53、SX07と重複し、柱穴跡の切り合い関係より、SK50・53、SX07より先行することが確認された。また南西隅柱は、規模の点から複数遺構の重複の可能性が考えられるが、調査段階では切り合い関係は確認できなかった。

遺物は、図示した以外には、器種不詳の土師質土器や須恵質土器、焼土塊の小片が少量出土したのみである。464は、SP2847Dより出土した鉄製鉗片。出土遺物より、詳細な時期を特定することは困難だが、概ね16世紀後半を中心とした時期に位置付けられる。

SB55(第133図)

Ⅲa区中央部で検出。SB56・57と重複し、柱穴跡の切り合い関係より、SB56より先行する。桁行北列中央



第136図 SB58 平・断面図

柱を欠く。

遺物は、土師質土器小皿・碗等の小片が少量出土したのみであり、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。

SB56(第134図)

III a 区北部で検出。梁間北列中央柱を欠く。遺物は、図示した以外には、器種不詳の須恵質土器、焼土塊等の小片が少量出土したのみである。471は吉備系土師質土器碗で、山本III-1 b～2期に所属する。出土遺物より、13世紀中頃を中心とした時期に位置付けられる。

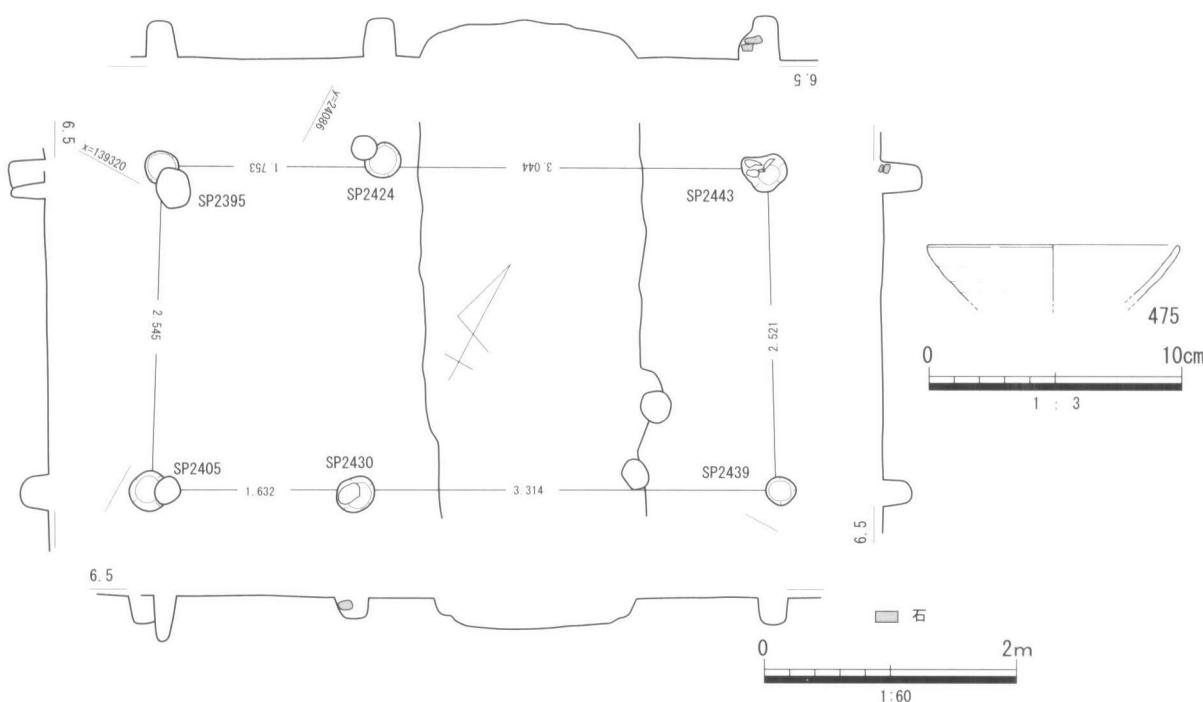
SB57(第135図)

III a 区北西部で検出。SD15と重複し、切り合い関係より、SD15より先行する。またSD15により、桁行の各中央柱を欠くが、本来は桁行2間に復元されると考える。

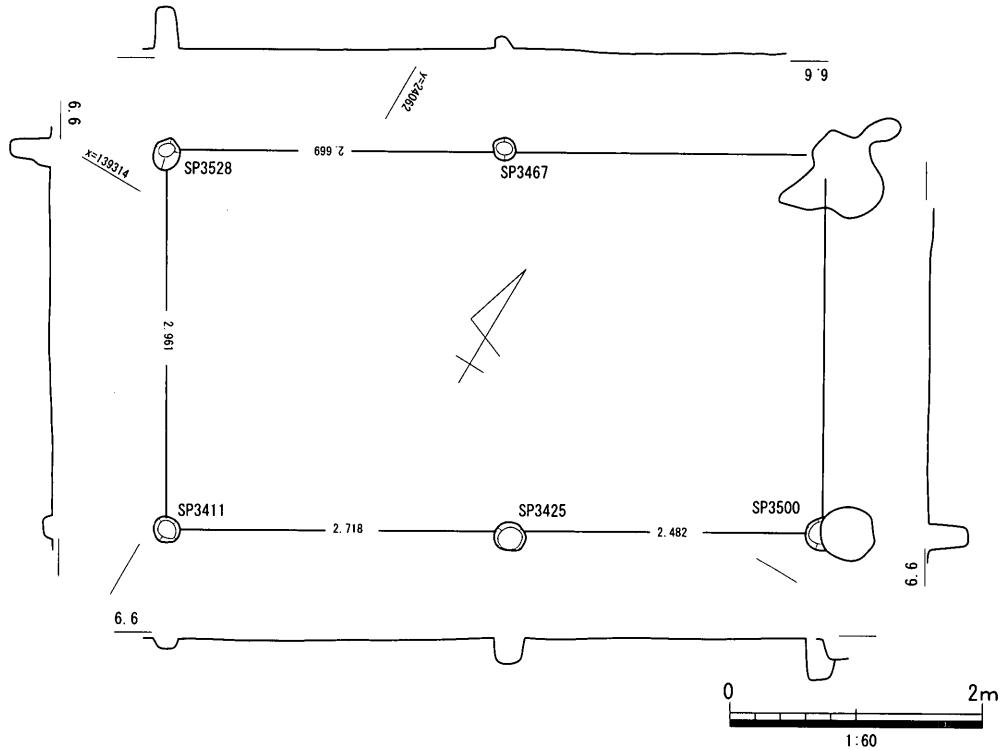
遺物は、図示した以外には、土師質土器鍋、焼土塊等の小片が少量出土したのみである。474は、SP2779より出土した鉄滓である。出土遺物より、14世紀を中心とした時期に位置付けられる。

SB58(第136図)

III a 区南西部で検出。SB59、SD15と重複し、



第137図 SB59 平・断面図、出土遺物実測図



第138図 SB60平・断面図

柱穴跡の切り合い関係より、SB59より後出し、SD15より先行する。SB57同様に、桁行東列の柱穴列はSD15により消失したと判断し、周辺の柱穴跡配置より、梁間2間の建物として復元する。

遺物は、土師質土器小皿・碗等の小片が少量出土したのみであり、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。

SB59（第137図）

Ⅲa区南西部で検出。SD15と重複し、柱穴跡の切り合い関係より、SD15より先行する。本建物もSD57・58と同様に、SD15による攪乱を考慮し、梁間3間の建物として復元する。

遺物は、土師質土器小皿、瓦器、亀山焼、焼土塊等の小片が少量出土した。出土遺物のみでは時期決定の根拠に乏しいが、概ね13世紀中頃を中心とした時期に位置付けておく。

SB60（第138図）

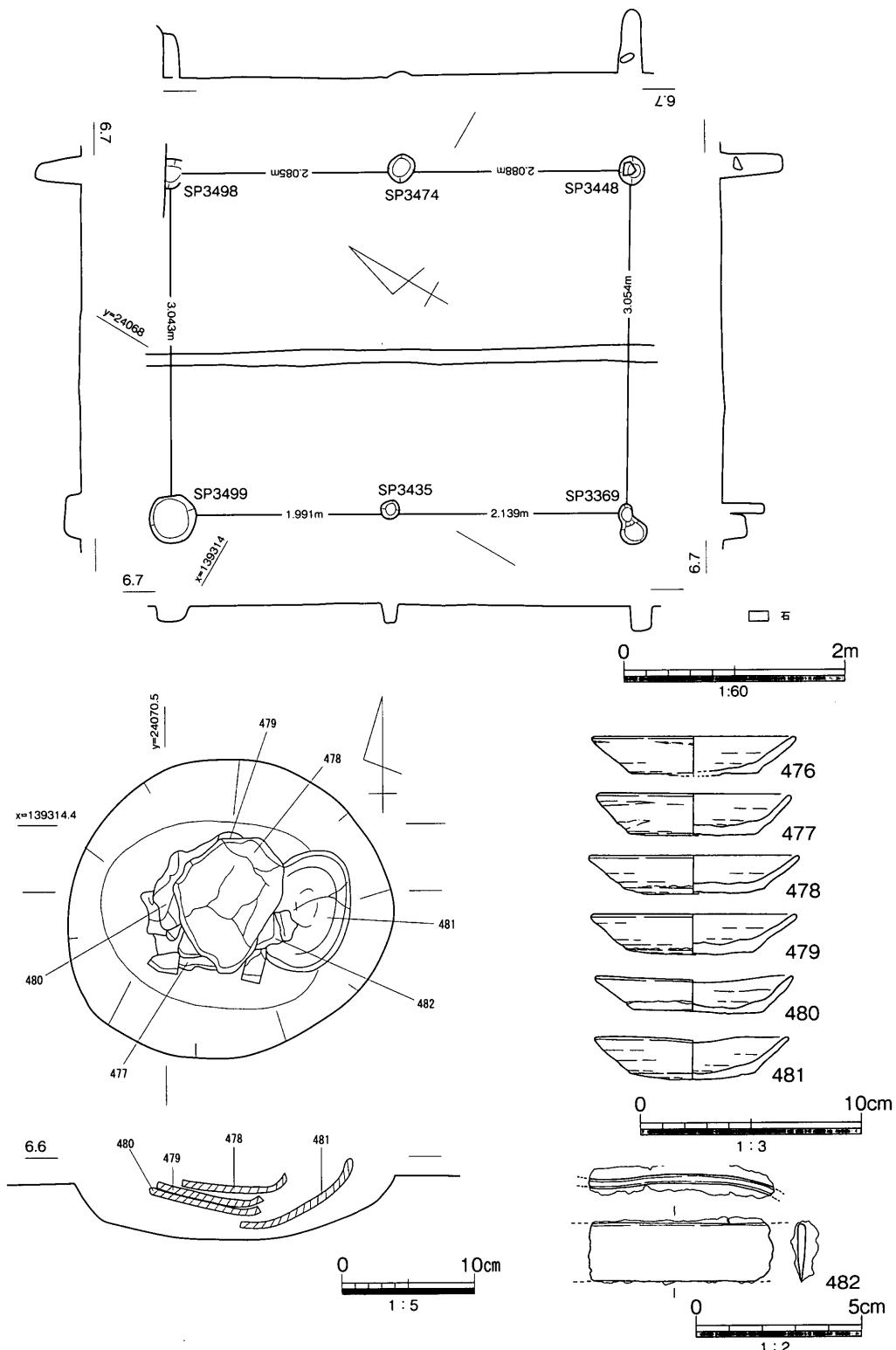
Ⅲb区北東部で検出。SB61・62と重複し、柱穴跡の切り合い関係より、SB61より先行することが確認された。北東隅柱を攪乱坑により欠く。

遺物は、器種不詳の土師質土器の小片が少量出土したのみであり、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。

SB61（第139図）

Ⅲb区東部で検出。SB62と重複するが、柱穴跡に切り合い関係はなく、先後関係は不詳である。東に1間延長し、東西棟総柱建物の可能性も考えられたが、攪乱が顕著で断定が困難なため、掲載した復元案により報告する。

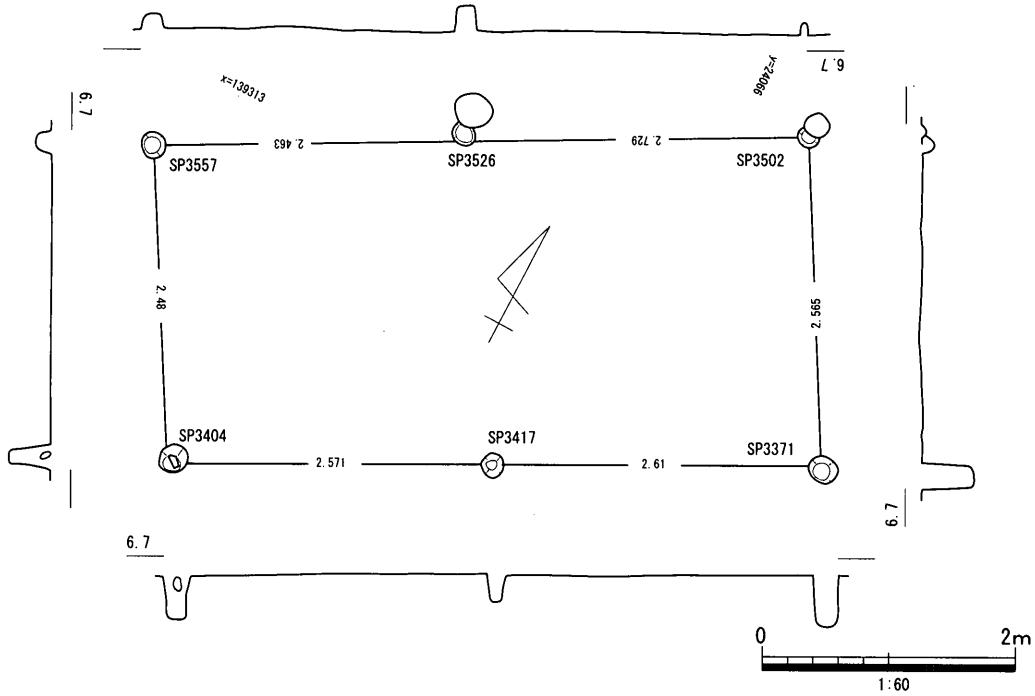
桁行東列中央柱（SP3474）からは、ほぼ完形の土師質土器小皿5枚（477～481）が重ねられて出土した（図版44）。皿はいずれも口縁部を上に据え置かれ、上位3枚は重ねられて、最下位の1枚はやや東にずらせて置かれていた。また上から2枚目と3枚目の皿の間に挟まれて、鉄製刀子の刀身部の断片（482）が出土している。さらに数枚の皿が置かれていた可能性も想定されるが、上面の削平のため確認することはできなかった。SB61の地鎮に伴う遺構と考えられる。出土遺物より、14世紀前半を中心とした時期に位置付けられる。



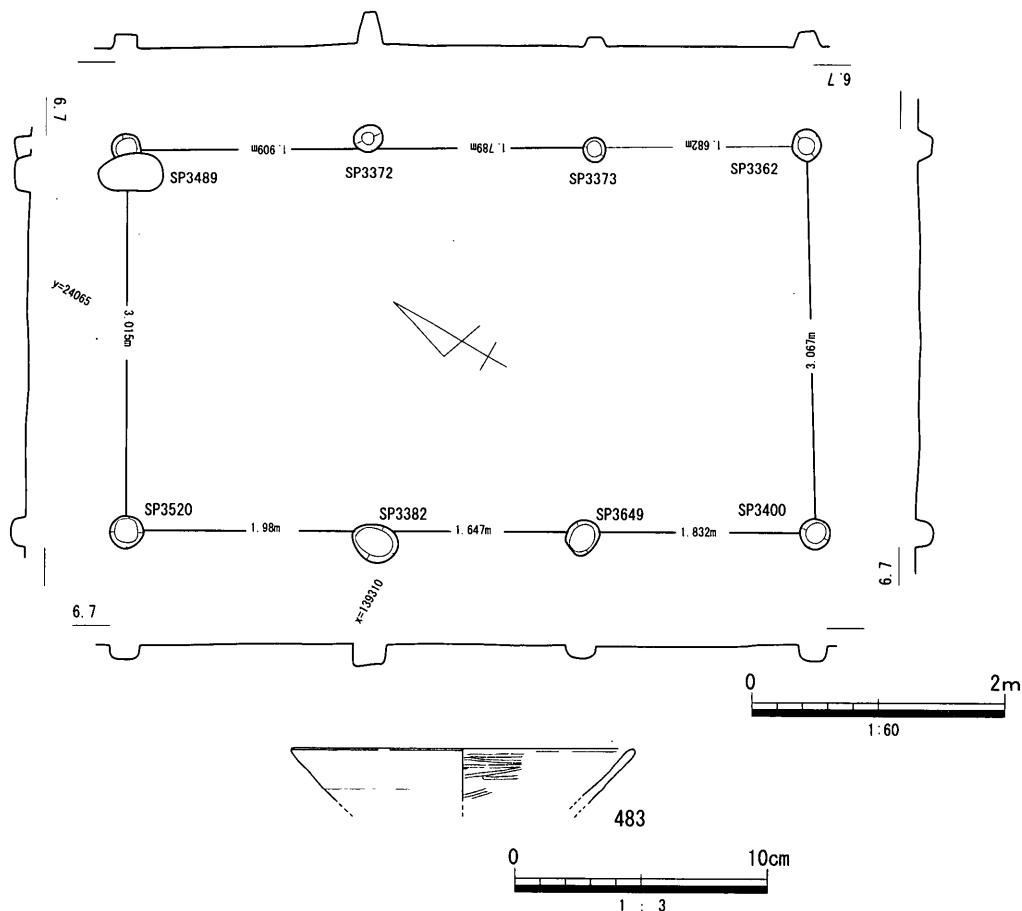
第139図 SB61平・断面図、SP3474平・断面図、出土遺物実測図

SB62(第140図)

III b区東部で検出。SB63・64と重複するが、柱穴跡に切り合い関係ではなく、先後関係は不詳である。
遺物は、土師質土器小皿等の小片が少量出土したのみであり、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。



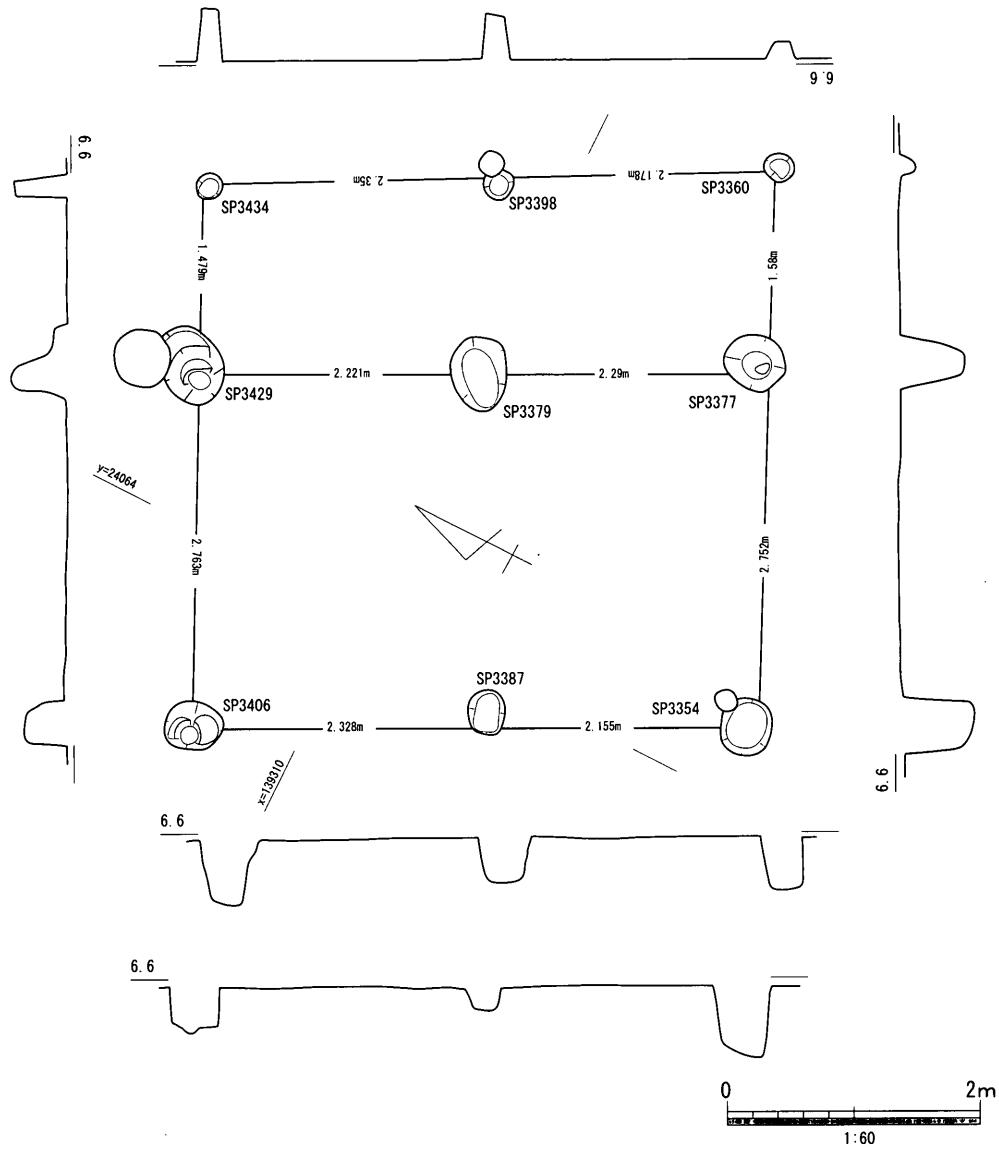
第140図 SB62平・断面図



第141図 SB63平・断面図、出土遺物実測図

SB63(第141図)

III b区東部で検出。SB64と重複するが、柱穴跡に切り合い関係はなく、先後関係は不詳である。



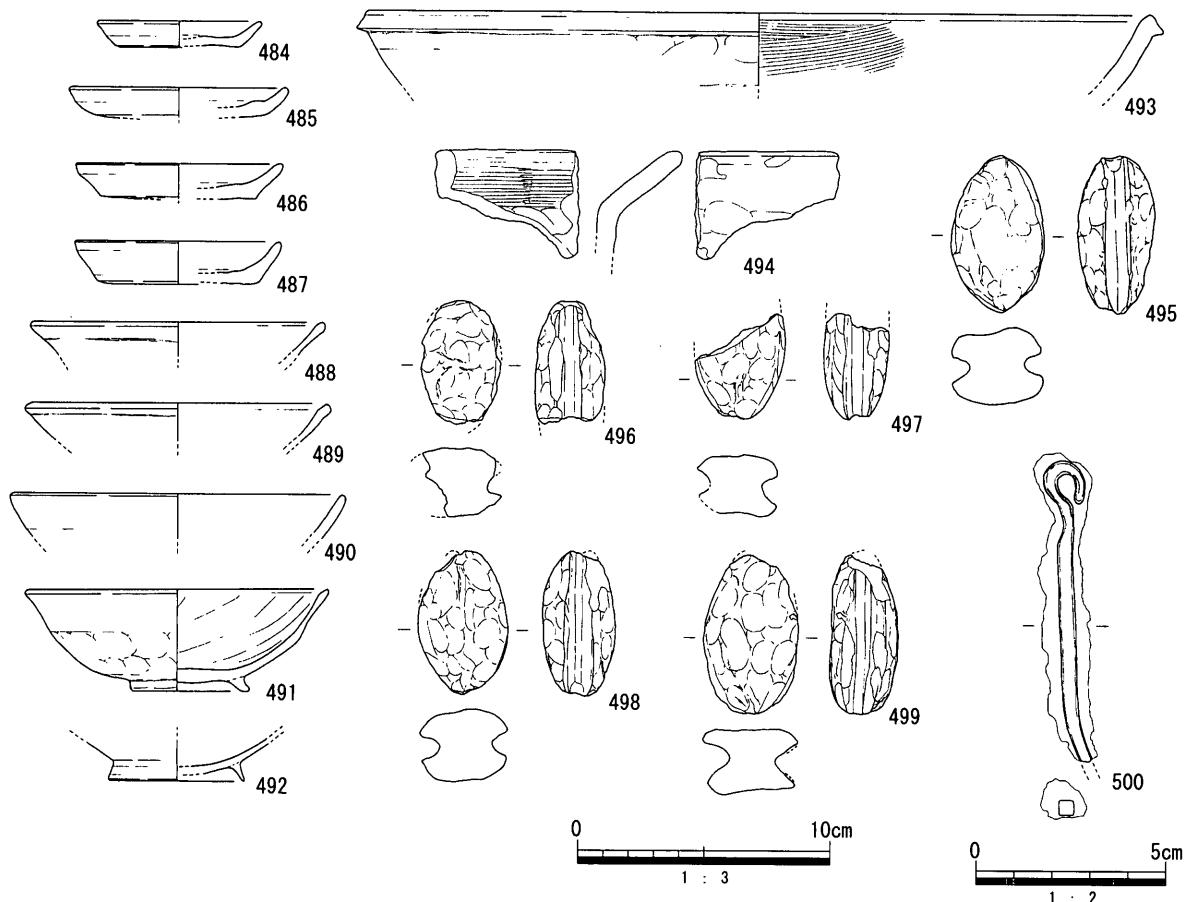
第 142 図 SB64 平・断面図

遺物は、図示した以外には、土師質土器小皿、焼土塊等の小片が少量出土したのみである。483 は、和泉型瓦器碗で、尾上 III-3 期に所属する。やや時期決定の根拠となる遺物に乏しいが、概ね 13 世紀後半を中心とした時期に位置付けられる。

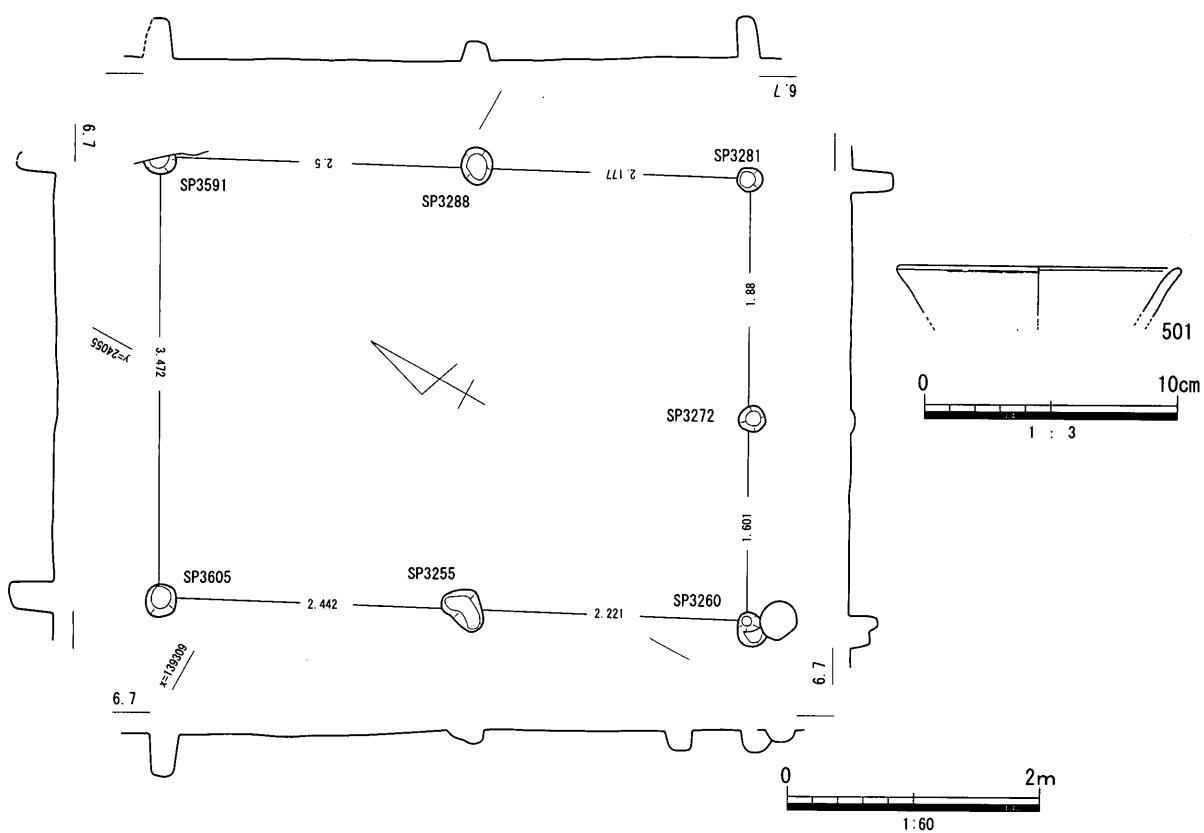
SB64 (第 142 図)

III b 区東部で検出。本建物では、梁間北列の柱穴に重複して、ほぼ同規模の柱穴跡 (SP3408・3428) がそれぞれ配置されている。梁間の柱穴跡以外に、重複して切り合うものは認められず断定はできないが、南半部の 4 本の柱を残しながら、やや北に拡張して建替えがなされた可能性も考えられる。

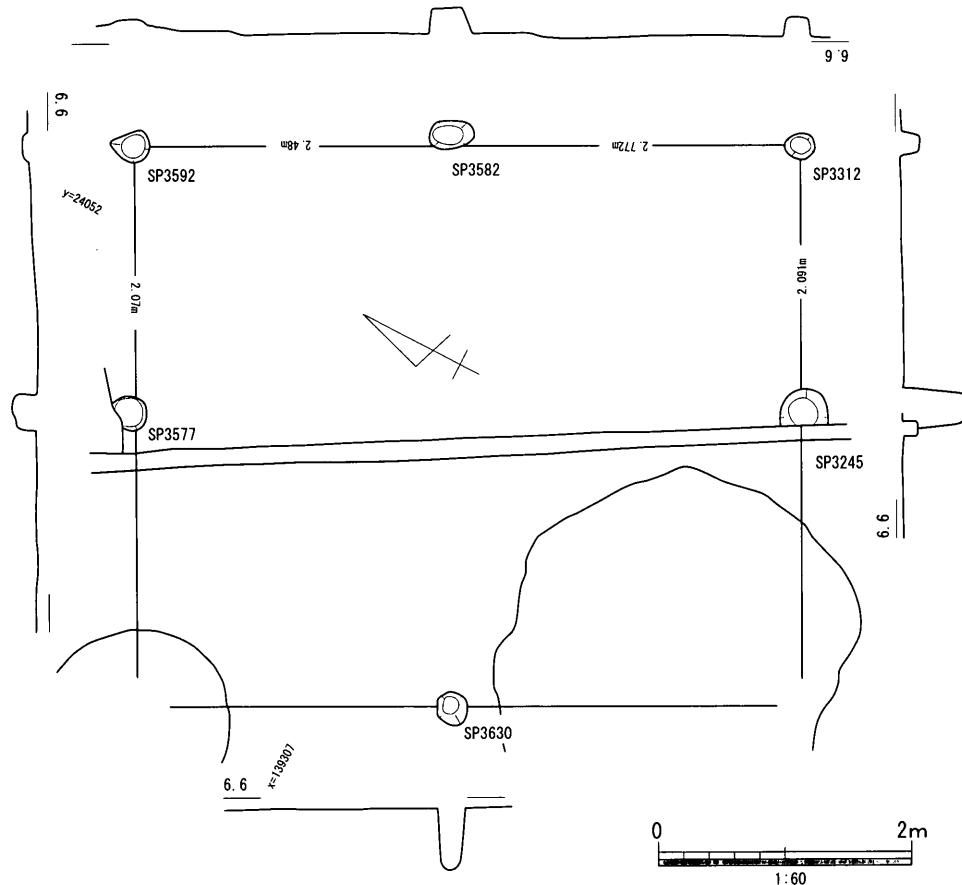
遺物は、やや特徴的な出土状況を呈している。SP3377 の底面付近からは、ほぼ完形に復元可能な吉備系土師質土器碗 1 個体 (491) が、口縁部を柱穴跡中央に向けて横位の状態で出土 (図版 43) し、その上面付近より土錘 4 点 (496 ~ 499) と亀山焼甕 (493) 等が出土した。また SP3354 からは、土錘 1 点 (495) が出土している。出土状況より建物設置時に意図的に埋置した地鎮に伴う遺物と考えられ、土錘の多さからは建物の特殊な性格が想定される。なお、図示した以外には、器種不詳の土師質土器等の小片が少量出土しているのみである。491・492 は、吉備系土師質土器碗で、いずれも山本 III-2 期に所属する。495 ~ 499 は土錘で、真鍋有溝土錘 C b である。出土遺物より、13 世紀中頃を中心とした時期に位置付けられる。



第143図 SB64出土遺物実測図



第144図 SB65平・断面図、出土遺物実測図



第145図 SB66 平・断面図

SB65（第144図）

III b 区北部で検出。SB66 と重複するが、柱穴跡に切り合い関係はなく、先後関係は不詳である。梁間北列中央柱を欠く。

遺物は、図示した以外には、土師質土器小皿等の小片が少量出土したのみである。501 は、中国白磁碗で、口唇部を釉剥ぎする。大宰府分類IX類に所属する。やや時期決定の根拠となる遺物に乏しいが、概ね 13世紀中頃～後半を中心とした時期に位置付けられる。

SB66（第145図）

III b 区北西部で検出。北西及び南西隅柱を攪乱坑により欠くが、SP3630 を桁行西列中央柱として、図示した復元案により報告する。

遺物は、土師質土器小皿、焼土塊等の小片が少量出土したのみであり、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。

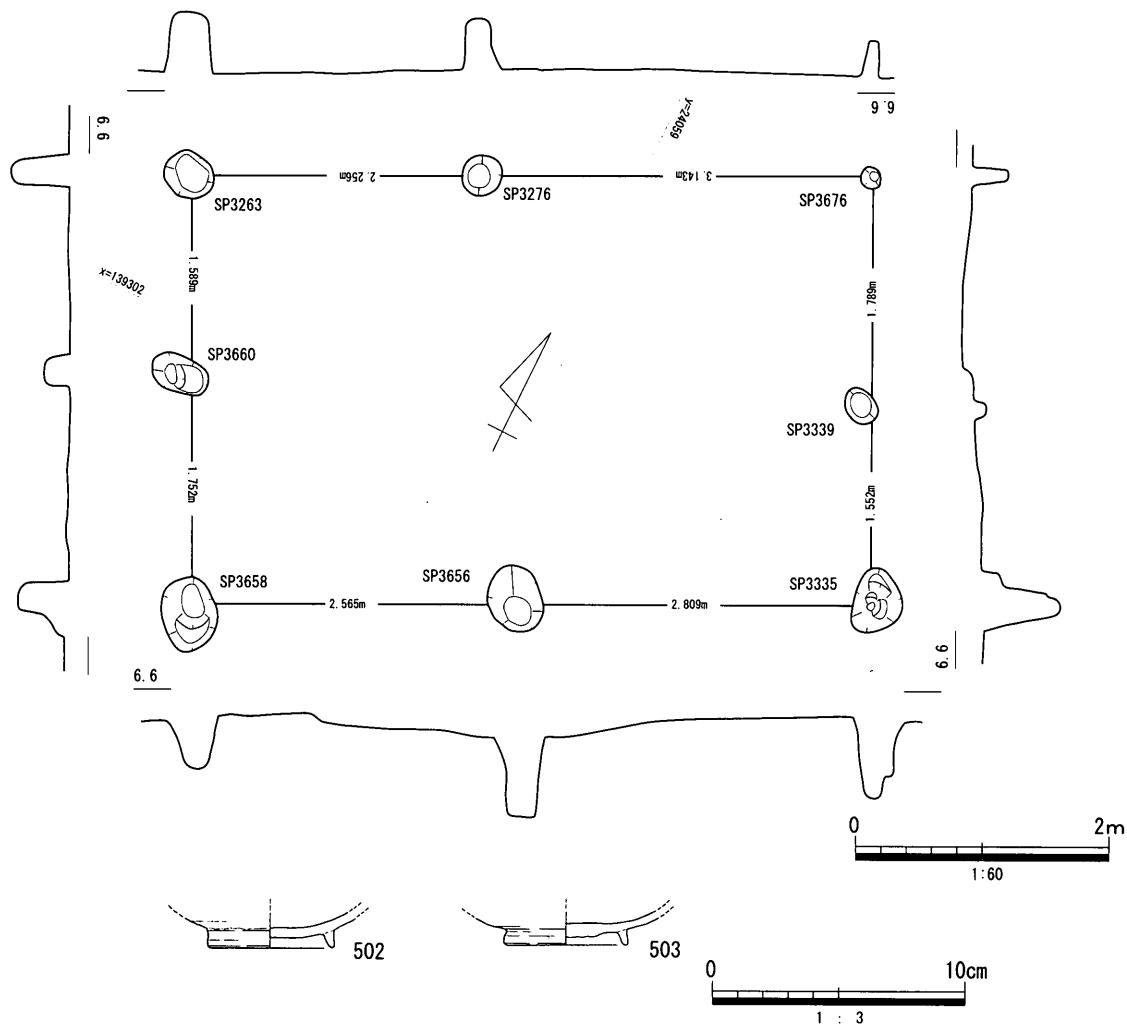
SB67（第146図）

III b 区南部で検出。SD16 と重複し、柱穴跡の切り合い関係より、SD16 より先行する。

遺物は、図示した以外には、土師質土器小皿・足釜、焼土塊等の小片が少量出土したのみである。502・503 は、SP3658 より出土した吉備系土師質土器碗で、山本III—2期に所属する。出土遺物より、13世紀中頃を中心とした時期に位置付けられる。

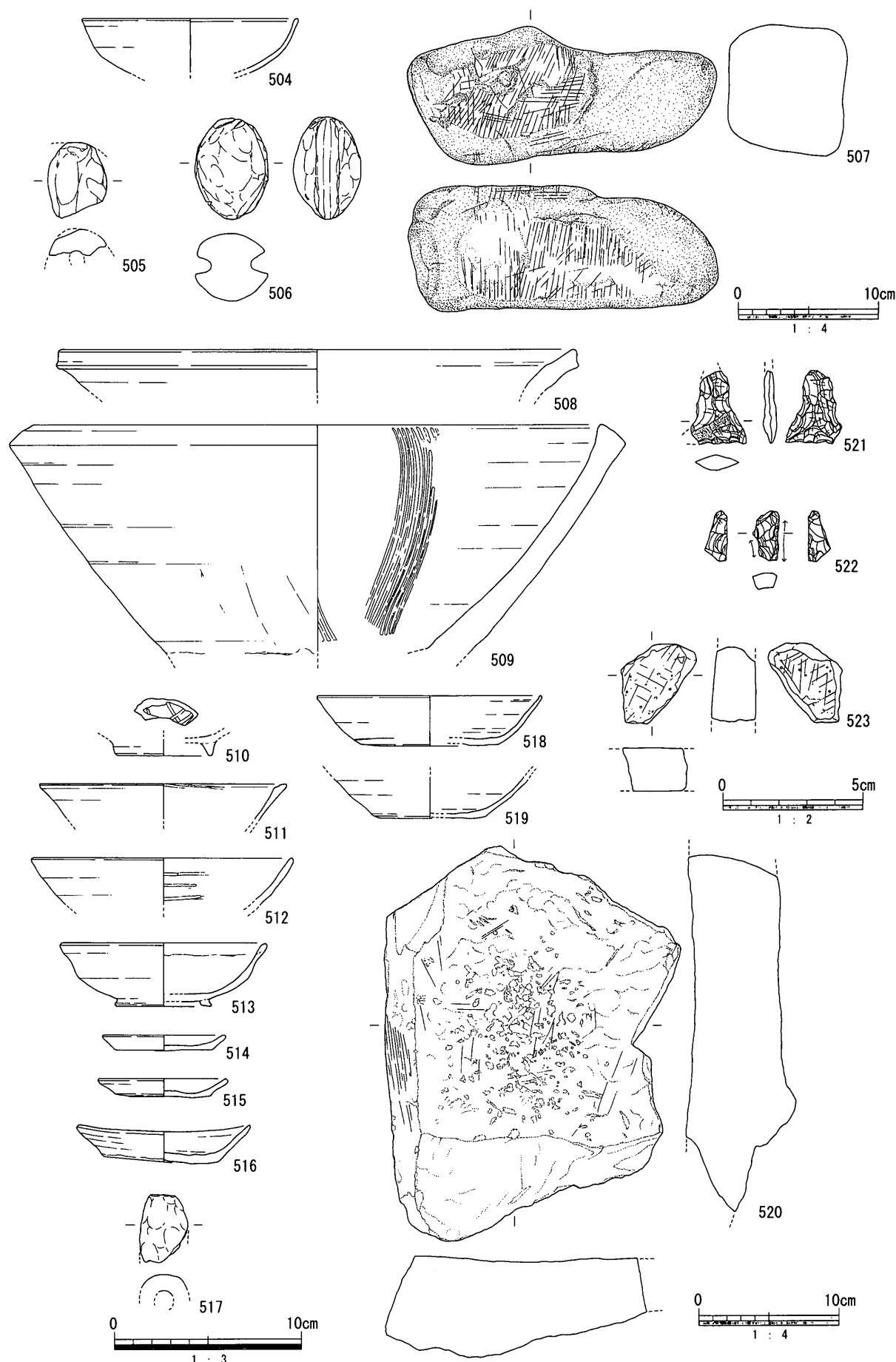
柱穴跡

第147～152図には、III区で検出された柱穴跡のうち、建物遺構を構成できなかった柱穴跡から出土した遺物について、III区屋敷地の様相を理解する上で、特に必要と判断したものを掲載した。504 は、吉備系土師

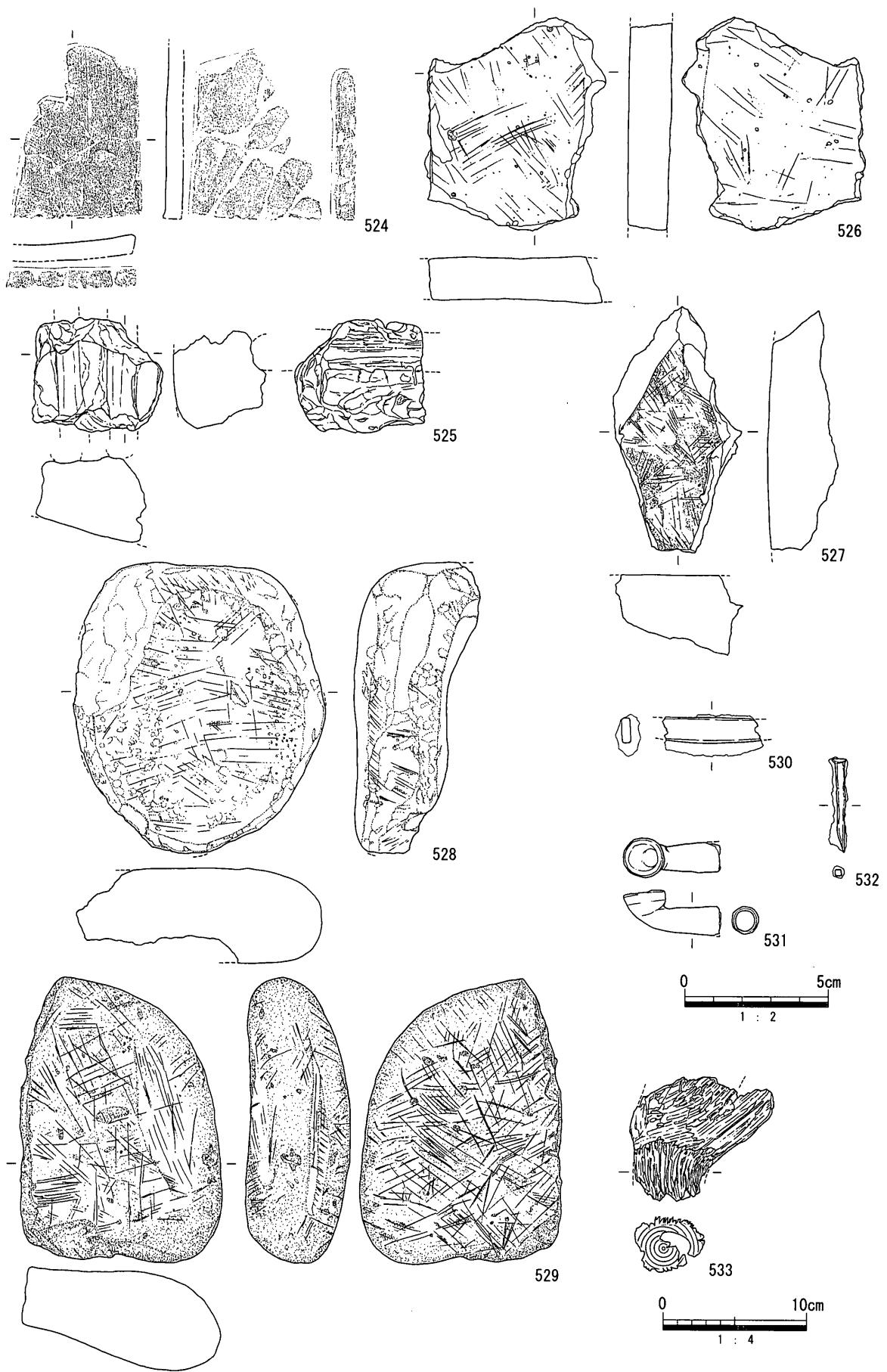


第146図 SB67 平・断面図、出土遺物実測図

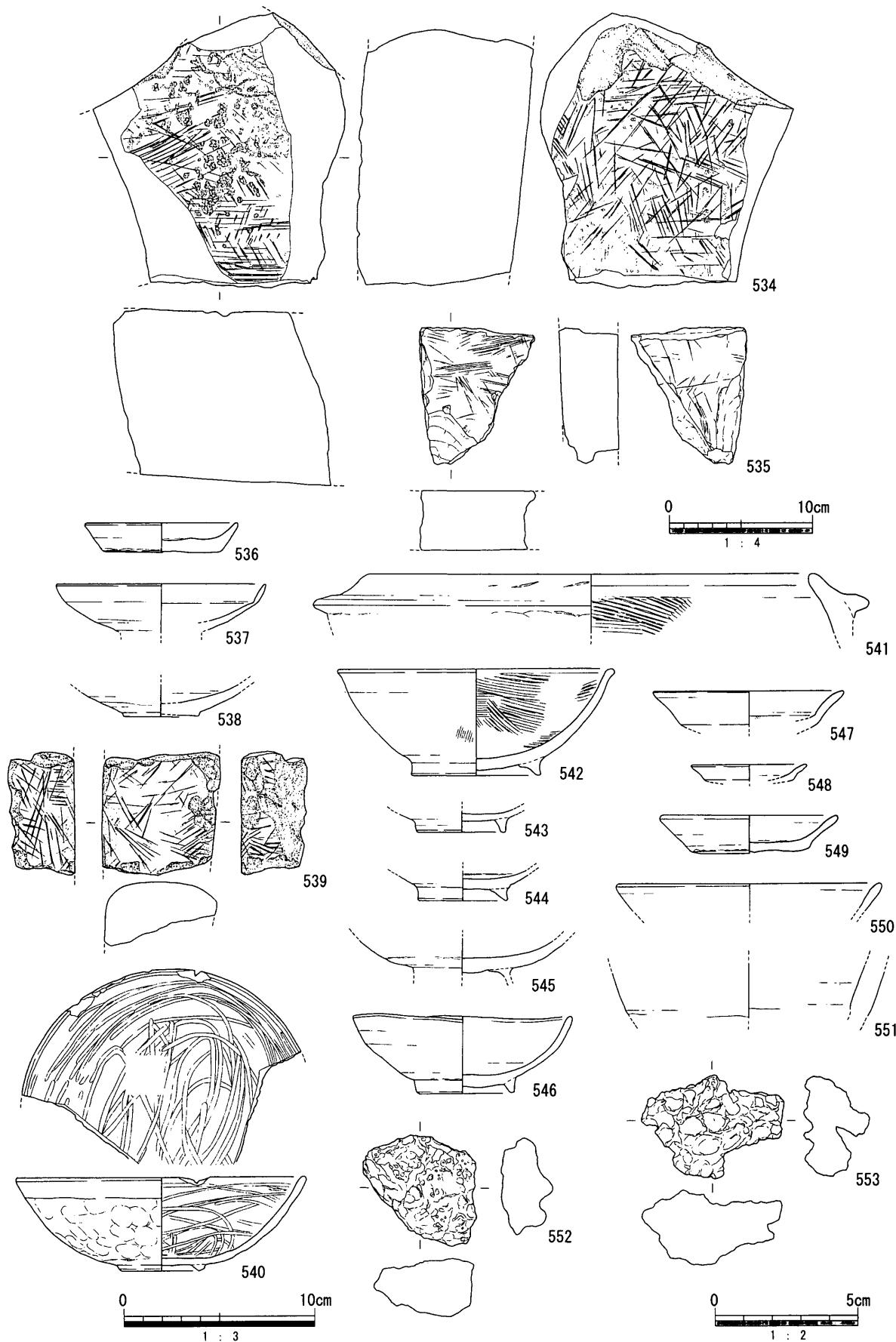
質土器碗で、山本III—2期に所属する。505は、真鍋管状土錘A I b類である可能性が高い。506は、真鍋有溝土錘C b類で、ほぼ完形品である。507は、砂岩製砥石で、全面に弱い被熱痕を認める。柱穴詰石として転用された状態で出土した。508は、東播系須恵器甕である。509は、備前焼擂鉢で、乘岡中世3a期に所属する。510は、和泉型瓦器碗で、尾上II—3期に所属する。511・512は、十瓶山周辺産須恵質土器碗である。513は、吉備系土師質土器碗で、山本III—3期に所属する。516は、SP2796の検出面近くより、底部が上になった状態で出土（図版39）した土師質土器小皿である。517は、真鍋管状土錘A I b類である可能性が高い。520は、SP2661より出土した安山岩製砥石・台石で、上面に細かな敲打痕が無数に認められ、側面は砥石として使用されている。周縁は大きく割り取られる。521は、サヌカイト製石鏃である。522は、チャート製火打石である。523は、流紋岩製砥石で、方柱状を呈していたとみられるが、細かく破碎されている。524は、瓦質焼成の平瓦で、凸面には離砂痕を認める。525は、壁土とみられる焼土塊で、表裏に木舞の痕跡が、交差して配される。526は、板状を呈する安山岩製砥石で、破断面を含めやや顕著な被熱痕を認める。527も安山岩製砥石で、大きく破碎されており、旧状を留めない。また破断面を含め、被熱痕を認める。528は、砂岩製砥石で、図上面と右側面に使用による線条痕を認める。裏面は、大きく破碎され、破断面を含めやや顕著に被熱する。529も、砂岩製砥石で、図表裏面と側面に顕著な線条痕を認める。左半部を大きく破損し、破断面を含め一部被熱する。530は、断面矩形を呈する鉄製品で、小柄の可能性が考えられる。531は、銅製煙管の雁首である。533は、柱材で、腐食が顕著なため、加工痕は不明瞭。534は、安山岩製砥石・台石で、図左面には顕著な敲打痕と線



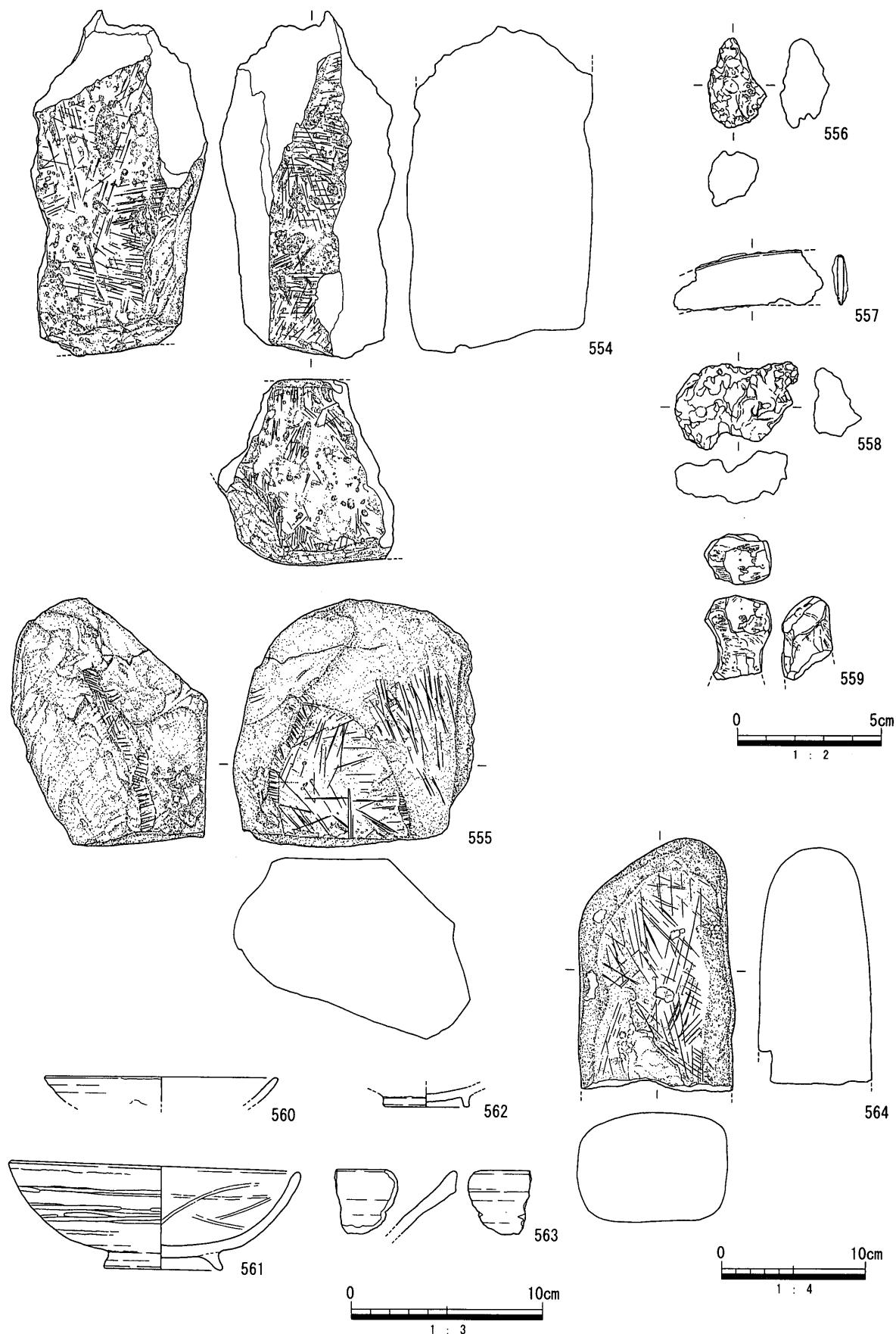
第147図 Ⅲ区柱穴出土遺物実測図1



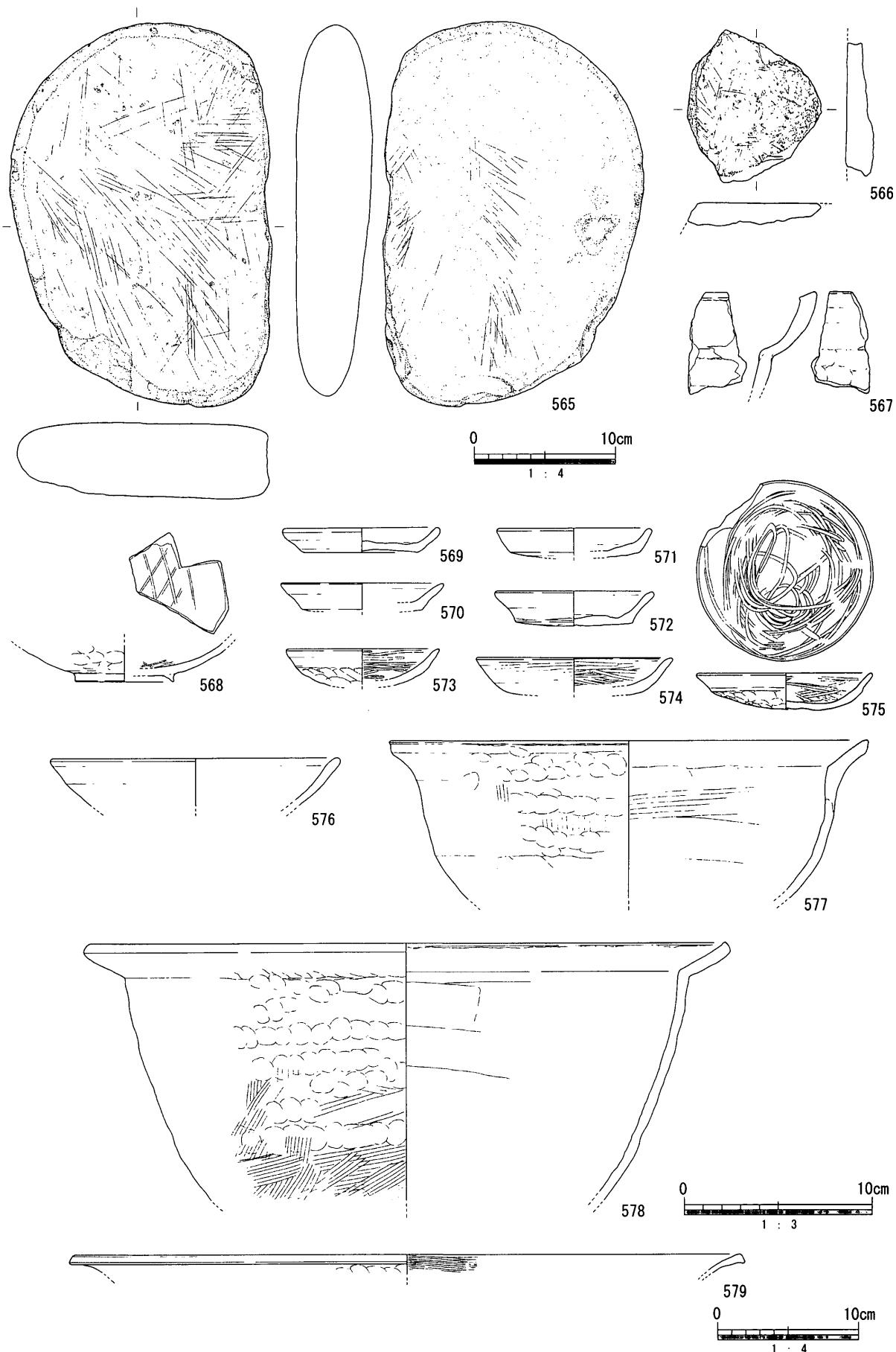
第148図 Ⅲ区柱穴出土遺物実測図2



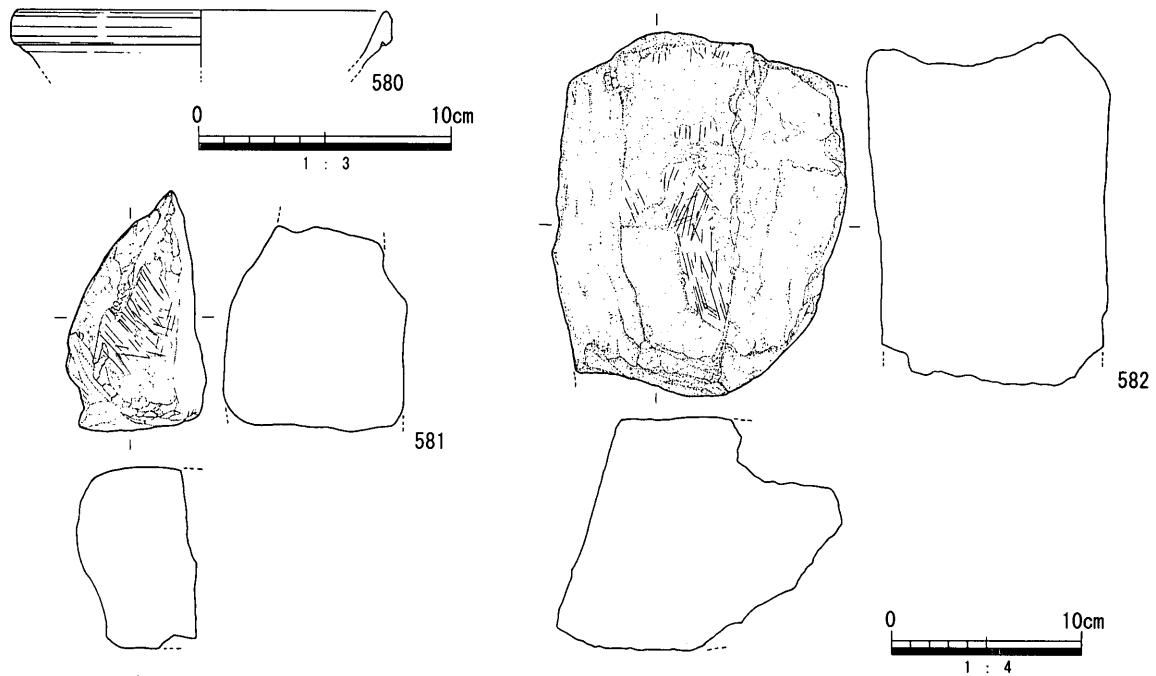
第149図 Ⅲ区柱穴出土遺物実測図3



第150図 Ⅲ区柱穴出土遺物実測図4

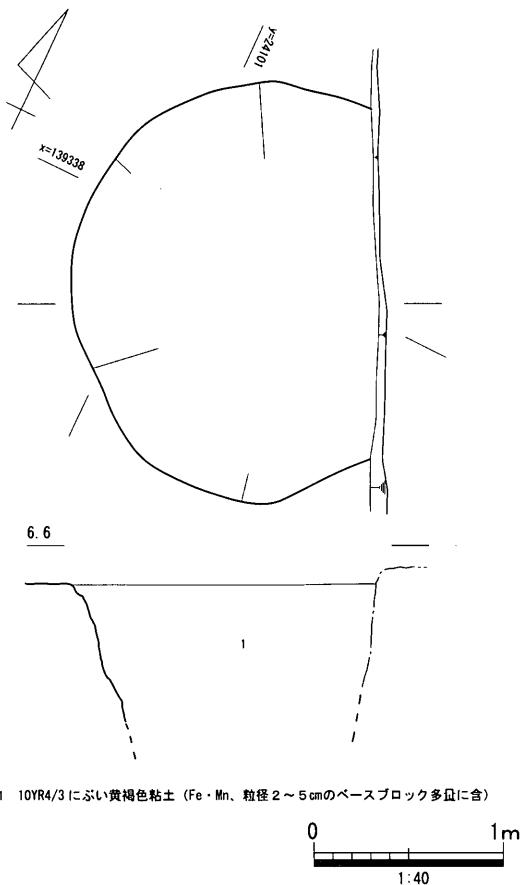


第 151 図 Ⅲ区柱穴出土遺物実測図 5

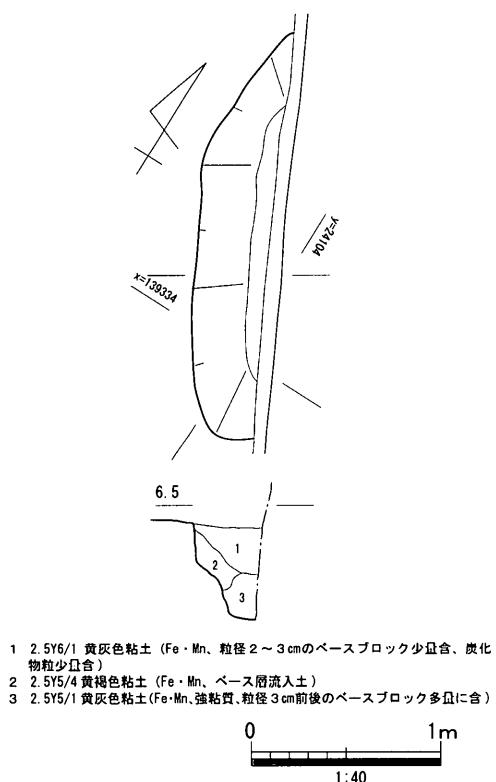


第 152 図 Ⅲ区柱穴出土遺物実測図 6

条痕が、右面には線条痕が刻まれる。図示していないが、上面にも敲打痕がある。周縁は大きく破碎され、一部に被熱痕を認める。535 も、板状を呈する安山岩製砥石で、表裏面に線条痕を認める。また周縁は大きく破碎され、旧状を留めない。536 は、SP3301 より出土した土師質土器小皿で、底部を上に、掘り方壁際より出土（図版 43）した。537・538 は、中国龍泉窯系青磁皿で、白化粧掛けした後、青磁釉を施す。539 は、砂岩製砥石で、方柱状を呈していたとみられるが、上下端と裏面は大きく破碎され、旧状を留めない。破断面を含め、弱い被熱痕を認める。540 は、SP3330 より出土したほぼ完形に近く復元される和泉型瓦器碗で、高台が上になつた状態で、埋土中位付近より出土（図版 43）した。尾上Ⅲ—1 期に所属する。543・544 は吉備系土師質土器碗で、山本Ⅲ—1 b～2 期に所属する。546 は、SP3364 出土の完形の吉備系土師質土器碗で、口縁部を上に、柱穴掘り方にもたせかけるように出土（図版 43）した。山本Ⅲ—2 期に所属する。547 は、中国龍泉窯系青磁皿である。549 は、SP3363 出土の土師質土器小皿で、小片化しているが、ほぼ完形に復元できる。柱穴跡中央部より口縁部を上にした状態で出土した（図版 43）。550 は、十瓶山周辺産須恵質土器碗である。551 は中国産白磁瓶である。552・553 は鉄滓である。554 は安山岩製砥石で、砥石としての使用は部分的なものに留まるが、良く使い込まれている。旧状を留めないまでに大きく破碎され、破断面を含め、被熱痕を認める。555 も安山岩製砥石で、大きく破碎され、破断面の一部も砥面として使用されている。556・558 は鉄滓である。557 は鉄鎌刃部の可能性がある。559 は動物遺体である。560 は肥前系陶器皿で、大橋Ⅱ期前半に所属する。561 は、SP3484 出土の吉備系土師質土器碗で、口縁部の一部を欠損する。柱穴跡底面に接して、底部を下にした状態で出土（図版 44）した。上面には拳大程度の礫が置かれていた。山本Ⅱ期に所属する。562 は、和泉型瓦器碗で、尾上Ⅲ—1～2 期に所属する。563 は、東播系須恵器捏鉢で、森田第Ⅷ期第 2 段階に所属する。564 は、砂岩製砥石で、下半部を破碎され、破断面を含め強い被熱痕を認める。565 も、砂岩製砥石で、図左面は非常に良く使い込まれている。図右面を中心とし被熱痕を認める。566 は、安山岩製砥石で、良く使い込まれているが、大きく破碎され、旧状を留めない。568 は、和泉型瓦器碗で、尾上Ⅱ—3 期に所属する。573～575 は、和泉型瓦器皿である。575 はほぼ完形に復元され、SP3590 の掘り方に立てかけるように、土師質土器土鍋（578）の上に、口縁部を上にやや斜めに据え置かれた状態で出土（図版 44）した。580 は、中国白磁碗で、焼成は不良で、胎土はやや陶器質である。大宰府分類IV類に所属する。581 は、砂岩製砥石で、大きく



第153図 SK45 平・断面図



第154図 SK46 平・断面図

破碎され、破断面を含め強い被熱痕を認める。582は、花崗岩製砥石であるが、形状は不安定で、砥面の使用頻度も低く、恒常的な使用は考え難い。

以上、柱穴跡より出土した土器類のうち、完形もしくはほぼ完形に復元可能な516・536・540・546・549・561・575等は、意図的に埋置した可能性が想定され、地鎮に伴う遺物と考えられる。また、砥石・台石については、砂岩や安山岩製のものが中心で、いずれも適当な大きさに打ち割られる等して、最終的には柱穴内の根石に転用されて出土している。

土坑

SK45(第153図)

III a区北東隅で検出。東端部は調査区外へ延長するが、概ねその形状は窺える。検出面下0.7m程度まで掘り下げたが、崩落の危険性があると判断し、底面まで掘り下げることは断念した。埋土は確認した範囲では単層(1層)で、人為的な埋め戻しの可能性が想定される。規模や掘削深度から井戸跡の可能性も考えられたが、完掘していないため土坑として報告する。出土遺物は少量であるが、18世紀後半以降の埋没が想定される。

SK46(第154図)

III a区東端部で検出。西半部の掘り方を検出したのみで、遺構の大半は調査区外へ延長し、全形は不詳である。埋土は3層に細分され、上下2層に大別する。上層(1・2層)は、遺構廃絶後の自然堆積層と考えられる。特に2層は、ベース層に酷似し、ベース層の流入堆積土とみられる。下層(3層)は、ブロック土の混入が顕著で、人為的に埋め戻された可能性が窺える。

遺物は、肥前系磁器等の小片がコンテナ1/4箱程度出土した。また各層より出土した遺物に顕著な時期差は認められず、比較的短期間に埋没が進行したとみられる。出土遺物より、18世紀後半～19世紀前半に位置付けられる。

SK47(第155図)

III a区北東部で検出。やや歪な平面プランより複数遺構の重複の可能性が考えられたが、土層断面の観察の結果、単一の遺構であることが判明した。埋土は単層(1層)で、ブロック土が多量に混在し、人為的に埋め戻された可能性が窺える。

遺物は、土師質土器等の小片が少量出土したのみである。中世後半代の遺物が混在するが、土師質土器や平・

丸瓦より、18世紀後半～19世紀前半に位置付けられる。

SK48（第156図）

III a 区東半部で検出。埋土は2層に細分された。下層（2層）は、ブロック土を多量に含み、人為的に埋め戻された可能性が窺える。上層（1層）は、埋め戻し後に生じた窪地を埋める自然堆積層と考えられる。

遺物は、上層より土師質土器の小片が1点出土したのみであるが、埋土や形態がSK47等に近似することから、ほぼ同時期の埋没の可能性が想定される。

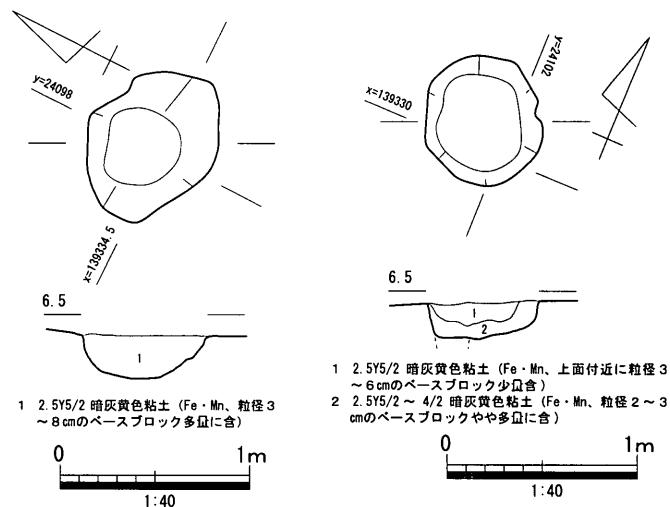
SK49（第157図）

III a 区南東部で検出。土層は4層に細分され、上～下3層に大別する。平・断面形状から明らかかなように、下層埋没後やや規模を大きくして上層土坑が掘り直されている。上・中層（1・2層）は上層土坑の埋土で、上層と中層上位にはブロック土が多量に混在し、最終的には人為的に埋め戻されたと判断される。中層下位層は土坑機能時の自然堆積層の可能性がある。下層（3・4層）は下層土坑の埋土で、ブロック土が多量に混在し、人為的に埋め戻されている。土坑底面には、層厚約1cmの灰色粘土層が堆積し、桃核等の植物遺体が出土した。下層土坑底面の平面プランはほぼ整円形で、断面は箱形に整えられており、後述するSK50と同様に、桶等の木製容器が据えられていた可能性が考えられる。

遺物は、上・中層を中心に土師質土器類等がコンテナ約1/2箱出土した。上・中層と下層より出土した遺物に大きな時期差は認められず、比較的短期間に埋め戻しと再掘削がなされたと考えられる。時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難ながら、既述したようにSK50と同様な内容を有する遺構と判断されることから、近接した時期と考えられる。

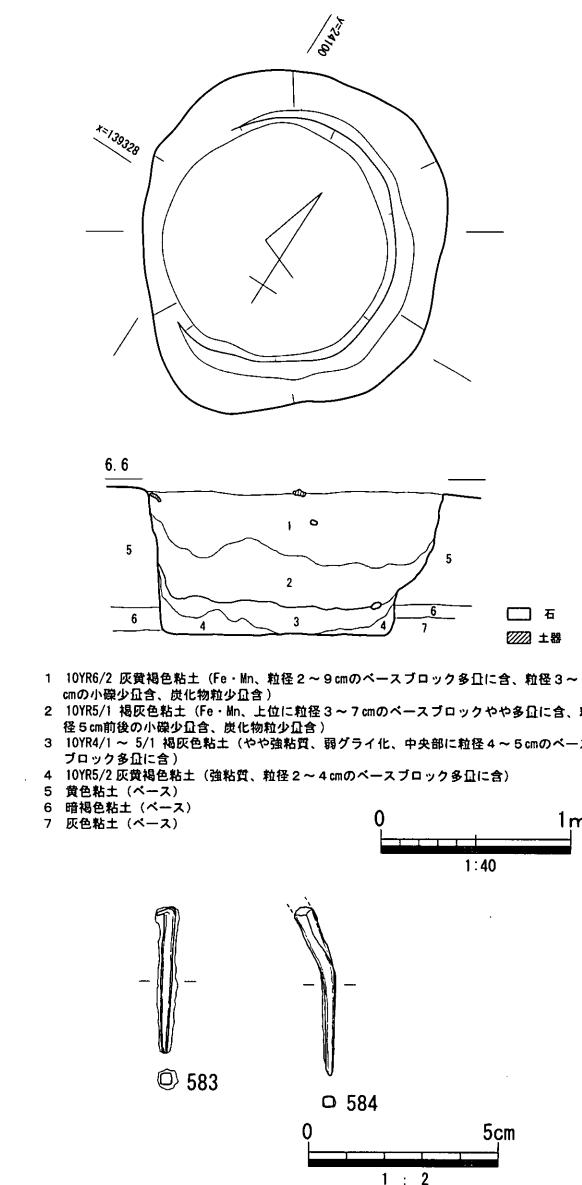
SK50（第158・159図）

III a 区中央部で検出。SX07と重複し、切り合い関係より後出する。埋土は4層に

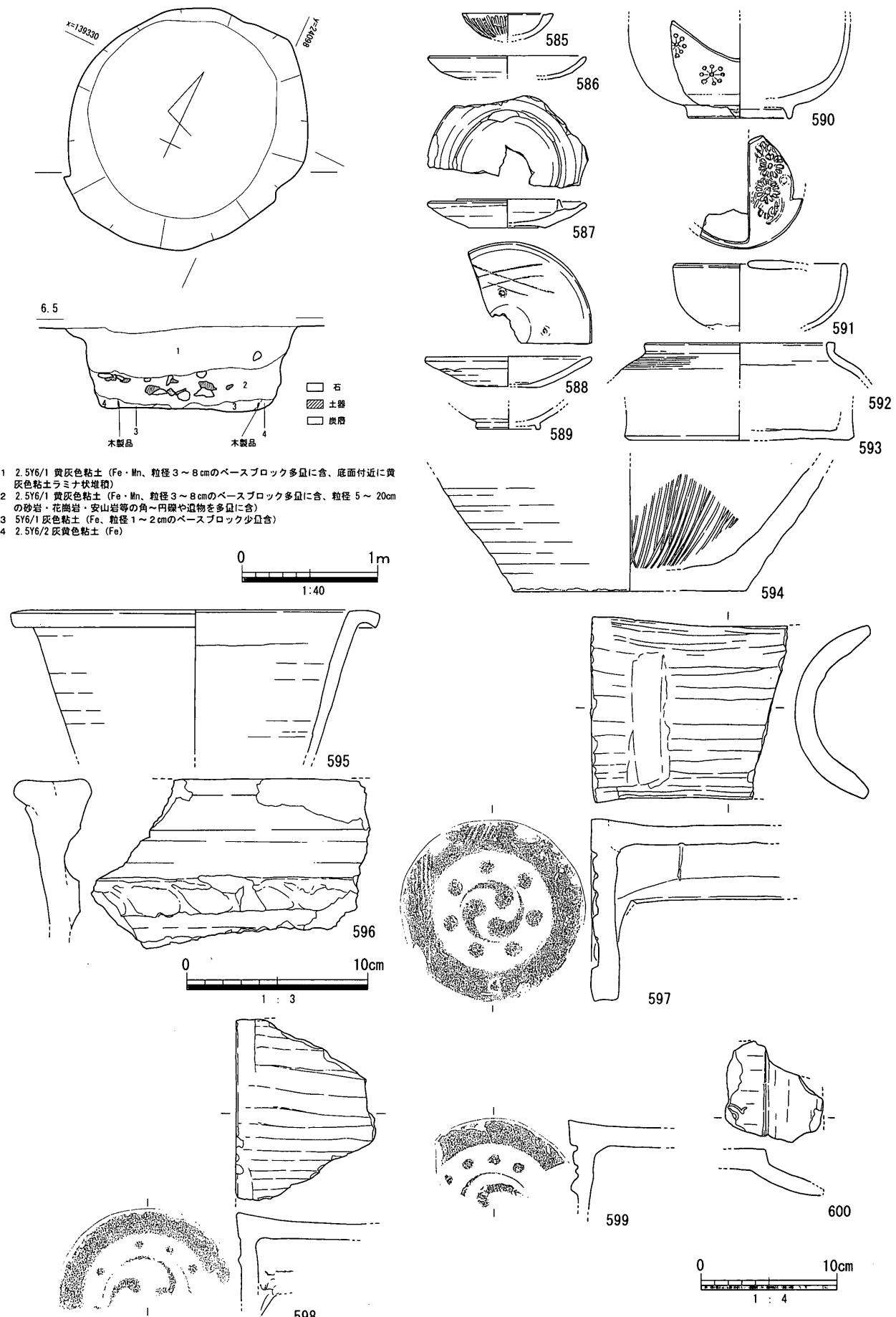


第155図 SK47 平・断面図

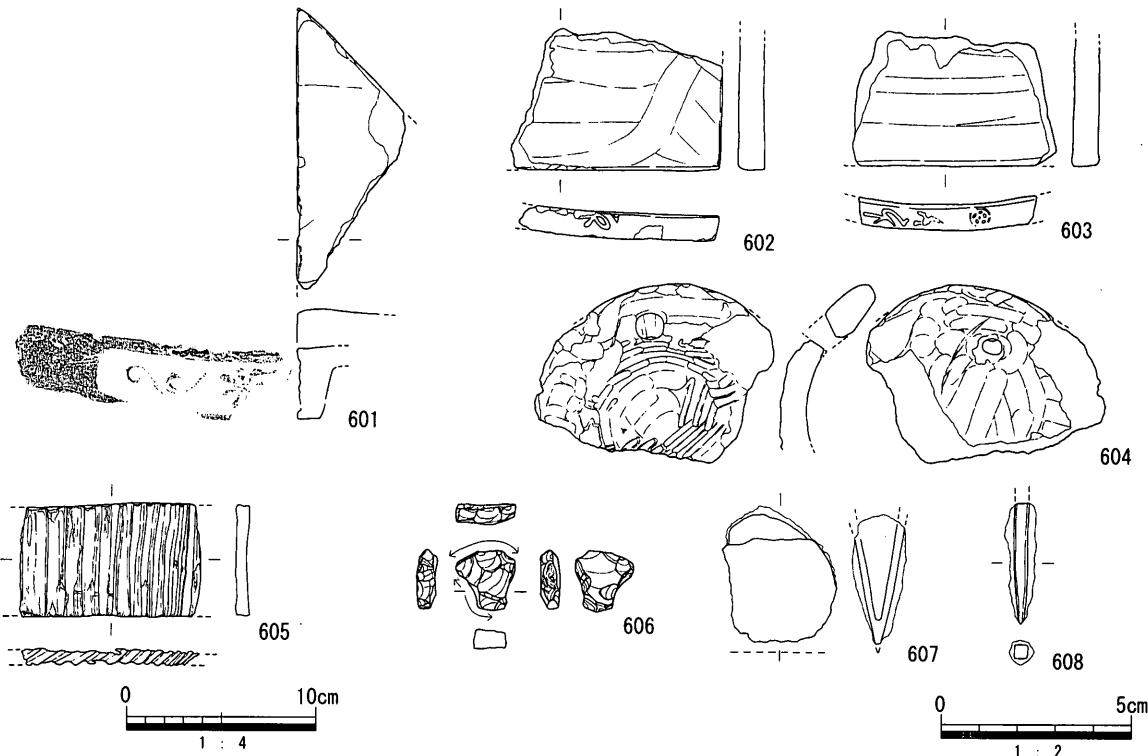
第156図 SK48 平・断面図



第157図 SK49 平・断面図、出土遺物実測図



第 158 図 SK50 平・断面図、出土遺物実測図 1



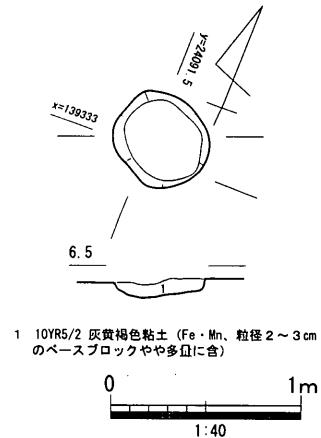
第159図 SK50出土遺物実測図2

細分され、上・下2層に大別する。上層（1・2層）は、土坑廃棄後の人為的な埋め戻し土と考えられ、特に2層には礫石や遺物が多量に投棄されていた。また1層は底面付近に粘土層のラミナ堆積が認められ、2層堆積後一定期間開口した状態であった可能性も考えられる。下層（3層）は土坑機能時の堆積層と考えられ、滞水下での堆積の可能性が想定される。3層と後述する4層との間には、腐食が著しく平面形状は捉えられなかったが、桶側板とみられる木製品が断面観察で確認された。4層は、ベース層に酷似した土層で、桶設置時の裏込土と考えられる。

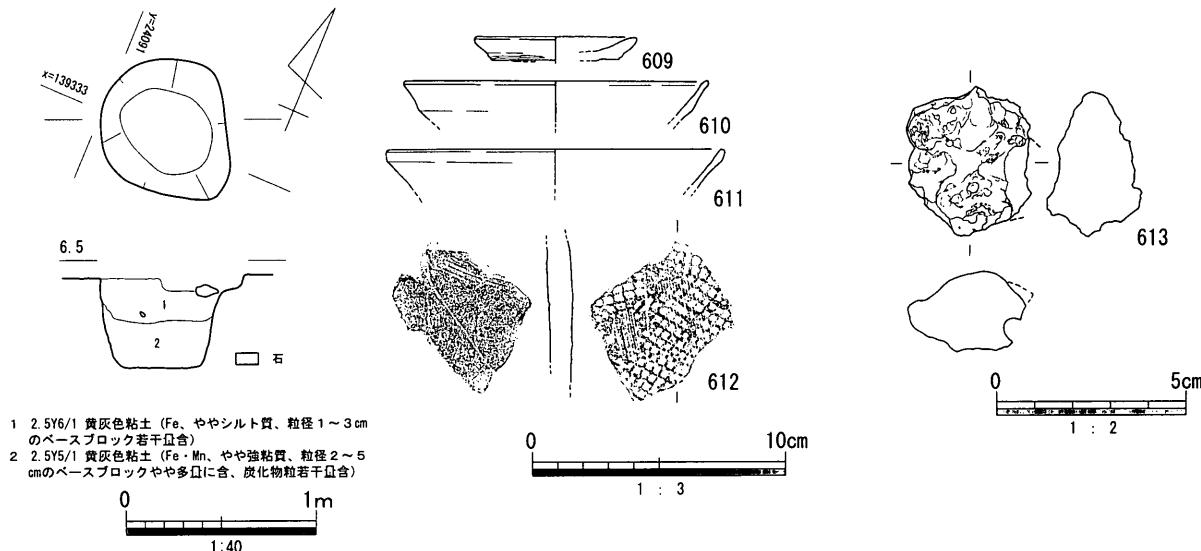
遺物は、瓦類を中心に土師質土器類等の小片がコンテナ3箱程度出土した。大半は上述したように2層からの出土である。また上層と下層出土の遺物に大きな時期差は認められず、比較的短期間の内に埋め戻されたと考えられる。585・587～592・594～605・608が上層、それ以外は下層出土の遺物である。585は、肥前系磁器紅皿で、大橋V期前半に所属する。586は、備前焼灯明皿である。587・588は、京・信楽系陶器灯明皿で、589は同丸碗、591は同水滴である。いずれも畑中4期古～中段階に所属する。590は、肥前系磁器鉢で、大橋V期前半に所属する。592は、関西系陶器土瓶、593は、備前焼浅鉢である。594は、同擂鉢で、乗岡近世2期に所属する。595は、瀬戸・美濃系陶器植木鉢で、藤澤第3段階第8小期に所属する。多量に出土した瓦類の内、軒瓦と刻印を有するものをのみ図示している。軒丸瓦は3種、軒平瓦は1種を確認できる。刻印は2種を確認でき、600と602は同一の原体が用いられる。604は、留蓋と考えられる。留蓋であれば、出土した瓦を用いた建物の屋根形式が、掛瓦を用いた切妻屋根であったと推定される。606は、チャート製火打石。607は、鉄斧であろう。出土遺物より、18世紀後半～19世紀初期と位置付けられる。

SK51（第160図）

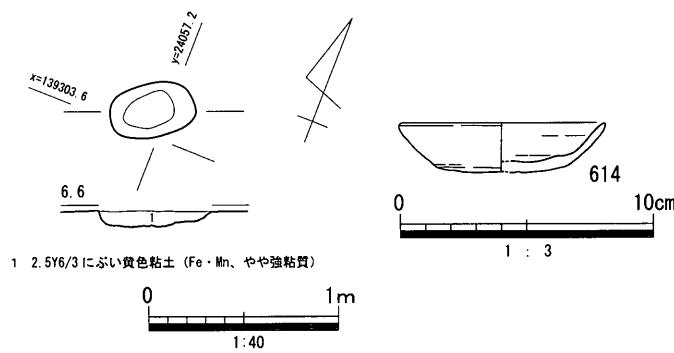
III a区北部で検出。後述するSK52と重複し、切り合い関係より後出する。埋土は単層（1層）で、プロッ



第160図 SK51 平・断面図



第 161 図 SK52 平・断面図、出土遺物実測図



第 162 図 SK53 平・断面図、出土遺物実測図

分され、概ね水平堆積する。上下層ともブロック土の混入が認められ、人為的に埋め戻された可能性が窺える。また土坑機能時の堆積層は認められず、土坑開削後比較的短期間の内に埋め戻されたと考えられる。

遺物は、土師質土器等の小片が、上層を中心コンテナ約 1/4 箱出土した。各層より出土した遺物に顕著な時期差は認められず、埋め戻しが短期間になされたことを示している。610 は、胎土より吉備系土師質土器碗と考えられ、山本Ⅲ—2 期に所属する。612 は、亀山焼、613 は、鉄滓である。時期決定の根拠となる遺物に乏しいが、概ね 13 世紀後半を中心とした時期に位置付けられる。

SK53 (第 162 図)

III b 区中央部で検出。埋土は単層（1 層）で、ベース層と近似しており、ベース層の流入堆積土と考えられる。遺物は、図示した以外には、器種不詳の土師質土器片と焼土塊が極少量出土したのみである。時期決定の根拠となる遺物に乏しいが、概ね 13 世紀中頃を中心とした時期に位置付けられる。

SK54 (第 163 図)

III a 区南部で検出。埋土は 3 層に細分された。上層（1 層）は土坑廃棄後の堆積層で、ブロック土が含まれることから、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。中層（2 層）は、層厚 2~6 cm 程度の灰色粘土層で、2 層上面から土坑掘り方周壁に沿って断面コ字状に堆積しており、箱形の木製容器が腐食し、土壤に置き換わった可能性が考えられる。下層（3 層）は、土坑底面を中心に堆積し、木製容器据え付けに伴う、裏込め土であろう。

遺物は、上層より土師質土器碗等の小片が 2 点出土したのみであり、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。

SK55 (第 163 図)

ク土が多量に混在し、人為的に埋め戻された可能性が窺える。

遺物は、土師質土器小皿と瓦器の小片が 3 点出土したのみで、詳細な時期を特定する資料は得られていない。SK52 より後出するところから、13 世紀後半以降に求められる。

SK52 (第 161 図)

III a 区北部で検出。既述したように SK51 より先行する。埋土は 2 層（1・2 層）に細

分され、概ね水平堆積する。上下層ともブロック土の混入が認められ、人為的に埋め戻された可能性が窺える。

また土坑機能時の堆積層は認められず、土坑開削後比較的短期間の内に埋め戻されたと考えられる。

遺物は、土師質土器等の小片が、上層を中心コンテナ約 1/4 箱出土した。各層より出土した遺物に顕著な時期差は認められず、埋め戻しが短期間になされたことを示している。610 は、胎土より吉備系土師質土器碗と考えられ、山本Ⅲ—2 期に所属する。612 は、亀山焼、613 は、鉄滓である。時期決定の根拠となる遺物に乏しいが、概ね 13 世紀後半を中心とした時期に位置付けられる。

SK53 (第 162 図)

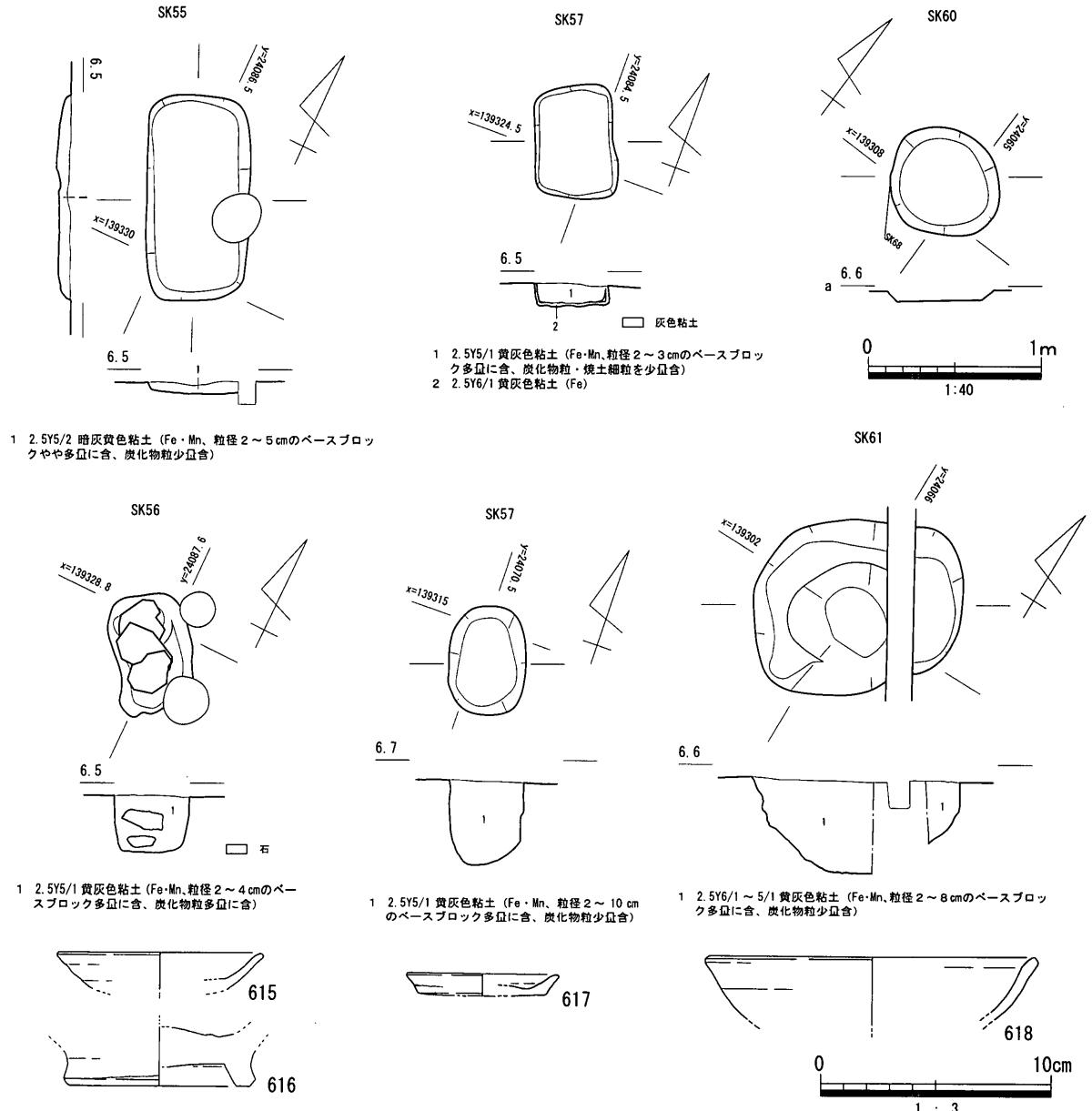
III b 区中央部で検出。埋土は単層（1 層）で、ベース層と近似しており、ベース層の流入堆積土と考えられる。遺物は、図示した以外には、器種不詳の土師質土器片と焼土塊が極少量出土したのみである。時期決定の根拠となる遺物に乏しいが、概ね 13 世紀中頃を中心とした時期に位置付けられる。

SK54 (第 163 図)

III a 区南部で検出。埋土は 3 層に細分された。上層（1 層）は土坑廃棄後の堆積層で、ブロック土が含まれることから、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。中層（2 層）は、層厚 2~6 cm 程度の灰色粘土層で、2 層上面から土坑掘り方周壁に沿って断面コ字状に堆積しており、箱形の木製容器が腐食し、土壤に置き換わった可能性が考えられる。下層（3 層）は、土坑底面を中心に堆積し、木製容器据え付けに伴う、裏込め土であろう。

遺物は、上層より土師質土器碗等の小片が 2 点出土したのみであり、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難である。

SK55 (第 163 図)



第 163 図 SK55 ~ 58・60・61 平・断面図、出土遺物実測図

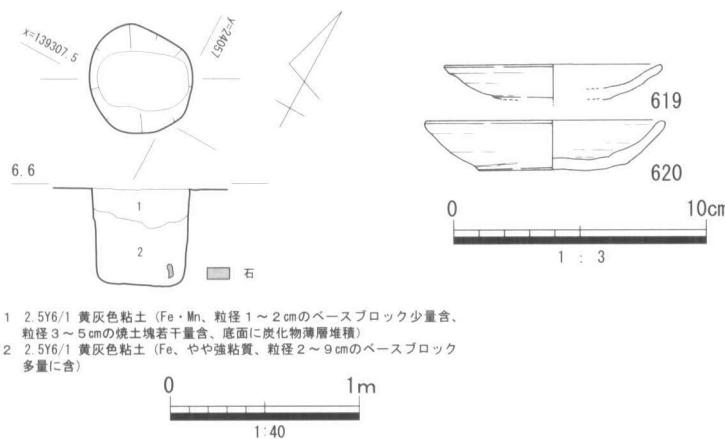
III a 区北西部で検出。埋土は単層（1 層）で、ブロック土が多量に混在し、人為的な埋め戻し土と考えられる。平・断面形は安定した形状を呈し、調査当初は土坑墓等の可能性が考えられた。しかし人骨をはじめ副葬品類や釘等は出土せず、棺痕跡も認められなかったこと、上面より近接した時期のある柱穴跡が掘り込まれていること等から、墓以外の貯蔵穴等の可能性を想定したい。

遺物は、土師質土器等の小片が少量出土したのみであり、時期決定の根拠となる遺物に乏しいが、概ね 18 世紀後半～19 世紀初期に位置付けられる。

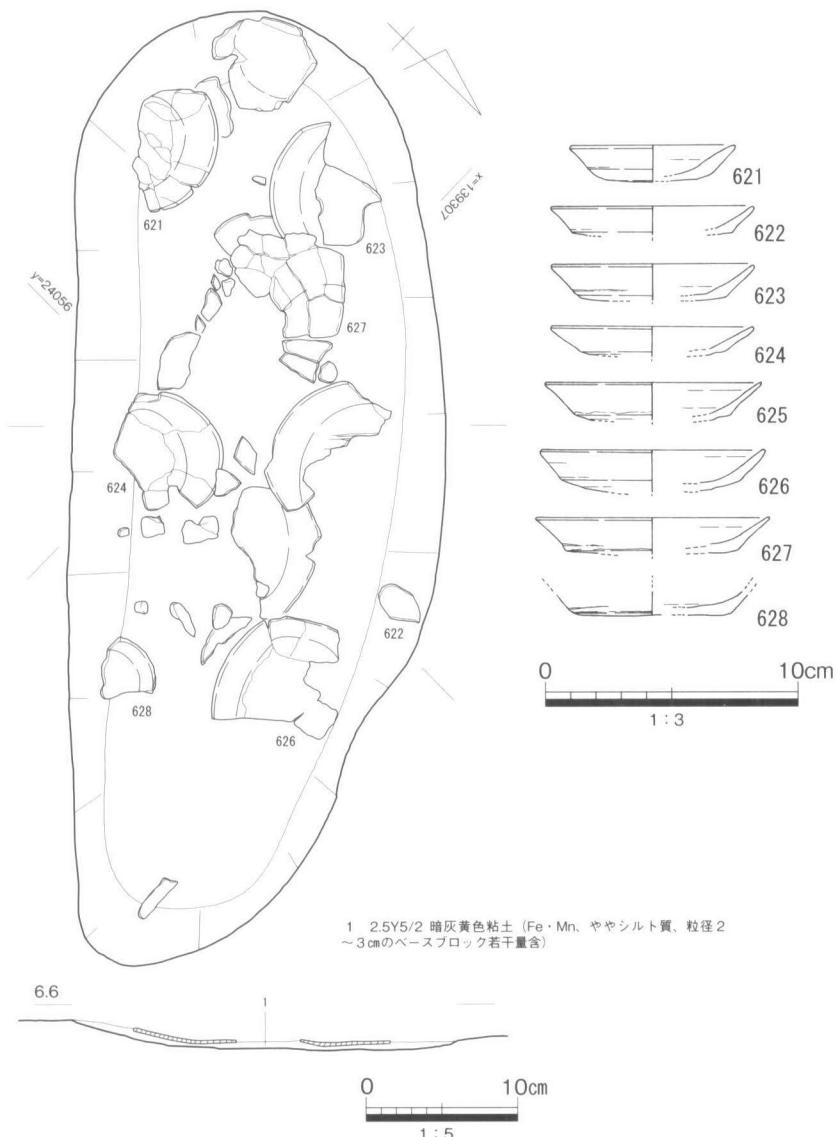
SK56（第 163 図）

III a 区北西部で検出。SB55 と重複し、切り合い関係より先行する。埋土は単層（1 層）で、ブロック土が多量に混在し、人為的に埋め戻された可能性が窺える。また埋土中には、長軸約 30cm の花崗岩角礫 2 個が投棄されていた。

遺物は、土師質土器等の小片が 10 点程度と、角礫凝灰岩の小片が出土したのみである。616 は、中国白磁瓶である。時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難だが、埋土の特徴等も考慮



第 164 図 SK62 平・断面図、出土遺物実測図



第 165 図 SK63 平・断面図、出土遺物実測図

して、13世紀代の埋没の可能性を想定する。

SK57 (第 163 図)

Ⅲ a 区西部で検出。埋土は2層に細分された。上層(1層)は、ブロック土が多量に混在し、人為的に埋め戻された可能性が窺える。下層(2層)は、2cm前後の層厚で土坑底面から周壁際を、断面コ字状に堆積していることから、箱形の木製容器が腐食し、土壤に置き換わった可能性が考えられる。

遺物は、上層より土師質土器等の小片が10点程度出土したのみであり、時期決定の根拠となる遺物に乏しいが、埋土の特徴等も考慮して、13世紀代の埋没を想定する。

SK58 (第 163 図)

Ⅲ b 区東部で検出。埋土は単層(1層)で、ブロック土が多量に混在し、人為的に埋め戻された可能性が窺える。

遺物は、土師質土器等の小片が少量出土したのみで、時期決定の根拠となる遺物に乏しいが、概ね13世紀後半を中心とした時期に位置付けられる。

SK60 (第 163 図)

Ⅲ b 区中央部で検出。埋土は単層(1層)で、ベース層と近似しており、ベース層の流入堆積土とみられる。

遺物は出土しておらず、詳細な時期を特定することは困難である。

SK61 (第 163 図)

Ⅲ b 区南部で検出。上面を攪乱溝により切られる。埋土は単層(1層)で、ブロック土が多量に混在し、人為的に埋め戻さ

れた可能性が窺える。

遺物は、土師質土器等の小片が少量出土したのみである。618は、胎土から吉備系土師質土器碗と考えられ、山本III—1 b期に所属する可能性が高い。時期決定の根拠となる遺物に乏しいが、概ね13世紀前半に位置付けられる。

SK62(第164図)

III b区中央部で検出。埋土は2層に細分された。下層(2層)は、ブロック土が多量に混在し、人為的に埋め戻された土壤で、上層(1層)は、下層埋め戻し後の窪地に自然堆積した土壤と考えられる。上層下面には薄い炭化物層が堆積するが、下層上面に被熱痕は認められず、混入したものと考えられる。

遺物は、上層を中心に土師質土器等の小片が少量出土したのみで、時期決定の根拠となる遺物に乏しいが、概ね14世紀前半を中心とした時期に位置付けられる。

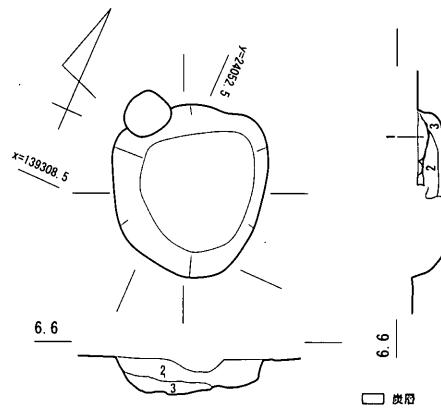
SK63(第165図)

III b区中央部で検出。埋土は単層(1層)で、後述する遺物の出土状況から、土師質土器皿埋置時の置土と考えられる。

遺物は、掘り方底面に接するように、9点以上の土師質土器小皿が出土した。ほぼすべての皿は、口縁部を上に置かれている。完形状態の皿は確認できず、残存深が浅く、上面が強く削平されているため、本来の状態が保存されているかどうかは判断できない。折重なるように出土した破片が接合した627のような例もあり、完形状態の皿のみを据え置いたのではないと判断される。さらに数点の皿が置かれていた可能性は想定されるが、上面の削平のため確認することはできなかった。皿はいずれも脆弱化しており、8点のみ図化した。621を除いて、概ね口径8.0cmを中心とした規格のものにまとまる。復元による誤差が大きく、621のみ規格の異なる製品が埋置されたとは必ずしも断定できない。出土遺物より、13世紀後半代に位置付けられる。

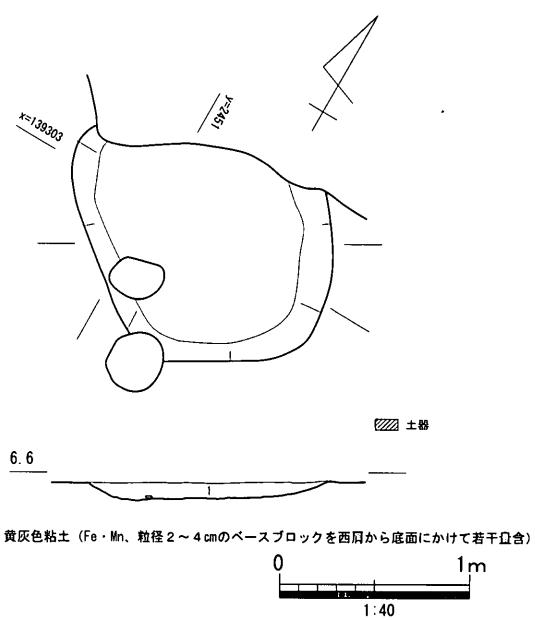
SK64(第166図)

III b区北部で検出。埋土は3層に細分された。下層(2・3層)は、

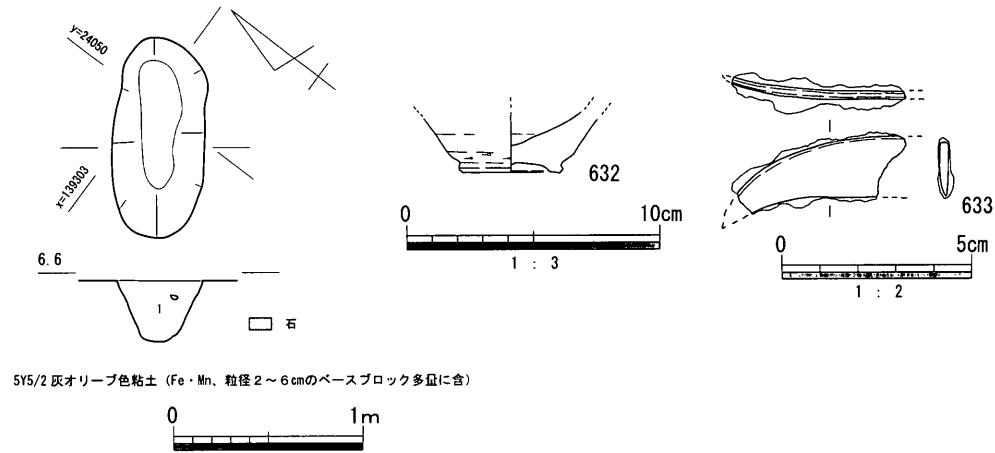


1. 2.5Y7/2 黄灰色粘土 (Fe·Mn、粒径 1~3 cm の炭化物・焼土粒やや多量に含、底面に厚さ 2~5 mm の炭化物薄層堆積)
2. 5Y5/2 暗灰黄色粘土 (Fe·Mn、粒径 2~4 cm のベースブロック多量に含、炭化物粒少且含)
3. 5Y5/1~6/1 黄灰色粘土 (Fe·Mn、粒径 1~3 cm 前後のベースブロック多量に含、炭化物・焼土細粒少且含)

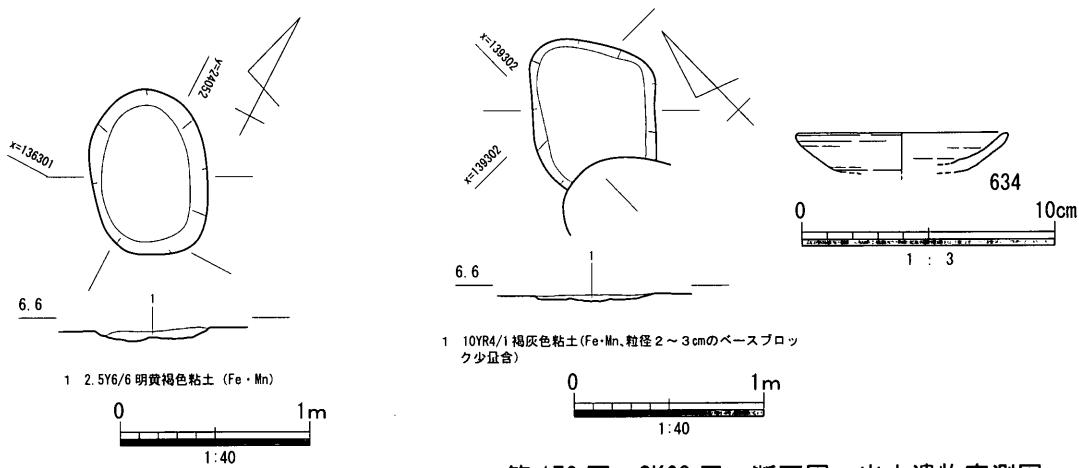
第166図 SK64 平・断面図



第167図 SK65 平・断面図、出土遺物実測図



第168図 SK66 平・断面図、出土遺物実測図



第169図 SK67 平・断面図

第170図 SK68 平・断面図、出土遺物実測図

いずれもブロック土が多量に混在し、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。上層（1層）は、土坑北半部の後述する炭化物層上面に堆積した土壤である。炭化物や焼土塊が多量に含まれ、底面には土坑北半部の東西0.27m、南北0.41mの楕円形の範囲に、薄い炭化物層の堆積が認められた。炭化物層下面是弱く被熱しており、いくらかの埋め戻しがなされた後、何らかの目的で燃焼行為がなされたと考えられる。埋土の堆積状況は以上のとおりであるが、具体的な遺構の性格については明らかにできなかった。

遺物は、主に下層より出土しており、土師質土器の小片等が10点程度出土している。顕著な被熱痕を留める瓦も出土しており、瓦を使用した燃焼施設の基底部土坑と考えられるが、具体的な用途については不詳である。出土遺物より、18世紀後半を上限とする時期を想定しておく。

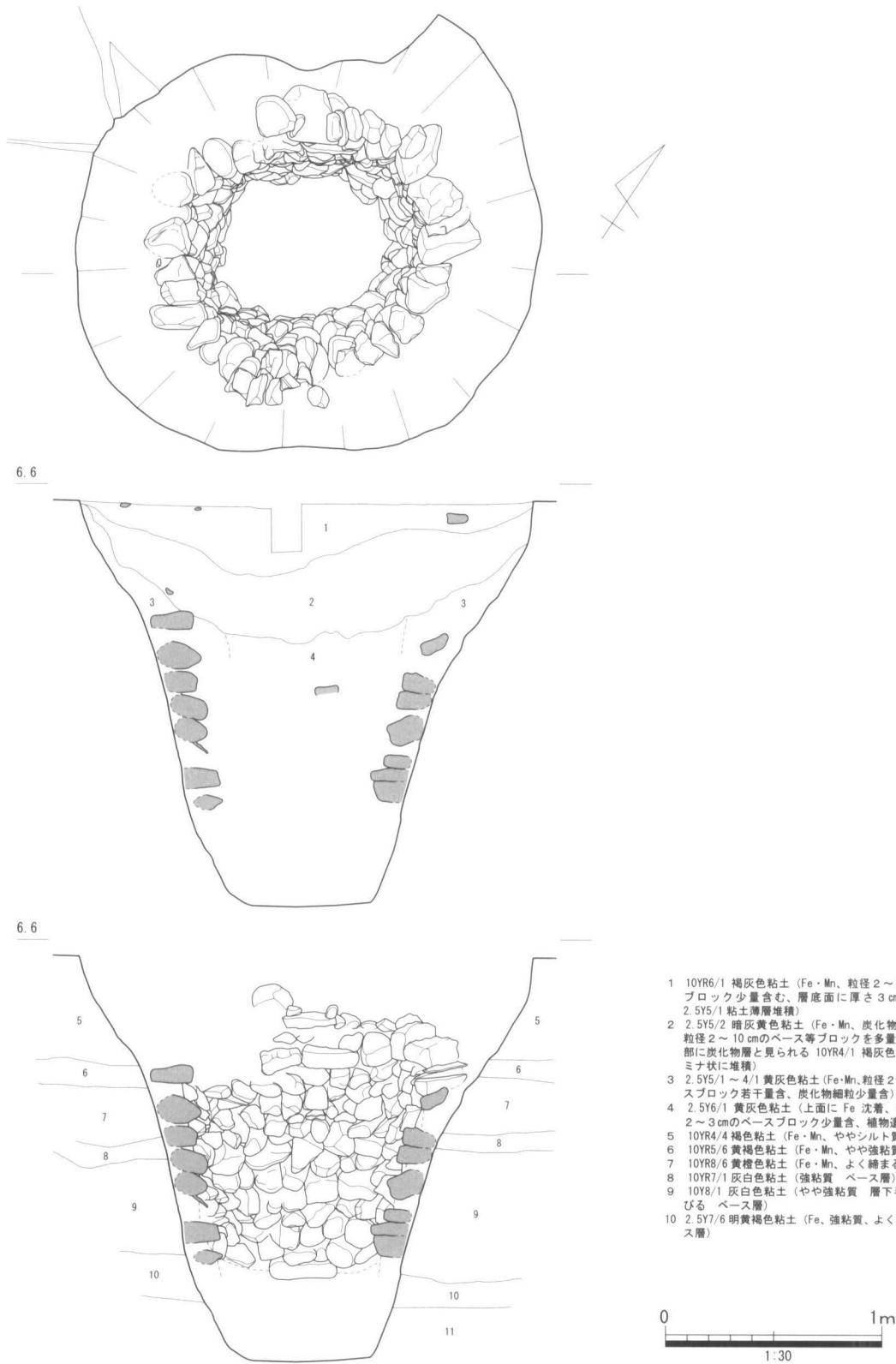
SK65（第167図）

III b区西部で検出。攪乱坑により北端部を切られるが、概ねその形状は判断できる。埋土は単層（1層）で、土坑廃棄後の自然堆積層と考えられる。

遺物は、土師質土器等の小片が少量出土した。629は、胎土から吉備系土師質土器碗の可能性があり、山本III-3期に所属すると考えられる。630は、中国龍泉窯系青磁小碗で、大宰府分類I類に所属する。出土遺物より、13世紀後半を中心とした時期に位置付けられる。

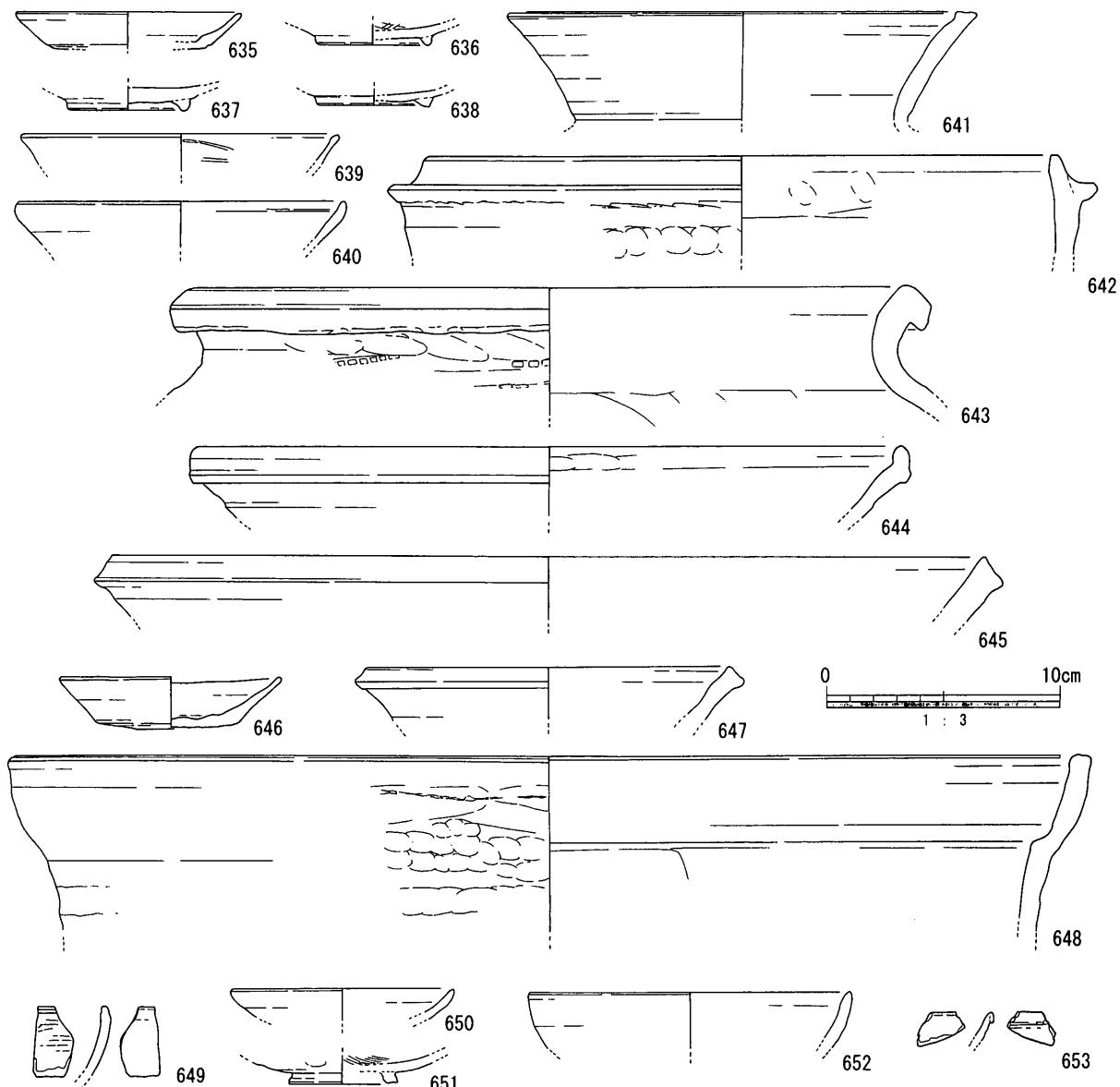
SK66（第168図）

III b区西部で検出。埋土は単層（1層）で、ブロック土が多量に混在し、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。



第 171 図 SE02 平・断・立面図

遺物は、土師質土器類等が数点出土したのみである。632 は、肥前系陶器皿で、大橋 I 期に所属する。633 は鉄鎌である。出土遺物より 17 世紀前半以降の埋没の可能性が想定されるが、時期決定の根拠となる遺物に



第172図 SE02出土遺物実測図

乏しく、詳細な年代を特定することは困難である。

SK67（第169図）

Ⅲ b区西部で検出。SK68と重複し、切り合い関係よりSK68より後出する。埋土は単層（1層）で、遺構廃絶後の自然堆積層とみられる。上位に堆積した旧耕土層と近似し、近接した時期の埋没の可能性が想定できる。

遺物は、土師質土器等の小片が数点出土したのみである。時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な年代を特定することは困難だが、上述した埋土の特徴等から、18世紀後半以降の埋没が想定される。

SK68（第170図）

Ⅲ b区西部で検出。上述したSK67より先行する。埋土は単層（1層）で、ブロック土が含まれ、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は、図示した以外に器種不詳の土師質土器小片が1点出土したのみであり、時期決定の根拠となる遺物に乏しいが、概ね13世紀後半を中心とした時期に位置付けられる。

井戸跡

SE02 (第 171・172 図)

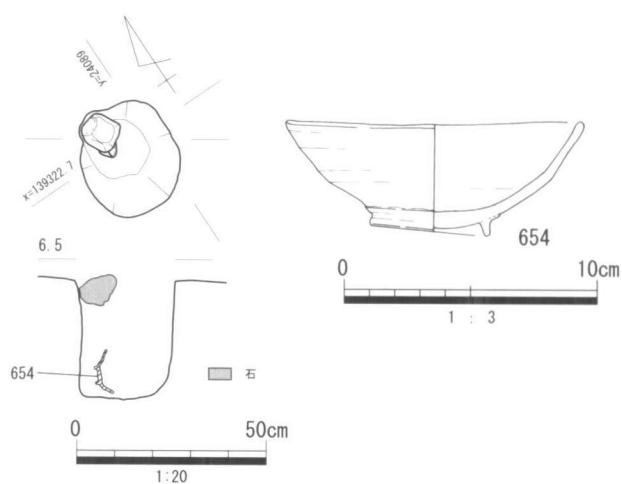
III b 区南東部で検出。後述する SX09 と埋土が近似していたため切り合い関係を見誤り、SX09 と重複する一部について平面プランが捉えられなかった。しかし、残存部より概ね平面形状を復元することは可能である。掘り方底面の標高は 4.36 m で、ベース層の黄色系粘土～シルト層内に留まり、標高 3.6 m 以下に堆積する透水層の砂礫層にまでは達していない。したがって顯著な湧水は見込めず、井戸としての機能はやや疑問である。

検出面下 0.25 m の位置で、平面がほぼ円形に積まれた石組を検出した。石組の残存深は 1.6 m 前後あり、平・断面の観察の後、重機で断ち割り、立面の観察を行ったが、下位 0.3 m 程度は危険なため詳細な観察は行えていない。石組の内径は、上端部で 0.95 ~ 1.0 m、確認できた下端部で 0.7 m 前後であり、上に向かって緩やかに開く。検出された石組上端は高低差があり、後述する上層より石組に使用された石材の種類や大きさと、同じ内容の石礫が出土したことから、石組上部を崩しながら埋め戻したことが想像される。

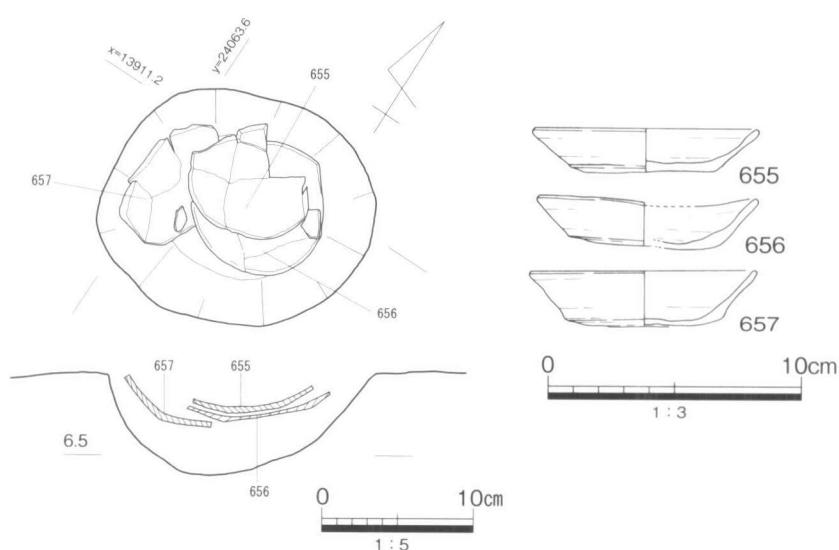
石材は、人頭大程度の砂岩の亜角～亜円礫を主体に、同程度の花崗岩や一部安山岩が使用されている。いずれも東約 2 km にある金倉川河床等で容易に入手可能な石材である。これら石材を、確認できた範囲で、小口積みを主体に、上面よりみて時計回りの方向に、螺旋状に 11 段以上積み上げられていた。裏込めは乏しく、ほぼ掘り方壁面に接するように石材を積み上げ、隙間には粘土が詰められていた。

埋土は 4 層以上に細分され、上～下の 3 層に大別する。上層（1・2 層）は、井戸廃棄後の堆積層である。2 層はブロック土が多量に混在し、人為的に埋め戻された土壤と考えられる。1 層は埋め戻し後の窪地に自然堆積した土壤と考えられる。底面付近に粘土層のラミナ堆積がみられ、2 層埋め戻し後一定期間開口した状態で放置された可能性が考えられる。中層（3 層）は、石組内部に堆積した土壤で、井戸廃絶後、滯水下に堆積した可能性が考えられる。下層（4 層）は、石組の裏込め土である。

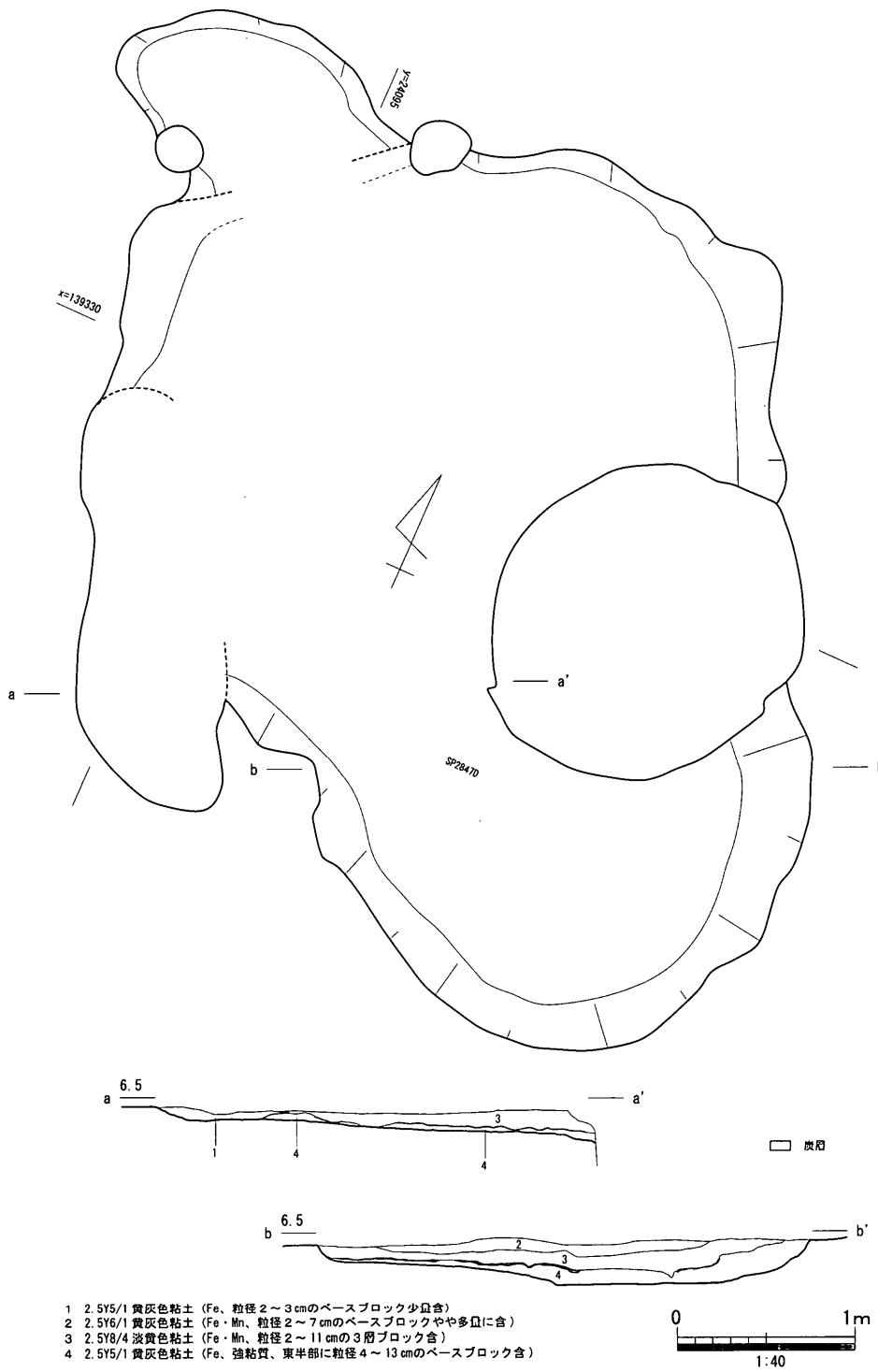
遺物は、上層を中心に土師質土器等がコンテナ約 1/2 箱出土している。大半の遺物は小片化していたが、中層上位より土師質土器小皿（646）1 点のみほぼ完形な状態で出土（図版 46）した。井戸埋め戻しに際しての何らかの祭祀に使用された可能性も考えられたが、投棄された石組石材の間隙から出土しており、断定はできなかった。後述するように、上層出土の遺物の大半は、井戸廃棄後の埋め戻し土中に含まれていた他の遺構



第 173 図 SP2447 平・断面図、出土遺物実測図



第 174 図 SP3405 平・断面図、出土遺物実測図



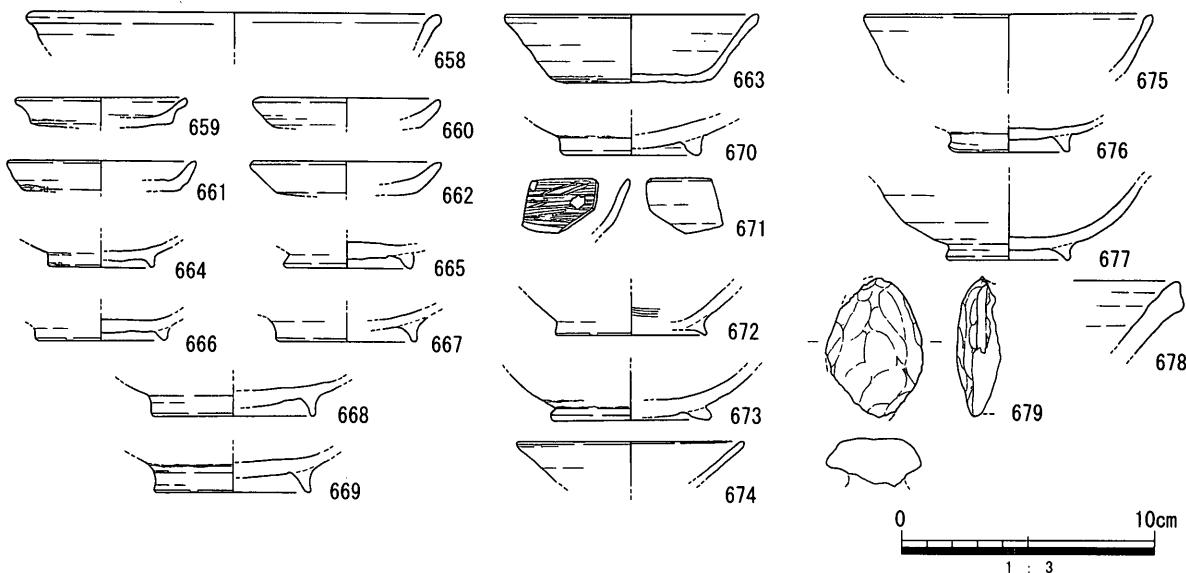
第 175 図 SX07 平・断面図

中国製白磁碗で、大宰府分類ⅡまたはⅢ類に所属する。既述したように、遺物のみからの時期決定には困難が伴うが、井戸枠に石組を伴うことから、下層出土の遺物を井戸構築の上限として、概ね 15 世紀代を上限とした時期に位置付けられる。

なお、本遺構中層の土壤について花粉分析を実施した。分析結果の詳細は後掲するが、ソバ属が検出され、周辺でのソバ栽培の可能性が想定される。

土器埋納遺構

に帰属する遺物である。本井戸に本来的に帰属すると考えられる遺物は乏しく、詳細な時期を断定することは困難であった。635~645 が上層、646・647 が中層、648~653 が下層より出土した遺物である。636・638・639 は、和泉型瓦器碗で、636 は尾上Ⅱ-3 期、638・639 はⅢ-2~3 期に所属する。641 は、古代の須恵器壺である。644 は、東播系須恵器捏鉢で、森田第Ⅸ期第 1~2 段階に所属する。645 は、備前焼擂鉢で、乘岡中世 3 a 期に所属する。647 は、東播系須恵器甕で、やや瓦質焼成されている。森田第Ⅶ期に所属する製品とみられる。649 は、古代の畿内産土師器杯である。651 は、十瓶山周辺須恵質土器碗である。652 は、古瀬戸天目碗で、藤澤後期Ⅲ期に所属する。653 は、



第 176 図 SX07 出土遺物実測図

SP2447 (第 173 図)

III a 区西半部で検出。検出面付近の北隅の掘り方際で、拳大程度の詰め石が出土し、その直下の柱穴跡底面に接するように、完形の土師質土器碗が口縁部を中央に向け、立位の状態で出土（図版 33）した。おそらく柱穴跡南半部に柱を据え、柱にもたせかけるように土器を置き、柱下部を埋めて詰め石で柱を固定したものと考えられる。地鎮に伴う遺物と考えられるが、建物遺構との関係は不詳である。

遺物は、図示した以外には、土師質土器小皿や器種不詳の瓦器の小片が各 1 点出土したのみである。654 は、吉備系土師質土器碗で、山本 III—2 期に所属する。出土遺物より、13 世紀中頃を中心とした時期に位置付けられる。

SP3405 (第 174 図)

III b 区東部で検出。底面より 3 cm 程度上位で、3 点の土師質土器小皿が、口縁部を上に重ねられて出土（図版 44）した。上位 2 点（655・656）は正置の状態で重ねられ、最下位の 1 点（657）はやや西にずらせて斜位に据え置かれている。最上位と最下位の皿は一部欠損しているが、これは後世の削平による影響で、本来は完形であったと考えられる。本遺構と組み合う建物遺構は復元できなかったが、SB64 梁間北列のライン上に位置し、SB64 との関係が想定される。さらに数点の皿が置かれていた可能性は想定されるが、上面の削平のため確認することはできなかった。

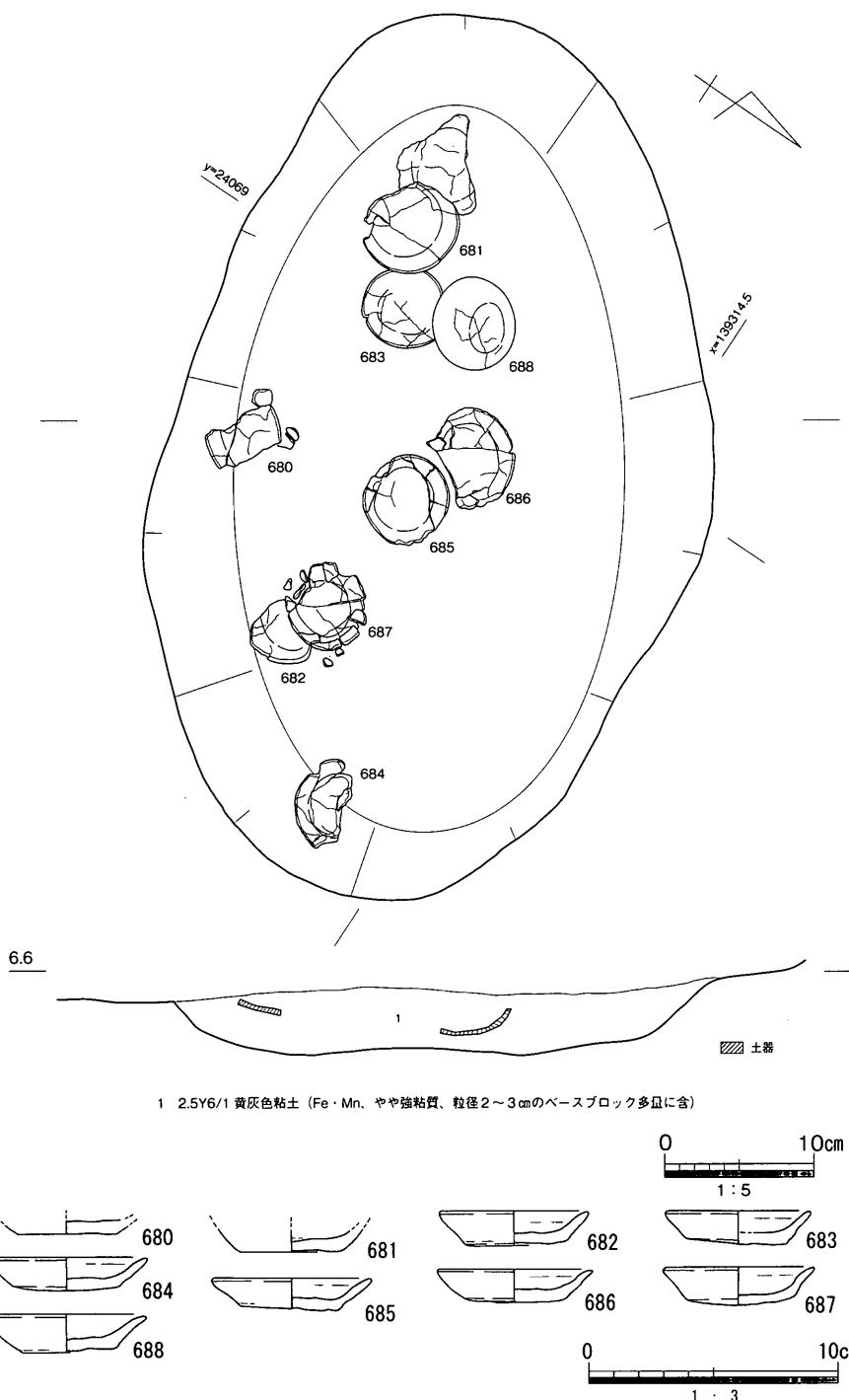
遺物は、図示した土師質土器皿 3 点である。出土遺物より、14 世紀代を中心とした時期に位置付けられる。

性格不明遺構

SX07 (第 175・176 図)

III a 区東部で検出。不整な平面プランより複数遺構の重複の可能性が考えられたが、遺構検出段階では明瞭には捉えられなかった。土層断面の観察によってかろうじて確認され、挿図に破線で示した。埋土は 3 層に細分された。上層（1・2 層）は、ブロック土が多量に混在し、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。上層下面には厚さ約 5 mm の薄い炭化物の堆積が認められた。後述する下層上面に被熱痕が認められなかったことから、投棄されたと判断され、I・II 区で検出された SK10・11、SX03 等と同様に、火災等の片付けの可能性も考えられる。下層（3 層）は、土坑機能時の自然堆積層とみられ、土坑掘削後一定期間開口した状態であった可能性を示唆する。

遺物は上層を中心に土師質土器等の小片が、土器類のみでコンテナ約 1/2 箱出土した。658～673 は上層、



第 177 図 SX08 平・断面図、出土遺物実測図

び図化不能の西端の 1 点) 以外はほぼ完形状態で出土し、688 のみ底部を上にして据え置かれていた。破片化して出土した 3 点は、上面の削平の影響と考えられ、本来は完形の皿が置かれていたことが想像される。東端と南端の計 2 点を除いて、いずれも 2 点 1 組 (682 と 687、685 と 686、683 と 688、681 と 西端の 1 点) にして配置しているように見えるが、さらに数点の皿が置かれていた可能性もあり、断定はできない。脆弱化の顕著な西端の 1 点を除いて、9 点 (680 ~ 688) を図示した。すべて口径約 6.0cm の規格的な小皿であり、成形技法や胎土も酷似していることから、工房や製作者を共通にすることが想定できる。出土遺物より、14 世紀後半～15 世紀前半頃に位置付けられる。

674 ~ 679 は下層出土の遺物である。658 は、古代に遡る畿内産土師器皿である。664 ~ 667・669・674 ~ 677 は、胎土の点から吉備系土師質土器碗とみられ、山本Ⅲ-1 b ~ 2 期に所属することが考えられる。671・672 は、和泉型瓦器碗で、671 は尾上Ⅱ-3 ~ Ⅲ-1 期、672 は同Ⅲ-1 ~ 2 期に所属する。673 は、十瓶山周辺産須恵質土器碗である。678 は、東播系須恵器捏鉢で、森田第Ⅷ期第 2 段階に所属する。679 は、真鍋有溝土錘 C b 類である。図示した遺物以外に、少量出土した肥前系陶磁器等から、18 世紀後半を上限とした時期に位置付けられる。

SX08 (第 177 圖)

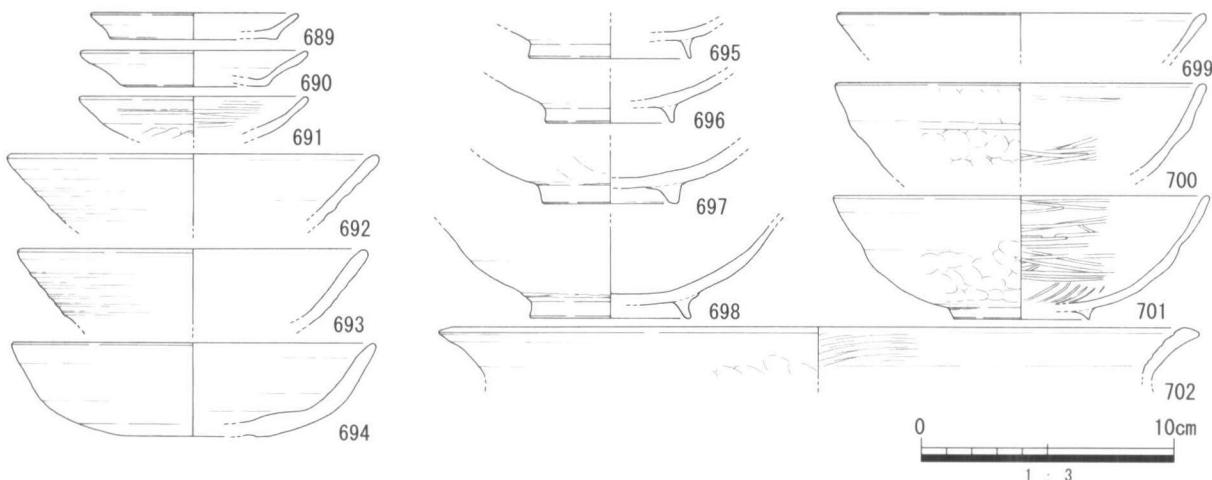
III b 区東部で検出。埋土は単層 (1 層) で、後述する遺物の出土状況からも、土師質土器小皿埋置に際しての置土と考えられる。

遺構底面より数 cm 程度上位で、土師質土器小皿 10 点が出土 (図版 45) した。検出面近くで出土した 3 点 (680・684 及

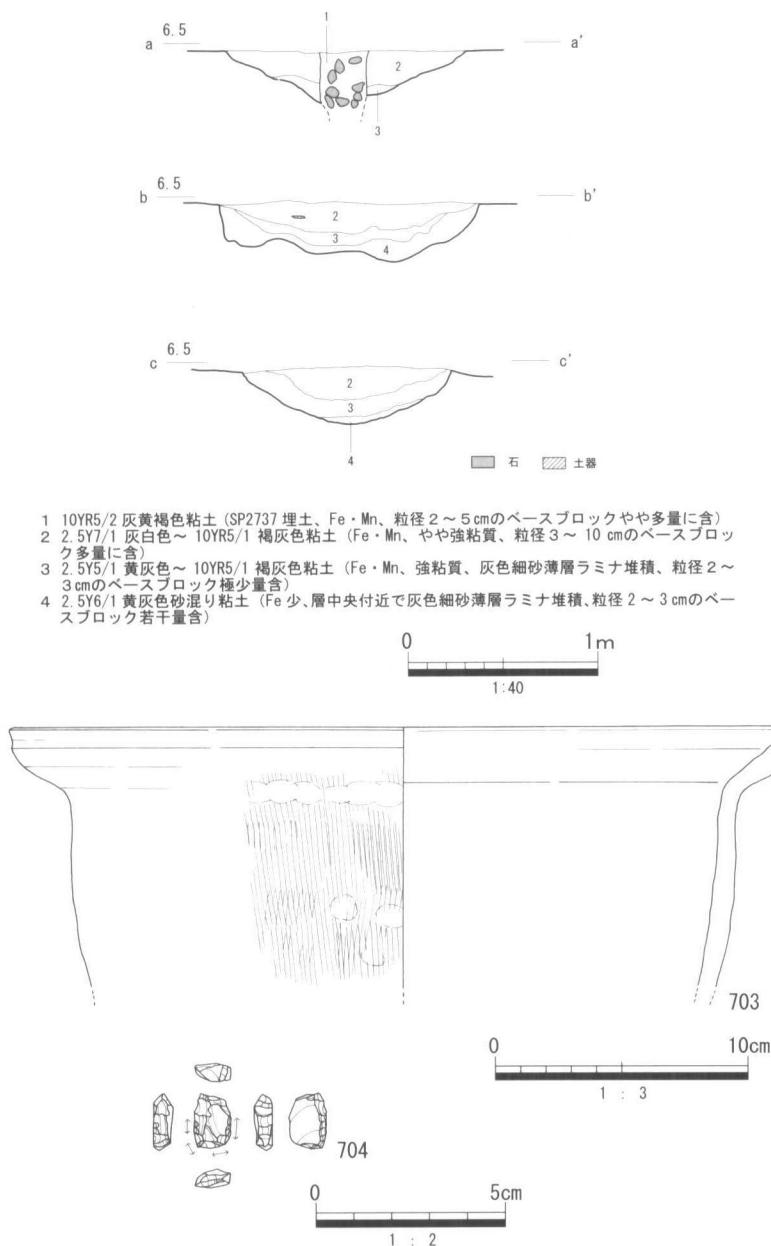
SX09 (第 178 図)

Ⅲ b 区南東部で検出。既述したように、SE02 と重複する部分についての平面プランが一部捉えられていない。切り合い関係より、SE02 より先行する。埋土は 4 層に細分され、上～下の 3 層に大別する。上層（1・2 層）は、ブロック土が多量に混在し、人為的に埋め戻された土壤と考える。後述する中層上面より検出面上端まで 0.55 m の厚さで埋め戻されている。中層（3 層）は弱くグライ化した粘土層で、滯水下で堆積したことが考えられる。後述する下層上面を含め、土坑底面に薄く堆積し、下層堆積後一定期間開口した状態であった可能性を示唆する。下層（4 層）は、掘り方底面に穿たれた径約 0.36 m、深さ約 0.60 m の小ピットを埋める土壤である。ブロック土が多量に混在する。ほぼ掘り方底面の中央部に位置し、遺構周辺の柱穴よりはるかに深く穿たれていることから、本遺構に伴うものと考えた。またピット上面からは、長軸 15 cm 程度の一部に被熱痕を認める安山岩板石が出土した。上述した遺構の形状は、出水遺構のそれに近似する。しかし、底面に穿たれたピットは湧水層に達しておらず、積極的に出水とする根拠を欠く。本遺構の性格について明らかにしうる資料は得られていない。

遺物は、主に上層よりコンテナ約 1/2 箱出土している。土器類はいずれも小片化しており、土坑埋め戻しに際し、投棄されたものと考えられる。689～697・700～702 は上層、699 は中層、698 は下層のそれぞれ出土遺物である。691 は、和泉型瓦器皿で、700・701 は、同碗である。いずれも尾上 III—2 期に所属することが考えられる。695・698 は、胎土の点から吉備系土師質土器碗とみられ、山本 III—1 b～2 期に所属する。図示以外にも、瓦器碗がいくらか出土しているのが注目される。上層と中層から出土した遺物に顕著な時期差は認められず、中層堆積後は比較的短期間に埋め戻されたと考えられる。出土遺物より、



第 178 図 SX09 平・断面図、出土遺物実測図



第179図 SD14 土層断面図、出土遺物実測図

製火打石等が、中・下層より土師質土器、平瓦、丸瓦、サヌカイト剥片等がそれぞれ出土している。各層より出土した遺物に顕著な時期差は認められず、溝廃絶後比較的の短期間に埋没したことが想像される。出土遺物より、18世紀後半を上限とした時期に位置付けられる。

SD15 (第180～182図)

III a区西部を南北流する直線溝である。検出範囲の南半部の調査によって、概ね必要とされる資料は得られたので完掘はしていない。流路方向N 29.297°W、幅1.45～1.68m、残存深0.28m前後、断面形は概ね逆台形状を呈する。流路底面の標高は、南端部で6.21m前後、北端部で6.16m前後を測り、高低差より北へ流下するとみられる。埋土は2層に細分された。上層(1層)は、ブロック土が多量に混在し、人為的に埋め戻された土壤とみられ、遺物は少量出土したのみであった。下層(2層)は、底面に薄く堆積した溝機能時の堆積層とみられる。砂礫の混入は乏しく流水の痕跡は明瞭ではない。また瓦などの遺物が多量に出土し、廃絶時に瓦葺建物等の解体がなされた可能性が考えられる。

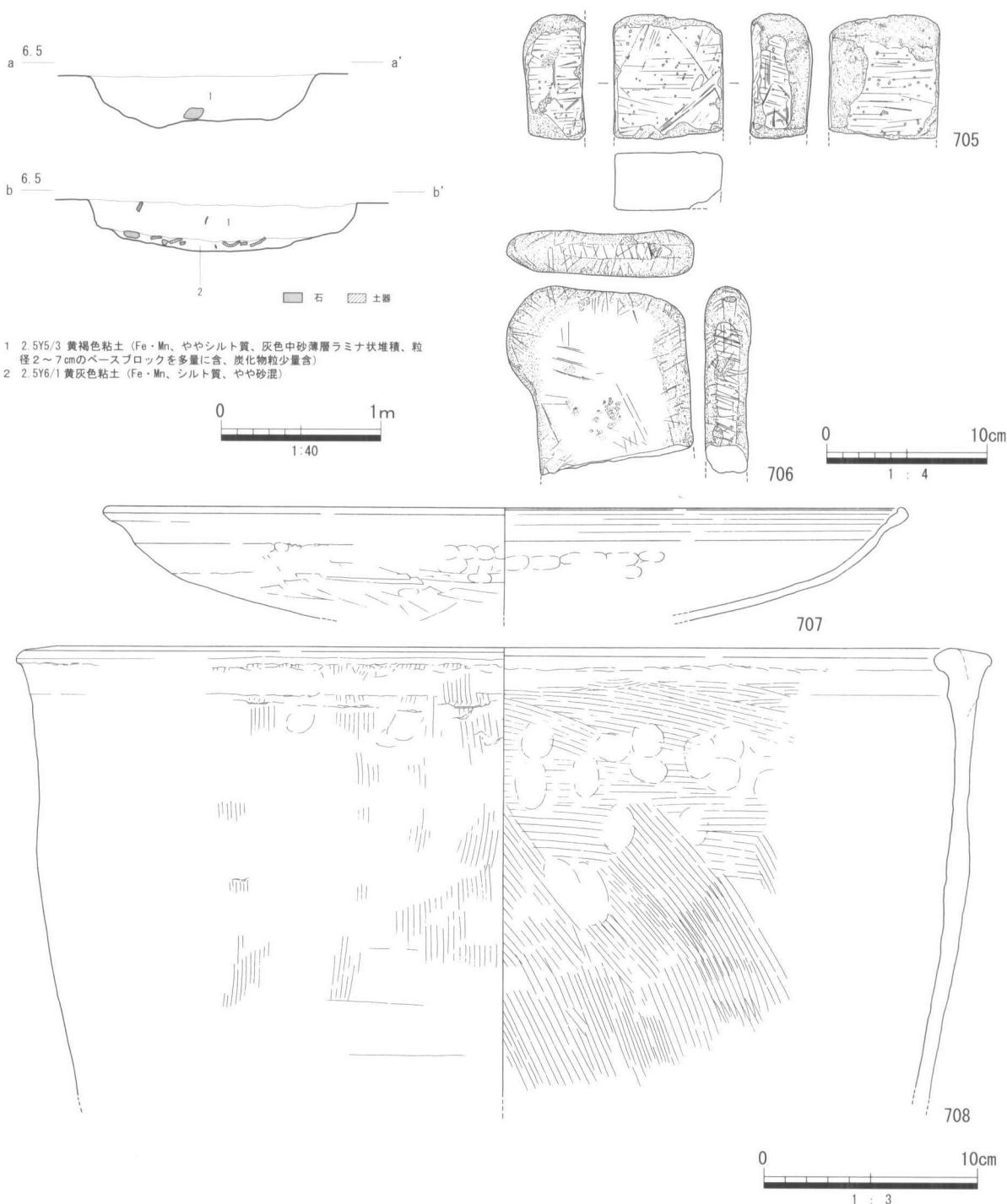
13世紀中頃を中心とした時期に位置付けられる。

溝状遺構

SD14 (第179図)

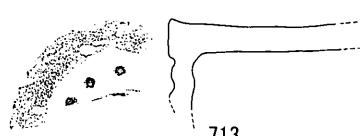
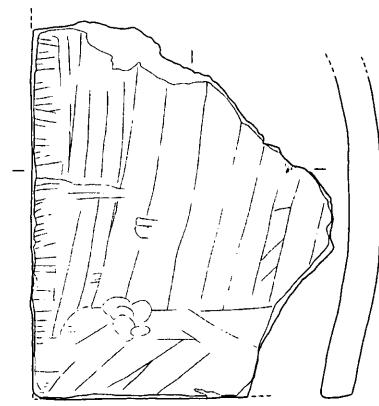
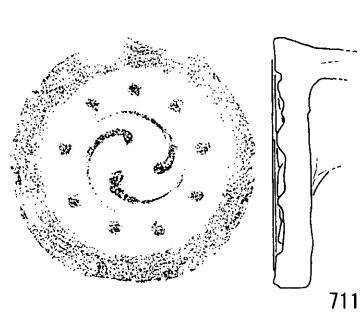
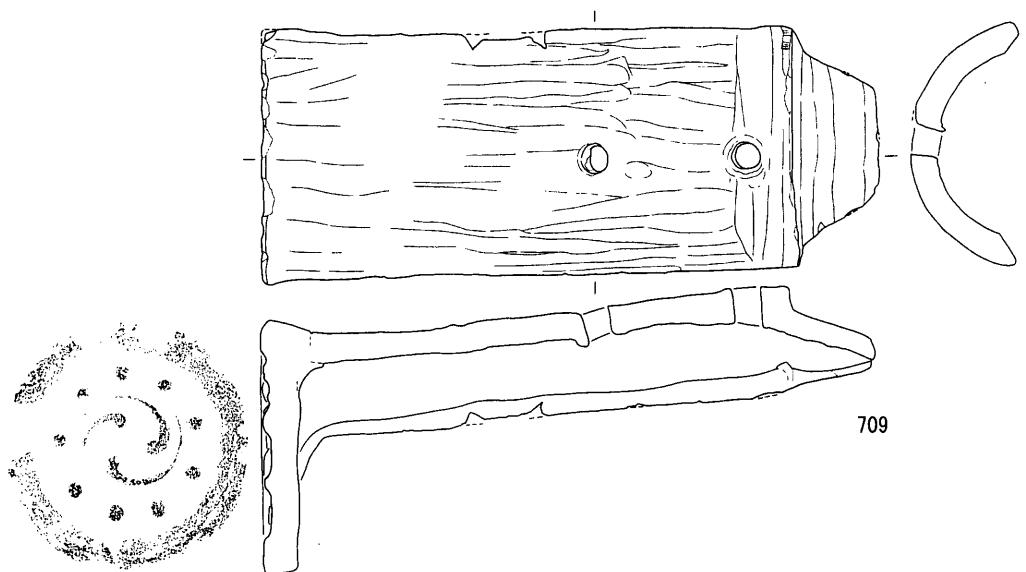
III a区東半部を南北流する溝状遺構で、SK50、SX07と重複し、切り合ひ関係よりそのいずれよりも先行する。検出延長14.45m、南北両端は調査区外へ延びる。幅1.08～1.36m、残存深0.24～0.29m、断面形は概ね逆台形状を呈する。流路方向は、調査区中央部付近で緩やかに屈曲し、南半部でN 37.993°W、北半部でN 19.063°Wとなる。流路底面の標高は、南端部で6.15m前後、北端部で6.10m前後を測り、わずかな高低差を考慮すれば、北へ流下するとみられる。埋土は2～3層に細分された。上層(1層)は、廃絶後の自然堆積層と考えられ、壁面の崩落に起因するとみられるベース層のブロック土が掘り方周縁を中心に認められる。中・下層(2・3層)はいずれも灰色系の粘土層で、灰色細砂の薄いラミナ層が介在し、機能時の堆積層と考えられる。

遺物は、上層を中心にコンテナ約1/4箱出土した。上層より土師質土器小皿・土鍋、瓦器、平瓦、丸瓦、焼土塊、サヌカイト剥片、チャート



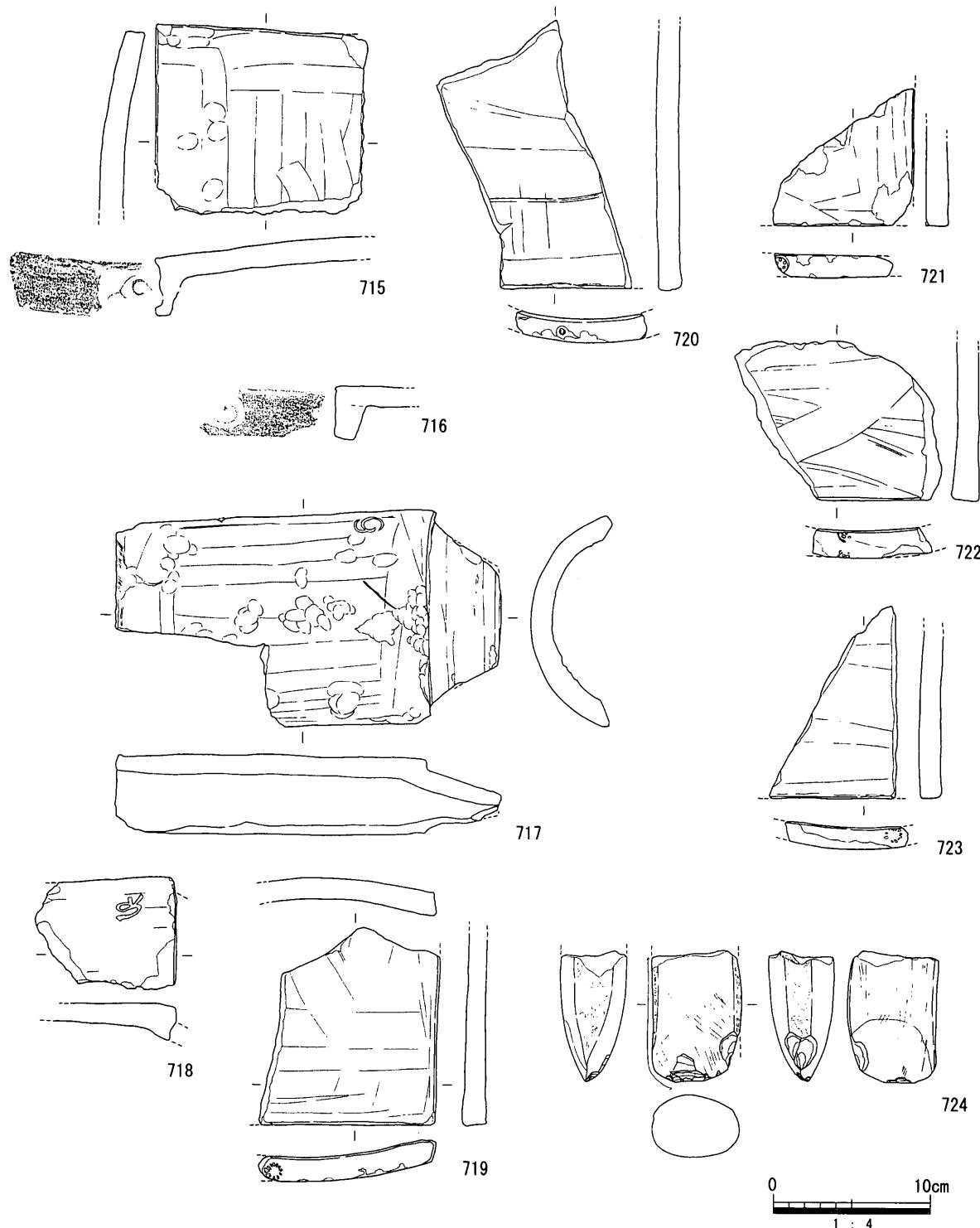
第180図 SD15 土層断面図、出土遺物実測図1

遺物は上述したように、下層からの出土が主体を占め、コンテナ約19箱出土した。うち瓦類が17箱と大半を占める。軒瓦類のほぼすべてと、平・丸瓦は全形の判断できるものや刻印があるものを中心に図示した。図示した以外に、角礫凝灰岩焼礫、結晶片岩板石等が出土している。705は、板状を呈する流紋岩製砥石で、長軸方向に直交する線条痕が、各面にやや顕著に認められる。おそらく混入品と考えられる。706は、不整な板状の砂岩を利用した砥石・台石で、下半は折損する。左図中央に敲打痕を認める。707は、岡本系の土師質土器焙烙である。軒丸瓦は4種(709と711は同范)が、軒平瓦は2種(714と715はおそらく同范)が認められる。刻印は4種(718と720、719と723、721と722はそれぞれ同一原体)が認められ、そのうち



0 10cm
1 : 4

第181図 SD15出土遺物実測図2

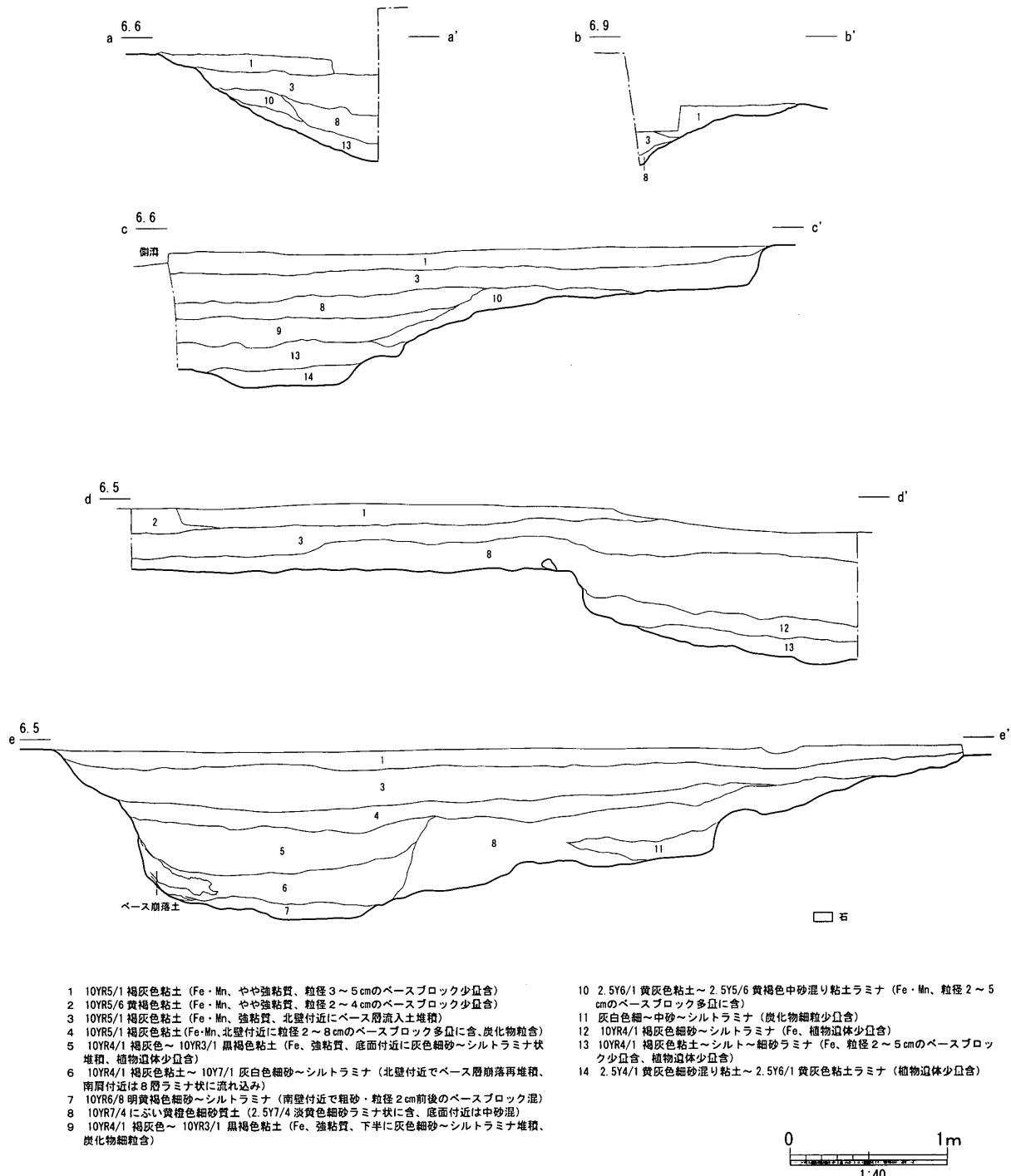


第182図 SD15出土遺物実測図3

718・720・721は、SK50の600・602・603と同一原体である。軒瓦に同范例は認められなかったが、本遺構とSK50出土瓦は、同一の建物に葺かれていた可能性が想定され、さらに瓦の量から瓦葺き建物が数棟建てられていた可能性も考えられる。724は、弥生時代の結晶片岩製大型蛤刃石斧である。出土遺物より、18世紀末～19世紀初頭を中心とした時期に位置付けられる。

SD16(第181図)

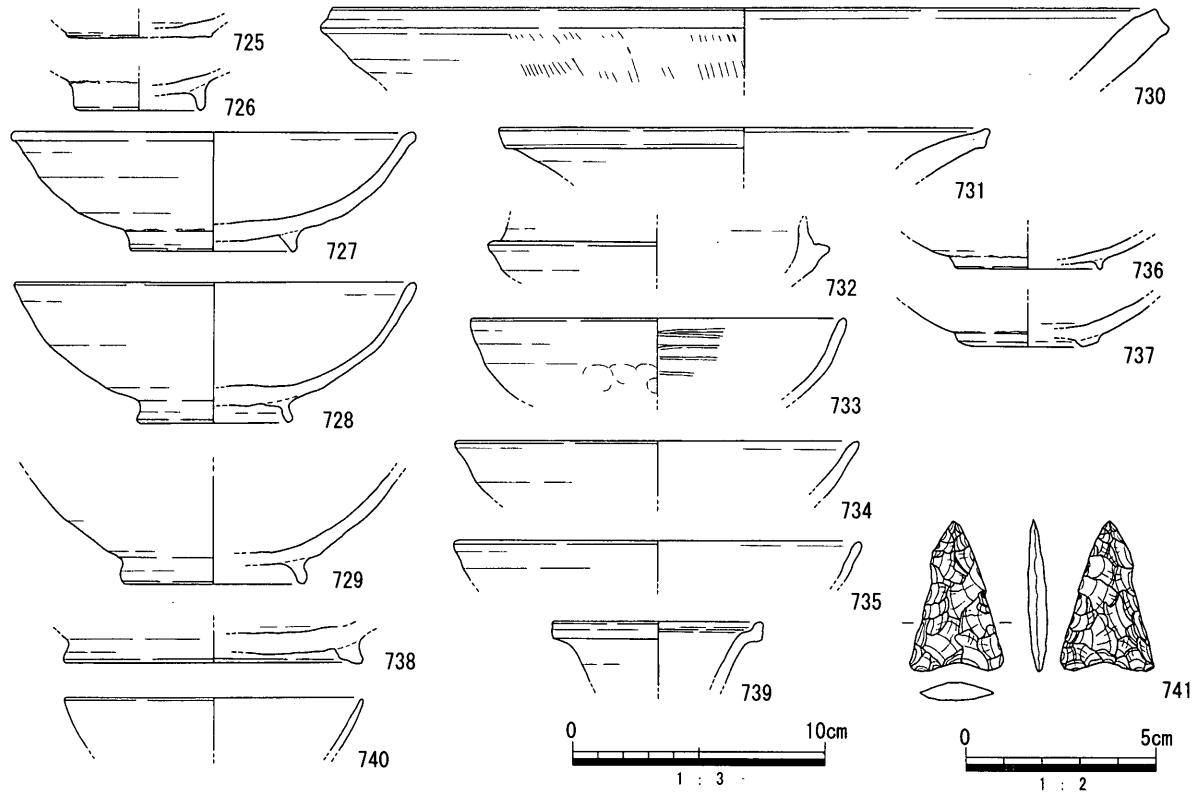
III b区中央南半部に平面逆L字状に配された小規模な溝状遺構である。東・南両端は調査区内で途切れ



第 183 図 SR01 土層断面図

る。東西溝延長 2.84 m、南北溝延長 2.76 m を検出した。各溝の流路方向は、東西溝 N 56.857° E、南北溝 N 33.548° W と概ね直交する。底面最深部の標高は 6.51 ~ 6.54 m で、わずかな高低差を考慮すれば南へ流下すると考えられる。溝幅は 0.20 ~ 0.28 m、残存深は 0.04 m 前後で、断面形は概ね皿状を呈する。埋土は単層（1 層）で、ブロック土を多量に含み、人為的な埋め戻し土と考えられる。検出位置や規模等から、建物遺構に伴う雨落ち溝の可能性が考えられるが、本溝と整合性をもって配された建物遺構は確認できなかった。

遺物は、須恵器、土師質土器小皿・碗・足釜等の小片が 10 点程度出土したのみであり、時期決定の根拠となる遺物に乏しいが、概ね 13 世紀後半を中心とした時期に位置付けられる。



第184図 SR01出土遺物実測図

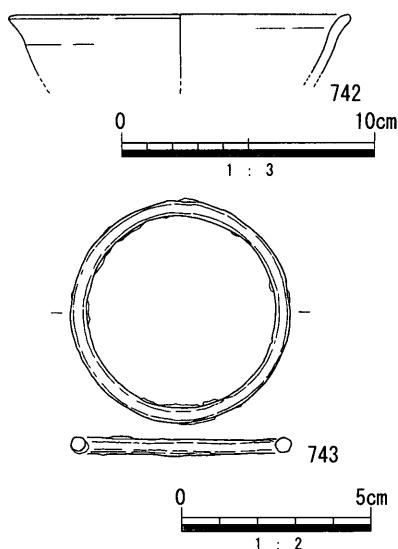
埋没旧河道

SR01(第183・184図)

III b 区より IV a 区にかけて概ね直線状に西流し、IV b 区で緩やかに北へ屈曲して検出された。東西両端は調査区外へ延長し、長さ約 63.2 m を確認した。調査の方法については、III b 区及び IV a 区において、土層の堆積状況と各層位の堆積時期を特定することを主眼としたトレンチ調査を実施することとし、完掘はしていない。流路幅 11.15 m 以上、残存深 1.0 ~ 1.05 m、断面形は概ね逆台形状を呈する。流路底面は標高 5.36 ~ 5.46 m で、完掘をしていないため断定はできないが、北西方向へ流下していたと考えられる。

埋土は、各土層セクションで 3 ~ 8 層に細分され、それを最上～最下層の 5 層に大別する。最上層（1 ~ 3 層）は、流路上面を覆う堆積層で、やや粘性が強く、またベース層のブロック土が少量混在することを特徴とする。おそらくは流路機能が途絶えた後、流路壁面の崩落を伴いながら徐々に堆積した自然堆積層と判断される。なお、これら最上層は、後述する IV a 区 SD19 上層と一連の堆積層である。上層（4 層）も最上層と同様な環境下で堆積した土壤である。中層（5 ~ 7 層）は、IV a 区西半部でのみ確認された土層で、後述する下層上面より人為的に掘り込まれた堆積状況を呈する。下位層の土壤は、流水下堆積の可能性を示し、下層堆積後に掘り込まれた溝状遺構の可能性が想定されるが、平面プランを含め、詳細については明らかではない。下層（8 ~ 11 層）は、下位層を中心に流水下での堆積が認められ、上位層は後述する SD19 中層と一連の堆積層である。流路機能時の堆積層であり、流水の一部は SD19 へ流下していたと想像される。最下層（12 ~ 14 層）も流水痕跡を顕著に留める、流路機能時の堆積層である。徐々に流水機能を低下させながら下層へと埋没していくと考えられ、下層とはそれほど大きな時間差は想定できないと思われる。

遺物は、最上層を中心に出土している。図示した以外にも、最上層からは、器種不詳の弥生土器や土師器、須恵器の他、土師質土器小皿・碗・足釜・土鍋、十瓶山周辺産須恵質土器碗、備前焼等の小片がコンテナ約 1 箱、中層からは、器種不詳の弥生土器とみられる土器片数点が、下層からは器種不詳の土師器と須恵器杯小片が少量、最下層からは土師器杯等の小片数点がそれぞれ出土しており、最上層の中世遺物が大半を占める。河道の埋没



第185図 III区包含層出土遺物実測図

が完了し、周辺を含め平地化されるのが当該時期に下る可能性が窺える。725～737は最上層、738・739は中層、740・741は下層よりそれぞれ出土した遺物である。726～729は、吉備系土師質土器碗で、山本Ⅲ-1期に所属する。731は、十瓶山周辺産須恵器壺の可能性が高い。732は、古墳時代に遡る須恵器杯身である。733～736は、和泉型瓦器碗で、いずれも尾上Ⅲ-2～3期に所属する。737は、十瓶山周辺産須恵器碗、738は、須恵器碗、739は、須恵器壺、740は、土師器杯、741は、サヌカイト製石鎌である。下層及び最下層より出土した遺物は、概ね9世紀代に位置付けられるものであり、流路機能時の年代の下限をこの頃に求められる。中層の遺物は乏しく、詳細な時期決定の根拠とするには困難だが、概ね下層の堆積時期とそう大きな時間差は見出せない。遅くとも10世紀までには、流路機能は衰退し、低湿地状況を呈していたと考えられる。

なお、本遺構中層の土壤について、花粉分析を実施した。分析結果の詳細は後掲するが、特に中層上位層（5層）からは、浮揚植物のガガブダが検出され、幾分水深のある水域であった可能性が推定されている。こうした花粉分析の結果から、中層堆積時には、本遺構の流水能力は著しく減退し、池状の水溜り状態であった可能性が考えられる。

包含層

第185図に示した遺物は、III区での遺構検出時等で出土した遺物である。I・II区同様、一部は旧耕作土に含まれていた遺物も含まれるが、大半は遺構より遊離した遺物であり、特にIII区での遺構の性格を補足するため必要と認められたものを図示した。742は、中国龍泉窯系青磁碗で、大宰府分類I-1類に所属する。743は、鉈状の銅製品で、装身具とみられる。

第4節 IV区の調査

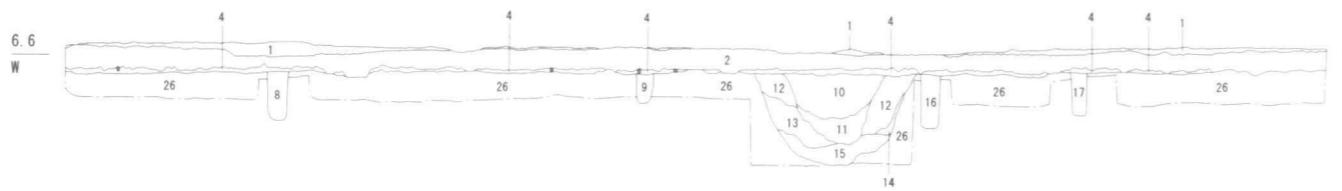
概要と基本土層

III区西端の南北走する里道より町道までの範囲をIV区とした。対象地の面積は、約906.0m²である。調査前は、東西に2筆に分筆された耕地として利用されており、調査区の設定もこの旧地割りにしたがって、東をIVa区、西をIVb区として調査を進めた。IVa区の現地表面の標高は6.62m前後、IVb区のそれは6.63m前後と、ほぼ平坦である。IIIb区と比べると0.2m程度低く、現地表面の標高差は、既述したSR01に起因する旧地形を反映していると考えて良い。

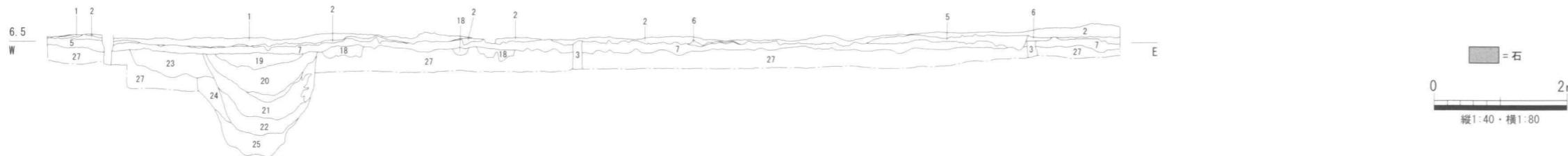
IVa区では、現耕土層（第187図2層）の下位には、1～2層に細分される薄い床土層及び旧耕土層（同図4～7層）の水平堆積が確認され、その直下で無遺物層である黄色系粘土（同図26・27層）が露出する。検出された遺構はすべて、この黄色系粘土層をベースとして掘り込まれている。遺構面の標高は、IVa区で6.50m前後、IVb区で6.45m前後である。

IV区からは、弥生時代の遺構として溝状遺構（SD21）、古代の遺構として溝状遺構（SD19・20）と旧流路跡（SR01）、中世の遺構として掘立柱建物跡6棟等で構成される屋敷地を検出した。中世屋敷地はIVa区にのみ展開し、埋没旧流路跡が主体となるIVb区においては、明確な当該期の遺構は皆無であった。これはIVb区が中世段階に至っても未だ低湿地状を呈して、おそらくは耕作地等として利用されていた可能性を示していると考えられる。既述したSR01最上層に当該期の遺物が少量ながら混在している事実は、明確な遺構としては

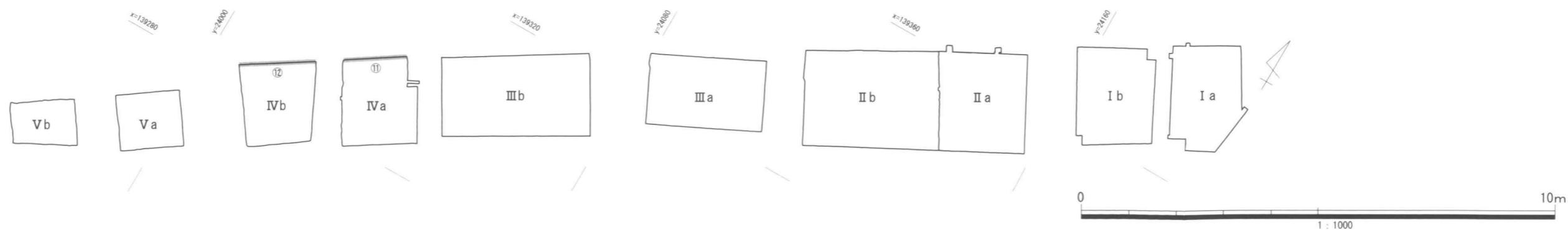
① IVa 区北壁



② IVb 区北壁



- 1 盛土（花崗土）
 2 耕作土
 3 捜乱
 4 2.5Y5/6 黄褐色粘土（床土、Fe沈着・Mn）
 5 旧耕作土?
 6 床土
 7 黄灰色2.5Y6/1粘土（旧耕作土？、Fe・Mn、粒径2～3cmのベースブロック多量に含）
 8 2.5Y5/1～6/1 黄灰色粘土（SP3038 墓土、Fe・Mn、粒径2～5cmのベースブロック多量に含）
 9 2.5Y5/1 黄灰色粘土（SP3041 墓土、Fe・Mn、粒径1～3cmのベースブロック多量に含）
 10 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土（SD19 上層、Fe・Mn、粒径2～6cmのベースブロックやや多量に含）
 11 2.5Y5/1 黄灰色粘土（SD19 中層、Fe、やや強粘質、下端に灰色シルトラミナ状に含）
 12 2.5Y7/6 明黄褐色粘土（SD19 下層、Fe・Mn、強粘質）
 13 10YR5/4 に似い黄褐色粘土（SD19 下層、Fe、ややシルト質）
 14 10YR6/1 淡灰色粘土（SD19 下層、ややシルト質）
 15 10YR6/8 明黄褐色中砂混粘土（SD19 最下層、Fe、砂多量に混、層左右端付近は細砂～シルト質）
 16 2.5Y5/1 黄灰色粘土（SP3039 墓土、Fe・Mn、粒径2～3cmのベースブロック多量に含）
 17 2.5Y4/1～5/1 黄灰色粘土（SP3040 墓土、Fe・Mn、粒径2～5cmのベースブロック多量に含）
 18 2.5Y5/1 黄灰色粘土（古代遺構埋土？Fe・Mn、強粘質、粒径2～5cmのベースブロック多量に含）
 19 2.5Y5/4 黄褐色粘土（SD21 最上層、Fe・Mn、ややシルト質）
 20 2.5Y7/1 灰白色細砂～2.5Y6/1 黄灰色シルトラミナ（SD21 上層、Fe、黄灰色シルト層内に炭化物粒多量に含）
 21 2.5Y6/1 黄灰色シルト・細砂～2.5Y6/1 黄灰色粘土ラミナ（SD21 上層、Fe、粘土層内に炭化物粒若干量含、東肩付近にベースブロック多量含）
 22 2.5Y6/1 黄灰色シルト・細砂～2.5Y6/1 黄灰色シルトラミナ（SD21 上層、Fe、黄灰色シルト層内に若干量の炭化物粒含、東肩付近に粒径1～2cmのベースブロック少量含）
 23 2.5Y6/1 黄灰色細砂質シルト（SD21 中層、Fe・Mn、底面付近に細砂ラミナ状に混）
 24 2.5Y6/1 黄灰色粘土（SD21 中層、Fe・Mn、ややシルト混）
 25 2.5Y6/1 黄灰色シルト・細砂～10YR4/6 褐色粗砂ラミナ（SD21 下～最下層、Fe、東肩付近に粒径5～10cmのベースブロックやや多量に含）
 26 2.5Y7/6 明黄褐色粘土（地山、Fe・Mn、ややシルト質）
 27 2.5Y7/3 淡黄色粘土（地山、Fe・Mn、強粘質）



第186図 IV区調査区壁面土層断面図

捉えられなかったが、耕作地としての可能性を否定するものでない。

掘立柱建物跡

IV区では、6棟の掘立柱建物跡を復元した。柱穴跡と考えられる遺構は、IV a 区のみで196基を検出し、そのうちの約21.4%について建物が復元された計算になる。建物遺構は、IV a 区北半部にまとまり、IV a 区南半部からIV b 区にかけては、古代に埋没した旧河道跡が大きく弧を描いて北西流し、建物跡はおろか柱穴跡さえも検出されなかった。既述したように

耕作地としての利用の可能性が窺え、屋敷地周辺の土地利用の一端を示していると考える。以下、各建物跡について報告する。

SB68（第186図）

IV a 区北東部で検出。桁行東列中央柱を欠く。梁間南列の西延長上に、後述するSB70の梁間南列の柱列が配されており、両建物が同時併存した可能性も考えられる。

遺物は、土師質土器等の小片が少量出土したのみであり、時期決定の根拠となる遺物に乏しいが、概ね13世紀前半を中心とした時期に位置付けられる。

SB69（第188図）

IV a 区東部で検出。SD17と重複するが、柱穴跡に切り合い関係はなく、先後関係は不詳である。

遺物は、図示した以外に、土師質土器等の小片が少量出土したのみである。745は、SP2924出土の和泉型瓦器碗で、尾上III-2~3期に所属する。748は、SP2922出土の動物遺体である。時期決定の根拠となる遺物に乏しいが、概ね13世紀後半を中心とする時期に位置付けられる。

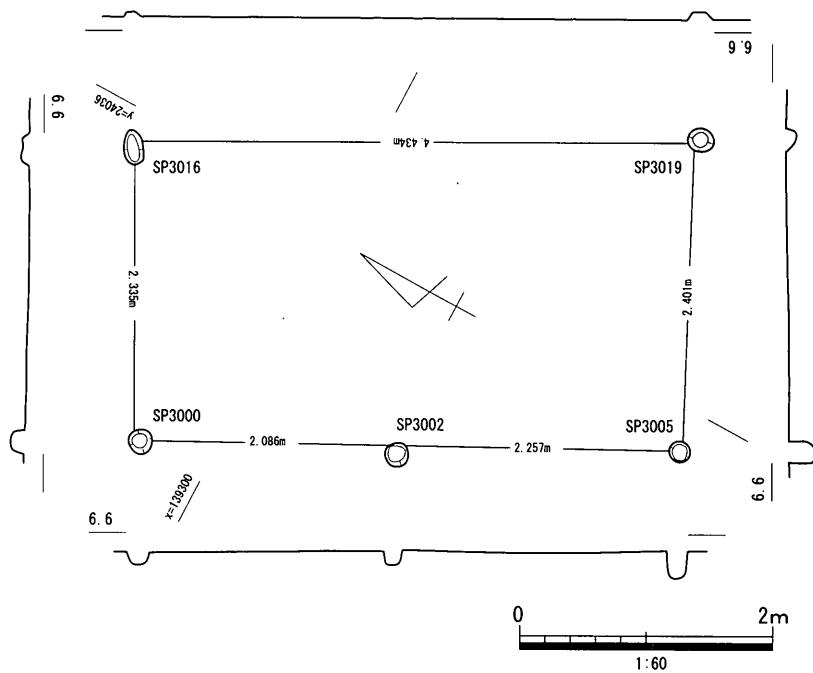
SB70（第189図）

IV a 区北部で検出。SB71~73と重複し、柱穴跡の切り合い関係より、SB72より先行することが確認された。

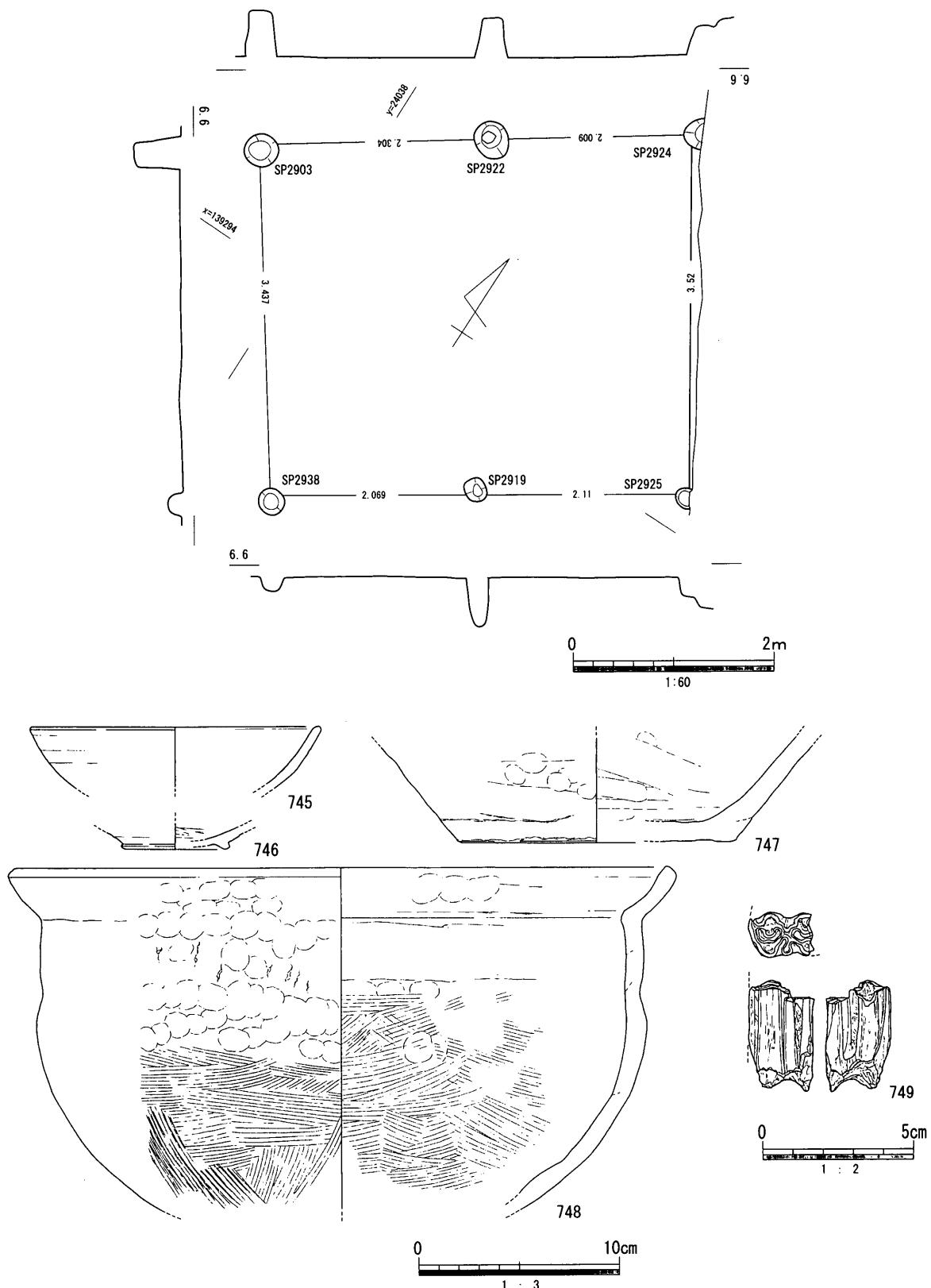
遺物は、図示した以外に、土師質土器等の小片が少量出土したのみである。750は、SP2984より出土した安山岩製砥石である。図上半を中心に大きく破碎され、破断面を含め被熱により黒色化や剥離が認められる。柱穴跡の根石として転用されて出土した。時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難だが、周辺遺構との関係等より、概ね13世紀後半を中心とする時期に位置付けられる。

SB71（第190図）

IV a 区中央部で検出。SB72・73、SK72・73と重複し、柱穴跡の切り合い関係より、SK72・73より先行することが確認された。庇南東隅柱を欠く。なおSB71~73は、ほぼ同規模で構造的にも近似する建物で、ほぼ同位置に建て直された可能性が考えられる。このように考えると、SB70とSB73は、主軸方向が近似し、建物の重複も認められないことから、同時併存かもしくは近似した時期に建てられた可能性が想定される。さらにSB72がSB70より後出することから、SB73→SB71・72と推定される。SB71とSB72の先後関係は不詳ながら、SB68を含め、これら5棟の建物が、比較的近接した時期幅の中で建てられたことが想像される。

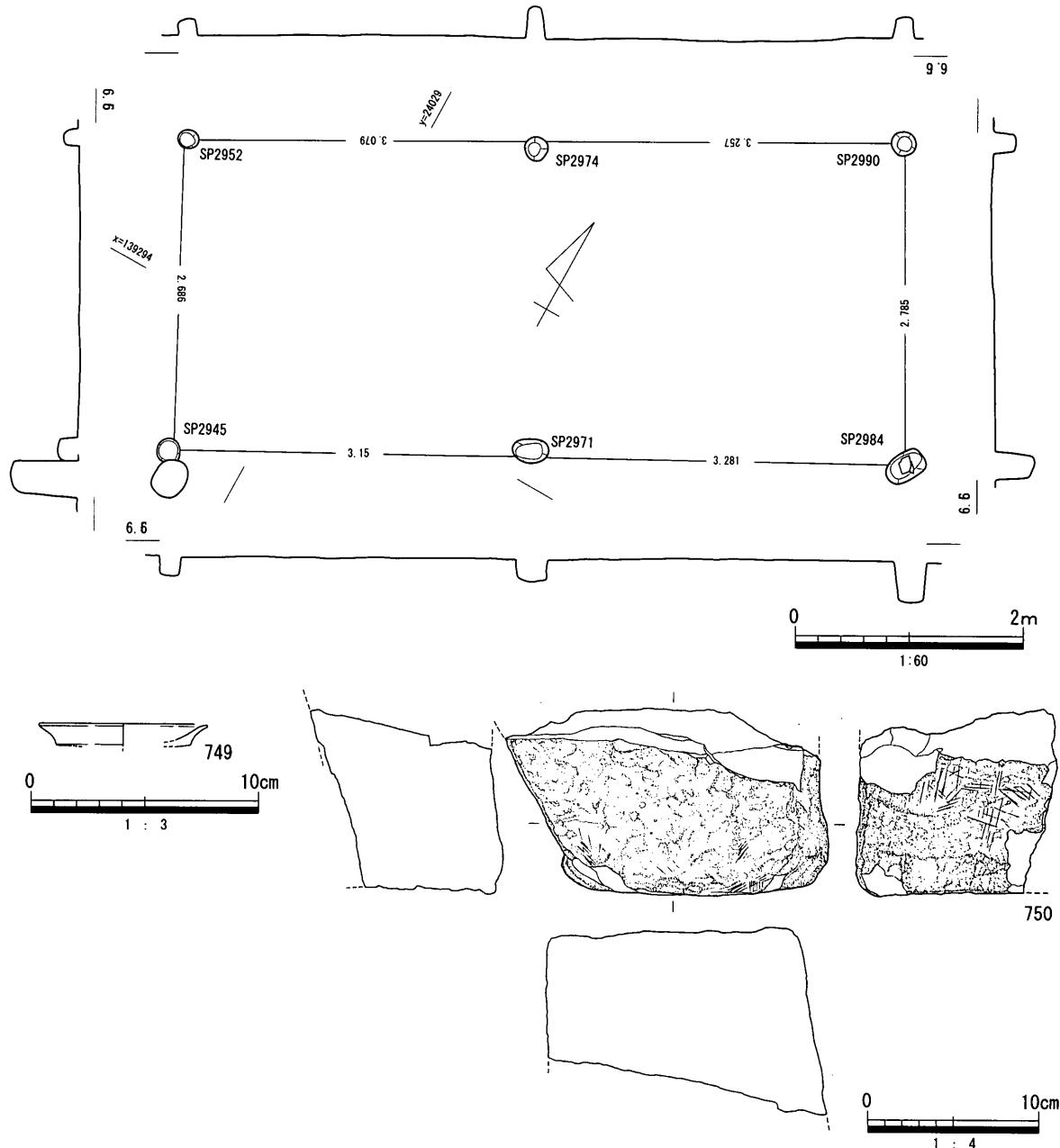


第187図 SB68 平・断面図



第188図 SB69 平・断面図、出土遺物実測図

遺物は、土師質土器等の小片が若干量出土した。他の建物遺構と比べ、遺物量はやや多い。またSP2962からは、根石の下より、ほぼ完形の土師質土器小皿（752）が、口縁部を下に伏せた状態で出土（図版50）し、751は破碎されて出土した。地鎮に伴う儀礼行為の痕跡を示していると考えられる。754は、SP2871出土の和泉型



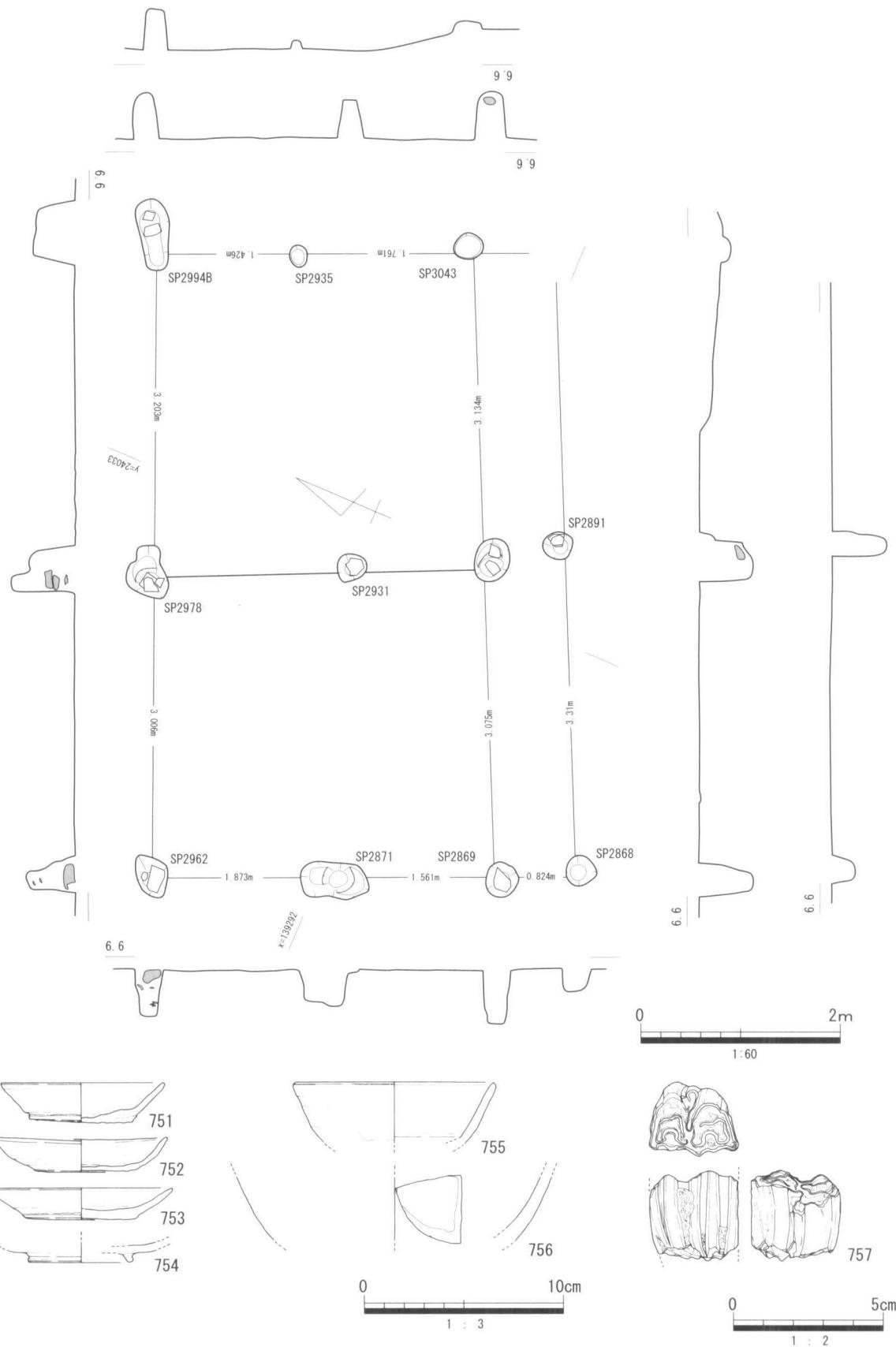
第189図 SB70 平・断面図、出土遺物実測図

瓦器碗で、尾上III—1～2期に所属する。755は、SP2962出土の中国白磁皿で、大宰府分類IX—2類に、756は、SP2978出土の龍泉窯系青磁碗で、大宰府分類I—4類に所属する。757は、SP2869出土の動物遺体である。出土した遺物より、概ね13世紀後半を中心とする時期に位置付けられる。

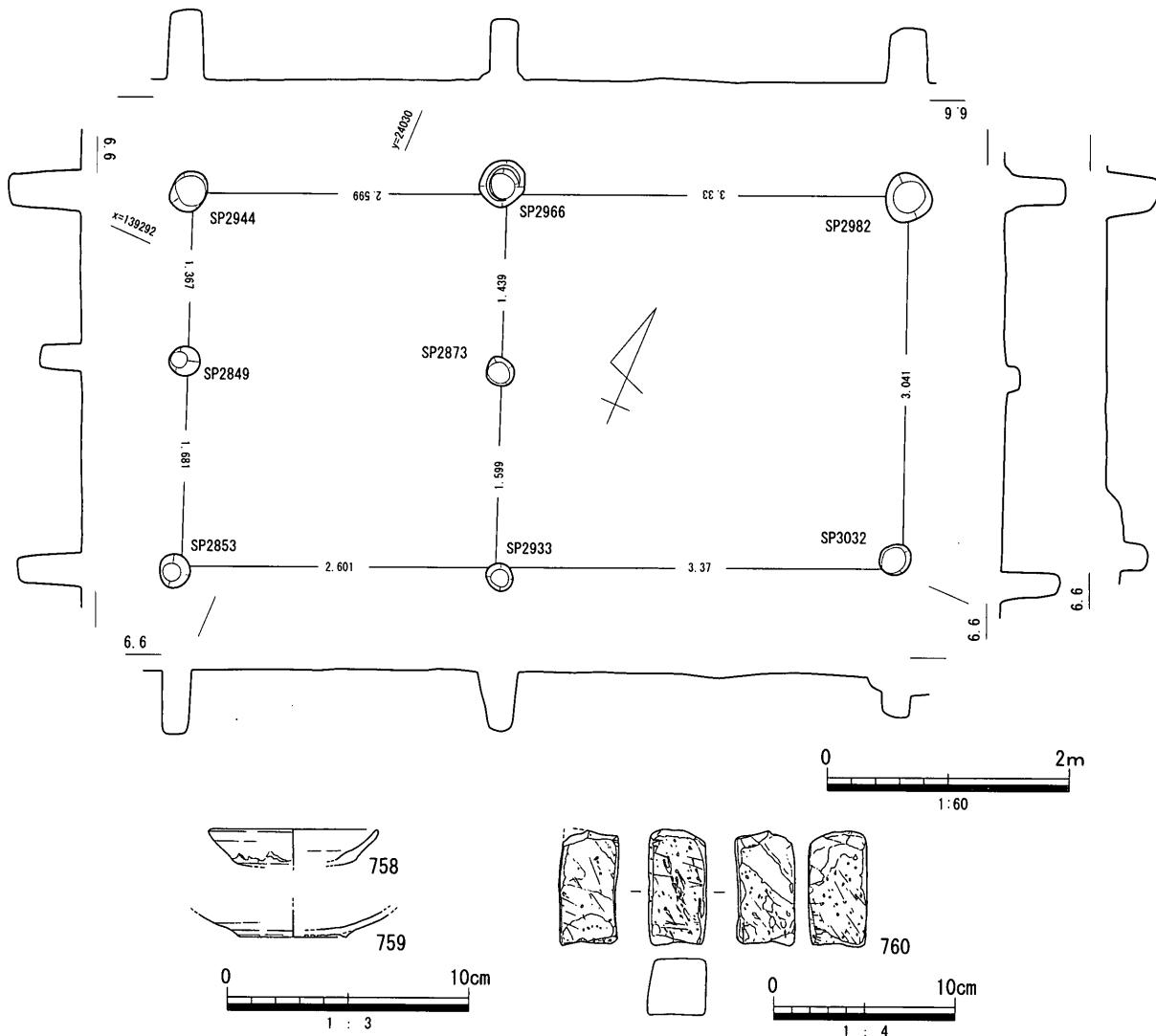
SB72（第191図）

IVa区中央部で検出。梁間東列中央柱を欠く。SK72と重複し、柱穴跡の切り合い関係より、SK72より先行する。遺物は、図示した以外に、土師質土器等の小片が少量出土したのみである。759は、SP2982より出土した和泉型瓦器碗で、尾上III—3期に所属する。760は、SP2944より出土した方柱状を呈する流紋岩製砥石で、図下半を大きく欠損する。時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難だが、周辺遺構との関係等から、概ね13世紀後半を中心とする時期に位置付けられる。

SB73（第192図）



第190図 SB71 平・断面図、出土遺物実測図



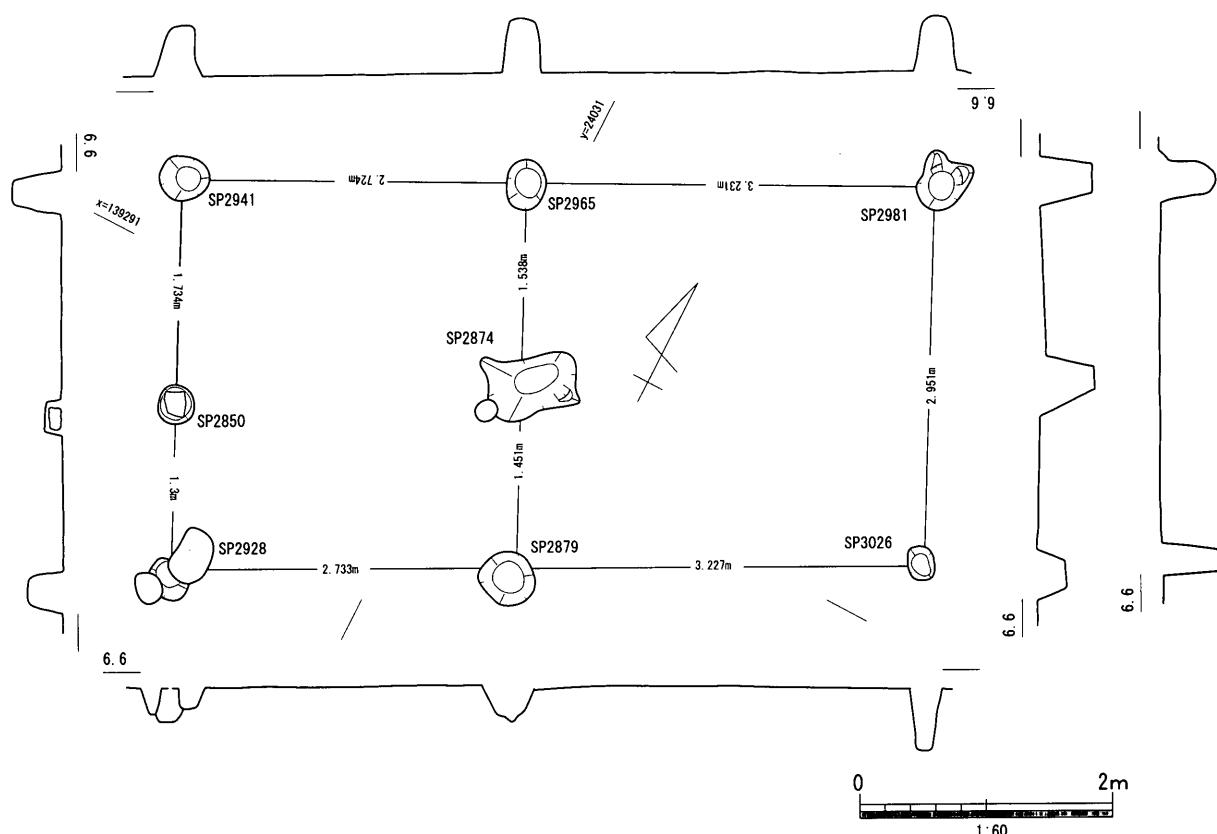
第191図 SB72 平・断面図、出土遺物実測図

IV a 区中央部で検出。梁間東列中央柱を欠く。SK73と重複し、柱穴跡の切り合い関係より、SK73より先行する。遺物は、土師質土器等の小片が出土した。他の建物遺構と比べ、遺物量はやや多い。762は、SP2981より出土した十瓶山周辺須恵質土器碗である。763は、SP2965より出土した板状を呈する流紋岩製砥石である。図下半をやはり欠損する。時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難だが、SK73との関係などから、概ね13世紀中頃を中心とする時期に位置付けられる。

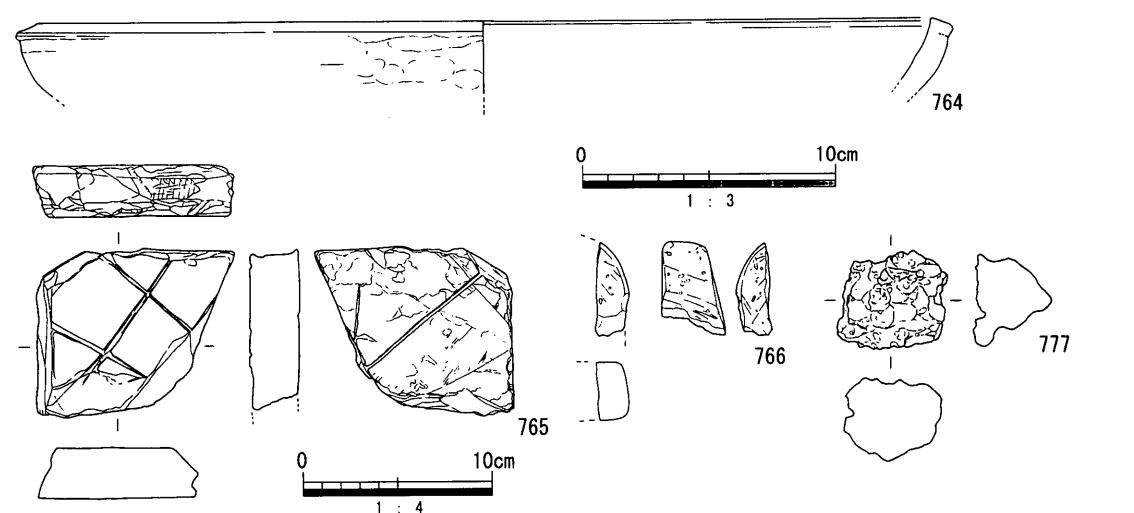
柱穴跡

第193図には、IV区で検出された柱穴跡の内、建物遺構を構成できなかった柱穴跡から出土した遺物について、IV区屋敷地の様相を理解する上で、特に必要と判断したものを掲載した。765は、SP2973より出土した用途不明の流紋岩製石製品で、図左面を上に、柱穴跡中央に据え置かれて出土（図版50）しており、根石として転用されたとみられる。厚約2.8cmの板状を呈し、図左面には一辺4～5cm程度の方格線が、右面には2条の斜交する直線が穿たれている。また、破損後上端面は、砥石として再利用されている。766は、流紋岩製砥石で、大きく破碎され、旧状を留めない。767は、鉄滓である。

土坑



第192図 SB73 平・断面図、出土遺物実測図



第193図 IV区柱穴出土遺物実測図

SK72 (第 194・195 図)

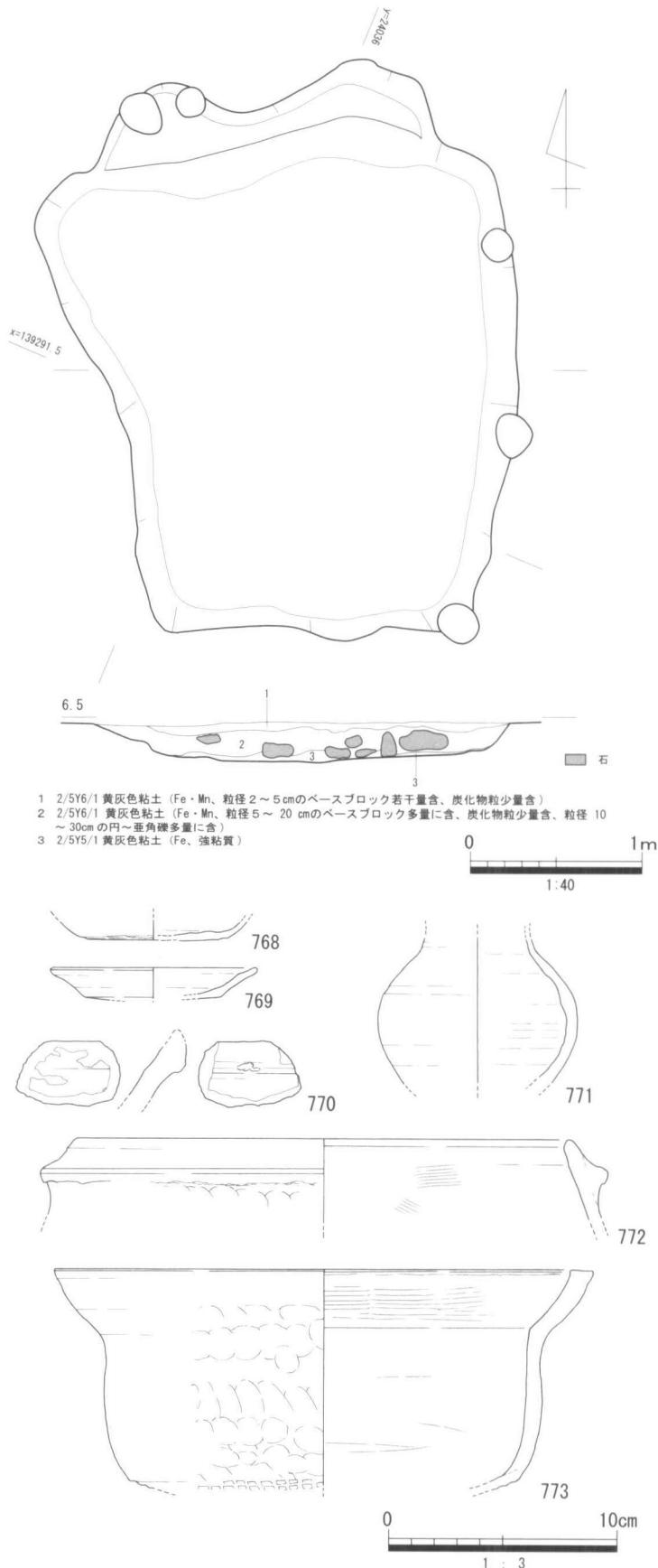
IV a 区中央部で検出。北に浅いテラスが付す。埋土は 3 層に細分され、上下 2 層に大別する。上層(1・2 層)は、ブロック土が多量に混在し、人為的に埋め戻された土壤である。特に 2 層からは、遺物とともに砂岩や安山岩等の砥石を含む焼礫や焼土塊、炭化物等がやや多量に出土した。出土状況より、土坑東側より投棄されたとみられる。下層(3 層)は、土坑底面に薄く堆積した強粘質の粘土層で、遺構機能時もしくは廃絶後の自然堆積層と考えられる。

遺物は、土師質土器等が上層を中心に、土器類のみでコンテナ約 1 箱出土した。768・779 は上層、780・781 は下層よりそれぞれ出土した。770 は、東播系須恵器捏鉢で、森田第Ⅷ期第 2 段階に所属する。771 は、備前焼小瓶で、乗岡中世 2 期に所属する。774・776 は安山岩製砥石で、いずれも大きく破碎され、表面及び破断面にも被熱による黒色化と剥離が認められる。777 は、サヌカイト製石鏃である。778・779 は、角釘である。両層から出土した遺物に顕著な時期差は認められず、下層堆積後は比較的短期間に埋め戻されたと考えられる。なお出土遺物より、概ね 14 世紀後半を中心とした時期に位置付けられる。

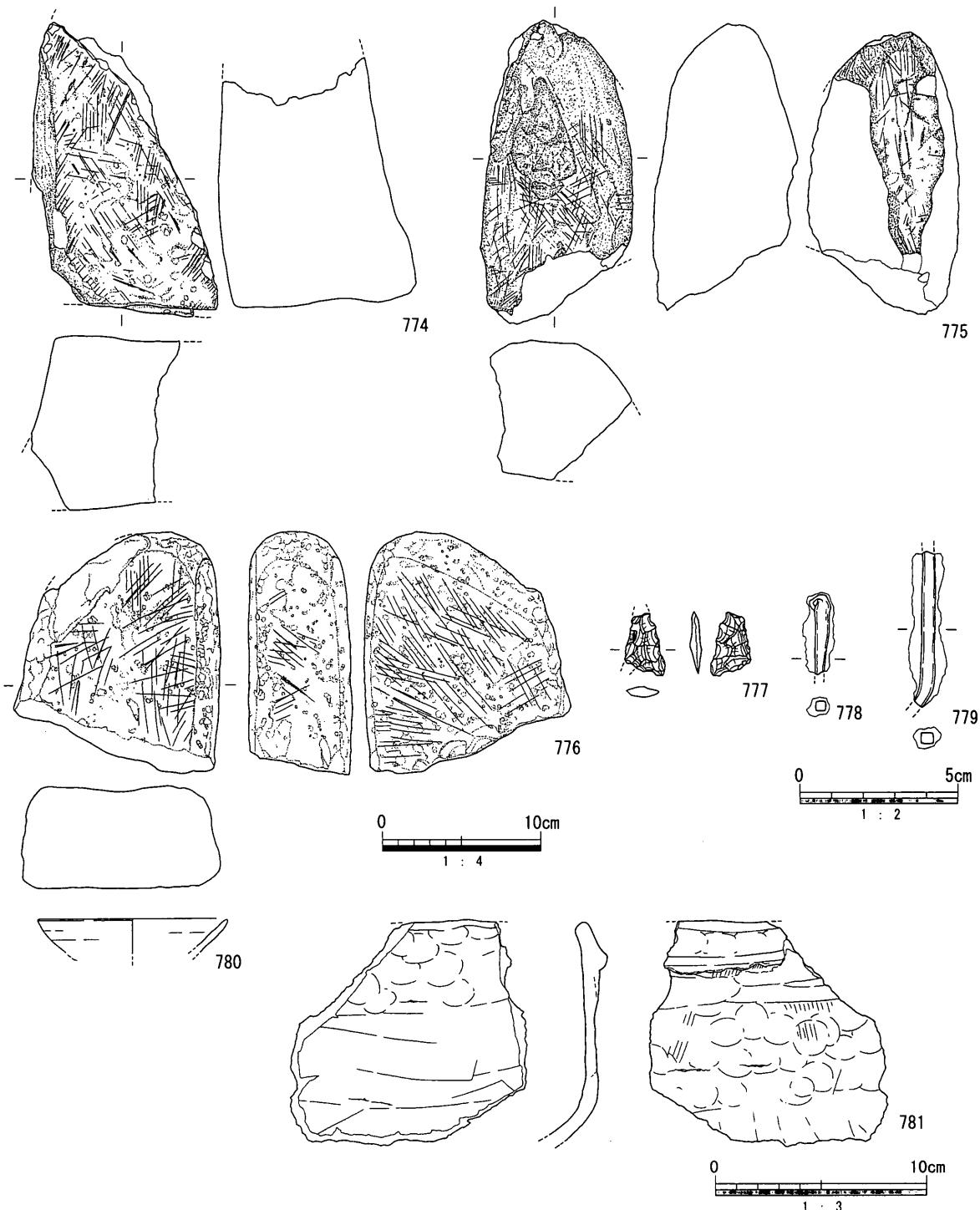
SK73 (第 196 図)

IV a 区中央部で検出。東端を SK72 に切られ、全形は不詳である。埋土は 2 層に細分された。上層(1 層)は、ブロック土が多量に混在し、人為的に埋め戻された可能性が窺える。下層(2 層)は、土坑底面に薄く堆積した粘土層で、遺構機能時もしくは廃絶後の自然堆積層と考えられる。

遺物は、土師質土器等が上層を中心に、



第 194 図 SK72 平・断面図、出土遺物実測図 1

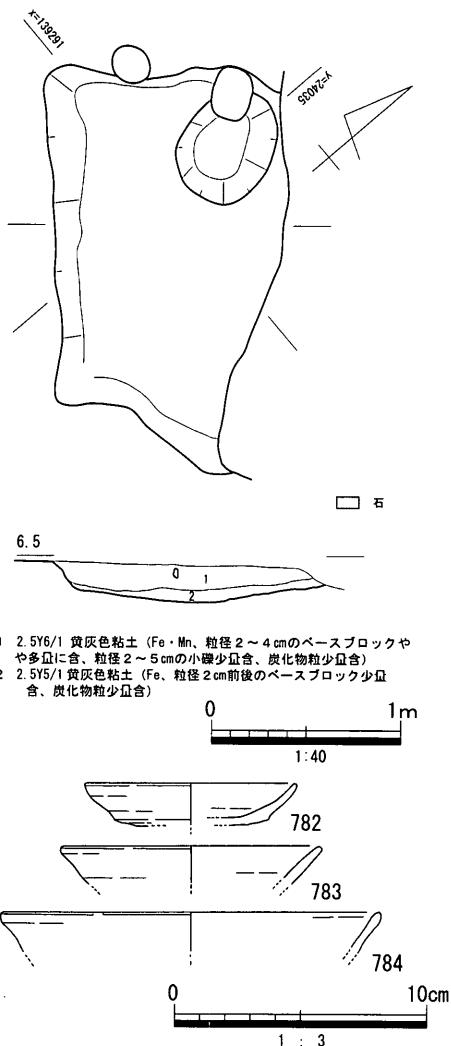


第195図 SK72出土遺物実測図2

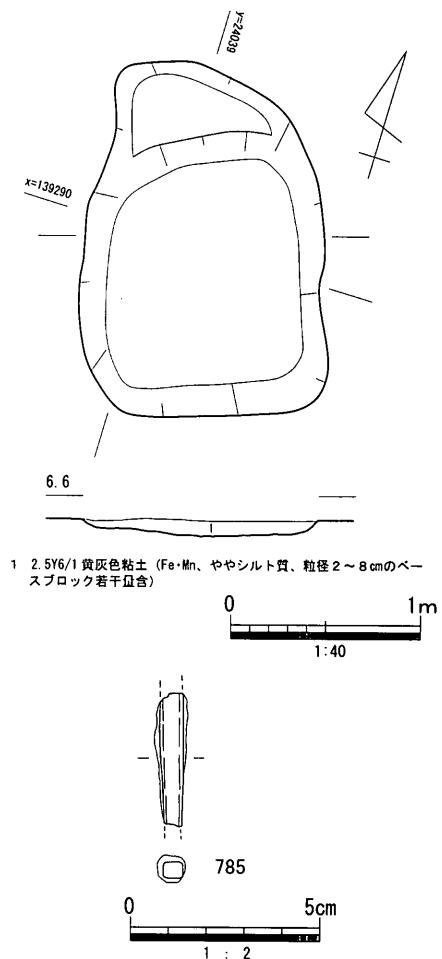
土器類のみでコンテナ約1/4箱出土した。土器類はいずれも小片化しており、埋め戻しに際し投棄されたものと考えられる。782・784が上層、783が下層より出土した遺物である。784は、十瓶山周辺産須恵質土器碗である。両層から出土した遺物に顕著な時期差は認められず、下層堆積後は比較的短期間に埋め戻されたと考えられる。出土遺物より、概ね13世紀後半を中心とした時期に位置付けられる。

SK74(第197図)

IVa区中央部で検出。切り合い関係よりSR01より後出する。埋土は単層(1層)で、土坑機能時もしくは廃棄後の自然堆積層と考えられる。



第196図 SK73 平・断面図、出土遺物実測図



第197図 SK74 平・断面図、出土遺物実測図

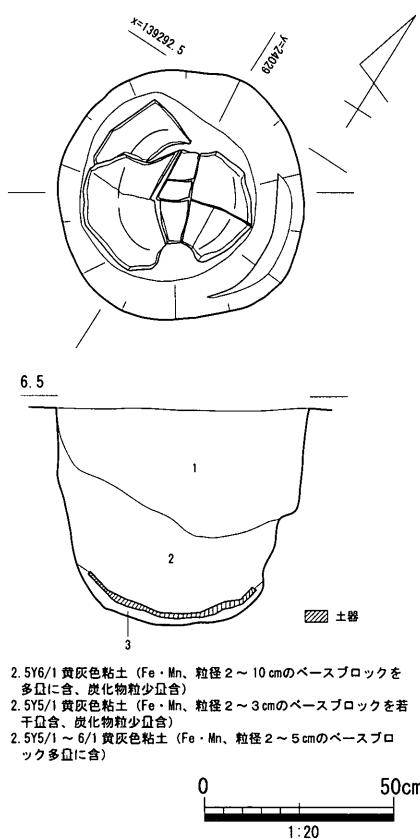
遺物は、土師質土器等の小片が少量出土したのみである。785は、角釘であろう。時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難だが、周辺遺構との関係等から、概ね13世紀後半を中心とした時期に位置付けられる。

SK75(第198・199図)

IVa区北東部で検出。底面に備前焼大甕を据えた、埋甕土坑である。甕は正置の状態で据えられてはいるが、底部しか残存しておらず(図版51)、体部～口縁部は破片を含め出土しなかった。当初より底部のみを据え置いたことは想定し難く、土坑廃絶時に転用等のため持ち出されたと考えられる。埋土は3層に細分され、上下2層に大別する。上層(1・2層)は、ブロック土が多量に混在し、人為的に埋め戻された土壤である。甕上面より検出面まで堆積し、廃絶後短期間に埋め戻されたと考えられる。下層(3層)は、甕設置時の裏込め土で、底面に厚さ2cm前後置かれ、その上に甕が据えられている。

遺物は上述した甕(789)の他、上層より土師質土器等が少量出土した。いずれも小片化しており、土坑埋め戻し時に投棄されたか、埋め戻し土に混入していたものと考えられる。時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難だが、周辺遺構との関係等も考慮して、13世紀後半～14世紀前半を中心とした時期に位置付けられる。

性格不明遺構

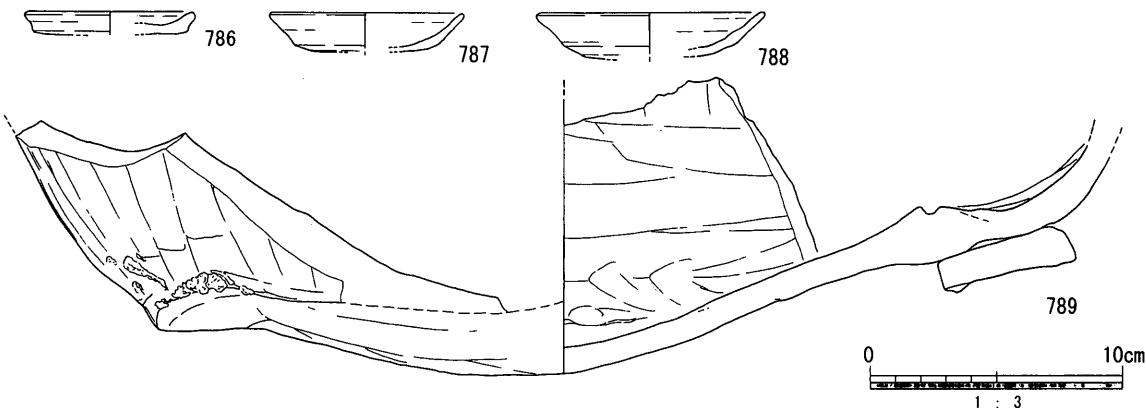


第 198 図 SK75 平・断面図

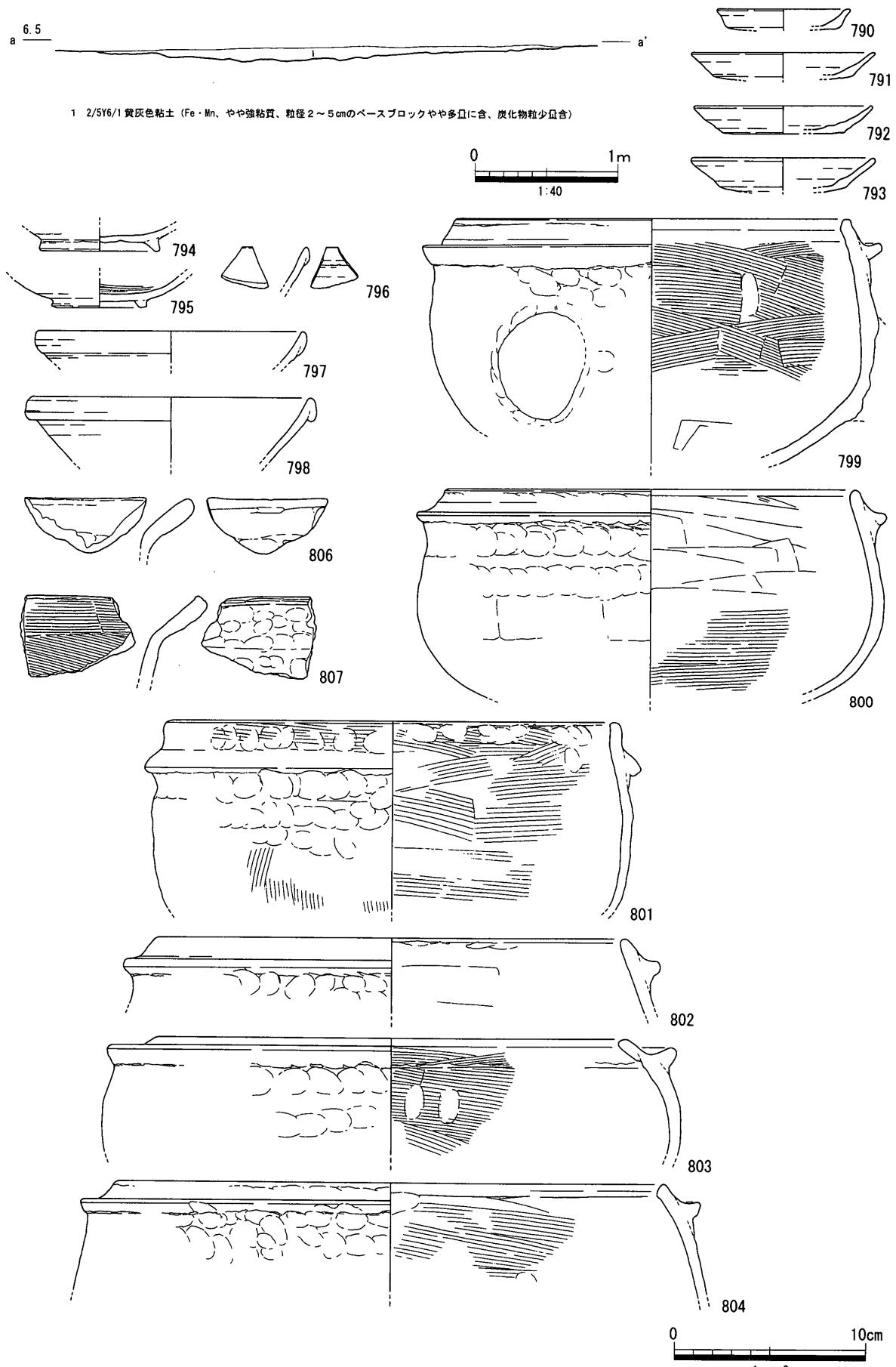
により小片化して、口縁部等の一部しか出土しなかったものもある。出土状況から推測して、おそらくは出土した皿すべてが、完形の状態で据え置かれていたと考えられる。小皿は、複数が一部重なり合うように並べられており、やや北寄りで出土した3点(814・816・817)は底部を上に伏せた状態で、それを上下に挟むように、11点(813・815・818~820など)が口縁部を上に正しく置かれた状態でそれぞれ出土した。小皿の配置には、一定の規範が存在した可能性もあるが、上面を強く削平され、遺構が完存しない状況では、正確なところは判断できない。

埋土は単層(1層)で、ブロック土が多量に混在し、遺物の出土状況からも、人為的に埋め戻された土壤と考えられる。土坑掘削後、底面に土を置き、その上に皿を並べたと考えられる。掘立柱建物跡SB70の梁間東列に近接し、主軸方向も概ね一致するが、SB70との関係については断定する根拠は得られていない。

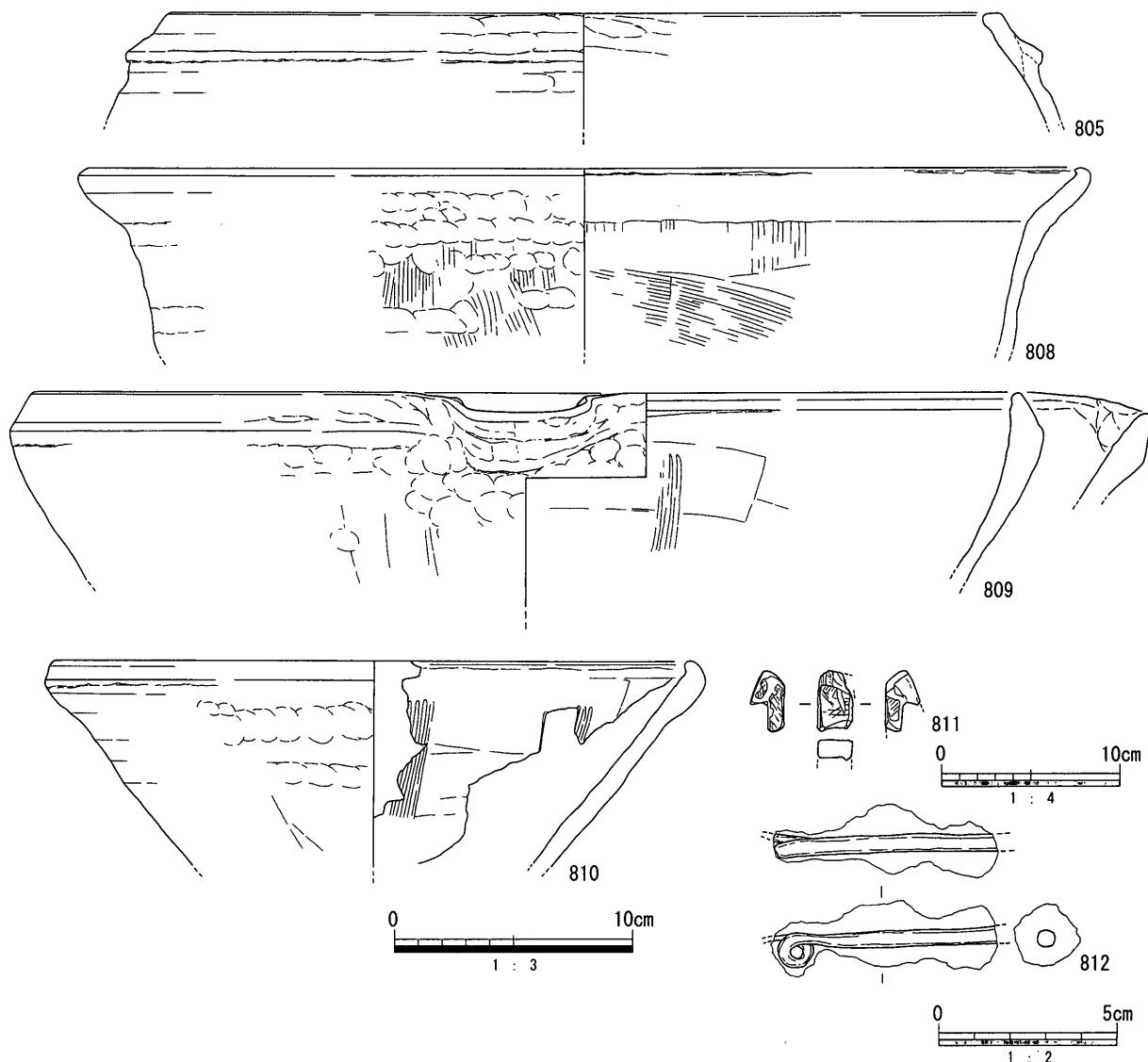
上述した土師質土器小皿以外に出土した遺物はない。小片化や脆弱化等により、8点を図示した(813~



第 199 図 SK75 出土遺物実測図



第 200 図 SX11 土層断面図、出土遺物実測図 1



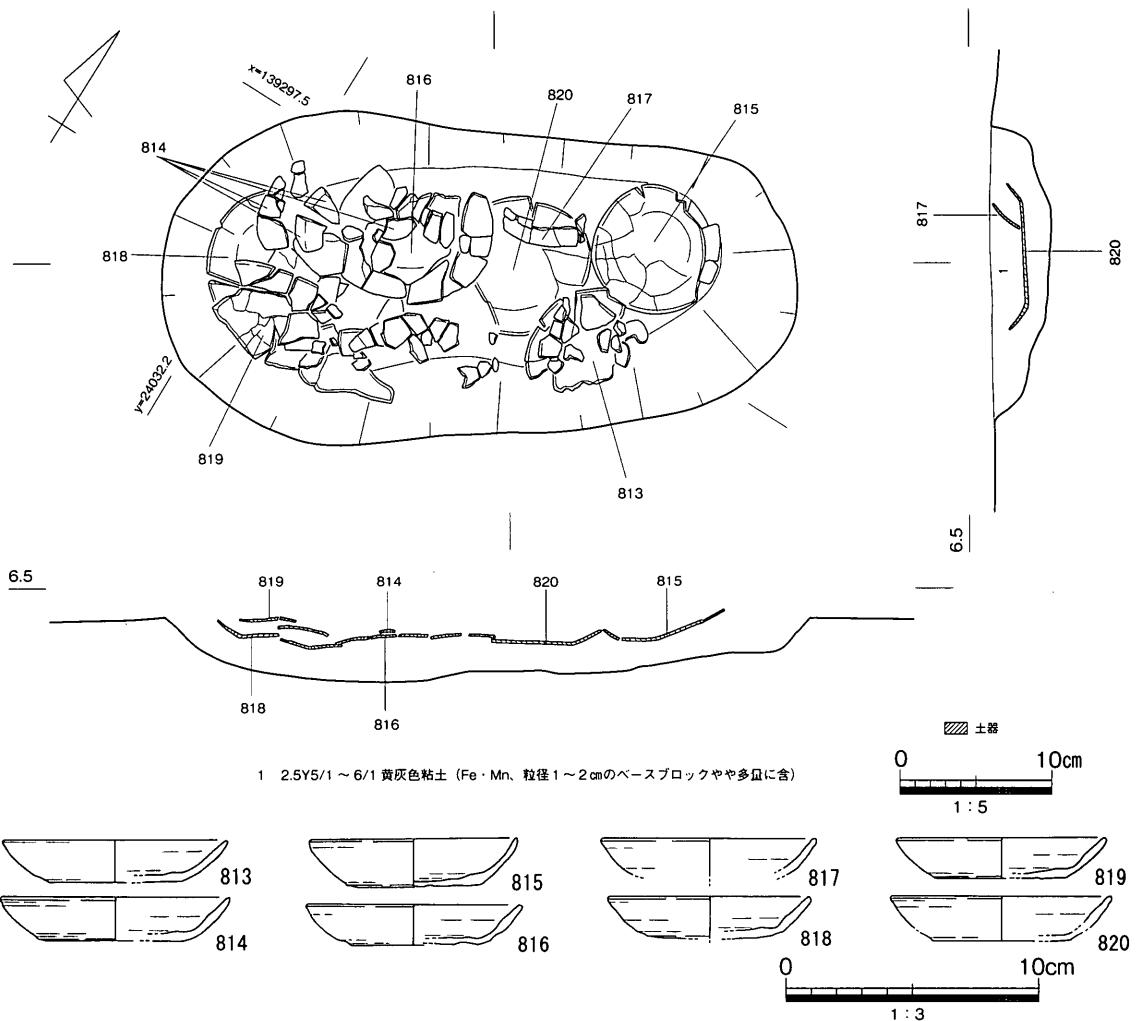
第 201 図 SX11 出土遺物実測図 2

820) に留まるが、埋納された皿の傾向は把握できると考える。皿は、口径 8.5cmを中心とした規格的な小皿であり、成形技法や胎土も酷似していることから、工房や製作者が共通であったことが想定できる。出土遺物より、14世紀後半を中心とした時期に位置付けられる。

SX13 (第 203 図)

IV a 区北西部で検出。底面より数cm程度上位で、土師質土器小皿が並べられて出土（図版 52）した。小皿は調査時に 4 点以上を確認したが、特に西半部は、重複して掘り込まれた柱穴跡や、上面の削平等の影響により、小片化した小皿が散在状態で出土したため、正確な個体数を確認することは困難であった。東端部でほぼ完形の状態で出土した 4 点も、劣化が著しく、取り上げ時に小片化したために、図化できなかった個体もある。東端部で出土した 4 点は、口縁部の一部を重ねながら、口縁部を上に正しく置かれた状態で、上より見て時計回りの方向に据え置かれていた。出土状況より、さらに複数の皿が据え置かれていたことは確実だが、皿の配置や個体数についての正確なことは不詳である。

埋土は单層（1 層）で、ブロック土が多量に混在し、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。土坑掘削後、底面に土を置き、その上に皿を並べたことが考えられる。SB73 衍行北列のライン上に位置し、主軸方向も概ね一致するが、SB73 との関係については不詳である。



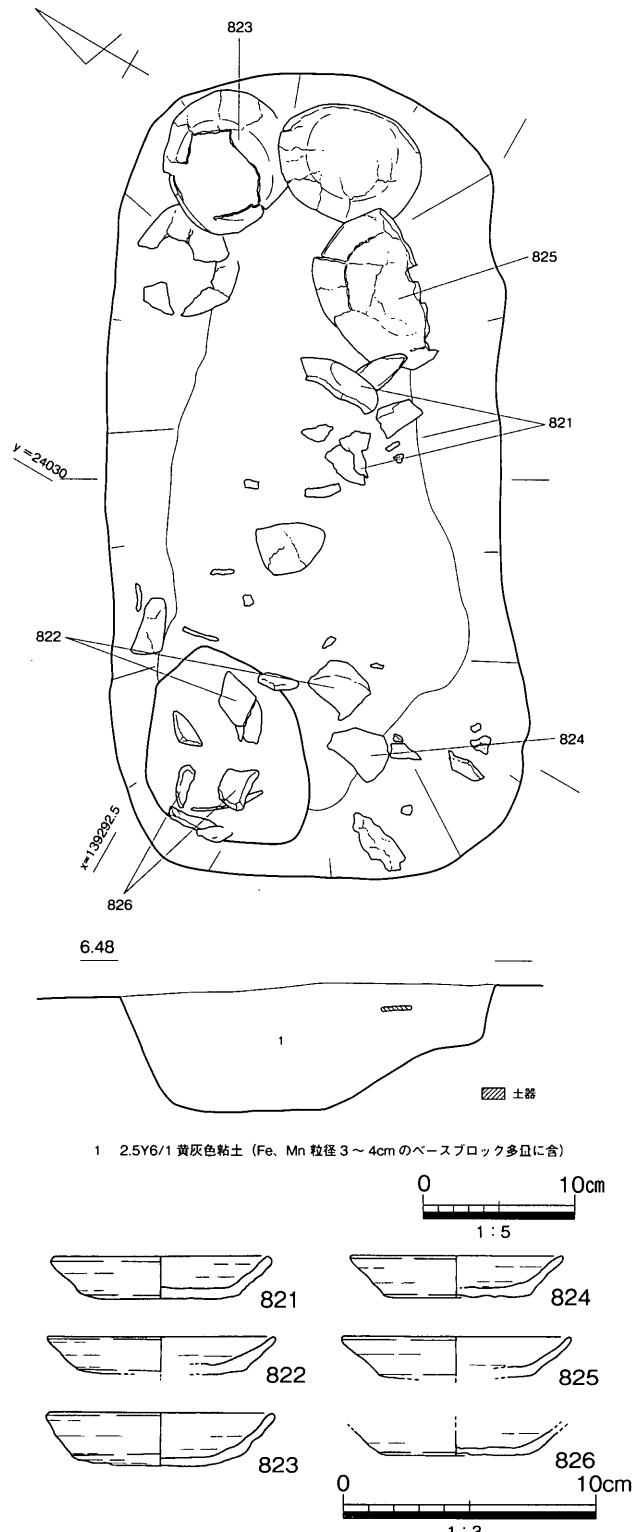
第 202 図 SX12 平・断面図、出土遺物実測図

遺物は、土師質土器小皿の他には、器種不詳の須恵器や土師質土器の小片が数点出土したのみである。既述したような理由から、小皿 6 点を図示した (821 ~ 826) に留まるが、埋納された皿の傾向は把握できると考える。皿は、概ね口径 8.5cm を中心とした規格的な小皿であり、成形技法や胎土も酷似していることから、本例についても工房や製作者が共通であったことが想定できる。出土遺物より、14 世紀後半を中心とした時期に位置付けられる。

SX14 (第 204・205 図)

IV a 区西端で検出。西端部で柱穴跡が重複し、一部攪乱を蒙るが、本遺跡で確認された同種遺構の中では、最も残存状況は良好である。底面より数cm上位で、土師質土器小皿が並べられて出土 (図版 52) した。旧耕作土直下で検出したため、上面の小皿は、小片化や多少の移動を被っている可能性があり、埋納された小皿の正確な個体数は不詳である。さらに複数の小皿が埋納されていた可能性を否定することはできない。小皿の取り上げに際しては、特に表裏と重なりに注意を払い、具体的な埋納の順序を復元することに努めた。しかし、挿図の模式図に示したように、小片化が顕著なこともあり、表裏の区別に関係なく 4 ~ 5 点を積み上げるといった程度で、具体的な法則性等を捉えるまでには至らなかった。

遺物は上述した小皿以外には、器種不詳の土師質土器小片が数点出土したのみである。本例についても、小片化や脆弱化等の理由から、小皿 24 点を図示した (827 ~ 850) に留まるが、埋納された皿の傾向は把握できる。概ね口径 9.3cm を中心とした規格性が窺え、成形技法や胎土も酷似していることから、本例についても工房や製作者が共通であったことが想定できる。出土した遺物より、14 世紀後半を中心とした時期に位置付けられる。



第 203 図 SX13 平・断面図、出土遺物実測図

前半を中心とした時期に位置付けられる。

SD19 (第 208 図)

IV a 区中央部を南北走する直線溝である。切り合い関係から、SK72・73、SX11・12 より先行する。北端は調査区外へ延び、南端は SR01 へ合流する。延長約 12.4 m を確認した。SR01 合流部北側で SD20 が西へ派生する。

溝状遺構

SD17 (第 206 図)

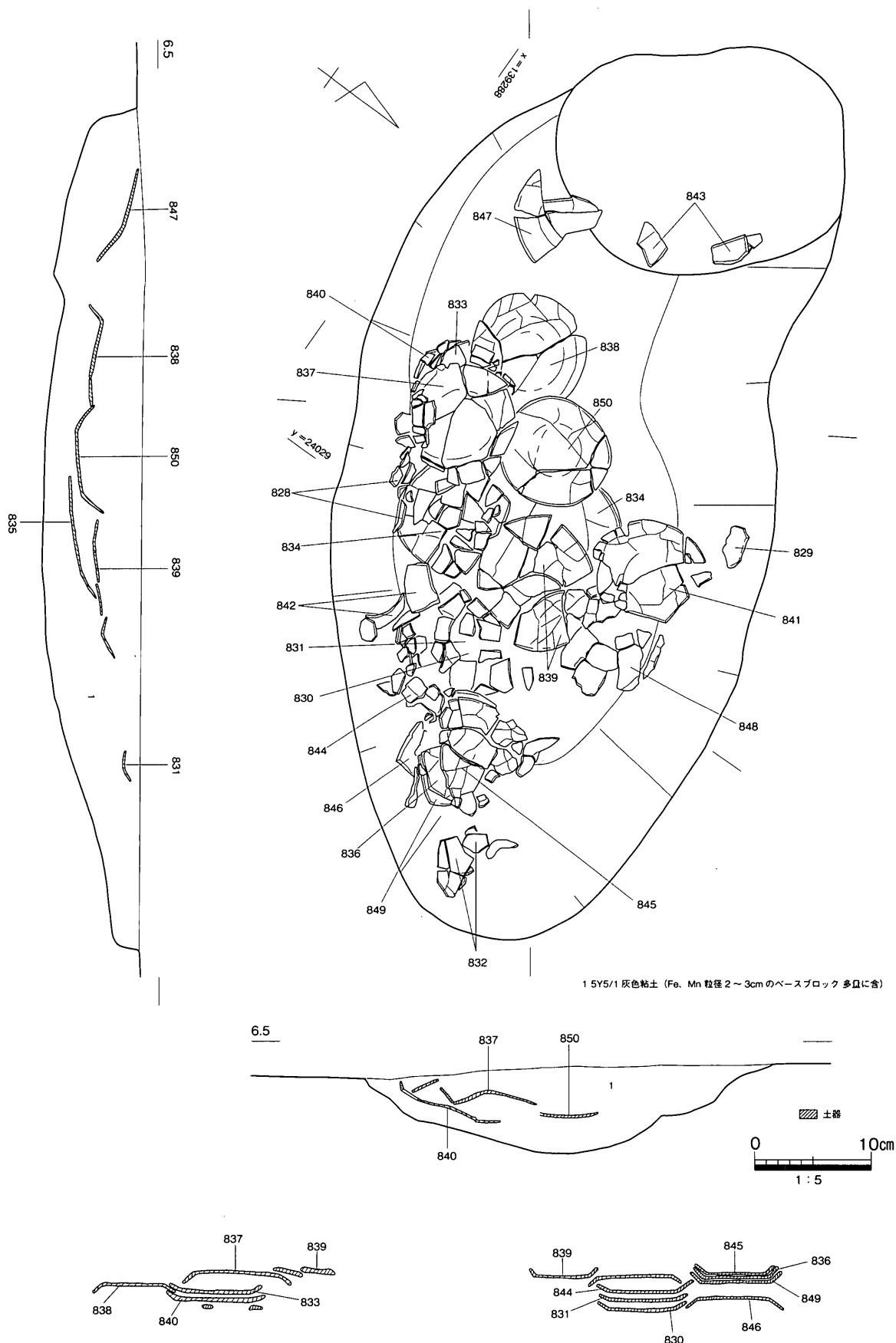
IV a 区東半部に逆 L 字状に配された小溝である。南北溝中央部で一部途切れるが、一連の遺構として報告する。切り合い関係より、SX11 より後出する。北・西端とも調査区内で途切れ、南北溝延長約 9.76 m、東西溝延長約 2.84 m を確認した。後述する SD18 と流路方向や規模、埋土が近似しており、一連の遺構であった可能性が考えられる。幅 0.2 ~ 0.3 m、残存深 0.04 m、断面形は浅い皿状を呈する。南北溝の流路方向 N 27.012° W である。最深部底面の標高 6.40 ~ 6.46 m を測り、わずかな高低差を評価すれば西へ流下すると考えられる。埋土は単層（1 層）で、溝廃絶後の自然堆積層と判断される。

遺物は、土師質土器碗・鍋、器種不詳の瓦器等の小片が少量出土したのみである。

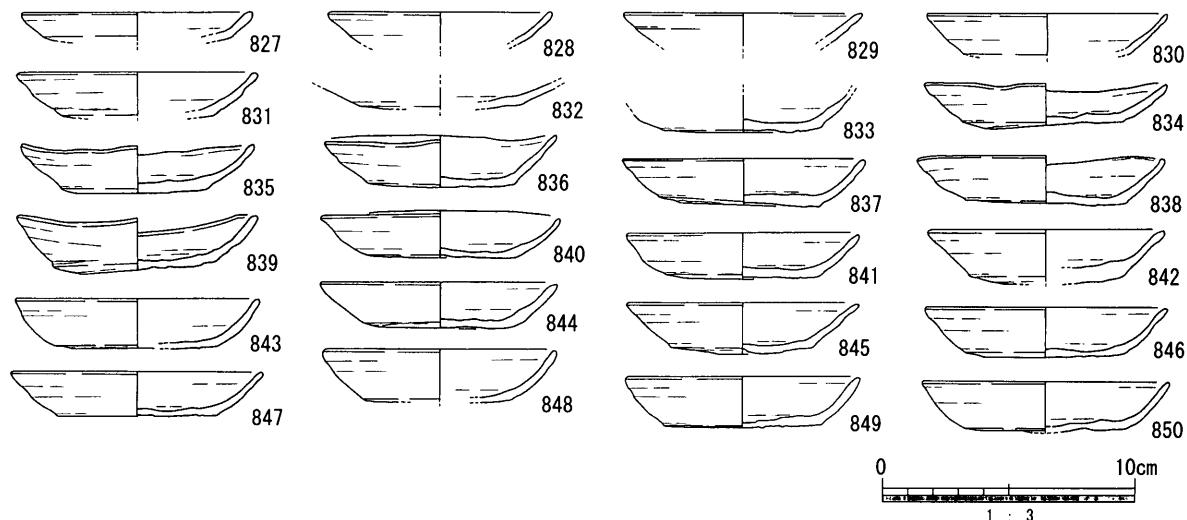
SD18 (第 207 図)

IV a 区南西隅部で検出した直線溝である。既述したように SD17 と一連の溝と考えられ、切り合い関係より SX11 より後出する。規模や位置等から、SD17 とともに屋敷地の区画溝もしくは建物遺構の雨落溝等の機能が想定される。東端は調査区内で途切れ、西端は調査区外へ延長し、約 4.94 m を確認した。幅 0.16 ~ 0.23 m、残存深 0.04 m 前後、断面形は浅い皿状を呈する。流路方向は N 58.858° E で、SD17 南北溝と概ね直交して配される。埋土は単層（1 層）で、SD17 埋土と共通する。最深部底面の標高 6.40 m 前後と概ね一定し、流下方向は不明である。

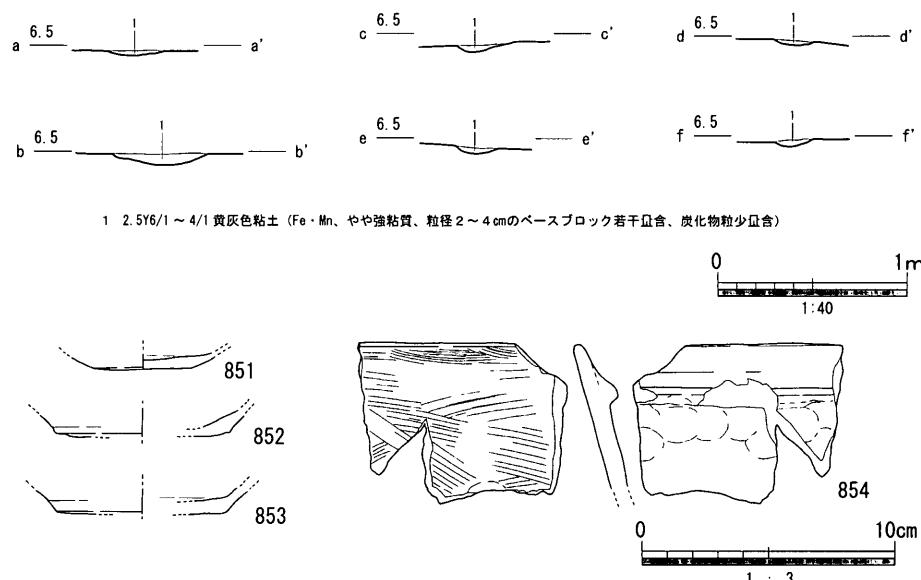
遺物は、図示した以外には、器種不詳の土師質土器や黒色土器碗等の小片が少量出土したのみである。855 は、和泉型瓦器碗である。おそらくは混入とみられ、器表面の磨耗が顕著。尾上 III-2 期に所属する。SD17 とともに、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難だが、周辺遺構との関係等から、概ね 14 世紀



第 204 図 SX14 平・断面・模式図



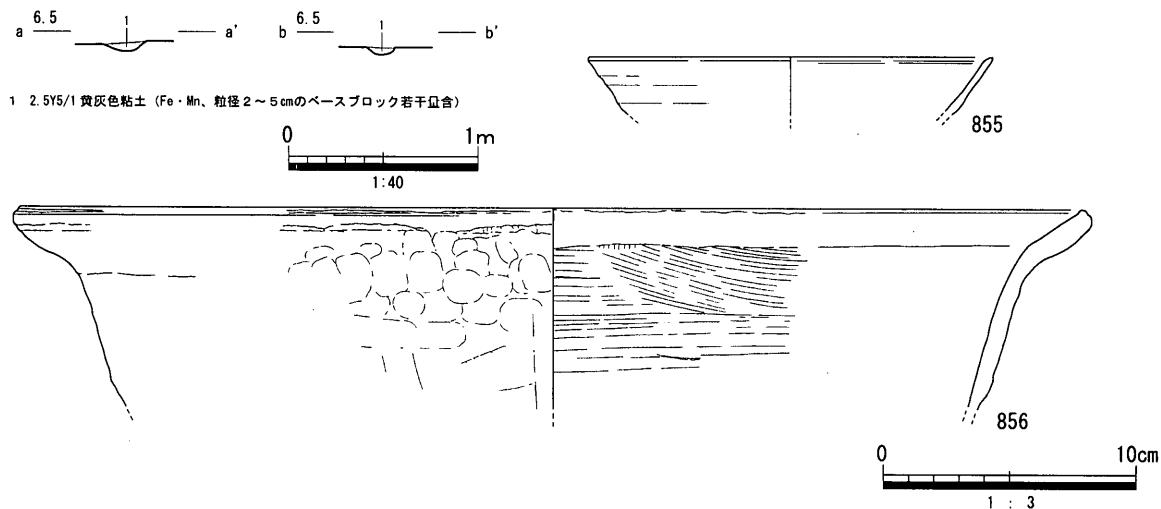
第 205 図 SX14 出土遺物実測図



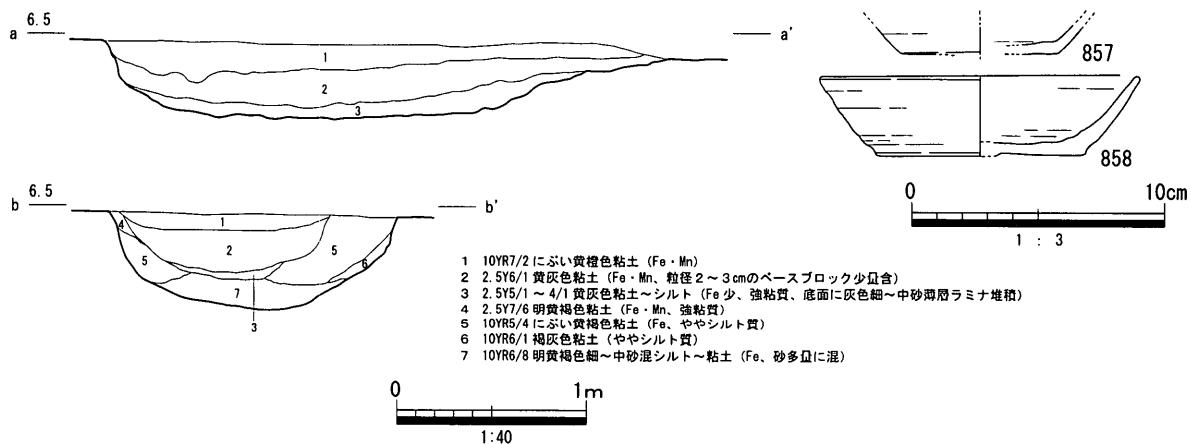
第 206 図 SD17 土層断面図、出土遺物実測図

幅は SD20 の分岐部以北で 1.09 ~ 1.40 m、SD20 の分岐部と SR01 との合流部の間で 2.96 m 前後をそれぞれ測り、SR01 合流部付近で大きく溝幅は広がる。流路方向 N 30.378°W、残存深 0.34 ~ 0.38 m、断面形は概ね逆台形状を呈する。

埋土は 3 ~ 7 層に細分され、上～最下層の 4 層に大別する。上層（1・2 層）は、溝機能停止後の自然堆積層とみられ、上位層はベース層の流入再堆積、下位層も穏やかな環境下で堆積した土壤と考えられる。中層（3 層）は粘土～細砂のラミナ堆積層で、流水下堆積の可能性が考えられ、溝機能時の堆積層と考えられる。既述したようにこれら上・中層は、SR01 へ連続することを確認しており、おそらくは SR01 より取水し、北へ流下していた可能性が考えられる。下層（4 ~ 6 層）は、概ね均質な粘土層で、上層同様ベース層の流入再堆積等による自然堆積層と判断される。最下層（7 層）は、粘土～細砂のラミナ堆積層で、中層と同様に流水下堆積の可能性が考えられ、溝機能時の堆積層と考えられる。埋土はこのように 4 層に大別され、SD20 分岐部以北では上・中層が下・最下層の堆積を上面より掘り込んで堆積しており、改修の可能性が窺える。また同以南では、上位 2 層のみ堆積が確認でき、SD20 分岐部を境に埋土の様相がやや異なる。SD20 分岐部以北と同様な堆積は、後述する SD20 にも確認される。したがって、こうした埋土の堆積状況より、開削時には SD19・20 が逆 L 字状



第207図 SD18 土層断面図、出土遺物実測図



第208図 SD19 土層断面図、出土遺物実測図

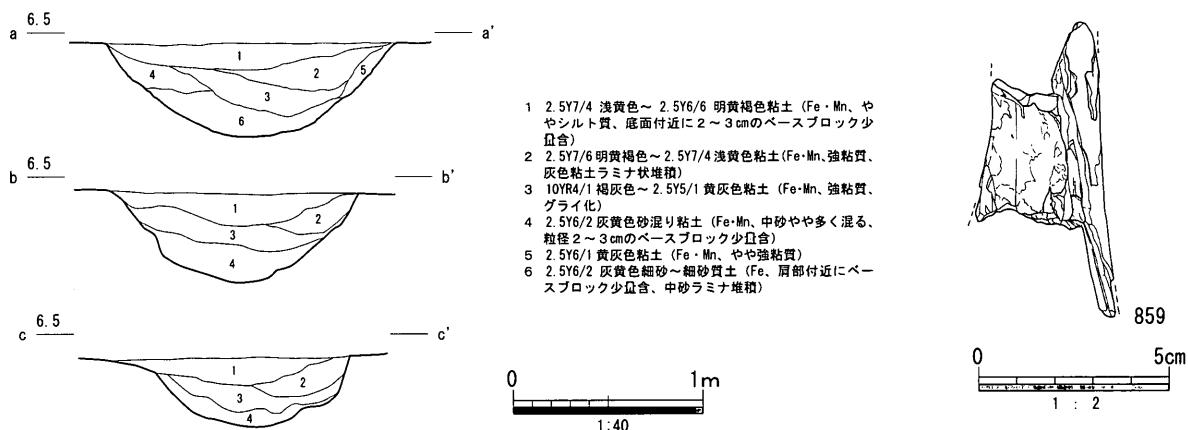
に配されていたが、下・最下層堆積後にSD19の屈曲部以南が新たに開削され、T字状を呈する溝へ改修されたと考えられる。

遺物は、上層より器種不詳の土師器や須恵器、土師質土器等の小片、焼土塊、サヌカイト剥片が、中層より土師器や須恵器等の小片が、下層より土師器や須恵器杯、サヌカイト剥片がコンテナ約1/4箱出土した。大半が小片化しており、開削時期等を特定する良好な遺物に乏しいが、SR01との関係等から概ね9世紀代には開削されていた可能性が想定される。なお、上層より出土した中世の遺物は、量的にはごく少量に限られるものの、溝の最終的な埋没が完了し屋敷地としての造成がなされた時期を反映していると考えられる。857は、瓦質焼成の皿の可能性が高い。小片で器表面は磨滅が顕著なため、製作地などは不明であるが、中世に下る資料でと考えられる。858は下層より出土した須恵器坏で、改修前の溝の廃絶時期を示す資料と考える。

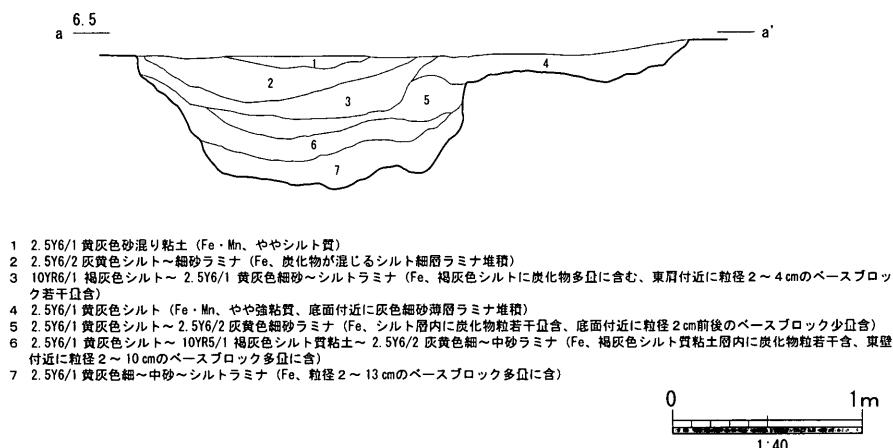
SD20(第209図)

IV a・b区で検出した。既述したようにSD19より西へ分岐する直線溝である。西端はSR01へ合流し、延長21.19mを確認した。SD19との合流部付近でやや蛇行するが、概ね流路方向N 63.475°Eに配される。幅1.24~1.50m、残存深0.36~0.49m、断面形は概ね逆台形を呈する。

埋土は、SD19と同様な堆積状況を呈し、上～最下層の4層に大別する。上・中層は改修溝の堆積層である。上層(1・2層)は、SD19上層に連続する溝廃絶後の自然堆積層である。中層(3層)は、グライ化した粘土層で、



第209図 SD20 土層断面図、出土遺物実測図



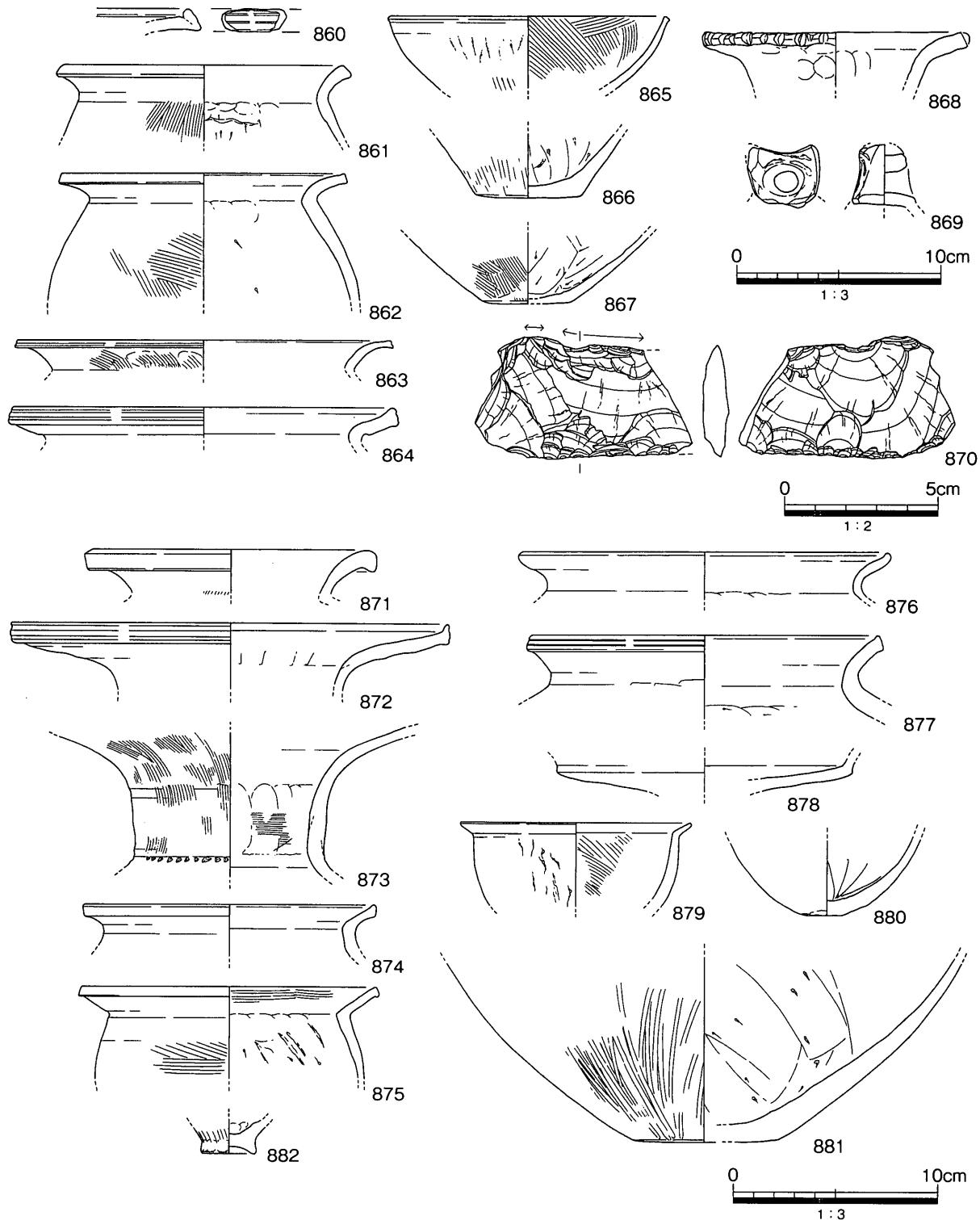
第210図 SD21 土層断面図測図

滞水下での堆積が想定される。SD19 中層相当層であるが、SD19 と異なり、流水の痕跡は乏しい。中層底面の標高は、6.10 m前後で概ね一定し、流下方向を特定できない。埋土の状況もそうした溝底面の形状を反映している可能性がある。おそらくはT字形に改修はしたが、SD19 が専ら使用されていたのに対して、SD20 は補助的な使用に限定されていた可能性が窺える。下層（4・5層）は、SD19 下層に相当し、改修前の溝機能停止後の自然堆積層である。西半部では、本層の堆積は改修により削取されている。最下層（6層）は、SD19 最下層に相当し、溝機能時の堆積層である。この最下層底面の標高は、西端部で 6.02 m、東端の SD19 との合流部付近で 5.95 mを測り、高低差より東へ流下するとみられる。おそらく SR01 より取水し、SD19・20 を介して北へ通水していたものと考えられる。

遺物は、上層より弥生土器、器種不詳の土師器や須恵器杯、土師質土器小皿・足釜、瓦器等の小片、サヌカイト剥片等が、中層より土師器や須恵器等の小片が、下層より土師器の小片やサヌカイト剥片がコンテナ約1/4箱出土した。遺物内容は SD19 と概ね共通する。

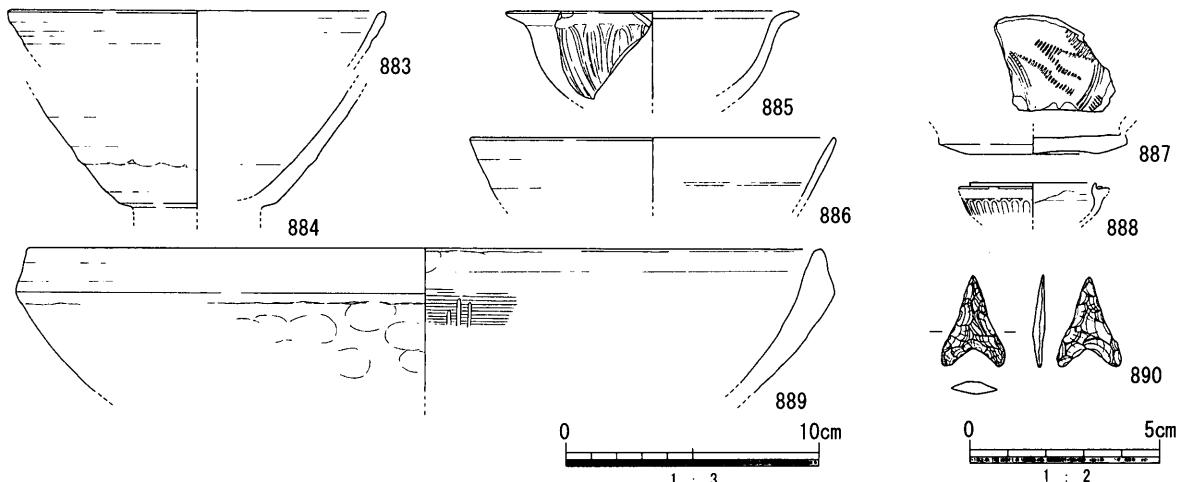
SD21（第211図）

IV b 区北西部で検出した直線状の溝状遺構である。北端は調査区外へ延び、南端は SR01 に切られ、延長約 6.61 mを確認した。検出面での観察によれば、明らかに本溝は SR01 に切られ、埋没時期に差があることは確実だが、SR01 からも SD21 とほぼ同時期の遺物が少量ながらも出土していることから、複数認められる SR01 の流路の内のいずれかと、取・排水する等の関係を有して、同時併存していた可能性も十分考えられる。流路方向は概ね N 43.363°Wに配され、幅 1.75 m前後、残存深 0.7 m前後、断面形は概ね逆台形を呈する。底面の標高は、南端部で 5.65 m前後、北端部で 5.57 m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下するとみられる。



第 211 図 SD21 出土遺物実測図

埋土は、7～8層に細分され、最上～最下層の5層に大別する。最上層（1層）は、やや砂の混じる粘土層で、溝廃絶後の自然堆積層と考えられる。上層（2・3層）は、細砂～シルトのラミナ堆積層で、流水下堆積の可能性が窺われる。埋土中に多量の炭化物粒を含む。中層（4・5層）以下、下層（6層）・最下層（7層）も流水下の堆積層である。いずれもシルト～粘土層がラミナ状に堆積していることから、断続的に通水していた可能性が窺える。また埋土の堆積状況等から、最上～上層、中～下層に2度の改修の可能性が考えられる。



第212図 IV区包含層出土遺物実測図

遺物は、最下層を中心に弥生土器壺・甕・高杯・鉢等の小片、サヌカイト剥片や碎片等がコンテナ1箱出土した。特に最上～中層から出土した土器類は小片化が進み、出土量も乏しい。最上層からは、少量ながら古代～中世の遺物が出土しており、溝の埋没が完了し平地化されるのは当該時期に下る可能性が考えられる。図化した遺物のうち、869の飯蛸壺は古代の遺物である。出土遺物より、古墳時代前期初頭に位置付けられる。

包含層

第212図に示した遺物は、IV区での遺構検出時等に出土した遺物である。I～III区同様、一部は旧耕作土に含まれていた遺物も含まれるが、大半は遺構より遊離した遺物であり、特にIV区での遺構の性格を補足するため必要と認められたものを図示した。883は、和泉型瓦器碗で、尾上Ⅲ—3期に所属する。884は、古瀬戸天目碗で、藤澤後期Ⅳ期に所属する可能性がある。885は、龍泉窯系青磁小碗で、大宰府分類Ⅲ—4類に所属する。886は、中国白磁碗で、太宰府分類Ⅷ類に所属する。887は、同安窯系青磁皿で、太宰府分類Ⅰ—2類に所属する。888は、中国青白磁合子である。890は、サヌカイト製石鏃である。

第5節 V区の調査

概要と基本土層

調査対象地西端、IV区とは町道で隔てられた西側の調査区をV区とした。対象地の面積は、約695.0m²である。東西走する町道を挟んで買地池に北接し、調査区中央部を池より取水した用水路が北流する。この用水路を境に調査区を東西に二分して、東側の調査区をV a区、西側をV b区として調査を進めた。調査前は、いずれの調査区も宅地として利用されており、特にV a区において、建物基礎による搅乱が顕著に認められた。

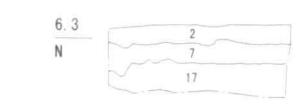
V区では、宅地化による盛土層が、現地表面下0.6m前後堆積（第213図1層、V a区では盛土層は図化していない）し、この盛土層下において、宅地化以前の耕作土層（同図2層）の堆積が確認された。耕土層上面の標高は、V a区で6.38m前後、V b区で6.50m前後と、東のV a区がやや低い。宅地化に伴う耕土層の削除等も考慮しなければならないが、残存するその層厚から見ても、宅地化以前の地形が東に傾斜していたことは間違いない。おそらくはIV区で検出されたSR01へむけて緩やかに下る、旧地形を反映していると考えて良い。耕作土層の下位には、1～3層に細分される旧耕土層や床土層等（同図4～7層）の水平堆積が確認された。これら旧耕土層はわずかながらも北に厚く棚田状に堆積する。

検出された遺構は、これら旧耕土層群の直下、黄褐色系粘土（同図17・18層、V a区では地下水位の影響によりグライ化し変色）を基盤土として掘り込まれている。遺構はすべて中世に属し、その他の時期の遺構は

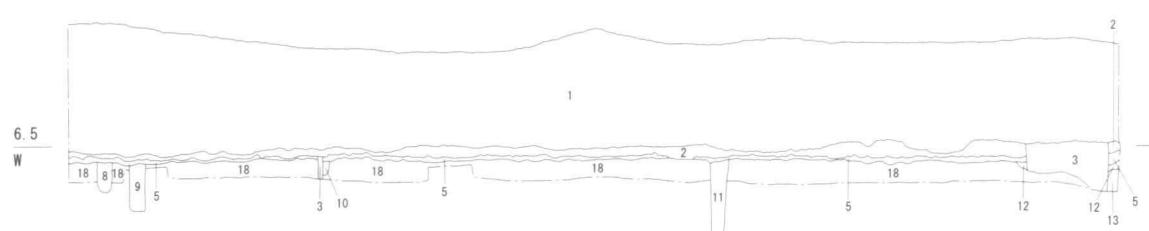
⑬ V a 区北壁



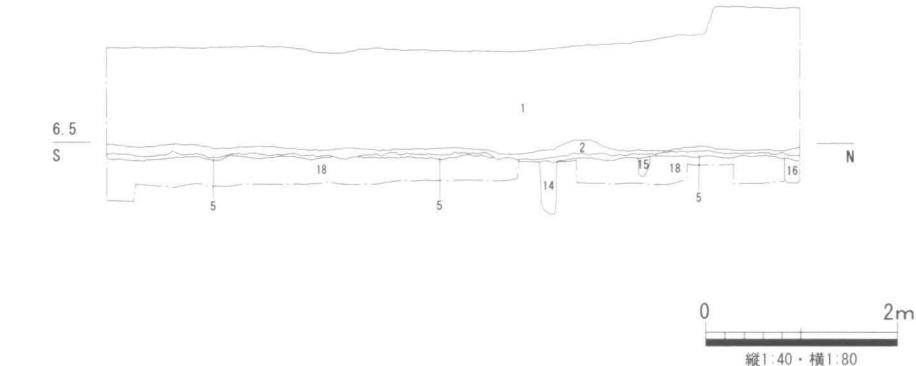
⑭ V a 区東壁



⑮ V b 区北壁



⑯ V b 区西壁



1 盛土（花崗土）

2 旧耕作土

3 挖乱

4 灰褐色粘性極細砂（床土、棕黃褐色粘性極細砂小ブロックを若干量含）

5 2.5Y5/6 黄褐色粘土（床土、Fe沈着）

6 淡黄灰茶色粘性極細砂（旧耕作土？淡黄色粘性極細砂小ブロックを多量に含）

7 明黄灰白色粘性極細砂（旧耕作土？淡黄色粘性極細砂小ブロックを若干量含）

8 2.5Y6/1 黄灰色粘土（SP3168 埋土、Fe・Mn、粒径 1～3cm のベースブロックやや多量に含）

9 5Y6/1 灰色細砂質土（SP3169 埋土、Fe、炭化物細粒少量含）

10 2.5Y6/1 黄灰色粘土（柱穴埋土、Fe・Mn、粒径 1～3cm のベースブロックやや多量に含）

11 2.5Y5/1 黄灰色粘土（SP3170 埋土、Fe・Mn、炭化物粒若干含、粒径 2～3cm のベースブロックやや多量に含）

12 SK77 上層

13 SK77 上層

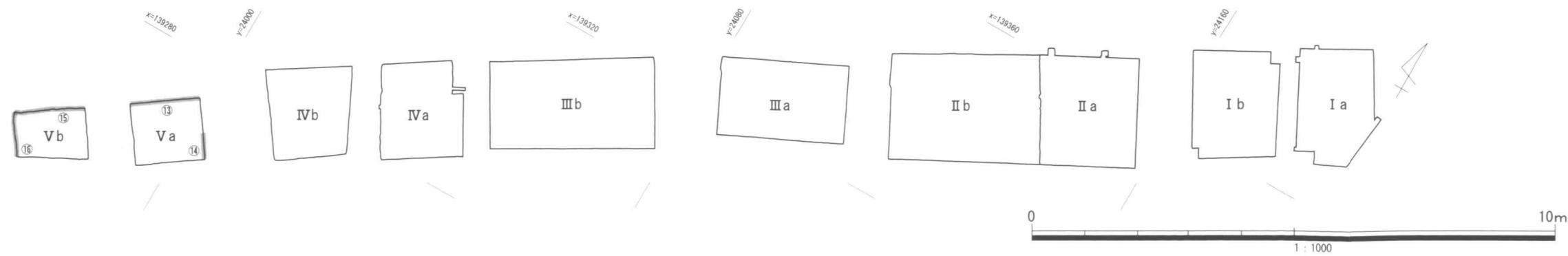
14 灰褐色粘土（SP3064 埋土、粒径 3cm 程度の濁棕黃色粘性極細砂ブロックやや多量に含）

15 淡灰褐色粘土（SP3166 埋土、粒径 1cm 程度の淡黄色粘性極細砂ブロックやや多量に含）

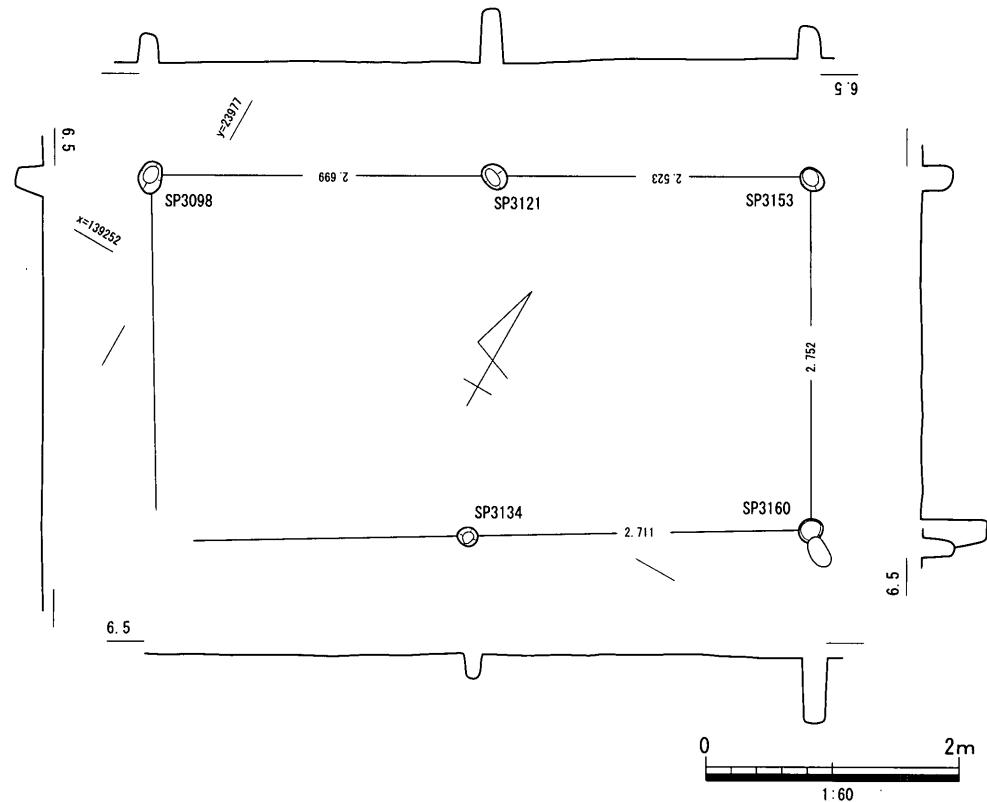
16 波反射粘土（SP3167 埋土）

17 濁青灰色粘性極細砂（地山、Fe沈着、グライ化）

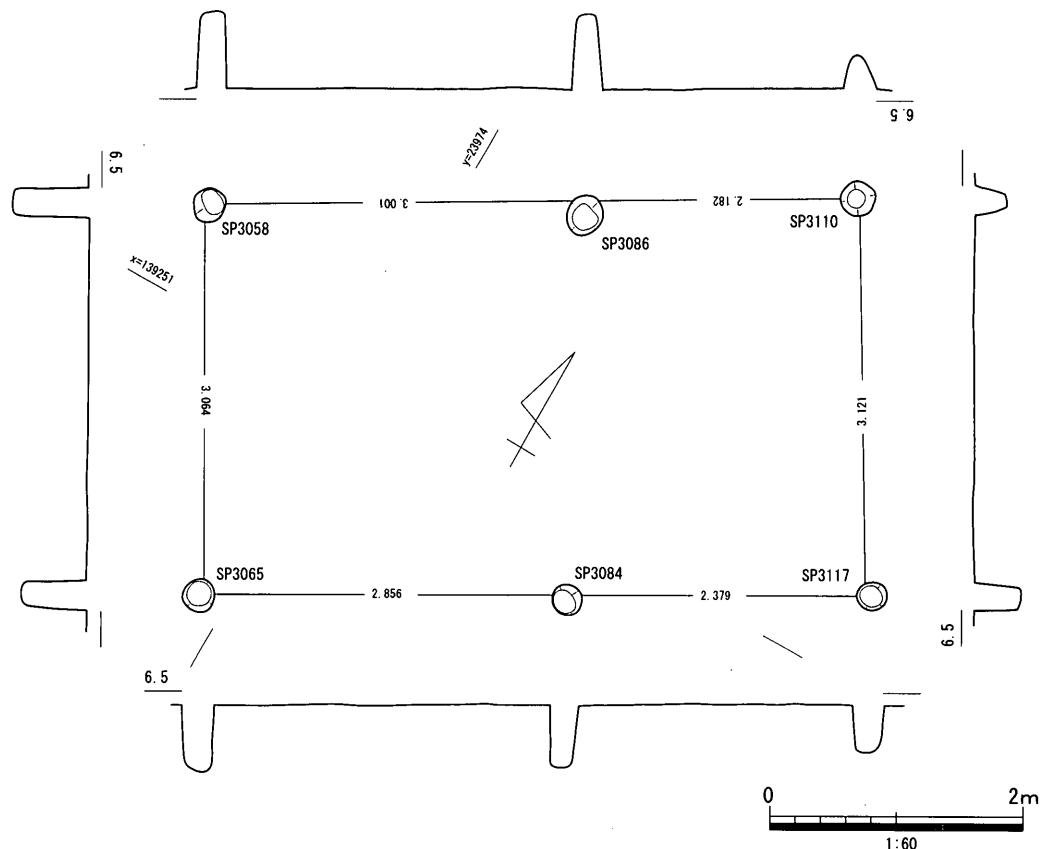
18 10YR7/6 明黄褐色粘土（Fe・Mn 多、やや粘質、粒径 1～2cm の小礫少量含）



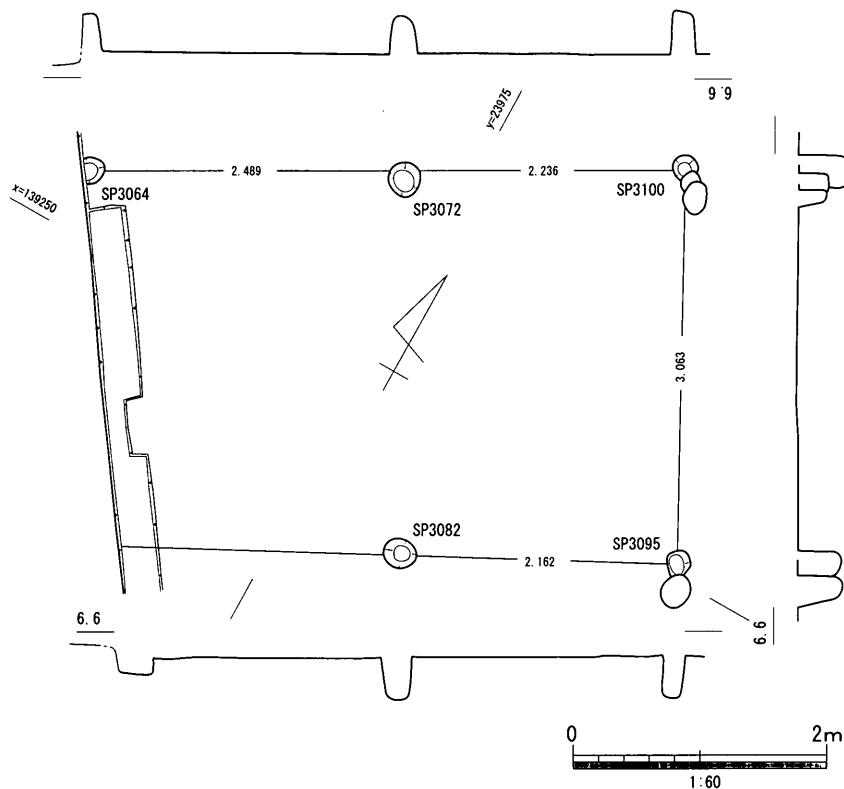
第 213 図 V 区調査区壁面土層断面図



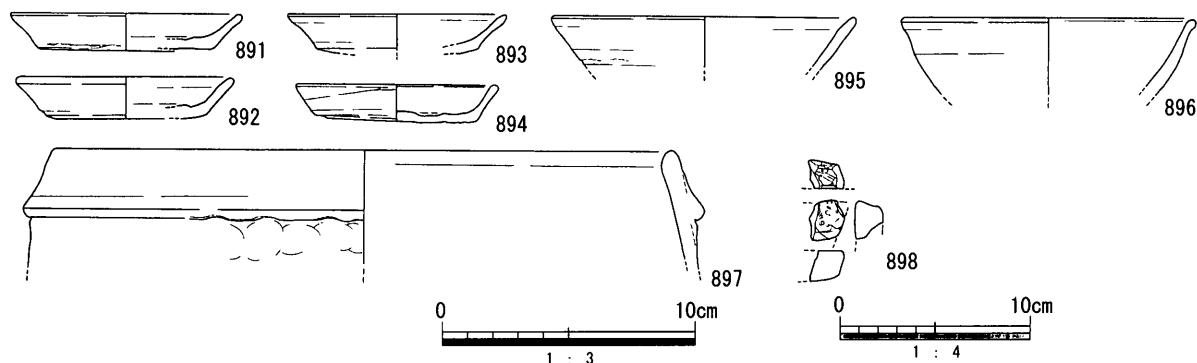
第214図 SB74平・断面図



第215図 SB75平・断面図



第 216 図 SB76 平・断面図



第 217 図 SB74・75・IV 区柱穴出土遺物実測図

確認されていない。V a 区では、柱穴跡 1 基が検出されたのみである。調査区北半に大きくひろがる搅乱等を考慮しても、やはり SR01 縁辺に位置するためか、居住域としての利用は積極的になされなかつた可能性が高いと判断された。V b 区では掘立柱建物跡 3 棟を伴う屋敷地の一部を検出した。

掘立柱建物跡

V 区で検出された掘立柱建物跡は 3 棟に留まる。柱穴跡は約 120 基を検出し、約 13% の柱穴跡について建物が復元された計算になる。調査区が面的に広く設定できなかつたため、建物の復元が制約されたことは否めない。さらに柱穴跡の拡がりは希薄であり、屋敷地内での土地利用の在り方を反映したものか、屋敷地としての継続的な利用がなされなかつた可能性が窺える。なお 3 棟の建物跡はそれぞれ重複して検出されたが、SB74・76 の 2 棟のみ、柱穴跡の切り合い関係より先後関係が確認された。

SB74 (第 214 図)

V b 区東半部で検出。柱穴跡の切り合い関係より、SB76 より後出する。また南西隅柱を欠くが、梁間北列

は均等に柱穴跡が確認されたことから、建物遺構として復元した。さらに東に1間程度延びる可能性もあるが、確認できていない。

遺物は、器種不詳の土師質土器等の小片が少量出土したのみである。時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難だが、周辺遺構との関係等から、概ね13世紀前半を中心とした時期に位置付けられる。

SB75（第215図）

Vb区西半部で検出。SE03と重複するが、柱穴跡は切り合っておらず、先後関係は不明である。梁間中央柱はいずれもやや東に偏って配される点に特徴がある。後述するSB76とほぼ同規模の建物で、建物主軸や柱穴配置も近似すること、重複して検出されたこと等から、両建物の先後関係は不詳だが、建て直された可能性も考えられる。

遺物は、器種不詳の土師質土器等の小片が少量出土したのみである。時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難だが、周辺遺構との関係等から、概ね13世紀前半を中心とした時期に位置付けられる。

SB76（第216図）

Vb区南西部で検出。SE03と重複し、切り合い関係よりSE03より後出する。遺物は、土師質土器等の小片が出土した。他の建物跡と比べて遺物量はやや多いが、小片化して良好な資料に乏しい。本建物跡も時期決定の根拠となる遺物に乏しく、詳細な時期を特定することは困難だが、周辺遺構との関係等から、概ね13世紀前半を中心とした時期に位置付けられる。

柱穴跡

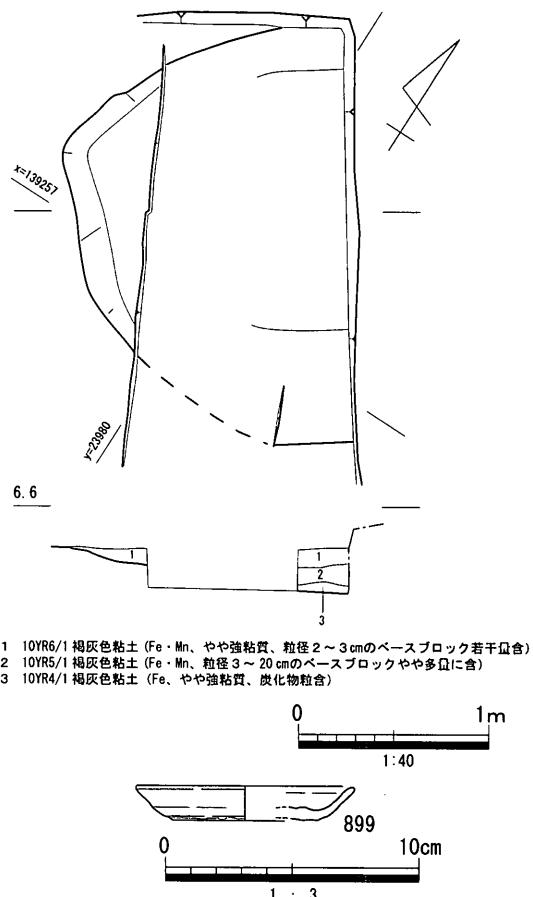
第217図には、Vb区を中心に検出された約120基の柱穴跡のうち、建物遺構を構成できなかった柱穴跡から出土した遺物について、当該屋敷地の時期決定や内容を知るうえで、特に必要と思われるものを選択して図示した。894は、SP3155より出土した土師質土器小皿で、ほぼ半裁されており、意図的に埋納した可能性も想定される。898は、流紋岩製砥石で、大きく破碎されており、旧状を留めない。

土坑

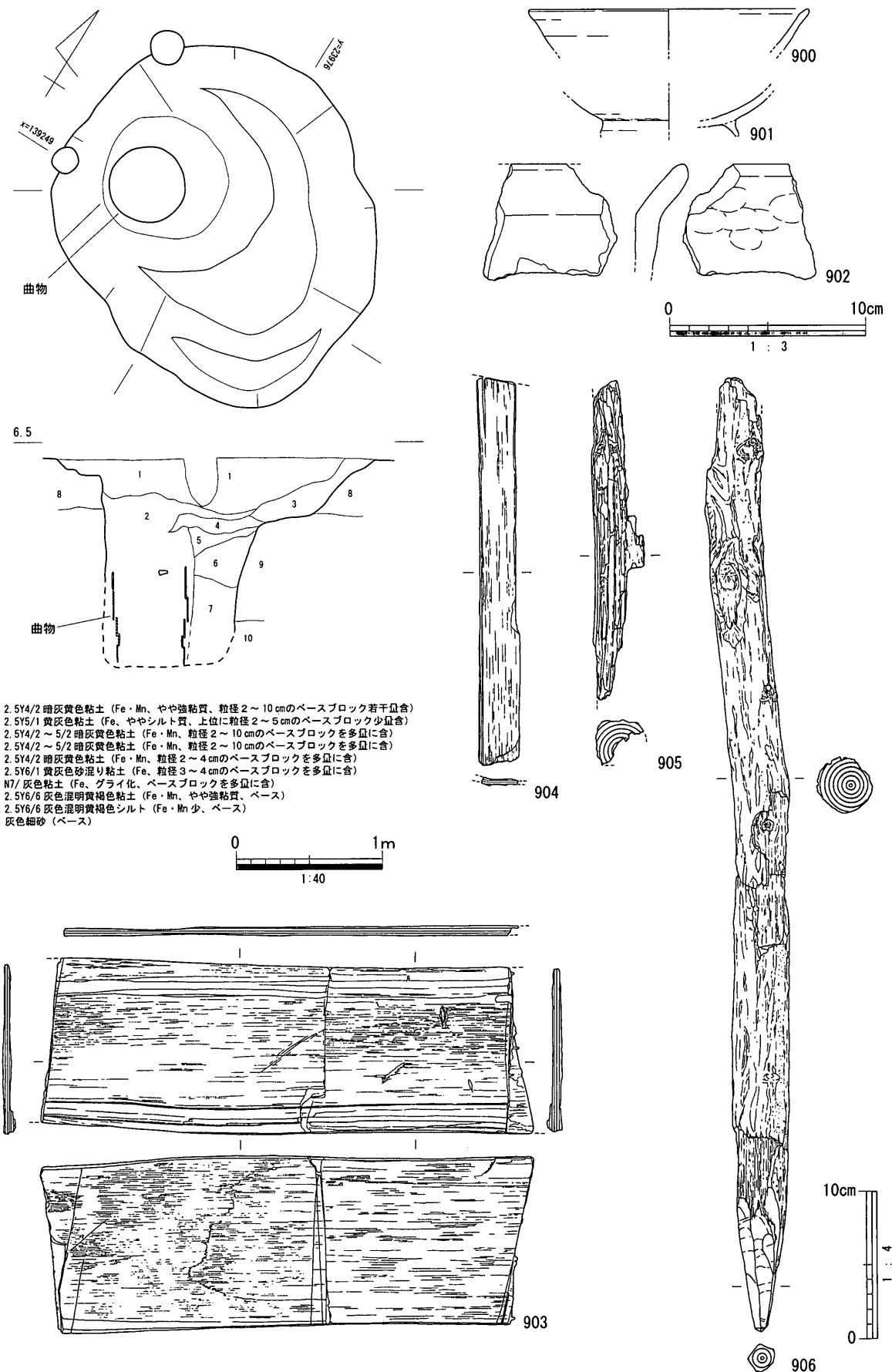
SK77（第218図）

Vb区北東隅部で検出。東端部は調査区外へ延び、全形は不詳である。中央部を試掘調査時のトレンチが南北に掘り込まれる。埋土は、3層に細分され、上・下2層に大別する。上層（1・2層）は、ブロック土が一定量含まれ、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。下層（3層）は、底面に薄く堆積した均質な粘土層で、遺構機能時もしくは廃絶後の自然堆積層と考えられる。

遺物は、上層を中心にコンテナ約1/4箱出土した。下層からの遺物が乏しく、土坑構築時期についての特定は困難である。上層より出土した遺物より、概ね14世紀前半に埋め戻されたと考えられる。

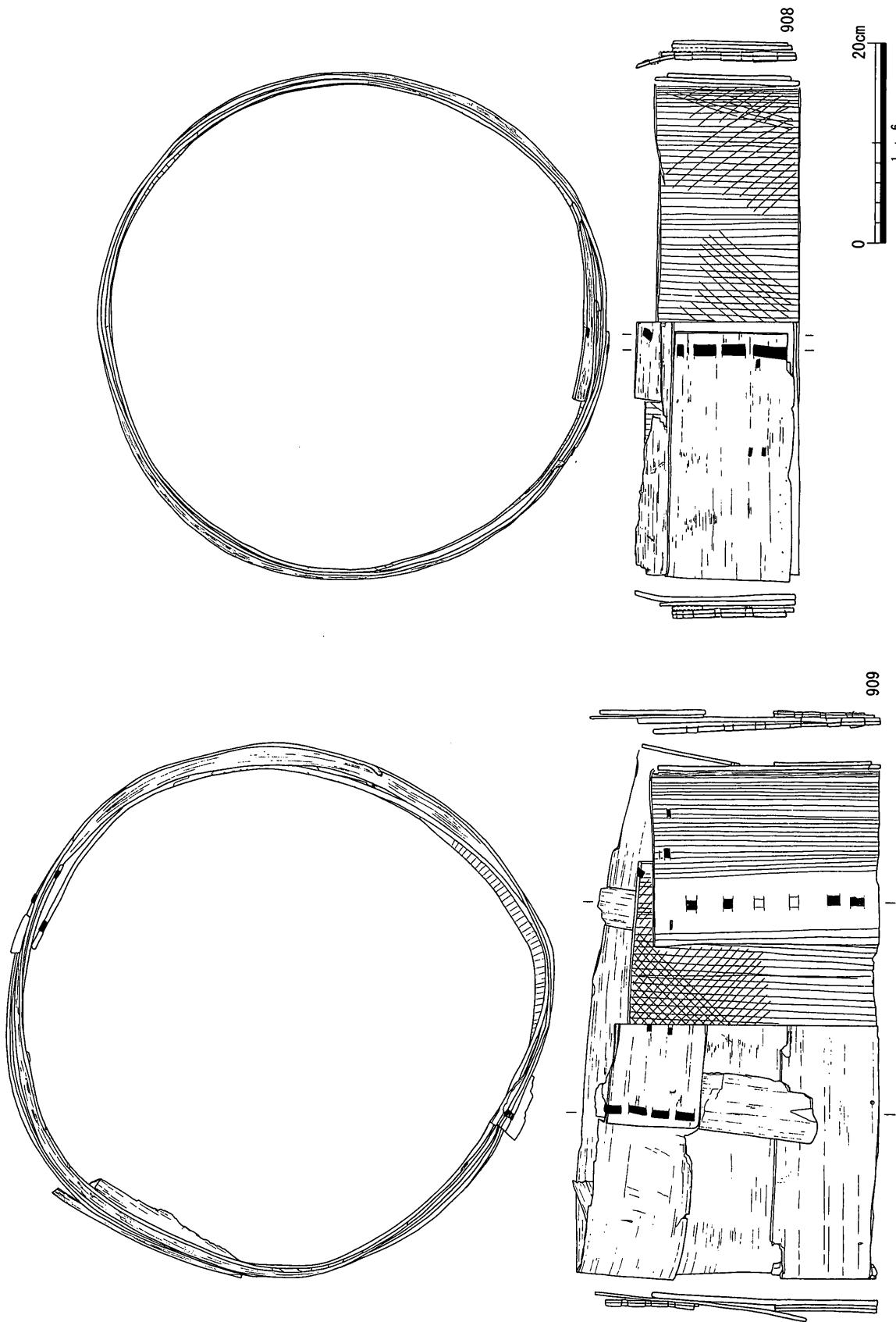


第218図 SK77 平・断面図、出土遺物実測図



第 219 図 SE03 平・断面図、出土遺物実測図 1

第 220 図 SE03 出土遺物実測図 2

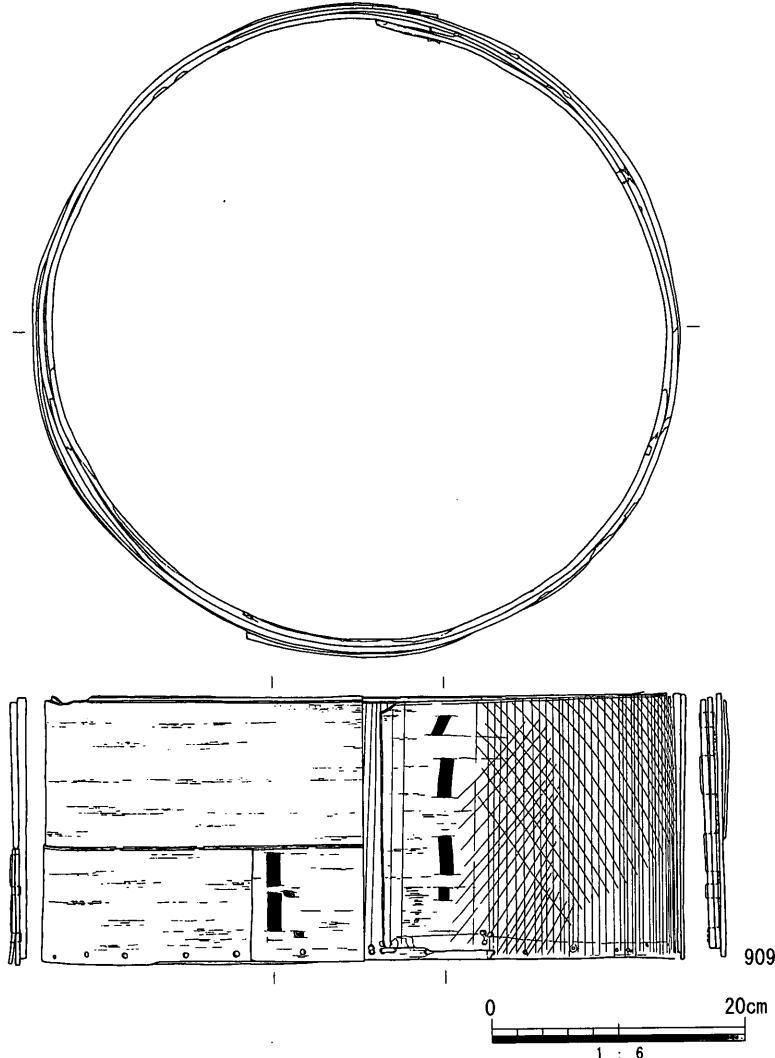


井戸跡

SE03 (第 219 ~ 221 図)

V b 区南西部で検出。SB76 と重複し、切り合い関係より SB76 より先行する。掘り方底部に、井戸枠として曲物を 3 段に積み重ねた井戸である。掘り方の残存深は 1.42 m あり、透水層である灰色細砂を 0.3 m 程度掘り抜いており、調査時にも多量の湧水が認められた。掘り方の平面形は、東及び南側に歪に広がる不整な橢円形を呈し、この部分にテラス面が付す。後述するような埋土の堆積状況等から判断して、井戸廃棄後に曲物上段を抜き取るために、最掘削された可能性も考えられる。

埋土は 7 層に細分され、上～最下層の 4 層に大別する。上層（1 層）は、ブロック土を含み、人為的に埋め戻された土壤である。既述したように、本層上面より SB76 を始め数基の柱穴跡が掘り込まれている。中層（3・4 層）もブロック土の混入が認められるが、東～南壁周縁より



第 221 図 SE03 出土遺物実測図 3

遺構中央部へ斜面堆積し、また後述する下層と互層状を呈していることから、おそらくは曲物を抜き取った後放棄され、下層の埋没過程で周壁上部の崩落あるいは最掘削土の流入等により再堆積した土壤と考えられる。下層（2 層）は、ややグライ化した粘土層が、上層下端より曲物内にかけて堆積しており、数層に細分可能であったが、曲物の取り上げを優先させたため、細かな分層は行えていない。井戸廃絶後に滞水状態下で堆積した土壤と考えられる。曲物や木杭の他、板材等の木製品が出土している。また既述した中層の堆積状況等から、井戸廃絶後一定期間放置されたことが窺え、おそらくは周辺の掘立柱建物の建設を契機として、上層により埋め戻された可能性が考えられる。最下層（5～7 層）は、主に掘り方東部を中心に確認された土壤で、曲物設置時の裏込め土である。出土した曲物上端より 0.3 m 程度上位まで堆積が確認され、上端は中層により歪に削られている。したがって、本来曲物は、さらに数段積み上げられていた可能性が高いと判断される。

遺物は、上層を中心に土師質土器等が土器類のみでコンテナ約 1/4 箱出土した。下層からの瓦器碗の出土が目立つのが特徴的である。899・900・902 が上層、901・903～909 が下層より出土した遺物である。900 は、和泉型瓦器碗で、尾上 III-2～3 期に所属する。901 は、吉備系土師質土器碗で、山本 III-1 b～2 期に所属する。903・904 は板材で、905 は角材とみられるが、腐食が著しい。906 は、曲物内部へ打ち込まれていた木杭である。本来は 2 本打ち込まれていたが、うち 1 本は腐食により取り上げができなかった。907～908 は曲物である。907 は、側板の上下に 2 段の帯が配され、側板と帯の間には 3 枚のヘギ板が挿入されている。側板と帯は、

ヘギ板によって固定され、木釘や樺は用いられていない。908・909は、側板と帯1段である。908の側板上端は折損しており、本来はもう少し高さがあったものと思われる。いずれも側板と帯の接合に、木釘や樺は用いられていない。また、内面には斜格子状のケビキが認められる。909の下端には、底板を固定する釘穴が穿たれる。打合せは、907・909は右前、908は左前としたが、転用品であるため、908については断定できない。遺物はいずれも小片化しており、詳細な時期を決定することは困難である。しかし、各層より出土した遺物に顕著な時期差は認められず、概ね12世紀末から13世紀前半期の中で、構築及び廃絶されたと考えられる。

第IV章 自然科学的分析

第1節 庄八尺遺跡の花粉化石群集

新山雅広（パレオ・ラボ）

1. はじめに

庄八尺遺跡は、多度津町に所在する弥生時代の集落跡および中世の屋敷地跡である。本遺跡では、これまでの発掘調査により、鎌倉時代～室町時代の柱跡や条里型地割に関連すると考えられる溝跡が検出された。ここでは、弥生時代後期～中世後半の古植生および古環境を明らかにする一端として、花粉化石群集の検討を行った。

2. 試料

花粉化石群集の検討は、以下に示す試料番号1～8の合計8試料について行った。

試料1：中世後半のIIa区、SK35下層より採取された。褐灰色粘性極細砂。

試料2：古代のIIb区、SD03、f断面3d層より採取された。褐灰色～黒褐色粘土。

試料3：弥生時代後期のIIb区、SD12、a断面4層より採取された。褐灰色粘土。

試料4：弥生時代後期のIIb区、SD12、a断面8層より採取された。褐灰色粘土で褐鉄鉱が認められる。

試料5：中世前半のIIIa区、SK52下層より採取された。黄灰色粘土。

試料6：中世後半のIIIb区、SE02、4層より採取された。黄灰色粘土。

試料7：古代のIVa区、SR01、e断面5層より採取された。褐灰色～黒褐色粘土。

試料8：古代のIVa区、SR01、e断面6層より採取された。褐灰色粘土。

3. 方法

花粉化石の抽出は、試料約2～3gを10%水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトトリシス処理（冰酢酸による脱水、濃硫酸1に対して無水酢酸9の混液で湯煎約5分）の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離（臭化亜鉛を比重2.1に調整）による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。その計数結果をもとにして、各分類群の出現率を樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉およびシダ植物胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。ただし、クワ科、マメ科は樹木と草本のいずれをも含む分類群であるが、区別が困難なため、ここでは便宜的に草本花粉に含めた。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

4. 花粉化石群集の記載

全試料で同定された分類群数は、樹木花粉25、草本花粉25、形態分類で示したシダ植物胞子2である。以下に、時代ごとに各試料の花粉化石群集を記載する。

弥生時代後期（試料3、4）：十分な花粉化石が産出せず、花粉化石分布図として示すことができなかった。試料3は、樹木花粉ではアカガシ亜属、スギ属が比較的目立ち、モミ属なども産出した。草本花粉は、イネ科、ヨモギ属などが産出した。

古代（試料2、7、8）：樹木花粉の占める割合は、50～60%前後である。その中で、アカガシ亜属が30～40%前後で最も高率であり、ツガ属、スギ属、コナラ亜属、シイノキ属も10%前後で比較的高率である。他に、

和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8
樹木									
モミ属	<i>Abies</i>	1	1	2	-	-	1	3	4
ツガ属	<i>Tsuga</i>	3	15	2	-	-	2	13	6
マツ属複維管束亞属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	1	2	-	-	-	8	4	10
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	6	9	1	-	-	7	10	6
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	-	1	-	-	-	-	5	1
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	4	17	5	-	-	1	25	7
イチイ科—イスガヤ科—ヒノキ科	T. - C.	1	1	-	-	-	1	14	8
ヤマモモ属	<i>Myrica</i>	-	2	-	-	-	-	1	-
サワグルミ属—クルミ属	<i>Pterocarya-Juglans</i>	-	-	-	-	-	1	-	-
クマシテ属—アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	2	6	-	-	-	1	6	2
ハシバミ属	<i>Corylus</i>	-	1	-	-	-	-	-	-
カバノキ属	<i>Betula</i>	4	1	-	-	-	2	5	3
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	2	4	-	-	-	1	-	-
ブナ属	<i>Fagus</i>	-	1	-	-	-	-	1	1
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	4	16	2	1	-	8	13	13
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	13	42	10	1	-	5	80	38
クリ属	<i>Castanea</i>	-	5	1	-	-	-	2	-
シイノキ属	<i>Castanopsis</i>	2	9	-	-	-	-	23	9
ニレ属—ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	-	2	1	-	-	-	5	-
エノキ属—ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	-	-	-	-	-	-	2	-
ニシキギ属	<i>Euonymus</i>	-	-	-	-	-	2	-	-
ブドウ属	<i>Vitis</i>	-	-	-	-	-	-	1	-
サカキ属—ヒサカキ属	<i>Cleyera-Eurya</i>	-	-	-	-	-	-	2	-
イボタノキ属	<i>Ligustrum</i>	7	-	-	-	-	-	-	-
スイカズラ属	<i>Lonicera</i>	1	-	-	-	-	-	-	-
草本									
ガマ属	<i>Typha</i>	1	-	-	-	-	-	-	-
ガマ属—ミクリ属	<i>Typha - Sparganium</i>	-	5	-	-	-	-	-	-
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	-	1	-	-	-	-	-	-
イネ科	Gramineae	164	51	5	1	7	68	97	80
カヤツリグサ科	Cyperaceae	3	1	-	-	-	17	11	6
イボクサ属	<i>Aneilema</i>	-	-	-	-	-	-	2	-
ミズアオイ属	<i>Monochoria</i>	1	-	-	-	-	-	1	4
クワ科	Moraceae	-	-	-	-	-	2	-	-
ミチヤナギ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Avicularia</i>	3	-	-	-	-	1	-	-
サナエタデ節—ウナギツカミ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	-	2	1	-	-	-	-	1
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	-	-	-	-	-	2	-	-
アカザ科—ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	10	-	-	-	-	8	-	1
ナデンシコ科	Caryophyllaceae	-	-	-	-	1	3	-	-
キンポウゲ科	Ranunculaceae	-	-	-	-	-	1	-	-
アブラナ科	Cruciferae	106	1	1	-	-	14	-	-
マメ科	Leguminosae	-	-	-	-	-	1	1	1
キカシグサ属	<i>Rotala</i>	1	-	-	-	-	1	-	-
アリノトウグサ属	<i>Haloragis</i>	-	-	-	-	-	-	-	1
セリ科	Umbelliferae	1	1	-	-	-	-	4	3
ガガブタ	<i>Nymphoides indica</i> O.Kuntze.	-	-	-	-	-	-	1	-
シソ科	Labiatae	1	-	-	-	-	-	-	-
オオバコ属	<i>Plantago</i>	-	-	-	-	-	-	-	1
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	8	17	8	-	-	13	36	17
他のキク亜科	other Tubuliflorae	1	5	1	-	-	2	3	-
タンボボ亜科	Liguliflorae	8	1	-	-	-	6	1	1
シダ植物									
単条型胞子	Monolete spore	1	-	1	-	-	2	1	-
三条型胞子	Trilete spore	2	2	-	1	-	4	2	3
樹木花粉	Arboreal pollen	51	135	24	2	0	40	215	108
草本花粉	Nonarboreal pollen	308	85	16	1	8	139	157	116
シダ植物胞子	Spores	3	2	1	1	0	6	3	3
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	362	222	41	4	8	185	375	227
不明花粉	Unknown pollen	9	7	4	1	0	12	8	10

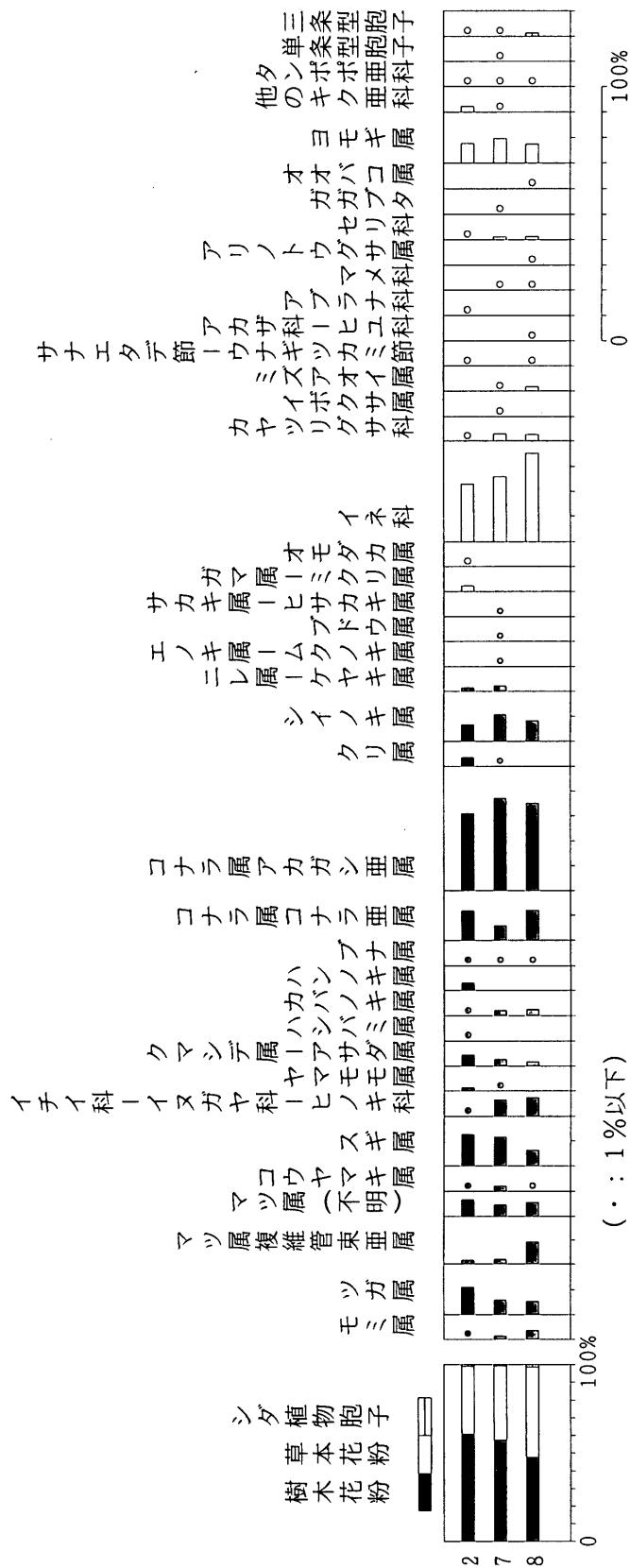
T. - C. は Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

第2表 花粉化石産出一覧表

試料1 : II a 区 SK35 下層 試料2 : II b 区 SD03 f 断面3d層 試料3 : II b 区 SD12 a 断面4層

試料4 : II b 区 SD12 a 断面8層 試料5 : III a 区 SK52 下層 試料6 : III b 区 SE02 4層

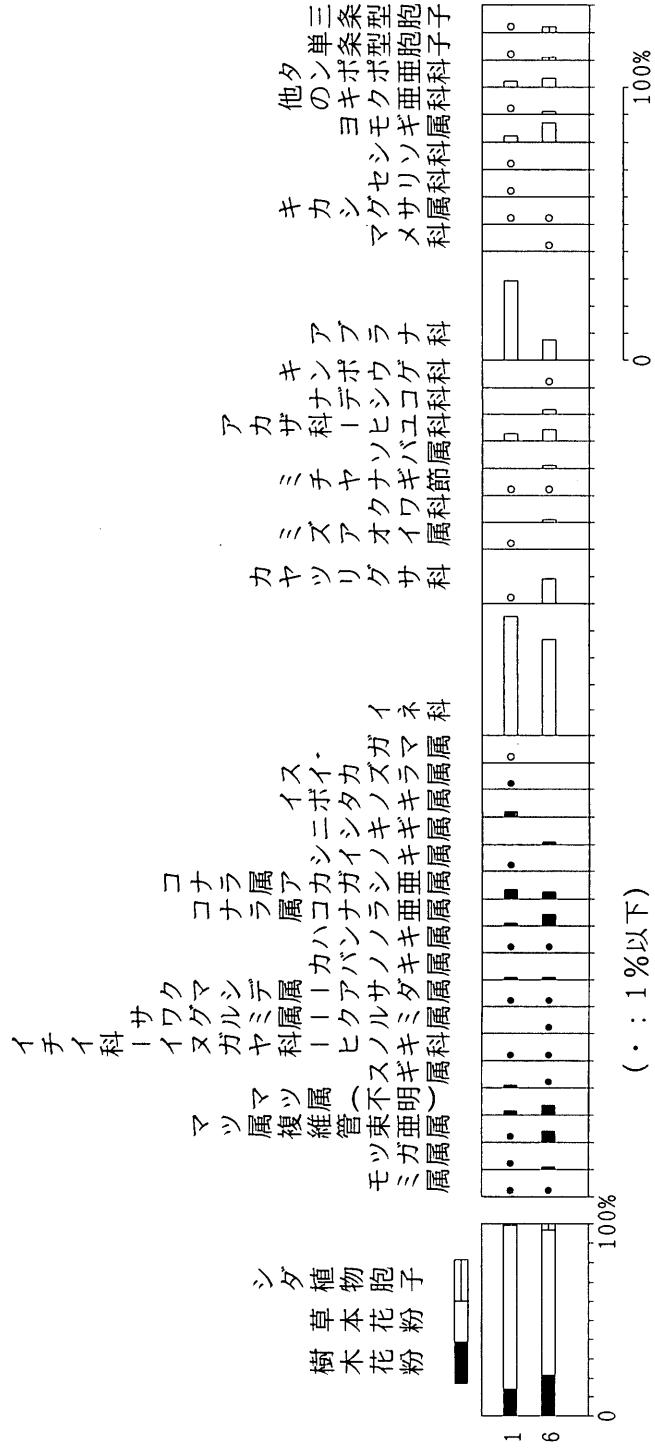
試料7 : IV a 区 SR01 e 断面5層 試料8 : SR01 e 断面6層



(樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は総花粉・胞子数を基数として百分率で算出した)

第222図 古代試料の花粉化石分布図

試料2：II b区 SD03 f断面3d層 試料7：IV a区 SR01 e断面5層 試料8：IV a区 SR01 e断面6層



(出現率は総花粉・胞子数を基数として百分率で算出した)

第223図 中世後半試料の花粉化石分布図

試料1: IIa区SK35下層 試料6: IIIb区SE024層

マツ属(複維管束亜属と不明)、イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科もやや目立ち、モミ属、コウヤマキ属、ヤマモモ属、クマシデ属ーアサダ属、カバノキ属、クリ属などが低率で出現する。草本花粉は、イネ科が25~35%前後で最も高率であり、次いでヨモギ属も10%弱で出現する。他は、いずれも低率であるが、カヤツリグサ科、セリ科、タンポポ亜科が全試料で出現し、ガマ属ーミクリ属、オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属、アリノトウグサ属、ガガブタ、オオバコ属などが一部試料で出現する。

中世前半(試料5):イネ科、ナデシコ科が僅かに産出したのみであった。

中世後半(試料1、6):樹木花粉総数は少ないが、草本花粉数は多いため、花粉・胞子総数を基数とし、参考までに図示した。樹木花粉は、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ属、カバノキ属、コナラ亜属、アカガシ亜属などが産出した。草本花粉は、イネ科が40%前後で最も高率であり、アブラナ科も試料1では30%近くを占める。他は、カヤツリグサ科、アカザ科ーヒユ科、ヨモギ属、タンポポ亜科が比較的目立ち、ガマ属、ミズアオイ属、ソバ属、キカシグサ属などが低率で出現する。

5. 考察

[弥生時代後期(試料3、4)の古植生および古環境]

十分な花粉化石が産出せず、古植生の推定は困難である。モミ属、スギ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、イネ科、ヨモギ属などが当時の植物相であったと言うに止めたい。なお、花粉化石は水成堆積物であれば良好に保存されるが、土壤のような酸化条件下では、化学的風化により、分解・消失し、更にバクテリアによる蝕害も受ける。検討した試料は、花粉化石が保存されていないことから、少なくとも安定した滞水環境で堆積したものとは考え難い。従って、SD12埋土は、乾燥ないし乾湿を繰り返すような花粉化石の残り辛い堆積環境であったことが推定される。

[古代(試料2、7、8)の古植生および古環境]

アカガシ亜属を主体にシイノキ属、ヤマモモ属などを交えた照葉樹林が優勢であったと推定される。針葉樹としては、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ属、イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科、落葉としてはコナラ亜属も主要素であっただろう。SD03、SR01内あるいは近接した場所は、抽水植物のガマ属ーミクリ属、オモダカ属、ミズアオイ属などが生育する水位の低い湿地ないし水溜りのような環境であったと推定され、SR01の5層堆積期は、池や沼に生える浮葉植物のガガブタの産出から幾分水深のある水域の存在が推定される。また、オモダカ属、ミズアオイ属は水田にしばしば雑草として生育する分類群であり、イネ科の高率出現も考慮すれば、水田が存在していた可能性も考えられる。付近には、そのような湿地的環境のみならず、ヨモギ属をはじめアリノトウグサ属、オオバコ属、タンポポ亜科などが生育する畑地ないし路傍のような幾分乾き気味の場所も存在していたであろう。なお、高松市に所在する居石遺跡(鈴木、1995)では、古墳時代後期~古代において照葉樹林が優勢であり、先述の温帯性針葉樹やコナラ亜属が主要素であったことが推定されている。また、水田稻作が開始されていたことも推定されており、本遺跡も同様な結果が示されたと言える。

[中世前半(試料5)の古植生および古環境]

古植生の推定はできなかった。SK52下層は、安定した滞水環境ではなく、乾燥ないし乾湿を繰り返すような堆積環境であったことが推定される。

[中世後半(試料1、6)の古植生および古環境]

樹木花粉総数が少ないため、森林植生の推定は困難である。ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ属、カバノキ属、コナラ亜属、アカガシ亜属などを含む植物相であったと言うに止めたい。SK35内ないし近接した場所は、ガマ属、ミズアオイ属、キカシグサ属が生育する水田ないし水田に類似した水位の低い湿地的環境であったと推定される。突出するアブラナ科は、有用植物を多く含む分類群であり、アブラナ(ナタネ)などが栽培されていた可能性が考えられる。SE02内ないし近接した場所は、キカシグサ属が生育する水田ないし水田に類似した水位の低い湿地的環境であったと推定される。また、ソバ属の産出から、ソバ栽培が行われていたと考えられ、

アブラナ科の栽培の可能性も考えられる。そのような栽培地や路傍のような環境には、アカザ科—ヒユ科、ヨモギ属、タンポポ亜科などが雑草として生育していたであろう。なお、ソバやアブラナ科の栽培が始まったのは、先述の居石遺跡では、ソバが古墳時代後期～古代、アブラナ科が中世～近世と推定されている。

6. おわりに

弥生時代後期の SD12 は、乾燥ないし乾湿を繰り返すような堆積環境であったと考えられた。

古代には、アカガシ亜属を主体とした照葉樹林が優勢であり、針葉樹のツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ属、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、落葉のコナラ亜属も主要素であった。SD03、SR01 内あるいは近接した場所は、水田ないし水田に類似した水位の低い湿地的環境であり、SR01 の 5 層堆積期は、幾分水深のある水域の存在が推定された。

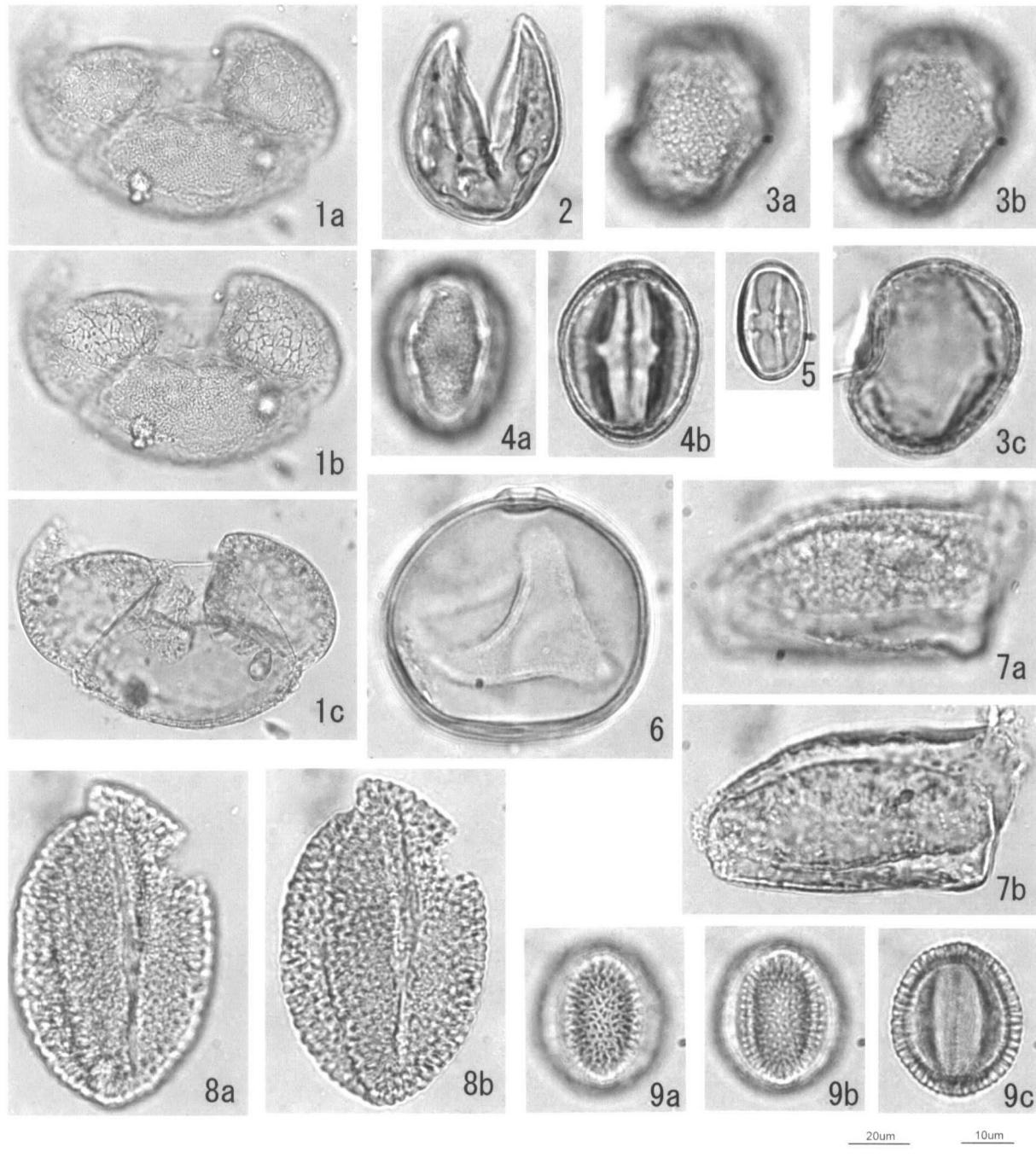
中世前半の SK52 は、乾燥ないし乾湿を繰り返すような堆積環境であったと考えられた。

中世後半の森林は、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ属、カバノキ属、コナラ亜属、アカガシ亜属などを含む植物相であった。SK35、SE02 内ないし近接した場所は、水田ないし水田に類似した水位の低い湿地的環境であったと推定され、アブラナ科が栽培されていた可能性が考えられた。また、SE02 付近ではソバ栽培が行われていたと考えられた。

引用文献

鈴木 茂 (1995) 居石遺跡の花粉化石. 一般国道 11 号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第七冊, 173 – 191. 高松市教育委員会・建設省四国地方建設局.

図版1 産出した花粉化石



(scale bar 20 μ m : 1 10 μ m : 2~9)

1. マツ属複維管束亞属、試料6、PAL.MN 2351

2. スギ属、試料7、PAL.MN 2349

3. コナラ属コナラ亜属、試料8、PAL.MN 2352

4. コナラ属アカガシ亜属、試料7、PAL.MN 2347

5. シイノキ属、試料7、PAL.MN 2348

6. イネ科、試料8、PAL.MN 2350

7. ミズアオイ属、試料8、PAL.MN 2353

8. ソバ属、試料6、PAL.MN 2355

9. アブラナ科、試料1、PAL.MN 2354

第2節 香川県庄八尺遺跡における樹種同定

株式会社古環境研究所

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、庄八尺遺跡より出土した柱材 15 点、角材 1 点、板材 1 点、杭 1 点の合計 18 点である。

3. 方法

カミソリを用いて試料の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって 40 ~ 1000 倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

表 1 に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

モミ属 *Abies* マツ科 図版 1

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的緩やかである。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で 1 分野に 1 ~ 4 個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、じゅず状末端壁を有する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりモミ属に同定される。モミ属は日本に 5 種が自生する。そのうち、ウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの 4 種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常緑高木で高さ 45 m、径 1.5 m に達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

ツガ属 *Tsuga* マツ科 図版 2

仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞及び放射仮道管から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急である。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、スギ型でややヒノキ型の傾向を示し、1 分野に 2 ~ 4 個存在する。放射仮道管が存在し、その壁には小型の有縁壁孔が存在する。わずかではあるが、樹脂細胞が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりツガ属に同定される。ツガには、ツガ、コメツガがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で通常高さ 20 ~ 25 m、径 50 ~ 80 cm である。材は耐朽性、保存性ともに中庸で、建築、器具、土木、薪炭などに用いられる。

マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diploxylon* マツ科 図版 3・4

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹

材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質よりマツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属には、クロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する。常緑高木である。材は水湿によく耐え、広く用いられる。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科 図版5

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭であり、耐朽性、耐湿性ともに高い。良材であり、建築など広く用いられる。

コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Aegilops* ブナ科 図版6

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靭で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

5. 所見

同定の結果、庄八尺遺跡出土木材のうち、柱材15点はマツ属複維管束亜属10点、ツガ属4点、ヒノキ1点であった。角材1点はヒノキ、板材1点はモミ属、杭1点はコナラ属クヌギ節であった。

マツ属複維管束亜属には、土壤条件の悪い岩山に生育し二次林も形成するアカマツが含まれ、水湿に良く耐える材である。モミ属は温帯性のモミと考えられる。適潤で深層な肥沃土を好み、主に谷間や緩傾斜地に生育する。材は耐久性、保存性は低いが、軽軟なことから加工が容易な木材である。ツガ属はやや瘦せた乾燥地を好み、主に尾根筋あるいは尾根に接する斜面に生育する針葉樹である。材は耐朽性、保存性は中庸で、切削、加工はあまり容易でない。ヒノキはやや傾斜のある適潤地を好みが、乾燥にも耐え尾根筋、急傾斜地、岩盤上にも生育する。ヒノキの木材は、大きな材がどれ良材である。コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、乾燥した台地や丘陵地に生育し二次林要素もある。概して弾力に富んだ強い材と言える。

モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、ヒノキは温帯を中心に広く分布する針葉樹である。コナラ属クヌギ節は温帯に広く分布する落葉広葉樹である。とくに二次林要素であるマツ属複維管束亜属が多く、当時二次林が成立していたと推定される。以上から庄八尺遺跡の木材は、当時遺跡周辺にも生育し、比較的容易に用いることができたと推定される。

参考文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.20-48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.49-100.

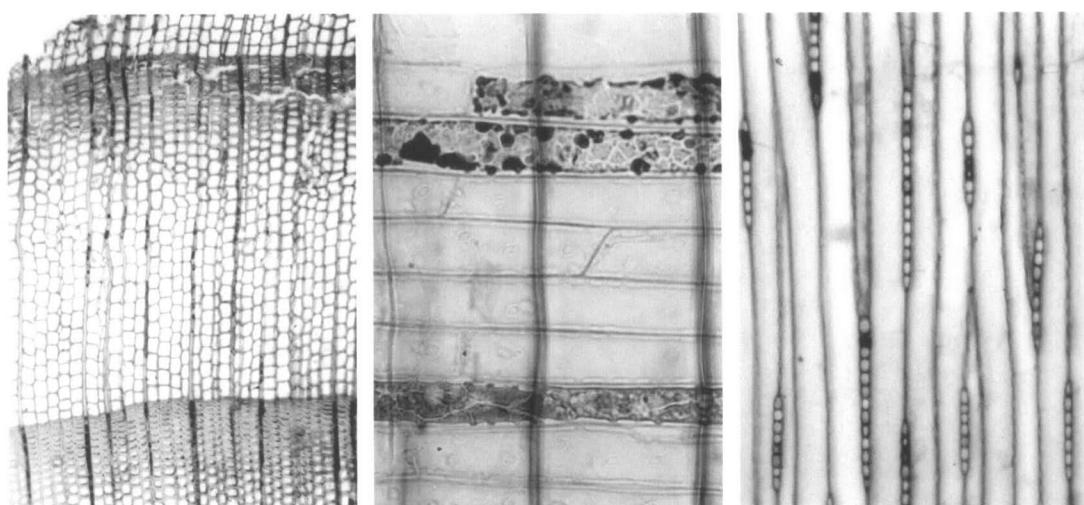
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p. 296

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第1号，植生史研究会，p. 242

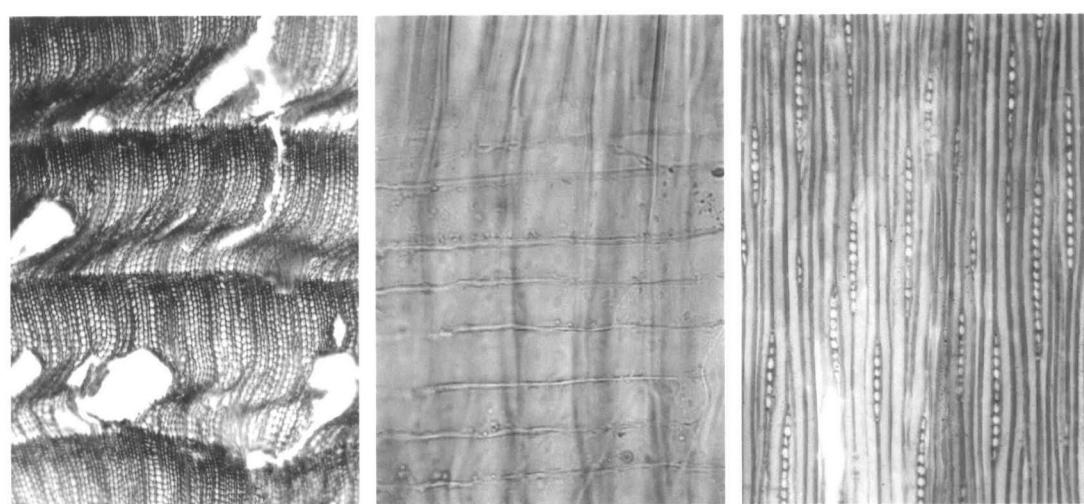
試料番号	調査区	遺構名	層位	器種	備考 (報文番号)	結果 (学名／和名)
1	II a 区	SP953		柱材	223	Pinus subgen. Diploxylon マツ属複維管束亞属
2	II a 区	SP1326		柱材	214	Pinus subgen. Diploxylon マツ属複維管束亞属
3	II a 区	SP1359		柱材	275	Pinus subgen. Diploxylon マツ属複維管束亞属
5	II a 区	SP1503		柱材	270	Pinus subgen. Diploxylon マツ属複維管束亞属
6	II a 区	SP1909		柱材	277	Pinus subgen. Diploxylon マツ属複維管束亞属
7	II a 区	SP1071		柱材	273	Pinus subgen. Diploxylon マツ属複維管束亞属
8	II b 区	SP2086		柱材	241	Tsuga ソガ属
9	II b 区	SP2141		柱材	235	Tsuga ソガ属
10	II b 区	SP2325		柱材	274	Tsuga ソガ属
11	II b 区	SP2292		柱材	227	Pinus subgen. Diploxylon マツ属複維管束亞属
12	II b 区	SP2295		柱材	228	Pinus subgen. Diploxylon マツ属複維管束亞属
13	II b 区	SP2363		柱材	234	Tsuga ソガ属
14	II b 区	SP2370		柱材	276	Pinus subgen. Diploxylon マツ属複維管束亞属
15	II b 区	SP2374		柱材	272	Pinus subgen. Diploxylon マツ属複維管束亞属
17	III a 区	SP2655		柱材	533	Chamaecyparis obtusa Endl. ヒノキ
18	V b 区	SE03	2層	角材	905	Chamaecyparis obtusa Endl. ヒノキ
19	V b 区	SE03	2層	板材	903	Abies モミ属
20	V b 区	SE03	2層	杭	906	Quercus sect. Aegilops コナラ属クヌギ節

第3表 庄八尺遺跡における樹種同定結果

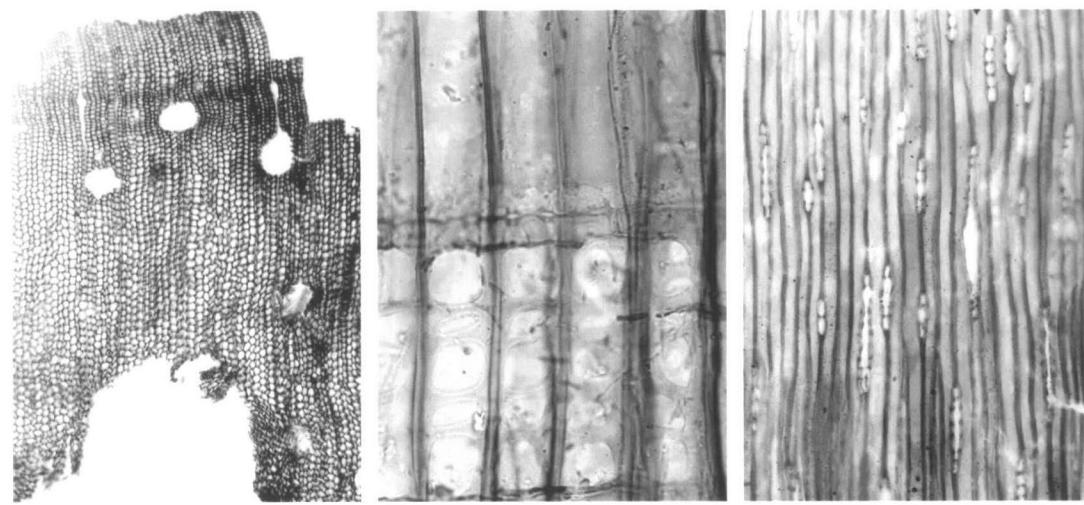
図版2 庄八尺遺跡の木材 I



横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.05mm 接線断面 : 0.2mm
1. 19 V区-② SK54 北半 2層 板材 1036 モミ属

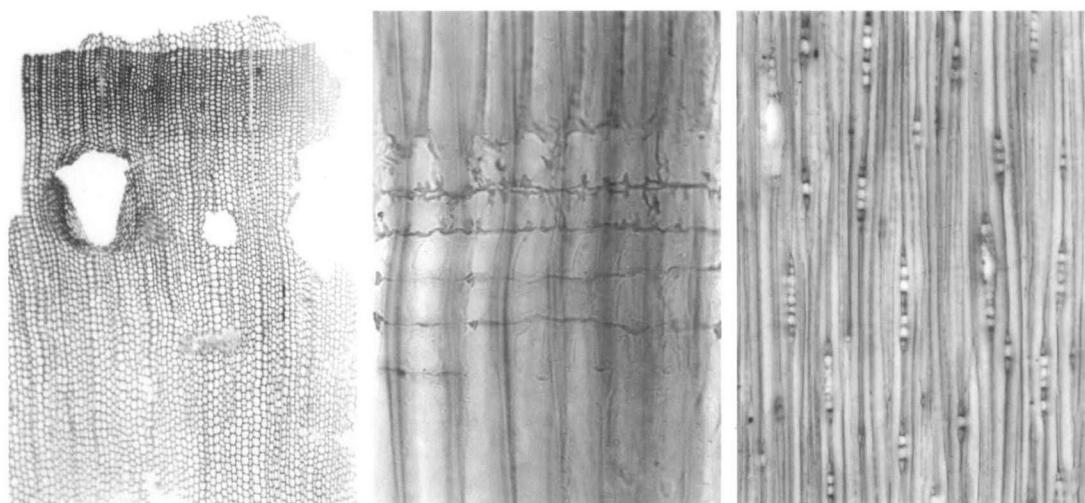


横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.05mm 接線断面 : 0.2mm
2. 8 II区-② SP2086 柱材 1022 ツガ属

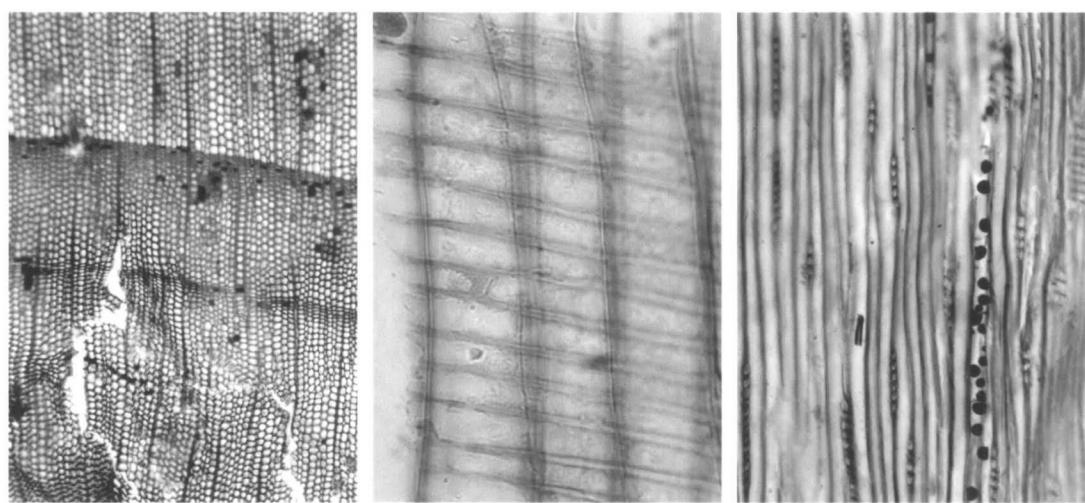


横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.05mm 接線断面 : 0.2mm
3. 12 II区-② SP2295 柱材 1026 マツ属複維管束亞属

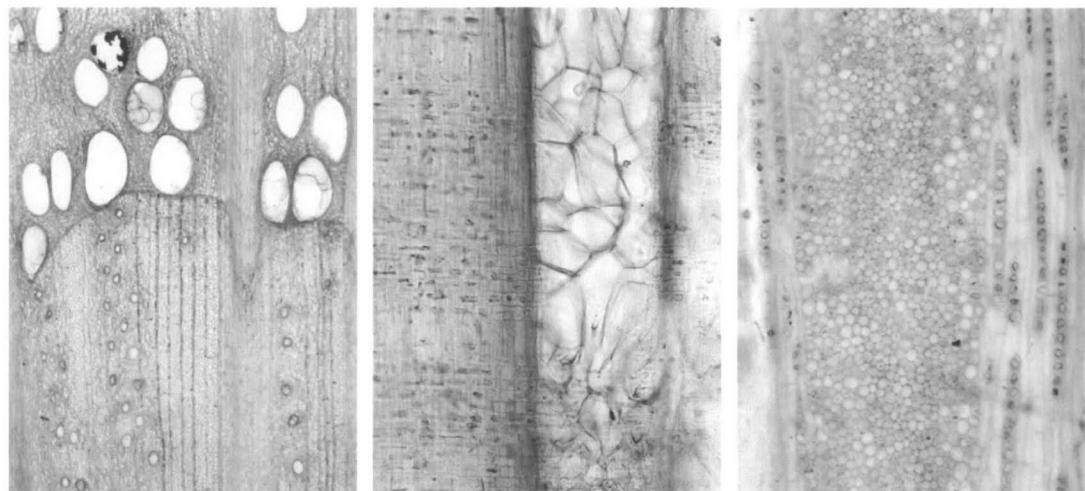
図版3 庄八尺遺跡の木材 II



横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.05mm 接線断面 : 0.2mm
4. 14 II区-② SP2370 柱材 1028 マツ属複維管束亞属



横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.05mm 接線断面 : 0.2mm
5. 18 V区-② SK54 北半 2層 角材 1034 ヒノキ



横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.2mm 接線断面 : 0.2mm
6. 20 V区② SK54 2層杭 1087 コナラ属クヌギ節

第3節香川県庄八尺遺跡出土木製品の樹種調査結果

(株)吉田生物研究所

1. 試料

試料は香川県庄八尺遺跡V b区 SE03から出土した曲物3点である。

2. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果（針葉樹1種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) ヒノキ科アスナロ属 (*Thujopsis* sp.)

（遺物No.1～3）

（写真No.Ⅲ～V）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で1分野に2～4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

◆参考文献◆

島地謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）

島地謙・伊東隆夫「図説木材組織」 地球社（1982）

伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載I～V」京都大学木質科学研究所（1999）

北村四郎・村田源「原色日本植物図鑑木本編I・II」保育社（1979）

深澤和三「樹体の解剖」海青社（1997）

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

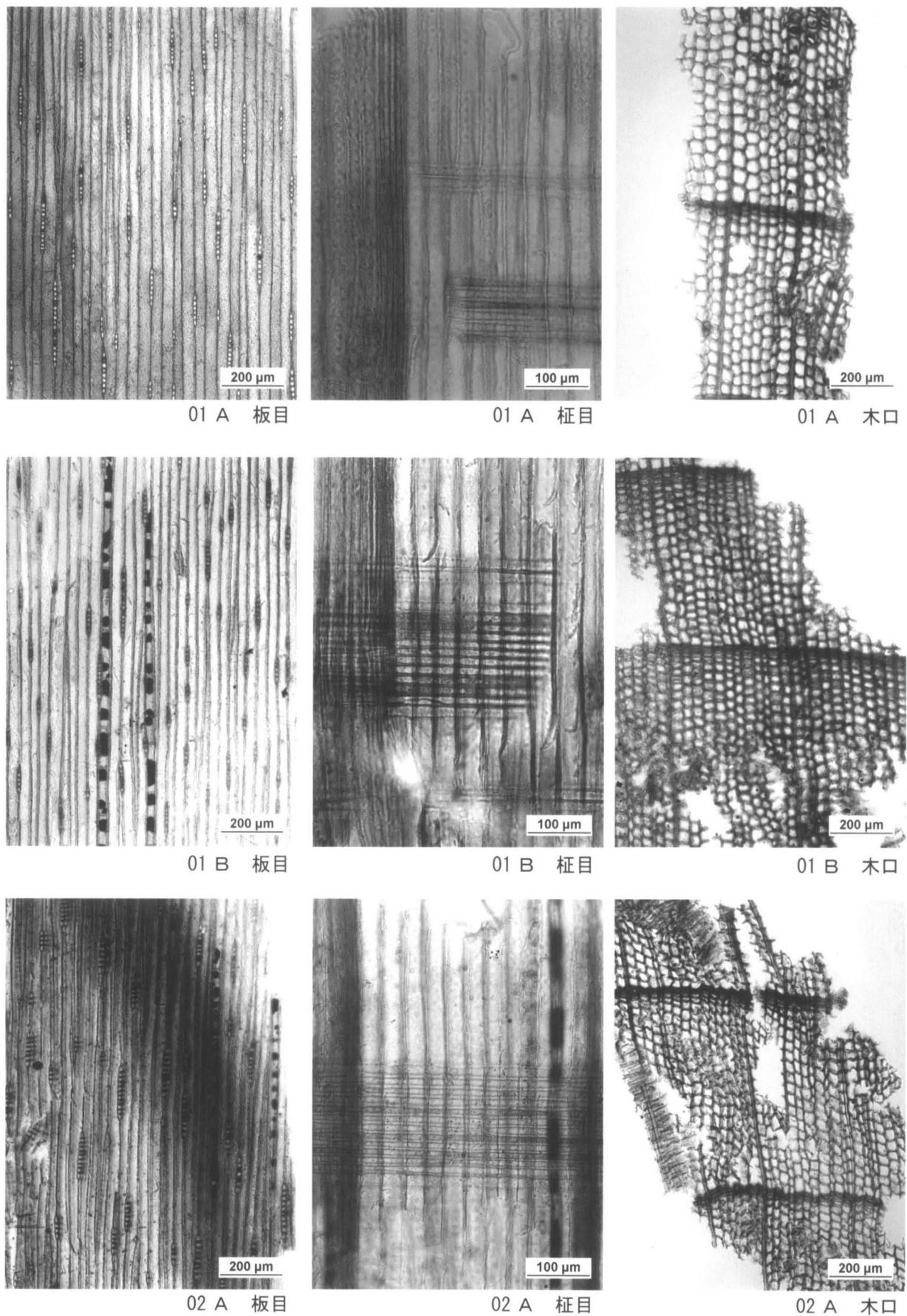
◆使用顕微鏡◆

Nikon DS-Fi1

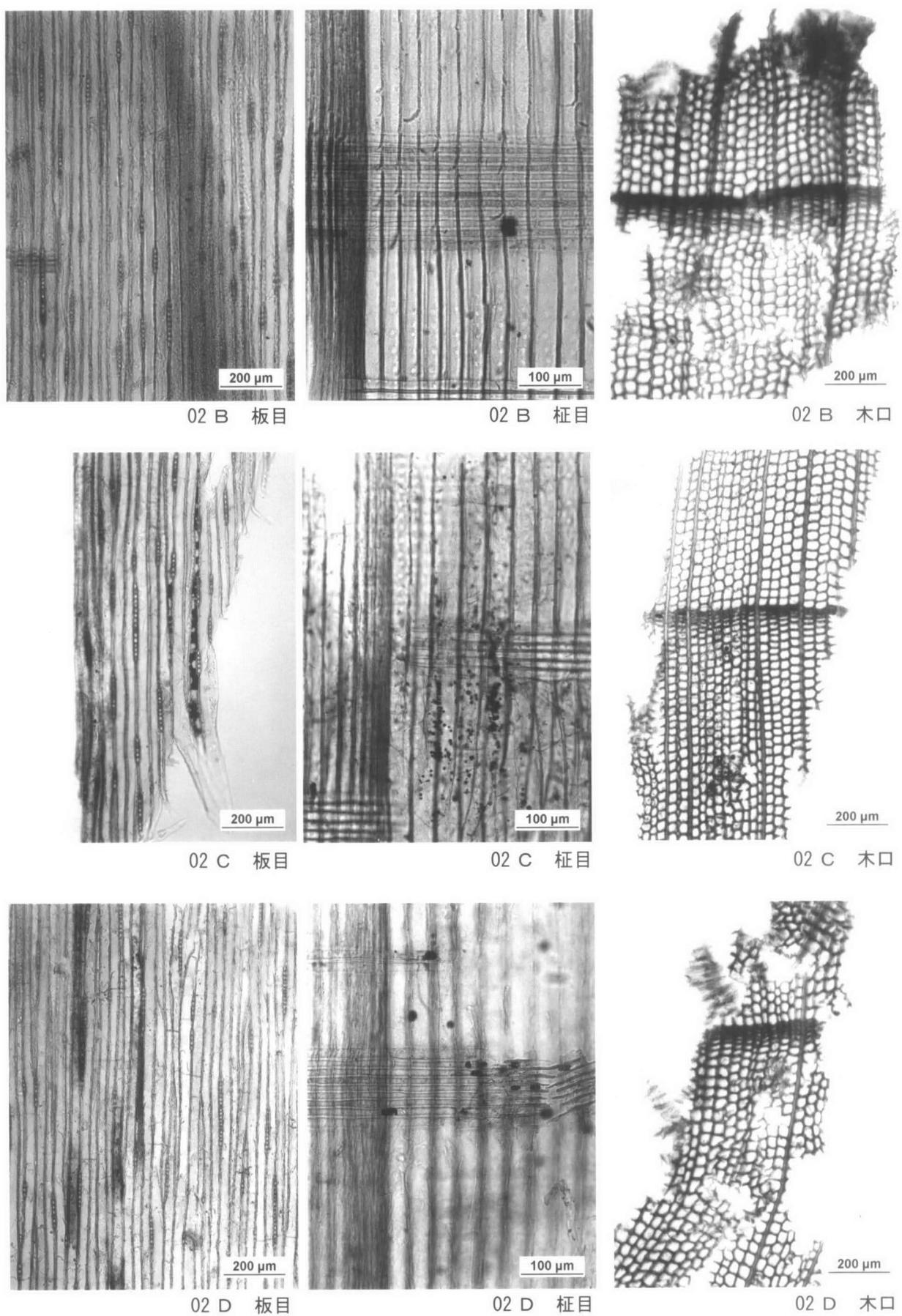
No.	品名	樹種	遺物番号
1	A 曲物（側板）	ヒノキ科アスナロ属	908
	B〃（帯）	ヒノキ科アスナロ属	
2	A 曲物（側板）	ヒノキ科アスナロ属	907
	B〃（帯上）	ヒノキ科アスナロ属	
	C〃（帯下）	ヒノキ科アスナロ属	
	D〃（ヘギ板）	ヒノキ科アスナロ属	
3	A 曲物（側板）	ヒノキ科アスナロ属	909
	B〃（帯穴無）	ヒノキ科アスナロ属	
	C〃（帯穴有）	ヒノキ科アスナロ属	

第4表 庄八尺遺跡における樹種同定結果

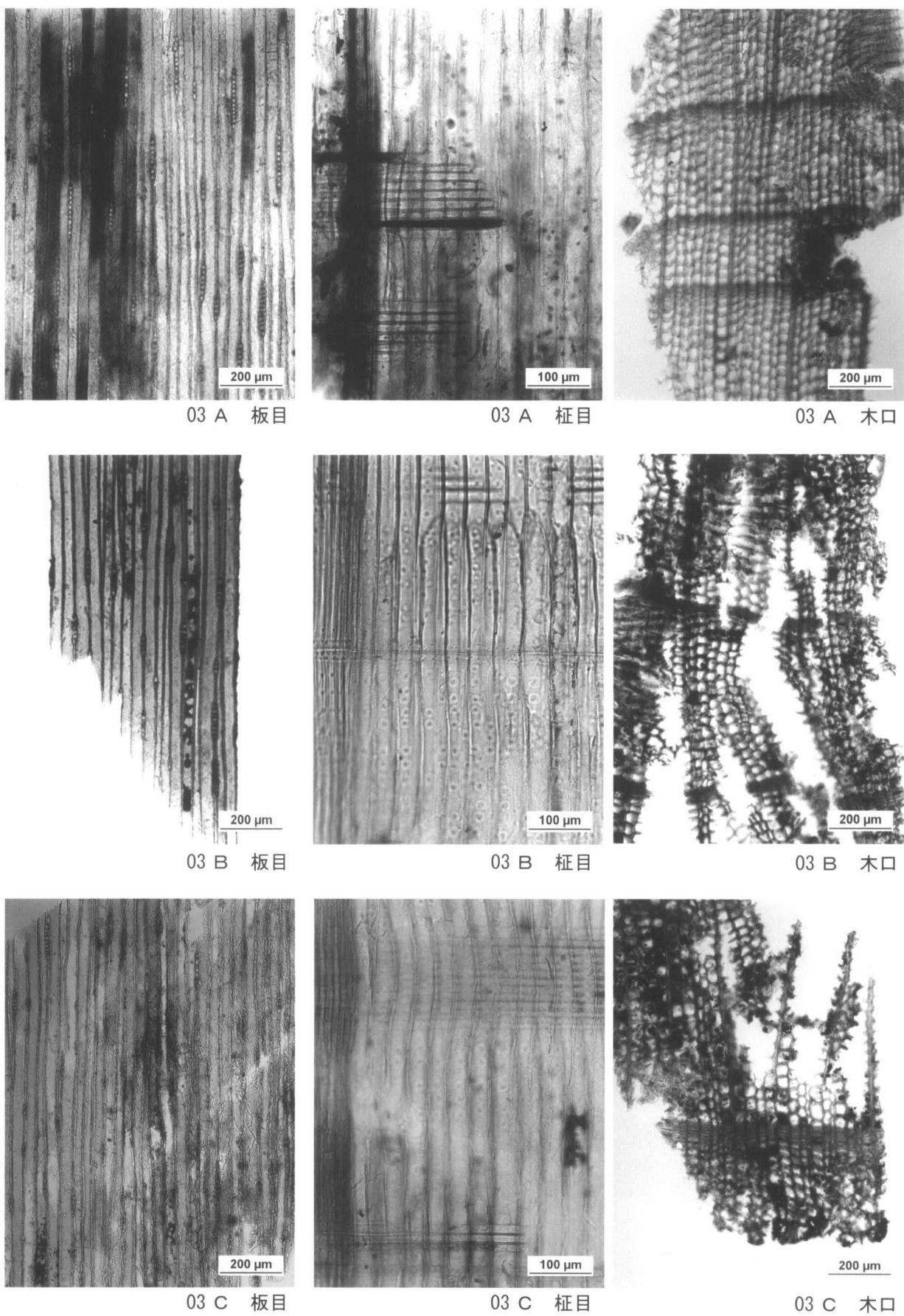
図版4 庄八尺遺跡の木材Ⅲ



図版5 庄八尺遺跡の木材IV



図版6 庄八尺遺跡の木材V



第4節 庄八尺遺跡出土土器の胎土材料

藤根 久・米田恭子・中村賢太郎（パレオ・ラボ）

1. はじめに

土器の胎土分析は、一般的には製作地の推定を目的として行われる場合が多い。しかしながら、例えば胎土中に含まれる岩石片の特徴から、これら砂粒物の示す地域がいざれであるかを推定することは容易でない。土器胎土は、基本材料として粘土と砂粒などの混和材から構成されるが、粘土材料は比較的良質な粘土層から採取されたことが、粘土採掘坑の調査から推察される（藤根・今村、2001）。

一方、混和材としての砂粒は、これら粘土採取の際に粘土層の上下層に分布する砂層などを採取したことが想定される。東海地域には、弥生時代後期の赤彩を施したパレススタイル土器が知られているが、これら3分の1程度の土器では、砂粒物として火山ガラスが多量に含まれるが（藤根、1996；車崎ほか、1996）、これら火山ガラスは、粘土採取の際に上下層に分布したテフラ層と考えられる。このように、胎土中の混和材は、地層中の砂の特徴である可能性が高く、現河川砂とは大きく異なることから、現在の河川砂との比較では問題が大きい。こうしたことから、以前に堆積した段丘堆積物の砂層などとの比較検討が必要と思われる。土器胎土については、第一に土器に使用した粘土や混和材がどのような特徴を持つかを十分理解することが重要であり、こうした特徴を持つと思われる粘土層や砂層などと比較検討すべきと考える。

庄八尺遺跡は、仲多度郡多度津町に所在する遺跡である。また、空港跡地遺跡（高松市林町）や中間西井坪遺跡（高松市中間町）においてもほぼ同時期の弥生土器が出土している。ここでは、これら土器胎土について胎土材料の粘土および砂粒の特徴について調べた。

2. 試料と方法

試料は、空港跡地遺跡から出土した土器5試料、中間西井坪遺跡から出土した土器1試料、庄八尺遺跡から出土した土器4試料の合計10試料である（表1）。

第5表 胎土材料を検討した土器とその特徴

分析No.	遺跡名	器種	時期	報告書番号	断面表層の色調	備考
1	空港跡地遺跡	甕	弥生後期前葉	171	灰色 (N 7/)	中黒サンドイッチ構造
2		直口壺	弥生後期前葉	910	にぶい黄橙色 (10YR 6/3)	
3		高杯	弥生後期前葉	174	灰黄色 (2.5Y 6/2)	弱中黒サンドイッチ構造
4		甕	弥生終末期	398	にぶい黄色 (2.5Y 6/3)	
5		高杯	弥生後期後葉	438	灰黄色 (2.5Y 6/2)	
6	中間西井坪遺跡	広口壺	弥生後期後葉	132	にぶい黄橙色 (10YR 6/4)	
7	庄八尺遺跡	甕	古墳前期初頭	862	明黄褐色 (10YR 6/6)	弱サンドイッチ構造
8		広口壺	古墳前期初頭	872	明褐色 (7.5YR 5/6)	弱中黒サンドイッチ構造
9		鉢	古墳前期初頭	865	暗灰黄色 (2.5Y 5/2)	弱サンドイッチ構造
10		底部	古墳前期初頭	881	黄褐色 (10YR 5/6)	弱中黒サンドイッチ構造

これら土器は、次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の薄片を作成した。

- (1) 試料は、始めに岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥した。全体にエポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行った。これをスライドグラスに接着し平面を作成した後、同様にしてその平面の固化処理を行った。
- (2) さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作成した後スライドグラスに接着した。
- (3) その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作成した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

各試料は、偏光顕微鏡を用いて、薄片全面について微化石類（珪藻化石、骨針化石、胞子化石）や大型粒子などの特徴について観察・記載を行った。また、粘土および鉱物・岩石片の概略容積比を求めるために、

100 μ m 格子点下における粘土および鉱物 (5 μ m 以上) の粒子組成について 200 ポイント以上を計数した。なお、ここで採用した各分類群の記載とその特徴などは以下の通りである。

[植物珪酸体化石]

植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、大きさは種類によっても異なり、主に約 10 ~ 50 μ m 前後である。一般的にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本、スゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在することが知られている。ファン型や亜鈴型あるいは棒状などがあるが、ここでは大型のファン型と棒状を対象とした。

[石英・長石類]

石英あるいは長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち後述する双晶などのように光学的に特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く一括して扱う。

[長石類]

長石は大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）の斜長石にみられることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石は花崗岩などの SiO₂ % の多い深成岩や低温でできた泥質・砂質の変成岩などに産する。

ミルメカイトあるいは文象岩は火成岩が固結する過程の晚期に生じると考えられている。これら以外の斜長石は、火成岩、堆積岩、変成岩に普通に産する。

[雲母類]

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状に剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。花崗岩などの SiO₂ % の多い火成岩に普遍的に産し、泥質、砂質の変成岩および堆積岩にも含まれる。

[輝石類]

主として斜方輝石と単斜輝石がある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的に淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。SiO₂ % が少ない深成岩、SiO₂ % が中間あるいは少ない火山岩、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主として SiO₂ % が中間から少ない火山岩によく見られ、SiO₂ % の最も少ない火成岩や変成岩中にも含まれる。

[角閃石類]

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は細長く平たい長柱状である。閃綠岩のような SiO₂ % が中間的な深成岩や斑れい岩などに産する。

[ガラス質]

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄くて湾曲したガラス（バブル・ウォール型）や小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山の噴出物と考えられる。

[複合石英類・複合鉱物類]

複合石英類は石英の集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は粗粒なものから細粒なものまで様々である。ここでは、便宜的に個々の石英粒子の粒径が約 0.01 mm 未満のものを微細、0.01 ~ 0.05 mm のものを小型、0.05 ~ 0.1 mm のものを中型、0.1 mm 以上のものを大型と分類した。また、等粒で小型の長石あるいは石英が複合した粒子は、複合石英類（等粒）として分類した。この複合石英類（等粒）は、ホルンフェルスなどで見られる粒子と考えられる。

[砂岩質・泥岩質]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、それらの間に基質の部分をもつもので、含まれる粒子の大きさが約0.06mm以上のものを砂岩質とし、約0.06mm未満のものを泥岩質とする。

[不透明・不明]

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明なものや、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明とする。

3. 結果

土器胎土中の微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。以下では、粒度分布や0.1mm前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成あるいは計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、不等号は、概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。なお、表2の微化石類および砂粒の出現頻度は、◎が特に多い、○が多い、△が少ない、空欄は検出されないことを示す。鉱物は、+++が特に多い、++が多い、+が少ないが含まれている、である。

No.1: 70-600 μm、最大粒径1.1mm。角閃石類》石英・長石類》複合鉱物類、カリ長石(パーサイト)、斜長石(双晶)、ガラス質、雲母類、单斜輝石、植物珪酸体化石、黒色不透明鉱物、尖った結晶多い

No.2: 80-500 μm、最大粒径1.0mm。角閃石類》石英・長石類》複合鉱物類、複合石英類、カリ長石(パーサイト)、斜長石(双晶)、ガラス質、雲母類、单斜輝石、斜方輝石、植物珪酸体化石、黒色不透明鉱物、尖った結晶多い

No.3: 70-400 μm、最大粒径1.3mm。角閃石類》石英・長石類》複合鉱物類、複合石英類、斜長石(双晶)、ガラス質、雲母類、单斜輝石、斜方輝石、植物珪酸体化石、黒色不透明鉱物、尖った結晶多い

No.4: 110-750 μm、最大粒径1.5mm。角閃石類》複合鉱物類》斜長石(双晶)》石英・長石類、複合石英類、ガラス質、雲母類、单斜輝石、斜方輝石、植物珪酸体化石、黒色不透明鉱物、尖った結晶多い

No.5: 80-600 μm、最大粒径2.0mm。角閃石類》雲母類(赤色化)》複合鉱物類》斜長石(双晶)》石英・長石類、複合石英類、ガラス質、单斜輝石、斜方輝石、植物珪酸体化石、黒色不透明鉱物、尖った結晶多い

No.6: 70-800 μm、最大粒径2.3mm。角閃石類》複合鉱物類》斜長石(双晶)》石英・長石類、複合石英類、カリ長石(パーサイト)、ガラス質、单斜輝石、斜方輝石、植物珪酸体化石、黒色不透明鉱物、尖った結晶多い

No.7: 130-900 μm、最大粒径1.7mm。石英・長石類》複合石英類》角閃石類》雲母類、斜長石(双晶)、ガラス質、单斜輝石、斜方輝石、植物珪酸体化石、尖った結晶、黒色不透明鉱物

No.8: 120-600 μm、最大粒径1.7mm。石英・長石類》複合石英類》角閃石類》雲母類、斜長石(双晶)、单斜輝石、斜方輝石、植物珪酸体化石、尖った結晶、黒色不透明鉱物

No.9: 110 μm-1.2mm、最大粒径2.5mm。石英・長石類》複合石英類》角閃石類》雲母類、斜長石(双晶)、单斜輝石、斜方輝石、ガラス質、ジルコン、カリ長石(パーサイト)、植物珪酸体化石、尖った結晶、黒色不透明鉱物

No.10: 120-800 μm、最大粒径2.0mm。角閃石類》複合鉱物類》斜長石(双晶)》石英・長石類、複合石英類、カリ長石(パーサイト)、单斜輝石、斜方輝石、黒色不透明鉱物、尖った結晶多い

4. 考察

i) 特徴的な粒子群による分類

検討した胎土中には、角閃石類が特徴的に多く含まれ、断層岩に特有の尖った形状を示す粒子群や斜長石(変形双晶)が含まれていた。なお、水成を指標する珪藻化石や骨針化石などは含まれていなかった。植物珪酸体化石は、土器の製作場では灰質が多く混入する可能性が高いなど、粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

検討した胎土は、断層岩に特有の粒子の出現により、a) 断層ガウジを用いた粘土、に分類された。以下では、

分類された粘土の特徴について述べる。

a) 断層ガウジ（断層粘土）を用いた胎土（10 胎土）

これら胎土中には、角閃石類を特徴的に多く含み、尖った形状を呈する角閃石類などの鉱物粒子や斜長石（変形双晶）が含まれていた。なお、粘土の占める体積%（ $5 \mu\text{m}$ 以下の粒子）は、41.64～69.86 体積%であった。

ii) 胎土中の砂粒組成による分類

ここで用いた岩石分類群は、構成する鉱物種や岩石片の構造的特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。このため、各胎土中の鉱物、岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的状況に一義的に対応しない。

ここでは、比較的大型の砂粒について起源岩石の推定を行った（表2）。岩石の推定は、複合石英類および複合鉱物類が深成岩類、ガラス質がテフラ（火山噴出物）である。さらに、推定した起源岩石は、表3の組み合わせに従って分類した。

土器胎土中の岩石片の組成は、深成岩類を主としたB群、深成岩類を主体としてテフラを伴うBg群であった。さらに、砂粒組成は、角閃石類や角閃石を含む深成岩類を主体とした組成であった。

角閃石類や角閃石を含む深成岩類からなる岩石片は、13.88～43.86 体積%であり、閃緑岩や斑れい岩の組成と考えられる。

遺跡の周辺地域では、白亜紀前期またはそれ以前の領家帯の古期花崗岩類、領家变成岩類、領家帯の新期花崗岩類、安山岩類を主とした讃岐層群などが分布する（日本の地質『四国地方』編集委員会編, 1991：図1）。このうち、閃緑岩～斑れい岩は、五色台や栗林公園、屋島あるいは庵治半島の花崗岩類中などに見られる。また、小豆島には比較的大きな斑れい岩が分布している（日本の地質『四国地方』編集委員会編, 前出）。

第6表 土器胎土中の粘土および砂粒の特徴

試料 No.	遺跡名	報告番 号	粘土の特徴				砂粒の特徴						鉱物の特徴			植物 珪酸体 化化石	特徴	おのよ く角 閃石類 %石類 片	粘 土の 体 積 %			
			分 類	硅 藻 水 石	矽 藻 明 化 石	骨 針 化 石	胞 子 化 石	分 類	片 岩 類	深 成 岩 類	堆 積 岩 類	火 山 岩 類	凝 灰 岩 類	流 紋 岩 類	テ フ ラ	ジ ル コ ン	角 閃 石 類	輝 石 類	雲 母 類			
1	空港跡地遺跡	171	断層ガウジ					(B)		△					△	◎	△	○	○	尖った結晶多い、黒色粒子含む	25.91	53.18
2		910	断層ガウジ					(B)	△						△	◎	△	△	○	尖った結晶多い、黒色粒子含む	43.86	42.11
3		174	断層ガウジ					(B)	△						△	◎	△	△	○	尖った結晶多い、黒色粒子含む	36.61	50.00
4		398	断層ガウジ					B	○						△	◎	△	△	○	尖った結晶多い、黒色粒子含む	34.00	46.67
5		438	断層ガウジ					B	○						△	◎	△	△	○	尖った結晶多い、黒色粒子含む	28.57	48.38
6		132	断層ガウジ					B	◎						△	◎	△	△	△	尖った結晶多い、黒色粒子含む	38.13	46.15
7	庄八尺遺跡	746	断層ガウジ					Bg	◎						○	◎	△	○	○	黒色粒子含む、角閃石類や少ない	20.48	49.15
8		759	断層ガウジ					B	○						○	◎	△	△	△	黒色粒子含む、角閃石類や少ない	13.88	69.86
9		748	断層ガウジ					B	◎						△	△	○	△	△	黒色粒子含む、角閃石類や少ない	21.13	59.86
10		760	断層ガウジ					B	○						○	△	△	△	△	尖った結晶多い、黒色粒子含む	43.12	41.64

第7表 胎土中の岩石片と組み合わせ

第2出現群			第1出現群									
			A		B		C		D	E	F	G
			片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ			
a	片岩類		Ba		Ca		Da		Ea	Fa	Ga	
b	深成岩類	Ab		Cb		Db		Eb	Fb	Gb		
c	堆積岩類	Ac	Bc		Dc		Ec	Fc	Gc			
d	火山岩類	Ad	Bd	Cd		Ed	Fd	Gd				
e	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De		Fe	Ge				
f	流紋岩類	Af	Bf	Cf	Df	Ef		Gf				
g	テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	Ef	Fg					

iii) 胎土材料の特徴

検討した土器胎土は、角閃石類および斑れい岩類起源の岩石片が 13.88 ~ 43.86 体積% であったことから、角閃石閃緑岩や斑れい岩が母岩と推定された。さらに、尖った形状を呈する角閃石類などの鉱物粒子や斜長石(変形双晶)が含まれていたことから、断層ガウジ用いて土器作りを行っていると考えられる。

畿内には、土器胎土が暗褐色～茶褐色を呈しする生駒西麓産土器が知られているが、薄片観察において断層岩の特徴を持つことから、これらの土器の材料は断層ガウジを用いた土器群であることが示されている(藤根・小坂, 1997)。これら土器群は、水成粘土を用いた土器に比べて砂粒分が多いことから、接着性が非常に高い粘土である。なお、この土器は、角閃石類を特徴的に多く含むことから、生駒はんれい岩あるいは周辺の花崗岩類を源岩として形成された断層カウジを材料として作られている。

この断層カウジは、斑れい岩分布域において、断層が横切れば類似した断層カウジが形成されることから、県内においても同様の粘土が形成されることが推定される。

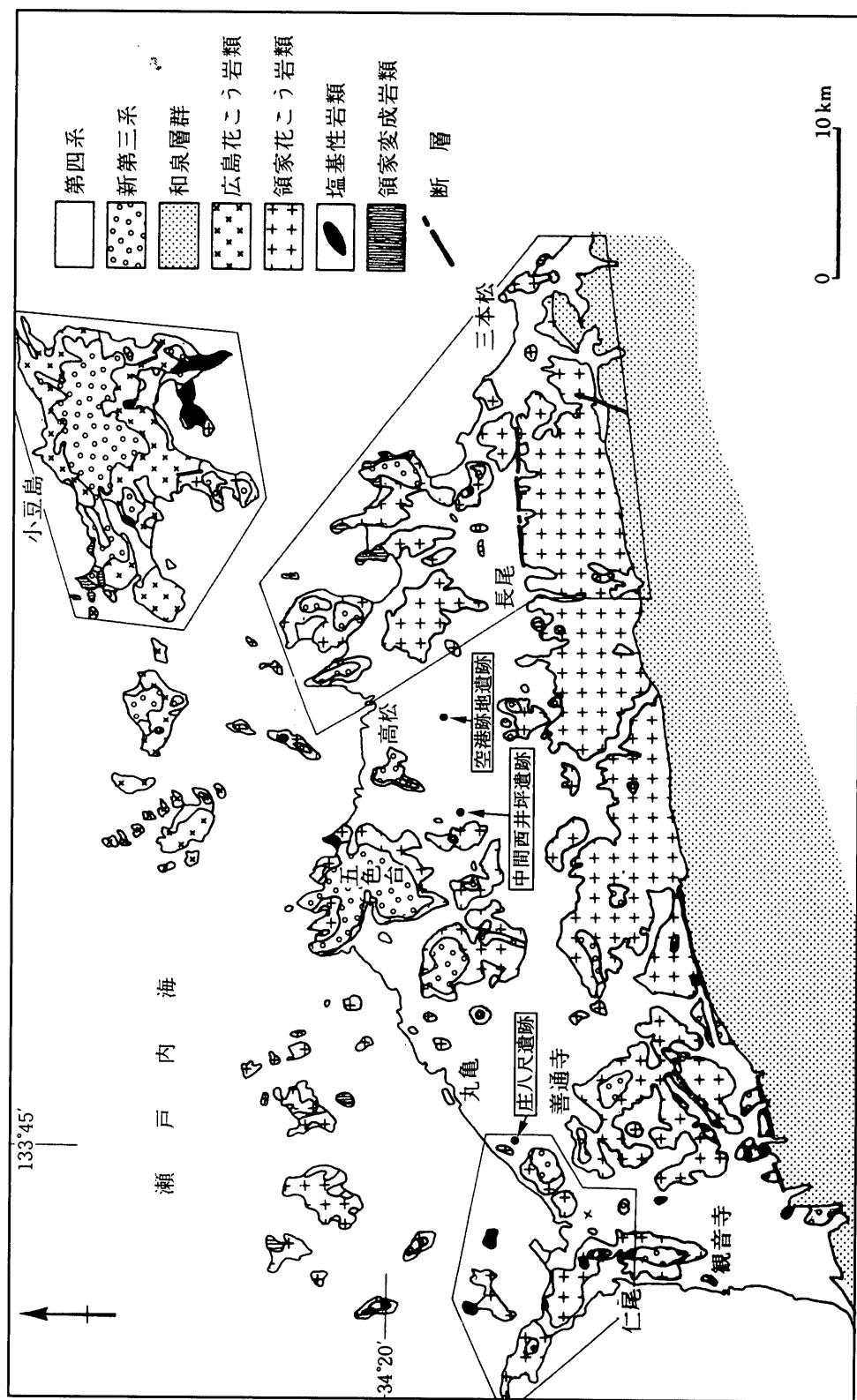
5. おわりに

検討した土器胎土は、断層ガウジを用いて作られた土器であることが分かった。遺跡の周辺地域には、領家花崗岩類が分布し、閃緑岩～斑れい岩も分布する地域であることから、周辺地域で採取された可能性が考えられる。土器材料に用いられた断層ガウジは、該当地域の精査を行うことにより、その実態が明らかになるものと考えている。

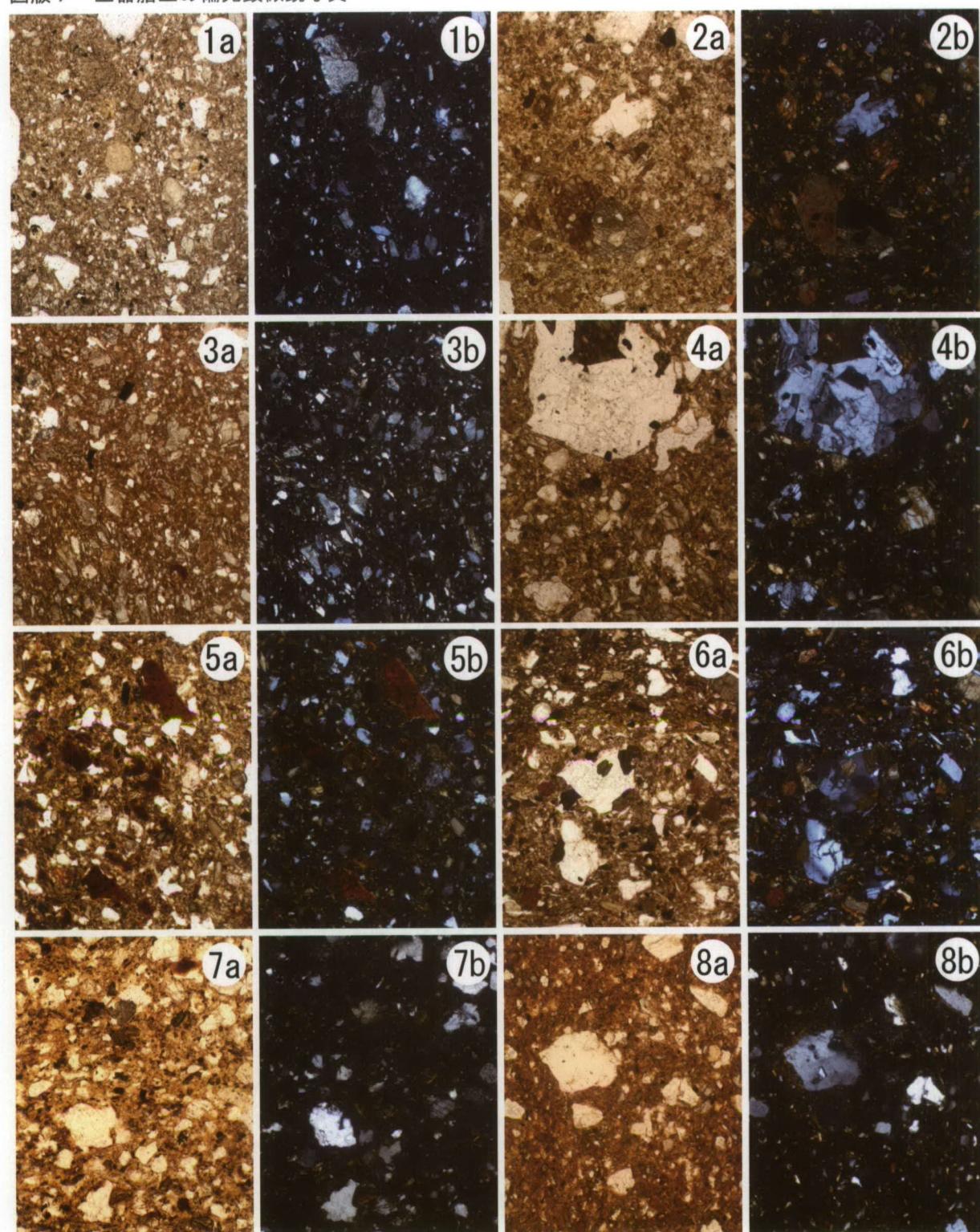
引用文献

- 藤根 久・小坂和夫 (1997) 生駒西麓(東大阪市) 産の縄文土器の胎土材料—断層内物質の可能性—. 第四紀研究, 36(1), 55-62.
藤根 久 (1998) 東海地域(伊勢一三河湾周辺)の弥生および古墳土器の材料. 第6回東海考古学フォーラム岐阜大会, 土器・墓が語る, 108 - 117.
藤根 久・今村美智子 (2001) 第3節 土器の胎土材料と粘土探掘坑対象堆積物の特徴. 波志江中宿遺跡, 日本道路公団・伊勢崎市・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団, 262-277.
日本の地質『四国地方』編集委員会編 (1991) 日本の地質 8『四国地方』, 266p.

第224図 香川県の領家帯地質概略図（日本の地質『四国地方』編集委員会編、1991より引用）



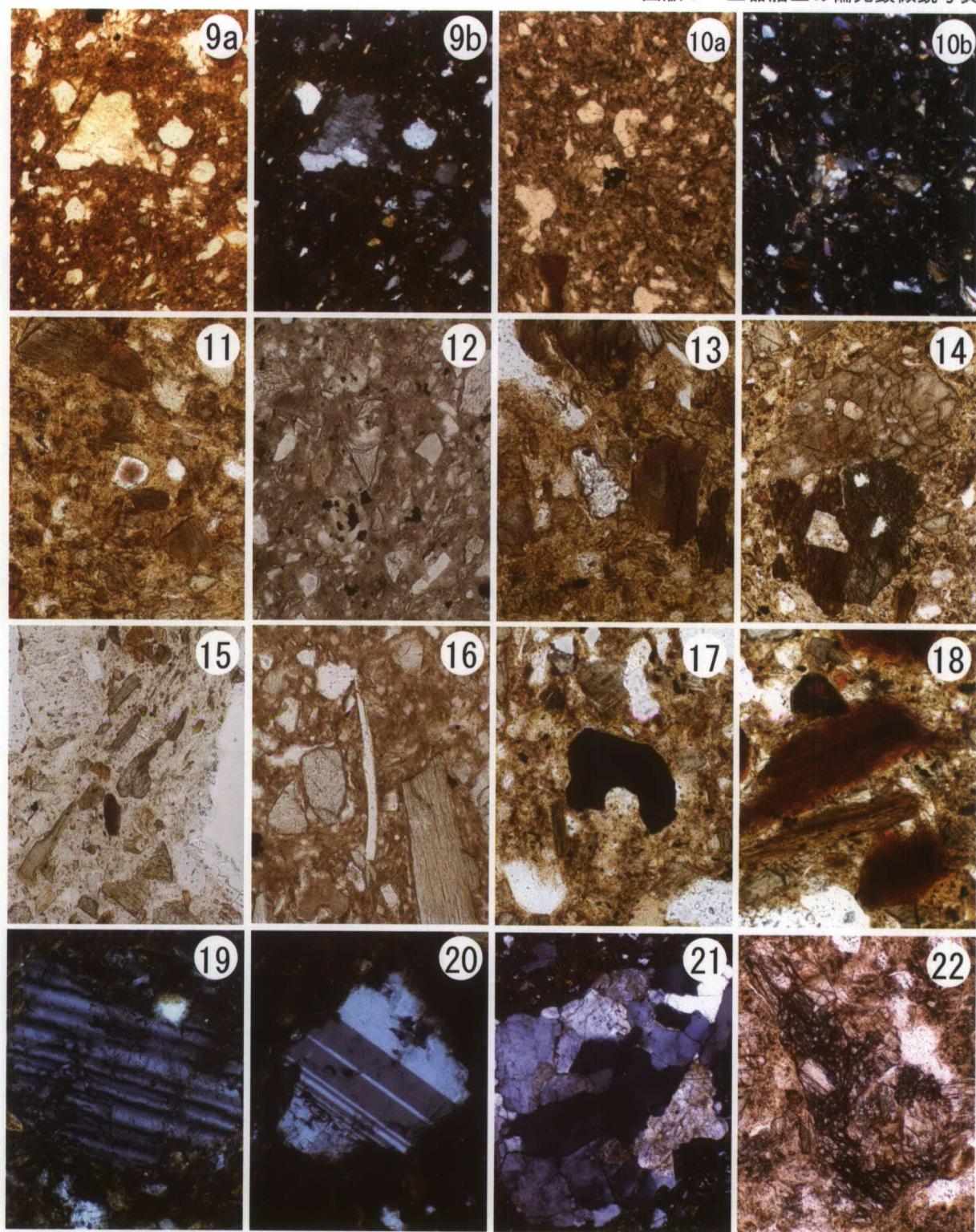
図版7 土器胎土の偏光顕微鏡写真



(scale bar 1a-8b : 500 μ m)

- | | | | |
|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|
| 1a. 試料No. 1 (解放ニコル) | 1b. 試料No. 1 (直交ニコル) | 2a. 試料No. 2 (解放ニコル) | 2b. 試料No. 2 (直交ニコル) |
| 3a. 試料No. 3 (解放ニコル) | 3b. 試料No. 3 (直交ニコル) | 4a. 試料No. 4 (解放ニコル) | 4b. 試料No. 4 (直交ニコル) |
| 5a. 試料No. 5 (解放ニコル) | 5b. 試料No. 5 (直交ニコル) | 6a. 試料No. 6 (解放ニコル) | 6b. 試料No. 6 (直交ニコル) |
| 7a. 試料No. 7 (解放ニコル) | 7b. 試料No. 7 (直交ニコル) | 8a. 試料No. 8 (解放ニコル) | 8b. 試料No. 8 (直交ニコル) |

図版8 土器胎土の偏光顕微鏡写真



(scale bar 9a-10b : 500 μ m, 14・21・22 : 200 μ m, 他 : 100 μ m)

9a. 試料No.9 (解放ニコル) 9b. 試料No.9 (直交ニコル) 10a. 試料No.10 (解放ニコル) 10b. 試料No.10 (直交ニコル)

11. 植物珪酸体化石 (No.2) 12. 尖った形状を示す角閃石類 (No.1) 13. 単斜輝石 (左)、角閃石類 (右) (No.2)

14. 複合角閃石類 (No.2) 15. 尖った形状を示す角閃石類 (No.2) 16. ガラス質 (No.3) 17. 黒色粒子 (No.4)

18. 雲母類 (No.5) 19. 斜長石 (変形) (No.8) 20. 斜長石 (No.6) 21. 複合石英類 (No.9) 22. 複合角閃石類 (No.10)

第5節香川県庄八尺遺跡出土動物遺存体

岡山理科大学理学部

富岡 直人

本報告は、2006年度に香川県埋蔵文化財センターの発掘により、香川県仲多度郡多度津町庄所在の庄八尺遺跡から検出された中世後半期に属すると考えられる動物遺存体について記述するものである。

標図番号	地区	遺構	層位	時代	大分類	小分類	部位類	LP	部分1	部分2	成長度	破損	受熟	色調	計測値	備考
217	II a 区	SB35		中世	哺乳綱	ウシ	臼歯	?	歯冠部 破片		小窩独立	なし?	なし	normal		
327	II a 区	SK26	上層	中世	哺乳綱	ウシ	下顎臼歯 M3	R	完形		小窩独立	なし?	なし	normal	L : 35.35 Ba : 14.74 Bm : 12.67 BP7.89	
360	II a 区	SK33 B	下層	中世	哺乳綱	ニホンジカ	中足骨	?	骨幹部		?	SP?	なし	normal	SD = (17.00)	
422	II a 区	SX04	上層	中世	哺乳綱	目不明 (中～大型)	不明	?	骨幹部		?	?	なし	茶褐色		
431	II a 区	SX04	下層	中世	哺乳綱	ウシ	臼歯	?	歯冠部 破片		萌出途次	?	なし	normal		
442	II a 区	SD09		中世	哺乳綱	目不明 (中～大型)	四肢骨	?	骨端部 破片		?	SP?	なし	normal		
559	III b 区	SP3513		中世	哺乳綱	目不明 (中～大型)	手根 or 足 根骨	?	骨幹部 破片		?	?	なし	normal		
748	IV a 区	SB69		中世	哺乳綱	ウシ	下顎臼歯 M3	L	歯冠部 破片		小窩独立	なし?	なし	normal	L : ? Ba : 13.27	
757	IV a 区	SB71		中世	哺乳綱	ウシ	上顎第2 後臼歯 M2	R	歯冠部		小窓独立	なし?	なし?	normal?	L : 29.88 Ba : 19.62 Bm : 22.38 BP : 17.97 内側歯冠 高 : 28.52	
859	IV b 区	SD20	上層	中世	哺乳綱	目不明 (中～大型)	四肢骨	?	骨幹部 破片		?	SP	なし	白色に近い normal		

第8表 出土動物遺存体属性表

第V章　まとめ

第1節　遺構の変遷

弥生時代

弥生時代の遺構として、Ⅱ区 SD12・13、SX06、Ⅳ区 SD21 がある。本文中でも述べたように、SD12・21 は、その規模や改修による継続的な利用を示す痕跡等から、幹線水路と位置付けられ、SD13 はその枝溝と考えられる。SD12 は遺物に乏しく、時期決定に課題を残すが、これら水路群は概ね弥生時代終末期～古墳時代前期初頭頃と考えられ、周辺域で当該期に大規模な開発が行われたことが想像される。集落跡は未確認ながら、SD21 からは多くの遺物が出土しており、SD21 上流の微高地上に集落が所在した可能性が考えられる。

一方、I・Ⅱ区 SD03 やⅢ区 SD15 からも、後世の遺物に混じって中期頃の土器・石器類が多く出土したことから、周辺に当該期の集落跡の存在が予想される。

古代

I～Ⅱ区 SD03、Ⅳ区 SD19・20 があり、Ⅲ～Ⅳ区 SR01 もその機能時の一時期は当該期に含まれる。SD03 は、条里地割の坪界溝であり、出土遺物より 9 世紀代には開削されていたことが推定される。本文中にも記したように、溝底の高低差より、西流して SR01 へ流下していた可能性が考えられ、周辺耕地の排水路として機能していた可能性が想定される。

同様に、SD19・20 もほぼ同時期に位置付けられる灌漑水路で、SR01 より取水し、下流の耕地へ通水していた可能性が想定される。これら灌漑水路群より、遺跡周辺では、遅くとも 9 世紀代には条理地割が整備され、耕地として開発されていたことが判明した。

この点は、前章で既述した花粉分析の結果からも裏付けられ、SD03・SR01 埋土より採取した試料から、イネ科花粉が高率で検出された。上述した水路網の整備と合わせ、周辺に水田景観が広がっていたことが想像される。

出土遺物には、少量ながら灰釉陶器や畿内系土師器等が出土しており、その開発主体の性格を反映している可能性がある。

中世

13～15 世紀前半の遺構は数が多い。掘立柱建物跡 SB13・49・56・59・61・63～65・67・69～76、土坑 SK26・39・51・52・56・58・61・62・65・68・72～77、溝状遺構 SD17・18、井戸跡 SE03、地鎮遺構 SK63、SP2447・3405、SX08・12～14、性格不明遺構 SX09 等が、それぞれ出土遺物等より当該時期に位置付けられる。当該期の遺構は、Ⅲ・Ⅴ区を中心に検出されており、ほぼ遺跡西半部を中心とする中世村落と評価される。また、古代に機能していた埋没旧河道跡 SR01 は、当該期にはその機能を停止し、低湿地状を成して耕地として利用されていた可能性が考えられ、その東西両岸に村落が展開する景観が復原される。

出土遺物に土錘が含まれ、漁業に従事した人々が本遺跡内に存在した可能性が想定される。また、輸入磁器類や国内各地の陶器類も出土しており、瀬戸内航路を利用し、堀江津を経由して当遺跡へもたらされた可能性が考えられる。

中世終末期～近世初期

16 世紀末～17 世紀前半の遺構も多い。15 世紀中頃～16 世紀中頃の遺物も若干量出土しており、中世後半期の遺構群との間を埋め、継続的に本遺跡が中世村落として經營されてきた可能性も考えられる。

掘立柱建物跡 SB04・07・18・19・22・23・38・40～44・47・48・50・51・54、土坑 SK02・08・10

～12・16・17・21・23・30・32～36・38・39・42・44・66、井戸跡 SE02、性格不明遺構 SX03～05、溝状遺構 SD06・07・10が、それぞれ出土遺物等より当該時期に位置付けられる。

掘立柱建物跡には、Ⅱ区 SB23 のように桁行が 10 m を超え、東西両面に庇を伴う可能性のある、屋敷地内の主屋と考えられる大型建物跡も検出されている。また、建物跡の主軸方位は、N 30 ± 3 °W と概ね一定している。その点できわめて規格的に建物が配置されていた可能性が窺える。

出土遺物には、中国景德鎮窯系磁器や朝鮮白磁、南蛮系施釉陶器、初期伊万里等、流通が限られていた陶磁器類が出土しており、屋敷地の居住者の階層を反映している。上述した建物規模や出土遺物等の点から、本屋敷地の居住者の階層として、名主（庄屋）等村役クラスが想定される。

なお、本屋敷地の成立が、豊臣秀吉の四国征討に敗退して、在地領主の香川氏が長宗我部氏とともに、土佐へ下った時期と一致していることから、想像を逞しくすれば、本屋敷地の経営者に、帰農化した香川氏の被官クラスの武士層を想定することも可能ではないかと考えている。

また、屋敷地は、17世紀中頃に突如として断絶する。その時期は、山崎氏あるいは京極氏の入部時期と一致する。Ⅱ章で既述したように、京極氏は入部後直ちに領内の検地を実施する等、積極的な領国経営を進めた。おそらくは、こうした領国経営の一環として、いわゆる村切りにより、戦国期以来の村落形態の再編等が推し進められたことも想像され、屋敷地の断絶にそのような背景を想定することも可能ではないかと考えている。

理化学的分析では、SK35 と SE02 埋土の花粉分析によって、ソバ科やアブラナ科の花粉が検出され、周辺でソバやアブラナ（ナタネ）等の栽培の可能性が推測された。遺跡周辺での畑作の可能性を示すと同時に、水田稲作以外の生業に関わる具体的な資料が得られた意義は大きい。

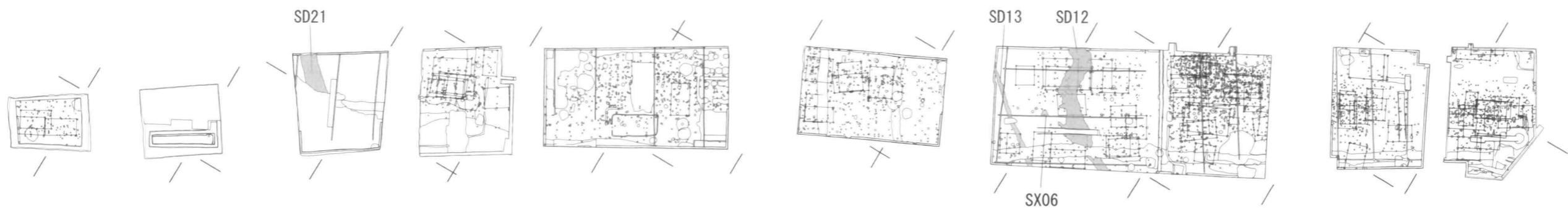
近世

18世紀後半～19世紀前半を中心とした時期を区分する。土坑 SK14・15・45～50・55・64・67、井戸跡 SE01、溝状遺構 SD09・14・15、性格不明遺構 SX07 が、それぞれ出土遺物等より当該時期に位置付けられる。

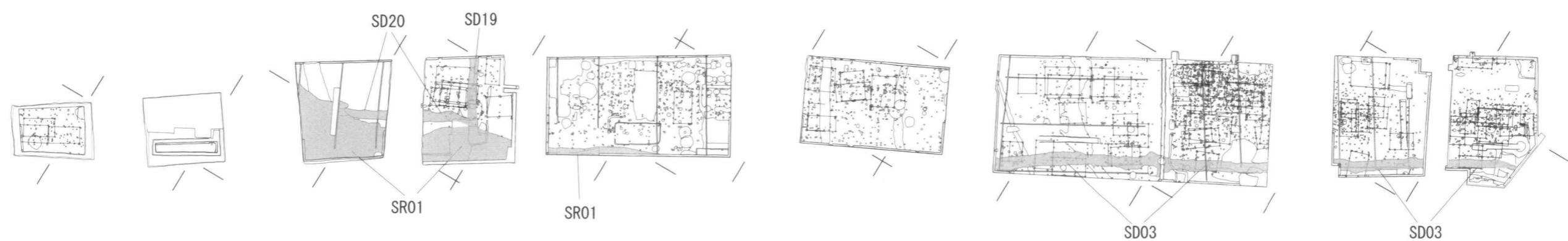
時期不詳の掘立柱建物跡の中には、当該時期に位置付けられるものも含まれる可能性は考えられるが、出土遺物等から、積極的に当該期に位置付け得る建物は復元できなかった。屋瓦類が出土していることとも合わせ、おそらく当該時期には主屋を含め、屋敷地内の主要建物は礎石建物に移行していたものと考えられる。

既述した遺構は、主にⅢ区に集中しており、特に屋瓦を出土した遺構はⅢ区に限られることから、Ⅲ区周辺に当該期の屋敷地が存在していた可能性が高いと判断される。既述した中世終末期～近世初期の屋敷地とは、出土遺物等から明らかに断絶が認められ、屋敷地の移動という視点では、当該期の屋敷地の成立は説明できないだろう。

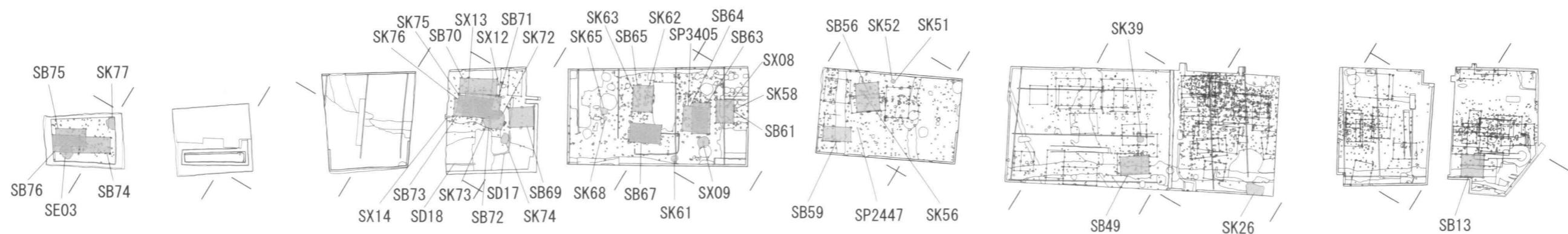
弥生時代



古代

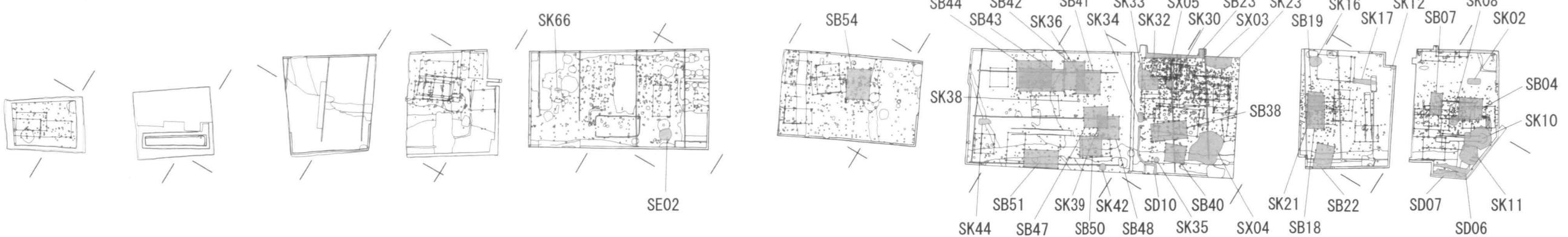


中世

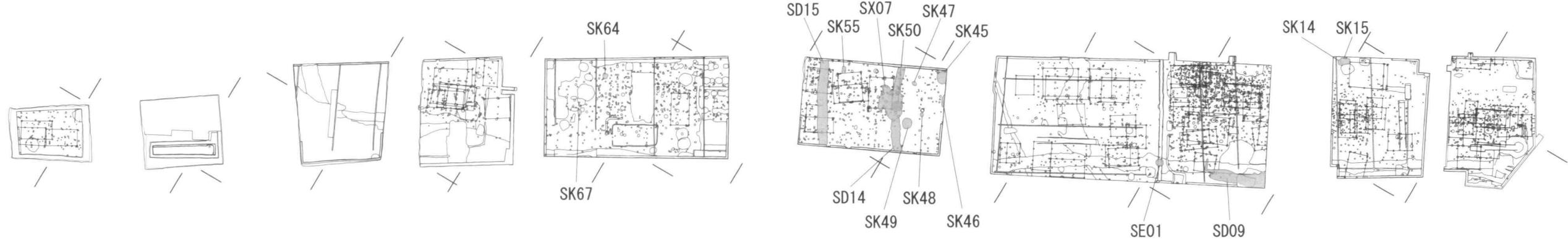


第 225 図 庄八尺遺跡遺構変遷図 1

中世末～近世初頭



近世



第226図 庄八尺遺跡遺構変遷図2

第2節 弥生時代後期～古墳時代前期初頭の土器について

既述したように、IV区 SD21を中心いて、当該期の土器が多く出土した。SD21出土土器には、その胎土中に多量の黒雲母を含有する土器が、全体の9割以上を占め、同種土器の製作地に近接する遺跡であることが予想された。そこで、当該期の土器製作の具体的な様相を明らかにすることを目的として、前章において土器の胎土分析を行い、高松平野の土器との比較を試みた。以下では、分析結果について整理し、課題を提起しておくことで、今後の詳細な検討に備える。

分析を行ったのは、高松平野の土器として、空港跡地遺跡と中間西井坪遺跡出土の弥生時代後期前半～終末期の試料6点と、庄八尺遺跡出土の弥生時代終末期～古墳時代前期初頭の試料4点である。試料の選択に際して、倍率数十倍程度の実体顕微鏡により、含有鉱物組成や形状等について観察を行った。その結果、高松平野の土器については、多量の角閃石を含むことで共通する一群の土器（下川津B類土器）を選択し、庄八尺遺跡の土器については既述した黒雲母粒を多量に含む一群の土器を選択した。

さて、高松平野の多量の角閃石を含む特徴的な胎土を有する一群については、以前より注目され、かつて大久保徹也氏により「下川津B類土器」という土器様式名が付与され、諸特徴について詳細な検討が試みられてきた。

また、これら土器群の胎土については、奥田尚氏が実体顕微鏡下において観察を行い、その素地粘土が閃緑岩質岩に由来することを明らかにした（奥田 1995）。森下友子氏は、奥田氏の分析結果を踏まえ、これら土器群を「胎土1類土器」とし、高松平野周辺の遺跡内におけるその出現頻度をもとに、「閃緑岩分布地である石清尾山丘陵南端付近に分布する土が胎土1類の製作に使用されていた可能性が最も高い」ことを指摘した（森下 1995）。

一方、大久保徹也氏は、これら土器群の詳細な検討の上に諸特徴を整理し、その編年的枠組を完成された（大久保 1990）。さらに、香川県下の個別遺跡単位での出現頻度を統計し、その製作地が旧香東川下流域の上天神遺跡を中心とした半径4km圏内にあることを明らかにされた（大久保 1995）。

また、清水芳弘氏は、偏光顕微鏡下での観察と、X線回折法、蛍光X線分析を行い、明確な素地粘土の採取地の断定は避けながらも、同種土器の製作に「ある固有の地質構成物の特徴を反映していると同時に、多量に採取できる場所での意図的な作業が関与」している可能性を想定した（清水 1999）。

上述した先学の検討を踏まえ、蔵本はかつて下川津B類土器の製作集団について、「特定集落での集中的でかつ排他的な」という表現で、個別土器様式個々の専業的な製作と、諸手工業製品の分業生産体制の存在を示唆した（蔵本 1999 b）。さらに踏み込んで、同種土器を製作した集団が、後の古墳時代の墳墓儀礼の創出に重要な位置を占めた可能性を示唆した。

以上のように、下川津B類土器については、その製作地や素地粘土採取地について、一定の研究の蓄積がなされてきた。今回の分析によって、下川津B類土器が、角閃石閃緑岩や斑れい岩を母岩とする断層ガウジを用いた土器群であることが明らかとなり、その素地粘土採取地がより限定されたポイントに絞り込まれることとなつた。

角閃石閃緑岩については、森下氏の検討にもあるように、石清尾山丘陵南端付近が有力な候補である。しかし、現在までに石清尾山塊に断層は確認されておらず、今後現地調査等によって、当該地域において断層ガウジが確認されれば、下川津B類土器の素地粘土採取地として最有力な候補地となることが予想される。

一方、庄八尺遺跡で顕著にみられた黒雲母粒を多量に含む土器の一群は、かつて砂粒分類3類土器として、その製作地を善通寺地域と長尾平野東部地域の2地域を想定した（蔵本 1999 a）。庄八尺遺跡での当該土器の出土は、その善通寺地域の一例として追加されるものである。

さて、庄八尺遺跡出土土器の胎土分析の結果は、予想と違えて下川津B類土器と近似した鉱物組成を示すも

のであった。その要因は別に探求しなければならないが、角閃石閃緑岩や斑れい岩を母岩とする断層ガウジを用いて作られた土器である点が明らかとなった。砂粒分類3類土器の素地粘土採取地についても、今後の現地調査等により、特定される可能性が大きくなつたと考える。

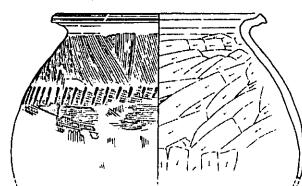
しかしながら、その場所については、丸亀平野西縁部で現在までのところ、明確な塩基性岩類の分布が知られていないため、具体的な場所を特定するには至らない。おそらくは、花崗岩中に小規模な岩脈として存在する可能性が考えられ、詳細な現地調査が必要である。一方、これら土器の分布等、考古学的な状況からは、おそらく弘田川下流の多度津山や弥谷山塊の北東部周辺が、その素地粘土採取地の有力な候補地として想定される。

また、これら2者の土器が共通した素地粘土を用いていることは、清水氏も述べているように、「意図的な作業」の可能性をより強く印象付ける。下川津B類土器については、これまでの研究から、限定された器種組成と伝統的な製作手法の残存、個体差に乏しい斉一性・規格性等が指摘され、素地粘土の選択についても、強い拘りが窺える。

一方、砂粒分類3類土器については、下川津B類土器に見られた諸特徴は、現状においては明確ではない。おそらくは両者の土器製作に関わる集団のあり方の相違を反映していると考えられる。また、砂粒分類3類土器の出現は、早くとも後期後半期以降であり、胎土1類土器が後期初頭から見られるのに対して、時期的に遅れる点も重要だ。素地粘土に対する意識が、高松平野を発信源として、各地に伝えられた可能性を示している可能性が考えられる。

以上のように、今回の分析は、高松平野中央部と丸亀平野西縁部地域間での弥生時代後期～古墳時代初頭の土器製作について、多くの課題を提起することになった。議論は土器製作の問題を超えて、当時の集団関係や分業の問題にも及ぶが、問題解決にはまだまだ整理しなければならない事項が多く残っている。

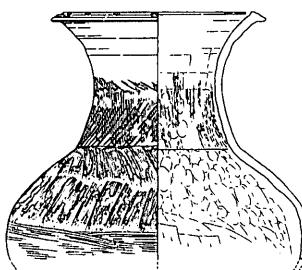
高松平野産土器（胎土 1 類）



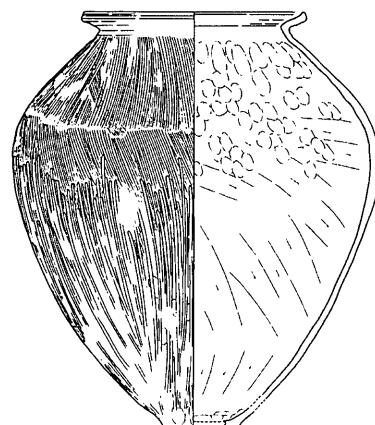
試料No.1 (空港跡地遺跡 171)



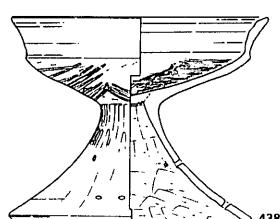
試料No.3 (空港跡地遺跡 174)



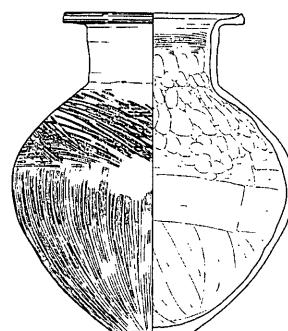
試料No.2 (空港跡地遺跡 910)



試料No.4 (空港跡地遺跡 398)



試料No.5 (空港跡地遺跡 438)



試料No.6 (中間西井壺遺跡 132)

丸龜平野北西部産土器



試料No.7 (庄八尺遺跡 862)



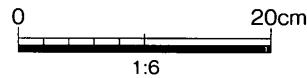
試料No.8 (庄八尺遺跡 872)



試料No.9 (庄八尺遺跡 865)



試料No.10 (庄八尺遺跡 881)



第 227 図 土器胎土分析試料実測図

引用・参考文献

- 安藤文良 2002 「金倉寺出土古瓦について」『文化財協会報』第 21 号, 善通寺市文化財保護協会
- 大久保徹也 1990 「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 VII 下川津遺跡』, 香川県教育委員会
- 奥田尚 1995 「太田下・須川遺跡の土器の砂礫」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 4 冊 太田下・須川遺跡』, 香川県教育委員会
- 香川県 1987 a 『香川県史』第 2 卷通史編中世
- 香川県 1987 b 『香川県史』第 13 卷資料編考古
- 香川県教育委員会編 1998 『「県史跡 盛土山古墳」範囲確認調査報告書』
- 香川県教育委員会編 2004 『埋蔵文化財試掘調査報告 XVII 香川県内遺跡発掘調査』
- 香川県教育委員会編 2005 『埋蔵文化財試掘調査報告 XVIII 香川県内遺跡発掘調査』
- 香川県教育委員会編 2003 a 『県道多度津丸亀線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 中東遺跡』
- 香川県教育委員会編 2003 b 『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』
- 香川県教育委員会編 2008 『県道丸亀多度津線道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 中東遺跡 2・奥白方中落遺跡・奥白方南原遺跡』
- 香川県土木部河川課編 1980 『香川の河川』
- 木下晴一 1995 「大東川流域の段丘崖」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 16 冊 川津二代取遺跡』, 香川県教育委員会ほか
- 木下晴一 1995 b 「空中写真判読を中心とする中世平地城館址の分布調査 —香川県丸亀平野の事例（第一報）—」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』 III
- 木原溥幸 1997 「幕藩体制社会の確立」『香川県の歴史』, 山川出版社
- 木原溥幸編 2000 『近世の讃岐』, 美巧社
- 金田章裕 1988 「条里と村落生活」『香川県史』第 1 卷通史編原始・古代, 香川県
- 藏本晋司 1999 a 「中間西井坪遺跡出土土器の胎土分析」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 32 冊 中間西井坪遺跡 II』, 香川県教育委員会
- 藏本晋司 1999 b 「弥生時代終末期の讃岐地域の土器様相について 一下川津 B 類土器の動向を中心としてー」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 32 冊 中間西井坪遺跡 II』, 香川県教育委員会
- 建設省四国地方建設局編 1998 『四国地方土木地質図解説書』
- 香西成資 1719 『南海通記』
- 清水芳裕 1999 「中間西井坪遺跡出土土器の胎土の特徴と材料の検討」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 32 冊 中間西井坪遺跡 II』, 香川県教育委員会
- 千田稔 2001 『埋もれた港』, 小学館
- 善通寺市教育委員会編 2003 『四国学院大学構内遺跡発掘調査報告書』
- 高桑糸 1974 「丸亀図幅の地形区分」『研究報告』第 1 部第 37 号, 香川大学教育学部
- 高重進 1966 「律令的国郡津制の成立と崩壊」『岡山史学』18
- 高橋学 1995 「臨海平野における地形環境の変貌と土地開発」『古代の環境と考古学』, 古今書院
- 高松市歴史資料館編 1996 『第 11 回特別展 讃岐の古瓦展』
- 竹内理三編 1985 『角川日本地名大辞典 37 香川県』, 角川書店
- 多度津町 1963 『多度津町史』
- 多度津町 1991 『多度津町誌』資料編
- 多度津町教育委員会編 1993 『多度津町内遺跡発掘調査報告書 平成 4 年度国庫補助事業』
- 多度津町教育委員会編 1995 『多度津町内遺跡発掘調査報告書 平成 7 年度国庫補助事業』
- 多度津町教育委員会編 1999 『多度津町内遺跡発掘調査報告書 平成 10 年度国庫補助事業』
- 永井久美男編 1994 『中世の出土銭 ー出土銭の調査と分類ー』兵庫埋蔵銭調査会
- 日本の地質『四国地方』編集委員会編 1991 『日本の地質 8 四国地方』, 共立出版株式会社
- 橋詰茂 2003 「戦国期における香川氏の動向 ー『南海通記』の検証ー」『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』香川県教育委員会
- 長谷川修一・齊藤実 1989 『アーバンクボタ 28』, 久保田鉄工株式会社
- 藤澤良祐 2000 「西日本における瀬戸・美濃大窯製品の受容」『列島に華開く大窯製品 西日本の様相』, 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
- 松本和彦 2002 「香川県」『第 12 回九州近世陶磁学会資料 国内出土の肥前磁器』, 九州近世陶磁学会
- 松本敏三 1980 「香川県出土の古式須恵器」『瀬戸内海歴史民俗資料館年報』第 5 号
- 森下友子 1995 「胎土 1 類土器について」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 4 冊 太田下・須川遺跡』, 香川県教育委員会

遺構一覽表・出土遺物觀察表

建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB01	I a 区	東西棟側柱建物?	南列 N60.015° E	南列 2間 (4.068m)	西列 1間 (1.655m) 以上		北半部は調査区外、また積極的な根拠に乏しいが、東に庇復元
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP076	略円	0.17 × 0.17	6.317	0.196	褐色灰色粘性極細砂	—	
SP079	略円	0.27 × 0.27	6.236	0.273	褐色灰色粘性極細砂	土師質土器片	
SP099	楕円	0.31 × 0.26	6.091	0.422	褐色灰色粘性極細砂	土師質土器片	
SP466	楕円	0.31 × 0.26	6.332	0.161	灰褐色粘性極細砂	—	
SP813	楕円	0.26 × 0.24	6.281	0.22	—	土師質土器片	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB02	I a 区	東西棟側柱建物?	南列 N62.036° E	南列 3間 (5.792m)	東列 1間 (1.785m) 以上		北半部は調査区外
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP085	長円	0.26 × 0.17	6.284	0.246	褐色灰色粘性極細砂	土師質土器片	
SP093	楕円	0.18 × 0.16	6.431	0.101	褐色灰色粘性極細砂	—	
SP103	楕円	0.17 × 0.16	6.412	0.12	褐色灰色粘性極細砂	—	
SP111	略円	0.21 × 0.20	6.425	0.09	褐色灰色粘性極細砂	—	
SP485	楕円	0.17 × 0.15	6.261	0.228	褐色灰色粘性極細砂	—	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB03	I a 区	東西棟側柱建物	北列 N58.223° E	北列 2間 (4.067m)	東列 2間 (3.732m)	15.241 m ²	東面に庇
			南列 N58.432° E	南列 2間 (4.116m)	西列 1間 (3.718m)		
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP060	略円	0.25 × 0.25	6.268	0.255	灰褐色粘性極細砂	—	
SP063	楕円	0.20 × 0.20	6.249	0.234	暗褐色粘質土	—	
SP115	楕円	0.21 × 0.20	6.263	0.2	灰褐色粘性極細砂	土師質土器小皿等	
SP116	楕円	0.28 × 0.25	6.156	0.305	—	土師質土器片	
SP138	楕円	0.28 × 0.25	6.236	0.256	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片、陶器片	
SP150	楕円	0.18 × 0.17	6.31	0.197	暗褐色粘質土	土師質土器片	
SP176	不整	0.36 × 0.28	6.206	0.248	褐色灰色粘性極細砂	土師質土器小皿等	
SP210	楕円	0.25 × 0.23	6.168	0.343	暗褐色粘質土	—	
SP409	楕円	0.18 × 0.16	6.354	0.135	—	—	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB04	I a 区	東西棟側柱建物	北列 N61.886° E	北列 2間 (4.068m)	西列 2間 (3.696m)	(15.035 m ²)	
			南列 N62.438° E	南列 1間 (2.003m) 以上			
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP143	歪楕丸方	0.28 × 0.22	6.101	0.4	暗褐色粘質土	土師質土器足金	
SP168	不整	0.42 × 0.31	6.14	0.367	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片	2段掘り
SP197	楕円	0.30 × 0.25	6.133	0.367	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片	
SP211	楕円	0.27 × 0.18	6.245	0.255	褐色灰色粘性極細砂	—	
SP436	楕円?	0.115 × 0.143	6.305	0.169	—	—	SP172に切られる
SP456	略円	0.15 × 0.15	6.482	0.199	—	—	SB12と重複
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB05	I a 区	東西棟側柱建物	北列 N62.399° E	北列 2間 (5.838m)	西列 1間 (3.009m)	(17.567 m ²)	南東隅穴を欠く
			南列 N60.409° E	南列 1間 (2.803m) 以上			
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP154	楕円	0.28 × 0.24	6.251	0.259	褐色灰色粘性極細砂	土師質土器片	2段掘り
SP205B	不整	0.44 × 0.30	6.018	0.462	灰褐色粘性極細砂	—	
SP303	歪楕円	0.40 × 0.28	6.014	0.473	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片	
SP309	楕円?	0.23 × ?	6.108	0.371	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片	
SP454	楕円	0.139 × 0.128	6.526	0.162	—	土師質土器片	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB06	I a 区	東西棟側柱建物	北列 N63.449° E	北列 2間 (5.291m)	東列 1間 (2.541m)	(13.444 m ²)	南西隅穴を欠く。柱穴の規模が一定しない。
			南列 N63.56° E	南列 1間 (2.82m) 以上			
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP171	歪楕丸方	0.21 × 0.20	6.311	0.151	暗褐色粘質土	—	
SP203	楕円	0.36 × 0.34	5.985	0.494	褐色灰色粘性極細砂	土師質土器小皿・土鍋等	
SP260	歪楕円	0.34 × 0.33	6.081	0.414	—	—	
SP304	略円	0.20 × 0.20	6.211	0.278	暗褐色粘質土	土師質土器片、焼土塊	
SP453	楕円?	0.17 × 0.14	6.451	0.057	—	—	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB07	I a 区	南北棟側柱建物	東列 N26.79° W	東列 1間 (2.012m) 以上	北列 1間 (2.029m)	(7.789 m ²)	東南隅穴を欠く
			西列 N25.043° W	西列 2間 (3.839m)			
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP227	楕円	0.32 × 0.31	6.292	0.218	褐色灰色粘性極細砂	土師質土器片	
SP302	楕円	0.28 × 0.24	6.207	0.274	灰褐色粘性極細砂	土師質土器擂鉢等	
SP330	略円	0.30 × 0.31	6.254	0.236	—	土師質土器片、焼土塊	
SP365	略円?	0.20 × 0.20	6.354	0.128	褐色灰色粘性極細砂	—	
SP405	楕円?	0.24 × ?	6.24	0.216	—	土師質土器片、青磁碗	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB08	I a 区	東西棟側柱建物	北列 N64.159° E	北列 2間 (5.231m)	西列 2間 (2.771m) 以上	(15.688 m ²)	梁間東側南2柱を欠く
			南列 N63.945° E				
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP160	略円	0.15 × 0.14	6.315	0.177	褐色灰色粘性極細砂	燒土塊	
SP288	略円	0.10 × 0.10	6.429	0.063	—	—	
SP307	略円	0.21 × 0.21	6.247	0.24	褐色灰色粘性極細砂	土師質土器小皿等	
SP383	楕円	0.31 × 0.26	6.119	0.375	褐色灰色粘性極細砂	—	
SP395	楕円	0.23 × 0.20	6.193	0.084	褐色灰色粘性極細砂	—	
SP455	楕円	0.26 × 0.19	6.408	0.246	—	土師質土器片	

掘立柱建物一覧 (1)

建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB09	I a 区	東西棟側柱建物	北列 N61. 302° E 南列 N62. 117° E	北列 3間 (5.97m) 南列 3間 (6.026m)	東列 1間 (3.55m) 西列 1間 (3.462m)	21.029 m ²	西端は調査区外、柱通りは揃うが、柱間間隔は一定しない
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m) 残存深 (m)	埋土	遺物		備考
SP041	楕円	0.27 × 0.21	6.283	0.194	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片	
SP049	楕円	0.16 × 0.14	6.438	0.053	褐茶灰色粘性極細砂	—	
SP218	略円	0.21 × 0.20	6.204	0.31	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片	
SP249	楕円	0.19 × 0.18	6.336	0.147	暗褐色粘質土	土師質土器片	
SP297	楕円	0.20 × 0.18	6.372	0.11	褐茶灰色粘性極細砂	—	
SP352	楕円	0.17 × 0.16	6.365	0.121	暗褐色粘質土	—	
SP381	略円	0.24 × 0.24	6.127	0.351	褐茶灰色粘性極細砂	土師質土器片	
SP449	略円	0.21 × 0.20	6.299	0.19	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片、焼土塊	SK09 より後出
SP500	略円	0.17 × 0.17	6.433	0.061	褐茶灰色粘性極細砂	—	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB10	I a 区	南北棟側柱建物	東列 N29. 418° W 西列 N29. 409° W	東列 2間 (3.459m) 西列 1間 (1.466m) 以上	北列 1間 (2.564m)	(8.869 m ²)	南西隅柱を欠く
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m) 残存深 (m)	埋土	遺物		備考
SP289	楕円	0.25 × 0.23	6.145	0.344	暗褐色粘質土	土師質土器片、須恵質土器碗	
SP299	垂 隅 丸 方	0.25 × 0.23	6.139	0.343	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片	2段掘り
SP343	楕円	0.32 × 0.28	6.199	0.292	暗褐色粘質土	土師質土器小皿片	
SP443	楕円	0.23 × 0.20	6.255	0.213	灰褐色粘性極細砂	—	
SP486	楕円	0.28 × 0.23	6.272	0.211	灰褐色粘性極細砂	—	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB11	I a 区	南北棟側柱建物	東列 N29. 757° W 南列 N64. 286° E	東列 2間 (3.903m) 南列 1間 (1.881m) 以上	北列 1間 (1.826m) 以上		西半部は調査区外
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m) 残存深 (m)	埋土	遺物		備考
SP033	略円	0.37 × 0.37	6.078	0.421	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片	
SP038	楕円	0.35 × 0.33	6.305	0.193	暗褐色粘質土	土師質土器片	
SP046	垂 隅 丸 方	0.34 × 0.31	6.158	0.329	暗褐色粘質土	土師質土器片	
SP333	垂 隅 丸 方	0.35 × 0.34	6.164	0.314	—	土師質土器皿等	
SP350	略円	0.26 × 0.26	6.332	0.193	暗褐色粘質土	土師質土器片、亀山焼片	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB12	I a 区	東西棟側柱建物	北列 N63. 777° E 南列 N64. 286° E	北列 2間 (3.906m) 南列 1間 (1.747m) 以上	西列 1間 (2.542m)	(9.929 m ²)	南東隅柱を欠く
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m) 残存深 (m)	埋土	遺物		備考
SP018	隅丸方	0.202 × 0.211	6.321	0.159	暗褐色粘質土	土師質土器碗片	
SP054	垂 隅 丸 方	0.32 × 0.23	6.403	0.085	褐茶灰色粘性極細砂	—	
SP055	略円	0.19 × 0.18	6.096	0.394	褐茶灰色粘性極細砂	—	
SP393	楕円	0.17 × 0.15	6.251	0.114	褐茶灰色粘性極細砂	—	
SP514	不定	0.355 × 0.325	0.436	0.049	—	—	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB13	I a 区	南北棟縦柱建物	東列 N28. 172° W 西列 N28. 576° W	東列 2間 (3.891m) 西列 2間 (3.912m)	北列 2間 (3.895m) 南列 2間 (3.869m)	15.146 m ²	梁間北列中央穴を欠く
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m) 残存深 (m)	埋土	遺物		備考
SP008	略円	0.30 × 0.30	6.212	0.237	灰褐色粘性極細砂	土師質土器小皿等	
SP011	隅丸方	0.31 × 0.28	6.244	0.218	灰褐色粘性極細砂	土師質土器小皿等	
SP013	楕円	0.34 × 0.32	6.244	0.215	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片	
SP019	隅丸方	0.33 × 0.30	6.224	0.263	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片、亀山焼片	
SP024	楕円	0.26 × 0.23	6.304	0.185	褐茶灰色粘性極細砂	—	
SP032	垂 丸	0.42 × 0.36	6.148	0.357	褐茶灰色粘性極細砂	土師質土器片	
SP219	略円	0.33 × 0.33	6.136	0.337	暗褐色粘質土	土師質土器片	
SP396	略円	0.31 × 0.31	6.202	0.095	褐茶灰色粘性極細砂	土師質土器小皿等	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB14	I b 区	東西棟側柱建物	北列 N62. 147° E 南列 N64. 01° E	北列 2間 (5.869m) 南列 2間 (5.846m)	東列 2間 (4.376m) 西列 1間 (4.19m)	25.088 m ²	東に庇を有する。桁行長が南北でやや異なる
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m) 残存深 (m)	埋土	遺物		備考
SP837	長楕円	0.228 × 0.39	6.472	0.161	褐茶灰色粘性極細砂	瓦器碗片	
SP838	楕円	0.255 × 0.22	6.533	0.094	褐茶灰色粘性極細砂	—	
SP840	略円	0.271 × 0.272	6.37	0.271	褐茶灰色粘性極細砂	土師質土器小皿片、瓦器碗片	
SP886	楕円	0.192 × 0.209	6.49	0.138	灰褐色粘性極細砂	土師質土器小皿片	
SP893	楕円	0.236 × 0.219	6.464	0.166	灰褐色粘性極細砂	—	
SP907	楕円	0.12+ × 0.24	6.47	0.14	灰褐色粘性極細砂	—	根石 (砂岩削石、弱被熱痕)、SK15 に切られる
SP911	不定形	0.324 × 0.376	6.45	0.173	灰褐色粘性極細砂	土師質土器小皿片	
SP919	楕円	0.253 × 0.287	6.295	0.219	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片	
SP923	楕円	0.206 × 0.157	6.501	0.041	—	—	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB15	I b 区	南北棟側柱建物	東列 N27. 177° W 西列 N27. 026° W	東列 2間 (3.514m) 西列 2間 (3.497m)	北列 1間 (2.717m) 南列 1間 (2.725m)	9.538 m ²	SB16 より後出する
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m) 残存深 (m)	埋土	遺物		備考
SP629	楕円	0.185 × 0.174	6.241	0.362	灰褐色粘性極細砂	—	
SP631	略円	0.149 × 0.14	6.536	0.1	褐茶灰色粘性極細砂	—	
SP662	楕円	0.138 × 0.147	6.486	0.141	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片	
SP669C	楕円	0.164 × 0.212	6.334	0.267	灰褐色粘性極細砂	焼土塊	SP668 に切られる
SP857	略円	0.191 × 0.19	6.609	0.003	灰褐色粘性極細砂	—	
SP913	略円	0.165 × 0.161	6.521	0.124	褐茶灰色粘性極細砂	—	

掘立柱建物一覧 (2)

建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB16	I b 区	南北棟側柱建物	東列 N26.191° W 西列 N26.537° W	東列 2間 (3.768m) 西列 2間 (3.767m)	北列 2間 (3.29m) 南列 2間 (3.266m)	12.350 m ²	
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP618	梢円	0.115 × 0.133	6.544	0.087	灰褐色粘性極細砂	柱材	柱材遺存
SP620	梢円	0.297 × 0.288	6.267	0.348	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片	
SP625	梢円	0.153 × 0.142	6.523	0.111	褐茶灰色粘性極細砂	—	
SP632	梢円	0.221 × 0.177	6.364	0.267	灰褐色粘性極細砂	土師質土器小皿片、東播系須恵器捏鉢片	
SP643	梢円	0.218 × 0.203	6.554	0.068	褐茶灰色粘性極細砂	—	
SP663	梢円	0.179 × 0.19	6.558	0.068	灰褐色粘性極細砂	—	SP662 に切られる
SP668	梢円	0.181 × 0.206	6.447	0.164	灰褐色粘性極細砂	—	SP669C を切る
SP671	長梢円	0.169 × 0.358	6.34	0.285	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB17	I b 区	南北棟側柱建物	東列 N29.656° W 西列 N31.237° W	東列 2間 (3.955m) 西列 2間 (3.837m)	北列 2間 (3.16m) 南列 2間 (3.051m)	12.099 m ²	
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP647	梢円	0.179 × 0.163	6.473	0.162	灰褐色粘性極細砂	—	
SP653	梢円	0.21 × 0.237	6.404	0.213	褐茶灰色粘性極細砂	土師質土器片、肥前系陶器片、サヌカイト剥片	SP652 に切られる
SP660	略円	0.181 × 0.187	6.497	0.113	褐茶灰色粘性極細砂	—	
SP684	略円	0.242 × 0.24	6.448	0.193	褐茶灰色粘性極細砂	土師質土器片、焼土塊	
SP702	略円	0.152 × 0.156	6.47	0.152	酒灰色粘性極細砂	—	SP701 に切られる
SP736	梢円	0.146 × 0.137	6.529	0.086	褐茶灰色粘性極細砂	—	
SP739	梢円	0.242 × 0.227	6.286	0.334	褐茶灰色粘性極細砂	—	SP738 に切られる
SP743	長梢円	0.14 × 0.248	6.522	0.122	褐茶灰色粘性極細砂	—	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB18	I b 区	南北棟側柱建物	東列 N30.673° W 西列 N28.929° W	東列 3間 (5.792m) 西列 3間 (5.778m)	北列 2間 (2.964m) 南列 1間 (3.144m)	17.667 m ²	梁間南列中央穴を欠く、SB20 より先行
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP711	不整方	0.34 × 0.3	6.141	0.5	褐茶灰色粘性極細砂	須恵器片、土師質土器片	
SP717	梢円	0.243 × 0.23	6.363	0.286	褐茶灰色粘性極細砂	土師質土器小皿片	
SP729	略円	0.183 × 0.183	6.321	0.29	灰褐色粘性極細砂	焼土塊	
SP776	略円	0.35+ × 0.332	6.094	0.545	灰褐色粘性極細砂	—	SP775・搅乱に切られ、SP777 を切る
S P 8 0 1 B (SK12)	長梢円	0.649 × 0.355	6.159	0.476		土師質土器杯・土鍋片	搅乱に切られる、複数遺構の重複の可能性あり
SP808	梢円	0.077+ × 0.178+	6.3	0.351	褐茶灰色粘性極細砂	—	搅乱に切られる
SP864	略円	0.19 × 0.181	6.37	0.257	褐茶灰色粘性極細砂	土師質土器片	
SP874	略円	0.188 × 0.187	6.367	0.25	褐茶灰色粘性極細砂	—	SP715 に切られる
S P 8 9 1 B (SK15)	梢円	0.297+ × 0.369	6.188	0.447		土師質土器小皿片、焼土塊・柱材？	SP891A を切る
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB19	I b 区	南北棟側柱建物	東列 N28.45° W 西列 N29.134° W	東列 2間 (3.168m) 西列 2間 (3.122m)	北列 2間 (2.648m) 南列 2間 (2.612m)	8.271 m ²	
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP726	梢円	0.199 × 0.202	6.437	0.184	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片	
SP733	梢円	0.233 × 0.231	6.062	0.562	褐茶灰色粘性極細砂	土師質土器杯片、焼土塊、焼疊	SP732 に切られる
SP751	略円	0.196 × 0.187	6.391	0.226	灰褐色粘性極細砂	—	
SP774	略円	0.155 × 0.156	6.58	0.059	酒灰色粘性極細砂	—	
SP782	梢円	0.267 × 0.279	6.19	0.445	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片、焼土塊	
SP863	略円	0.178 × 0.181	6.492	0.131	灰褐色粘性極細砂	—	
SP871	梢円	0.158 × 0.168	6.535	0.087	灰褐色粘性極細砂	—	
SP876	略円	0.135 × 0.137	6.567	0.072	灰褐色粘性極細砂	—	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB20	I b 区	南北棟側柱建物	東列 N33.096° W 西列 N31.482° W	東列 2間 (3.161m) 西列 2間 (3.125m)	北列 2間 (2.33m) 南列 1間 (2.423m)	7.469 m ²	
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP714	略円	0.15 × 0.14	6.507	0.134	灰褐色粘性極細砂	—	
SP724	略円	0.31 × 0.30	6.323	0.29	淡茶色白色粘性極細砂	土師質土器小皿等	
SP728	梢円	0.23 × 0.16	6.498	0.112	灰褐色粘性極細砂	—	
SP753	梢円？	0.17 × ?	6.506	0.112	褐茶灰色粘性極細砂	—	SP752 により一部損壊
SP770	略円	0.17 × 0.17	6.544	0.096	灰褐色粘性極細砂	—	
SP771	梢円	0.29 × 0.24	6.325	0.313	褐茶灰色粘性極細砂	—	
SP775	略円	0.28 × 0.28	6.473	0.166	褐茶灰色粘性極細砂	土師質土器片	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB21	I b 区	東西棟側柱建物	北列 N58.704° E 南列 N58.932° E	北列 2間 (3.97m) 南列 2間 (4.124m)	東列 2間 (2.796m) 西列 2間 (2.783m)	11.289 m ²	桁行長が南北でやや異なる
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP532	梢円	0.18 × 0.18	6.304	0.319	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片	
SP536	梢円	0.22 × 0.20	6.386	0.231	灰褐色粘性極細砂	—	
SP539	梢円	0.19 × 0.19	6.462	0.158	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片、サヌカイト剝片	
SP543	梢円	0.22 × 0.17	6.419	0.225	灰褐色粘性極細砂	—	
SP585	梢円	0.20 × 0.19	6.563	0.083	灰褐色粘性極細砂	—	
SP595	梢円	0.19 × 0.18	6.41	0.207	褐茶灰色粘性極細砂	土師質土器片	
SP608	長梢円	0.20 × 0.16	6.424	0.16	灰褐色粘性極細砂	—	
SP624	梢円	0.19 × 0.18	6.409	0.229	褐茶灰色粘性極細砂	—	

掘立柱建物一覧 (3)

建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB22	I b 区	南北棟側柱建物	東列 N19.37° W 西列 N19.863° W	東列 1間 (1.564m) 以上 西列 3間 (4.465m)	北列 1間 (3.125m)	(13.953 m ²)	南半部は調査区外
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP520	梢円	0.2 × 0.191	6.321	0.304	灰褐色粘性極細砂	土師質土器小皿	土器埋納
SP550	略円	0.191 × 0.19	6.36	0.272	灰褐色粘性極細砂	—	
SP563	梢円	0.204 × 0.243	6.495	0.124	褐茶灰色粘性極細砂	—	SP564・565を切る、根石（安山岩亜円礫、一部被熱痕）
SP566	梢円	0.197 × 0.224	6.515	0.11	褐茶灰色粘性極細砂	—	
SP928	梢円	0.231 × 0.214	5.921	0.37	—	—	SD03を切る
SP929	略円	0.21 × 0.216	6.169	0.364	—	—	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB23	II a 区	東西棟側柱建物	南列 N58.669° E	南列 5間 (10.132m)			北半部は調査区外
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP1507	梢円？	0.228 × 0.31	6.083	0.518	淡茶色白色粘性極細砂	土師質土器足釜片、中国産白磁皿片	搅乱に切られる
SP1548	略円	0.29 × 0.286	6.053	0.551	淡茶色白色粘性極細砂	土師質土器小皿・足釜・土鍋・亀山焼片、貝	酷石
SP1644	略円	0.318 × 0.305	6.126	0.475	褐茶灰色粘性極細砂	土師質土器足釜・土鍋・櫛鉢片	酷石
SP1764	略円	0.282 × 0.296	6.038	0.555	淡茶色白色粘性極細砂	土師質土器足釜・土鍋・亀山焼片・焼磯	SP1765を切る
SP1873	梢円	0.305 × 0.303	5.967	0.643	濁灰色粘性極細砂	土師質土器皿・土鍋・瓦器腕片・角環凝灰岩片	
SP1918	略円	0.34 × 0.352	6.144	0.454	淡茶色白色粘性極細砂	土師質土器足釜片・焼塊・鉄鋸？・鉄釘	酷石
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB24	II a 区	東西棟側柱建物？	南列 N63.063° E	南列 2間 (5.062m)			北半部は調査区外、西面に庇？
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP1512	梢円	0.349 × 0.407	5.956	0.638	淡茶色白色粘性極細砂	土師質土器片・亀山焼片・中国産青磁碗片	
SP1593	梢円	0.379 × 0.355	6.115	0.507	濁灰色粘性極細砂	土師質土器片・焼土塊	SP1594に切られる
SP1659	略円	0.368 × 0.347	6.512	0.092	淡茶色白色粘性極細砂	土師質土器片	
SP1820	歪梢円	0.251 × 0.183	6.412	0.174	淡茶色白色粘性極細砂	土師質土器片	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB25	II a 区	東西棟側柱建物	北列 N63.166° E 南列 N61.698° E	北列 3間 (5.878m) 南列 3間 (6.001m)	東列 1間 (2.81m) 西列 2間 (2.964m)	17.147 m ²	SB26より先行する？
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP1428	歪梢円	0.304 × 0.337	6.223	0.348	灰褐色粘性極細砂	柱材	SP1427に切られる。柱材遺存
SP1457	略円	0.37 × 0.361	6.061	0.538	淡茶色白色粘性極細砂	土師質土器皿・櫛鉢片・肥前系陶器皿・天目碗片	SP1458を切る
SP1520	略円	0.344 × 0.344	6.229	0.359	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片	SP1519に切られる
SP1560	長梢円	0.263 × 0.145 +	6.429	0.159	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片・肥前系磁器碗片	SP1559に切られる
SP1709	略円	0.337 × 0.358	6.099	0.387	濁灰色粘性極細砂	土師質土器片・柱材	SP1708を切る。柱材遺存
SP1720	略円	0.23 × 0.223	6.317	0.2	褐茶灰色粘性極細砂	土師質土器片	
SP1726	梢円？	0.172 × 0.289	6.025	0.481	淡茶色白色粘性極細砂	不明鉄器片	SP1725に切られる
SP1735	梢円？	0.171 × 0.133 +	6.418	0.103	淡茶色白色粘性極細砂	—	SP1736に切られる
SP1948	不定	0.152 × 0.125	6.146	0.425	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB26	II a 区	東西棟側柱建物	北列 N63.043° E 南列 N61.874° E	北列 2間 (4.895m) 南列 2間 (5.019m)	東列 1間 (2.595m) 西列 1間 (2.699m)	13.121 m ²	SB27より後出
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP1317	略円	0.31 × 0.314	6.065	0.371	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片・肥前系陶器片	SP1318を切る
SP1330	梢円	0.275 × 0.236	6.18	0.26	灰褐色粘性極細砂	土師器土器	
SP1344	不定	0.401 × 0.275	6.028	0.465	濁灰色粘性極細砂	須恵器片・土師質土器片	
SP1480	略円	0.339 × 0.34	6.019	0.531	濁灰色粘性極細砂	土師質土器片	SP1481を切る。根石
SP1500	梢円	0.259 × 0.272	6.329	0.218	淡茶色白色粘性極細砂	土師質土器片・サヌカイトチップ	SP1502を切る
SP1525b	梢円	0.285 × 0.306	5.966	0.591	灰褐色粘性極細砂	須恵器片・土師質土器片	根石・SP1525aに切られる
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB27	II a 区	南北棟側柱建物	東列 N30.611° W 西列 N30.265° W	東列 2間 (4.699m) 西列 2間 (4.688m)	北列 1間 (2.828m) 南列 1間 (2.856m)	13.339 m ²	SB29と柱穴が重複
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP1114	歪略円	0.206 × 0.206	6.343	0.178	淡茶色白色粘性極細砂	土師質土器片	
SP1120	梢円	0.314 × 0.294	6.036	0.494	淡茶色白色粘性極細砂	土師質土器片	SK24を切る
SP1320	梢円	0.232 × 0.204	6.073	0.39	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片	SP1319を切る
SP1330	梢円	0.275 × 0.236	6.18	0.26	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片	
SP1481	略円？	0.203 × 0.295	6.082	0.461	淡茶色白色粘性極細砂	—	根石（花崗岩・砂岩亜角礫）、SP1480に切られる
SP1501	略円	0.253 × 0.254	6.159	0.383	淡茶色白色粘性極細砂	土師質土器片	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB28	II a 区	東西棟側柱建物	北列 N64.924° E 南列 N65.751° E	北列 2間 (4.943m) 南列 2間 (4.918m)	東列 2間 (4.116m) 西列 2間 (4.042m)	20.112 m ²	
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP1326	梢円	0.225 × 0.247	6.079	0.347	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片・柱材	柱材遺存
SP1336	梢円	0.238 × 0.226	6.039	0.43	淡茶色白色粘性極細砂	燒土塊	SP1337を切る
SP1354	不整梢円	0.33 × 0.362	6.008	0.462	濁灰色粘性極細砂	土師質土器片・燒土塊	
SP1436	梢円？	0.267 × 0.315	6.099	0.479	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片	SP1956に切られる
SP1466	梢円	0.202 × 0.16	6.082	0.527	淡茶色白色粘性極細砂	土師質土器片・燒土塊	
SP1490A	略円	0.23 × 0.234	6.281	0.236	灰褐色粘性極細砂	—	SP1490Bを切る
SP1557	隅丸方	0.324 × 0.286	6.051	0.542	褐茶灰色粘性極細砂	土師質土器皿・燒土塊・鉄釘？	SP1558を切る
SP1738	梢円	0.246 × 0.227	6.081	0.468	褐茶灰色粘性極細砂	土師質土器片	

掘立柱建物一覧 (4)

建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB29	II a 区	南北棟側柱建物？	西列 N24.19° W	西列 2間 (4.06m)			東半部は調査区外
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP943	不定	0.45 × 0.257	6.04	0.472	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片	
SP1108	梢円	0.28 × 0.251	6.047	0.481	淡茶色白色粘性極細砂	土師質土器片	
SP1120	梢円	0.314 × 0.294	6.036	0.494	淡茶色白色粘性極細砂	土師質土器片	
柱穴番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB30	II a 区	南北棟側柱建物	西列 N37.844° W	西列 2間 (3.847m)	北列 1間 (1.946m) 以上		東半部は調査区外
					南列 1間 (1.9m) 以上		
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP937	略円？	0.112 + × 0.177	6.135	0.356	灰褐色粘性極細砂	—	東半部は調査区外
SP946	梢円	0.199 × 0.202	6.269	0.239	灰褐色粘性極細砂	—	
SP1101	梢円	0.281 × 0.262	6.304	0.211	淡茶色白色粘性極細砂	—	根石 (砥石)
SP1110	略円	0.254 × 0.258	6.144	0.381	淡茶色白色粘性極細砂	—	
SP1118	梢円	0.203 × 0.238	6.477	0.056	淡茶色白色粘性極細砂	—	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB31	II a 区	東西棟側柱建物	北列 N53.237° E	北列 2間 (5.019m)	東列 1間 (2.781m)	13.901 m ²	
			南列 N53.551° E	南列 2間 (5.027m)	西列 1間 (2.754m)		
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP1152	梢円	0.204 × 0.196	6.319	0.149	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片	SP1153 を切る
SP1185	略円	0.13 × 0.135	6.305	0.204	濁灰色粘性極細砂	—	
SP1333	不整方	0.191 × 0.191	6.377	0.017	灰褐色粘性極細砂	—	
SP1737	略円	0.155 × 0.16	6.253	0.281	褐茶色粘性極細砂	土師質土器土錐片	
SP1754	略円	0.198 × 0.199	6.327	0.191	淡茶色白色粘性極細砂	—	
SP1953	梢円？	0.135 + × 0.204	6.392	0.135	—	—	搅乱に切られる
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB32	II a 区	東西棟側柱建物	北列 N65.168° E	北列 3間 (7.538m)	東列 2間 (4.652m)	34.5542 m ²	SK27 より先行
			南列 N66.594° E	南列 3間 (7.649m)	西列 2間 (4.449m)		
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP947	不定	0.28 × 0.339	6.08	0.427	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片	
SP963	梢円	0.208 × 0.209	6.335	0.161	灰褐色粘性極細砂	—	SP964 を切る
SP1024	梢円	0.313 × 0.314	6.143	0.383	灰褐色粘性極細砂	土師質土器小皿片	SP1025 を切る
SP1028	不整 梢円	0.27 × 0.394	6.291	0.23	灰褐色粘性極細砂	土師質土器鉢・土錐片	SP1029 を切る
SP1146	隅丸方	0.292 × 0.265	6.1	0.422	淡茶色白色粘性極細砂	土師質土器鉢鉢片	SP1147 を切る
SP1161	梢円	0.197 × 0.199	6.264	0.264	淡茶色白色粘性極細砂	土師質土器片	
SP1188	長梢円	0.327 × 0.198	6.165	0.358	淡茶色白色粘性極細砂	土師質土器片	
SP1228	隅丸方	0.135 × 0.193	6.349	0.173	灰褐色粘性極細砂	—	
SP1249	略円	0.24 × 0.248	6.27	0.233	淡茶色白色粘性極細砂	土師質土器片	
SP1301	梢円	0.217 × 0.24	6.103	0.412	淡茶色白色粘性極細砂	土師質土器片	SK27 に切られる
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB33	II a 区	南北棟側柱建物	東列 N23.347° W	東列 3間 (4.776m)	北列 2間 (2.805m)	13.475 m ²	
			西列 N23.901° W	西列 3間 (4.911m)	南列 2間 (2.759m)		
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP1595	梢円	0.146 × 0.145	6.494	0.13	淡茶色白色粘性極細砂	土師質土器片	
SP1611	歪略円	0.131 × 0.134	6.465	0.144	淡茶色白色粘性極細砂	偏前焼鉢鉢片	
SP1616	梢円	0.205 × 0.227	6.136	0.466	淡茶色白色粘性極細砂	—	
SP1641	歪梢円	0.142 × 0.148	6.447	0.141	淡茶色白色粘性極細砂	土師質土器片、危山焼片	
SP1658	略円？	0.155 × 0.11 +	6.542	0.066	淡茶色白色粘性極細砂	—	SP1657 に切られる
SP1748	歪梢円	0.133 × 0.167	6.38	0.132	褐茶色粘性極細砂	土師質土器片	
SP1759	梢円	0.22 × 0.201	6.114	0.407	褐茶色粘性極細砂	土師質土器片、偏前焼片	
SP1778	梢円	0.189 + × 0.17	6.373	0.216	—	—	搅乱に切られる
SP1788	梢円	0.175 × 0.17	6.35	0.254	淡茶色白色粘性極細砂	—	
SP1857	梢円	0.147 × 0.134	6.393	0.125	淡茶色白色粘性極細砂	—	SP1856 に切られる
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB34	II a 区	東西棟側柱建物	北列 N58.118° E	北列 3間 (5.964m)	東列 2間 (3.667m)	22.137 m ²	SB36 より後出し、SK33A・B より先行
			南列 N56.622° E	南列 3間 (5.86m)	西列 2間 (3.822m)		
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP1649	梢円	0.171 × 0.187	6.476	0.126	淡茶色白色粘性極細砂	土石	土石、SP1648 を切る
SP1668	梢円	0.154 × 0.152	6.437	0.158	淡茶色白色粘性極細砂	—	
SP1693	梢円？	0.183 + × 0.268	6.551	0.019	淡茶色白色粘性極細砂	土師質土器片	SP1691 に切られ、SP1694・1695 を切る
SP1800	梢円	0.296 × 0.247 +	6.25	0.326	淡茶色白色粘性極細砂	—	SP1799 に切られ、SP1801 を切る
SP1823	梢円	0.185 × 0.251	6.506	0.091	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片	
SP1879	梢円	0.212 × 0.214	6.41	0.2	淡茶色白色粘性極細砂	—	SP1878 に切られる
SP1919	梢円	0.224 × 0.169	6.321	0.303	褐茶色粘性極細砂	土師質土器足金片	
SP1969	梢円	0.224 × 0.274	6.037	0.27	淡茶色白色粘性極細砂	—	SK33A に切られる
SP1972	梢円	0.171 × 0.221	6.405	0.202	灰褐色粘性極細砂	—	SK33A に切られる
SP1985	梢円	0.226 × 0.217	6.155	0.128	—	—	SK33B に切られる
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB35	II a 区	東西棟側柱建物	北列 N63.962° E	北列 3間 (4.966m)	東列 2間 (2.513m)	12.409 m ²	SK31 より先行
			南列 N63.841° E	南列 3間 (4.888m)	西列 1間 (2.524m)		
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP1624B	梢円	0.135 × 0.159	6.455	0.117	灰褐色粘性極細砂	—	
SP1631	梢円	0.111 × 0.109	6.505	0.109	淡茶色白色粘性極細砂	土師質土器片	
SP1640	梢円	0.127 × 0.141	6.476	0.139	淡茶色白色粘性極細砂	—	
SP1769	梢円	0.156 × 0.163	6.537	0.06	—	—	
SP1793	梢円	0.174 × 0.163	6.495	0.105	淡茶色白色粘性極細砂	土師質土器片	SP1794 を切る
SP1832	梢円	0.168 × 0.156	6.502	0.099	淡茶色白色粘性極細砂	—	
SP1843	梢円？	0.168 + × 0.176	6.46	0.114	淡茶色白色粘性極細砂	土師質土器片	SP1842・SK31 に切られる
SP1881	梢円	0.181 × 0.177	6.505	0.087	灰褐色粘性極細砂	動物遺存体	
SP1896	梢円	0.125 × 0.134	6.43	0.153	—	—	

掘立柱建物一覧 (5)

建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB36	II a 区	東西棟側柱建物	北列 N60. 565° E 南列 N60. 777° E	北列 3間 (5.957m) 南列 3間 (5.918m)	東列 2間 (3.88m) 西列 2間 (3.858m)	22.972 m ²	SK33A・Bより先行
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP1275	梢円	0.342 × 0.329	6.03	0.48	淡茶色白色粘性極細砂	土師質土器鉢片	
SP1290	梢円	0.398 × 0.344	6.001	0.49	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片	
SP1370	隅丸	0.265 × 0.284	5.96	0.499	濁灰色粘性極細砂	土師質土器皿片	SP1372を切る
SP1385	隅丸	0.265 × 0.265	6.028	0.444	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片	SP1386を切る
SP1695	略円?	0.311 × 0.298 +	5.993	0.577		土師質土器片	酷石、SP1693に切られ、SP1696を切る
SP1761	梢円	0.199 + × 0.198	6.305	0.228	淡茶色白色粘性極細砂	土師質土器片	SP1760に切られる
SP1806	梢円?	0.209 + × 0.283	5.947	0.629		土師質土器足釜片	酷石、SP1805・1880に切られる
SP1898	不定	0.333 × 0.265 +	5.963	0.628	淡茶色白色粘性極細砂	土師質土器土鍋片	根石(花崗岩削石)
SP1970	梢円	0.243 × 0.294	5.963	0.37	淡茶色白色粘性極細砂	土師質土器片	SK33Aに切られる
SP1978	梢円	0.196 × 0.169	6.302	0.181	淡茶色白色粘性極細砂	土師質土器鉢片	SK33Aに切られる
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB37	II a 区	南北棟側柱建物	東列 N29. 911° W 西列 N30. 5° W	東列 2間 (4.144m) 西列 2間 (4.229m)	北列 1間 (2.64m) 南列 1間 (2.596m)	10.960 m ²	
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP1229	梢円	0.246 × 0.249	6.191	0.332	淡茶色白色粘性極細砂	サヌカイトチップ	
SP1245	略円?	0.154 × 0.233	6.358	0.157	灰褐色粘性極細砂	—	SP1242・1244に切られる
SP1261	梢円	0.177 × 0.149	6.188	0.337	淡茶色白色粘性極細砂	土師質土器片	SP1262を切る
SP1273	梢円	0.172 × 0.185 +	6.299	0.218	淡茶色白色粘性極細砂	土師質土器片	
SP1285	梢円?	0.122 × 0.121 +	6.384	0.079	灰褐色粘性極細砂	—	SP1284に切られ、SP1286を切る
SP1288	梢円	0.14 × 0.156	6.461	0.054	—	—	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SH38	II a 区	東西棟側柱建物	北列 N53. 468° E 南列 N53. 575° E	南列 3間 (6.157m)	東列 1間 (3.069m)	(18.896 m ²)	北西隅柱を欠く
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP948	梢円	0.236 × 0.256	6.155	0.357	灰褐色粘性極細砂	焼土塊細粒	
SP969	梢円	0.29 × 0.24	6.212	0.287	灰褐色粘性極細砂	焼土塊	
SP981	梢円	0.228 × 0.246	6.218	0.313	灰褐色粘性極細砂	土師質土器小皿?、磁器、焼土塊	
SP1000	梢円	0.2 × 0.196	6.377	0.136	褐茶色粘性極細砂	土師質土器足釜片、土鍋片	SP1001を切る
SP1164	梢円	0.22 × 0.182	6.199	0.325	灰褐色粘性極細砂	焼土塊	
SP1175	略円	0.19 × 0.191	6.23	0.29	淡茶色白色粘性極細砂	土師質土器片、焼土塊	
SP1196	梢円	0.146 + × 0.189	6.17	0.353	淡茶色白色粘性極細砂	—	SP1195に切られる
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB39	II a 区	東西棟側柱建物	北列 N55. 951° E 南列 N54. 801° E	北列 2間 (3.755m) 南列 2間 (3.8m)	東列 1間 (2.476m) 西列 1間 (2.553m)	9.499 m ²	
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP966	梢円	0.149 × 0.164	6.263	0.243	灰褐色粘性極細砂	—	
SP986	略円?	0.212 × 0.223	6.438	0.09	灰褐色粘性極細砂	鉄釘	
SP1026	梢円	0.19 × 0.274	6.145	0.372	灰褐色粘性極細砂	焼土塊	
SP1174	略円?	0.243 × 0.248	6.385	0.134	淡茶色白色粘性極細砂	—	
SP1194	歪略円	0.163 × 0.169	6.31	0.208	灰褐色粘性極細砂	土師質土器碗?片	SP1193を切る
SP1225	梢円	0.187 × 0.168	6.476	0.049	—	—	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB40	II a 区	東西棟側柱建物	北列 N67. 985° E 南列 N67. 954° E	北列 2間 (3.62m) 南列 2間 (3.389m)	東列 2間 (3.083m) 西列 2間 (3.092m)	10.820 m ²	SD09より先行
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP950	不整方	0.248 × 0.246	6.149	0.355	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片	
SP953	略円?	0.231 × 0.234	6.115	0.378	灰褐色粘性極細砂	柱材	柱材遺存
SP961	梢円	0.234 × 0.281	6.221	0.271	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片、柱材	柱材遺存
SP976	梢円	0.278 × 0.289	6.098	0.417	灰褐色粘性極細砂	柱材?	柱材遺存
SP979	略円	0.181 × 0.174	6.239	0.289	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片	SP980を切る
SP1085	梢円	0.262 × 0.255	6.052	0.411	灰褐色粘性極細砂	柱材	柱材遺存、SD09に切られる
SP1298	梢円	0.164 × 0.154	6.049	0.132	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片	
SP1299	梢円	0.197 × 0.247	6.138	0.328	灰褐色粘性極細砂	土師質土器片	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB41	II b 区	東西棟側柱建物	北列 N61. 383° E 南列 N61. 096° E	北列 2間 (4.535m) 南列 2間 (4.558m)	東列 2間 (4.152m) 西列 2間 (4.175m)	18.929 m ²	
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP2182	略円?	0.232 × 0.236	5.913	0.584		土師質土器皿、肥前系陶器構縁皿片	SP2237を切る
SP2183	略円	0.268 × 0.253	5.984	0.488		土師質土器片、焼土塊、不明鉄器片	
SP2191	梢円	0.227 × 0.25	5.99	0.516		土師質土器片、焼土塊	
SP2250	梢円	0.254 × 0.257	6.107	0.394		土師質土器片、刀子?	
SP2266	略円?	0.208 × 0.207	6.411	0.098		—	
SP2291	梢円	0.254 × 0.298	5.958	0.506		土師質土器片、火打石?、柱材	柱材遺存
SP2292	梢円	0.236 × 0.329	5.966	0.51		土師質土器片、柱材	柱材遺存
SP2295	梢円	0.252 × 0.289	6.007	0.477		柱材	柱材遺存
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB42	II b 区	南北棟側柱建物	東列 N30. 392° W 西列 N29. 343° W	東列 1間 (4.918m) 西列 2間 (4.9m)	北列 2間 (3.913m) 南列 2間 (4.005m)	19.435 m ²	桁行東列中央柱を欠く、SK36より後出
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP2257	略円?	0.371 × 0.363	5.907	0.609		土師質土器片、備前系壺片、焼土塊	
SP2284	略円?	0.314 × 0.31	5.915	0.578		土師質土器片、焼土塊	SK36を切る
SP2289	略円?	0.309 × 0.314	5.889	0.601		土師質土器片、瓦器碗片、瓦質土器火鉢片	SP2290を切る
SP2299	略円?	0.273 × 0.268	6.081	0.398		土師質土器皿、壺鉢片、焼土塊	
SP2356	梢円	0.34 × 0.308	5.888	0.616		土師質土器皿、杯、備前焼片、焼土塊	
SP2358	梢円	0.295 × 0.354	5.933	0.524		土師質土器片、サヌカイト刺片、柱材	柱材遺存
SP2365	梢円	0.171 × 0.235	5.856	0.606		土師質土器片	SP2366を切る

掘立柱建物一覧 (6)

建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB43	II b 区	東西棟側柱建物	北列 N61.078° E 南列 N59.032° E	北列 4間 (7.831m) 南列 4間 (7.834m)	東列 1間 (3.743m) 西列 1間 (4.024m)	30.418 m ²	平面やや台形
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP2141	楕円	0.186 × 0.248	6.036	0.474		土師質土器片、柱材	柱材遺存
SP2152	楕円?	0.282 × 0.314 +	5.879	0.627		土師質土器片、肥前系磁器小杯片	SP2151に切られる
SP2173	長楕円	0.209 × 0.452	6.106	0.339		土師質土器片、須恵質土器片、柱材、焼礫	柱材遺存
SP2234	略円	0.135 × 0.144	6.427	0.042		土師質土器片	
SP2235	楕円	0.225 × 0.26	5.964	0.54		土師質土器皿片	
SP2328	楕円	0.254 × 0.281	5.972	0.516		土師質土器片、焼礫	
SP2338	略円?	0.23 × 0.099 +	5.931	0.553		土師質土器足釜片、肥前系陶器皿片	SP2337に切られる
SP2351	歪略円	0.288 × 0.296	6.015	0.482		焼礫	
SP2360	楕円	0.287 × 0.223	5.994	0.459		土師質土器片、鉄釘	
SP2363	歪楕円	0.298 × 0.453	6.013	0.452		土師質土器片、須恵質土器片、柱材	柱材遺存
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB44	II b 区	東西棟側柱建物	北列 N59.921° E 南列 N59.083° E	北列 3間 (6.058m) 南列 3間 (5.928m)	東列 2間 (4.703m) 西列 1間 (4.793m)	28.455 m ²	梁間西列中央柱を欠く
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP2320	略円	0.324 × 0.345	5.967	0.536		土師質土器皿片、肥前系磁器片、焼土塊	
SP2334	略円	0.294 × 0.315	6.009	0.471		土師質土器皿片、焼土塊	
SP2342	歪楕丸方	0.249 × 0.287	5.896	0.616		土師質土器皿片、焼土塊	
SP2344	楕円	0.292 × 0.329	5.94	0.546		土師質土器皿片、瓦器片、中国産磁器碗、焼土塊	
SP2345	不定	0.322 × 0.496	5.812	0.638		土師質土器皿・土鍋片、サヌカイト剝片	
SP2347	略円	0.228 × 0.228	5.901	0.55		土師質土器片、肥前系陶器片、焼土塊、柱材?	
SP2354	歪楕円	0.341 × 0.371	5.896	0.609		土師質土器片、焼土塊	踏石
SP2359	略円?	0.229 × 0.147 +	5.956	0.486		—	搅乱に切られる
SP2367	楕円	0.251 × 0.29	5.911	0.558		土師質土器足釜片、焼土塊	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB45	II b 区	南北棟側柱建物	東列 N30.681° W 西列 N29.315° W	東列 2間 (3.208m) 西列 1間 (3.28m)	北列 1間 (3.051m) 南列 1間 (3.131m)	10.027 m ²	桁行西列中央柱を欠く
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP2315	楕円	0.172 × 0.198	6.225	0.265		土師質土器皿片焼土塊	
SP2321	楕円	0.208 × 0.247	6.268	0.229		土師質土器皿片	
SP2324	略円	0.125 × 0.126	6.436	0.063		—	
SP2326	略円	0.184 × 0.168	6.231	0.274		土師質土器片、砥石	踏石
SP2369	楕円	0.166 × 0.182	6.213	0.234		—	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB46	II b 区	東西棟側柱建物	北列 N58.027° E	北列 2間 (4.768m)	東列 1間 (3.505m)	(16.712 m ²)	南西隅柱を欠く
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP2149	楕円	0.207 × 0.187	6.403	0.112		—	
SP2164	略円	0.154 × 0.157	6.398	0.095		—	
SP2167	歪楕円	0.163 × 0.154	6.359	0.122		鐵鍊片	
SP2232	楕丸方	0.175 × 0.227	6.37	0.089		土師質土器片	
SP2233	歪楕円	0.185 × 0.144	6.339	0.146		黒色土器片	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB47	II b 区	東西棟側柱建物	北列 N57.245° E 南列 N59.492° E	北列 2間 (4.247m) 南列 2間 (4.213m)	東列 2間 (3.709m) 西列 2間 (3.543m)	15.338 m ²	
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP2051	略円	0.182 × 0.108	6.304	0.181		土師質土器片	
SP2085	楕円	0.143 × 0.134	6.466	0.04		—	
SP2097	略円	0.155 × 0.159	6.231	0.273		土師質土器片	
SP2177	楕円	0.176 × 0.196	6.197	0.281		土師質土器片、肥前系磁器皿片	
SP2199	楕円?	0.26 × 0.102 +	6.127	0.345		土師質土器片	搅乱に切られる
SP2201	歪楕円	0.174 × 0.196	6.166	0.322		土師質土器皿片、焼土塊	
SP2206	略円	0.227 × 0.217	6.131	0.371		土師質土器皿・鋤鉗片	
SP2215	楕丸方	0.23 × 0.236	6.301	0.182		土師質土器片	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB48	II b 区	南北棟側柱建物	東列 N30.339° W 西列 N33.243° W	東列 2間 (4.02m) 西列 2間 (3.988m)	北列 1間 (3.596m) 南列 2間 (3.388m)	14.003 m ²	梁間北列中央柱を欠く
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP2075	不定	0.413 × 0.215	6.128	0.392		土師質土器片、焼土塊	
SP2086	楕円	0.33 × 0.282	6.141	0.352		土師質土器片、焼土塊、柱材	柱材遺存
SP2093	略円	0.195 × 0.199	6.383	0.139		—	
SP2102	歪楕丸方	0.363 × 0.295	6.1	0.429		土師質土器小皿・杯・足釜片、須恵質土器片	
SP2104	歪楕円	0.291 × 0.31	6.116	0.395		龟山焼片、肥前系陶器皿片	
SP2210	略円	0.229 × 0.209	6.142	0.34		土師質土器片	
SP2215	歪楕丸方	0.263 × 0.249	6.301	0.182		土師質土器片	
SP2216	略円	0.269 × 0.289	6.064	0.417		土師質土器片、焼土塊	

掘立柱建物一覧 (7)

建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB49	II b 区	東西棟側柱建物	北列 N55.027° E 南列 N55.843° E	北列 2間 (4.995m) 南列 2間 (4.958m)	東列 2間 (3.256m) 西列 2間 (3.19m)	16.039 m ²	
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m) 埋土	遺物		備考
SP2037	楕円	0.217 × 0.214	6.279	0.228	—		
SP2039	楕円	0.193 × 0.172	6.184	0.325	—		
SP2043	楕円	0.188 × 0.198	6.407	0.094	土師質土器片		
SP2069	歪楕円	0.203 × 0.193	6.211	0.283	土師質土器片		
SP2077	略円	0.169 × 0.141	6.211	0.303	—		SP2076 に切られる
SP2094	楕円	0.27 × 0.242	6.042	0.476	土師質土器片、東播系須恵質土器片捏鉢片		酷石 (砂岩割石、被熱痕著)
SP2113	略円	0.229 × 0.22	6.086	0.435	土師質土器片、須恵質土器片、柱材		柱材遺存
SP2117	略円	0.189 × 0.198	6.145	0.377	—		SP2118 を切る
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB50	II b 区	東西棟側柱建物	北列 N59.057° E 南列 N58.433° E	北列 2間 (4.078m) 南列 2間 (4.082m)	東列 1間 (3.442m) 西列 1間 (3.488m)	14.137 m ²	
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m) 埋土	遺物		備考
SP2028	楕円	0.356 × 0.332	5.971	0.525	土師質土器片、鉄釘		
SP2054	歪楕円九方	0.298 × 0.314	5.955	0.487	土師質土器片、肥前系陶器灰釉皿片、偏前焼捏鉢片、平瓦片、焼土塊		
SP2058	楕円	0.261 × 0.252	5.956	0.553	土師質土器皿片、偏前焼片		
SP2062	略円	0.297 × 0.282	5.955	0.549	土師質土器片、肥前系陶器碗片、焼土塊		
SP2090	楕円	0.399 × 0.479	6.096	0.425	土師質土器片 黒色土器片、瀬戸・美濃系陶器器片		SP2089 に切られる
SP2121	楕円	0.351 × 0.31	6.133	0.351	土師質土器片、焼土塊		
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB51	II b 区	東西棟側柱建物	北列 N61.283° E 南列 N61.875° E	北列 3間 (5.921m) 南列 3間 (5.927m)	東列 2間 (3.06m) 西列 1間 (3m)	17.950 m ²	梁間西列中央柱を欠く
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m) 埋土	遺物		備考
SP1066	略円	0.225 × 0.223	6.191	0.313	—		
SP1077	楕円	0.241 × 0.255	6.148	0.347	土師質土器片		
SP1079	楕円?	0.318 × 0.274 +	5.98	0.502	土師質土器皿片、サヌカイト剥片、刀子?、鉄滓、柱材		南半部は調査区外、SP1080 を切る
SP1082	略円	0.285 × 0.279	6.006	0.476	土師質土器片、瓦器碗片		
SP2000	楕円	0.275 × 0.252	5.994	0.463	土師質土器皿・土鍋片、瀬戸・美濃系陶器天目碗片		
SP2011	略円?	0.274 × 0.205 +	6.015	0.454	土師質土器片		南半部は調査区外
SP2012	歪楕円	0.228 × 0.209	6.05	0.428	土師質土器土鍋片、肥前系磁器皿片		
SP2014	楕円	0.185 × 0.164	6.273	0.194	土師質土器片		
SP2016	略円	0.225 × 0.22	5.95	0.498	土師質土器片		
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB52	II b 区	南北棟側柱建物	東列 N27.61° W 西列 N28.097° W	東列 3間 (4.902m) 西列 3間 (4.799m)	北列 1間 (3.035m) 南列 1間 (2.993m)	14.619 m ²	
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m) 埋土	遺物		備考
SP1061	略円	0.166 × 0.182	6.409	0.089	—		
SP1063	略円	0.186 × 0.186	6.295	0.215	土師質土器片		
SP1064	楕円	0.131 × 0.18	6.255	0.248	—		
SP1068	略円	0.19 × 0.21	6.266	0.229	土師質土器片		
SP1072	略円	0.213 × 0.215	6.315	0.163	柱材		柱材遺存
SP1076	楕円	0.216 × 0.202	6.205	0.292	土師質土器碗片		
SP1099	楕円	0.198 × 0.181	6.266	0.21	土師質土器		
SP2004	略円	0.193 × 0.181	6.255	0.213	—		
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB53	II b 区	南北棟側柱建物	東列 N28.035° W 西列 N27.476° W	東列 2間 (3.33m) 西列 2間 (3.375m)	北列 1間 (2.168m) 南列 1間 (2.202m)		西面に庇
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m) 埋土	遺物		備考
SP1036	略円	0.145 × 0.149	6.393	0.132	—		
SP1037	略円	0.23 × 0.215	6.214	0.287	—		酷石
SP1044	略円	0.328 × 0.317	6.427	0.095	土師質土器片		
SP1091	略円	0.182 × 0.175	6.291	0.201	土師質土器皿片、焼土塊		酷石
SP1093	略円	0.198 × 0.188	6.147	0.312	土師質土器片		
SP1095	楕円	0.141 × 0.165	6.254	0.206	瓦器片		
SP1096	歪楕円	0.218 × 0.217	6.162	0.35	土師質土器碗・足釜片		
SP1097	歪楕円九方	0.299 × 0.297	6.046	0.445	土師質土器片		
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB54	III a 区	南北棟側柱建物	東列 N26.9° W 西列 N27.42° W	東列 2間 (5.267m) 西列 2間 (5.303m)	北列 1間 (4.083m) 南列 1間 (4.034m)	21.449 m ²	SK50・53・SX07 より先行
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m) 埋土	遺物		備考
SP2630	楕円	0.244 × 0.361	5.819	0.582	土師質土器土鍋片、焼土塊、サヌカイト碎片		SP2631・2632 を切る
SP2634	楕円	0.346 × 0.336	5.958	0.435	土師質土器小皿・皿片		酷石 (砂岩割石、被熱痕著)、SP2635 を切る
SP2657	歪楕円	0.306 × 0.29	5.857	0.582	土師質土器皿片、須恵質土器片		根石 (砂岩割石、被熱痕著)、SP2658 を切る
SP2663	楕円	0.27 × 0.313	5.998	0.456	土師質土器皿片		酷石、SP2664 を切る
SP2847D	楕円	0.327 × 0.304	5.781	0.487	土師質土器皿片、刀子、サヌカイト剥片		
SK37 (SP2565B)	楕円	0.48 × 0.529	5.708	0.739	土師質土器小皿・皿・足釜・甕片・十瓶山周辺産須恵質土器碗・丸山焼片、焼土塊		

掘立柱建物一覧 (8)

建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB55	III a 区	東西棟側柱建物	北列 N54. 367° E	北列 1間 (5. 925m)	東列 1間 (2. 99m)	17. 533 m ²	桁行北列中央柱を欠く、SB56より先行
			南列 N54. 316° E	南列 2間 (5. 793m)	西列 1間 (2. 995m)		
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP2660	略円	0.266 × 0.249	6.36	0.071		土師質土器片	結石
SP2678	楕丸方	0.165 × 0.19	6.31	0.131		土師質土器片	
SP2733	楕円	0.284 × 0.22	6.27	0.143		土師質土器片	
SP2747	歪楕丸方	0.313 + × 0.357	5.885	0.563		土師質土器皿・碗片	SP2746に切られる、根石（安山岩削石、被熱痕顕著）
SP2823	楕円？	0.156 + × 0.231	6.357	0.081		—	SP2471・2472に切られる
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB56	III a 区	南北棟側柱建物	東列 N34. 867° W	東列 2間 (4. 887m)	北列 1間 (4. 015m)	19. 628 m ²	SB59より後出、梁間北列中央柱を欠く
			西列 N34. 961° W	西列 2間 (4. 9m)	南列 2間 (4. 007m)		
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP2471	楕円	0.206 × 0.169	6.167	0.262		土師質土器皿片、須恵質土器片、焼土塊	SP2823を切る
SP2683	楕円	0.206 × 0.261	6.257	0.189		土師質土器杯片	根石
SP2686	略円	0.287 × 0.291	6.083	0.355		土師質土器皿片、焼土塊、柱材？	
SP2689	略円	0.288 × 0.297	6.169	0.261		土師質土器皿・碗片	
SP2703	略円	0.181 × 0.187	6.21	0.223		—	
SP2730	略円	0.324 × 0.34	6.259	0.178		土師質土器皿片、焼土塊	結石（砂岩削石、被熱痕顕著）
SP2739	略円	0.251 × 0.256	6.154	0.285		須恵器片、土師質土器皿片	SP2740・2741を切る、根石（砂岩削石、被熱痕顕著）
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB57	III a 区	東西棟側柱建物	北列 N65. 676° E	北列 1間 (4. 276m)	東列 1間 (4. 081m)	17. 984 m ²	SD15より先行
			南列 N64. 423° E	南列 1間 (4. 438m)	西列 2間 (4. 174m)		
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP2380	楕円	0.237 × 0.308	6.186	0.248		土師質土器皿・土鍋片、焼土塊	
SP2760	略円	0.181 × 0.189	6.225	0.207		土師質土器皿片	
SP2765	楕円	0.155 × 0.267	6.154	0.278		土師質土器皿片	SP2764に切られ、SP2826を切る、結石
SP2779	歪楕円	0.24 × 0.233	6.128	0.301		土師質土器皿・土鍋片、鉄滓	
SP2805	楕円	0.297 × 0.272	6.268	0.182		—	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB58	III a 区	南北棟側柱建物？	西列 N26. 696° W	西列 2間 (4. 69m)	北列 1間 (1. 559m) 以上		SB59より後出、SD15より先行
					南列 1間 (1. 757m) 以上		
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP2386	楕円	0.188 × 0.217	6.127	0.311		土師質土器皿片	
SP2394	楕円	0.242 × 0.293	6.114	0.306		土師質土器碗片	SP2395を切る
SP2404	楕円	0.178 × 0.21	6.067	0.394		—	SP2405を切る
SP2422	略円	0.18 × 0.178	6.338	0.113		土師質土器皿片	
SP2431	歪楕円	0.132 × 0.114	6.266	0.169		—	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB59	III a 区	東西棟側柱建物	北列 N61. 891° E	北列 2間 (4. 797m)	東列 1間 (2. 521m)	12. 340 m ²	SB57・SD15より先行する
			南列 N61. 59° E	南列 2間 (4. 946m)	西列 1間 (2. 545m)		
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP2395	略円？	0.241 × 0.241 +	6.138	0.283		土師質土器片、亀山焼片	SP2394に切られる
SP2405	略円？	0.202 + × 0.304	6.229	0.222		土師質土器片	SP2404に切られる
SP2424	略円？	0.26 + × 0.263	6.114	0.314		土師質土器片、焼土塊	SP2423に切られる
SP2430	楕円	0.273 × 0.28	6.249	0.171		土師質土器皿片	根石
SP2439	楕円	0.215 × 0.209	6.215	0.213		土師質土器皿・碗片、瓦器片、焼土塊	
SP2443	不定	0.33 × 0.291	6.1	0.352		土師質土器皿片	結石（砂岩削石、被熱痕顕著）、SP2486を切る
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB60	III b 区	東西棟側柱建物	北列	北列 1間 (2. 949m)		(15. 366 m ²)	北東隅柱を欠く、SB61より先行
			南列 N 59. 925° E	南列 2間 (5. 2 m)	西列 1間 (2. 961m)		
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP3411	略円	0.187 × 0.181	6.474	0.092		土師質土器片	SP3412を切る
SP3425	楕円	0.226 × 0.201	6.365	0.198		土師質土器片	
SP3467	略円	0.152 × 0.157	6.413	0.087		—	
SP3500	楕円？	0.118 + × 0.235	6.249	0.326		—	SP3499に切られる
SP3528	歪楕円	0.184 × 0.237	6.197	0.334		土師質土器片	SP3529を切る
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB61	III b 区	南北棟側柱建物	東列 N30. 775° W	東列 2間 (4. 173m)	北列 1間 (3. 043m)	12. 656 m ²	SB75より後出
			西列 N30. 625° W	西列 2間 (4. 13m)	南列 1間 (3. 054m)		
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP3369	不定	0.345 × 0.221	6.163	0.4		土師質土器皿片	
SP3435	歪略円	0.148 × 0.145	6.4	0.182		土師質土器土鍋片	
SP3448	楕円	0.233 × 0.209	6.0	0.556		土師質土器皿片	SP3449を切る、根石（砂岩削石、被熱痕顕著）
SP3474	楕円	0.229 × 0.2	6.534	0.047		土師質土器皿・刀子	地鎮石
SP3498	楕円？	0.244 × 0.162 +	6.175	0.416		土師質土器皿片	搅乱に切られる
SP3499	略円	0.393 × 0.403	6.424	0.142		土師質土器片・平瓦片・丸瓦片・石礫？	SP3500を切る

掘立柱建物一覧（9）

建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB62	III b 区	東西棟側柱建物	北列 N62. 108° E 南列 N63. 025° E	北列 2間 (5.192m) 南列 2間 (5.181m)	東列 1間 (2.565m) 西列 1間 (2.48m)	13.083 m ²	
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP3371	楕円	0.212 × 0.178	6.163	0.41		土師質土器皿片	
SP3404	垂楕円	0.212 × 0.19	6.202	0.338		—	SP3517 を切る、鉛石
SP3417	垂楕円	0.152 × 0.169	6.352	0.229		土師質土器片	
SP3502	楕円?	0.151 × 0.105 +	6.474	0.098		—	SP3501 に切られる
SP3526	楕円	0.16 × 0.149 +	6.365	0.198		サヌカイト例片	SP3521 に切られる
SP3557	楕円	0.165 × 0.186	6.427	0.127		土師質土器片	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB63	III b 区	南北棟側柱建物	東列 N29. 767° W 西列 N29. 231° W	東列 3間 (5.38m) 西列 3間 (5.459m)	北列 1間 (3.015m) 南列 1間 (3.067m)	16.481 m ²	
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP3362	垂楕円	0.227 × 0.204	6.42	0.141		—	SP3363 を切る
SP3372	楕円	0.185 × 0.209	6.304	0.269		—	
SP3373	略円	0.168 × 0.154	6.492	0.076		—	
SP3382	楕円	0.27 × 0.348	6.388	0.183		土師質土器皿片、瓦器碗片	
SP3400	略円	0.216 × 0.214	6.44	0.131		—	
SP3489	略円?	0.155 × 0.206	6.448	0.148		—	SP3432 に切られる
SP3520	略円	0.232 × 0.245	6.444	0.109		—	
SP3649	垂楕円	0.25 × 0.22	6.463	0.104		土師質土器片	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB64	III b 区	南北棟側柱建物	東列 N26. 655° W 西列 N26. 753° W	東列 2間 (4.511m) 西列 2間 (4.483m)	北列 1間 (2.763m) 南列 1間 (2.752m)	12.400 m ²	東面に庇を付す、建替えの可能性
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP3354	隅丸方	0.425 × 0.381	5.982	0.557		土師質土器皿・碗・土鍋片、瓦器碗片、十瓶山周辺須恵質土器碗片、土鋸	SP3353 に切られる
SP3360	略円	0.202 × 0.219	6.414	0.139		—	SP3361 を切る
SP3377	垂楕円	0.408 × 0.474	6.053	0.504		土師質土器皿・碗片、瓦質土器鍋片? 鉄釘	土師質土器碗埋納
SP3379	楕円	0.419 × 0.564	6.211	0.357		土師質土器皿片、瓦器碗片、十瓶山周辺須恵質土器碗片	
SP3387	隅丸方	0.324 × 0.27	6.356	0.178		土師質土器皿・碗片	
SP3398	楕円?	0.232 × 0.216	6.203	0.354		土師質土器片	SP3397 に切られる
SP3406	垂隅丸方	0.352 × 0.439	6.194	0.355		土師質土器皿・土鍋片、瓦器片、十瓶山周辺須恵質土器碗片	
SP3429	楕円	0.455 × 0.608	6.102	0.474		土師質土器片	SP3428 に切られ、SP3648 を切る
SP3434	略円	0.175 × 0.184	6.153	0.422		—	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB65	III b 区	南北棟側柱建物	東列 N26. 855° W 西列 N26. 751° W	東列 2間 (4.677m) 西列 2間 (4.663m)	北列 1間 (3.472m) 南列 2間 (3.481m)	16.235 m ²	梁間北列中央柱を欠く
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP3255	不定	0.246 × 0.35	6.355	0.211		土師質土器皿片	
SP3260	楕円?	0.247 × 0.192 +	6.343	0.229		土師質土器皿片	SP3259 を切られる
SP3272	略円	0.18 × 0.187	6.534	0.033		—	
SP3281	垂略円	0.158 × 0.18	6.24	0.321		土師質土器片	鉛石 (砂岩垂角礫、被然痕顯著)
SP3288	楕円	0.265 × 0.225	6.424	0.161		土師質土器片、中国産白磁皿片	
SP3591	楕円?	0.131 × 0.231	6.248	0.324		土師質土器片	搅乱に切られる
SP3605	隅丸方	0.232 × 0.218	6.201	0.333		土師質土器片、鉄滓?	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB66	III b 区	南北棟側柱建物	東列 N28. 42° W	東列 2間 (5.261m)	北列 1間 (2.058m) 以上 南列 1間 (2.084m) 以上		北東及び南西隅柱を欠く
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP3245	略円?	0.264 × 0.358	6.027	0.528		土師質土器片	搅乱に切られる
SP3312	垂楕円	0.179 × 0.216	6.408	0.162		土師質土器片	
SP3577	楕円?	0.238 × 0.259 +	6.316	0.201		土師質土器皿片、丸瓦片	搅乱に切られる
SP3582	楕円	0.2 × 0.329	6.314	0.221		土師質土器片、焼土塊	SP3583 を切る
SP3592	垂楕円	0.217 × 0.286	6.406	0.061		—	
SP3630	垂楕円	0.233 × 0.215	6.034	0.484		焼土塊	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB67	III b 区	東西棟側柱建物	北列 N63. 715° E 南列 N63. 845° E	北列 2間 (5.399m) 南列 2間 (5.374m)	東列 2間 (3.349m) 西列 2間 (3.341m)	18.018 m ²	SD16 より先行
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP3263	隅丸方	0.324 × 0.372	6.109	0.461		土師質土器皿・碗片、焼土塊	SP3264・SP3322 を切る
SP3276	略円	0.288 × 0.297	6.165	0.383		土師質土器片、肥前系陶器片	
SP3335	垂楕円	0.363 × 0.495	5.786	0.6		—	
SP3339	楕円	0.208 × 0.279	6.322	0.122		—	
SP3656	楕円	0.417 × 0.505	5.693	0.639		—	
SP3658	楕円	0.416 × 0.566	6.158	0.399		土師質土器皿・碗片	SD16 に切られる
SP3660	楕円	0.434 × 0.258	6.291	0.274		土師質土器足釜片	SD16 に切られる
SP3676	楕円	0.13 × 0.145	6.186	0.291		—	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB68	IV a 区	南北棟側柱建物	東列 N28. 165° W 西列 N27. 314° W	東列 1間 (4.434m) 西列 2間 (4.343m)	北列 1間 (2.335m) 南列 1間 (2.401m)	10.392 m ²	桁行東列中央柱を欠く
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP3000	垂略円	0.172 × 0.165	6.353	0.102		—	
SP3002	略円	0.162 × 0.161	6.359	0.114		土師質土器片	
SP3005	略円	0.142 × 0.145	6.265	0.212		—	
SP3016	良楕円	0.249 × 0.13	6.432	0.062		—	
SP3019	楕円	0.16 × 0.188	6.416	0.089		—	

掘立柱建物一覧 (10)

建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB69	IV a 区	東西棟側柱建物	北列 N55.677° E 南列 N56.736° E	北列 2間 (4.313m) 南列 2間 (4.179m)	東列 1間 (3.52m) 西列 1間 (3.437m)	14.770 m ²	
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP2903	梢円	0.321 × 0.302	6.027	0.45		土師質土器碗	
SP2919	歪梢円	0.186 × 0.213	6.001	0.479		土師質土器片	
SP2922	梢円	0.308 × 0.349	6.114	0.393		土師質土器皿・土鍋片、瓦器碗片、動物遺存体	根石、SP2923 を切る
SP2924	梢円?	0.261 + × 0.286	6.191	0.289		土師質土器碗片、瓦質土器片、瓦器碗片	側溝に切られる
SP2925	梢円?	0.131 + × 0.181	6.296	0.186		—	側溝に切られる
SP2938	略円	0.239 × 0.239	6.346	0.135		—	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB70	IV a 区	東西棟側柱建物	北列 N60.923° E 南列 N61.81° E	北列 2間 (6.336m) 南列 2間 (6.431m)	東列 1間 (2.785m) 西列 1間 (2.686m)	17.462 m ²	SB72 より先行
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP2945	略円?	0.18 × 0.183	6.3	0.174		土師質土器皿片	SP2944 に切られる
SP2952	梢円	0.16 × 0.142	6.331	0.135		土師質土器片	
SP2971	長梢円	0.295 × 0.187	6.268	0.195		土師質土器片	SP2972 を切る
SP2974	梢円	0.184 × 0.188	6.199	0.273		土師質土器片	
SP2984	長梢円	0.213 × 0.334	6.098	0.359		土師質土器片、砥石	根石
SP2990	梢円	0.193 × 0.188	6.27	0.189		土師質土器皿片	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB71	IV a 区	東西棟縦柱建物	北列 N67.42° E 南列 N65.095° E	北列 2間 (6.209m) 南列 2間 (6.209m)	東列 2間 (3.187m) 西列 2間 (3.434m)	20.555 m ²	南面に庇、底部東端柱を欠く、SK72・73 より先行
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP2868	歪梢円	0.28 × 0.288	6.26	0.234		土師質土器皿片、須恵器片	
SP2869	梢円	0.33 × 0.31	5.931	0.553		土師質土器皿片、動物遺存体	根石
SP2871	不定	0.32 × 0.67	6.098	0.379		土師質土器碗・足釜片、瓦器碗片	結石
SP2891	歪梢円	0.251 × 0.277	5.922	0.545		土師質土器皿片	結石
SP2892	梢円	0.31 × 0.33	5.938	0.533		土師質土器皿片、瓦質土器甕片、瓦器碗片、瓦器片、 備前焼片	SP2893 を切る、根石
SP2931	歪梢円	0.23 × 0.271	6.068	0.384		土師質土器皿片	根石 (砂岩削石、被熱痕跡)
SP2935	梢円	0.197 × 0.156	6.342	0.103		—	
SP2962	不定	0.351 × 0.31	6.001	0.46		土師質土器皿・中国産白磁皿	根石 (砂岩削石、被熱痕跡)
SP2978	不定	0.496 × 0.404	5.82	0.644		土師質土器皿・碗片、十瓶山周辺産須恵質土器碗片、 中國産青磁碗片、燒土塊、角礫凝灰岩焼礫	根石
SX21 (SP2994B)	不定	0.686 × 0.298	6.045	0.409		土師質土器皿・足釜片、燒土塊	結石 ?
SP3043	歪梢円	0.237 × 0.275	6.172	0.111		炭化材	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB72	IV a 区	東西棟縦柱建物	北列 N66.816° E 南列 N66.749° E	北列 2間 (5.929m) 南列 2間 (5.971m)	東列 1間 (3.041m) 西列 2間 (3.048m)	18.115 m ²	梁間東列中央柱を欠く
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP2849	梢円	0.233 × 0.218	6.14	0.352		土師質土器片	
SP2853	梢円	0.228 × 0.25	5.971	0.527		土師質土器片・十瓶山周辺産須恵質土器碗片、 瓦器片	
SP2873	歪梢円	0.208 × 0.21	6.339	0.101		—	
SP2933	梢円	0.211 × 0.195	6.364	0.125		土師質土器皿・碗片、須恵器片	SP2878 と重複
SP2944	梢円	0.263 × 0.323	5.878	0.593		土師質土器皿片、瓦器碗片、砥石	SP2945 を切る
SP2966	梢円	0.352 × 0.361	5.965	0.502		土師質土器碗片・備前焼片	
SP2982	歪梢円	0.361 × 0.379	6.021	0.445		土師質土器皿片、瓦器碗片	
SP3032	梢円	0.233 × 0.226	6.129	0.213		燒土塊	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB73	IV a 区	東西棟縦柱建物	北列 N63.125° E 南列 N62.326° E	北列 2間 (5.955m) 南列 2間 (5.96m)	東列 1間 (2.951m) 西列 2間 (3.034m)	17.828 m ²	梁間東列中央柱を欠く、SK73 より先行
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP2850	梢円	0.258 × 0.283	6.337	0.144		—	根石
SP2875	不定	0.675 × 0.42	6.021	0.419		土師質土器皿・碗片、瓦器片、燒土塊	SP2874 に切られる
SP2879	歪梢円	0.431 × 0.401	6.221	0.275		土師質土器足釜片・瓦質土器片	SP2880・2882 を切る
SP2928	梢円?	0.126 + × 0.333	6.2	0.273		土師質土器皿片	SP2854・2855 に切られる
SP2941	梢円	0.376 × 0.324	6.089	0.393		土師質土器碗片	
SP2965	梢円	0.291 × 0.368	6.038	0.429		土師質土器皿片・瓦器碗片、砥石	
SP2981	不定	0.319 × 0.381	6.029	0.423		土師質土器皿・土鍋片・十瓶山周辺産須恵質土器碗片、 中國産青磁碗片、燒土塊	
SP3026	隅丸方	0.187 × 0.248	5.985	0.482		土師質土器土鍋片	SP3037 を切る
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
S874	V b 区	東西棟側柱建物	北列 N60.166° E 南列 N59.021° E	北列 2間 (5.222m) 南列 1間 (2.711m) 以上	東列 1間 (2.752m)	(14.371 m ²)	南北隅柱を欠く、SB76 より後出
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面高 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP3098	歪梢円	0.164 × 0.232	6.184	0.224		土師質土器皿片、鉄滓	SP3099 を切る
SP3121	梢円	0.197 × 0.153	5.973	0.428		—	
SP3134	梢円	0.138 × 0.128	6.211	0.188		—	
SP3153	梢円	0.181 × 0.145	6.123	0.252		—	
SP3160	梢円	0.17 × 0.15 +	5.86	0.508		土師質土器足釜片	SP3159 に切られる

掘立柱建物一覧 (11)

建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB75	V b 区	東西棟側柱建物	北列 N59.7° E	北列 2間 (5.183m)	東列 1間 (3.121m)	16.109 m ²	
			南列 N60.321° E	南列 2間 (5.235m)	西列 1間 (3.064m)		
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面積 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP3058	垂梢円	0.223 × 0.246	5.79	0.619		土師質土器皿片、植物種子	
SP3065	略円	0.232 × 0.24	5.877	0.516		土師質土器皿片、須恵器片	
SP3084	略円	0.212 × 0.223	5.897	0.499		須恵器片	
SP3086	梢円	0.261 × 0.296	5.804	0.597		土師質土器片、備前焼片	SP3087 を切る
SP3110	略円	0.25 × 0.252	6.143	0.255		土師質土器片	
SP3117	梢円	0.218 × 0.198	6.029	0.369		土師質土器皿・足釜片	
建物番号	調査区	建物種類	主軸方位	桁行	梁間	床面積	備考
SB76	V b 区	東西棟側柱建物	北列 N60.609° E	北列 2間 (4.725m)	東列 1間 (3.063m)	(14.473 m ²)	南西隅柱は調査区外、SE03 より後出
			南列 N62.465° E	南列 1間 (2.162m) 以上			
柱穴番号	平面形	規模 (m)	底面積 (m)	残存深 (m)	埋土	遺物	備考
SP3064	略円?	0.142 + 0.188	6.115	0.277		土師質土器皿片	西半調査区外
SP3072	梢円	0.233 × 0.249	6.112	0.288		土師質土器皿・足釜片	
SP3082	梢円	0.238 × 0.209	6.068	0.317		土師質土器皿・サヌカイト剥片	SE03 を切る
SP3096	梢円?	0.161 × 0.187 +	6.071	0.336		土師質土器片	SP3096 に切られる
SP3100	略円?	0.176 × 0.144 +	6.019	0.388		土師質土器片	SP3099 に切られる

掘立柱建物一覧 (12)

遺構名	調査区	平面形	東西長 (m)	南北長 (m)	主軸方向	断面形	残存深 (m)	底面の標高 (m)	出土遺物	年代	備考	掲載遺物
SK01	I a 区	隅丸長方形?	0.47	1.05	N 38.24° W	皿状	0.16	6.34	—	不明 (中世後半)	東端は調査区外	—
SK02	I a 区	隅丸長方形	2.32	0.99	N 62.088° E	箱形	0.15	6.35	土師質土器小皿・鉢・足釜・焼土塊・砥石、サヌカイト剥片	16世紀後半～17世紀前葉		23・24
SK03	I a 区	隅丸長方形	0.35	0.59	N 39.941° W	箱形	0.12	6.36	—	不明		—
SK04	I a 区	歪隅丸方形	0.56	0.55	N 55.234° E	箱形	0.30	6.18	土師質土器小皿・碗・鉢・焼土塊	中世		—
SK05	I a 区	隅丸方形?	0.81 以上	0.71	N 54.909° E	箱形	0.28	6.22	土師質土器・瓦質土器	16世紀後半～17世紀前葉?	東端は調査区外	—
SK06	I a 区	歪隅丸長方形?	0.87 以上	0.54	N 60.264° E	逆台形状?	0.34	6.16	—	不明	東端は調査区外、上面より柱穴が掘り込まれる	—
SK07	I a 区	隅丸方形	0.52	0.46	N 64.618° E	皿状	0.19	6.49	土師質土器	中世		—
SK08	I a 区	歪隅丸方形	1.65	1.42	N 61.141° E	皿状	0.06	6.44	土師質土器小皿・杯・鉢・焼土塊	16世紀後半～17世紀前葉	SB09 より先行し、SB04・05・08 より後出	25
SK09	I a 区	隅丸方形	0.91	0.87	N 46.862° E	皿状	0.07	6.43	土師質土器・焼土塊	中世	SB09 より先行	—
SK10	I a 区	不定形	4.79	3.87	—	皿状	0.34	6.10	土師質土器小皿・鉢・足釜・土鍋・亀山焼・中国産染付皿・碗・同白磁碗・焼土塊・サヌカイト剥片	16世紀後葉	SK11 より後出	26・27
SK11	I a 区	不定形	4.33 以上	3.90 以上	—	皿状	0.40	6.02	(上段) 土師質土器小皿・杯・鉢・足釜・土鍋・亀山焼・偏前焼杯・甕・中国産白磁皿・同磁器染付碗・サヌカイト剥片焼土塊・鉄釘・鉄滓?焼甕(中層) 土師質土器小皿・足釜・鉢・足釜・土鍋・亀山焼・偏前焼・中国産磁器染付碗・焼土塊・サヌカイト剥片・砾石・不明鉄製品・鉄滓	16世紀後葉	SK10・SD06 より先行し、SD03～05 より後出	28～42
SK12	I b 区	隅丸方形?	0.88 以上	0.62 以上	—	逆台形状	0.42	6.15	土師質土器土鍋・鉢・足釜・土鍋・亀山焼・肥前系陶器皿?	17世紀中葉	北・東半は調査区外へ延長	43
SK13	I b 区	隅丸長方形	1.67	1.18	N 62.701° E	皿状	0.14	6.54	土師質土器土鍋・瓦器碗	中世		—
SK14	I b 区	隅丸方形?	0.67 以上	0.99 以上	—	逆台形状	0.14	6.49	土師質土器小皿・足釜・偏前焼甕・焼土塊	17世紀中葉以降	SK15 より先行し、SK16 より後出	—
SK15	I b 区	隅丸長方形	1.60 以上	1.01	N 61.469° E	逆台形状	0.28	6.36	土師質土器小皿・杯・鉢・土鍋	17世紀中葉以降	SK14・16 より後出	—
SK16	I b 区	やや歪隅丸方形	2.07	1.76 以上	N 37.683° E	皿状	0.26	6.38	土師質土器小皿・皿・鉢・足釜・土鍋・亀山焼・偏前焼鉢・蓋・大甕・肥前系陶器鉢・同磁器染付碗・中国産白磁皿・焼土塊・サヌカイト剥片・角礫凝灰岩片・不明木製品	17世紀中葉	SK14・15 より先行	44～56
SK17	I b 区	やや歪隅丸方形	4.21	0.89	N 62.456° E	やや歪台形状	0.24	6.36	土師質土器小皿・皿・碗・鉢・足釜・土鍋・亀山焼甕・偏前焼甕・中国産磁器染付皿・焼土塊・サヌカイト火打石・剥片・砾石・不明木製品	16世紀末～17世紀前葉	一部搅乱を蒙る	57～64
SK18	I b 区	やや歪隅丸方形	0.59	0.59	—	皿状	0.17	6.46	—	中世?		—
SK19	I b 区	やや歪隅丸方形	0.48	0.50	—	擴逆台形状	0.42	6.22	土師質土器小皿・瓦	14世紀以降		—
SK20	I b 区	不定形	2.22	1.79 以上	—	皿状	0.08	6.51	土師質土器小皿・碗・瓦器碗・焼土塊	16世紀後半以降	一部搅乱を蒙る	—
SK21	I b 区	隅丸長方形	0.53	0.84	N 32.592° W	箱形	0.54	6.09	土師質土器小皿・足釜・土鍋・龍泉窯系青磁碗・焼土塊	16世紀末～17世紀前葉		66
SK23	II a 区	隅丸方形?	0.44 以上	0.46 以上	—	逆台形状?	0.26	6.38	土師質土器小皿・杯・鉢・足釜・土鍋・亀山焼甕	16世紀後半	北・東半は調査区外	307～310

土坑一覧 (1)

遺構名	調査区	平面形	東西長(m)	南北長(m)	主軸方向	断面形	残存深(m)	底面の標高(m)	出土遺物	年代	備考	掲載遺物
SK24	II a 区	不定形	0.65	0.96 以上	N 10.143° W	皿状	0.10	6.42	—	?	SB27・29 より先行	—
SK25	II a 区	垂隅丸長方形	0.24	0.88	N 24.245° W	皿状	0.06	6.47	土師質土器、肥前系陶器天目碗	17世紀前葉		—
SK26	II a 区	垂隅丸長方形	3.00	2.20 以上	N 63.282° E	皿状	0.31	6.13	須恵器、土師質土器小皿・擂鉢・足釜・土鍋、和泉型瓦器碗・備前焼瓈、龟山焼・焼土塊、サヌカイト剥片・砥石・鉄釘・動物遺存体	16世紀後半	SD09 より先行	311～328
SK27	II a 区	垂隅丸長方形	1.96	1.18	N 63.109° E	皿状	0.18	6.33	須恵器、土師質土器小皿・擂鉢・足釜・土鍋・美濃系陶器皿・焼土塊	16世紀後半	SB32 より後出、一部搅乱を蒙る	329
SK28	II a 区	隅丸方形	0.57	0.47	N 70.476° E	皿状	0.11	6.40	須恵器、土師質土器小皿・焼土塊・サヌカイト製火打石	中世		—
SK29	II a 区	垂隅丸方彌形	0.63	0.72	—	皿状	0.09	6.41	土師質土器	中世		—
SK30	II a 区	やや垂隅丸長方形	1.14	1.17	N 33.933° W	逆台形状	0.52	6.03	土師質土器小皿・擂鉢・土鍋・東播系須恵器質土器捏鉢・備前焼瓈？貝	16世紀後半	一部搅乱を蒙る以降	330
SK31	II a 区	梢円形	0.57	0.51	N 42.585° E	逆台形状	0.18	6.42	土師質土器小皿・土鍋	中世		—
SK32	II a 区	隅丸方形	0.43	0.66	N 34.972° W	逆台形状	0.14	6.46	土師質土器擂鉢・足釜・龟山焼瓈・丸瓦・燒磧	16世紀後半	SP1888 より先行以降	—
SK33 A	II a 区	隅丸長方形	2.08	3.40	N 32.423° W	逆台形状	0.29	6.30	(上層) 須恵器、土師質土器小皿・杯・碗・擂鉢・足釜・土鍋・東播系須恵器捏鉢？龟山焼瓈・備前焼瓈・焼塊・サヌカイト剥片・花崗岩・砂岩・安山岩製砥石・焼磧・鉄釘・不明鉄・銅製品 (下層) 土師質土器小皿・杯・擂鉢・足釜・土鍋・東播系捏鉢？備前焼瓈・サヌカイト剥片・結晶片岩片	17世紀中葉		331～348
SK33 B	II a 区	隅丸長方形	2.36	2.16	N 60.474° E	逆台形状	0.30	6.27	(上層) 土師質土器小皿・杯・土鍋？瓦器碗・平瓦・サヌカイト製火打石・焼磧 (下層) 土師質土器小皿・足釜・土鍋・肥前系陶器、肥前系磁器・焼土塊・砥石・焼磧・鉄滓・不明木製品・動物遺存体	17世紀中葉		349～360
SK34	II a 区	隅丸長方形	0.88	1.68	N 30.453° W	箱形	0.34	6.19	(上層) 土師質土器小皿・足釜・土鍋・瓦質土器・龟山焼瓈・備前焼瓈・中国産白磁・肥前系陶器皿 (下層) 土師質土器小皿・杯・擂鉢・足釜・土鍋・瓦質土器・瓦器碗・燒土塊・鐵釘・鐵滓？砥石・燒磧	17世紀前葉		361～374
SK35	II a 区	梢円形	0.88	0.86	—	逆台形状	0.46	5.98	(上層) 土師質土器擂鉢・土鍋 (下層) 土師質土器小皿・土鍋・植物種子	16世紀後半	以降	375～376
SK36	II b 区	隅丸方形	0.56	0.65	N 22.685° W	皿状	0.03	6.46	土師質土器足釜・燒土塊	中世	SB42 より先行	377
SK37	II b 区	梢円形	0.56	0.56	—	逆台形	0.47	6.00	土師質土器土鍋	16世紀後半	以降	—
SK38	II b 区	梢円形	0.47	0.46	—	逆台形	0.37	6.09	土師質土器皿・擂鉢・足釜・甕・肥前系磁器皿・同陶器碗・皿・瀬戸美濃系陶器碗・燒土塊・サヌカイト剥片・不明鉄製品・銅錢	17世紀前葉		378～384
SK39	II b 区	梢円形	1.23	1.03 以上	—	箱形	0.52	5.96	(上層) 土師質土器皿・燒土塊・鐵滓 (下層) 土師質土器・中国産青磁碗	17世紀中葉		385～386
SK40	II b 区	垂隅丸方形	0.66	0.66	N 54.936° E	浅い箱形	0.09	6.44	土師質土器・瓦器碗	中世		—
SK41	II b 区	垂隅丸方形	1.54	1.73	N 28.537° W	浅い逆台形	0.08	6.42	土師質土器小皿・擂鉢・足釜・備前焼・サヌカイト碎片	16世紀後葉	以降	387
SK42	II b 区	垂隅丸方形	1.00	1.20	N 26.285° W	箱形	0.48	6.01	(上層) 土師質土器小皿・碗・擂鉢・足釜・土鍋・瓦器碗・備前焼瓈・肥前系磁器皿・碗・瀬戸美濃系陶器碗・中国産茶碗・燒土塊・板材・鐵滓・燒磧	17世紀中葉		388～390
SK43	II b 区	垂梢円形	0.99	0.93	—	箱形	0.39	6.09	—	中世	下層は別遺構埋土として報告する	—
SK44	II b 区	垂隅丸長方形	2.10	0.90	N 59.484° E	浅い箱形	0.03	6.48	土師質土器小皿・瓦質土器・備前焼瓈・京信楽系陶器碗	18世紀後半	以降	391～392
SK45	III a 区	梢円形	1.60 以上	2.17	—	—	0.70 以上	5.70 以下	土師質土器・肥前系磁器瓶・平瓦・丸瓦	18世紀後半	東端は調査区外	—
SK46	III a 区	隅丸方形？	0.36 以上	2.07 以上	—	逆台形？	0.50 以上	5.90 以下	(上層) 土師質土器足釜・肥前系陶器付碗・平瓦・丸瓦 (下層) 須恵器・肥前系磁器鉢？軽平瓦・平瓦・不明鉄器	18世紀後半	大半は調査区外	—
SK47	III a 区	不定形	0.62	0.65	—	逆台形	0.22	6.17	土師質土器小皿・須恵質土器・中国産白磁碗・平瓦・丸瓦	18世紀後半	中世後半期の遺物がやや多く出土	—
SK48	III a 区	垂隅丸方形	0.59	0.65	N 28.512° W	逆台形	0.18	6.26	(上層) 土師質土器	18世紀後半	~19世紀前半	—
SK49	III a 区	梢隅丸方形	1.57	1.76	N 31.447° W	箱形	0.74	5.69	(上層) 土師質土器小皿・足釜・土鍋・瓦質土器・肥前系陶器碗・軽平瓦・平瓦・丸瓦・燒磧 (中層) 土師質土器足釜・肥前系陶器・平瓦・丸瓦・鉄釘 (下層) 土師質土器・備前系陶器灯明皿・肥前系陶器皿・平瓦・丸瓦・桃核	18世紀後半	~19世紀初頭	埋埴土坑 583・584

土坑一覧 (2)

遺構名	調査区	平面形	東西長(m)	南北長(m)	主軸方向	断面形	残存深(m)	底面の標高(m)	出土遺物	年代	備考	掲載遺物
SK50	III a 区	略円形	1.72	1.71	-	箱形	0.61	5.84	(上層) 須恵器、十瓶山周辺須恵質土器碗、土師質土器足釜・大甕、瓦質土器羽釜、側面系陶器蓋・押鉢、肥前系磁器碗・紅皿、同陶器、京僧楽系陶器碗・水滴・灯明皿、瀬戸美濃系陶器植木鉢、陶器土瓶、軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、丸瓦、角礫凝灰岩片、鉄釘、板材 (下層) 須恵器、土師質土器碗・大甕、側面系陶器擂鉢・浅鉢、瀬戸美濃系陶器、平瓦、チャート製火打石・鉄斧	18世紀後半～19世紀初頭	SX07より後出、埋土坑頭	585～608
SK51	III a 区	梢円形	0.49	0.49	-	逆台形	0.08	6.33	土師質土器小皿・瓦器	中世	SK52より後出	-
SK52	III a 区	垂岡丸方形	0.64	0.67	-	箱形	0.47	5.95	(上層) 須恵器、土師質土器小皿・碗・足釜、十瓶山周辺須恵質土器碗・瓦器碗、東播系須恵器擂鉢・偏前焼甕、鉄滓 (下層) 土師質土器小皿・杯・偏前焼・サヌカイト剥片	13世紀後半	SK51より先行	609～613
SK53	III b 区	隅丸長方形	0.43	0.27	N 54.789° E	逆台形	0.08	6.49	土師質土器皿・焼土塊	13世紀中頃		614
SK54	III a 区	やや垂岡丸方形	0.44	0.62	N 16.671° W	箱形	0.17	6.28	(上層) 土師質土器碗・瓦器碗	近世？		-
SK55	III a 区	隅丸長方形	0.59	1.15	N 26.036° W	箱形	0.07	6.36	土師質土器小皿・足釜・平瓦	18世紀後半～19世紀初頭		-
SK56	III a 区	垂岡丸方形	0.43	0.68	N 34.799° W	箱形	0.23	6.09	土師質土器小皿・碗・瓦器碗・中国産白磁碗・焼土塊・角礫凝灰岩片	13世紀代	SB55より先行	615・616
SK57	III a 区	隅丸長方形	0.44	0.63	N 21.074° W	箱形	0.11	6.30	(上層) 土師質土器小皿・瓦器碗・偏前焼甕・焼土塊	13世紀代		-
SK58	III b 区	長梢円形	0.42	0.60	N 16.307° W	U字形	0.49	6.08	土師質土器小皿・碗・土鍋・瓦器・中国産白磁碗・同龍泉窯系青磁碗・焼土塊	13世紀後半		617
SK59	III b 区	長梢円形	0.21	0.61	N 13.598° W	U字形	0.22	6.28	土師質土器・瓦器	中世？		-
SK60	III b 区	やや垂岡丸方形	0.60	0.58	N 64.115° E	逆台形	0.08	6.49	-	中世？		-
SK61	III b 区	やや垂岡丸方形	1.20	0.97	N 57.574° E	碗底状	0.56	5.96	土師質土器小皿・碗・十瓶山周辺須恵質土器碗・瓦器碗・サヌカイト碎片	13世紀前半		618
SK62	III b 区	やや垂梢円形	0.53	0.56	N 62.103° E	箱形	0.50	6.08	(上層) 須恵器・土師質土器小皿・碗・足釜・土鍋・瓦器碗・龜山焼・焼土塊 (下層) 土師質土器小皿・十瓶山周辺須恵質土器碗	14世紀前葉		619・620
SK63	III b 区	やや垂岡丸長方形	0.63	0.25		皿状	0.01	6.57	土師質土器小皿	14世紀前葉？	地鎮遺構	621～628
SK64	III b 区	やや垂岡丸方形	0.77	0.87	N 26.77° W	逆台形	0.18	6.32	(下層) 土師質土器杯・瓦器碗・平瓦・焼土塊・サヌカイト剥片・不明鉄製品	18世紀後半	焼土坑	-
SK65	III b 区	隅丸方形	1.24	1.14以上	N 36.853° W	浅い逆台形	0.07	6.47	土師質土器小皿・杯・碗・足釜・十瓶山周辺須恵質土器碗・瓦器碗・中国産白磁小碗・焼土塊	13世紀後半		629～631
SK66	III b 区	長梢円形	1.01	0.44	N 54.997° E	U字形	0.32	6.25	土師質土器・瓦器碗・肥前系陶器皿・鉄鎌	17世紀前葉以降		632・633
SK67	III b 区	長梢円形	0.58	0.82	N 36.364° W	皿状	0.05	6.50	土師質土器小皿・瓦器碗	18世紀後半以降	SK68より後出	-
SK68	III b 区	垂岡丸方形	0.62	0.67以上	N 41.914° E	皿状	0.03	6.51	土師質土器小皿	13世紀後半	SK67より先行	634
SK69	III b 区	垂岡丸方形	1.18	0.62	N 57.17° E	逆台形	0.25	6.28	(上層) 土師質土器・サヌカイトチップ (下層) 土師質土器	中世	埋土は SK66 と近似	-
SK70	IV a 区	不定形	0.81	0.53	-	皿状	0.09	6.38	土師質土器	中世		-
SK72	IV a 区	垂岡丸方形	2.28	3.08	N 30.235° W	逆台形	0.20	6.27	(上層) 須恵器・土師質土器小皿・碗・足釜・土鍋・東播系須恵器擂鉢・偏前焼壺・瓦器碗・中国産白磁碗・燒土塊・サヌカイト石鑿・剥片・角礫凝灰岩製五輪塔？安山岩製砾石・結晶片岩板石・鉄釘 (下層) 土師質土器小皿・碗・足釜・十瓶山周辺須恵質土器碗・瓦器碗・偏前焼・燒土塊 (下層) 土師質土器小皿・碗・十瓶山周辺須恵質土器碗・瓦器碗・偏前焼・瓦質土器・燒土塊・サヌカイトチップ	14世紀後半	SK73、SD19 より後出	768～781
SK73	IV a 区	垂岡丸方形	1.18以上	2.0	N 47.541° W	逆台形？	0.19	6.26	(上層) 黒色土器碗・土師質土器小皿・土鍋・瓦器碗・瓦質土器・偏前焼・燒土塊・瓦器碗	13世紀後半	SD19より後出、SK72より先行	782～784
SK74	IV a 区	垂岡丸方形	1.26	1.82	N 21.567° W	逆台形	0.08	6.39	須恵器・土師質土器小皿・土鍋・瓦器碗・偏前焼・燒土塊・鉄釘	13世紀後半	SR01より後出	785
SK75	IV a 区	略円形	0.66	0.64	-	U字形	0.52	5.94	(上層) 土師質土器小皿・碗・東播系須恵器擂鉢・瓦器碗・鉄釘・燒礫 (下層) 偏前焼大甕	13世紀後半～14世紀前葉	埋土坑	786～789
SK76	IV a 区	垂岡丸長方形	0.67	0.44	N 55.73° E	逆台形	0.47	6.02	土師質土器小皿・碗・瓦器碗・燒土塊	中世		-
SK77	V b 区	不整梢円形	1.46以上	2.05以上	-	皿状	0.23	6.15	(上層) 土師質土器小皿・足釜・十瓶山周辺須恵質土器碗・龜山焼・瓦質土器・燒土塊 (下層) 土師質土器小皿	14世紀前半	東端は調査区外	899

土坑一覧 (3)

遺構名	調査区	平面形	東西長(m)	南北長(m)	主軸方向	断面形	残存深(m)	底面の標高(m)	出土遺物	年代	備考	掲載遺物
SE01	II a 区	略円形	1.26	1.17	-	-	1.0 以上	-	須恵器、土師質土器碗、瓦器碗、東播系須恵器捏鉢、土鍾、サヌカイト剥片、獸骨	18世紀後半以降?		393 ~ 396
SE02	III b 区	隅丸方形	2.11	1.96	N 47.153° E	逆台形	2.17	4.36	(上層) 土師質土器小皿・碗・杯・足釜・土鍋、亀山焼、備前焼摺鉢、瓦器碗、瓦質土器、サヌカイト剥片 (中層) 土師質土器小皿・摺鉢・足釜、十瓶山周辺産須恵質土器碗、瓦器碗、炭化材 (下層) 土師質土器小皿・瓦器碗	15世紀代以降	石組	635 ~ 653
SE03	V b 区	歪橢円形	2.11	2.43	-	下半箱形	1.42	4.98	(上層) 須恵器、土師質土器小皿・碗・杯・土鍋、十瓶山周辺産須恵質土器碗、瓦器碗、サヌカイト剥片・碎片 (中層) 土師質土器小皿・サヌカイトチップ (下層) 土師質土器小皿・杯・瓦器碗・曲物・板材・木杭	12世紀末~13世紀前葉	曲物3段	900 ~ 909

井戸一覧

遺構名	調査区	平面形	東西長(m)	南北長(m)	主軸方向	断面形	残存深(m)	底面の標高(m)	出土遺物	年代	備考	掲載遺物
SX03	II a 区	歪隅丸方形?	4.62 以上	2.03 以上	-	皿状	0.46 以上	6.12 以下	(上層) 土師質土器小皿・杯・摺鉢・足釜・土鍋、十瓶山周辺産須恵質土器碗、瓦器碗、亀山焼窯、備前焼窯、肥前系磁器、瀬戸美濃系陶器皿、中国産白磁皿、サヌカイト火打石、砥石、五輪塔、焼磚、結晶片岩片、不明鉄・銅製品、貝 (下層) 須恵器、土師質土器小皿・摺鉢・足釜・土鍋、備前焼窯、摺鉢、肥前系磁器、同陶器皿、瀬戸美濃系陶器皿、中国産白磁碗、丸瓦、切妻小剥片、角礫凝灰岩、結晶片岩片、焼磚、不明鉄製品	17世紀前葉		398 ~ 417
SX04	II a 区	歪隅丸長方形	4.89	5.64 以上	N 4.907° W	皿状	0.24	6.26	(上層) 須恵器、土師質土器小皿・杯・碗・摺鉢・足釜・土鍋・瓦質土器鉢・亀山焼、備前焼窯、肥前系陶器皿・土製円盤・焼土塊・サヌカイト剥片・五輪塔地輪・鉄滓・動物遺存体 (下層) 土師質土器小皿・杯・碗・摺鉢・土鍋・亀山焼窯、東播系須恵器捏鉢・龍泉窯系青磁碗・肥前系陶器碗・瀬戸美濃系陶器鉢・焼土塊・サヌカイト火打石・剥片・結晶片岩片・焼磚・鉄釘・鉄滓・動物遺存体	17世紀前葉	SD09より先行、東に SD08 が付設	418 ~ 432
SX05	II a 区	隅丸方形?	1.73 以上	0.25 以上	-	皿状	0.21 以上	6.42 以下	土師質土器小皿・土鍋、東播系須恵器捏鉢・備前焼窯・貝	16世紀後半以降	北半は調査区外	433 ~ 435
SX06	II b 区	不定形	1.07	1.12 以上	-	不定形	0.42	6.10	弥生土器・サヌカイト製石鑓・楔形石器・剥片	弥生時代	風倒木痕か?	436 ~ 437
SX07	III a 区	長橢円形?	3.07 以上	4.99	N 33.825° W	皿状	0.21	6.22	(上層) 須恵器、土師質土器小皿・碗・杯・足釜・土鍋・十瓶山周辺産碗・瓦器碗・東播系須恵器捏鉢・亀山焼・中国産青磁碗・肥前系磁器猪口・同陶器・京信楽系陶器碗・瀬戸美濃系陶器・土鍾・丸瓦・平瓦・焼土塊・サヌカイト剥片 (下層) 土師質土器小皿・碗・足釜・十瓶山周辺産碗・甕・瓦器碗・亀山焼・サヌカイト片	18世紀後半以降	SD14より後出、SK50より先行	658 ~ 679
SX08	III b 区	楕円形	0.59	0.36	N 59.09° E	皿状	0.04	6.55	土師質土器小皿	14世紀後葉~15世紀前葉	地鎮遺構	680 ~ 688
SX09	III b 区	楕円形?	1.98	2.38 以上	-	逆台形	0.66	5.89	(上層) 須恵器、土師質土器小皿・碗・杯・足釜・土鍋・十瓶山周辺産須恵質土器碗・瓦器皿・碗・備前焼・龍泉窯系青磁碗・中国産白磁碗・サヌカイト剥片・不明鉄製品・鉄滓? (中層) 須恵器、土師質土器小皿・碗・十瓶山周辺産須恵質土器碗・安山岩焼磚・鉄滓 (下層) 須恵器	13世紀中葉	水溜遺構?	689 ~ 702
SX10	III b 区								土師質土器	中世		-
SX11	IV a 区	溝状	2.80 ~ 3.71	7.0 以上	N 29.699° W	皿状	0.15	6.27 ~ 6.34	須恵器、土師質土器小皿・杯・碗・摺鉢・足釜・土鍋・瓦質土器摺鉢・瓦器碗・亀山焼・備前焼・龍泉窯系青磁碗・中国産白磁碗・サヌカイト剥片・砥石・不明鉄製品	15世紀後半	整地層	790 ~ 812
SX12	IV a 区	隅丸長方形	0.42	0.22	N 57.163° E	皿状	0.04	6.45	土師質土器小皿	14世紀後半	地鎮遺構	813 ~ 820
SX13	IV a 区	やや歪隅丸長方形	0.50	0.25	N 57.164° E	概逆台形状	0.08	6.38	須恵器、土師質土器小皿	14世紀後半	地鎮遺構	821 ~ 826
SX14	IV a 区	やや歪長楕円形	0.71	0.36	N 55.998° E	皿状	0.04	6.40	土師質土器小皿	14世紀後半	地鎮遺構	827 ~ 850

性格不明遺構・地鎮遺構一覧

土器観察表（1）

朝文番号	造様名	層位	器種	底径	器高	口径	外表面調整	焼成	内面調整	産地等	備考
1 SB04	土師質土器・足釜	出土	中:石英質・長石膏・角閃石少・黒雲母多・赤色粒少 火山ガラス普・赤色粒少	27.2		外: 10YR8/3 淡黄橙 内: 7.5YR8/4 淡黄橙	良好	口縁～脣部：ヨコナデ 底部：押庄・ナデ 施釉・一部鉢刃切	口縁部：ヨコナデ 体部：押庄・ナデ 施釉	口縁部 1/8 以下	口径にやや難あり
2 SB07	磁器・碗		精緻			外: 10Y4.5/3 緑チモの脂 内: 5Y7/1 黄白	良好	施釉・一部鉢刃切	破片	中国・関東 窯系背板	内にやや難あり
3 SB07	土師質土器・擂鉢		中: 石英少・長石少・火山ガラス少			外: 内: 10YR8/3 淡黄橙	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：押庄・ナデ 施釉	口縁部：ヨコナデ 体部：擂鉢ナデ後鉢し目 回転ナデ・摩滅	底部 1/8	二次的被熱痕
5 SB13	土師質土器・小皿	7.6	5.1	1.7	中: 石英質・長石少・黒雲母少・火山ガラス少 ラス少	外: 外: 火山ガ 内: 5YR7/6 檻	ややや軟	口縁部：ヨコナデ 体部：回転ナデ・摩滅	口縁部：ヨコナデ 回転ナデ・摩滅	底部 1/8	
6 SB18	土師質土器・杯	8.8			細: 石英質・長石少・黒雲母少・火山ガ ラス少・赤色粒少	外: 外: 7.5YR7/6 檻	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：回転ナデ・摩滅	口縁部：ヨコナデ 回転ナデ	底部 1/8	口径にやや難あり
7 SP18	土師質土器・杯?		5.1		細: 石英質・赤・長石少 ラス少・赤色粒少	外: 7.5YR8/2 黄白 内: 10YR8/6 淡黄橙	ややや軟	口縁部：ヨコナデ・摩滅 底面：静止糸切り	回転ナデ・摩滅	底部 7/8	底部にやや難あり
8 SP19	土師質土器・杯	7.9			細: 石英少・長石少・黒雲母少・火山ガ ラス少・赤色粒少	外: 10YR8/4 淡黄橙 内: 7.5YR8/6 淡黄橙	良好	回転ナデ	回転ナデ	口縁部 1/8	口径・傾きにやや難あり
9 SP22	土師質土器・杯	10.8	5.6	2.4	細: 石英少・長石少・黒雲母少・火山ガ ラス少・赤色粒少	外: 7.5YR8/6 淡黄橙 内: 2. 5YR8/2 黄白	ややや軟	口縁～体部：回転ナデ 正面：回転ヘラ切り	回転ナデ	口縁部 5/8	
10 SP841	土師質土器・小皿	6.5	5.2		細: 石英少・長石少・火山ガラス普・赤 色粒少	外: 10YR8/6 淡黄橙 内: 7.5YR7/6 檻	良好	口縁～体部：回転ナデ 正面：回転ヘラ切り	回転ナデ	口縁部 1/8	
11 SP269	土師質土器・小皿	8.9	5.9	1.3	細: 石英質・長石普・黒雲母少・火山ガ ラス少	外: 10YR8/2 黄白 内: 7.5YR7/6 檻	良好	口縁～体部：回転ナデ 正面：回転ヘラ切り	回転ナデ	口縁部 2/8	
12 SP593	土師質土器・小皿	8.4	6.2	1.8	細: 石英質・長石普・火山ガラス多・赤 色粒	外: 10YR8/4 淡黄橙 内: 7.5YR7/6 檻	良好	口縁～底部：回転ナデ 正面：回転ヘラ切り後板 圧痕	完存	口縁部歪み有、光明Ⅲ	
13 SP435	土師質土器・小皿	7.9	5.4	1.5	細: 石英質・長石普・火山ガラス少	外: 外: 7.5YR7/6 檻 内: 10YR6/2 淡黄橙	良好	口縁部：回転ナデ 正面：静止糸切り	回転ナデ	底部 1/8	
14 SP269	土師質土器・杯	9.4			細: 石英少・長石少・黒雲母少・火山ガ ラス少・赤色粒少	外: 外: 7.5YR7/6 檻 内: 10YR6/2 淡黄橙	良好	回転ナデ	回転ナデ	口縁部 1/8	
15 SP628	土師質土器・杯	5.0			細: 石英少・長石少 ラス少・赤色粒少	外: 7.5YR7/6 檻 内: N3/暗赤	良好	体～底部：回転ナデ 正面：静止糸切り	回転ナデ	底部 1/8	
16 SP746	瓦器・碗	4.8			細: 石英少・長石少 ラス少・赤色粒少	外: 2.5YR8/3 淡黄 内: 7.5YR8/6 淡黄橙	良好	底部～高台：回転ナデ ヨコナデ	回転ナデ	底部 1/8	和泉型
23 SK02	土師質土器・鍋	21.8			中: 石英質・長石膏・角閃石少・黒雲母多・赤 色粒少	外: 2.5YR8/3 淡黄 内: 10YR6/2 淡黄橙	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：押庄・ナデ	口縁部 2/8	底部外面焼付有	
25 SK08	土師質土器・擂鉢	31.5			中: 石英少・長石少・角閃石少・黒雲母多・赤 色粒少	外: 2.5YR8/3 淡黄 内: 7.5YR8/6 淡黄橙	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：押庄・ナデ	口縁部 1/8		
26 SK10	土師質土器・杯?		3.9		細: 石英質・長石普・黒雲母少・火山ガ ラス少・赤色粒少	外: 外: 10YR7/4 にぶい黄 内: 5YR7/6 檻	やや軟	口縁部：ヨコナデ 押庄・ナデ後一部板ナデ	回転ナデ	底部 1/8	底径にやや難あり
27 SK10	土師質土器・擂鉢				中: 石英質・長石膏・角閃石少・黒雲母多・赤 色粒少	外: 火山ガラス少・火山ガラス少	良好	口縁部：ヨコナデ 押庄・ナデ後鉢し目	摩滅	底部 1/8	
28 SK11	下皿		8.8	6.1	細: 石英少・長石多・火山ガラス少	外: 外: 5YR7/6 檻 内: 2.5YR4.6 オリーブ	良好	口縁部：ヨコナデ 正面：回転ヘラ切り	回転ナデ	底部 1/8	口径にやや難あり
29 SK11	上層		8.5		細: 石英質・長石普・黒雲母少・火山ガ ラス少・赤色粒少	外: 10YR5/6 黄白 内: 7.5YR8/6 淡黄橙	やや軟	回転ナデ・摩滅	回転ナデ	口縁部 1/8	口径にやや難あり、口縁部 に焼痕
30 SK11	上層		7.8		中: 石英少・長石多・角閃少・火山ガ ラス少	外: 2.5YR4.6 黄白 内: 10YR8/4 淡黄橙	やや軟	摩滅	摩滅	底部 1/8	底径にやや難あり
31 SK11	上層		5.6		微: 石英少・長石少・黒雲母少・火山ガ ラス少・赤色粒少	外: 外: 7.5YR8/4 淡黄橙 内: 7.5YR8/6 淡黄橙	良好	口縁部：ヨコナデ 正面：ナデ	回転ナデ	底部 1/8	底径にやや難あり
32 SK11	上層		6.8		細: 石英質・長石普・火山ガラス少	外: 7.5YR8/6 淡黄橙 内: 2. 5YR7/5 淡黄	良好	口縁部：ヨコナデ 正面：回転ヘラ切り	回転ナデ	底部 1/8	底径にやや難あり
33 SK11	上層				粗粒	—	—	口縁部：鉄輪施釉	施釉	口縁部 1/8	古海岸碗 (後期3~4)
34 SK11	上層		10.8			輪: N8/灰白 胎: 3Y6/1 黄白	良好	施釉	施釉	口縁部 1/8	中国・白磁 口径にやや難あり
35 SK11	上層					吳須: 10Y3.5/3.5 緑4.6の脂 い青	良好	施釉	施釉	中国・景德 窯系青花	
36 SK11	下層				中: 石英質・長石膏・角閃石少・黒雲母多・赤 色粒少	外: 10YR8/3 淡黄 内: 2.5YR5/5 淡黄	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：押庄・ナデ	口縁部歪み有 体部: 中・底	底部 1/8	

報文番号	遺構名	層位	器種	口径	底径	器高	胎土	色調	外：10YR8/4 淡黄橙 内：10YR8/4 淡黄橙	焼成	外面調整	内面調整	残存率	产地等	備考	
37	SK11	下層	土師質土器・鍋	42.2			中：石英質・長石質・火山ガラス多・赤 色粒少	外：10YR4/2 淡黄橙 内：5YR6/8 棕	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：板：板ナデ後斜めハケ	口縁部：ヨコナデ 体部：板：板ナデ	口縁部：ヨコナデ 体部：板：板ナデ	以下	口盤にやや難あり、外面に煤付有		
38	SK11	下層	土師質土器・土鍋	9.4			中：石英質・長石質・黒雲母少・火山ガ ラス少・赤色粒少	外：10YR4/2 淡黄橙 内：5YR6/8 棕	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：板：板ナデ	口縁部：ヨコナデ 体部：板：板ナデ	口縁部：ヨコナデ 体部：板：板ナデ	以下	口縁部：ヨコナデ 体部：板：板ナデ	口縁部：ヨコナデ 体部：板：板ナデ	
43	SK12	上層	磁器・碗	5.5			細：石英多・長石多・黒雲母少・火山ガ ラス少・赤色粒少	外：5YR6/8 棕 内：3.5YR7.5/4 棕みのう	良好	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	口縁部：ヨコナデ 体部：板：板ナデ	以下	肥前系染付		
44	SK16	下層	土師質土器・小皿	8.4	4.8	2.1	中：石英質・長石多・黒雲母少・火山ガ ラス少・赤色粒少	外：5YR6/4 にぶい黄橙 内：10YR7.3/にぶい黄橙	良好	底面：静止糸切り	底面：静止糸切り	底面：静止糸切り	底部 8/8	底面：静止糸切り	底面：静止糸切り	
45	SK16	下層	土師質土器・小皿	9.2	4.6	2.1	細：石英少・長石少・火山ガラス少・赤 色粒少	中：石英質・長石質・黒雲母少・火山ガ ラス少・赤色粒少	良好	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ	以下	底面：静止糸切り	底面：静止糸切り	
46	SK16	上層	土師質土器・小皿	10.6	5.4	2.8	中：石英質・長石質・黒雲母少・火山ガ ラス少・赤色粒少	外：7.5YR7/6 棕 内：7.5YR7/8 黄橙	良好	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ	以下	底面：静止糸切り	底面：静止糸切り	
47	SK16	下層	土師質土器・小皿	6.4			中：石英質・長石質・黒雲母少・火山ガ ラス少・赤色粒少	外：7.5YR8/4 淡黄澄 内：5YR6/2 オリーブ灰	良好	口縁～底部：回転ナデ	口縁～底部：回転ナデ	口縁～底部：回転ナデ	以下	底面：静止糸切り	底面：静止糸切り	
48	SK16	上層	施釉陶器・皿	12.9			精微	外：10YR5/4 赤褐 内：10YR7/2 灰白	良好	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	以下	底面：静止糸切り	底面：静止糸切り	
49	SK16	上層	施釉陶器・皿	4.2			精微	外：NS/灰白 内：NS/灰白	良好	口縁～底部：回転ナデ	口縁～底部：回転ナデ	口縁～底部：回転ナデ	以下	底面：施釉・砂目積 見込み	底面：施釉・砂目積 見込み	
50	SK16	上層	磁器・皿	—			釉：胎：NS/5 白	釉：胎：NS/5 白	良好	口縁～底部：施釉	口縁～底部：施釉	口縁部：ヨコナデ	以下	中国・長崎系白磁		
51	SK16	下層	磁器・碗	—			中：石英少・長石少	外：5YR3/1 暗青灰 内：5YR7/1 灰白	良好	口縁～底部：施釉	口縁～底部：施釉	口縁部：ヨコナデ	以下	底面：施釉・砂目積 見込み	底面：施釉・砂目積 見込み	
52	SK16	上層	焼成陶器・罐鉢	—			中：石英多・長石多・黒雲母普・火山ガ ラス少	外：5YR4/1 極灰 内：10YR2/灰赤	良好	口縁～底部：回転ナデ・端面に 体部：回転ナデ・底面に	口縁～底部：回転ナデ・端面に 体部：回転ナデ・底面に	口縁部：ヨコナデ	以下	底面：施釉・砂目積 見込み	底面：施釉・砂目積 見込み	
53	SK16	上層	土師質土器・罐鉢	23.8			中：石英多・長石多・黒雲母普・火山ガ ラス少	外：2.5YR7/2 灰白 内：10YR2/灰赤	良好	口縁～底部：回転ナデ・後脚し目 体部：回転ナデ	口縁～底部：回転ナデ・後脚し目 体部：回転ナデ	口縁部：ヨコナデ	以下	底面：施釉・砂目積 見込み	底面：施釉・砂目積 見込み	
54	SK16	上層	施釉陶器・罐鉢	34.2			精微	釉：2.5YR3/2 黒褐 胎：5YR6/4 にぶい暗	良好	口縁部：回転ナデ後施釉	口縁部：回転ナデ後施釉	口縁部：ヨコナデ	以下	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ	
55	SK16	上層	土師質土器・足金	30.8			中：石英質・長石質・黒雲母多・火山ガ ラス少	外：10YR8/3 淡黄澄 内：5YR7/1 黑褐	良好	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	口縁部：ヨコナデ	以下	底面：施釉・砂目積 見込み	底面：施釉・砂目積 見込み	
56	SK16	上層	焼成陶器・甕	31.6			中：石英質・長石質	外：5YR4/3 にぶい赤褐	良好	口縁～底部：回転ナデ・口縁～類部：回転ナデ	口縁～底部：回転ナデ・口縁～類部：回転ナデ	口縁部：ヨコナデ	以下	底面：施釉・砂目積 見込み	底面：施釉・砂目積 見込み	
57	SK17	上層	土師質土器・小皿	7.8	4.5		細：石英多・長石多・黒雲母少・火山ガ ラス少・赤色粒少	外：7.5YR8/6 淡黄澄 内：10YR8/2 灰白	良好	口縁～底部：回転ナデ	口縁～底部：回転ナデ	口縁部：ヨコナデ	以下	底面：施止糸切り	底面：施止糸切り	
58	SK17	上層	土師質土器・大皿	9.7	6.1	2.5	細：石英少・長石少・火山ガラス普	外：10YR8/2 灰白 内：5YR7/1 黑褐	良好	口縁～底部：回転ナデ	口縁～底部：回転ナデ	口縁部：ヨコナデ	以下	底面：回転ヘラ切り	底面：回転ヘラ切り	
59	SK17	上層	磁器・皿	9.8	2.9	2.5	—	中：石英質・長石質	外：7.5YR2/2 オリーブ灰白 内：5YR2/2 灰白	良好	口縁～体部：施釉・底 高台：施釉	口縁～体部：施釉・底 高台：施釉	口縁部：ヨコナデ	以下	底面：施釉・砂目積 見込み	底面：施釉・砂目積 見込み
60	SK17	上層	土師質土器・鍋	29.4			ラス少	中：石英質・長石質・火山ガラス普	良好	口縁～底部：回転ナデ	口縁～底部：回転ナデ	口縁部：ヨコナデ	以下	底面：施釉・砂目積 見込み	底面：施釉・砂目積 見込み	
61	SK17	上層	瓦質土器・甕	57.8			中：石英質・長石質・火山ガラス普	外：NS/暗灰	良好	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ	以下	底面：施釉・砂目積 見込み	底面：施釉・砂目積 見込み	
62	SK17	上層	土師質土器・火鉢？	25.2			中：石英質・長石質・黒雲母少・火山ガ ラス少・赤色粒少	外：7.5YR7/6 暗 内：7.5YR8/4 淡黄澄	良好	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ	以下	底面：施釉・砂目積 見込み	底面：施釉・砂目積 見込み	
65	SK21	上層	磁器・碗	13.9			—	粗：石英質・長石質・黒雲母少・火山ガ ラス少・赤色粒少	外：8.5YR8/2 棕みのう	良好	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	口縁部：ヨコナデ	以下	底面：施釉・砂目積 見込み	底面：施釉・砂目積 見込み
66	SD03	上層	古式土師器・二重口鉢	20.9			粗：石英質・長石質・黒雲母少・火山ガ ラス少・赤色粒少	外：2.5YR7/2 暗灰 内：2.5YR7/2 暗	軟	口縁部：刺繩	口縁部：刺繩	口縁部：ヨコナデ	以下	底面：刺繩	底面：刺繩	
67	SD03	下層	須恵器・杯身	—			中：石英少・長石少	外：NS/灰 内：NS/灰	良好	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ	口縁部：ヨコナデ	以下	受け部	受け部	
68	SD03	下層	須恵器・杯身	—			中：石英少・長石少	外：NS/灰 内：NS/灰	良好	口縁～底部：回転ナデ	口縁～底部：回転ナデ	口縁部：ヨコナデ	以下	受け部	受け部	
69	SD03	下層	須恵器・杯	7.6			細：石英少・長石少・火山ガラス少	外：5YR1/1 灰白	やや軟	口縁～底部：回転ナデ	口縁～底部：回転ナデ	口縁部：ヨコナデ	以下	底面：刺繩	底面：刺繩	

土器観察表（2）

土器観察表 (3)

朝文番号	遺物名	層位	器種	口径	底径	器高	外・内：N/G/灰	色調	外面調整	焼成	底面：回転ナデ？	底面：回転ナデ	残存率	产地等	備考
70	SD03	上層	須恵器・皿	10.3	1.7	細：石英少・長石少	外・内：10YR8/3 淡黄褐色	良好	底面：回転ナデ	底面：回転ナデ	底面：回転ナデ	底面：回転ナデ	1/8	底面にやや難あり	底面にやや難あり
71	SD03	上層	土師質土器・皿	8.1	4.8	細：石英少・長石少・火山ガラス多・赤	外・内：10YR8/3 淡黄褐色	やや灰	口縁～底部：回転ナデ？	口縁～底部：回転ナデ？	口縁部 1/8	口縁部 1/8	1/8	傾きにやや難あり	傾きにやや難あり
72	SD03	上層	土師器・皿	9.8		細：石英多・長石多・火山ガラス普	外・内：2.5YR8/2 灰白	やや灰	口縁～底部：回転ナデ	口縁～底部：摩滅	口縁部 1/8	口縁部 1/8	1/8	傾きにやや難あり	傾きにやや難あり
73	SD03	上層	土師器・皿	12.3		中：石英多・長石多・黒雲母普・火山ガラス少	外・内：5YR8/8 灰	良好	口縁～底部：回転ナデ？	口縁～底部：摩滅	口縁部 1/8	口縁部 1/8	1/8	口縁部 1/8	口縁部 1/8
74	SD03	上層	土師質土器・皿	5.9		細：石英普・長石普・火山ガラス普	外：10YR8/2 灰白 内：10YR8/4 淡黄褐色	やや灰	底面：回転ナデ？	底面：摩滅	底面：摩滅	底面：摩滅	1/8	底面・傾きにやや難あり	底面・傾きにやや難あり
75	SD03	下層	土師器・皿	7.2		細：石英普・長石普・黒雲母普・火山ガラス少・赤	外・内：10YR8/3 淡黄褐色	良好	体部：回転ナデ	底面：回転ナデ？	底面：摩滅	底面：摩滅	1/8	底面・傾きにやや難あり	底面・傾きにやや難あり
76	SD03	上層		7.3		細：石英少・長石少・火山ガラス普	外・内：10YR8/2 灰白	やや灰	底面：回転ヘラ切り後ナデ？	底面：摩滅	底面：摩滅	底面：摩滅	1/8	底面にやや難あり	底面にやや難あり
77	SD03	上層	土師質土器・杯？	7.5		細：石英多・長石多・黒雲母少・火山ガラス少	外：10YR8/3 黑褐色 内：10YR8/2 灰白	やや灰	底面：回転ヘラ切り後ナデ？	底面：摩滅	底面：摩滅	底面：摩滅	1/8	底面にやや難あり	底面にやや難あり
78	SD03	上層	黑色土器・碗	6.3		細：石英普・長石少・火山ガラス少	外：10YR8/2 灰白 内：2.5YR3/1 黑褐色	やや灰	底面：回転ナデ？	底面：摩滅	底面：摩滅	底面：摩滅	1/8	底面にやや難あり	底面にやや難あり
79	SD03	上層	黑色土器・碗			中：石英多・長石多・火山ガラス普	外：10YR8/2 灰白 内：2.5YR3/1 黑褐色	やや灰	底面：回転ナデ？	底面：摩滅	底面：摩滅	底面：摩滅	1/8	底面にやや難あり	底面にやや難あり
80	SD03	中層	黑色土器・碗			細：石英少・長石少・火山ガラス普	外：10YR8/2 灰白 内：5YR3/1 黑褐色	良好	高台：ヨコナデ	高台：ヨコナデ？	高台：ヨコナデ	高台：ヨコナデ	2/8	高台 2/8	高台 2/8
81	SD03	中層	須恵質土器・碗	17.0		細：石英普・長石普	外・内：N7/灰白	良好	口縁～体部：回転ナデ	体～底部：摩滅	体～底部：摩滅	体～底部：摩滅	1/8	十幡山周辺	口縁部 1/8
82	SD03	上層	土師器・碗	13.9		細：石英少・長石少・火山ガラス少	外・内：10YR8/2 灰白	良好	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ	口縁部 1/8	口縁部 1/8	1/8	以下	以下
83	SD03	上層	土師器・碗	5.6		細：石英普・長石普・火山ガラス普	外：10YR5/3 ぶい黄褐色	良好	回転ナデ	底面：摩め板ナデ	底面：摩め板ナデ	底面：摩め板ナデ	1/8	底面にやや難あり	底面にやや難あり
84	SD03	上層	土師器・碗	7.8		細：石英普・長石普・黒雲母少・火山ガラス少	外：7.5YR6/6 橙	良好	底面：回転ナデ？	底面：摩滅	底面：摩滅	底面：摩滅	1/8	底面にやや難あり	底面にやや難あり
85	SD03	上層	磁器・高脚杯	3.2		細：石英普・長石普	外：5YR8/3 うすい緑	良好	底面：脚部	施釉	底面：施釉	底面：施釉	1/8	中国・龍泉系青磁	中国・龍泉系青磁
86	SD03		磁器・碗			細：5YR6/2.5 明るい灰黄緑	内：5YR5/2 灰黄褐色	良好	口縁～体部：施釉	蓮弁	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	1/8	窓子青磁	窓子青磁
87	SD03		施釉陶器・碗			細：10YR4.5/3 緑みの暗い黄	内：10YR8/2 灰白	良好	口縁～体部：施釉	脚压・ナデ	口縁～体部：脚压・ナデ	口縁～体部：脚压・ナデ	1/8	肥前系葛塚	肥前系葛塚
88	SD03	下層	土師器？	7.0		中：石英普・長石普・角閃石多・黒雲母多・火山ガラス少	外・内：5YR4/6 赤褐色	良好	口縁～体部：脚压	脚压・ナデ	口縁～体部：脚压・ナデ	口縁～体部：脚压・ナデ	1/8	口縁部 1/8	口縁部 1/8
91	SD03	中層	土師器？・小形鉢	4.6	3.2	中：石英普・長石普・角閃石多・黒雲母多・火山ガラス少	外：10YR8/2 灰白	良好	口縁～底部：脚压	脚压・ナデ	口縁～底部：脚压・ナデ	口縁～底部：脚压・ナデ	1/8	口縁部 7/8	口縁部 7/8
92	SD03	中層	土師器・羽釜	29.2		粗：石英多・長石多・黒雲母普・火山ガラス少	外：10YR7/2 ぶい黄褐色	良好	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ	2/8	外面に焼付着	外面に焼付着
93	SD03	上層	土師器・羽釜	35.6		中：石英普・長石普・黒雲母少・火山ガラス少	外：2.5YR6/3 ぶい黄褐色	良好	脚部：ヨコナデ	脚部：ヨコナデ	脚部：ヨコナデ	脚部：ヨコナデ	1/8	口縁部 1/8	口縁部 1/8
94	SD03	中層	土師器・羽釜	30.0		粗：石英普・長石普・黒雲母少・火山ガラス少	外：10YR6/4 ぶい黄褐色	良好	口縁部：ヨコナデ	脚部：ヨコナデ	脚部：ヨコナデ	脚部：ヨコナデ	1/8	傾きにやや難あり、外	傾きにやや難あり、外
95	SD03	中層	土師器・堀	32.5		中：石英普・長石普・黒雲母少・火山ガラス少	外：7.5YR7/6 黑褐色	良好	脚部：ヨコナデ	脚部：ヨコナデ	脚部：ヨコナデ	脚部：ヨコナデ	1/8	面及び内縫部内面に焼付着	面及び内縫部内面に焼付着
96	SD03	下層	須恵器・底盤	13.5		粗：石英普・長石普	外：7.5YR4/1 灰	良好	底面：回転ケズリ後カギ目	底面：回転ケズリ後カギ目	底面：回転ケズリ後カギ目	底面：回転ケズリ後カギ目	1/8	底面にやや難あり	底面にやや難あり

報文番号	記載名	層位	器種・埴	口径	底径	器高	胎土	中：石英多・長石多・黒雲母少・火山ガラス少	外：10YR5/3 にぶい黄褐色	内：10YR7/4 にぶい黄褐色	表面調整	焼成	外縁部：輪郭部・神押・体～鈕部：ナデ？隠滅	内縁部：輪郭部・神押・体～鈕部：ナデ？隠滅	残存部	产地等	備考
97	S003	上層	土師器・埴														
98	S003	上層	土師器・埴					中：石英多・長石多・黒雲母少・火山ガラス少	外・内：7.5YR6/8 横	良好	鈕部：ノック後ナデ	鈕部：ノック後ナデ	鈕部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ	破片	内面に焼付着
114	S006	土師質土器・土鍋		38.2				粗：石英質・長石質・黒雲母少・火山ガラス質	外：7.5YR5/3 にぶい黄褐色	良好	体部：神押後ナデ	体部：横板ナデ後ナデ	体部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ	口径にやや隠滅	口径にやや隠滅あり、外面部付着
115	S007	須恵器・碗		4.8				中：石英質・長石質	外：8YR7/4 灰白	良好	底部～底面：回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ	口径部 1/8	口径にやや隠滅
116	S007	土師質土器・小皿		7.8	5.7			中：石英多・長石多・火山ガラス少・赤色粒少	外・内：7.5YR7/6 横	やや軟	底部～底面：回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ	底部 1/8	底径にやや隠滅
117	S007	土師質土器・小皿		7.8	5.1			細：石英・長石	外・内：3YR7/7 赤みのうすい黄赤	やや軟	口縁部：回転ナデ・摩滅	摩滅	摩滅	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ	口縁部 1/8	口縁部 1/8
118	S007	土師質土器・小皿		7.9	5.2	1.8		細：石英多・長石多・火山ガラス質・赤色粒少	外・内：10YR8/3 浅黄褐色	良好	底面：回転～切り	回転ナデ	回転ナデ	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ	口縁部 1/8	
119	S007	土師質土器・杯		7.9	5.9	3.4		中：石英多・長石多・火山ガラス質・赤色粒少	外・内：2.5YR7/8 赤みのうすい黄赤	やや軟	底面：回転～切り	回転ナデ	摩滅	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ	口縁部 4/8	
120	S007	土師質土器・杯		11.4	6.2			細：石英質・長石質・火山ガラス少	外・内：7.5YR7/8 黄橙	良好	底面：回転～切り	回転ナデ	回転ナデ	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ	口縁部 2/8	
121	S007	土師質土器・皿		12.2	7.2	2.25		細：石英多・長石多・黒雲母少・火山ガラス少	外・内：7.5YR6/8 横	やや軟	口縁～底部：回転ナデ・摩滅	摩滅	摩滅	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ	口縁部 1/8	口径・傾きにやや隠滅あり
122	S007	磁器・皿		9.2				—	—	—	底面：回転～切り	施釉	施釉	口縁～底部：施釉	口縁～底部：施釉	口縁部 1/8	口径にやや隠滅
123	S007	磁器・碗		4.9				—	—	—	底面：高台燃～内：露船・施釉	施釉	施釉	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ	底部 3/8	中国・龍泉窓系青花
124	S007	土師質土器・足金		23.5				中：石英質・長石質・黒雲母少・火山ガラス質	外：10YR8/4 浅黄褐色	良好	口縁～鈕部：ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ	口縁部 1/8	中国・吳縣窓系青花
125	S007	土師質土器・足金		22.2				中：石英質・長石質・黒雲母少・火山ガラス質	外・内：5YR8/5 明るい灰白	良好	底部：神押・ナデ	神押ナデ	神押ナデ	体部：横板ナデ	体部：横板ナデ	口縁部 1/8	中国・龍泉窓系青花
126	S007	土師質土器・足金		19.5				中：石英多・長石多・角閃石少・火山ガラス質	外：10YR7/3 にぶい黄褐色	良好	口縁～鈕部：ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	体部：横板ナデ・ナデ	体部：横板ナデ・ナデ	口縁部 1/8	中国・龍泉窓系青花
127	S007	土師質土器・足金		23.4				中：石英質・長石質・黒雲母少・火山ガラス質	外・内：10YR8/2 灰白	良好	口縁～鈕部：ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ	口縁部 1/8	中国・吳縣窓系青花
128	S007	土師質土器・足金		24.8				中：石英質・長石質・火山ガラス質・赤色粒少	外・内：2.5YR8/3 淡黄褐色	良好	口縁～鈕部：ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	体部：横板ナデ	体部：横板ナデ	口縁部 1/8	中国・龍泉窓系青花
129	S007	土師質土器・足金		24.9				粗：石英多・長石多・黒雲母少・火山ガラス質	外・内：7.5YR7/6 横	良好	口縁～鈕部：ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	体部：横板ナデ・ナデ	体部：横板ナデ・ナデ	口縁部 1/8	中国・龍泉窓系青花
130	S007	土師質土器・足金		26.8				中：石英質・長石質・火山ガラス質・赤色粒少	外・内：10YR8/2 灰白	良好	口縁～鈕部：ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	体部：横板ナデ	体部：横板ナデ	口縁部 1/8	中国・龍泉窓系青花
131	S007	土師質土器・足金		26.1				中：石英質・長石質・火山ガラス質	外・内：10YR8/2 灰白	良好	脚部：神押・ナデ	ナデ	ナデ	脚部：神押・ナデ	脚部：神押・ナデ	脚部完存	
132	S007	土師質土器・足金		27.4				中：石英質・長石質・黒雲母少・火山ガラス質	外・内：10YR7/4 にぶい黄褐色	良好	口縁～鈕部：ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	体部：横板ナデ・係続	体部：横板ナデ・係続	口縁部 1/8	口径にやや隠滅あり、体部外面焼付着
133	S007	土師質土器・足金		24.2				中：石英質・長石質・火山ガラス質・赤色粒少	外：10YR7/4 にぶい黄褐色	良好	口縁～鈕部：ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	体部：横板ナデ	体部：横板ナデ	口縁部 1/8	口径にやや隠滅
134	S007	土師質土器・足金		26.4				中：石英質・長石質・火山ガラス質	外：7.5YR7/6 横	良好	口縁～鈕部：ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	体部：横板ナデ	体部：横板ナデ	口縁部 1/8	口径にやや隠滅あり、体部外面焼付着
135	S007	土師質土器・足金		28.4				粗：石英多・長石多・黒雲母少・火山ガラス少	外：2.5YR8/3 淡黄褐色	やや軟	口縁～鈕部：ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	体部：横板ナデ・ナデ	体部：横板ナデ・ナデ	口縁部 2/8	
136	S007	土師質土器・足金						ラス少・赤色粒少	内：10YR8/4 浅黄褐色	良好	脚部：神押・ナデ	ナデ	ナデ	脚部：神押・ナデ	脚部：神押・ナデ	口縁部 1/8	

土器観察表 (4)

報文番号	遺構名	層位	器種	口径	底径	器高	胎土	外表面調整	焼成	外表面調整	内面調整	我存率	产地等	備考
137	SD07		土師質土器・足金	29.6			中：石英質・長石質・黒雲母少・火山ガラス質	外：10YR8/2灰白 内：2.5Y7/3浅黄	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：押庄後横板ナデ	口縁部：ヨコナデ 体部：押庄後横板ナデ	以下	口縁部 1/8	口径にやや歪あり
138	SD07		土師質土器・足金	30.9			粗：石英質・長石質・黒雲母少・赤色粒少	外：10YR8/2灰白 内：7.5YR8/6黄橙	良好	口縁～窓部：ヨコナデ 体部：押庄・ナデ	口縁部：ヨコナデ 体部：横板ナデ・堅誠	以下	口縁部 1/8	口径にやや歪あり
139	SD07		土師質土器・土鍋	25.6			粗：石英多・長石少・黒雲母少・火山ガラス質	外：7.5YR8/4にぶい黄 内：10YR6/6明黄褐	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：押庄・ナデ後縫板ナデ・堅誠	口縁部：ヨコナデ 体部：横板ナデ・堅誠	以下	口縁部 1/8	口径にやや歪あり・体部外面 焼付着
140	SD07		土師質土器・土鍋	39.4			中：石英質・長石質・黒雲母少・火山ガラス少	外：10YR5/4にぶい黄褐 内：10YR6/6明黄褐	良好	口縁部：押庄後ヨコナデ 体部：押庄・ナデ	口縁部：横板ナデ後ヨコナデ 体部：横・ハケ	以下	口縁部 1/8	口径にやや歪あり・外 面焼付着
141	SD07		土師質土器・土鍋	49.2			中：石英質・長石質・黒雲母少・火山ガラス質	外：7.5YR5/4にぶい褐色 内：7.5YR2/6橙	良好	口縁部：押庄・ナデ後ヨコナデ 体部：横・ハケ	口縁部：横板ナデ後ヨコナデ 体部：横板ナデ	以下	口縁部 1/8	口径にやや歪あり・外 面焼付着
142	SD07		土師質土器・土鍋	39.6			中：石英多・長石多・黒雲母少・赤色粒少	外：10YR4/1褐灰 内：2.5Y4/4オリーブ褐	良好	口縁部：押庄後ヨコナデ 体部：端部・窓部：横板ナデ・ヨコナデ	口縁部：横板ナデ・ヨコナデ 体部：横板ナデ	以下	口縁部 1/8	口径にやや歪あり・外 面焼付着
143	SD07		土師質土器・土鍋	40.4			中：石英質・長石質・黒雲母少・火山ガラス質	外：7.5YR5/4にぶい橙 内：2.5Y8/3浅黄	良好	口縁部：押庄後ヨコナデ 体部：横・ハケ	口縁部：横板ナデ・横・ハケ後ヨコナデ 体部：横・ハケ	以下	口縁部 2/8	口径にやや歪あり・外 面焼付着
144	SD07		土師質土器・土鍋	45.1			中：石英質・長石質・黒雲母少・火山ガラス質	外：7.5YR7/6橙 内：10YR8/3浅黄橙	良好	口縁部：押庄後ヨコナデ 体部：横板ナデ	口縁部：横板ナデ後ヨコナデ 体部：横・ハケ	以下	口縁部 1/8	口径にやや歪あり・外 面焼付着
145	SD07		土師質土器・土鍋	43.9			中：石英質・長石質・黒雲母少・火山ガラス質	外：7.5YR8/6橙 内：10YR7/3にぶい黄	良好	口縁部：押庄後ヨコナデ 体部：横板ナデ・ナデ	口縁部：横板ナデ・ナデ	以下	口縁部 1/8	口径にやや歪あり・外 面焼付着
146	SD07		土師質土器・土鍋	43.6			中：石英質・長石質・黒雲母少・火山ガラス質	外：10YR4/2灰黄褐 内：10YR6/4にぶい黄	良好	口縁部：押庄後ヨコナデ 体部：横板ナデ・堅誠	口縁部：横板ナデ 体部：横板ナデ・堅誠	以下	口縁部 1/8	口径にやや歪あり・口縫部外 面焼付着
147	SD07		土師質土器・土鍋	45.2			中：石英質・長石質・黒雲母少・火山ガラス質	外：10YR5/3にぶい黄 内：10YR8/6黄褐	良好	口縁部：押庄後ヨコナデ 体部：横・ハケ	口縁部：横・ハケ後ヨコナデ 体部：横・ハケ	以下	口縁部 1/8	口径にやや歪あり・外 面焼付着
148	SD07		土師質土器・土鍋	45.6			中：石英質・長石質・黒雲母少・火山ガラス少	外：10YR8/4浅黄橙 内：10YR8/4灰	良好	口縁部：押庄後ヨコナデ 体部：横板ナデ・ナデ	口縁部：横板ナデ 体部：横板ナデ	以下	口縁部 1/8	口径にやや歪あり・体 部焼付着
149	SD07		土師質土器・土鍋	43.2			粗：石英多・長石多・火山ガラス質・赤 色粒少	外：10YR6/6明黄褐 内：10YR7/6明黄褐	良好	口縁部：押庄後ヨコナデ 体部：横・斜底	口縁部：横板ナデ・ナデ	以下	口縁部 1/8	口径にやや歪あり・外 面焼付着
150	SD07		瓦質土器・土鍋	31.2			中：石英少・長石少・黒雲母少・火山ガラス少	外：5Y5/1灰 内：5Y5/1灰	やや軟	口縁部：押庄後ヨコナデ・横 板ナデ	口縁部：横板ナデ 体部：横・ハケ	以下	口縁部 1/8	口径にやや歪あり・魚山燒
151	SD07		土師質土器・土鍋	28.4			中：石英質・長石質・黒雲母少・火山ガラス質	外：10YR8/2灰白 内：10YR8/2灰白	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：押庄・ナデ	端部：ヨコナデ 体部：横板ナデ・堅誠	以下	口縁部 1/8	口径にやや歪あり
152	SD07		土師質土器・土鍋	28.6			中：石英質・長石質・火山ガラス少	外：10YR8/2灰白 内：10YR8/2灰白	やや軟	口縁部：ヨコナデ 体部：押庄・ナデ後縫板ナデ 押庄・ナデ・堅誠	口縁部：ヨコナデ 体部：横・斜底	以下	口縁部 1/8	口径にやや歪あり
153	SD07		土師質土器・土鍋	27.6			中：石英質・長石質・黒雲母少・火山ガラス質	外：10YR7/4にぶい黄 内：10YR8/6黄	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：横板ナデ・ナデ後縫板ナデ	口縁部：ヨコナデ 体部：横板ナデ・ナデ	以下	口縁部 1/8	口径にやや歪あり・外 面焼付着
154	SD07		土師質土器・土鍋	29.8			粗：石英多・長石少・黒雲母少・火山ガラス質 色粒少	外：10YR5/2灰黄褐 内：10YR8/2灰白	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：横・ハケ後削 削庄・ナデ	口縁部：ヨコナデ 体部：横・ハケ後削 削庄・ナデ	以下	口縁部 1/8	口径にやや歪あり
155	SD07		土師質土器・土鍋	26.4			粗：石英質・長石質・黒雲母少・火山ガラス質 色粒少	外：10YR7/3にぶい黄 内：10YR8/3浅黄	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：横板ナデ後削 削庄・ナデ	口縁部：ヨコナデ 体部：横・斜底	以下	口縁部 1/8	口径にやや歪あり
156	SD07		土師質土器・土鍋	31.4			粗：石英多・長石多・火山ガラス質・赤 色粒少	外：10YR5/3にぶい黄 内：2.5Y7/4浅黄	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：横・斜底	口縁部：ヨコナデ 体部：横・斜底	以下	口縁部 1/8	口径にやや歪あり
157	SD07		土師質土器・土鍋	30.9	16.6	16.2	粗：石英多・長石少・黒雲母少・火山ガラス少	外：10YR8/2灰白 内：10YR8/2灰白	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：横・斜底	口縁部：ヨコナデ後削 削庄・堅誠	以下	口縁部 1/8	口径にやや歪あり

土器観察表 (5)

報文番号	遺構名	層位	器種	口径	底径	器高	胎土	外表面調査	焼成	色調	内面調査	残存率	产地等	備考
158	S007	土師質土器・溜鉢	34.1	粗：石英多・長石少・角閃石少・火山ガラス質	外：10YR7/3にぶい黄褐色 内：10YR7/4にぶい黄褐色	良好	口縁部：ヨコナデ、端部 にぶい凹線	口縁部：ヨコナデ、端部 体部：直し目	口縁部：ヨコナデ、端部 体部：押正・堅誠	口縁部：ヨコナデ、端部 体部：押正・堅誠	口縁部：ヨコナデ、端部 体部：押正・ナデ後削し目	以下	口径・傾きにやや難あり	
159	S007	土師質土器・溜鉢	35.4	粗：石英質・長石質・黒雲母少・火山ガラス少	外・内：10YR8/3 深黄褐色	良好	口縁部：ヨコナデ、端部 体部：押正・ナデ	口縁部：ヨコナデ、端部 体部：押正・ナデ後削し目	口縁部：ヨコナデ、端部 体部：押正・ナデ後削し目	口縁部：ヨコナデ、端部 体部：押正・堅誠	口縁部：ヨコナデ、端部 体部：斜めハケ後削し目	以下	口径にやや難あり	
160	S007	土師質土器・溜鉢	38.1	粗：石英多・長石多・火山ガラス質	外：10YR6/3にぶい黄褐色 内：2.5YR2灰白	良好	口縁部：ヨコナデ、端部 体部：押正・ナデ後縫板ナデ	口縁部：ヨコナデ、端部 体部：斜めハケ後削し目	口縁部：ヨコナデ、端部 体部：斜めハケ後削し目	口縁部：ヨコナデ、端部 体部：斜めハケ後削し目	口縁部：ヨコナデ、端部 体部：斜めハケ後削し目	以下	口径にやや難あり	
161	S007	土師質土器・片口溜鉢		中：石英質・長石質・黒雲母少・火山ガラス少	外：10YR8/3 深黄褐色	良好	口縁部：ヨコナデ、端部 体部：押正・ナデ	口縁部：ヨコナデ、端部 体部：斜めハケ後削し目	口縁部：ヨコナデ、端部 体部：斜めハケ後削し目	口縁部：ヨコナデ、端部 体部：斜めハケ後削し目	口縁部：ヨコナデ、端部 体部：斜めハケ後削し目	以下	口径にやや難あり	
162	S007	土師質土器・溜鉢	12.2	中：石英質・長石質・火山ガラス質	外・内：10YR5/4にぶい黄褐色	良好	底部：押正・ナデ	底部：斜めハケ後削し目	底部：斜めハケ後削し目	底部：斜めハケ後削し目	底部：斜めハケ後削し目	以下	底径にやや難あり	
163	S007	土師質土器・溜鉢	12.4	中：石英多・長石多・黒雲母少・火山ガラス少	外：10YR8/2灰白	良好	底部：押正・ナデ後斜板	底部：横・ナデ後斜板	底部：横・ナデ後斜板	底部：横・ナデ後斜板	底部：横・ナデ後斜板	以下	底径にやや難あり	
164	S007	土師質土器・溜鉢	14.2	中：石英多・長石多・黒雲母少・火山ガラス少	外：10YR8/3 深黄褐色	良好	底部：押正・ナデ後斜板	底部：横・ナデ後斜板	底部：横・ナデ後斜板	底部：横・ナデ後斜板	底部：横・ナデ後斜板	以下	底径にやや難あり	
165	S007	土師質土器・溜鉢	11.6	粗：石英質・長石質・角閃石少・黑雲母少・火山ガラス少	外：7.5YR6/8橙 内：7.5YR6/8橙	良好	底部：横・ナデ？	底部～底面：横・斜め板	底部～底面：横・斜め板	底部～底面：横・斜め板	底部～底面：横・斜め板	以下	底径にやや難あり	
166	S007	土師質土器・里鉢？		粗：石英多・長石多・黒雲母少・火山ガラス少	外・内：7.5YR4/2灰褐色	良好	口縁部：ヨコナデ、端部：押正・ナデ	口縁部：ヨコナデ、端部：横板ナデ・ナデ	口縁部：ヨコナデ、端部：横板ナデ・ナデ	口縁部：ヨコナデ、端部：横板ナデ・ナデ	口縁部：ヨコナデ、端部：横板ナデ・ナデ	以下	傾きにやや難あり	
167	S007	土師質土器・底部	14.1	粗：石英多・長石多・火山ガラス少・赤	外：7.5YR5/3にぶい赤褐色	良好	底部：押正・後縫板ナデ・堅誠	底部：押正・後縫板ナデ・堅誠	底部：押正・後縫板ナデ・堅誠	底部：押正・後縫板ナデ・堅誠	底部：押正・後縫板ナデ・堅誠	以下	底径にやや難あり	
168	S007	瓦質土器・甕	27.8	中：石英少・長石少・黒雲母少・火山ガラス少	外：NS/灰	良好	口縁部：ヨコナデ、端面：堅誠	口縁～体部：横・斜めハケ後一部ヨコナデ	口縁～体部：横・斜めハケ後一部ヨコナデ	口縁～体部：横・斜めハケ後一部ヨコナデ	口縁～体部：横・斜めハケ後一部ヨコナデ	以下	底径にやや難あり	
169	S007	瓦質土器・甕	34.1	中：石英少・長石少・黒雲母少・火山ガラス少	外：2.5Y3/1 黒褐色	良好	口縁部：ヨコナデ、端部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ、端部：横・斜めハケ後ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ、端部：横・斜めハケ後ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ、端部：横・斜めハケ後ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ、端部：横・斜めハケ後ヨコナデ	以下	底径にやや難あり	
170	S007	瓦質土器・甕	40.1	中：石英質・長石質・火山ガラス少	外：5Y3/1オリーブ黒	良好	口縁部：ヨコナデ、端面：堅誠	口縁部：ヨコナデ、端面：横・斜めハケ後ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ、端面：横・斜めハケ後ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ、端面：横・斜めハケ後ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ、端面：横・斜めハケ後ヨコナデ	以下	底径にやや難あり	
171	S007	瓦質土器・甕		中：石英質・長石質・黒雲母少・火山ガラス少	外：5Y3/1オリーブ黒	良好	頸部：ヨコナデ	頸部～頸部：横・斜めハケ後ヨコナデ	頸部～頸部：横・斜めハケ後ヨコナデ	頸部～頸部：横・斜めハケ後ヨコナデ	頸部～頸部：横・斜めハケ後ヨコナデ	以下	底径にやや難あり	
172	S007	瓦質土器・甕		細：石英少・長石少・火山ガラス少	外：2.5Y3/1 黑褐色	良好	口縁部：ヨコナデ、端部：横・斜めハケ後ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ、端部：横・斜めハケ後ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ、端部：横・斜めハケ後ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ、端部：横・斜めハケ後ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ、端部：横・斜めハケ後ヨコナデ	以下	底径にやや難あり	
173	S007	焼締陶器・溜鉢	28.2	中：石英少・長石少	外：7.5YR5/1 暗灰	良好	回転ケリ後回転ナデ	回転ケリ後回転ナデ	回転ケリ後回転ナデ	回転ケリ後回転ナデ	回転ケリ後回転ナデ	以下	底径部は細口のため口径は推定	
174	S007	焼締陶器・底部	21.9	粗：石英少・長石少	外：2.5Y4/1 黄灰	良好	体部：横・ハケ後ヨコナデ	体部：横・ハケ後ヨコナデ	体部：横・ハケ後ヨコナデ	体部：横・ハケ後ヨコナデ	体部：横・ハケ後ヨコナデ	以下	底径部は細口のため口径は推定	
175	S007	焼締陶器・釜		中：石英少・長石少	外：7.5YR5/3にぶい赤褐色	良好	底面：下端端部ケリ	底面：下端端部ケリ	底面：下端端部ケリ	底面：下端端部ケリ	底面：下端端部ケリ	以下	底径にやや難あり	
197	包含窓	焼締陶器・皿	10.6	中：石英少・長石少	外・内：5YR6/8 暗	良好	口縁～底部：回転ナデ、口縁部長袖	口縁～底部：回転ナデ、口縁部長袖	口縁～底部：回転ナデ、口縁部長袖	口縁～底部：回転ナデ、口縁部長袖	口縁～底部：回転ナデ、口縁部長袖	以下	底径にやや難あり	
198	包含窓	磁器・皿	6.6	一	粗：胎：NS/5白	良好	底部～高台内：施釉、高台露胎	底部～高台内：施釉、高台露胎	底部～高台内：施釉、高台露胎	底部～高台内：施釉、高台露胎	底部～高台内：施釉、高台露胎	以下	底径部は細口のため口径は推定	
199	包含窓	磁器・小碗	12.3	一	粗：胎：NS/灰	良好	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	以下	底径にやや難あり	
200	包含窓	磁器・皿	12.9	一	粗：胎：NS/5白	良好	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	以下	底径にやや難あり	
201	包含窓	磁器・碗	4.5	一	粗：胎：6YR2.5/7ふかく青紫	良好	底部～高台内：施釉、高台露胎	底部～高台内：施釉、高台露胎	底部～高台内：施釉、高台露胎	底部～高台内：施釉、高台露胎	底部～高台内：施釉、高台露胎	以下	底径系青花	
203	SB23	磁器・皿	12.8	一	粗：胎：NS/5白	良好	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	以下	底径系青花	
204	SB23	土師質土器・甕	23.6	中：石英少・長石少・黒雲母少・火山ガラス少	外：10YR8/4 深黄褐色 内：10YR8/3 深黄褐色	良好	口縁部：ヨコナデ、ナデ	口縁部：ヨコナデ、ナデ	口縁部：ヨコナデ、ナデ	口縁部：ヨコナデ、ナデ	口縁部：ヨコナデ、ナデ	以下	外面煤付着	

報文番号	遺跡名	層位	器種	底径	器高	口径	色調	外表面調整	内面調整	現存率	产地等	備考
205 SB23	土師質土器・足金			23.4			中：石英多・長石少・黒雲母少・大山ガラス少	外：内・10YR7/6 明黄褐	やや軟	口縁部：ヨコナデ・摩滅	口縁部 1/8 以下	口径にやや難あり
206 SB23	土師質土器・足金			23.6			中：石英少・長石少・大山ガラス普・赤	外：内・10YR8/2 灰白	良好	口縁～鷲部：ヨコナデ・体部：摩滅	口縁部 1/8	口径にやや難あり、体部外面
210 SB25	土師質土器・皿	10.4					細：石英普・長石普・黒雲母少・大山ガラス少	外：内・7.5YR7/6 橙	良好	口縁～体部：ヨコナデ	口縁部 1/8	焼付着実 198-2 と同一個体か
211 SB25	土師質土器・皿	5.4					細：石英少・長石普・黒雲母少・大山ガラス少	外：7.5YR7/6 橙 内：10YR8/3 淡黄橙	良好	口縁～鷲部：ヨコナデ	口縁部 1/8	口縁部：回転ナデ
218 SB38	土師質土器・足金						中：石英普・長石多・大山ガラス少・赤	外：5YR6/8 橙	良好	口縁～鷲部：ヨコナデ	口縁部 1/8	口縁部：回転ナデ
219 SB38	土師質土器・土鍋						中：石英多・長石多・黒雲母少・大山ガラス少	外：5YR6/6 明赤褐	良好	口縁部：摩滅	口縁部 1/8	口縁部：回転ナデ
222 SB40	土師質土器・杯	4.2					細：石英少・長石少・黒雲母少・大山ガラス少	外：10YR8/4 淡橙	良好	口縁部：回転ナデ	口縁部 1/8	口縁部：回転ナデ
224 SB41	土師質土器・小皿	4.5					細：石英普・長石普・黒雲母少・大山ガラス少	外：内・7.5YR8/6 橙	良好	口縁～底面：静止糸切り	底部：回転ナデ？摩滅	底径にやや難あり
225 SB41	施釉陶器・皿	13.1	精緻				細：石英少・長石少・黒雲母少・大山ガラス少	外：2.5YR5/8 明赤褐	良好	口縁～底部：施釉	口縁部 1/8	肥前系灰釉 脱離くかかる
229 SB42	瓦質土器・火鉢						細：石英少・長石少・黒雲母少・大山ガラス少	外：内・5YR1/1 オリーブ黒	良好	口縁部：ヨコナデ後刻印・摩滅	口縁部 1/8	口縁部：横・斜めハケ
230 SB42	焼継陶器・壺	9.2					中：石英普・長石普	外：内・2.5YR3/2 黒褐	良好	口縁～頸部：回転ナデ	口縁部 1/8	口縁部：横・斜めハケ
231 SB43	壺器・小杯	7.9					胎：NS/5 白	外：5YR2/5 暗い青紫	良好	口縁～底部：施釉	口縁部 1/8	中国・泉徳 氮燃系竹花
236 SB44	壺器・碗						胎：NS/5 白	外：内・5YR2/5 暗い青紫	良好	口縁～底部～高台：施釉	口縁部 1/8	中国・泉徳 氮燃系竹花
239 SB47	壺器・碗？	20.0	精緻				胎：NS/5 白	外：5YR2/5 暗い青紫	良好	口縁～体部：施釉	口縁部 1/8	口縁部：白磁
240 SB48	施釉陶器・皿	13.8	精緻				胎：NS/5 白	外：2.5YR8/2 淡黄	良好	口縁部：施釉	口縁部 1/8	肥前系灰釉 口縁にやや難あり
242 SB49	瓦忠器・挂鉢	32.1					中：石英多・長石多・大山ガラス少	外：7.5YR1/1 灰白	良好	口縁部：刺鉢	口縁部 1/8	口縁部：東晉系
243 SB50	施釉陶器・碗	12.1	精緻				胎：NS/5 白	外：7.5YR5/5 赤みの暗い 中：5YR5/5 赤みの暗い	良好	口縁～体部：回転ナデ	口縁部 1/8	口縁部：摩滅
245 SB51	土師質土器・焼器	44.8					胎：NS/5 白	外：2.5YR3/1 黑褐	良好	口縁部：ヨコナデ	口縁部 1/8	肥前系灰釉 口縁にやや難あり
246 SB51	磁器・皿	23.2					胎：NS/5 白	外：10YR7/3 淡黄	良好	口縁部：ヨコナデ	口縁部 1/8	肥前系灰釉 口縁にやや難あり
250 SB53	土師質土器・碗			5.5			細：石英普・長石普・大山ガラス少	外：7.5YR6/6 淡黄	良好	口縁部：ヨコナデ	口縁部 1/8	肥前系灰釉 口縁にやや難あり
251 SP2018	土師質土器・小皿	7.9	4.3	2.1			細：石英多・長石多・黒雲母少・大山ガラス少	外：7.5YR8/2 灰白	良好	口縁～底部：摩滅	口縁部 8/8	口縁部：摩滅
252 SP1129	土師質土器・小皿	8.6	5.7	2.1			細：石英普・長石普・大山ガラス少	外：7.5YR8/6 淡黄	良好	口縁～底部：回転ナデ	口縁部 1/8	口縁部：摩滅
253 SP1408	土師質土器・杯	9.0	4.9	4.5			細：石英普・長石普・黒雲母少・大山ガラス少	外：7.5YR7/6 橙	良好	口縁～底部：回転ナデ？	口縁部 2/8	吉備系
254 SP2148	瓦器・碗	11.5	4.5	4.0			細：石英普・長石多・大山ガラス普	外：内・7.5YR8/2 灰白	良好	口縁部：ヨコナデ	口縁部 8/8	口縁部：モロミ著
255 SP2218	瓦器・碗		3.8				細：石英少・長石少	外：内・NS/8 灰白	良好	底部：ヨコナデ	底部：ナデ？	底径にやや難あり
256 SP1258	焼継陶器・皿	10.3					中：石英少・長石少・黒色粒普	外：5YR6/4 にぶい橙	良好	口縁～体部：回転ナデ	口縁部 2/8	和泉型
							内：5YR5/4 にぶい赤					

報文番号	遺構名	部位	器種	口径	底径	器高	胎土	色調	焼成	外面部調査	内面部調査	段存率	产地等	備考	
257	SP1334	施釉陶器・皿	精緻	4.4			粗緻	釉：50R/2.5 明るい灰黄緑 底面：ケズリ	良好	底部：輪胎、回転ケズリ 底面：ケズリ	底部：施釉	底部：施釉	底部：施釉	内底面摩滅	
258	SP1613	施釉陶器・皿	精緻				粗緻	釉：10R/5 黄みの無い灰赤 底面：2.5V8/1 灰白	良好	口縁部：鉄輪施釉	口縁部：鉄輪施釉	口縁部 1/8	瓶：丸皿 (窓3段階)	瓶：丸皿	
259	SP1618	施釉陶器・碗	精緻	10.8			粗緻	釉：10YR7/2.5 五段銀 底面：NS/灰白	良好	口縁部：施釉	口縁部：施釉	口縁部 1/8	瓶：丸皿	瓶：丸皿	
260	SP1390	施釉陶器・皿	精緻	12.6			粗緻	釉：50V6/2.5 五段銀 底面：5V7/1 灰白	良好	口縁部～体部：回転ナデ： 施釉	口縁部～体部：施釉	口縁部 1/8	瓶：丸皿	瓶：丸皿にやや難あり	
261	SP1578	磁器・皿	-	9.8			-	吳須：5B3.5/3.5 線みの暗 い青 脇：10YR8/2 灰白	良好	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	口縁部 1/8	中国・杭州 窓系骨花	口径にやや難あり	
262	SP1243	磁器・皿	-	7.2			-	釉：NS/5 日	良好	底部～高台：施釉 端：輪胎	底部：施釉 端：輪胎	底部：施釉	底部：施釉	底部：施釉	
263	SP2349	施釉陶器・皿	精緻	12.8	3.9	3.5	粗緻	釉：5V6/2 灰オリーブ 底面：7.5V8/6 瓶	良好	口縁部～体部～高 台内：輪胎、回転ケズリ	口縁～底部：施釉 内：歩道	見込	口縁部 3/8	肥前系青緑 窓系白磁	
264	SP2349	施釉陶器・碗	精緻	9.9			粗緻	釉：7.5V6/2 暗灰黃 底面：2.5V5/2 暗灰黃	良好	口縁～体部：施釉	口縁部 1/8	肥前系また 輪胎くかかる	輪胎	輪胎	
265	SP2346	須恵質土器・碗	粗	14.2			細	細：石英少・長石少・火山ガラス少 粗：石英普・長石普・黒雲母普・火山ガ	外・内：NS/灰白 外：10YR6/4 ぶい黄青 内：5V8/6 瓶	良好	口縁部～体部：回転ナデ： 底部：輪底	口縁部～体部：回転ナデ： 底部：輪底	口縁部 1/8	肥前系また 輪底山周辺	輪底山周辺
266	SP2346	土師質土器・火鉢	粗				粗	細：石英普・長石普・黒雲母少・火山ガ ラス少	外：7.5V8/2 灰白 内：10YR8/2 灰白	良好	底部～脚部：押圧・ナデ	底部：押圧・ナデ	口縁部 1/8	外面煤付着	脚部破片
307	SK23	上層	土師質土器・杯	8.4	4.9	5.5	細	細：石英普・長石普・黒雲母少・火山ガ ラス少	外：2.5V8/2 灰白	やや歛	口縁～底部：回転ナデ 底面：糸引り	口縁～底部：回転ナデ 底面：糸引り	口縁部 7/8	肥前系また 輪底山周辺	輪底山周辺
308	SK23	上層	土師質土器・溜鉢	9.8			粗	粗：石英普・長石少・黒雲母多・火山ガラス普 中：石英少・長石少・黒雲母多・火山ガ	外：7.5V8/6 瓶 内：10YR8/4 淡黄緑	良好	口縁部：回転ナデ： 底部：押圧後削りし日 内：米調整	口縁部：回転ナデ： 底部：押圧後削りし日 内：米調整	口縁部 1/8	肥前系また 輪底山周辺	肥前系また 輪底山周辺
309	SK23	上層	土師質土器・鍋	23.1			粗	粗：石英普・長石少・黒雲母少・火山ガ ラス少	外：10YR8/4 淡黄緑 内：10YR8/1 灰白	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：押圧・ナデ	口縁部：ヨコナデ 体部：押圧・ナデ	口縁部 1/8	肥前系また 輪底山周辺	肥前系また 輪底山周辺
310	SK23	下層	瓦質土器・甕	37.8			粗	細：石英少・長石少・黒雲母少・火山ガ ラス少	外：NS/灰白 内：10YR3.1 オリーブ 底面：糸引い回線	良好	口縁部：ヨコナデ 頭部：輪底	口縁～底部：回転ナデ 頭部：輪底	口縁部 1/8	肥前系また 輪底山周辺	肥前系また 輪底山周辺
311	SK26	上層	土師質土器・溜鉢	8.6	5.8	5.8	粗	細：石英少・長石少・黒雲母多・火山ガ ラス少	外：NS/灰白 内：2.5V8/2 灰白	良好	口縁～底部：回転ナデ 内：輪底ヨコナデ	口縁～底部：回転ナデ 内：輪底ヨコナデ	口縁部 1/8	肥前系また 輪底山周辺	肥前系また 輪底山周辺
312	SK26	上層	土師質土器・小皿	8.6	7.2	1.9	粗	細：石英少・長石少・黒雲母少・火山ガ ラス少	外：NS/灰白 内：10YR8/1 灰白	良好	口縁～底部：回転ナデ 内：輪底ヨコナデ	口縁～底部：回転ナデ 内：輪底ヨコナデ	口縁部 1/8	肥前系また 輪底山周辺	肥前系また 輪底山周辺
313	SK26	下層	土師質土器・小皿	5.5			粗	細：石英普・長石多・黒雲母少・火山ガ ラス少	外：7.5V8/6 瓦質盤 内：7.5V8/4 瓦質盤	良好	口縁～底部：回転ナデ 内：輪底ヨコナデ	口縁～底部：回転ナデ 内：輪底ヨコナデ	口縁部 1/8	肥前系また 輪底山周辺	肥前系また 輪底山周辺
314	SK26	下層	土師質土器・小皿	4.5			粗	細：石英多・長石多・黒雲母少・火山ガ ラス少	外：NS/灰白 内：5V8/4 瓦質盤	良好	口縁～底部：回転ナデ 内：輪底ヨコナデ	口縁～底部：回転ナデ 内：輪底ヨコナデ	口縁部 1/8	肥前系また 輪底山周辺	肥前系また 輪底山周辺
315	SK26	下層	土師質土器・小皿	8.4	5.9	5.9	粗	細：石英普・長石普・火山ガラス少	外：7.5V8/4 瓦質盤 内：7.5V8/1 灰白	良好	口縁～底部：回転ナデ 内：輪底ヨコナデ	口縁～底部：回転ナデ 内：輪底ヨコナデ	口縁部 1/8	肥前系また 輪底山周辺	肥前系また 輪底山周辺
316	SK26	下層	土師質土器・小皿	8.4	6.5		粗	細：石英普・長石普・火山ガラス少	外：NS/灰白 内：2.5V8/1 灰白	良好	口縁部：回転ナデ 内：輪底ヨコナデ	口縁部：回転ナデ 内：輪底ヨコナデ	口縁部 1/8	肥前系また 輪底山周辺	肥前系また 輪底山周辺
317	SK26	下層	土師質土器・小皿	8.4	6.3	1.6	粗	細：石英普・長石少・黒雲母少・火山ガ ラス少	外：NS/灰白 内：1.8	良好	口縁部：回転ナデ 内：輪底ヨコナデ	口縁部：回転ナデ 内：輪底ヨコナデ	口縁部 1/8	肥前系また 輪底山周辺	肥前系また 輪底山周辺
318	SK26	下層	土師質土器・小皿	8.4	6.9		粗	細：石英普・長石少・火山ガラス少	外：NS/灰白 内：10YR8/2 灰白	良好	口縁部：回転ナデ 内：輪底ヨコナデ	口縁部：回転ナデ 内：輪底ヨコナデ	口縁部 1/8	肥前系また 輪底山周辺	肥前系また 輪底山周辺
319	SK26	下層	瓦器・碗	4.6			粗	細：石英少・長石少	外・内：NS/灰	良好	底部～高台：ナデ 内：輪底ヨコナデ	底部：ナデ 内：輪底ヨコナデ	底部：ナデ	和泉型	和泉型
320	SK26	上層	土師質土器・熔炉	35.2			粗	細：石英少・長石少・火山ガラス多	外：10YR8/2 灰白 内：2.5V8/1 灰白	良好	口縁部：ヨコナデ 継めハケ後押	口縁部：ヨコナデ 継めハケ後押	口縁部 1/8	口縫にやや難あり、外面煤付 着	口縫にやや難あり、外面煤付 着
321	SK26	下層	焼成陶器・底部	30.8			粗	細：石英普・長石普・黑色粒普	外：5V6/2 灰オリーブ 内：7.5V8/2 灰白	良好	底部～高台：ナデ 内：輪底ヨコナデ	底部：ナデ 内：輪底ヨコナデ	底部：ナデ	底径にやや難あり	底径にやや難あり
322	SK26	下層	土師質土器・足金	ラス少			粗	細：石英普・長石普・黒雲母少・火山ガ ラス少	外：10R7/6 明黄褐 内：2.5V7/4 淡黄	良好	口縁～鋤部：ナデ 内：輪底ヨコナデ	口縁～鋤部：ナデ 内：輪底ヨコナデ	口縁部 1/8	外面煤付着	外面煤付着

鉢文番号	遺構名	層位	器種	底径	器高	口徑	外面調査	施成	内面調整	底径～体部：灰釉施釉	口縁～体部：灰釉施釉	残存率	产地等	備考
329	SK27		施釉陶器・皿	8.4			口縁 精微	良好	口縁～体部：灰釉施釉	口縁部 1/8	瓶戸・英濃 丸皿(大器 2～3段)	口縁部 1/8	口径にやや難あり	
330	SK30		土師質土器・韌鉢				外：石英少・長石少	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：押・ツ後削し目	口縁部 1/8	外面模？付着	口縁部 1/8	口径にやや難あり	
331	SK33 A 上層		施釉陶器・碗	11.7			内：石英少・長石少	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：押・ナデ	口縁部 1/8	外面模？付着	口縁部 1/8	口径にやや難あり	
332	SK33 A 上層		磁器・碗	15.3			中：石英少・長石少	精微	口縁部：施釉	口縁部 1/8	肥前系まと は高取系	口縁部 1/8	口径にやや難あり	
333	SK33 A 上層		土師質土器・杯	5.2			外：石英少・長石少	良好	口縁部：施釉	口縁部 1/8	口径にやや難あり	口縁部 1/8	口径にやや難あり	
334	SK33 A 上層		土師質土器・土鍋	49.1			内：石英少・長石少	精微	口縁部：施釉	口縁部 1/8	口径にやや難あり	口縁部 1/8	口径にやや難あり	
335	SK33 A 上層		土師質土器・土鍋	52.8			外：石英少・長石少・黒雲母少・火山ガラス少	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：横板ナデ？ナデ	口縁部 1/8	口縁部 1/8	口縁部 1/8	口径にやや難あり	
342	SK33 A 下層		土師質土器・杯	4.8			外：石英少・長石少	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：横板ナデ？ナデ	口縁部 1/8	口縁部 1/8	口縁部 1/8	口径にやや難あり	
343	SK33 A 下層		土師質土器・足金	20.2			外：石英少・長石少・黒雲母少・火山ガラス少	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：横板ナデ？ナデ	口縁部 1/8	口縁部 1/8	口縁部 1/8	口径にやや難あり	
344	SK33 A 下層		磁器・碗	4.8			外：石英少・長石少・黒雲母少・火山ガラス少	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：横板ナデ？ナデ	口縁部 1/8	口縁部 1/8	口縁部 1/8	口径にやや難あり	
345	SK33 A 下層		磁器・皿	10.4	5.1	2.7	外：石英少・長石少・黒雲母少・火山ガラス少	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：横板ナデ？ナデ	口縁部 1/8	口縁部 1/8	口縁部 1/8	口径にやや難あり	
346	SK33 A 下層		磁器・皿	4.5			外：石英少・長石少・黒雲母少・火山ガラス少	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：横板ナデ？ナデ	口縁部 1/8	口縁部 1/8	口縁部 1/8	口径にやや難あり	
351	SK33 B 下層		土師質土器・皿	10.0	6.4	2.4	外：石英少・長石少・黒雲母少・火山ガラス少	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：横板ナデ？ナデ	口縁部 1/8	口縁部 1/8	口縁部 1/8	口径にやや難あり、口縁部 1 箇所所灯心痕	
352	SK33 B 下層		施釉陶器・皿	14.7			外：石英少・長石少・黒雲母少・火山ガラス少	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：施釉	口縁部 1/8	肥前系灰釉	口縁部 1/8	口径にやや難あり	
353	SK33 B 下層		磁器・皿	5.1			外：石英少・長石少・黒雲母少・火山ガラス少	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：横板ナデ？ナデ	口縁部 1/8	肥前系灰釉	口縁部 1/8	口径にやや難あり	
354	SK33 B 下層		磁器・皿	12.8	4.8	3.1	外：石英少・長石少・黒雲母少・火山ガラス少	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：横板ナデ？ナデ	口縁部 1/8	肥前系灰釉	口縁部 1/8	口径にやや難あり	
355	SK33 B 下層		土師質土器・容器	49.2			外：石英少・長石少・黒雲母少・火山ガラス少	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：横板ナデ？ナデ	口縁部 1/8	肥前系灰釉	口縁部 1/8	口径にやや難あり	
361	SK34 上層		土師質土器・小皿	8.7			外：石英少・長石少・黒雲母少・火山ガラス少	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：横板ナデ？ナデ	口縁部 1/8	肥前系灰釉	口縁部 1/8	口径にやや難あり	
362	SK34 下層		土師質土器・小皿	7.8			外：石英少・長石少・黒雲母少・火山ガラス少	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：横板ナデ？ナデ	口縁部 1/8	肥前系灰釉	口縁部 1/8	口径にやや難あり	
363	SK34 下層		土師質土器・小皿	8.0	4.9	1.5	外：石英少・長石少・黒雲母少・火山ガラス少	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：横板ナデ？ナデ	口縁部 1/8	肥前系灰釉	口縁部 1/8	口径にやや難あり	
364	SK34 下層		土師質土器・杯	4.7			外：石英少・長石少・黒雲母少・火山ガラス少	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：横板ナデ？ナデ	口縁部 1/8	肥前系灰釉	口縁部 1/8	口径にやや難あり	
365	SK34 上層		施釉陶器・皿				外：石英少・長石少・黒雲母少・火山ガラス少	精微	口縁部：施釉	口縁部 1/8	肥前系灰釉	口縁部 1/8	口径にやや難あり	
366	SK34 下層		土師質土器・韌鉢	27.9			外：石英少・長石少・火山ガラス少・赤	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：横板ナデ？ナデ	口縁部 1/8	口縁部 1/8	口縁部 1/8	口径にやや難あり	
367	SK34 下層		土師質土器・片口鉢	25.1			外：石英少・長石少・火山ガラス多・赤	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：横板ナデ？ナデ	口縁部 1/8	口縁部 1/8	口縁部 1/8	口径にやや難あり	
368	SK34 下層		土師質土器・韌鉢	13.3			外：石英少・長石少・黒雲母少・火山ガラス少	良好	口縁部：横板ナデ？ナデ	口縁部 1/8	口縁部 1/8	口縁部 1/8	口径にやや難あり	
369	SK34 下層		土師質土器・足金	27.8			外：石英少・長石少・火山ガラス多・赤	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：横板ナデ？ナデ	口縁部 1/8	口縁部 1/8	口縁部 1/8	口径にやや難あり	
370	SK34 上層		瓦質土器・甕	33.4			外：石英少・長石少・黒雲母少・火山ガラス少	良好	口縁部：ヨコナデ・ナデ 体部：横板ナデ？ナデ	口縁部 1/8	口縁部 1/8	口縁部 1/8	口径にやや難あり	
371	SK34 下層		土師質土器・脚部				外：石英少・長石少・黒雲母少・火山ガラス少	良好	口縁部：ヨコナデ・ナデ 体部：横板ナデ？ナデ	口縁部 1/8	口縁部 1/8	口縁部 1/8	口径にやや難あり	

土器観察表 (9)

報文番号	遺構名	部位	器種	口径	底径	器高	胎土	色調	焼成	外面調整	内地等	焼存率	参考
375	SK35	中層	土師質土器・土鍋				中：石英質・長石質・火山ガラス少	外：10YR6/6 明黄褐	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：ナデ?	内面調整 口縁部：ヨコナデ 体部：鐵板ナデ	口縁部 1/8	外面焼付着
376	SK35	上層	土師質土器・擂鉢	23.1			中：石英少・長石少・黒雲母多・火山ガラス少・赤色粒少	外：10YR8/2 灰白 内：10YR8/6 黄褐	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：ヨコナデ	口縁部 1/8	口径にやや難あり	
377	SK36		土師質土器・足釜				中：石英多・長石多・黒雲母少・火山ガラス少	外：10YR6/2 灰白 内：10YR5/6 黄褐	良好	口縁部：ヨコナデ・ナデ 体部：押庄・ナデ	口縁部 1/8	口縁部・鐵板ナデ後削し目	
378	SK38		施釉陶器・皿	11.7			精緻	釉：10Y6/1 黄褐	良好	口縁～体部：施釉 口縁～体部：施釉	口縁部 1/8	口縁にやや難あり	
379	SK38		施釉陶器・皿	3.8			精緻	胎：N7/1 灰白 釉：5Y7/1 灰白	良好	体部：施釉 底部～高台： 體胎 回転ナデ	体～底部：施釉 見込み：必ず現 底部 4/8	肥前系灰釉	
380	SK38		施釉陶器・皿	4.4			精緻	釉：N8/1 灰白 鉛釉：2.5Y3/2 黑褐 鉛釉：10YR8/4 深黄褐	良好	体部：施釉 底部～高台： 體胎 回転ナデ	胎～底部：施釉 見込み：必ず現 底部 8/8	肥前系斬絵	
381	SK38		施釉陶器・皿	13.4			精緻	釉：N9/5 白 胎：7.5YR6/4 にぶい橙	良好	体部：施釉 体部：鐵板、口縁～体部：施釉 回転ナデ	口縁部 2/8	口縁にやや難あり	
382	SK38		施釉陶器・皿	4.1			精緻	釉：2.5Y3/2 黑褐 鉛釉：7.5YR6/4 にぶい橙	良好	体部：施釉 底部～高台： 體胎 回転ナデ	体～底部：施釉 見込み：必ず現 高台 1/8	肥前系斬絵	
383	SK38		土師質土器・甕	39.0			中：石英質・長石質・黒雲母多・火山ガラス少	外：2.5Y7/4 にぶい橙 内：10YR8/4 明るい灰黄	良好	口縁部：ヨコナデ・壁底、 高台内：ケズリ	口縁部 1/8	口径にやや難あり	
385	SK39	上層	磁器・碗	16.0			—	釉：N7/1 灰白 胎：10YR8/2 灰白	良好	口縁部：施釉、窓延・井	見込み：必ず現 口縁部 1/8	口径にやや難あり	
387	SK41		土師質土器・小皿?	3.9			細：石英質・長石質・黒雲母少・火山ガラス少	外：10YR8/3 浅黄褐 内：10YR8/2 灰白	良好	口縁部：ヨコナデ後ヨコナデ 綫板ナデ後ヨコナデ	口縁部 1/8	口径にやや難あり	
388	SK42	上層	施釉陶器・皿	12.2			精緻	釉：10Y4/6 白 胎：10YR8/2 灰白	良好	口縁部：施釉、窓延・井	見込み：必ず現 口縁部 1/8	口径にやや難あり	
389	SK42	上層	磁器・皿	4.9			—	細：石英質・長石質・黒雲母少・火山ガラス少	良好	口縁部：回転ナデ? 壁底 底部：回転ナデ? 壁底	口縁部 2/8	口径にやや難あり	
391	SK44		土師質土器・小皿	5.3			細：石英多・長石多・火山ガラス普	外・内：2.5Y8/3 濃黄 胎：N9/5 白	良好	口縁部：施釉、窓延・井	口縁部 1/8	中国・龍泉 軸や厚くかかる、口溝に難	
392	SK44		施釉陶器・小盃(朱入)	6.8			精緻	釉：10YR3/2 黑褐 胎：10YR8/1 灰白	良好	口縁部：施釉、窓延・井	口縁部 1/8	中国・龍泉 軸や厚くかかる、口溝に難	
393	SE01		瓦器・小皿	8.8			細：石英少・長石少	外・内：N3/暗灰	良好	口縁部：ヨコナデ 底部：押庄・ナデ	口縁部 1/8	中国・龍泉 軸や厚くかかる、口溝に難	
394	SE01		土師質土器・碗	15.2			中：石英質・長石質・火山ガラス少	外・内：10YR8/2 灰白	良好	口縁～体部：回転ナデ・ 壁底：壁底	口縁部 1/8	中国・龍泉 軸や厚くかかる、口溝に難	
395	SE01		瓦器・碗	13.9			細：石英少・長石少	外・内：N4/灰	良好	口縁部：ヨコナデ 底部：ヨコナデ後削文	口縁部 1/8	中国・龍泉 軸や厚くかかる、口溝に難	
396	SE01		須恵器・捏鉢	29.6			粗：石英質・長石質	外・内：N5/灰	良好	口縁～体部：回転ナデ 底部：壁底	口縁部 1/8	中国・龍泉 軸や厚くかかる、口溝に難	
398	SK03	上層	磁器・碗	—			—	釉：7.5Y7/1 灰白 胎：N8/灰白	良好	口縁端部：窓延 口縁部：施釉	口縁部 1/8	中国・白磁	
399	SK03	上層	土師質土器・皿	4.4			細：石英質・長石質・黒雲母少・火山ガラス少	外：2.5Y8/2 灰白 内：10YR8/2 灰白	良好	口縁部：ヨコナデ 底部：窓延・静手切り	口縁部 1/8	口径にやや難あり	
400	SK03	上層	施釉陶器・皿	11.1	5.9	2.2	精緻	釉：1.50Y6.5/4 黄みの ふい黄緑	良好	口縁～底部：施釉、窓延 高台端～内：窓延 ケズリ?	口縁部 6/8	中国・龍泉 軸や厚くかかる 窓4脚前半	
401	SK03	上層	土師質土器・擂鉢	24.2			中：石英少・長石少・黒雲母少・火山ガラス少	外：2.5Y8/2 灰白 内：10YR8/2 灰白	良好	口縁部：ヨコナデ 底部：窓延・押庄・ナデ	口縁部 1/8	口径・傾きにやや難あり	
402	SK03	上層	土師質土器・足釜	24.4			粗：石英多・長石多・黒雲母少・火山ガラス少	外・内：2.5Y8/2 灰白 内：10YR8/2 灰白	良好	口縁～鷲部：ヨコナデ 底部：押庄・ナデ	口縁部 1/8	口径・傾きにやや難あり	

鉢文番号	遺物名	層位	器種	口径	底径	器高	胎土	色調	焼成	外面調整	内面調整	底子等	備考
403	SX03	上層	土師質土器・土鍋	42.6			中・石英質・長石質・火山ガラス少 外：5W6/1オリーブ黒 内：5W6/8 橙	良好	口縁部：ヨコナナデ 体部：横・底部：横・ハケ・鏡板ナデ	口縁部：ヨコナナデ 体部～底部：横・ハケ・鏡板ナデ	口縁部 1/8 以下	口径にやや難あり、外縁付着	
411	SX03	下層	土師質土器・皿	10.3	4.9	2.2	細・石英少・長石少・黒雲母少・火山ガ ラス少	良好	口縁～底部：回転ナナデ 底面：糸切り 底面～高台：底面・糸切り	口縁～底部：回転ナナデ	口縁部 2/8	上層出土の遺物と接合	
412	SX03	下層	施釉陶器・皿	6.1			精緻	良好	底部～高台内：灰釉施釉 底面：盤	底部：灰釉施釉 見込み：円形施釉	高台 1/8 肥前系灰釉 窯 4段階前半	窓・底盤・傾くから、内・外縁及び底 面に焼付着、	
413	SX03	下層	施釉陶器・皿	12.4	5.1	3.5	精緻	良好	口縁～底部：施釉 高台：露胎、ケシリ 胎：10W7/1灰白	口縁～底部：施釉 見込み：少目環	口縁部 7/8 以下	窓前系灰釉 内・外縁及び底面に焼付着	
414	SX03	下層	磁器・碗	—			—	良好	口縁～底部：施釉 高台：露胎、ケシリ 胎：10W7/1灰白	口縁～底部：施釉 見込み：少目環	口縁部 1/8 以下	窓前系灰釉 内・外縁及び底面に焼付着	
415	SX03	下層	土師質土器・土鍋				中・石英質・長石質・黒雲母少・火山ガ ラス少	良好	口縁部：ヨコナナデ 体部：押・ハケ後横 板ナデ	口縁部：ヨコナナデ 体～底部：斜め・ハケ後横 板ナデ	口縁部 1/8 以下	窓前系灰釉 外縁付着、上層出土の遺物 と接合	
416	SX03	下層	土師質土器・土鍋	40.3			中・石英多・長石多・黒雲母普・火山ガ ラス少	良好	口縁部：ヨコナナデ 体部：押・ハケ後横 板ナデ	口縁部：ヨコナナデ 体～底部：斜め・ハケ後横 板ナデ	口縁部 1/8 以下	窓前系灰釉 内・外縁及び底面に焼付着	
418	SX04	上層	土師質土器・小皿	7.9	6.1	1.3	細・石英質・長石質・火山ガラス少	良好	口縁～底部：回転ナナデ 外：10W6/2灰質尾色 内：7.5W7/3にぶい黄橙	口縁～底部：回転ナナデ 底面：斜板ナデ	底部 1/8	窓前系灰釉 内・外縁及び底面に焼付着	
419	SX04	上層	土師質土器・小皿	8.1	5.9		中・石英質・長石質・火山ガラス少	良好	口縁～底部：回転ナナデ 外：7.5W7/6 橙	口縁～底部：回転ナナデ 底面：斜板ナデ	口縁部 1/8	窓前系灰釉 内・外縁及び底面に焼付着	
423	SX04	下層	土師質土器・小皿	6.4			細・石英少・長石少・火山ガラス少	良好	口縁部：回転ナナデ・摩滅 胎：7.5W4/4 橙 胎：7.5W7/6 橙	口縁～底部：摩滅 底面：斜板ナデ	口縁部 1/8	窓前系灰釉 内・外縁及び底面に焼付着	
424	SX04	下層	施釉陶器・角皿	11.2			精緻	良好	口縁部：回転ナナデ・摩滅 胎：10W8/2灰白	口縁～底部：摩滅 底面：斜板ナデ	口縁部 1/8	窓前系灰釉 内・外縁及び底面に焼付着	
425	SX04	下層	施釉陶器・角皿				精緻	良好	口縁部：回転ナナデ・摩滅 胎：10W8/2灰白	口縁～底部：摩滅 底面：斜板ナデ	口縁部 1/8	窓前系灰釉 内・外縁及び底面に焼付着	
426	SX04	下層	瓦質土器・火鉢	15.1	11.6		細・石英質・長石質・火山ガラス普	良好	口縁部：回転ナナデ・ナナデ 底面～底部：横・神疣・ナナデ	口縁部：回転ナナデ・ナナデ 底面～底部：横・神疣・ナナデ	口縁部 1/8 以下	窓前系灰釉 内・外縁及び底面に焼付着	
427	SX04	下層	土師質土器・壺	25.3			中・石英少・長石少・火山ガラス普・赤 色紅少	良好	口縁部：ヨコナナデ 底面：神疣・ナナデ	口縁部：ヨコナナデ 底面：神疣・ナナデ	口縁部 1/8 以下	窓前系灰釉 内・外縁及び底面に焼付着	
432	SD08	下層	施釉陶器・皿	10.9			細・石英質・長石質・火山ガラス？少	良好	口縁部：回転ナナデ後施釉 底面：静止糸引リ	口縁部：回転ナナデ後施釉 底面：静止糸引リ	口縁部 1/8	窓前系灰釉？	
433	SX05	土師質土器・小皿	7.8			細・石英少・長石少・火山ガラス少	良好	口縁～底部：回転ナナデ 底面：斜板	口縁～底部：回転ナナデ 底面：斜板	口縁部 1/8	窓前系灰釉？		
434	SX05	土師質土器・皿	3.9			細・石英少・長石少・黒雲母少・火山ガ ラス少・赤色紅少	良好	口縁～底部：回転ナナデ 底面：斜板	口縁～底部：回転ナナデ 底面：斜板	底部 8/8	窓前系灰釉？		
435	SX05	須恵器・程鉢	24.5			中・石英質・長石質・黒色紅少	良好	口縁～底部：回転ナナデ 底面：斜板面に焼く巴紋	口縁～底部：回転ナナデ 底面：斜板面に焼く巴紋	口縁部 1/8	窓前系灰釉 内・外縁及び底面に焼付着		
438	SD09	施釉陶器・碗				精緻	良好	体～高台：施釉 高台内：施釉、砂付着	体～底部：施釉 高台内：施釉、砂付着	底部 4/8	窓前系灰釉 内・外縁及び底面に焼付着		
439	SD09	磁器・碗		4.8		—	—	良好	体～高台：施釉 高台内：施釉、砂付着	体～底部：施釉 高台内：施釉、砂付着	高台 2/8	窓前系灰釉 内・外縁及び底面に焼付着	
440	SD09	土師質土器・壺	30.5				中・石英少・長石少・黒雲母少・火山ガ ラス多	良好	口縁部：ヨコナナデ 体部：押・ハケ後ヨコナナデ	口縁部：ヨコナナデ 体部：押・ハケ後ヨコナナデ	口縁部 1/8	窓前系灰釉 内・外縁及び底面に焼付着	
443	SD10	土師質土器・足金	26.8				相・石英質・長石質・火山ガラス少	良好	口縁部：ヨコナナデ 体部：押・ハケ後ヨコナナデ	口縁部：ヨコナナデ 体部：押・ハケ後ヨコナナデ	口縁部 1/8	窓前系灰釉 内・外縁及び底面に焼付着	
444	SD10	土師質土器・足金	23.8				中・石英多・長石多・火山ガラス多	良好	口縁部：ヨコナナデ 体部：押・ハケ・鏡板ナデ	口縁部：ヨコナナデ 体部：押・ハケ・鏡板ナデ	口縁部 1/8	窓前系灰釉 内・外縁及び底面に焼付着	

土器観察表 (11)

部文番号	遺構名	層位	器種	器種	口径	底径	器高	胎土	色調	焼成	外面部調整	内面部調整	残存率	産地等	備考
445	SD10		土師質土器・壺鉢		25.8			粗: 石英質・長石質・火山ガラス多 細: 石英質・長石質・火山ガラス少	外・内: 2.5Y8/4 淡黄 外: 2.5Y3/1 黒褐色 内: 2.5Y5/4 黄褐色	良好	口縁部: ヨコナダ 体部: 横・斜め板ナデ ナデ	口縁部: ヨコナダ 体部: 横・斜め板ナデ ナデ	口縁部: 横・斜め板ナデ 体部: 横・斜め板ナデ ナデ	以下	口径にやや難あり
446	SD10		土師質土器・土鍋	46.6				中: 石英質・長石質・黒雲母少・火山ガラス少	外: 2.5Y3/1 黒褐色 内: 2.5Y5/4 黄褐色	良好	口縁部: ヨコナダ 体部: 横・斜め板ナデ ナデ	口縁部: ヨコナダ 体部: 横・斜め板ナデ ナデ	口縁部: 横・斜め板ナデ 体部: 横・斜め板ナデ ナデ	以下	口径にやや難あり、外面抹付
447	SD13	下層	古式土師器・壺			3.0		中: 石英質・長石少・火山ガラス少	外: 5Y6/6 稨 外: 7.5Y7/6 橙	やや軟	口縁部: ヨコナダ・摩滅 体部: ヨコナダ? 摩滅	口縁部: ヨコナダ 体部: ヨコナダ? 摩滅	口縁部: ヨコナダ 体部: ヨコナダ? 摩滅	以下	口径にやや難あり
448	SD13	上層	弦生土器・底部					中: 石英質・長石少・黒雲母少・火山ガラス少	外: 3Y5/2 淡オリーブ 内: 3Y5/2 黒	やや軟	口縁部: ヨコナダ・摩滅 体部: ヨコナダ? 摩滅	口縁部: ヨコナダ 体部: ヨコナダ? 摩滅	口縁部: ヨコナダ 体部: ヨコナダ? 摩滅	以下	口径にやや難あり
449	SD13	上層	弦生土器・底部	3.9				中: 石英少・長石少・黒雲母少・火山ガラス少	外: 2.5Y7/8 黄 内: 2.5Y5/1 黄灰	軟	口縁部: ヨコナダ・摩滅 体部: ヨコナダ? 摩滅	口縁部: ヨコナダ 体部: ヨコナダ? 摩滅	口縁部: ヨコナダ 体部: ヨコナダ? 摩滅	以下	口径にやや難あり
450	包含層		瓦器・小皿	8.0				細: 石英少・長石少	外・内: NS/暗灰 外: N7/灰白	良好	口縁部: ヨコナダ 体部: 植生・押正・ナデ	口縁部: ヨコナダ 体部: 植生・押正・ナデ	口縁部: ヨコナダ 体部: 植生・押正・ナデ	以下	口径にやや難あり
451	包含層		瓦器・碗		4.2			細: 石英少・長石少	外・内: NS/灰白 外: N8/灰白	良好	口縁部: ヨコナダ 体部: 植生・押正・ナデ	口縁部: ヨコナダ 体部: 植生・押正・ナデ	口縁部: ヨコナダ 体部: 植生・押正・ナデ	以下	口径にやや難あり
452	包含層		磁器・碗		5.4			—	—	—	—	—	—	和泉型	底径にやや難あり
453	包含層		磁器・碗		5.3			—	—	—	—	—	—	中国・直泉 緑系・青磁	口径にやや難あり
454	包含層		磁器・碗					—	—	—	—	—	—	袖厚くかかる 緑系・青磁	口径にやや難あり
455	包含層		施釉陶器・皿	9.8				粗微	袖: 8.5G7/2 緑みのうす 胎: 8.5G7/3 黄みのうす	良好	口縁部: 施釉 胎: 8.5G7/2 緑みのうす 胎: 8.5G7/3 黄みのうす	口縁部: 施釉 胎: 8.5G7/2 緑みのうす 胎: 8.5G7/3 黄みのうす	口縁部: 施釉 胎: 8.5G7/2 緑みのうす 胎: 8.5G7/3 黄みのうす	以下	袖厚くかかる 緑系・青磁
460	SB54		土師質土器・小皿	6.4	0.8			細: 石英少・長石少・火山ガラス少	外・内: 10TR8/2 灰白 外: Y7/1 灰白	良好	口縁部: 回転ナデ 底面: 回転ナデ?	口縁部: 回転ナデ 底面: 回転ナデ?	口縁部: 回転ナデ 底面: 回転ナデ?	以下	口径にやや難あり
461	SB54		土師質土器・小皿	7.0	6.2			細: 石英少・長石少・火山ガラス少	外・内: 10TR8/2 灰白 外: N8/灰白	良好	口縁部: 回転ナデ 底面: 回転ナデ?	口縁部: 回転ナデ 底面: 回転ナデ?	口縁部: 回転ナデ 底面: 回転ナデ?	以下	口径にやや難あり
462	SB54		土師質土器・皿	9.2	6.6	1.3		細: 石英少・長石少・火山ガラス少	外・内: 7.5Y8/6 浅黄橙 外: N8/4 浅黄橙	良好	口縁部: ヨコナデ 底面: 回転ナデ?	口縁部: ヨコナデ 底面: 回転ナデ?	口縁部: ヨコナデ 底面: 回転ナデ?	以下	口径にやや難あり
463	SB54		土師質土器・土鍋	38.2				粗: 石英多・長石多・火山ガラス少	外・内: 2.5Y8/1 灰白 外: N8/1 灰白	良好	口縁部: ヨコナデ 端面: 植生・押正・ナデ?	口縁部: ヨコナデ 端面: 植生・押正・ナデ?	口縁部: ヨコナデ 端面: 植生・押正・ナデ?	以下	口径にやや難あり
465	SB56		土師質土器・小皿	4.9	4.1	0.7		細: 石英質・長石質・黒雲母少・火山ガラス少	外・内: 10YR7/4 に5Y1 黄 外: 2.5Y8/2 灰白	良好	口縁部: 回転ナデ 底面: 回転ナデ?	口縁部: 回転ナデ 底面: 回転ナデ?	口縁部: 回転ナデ 底面: 回転ナデ?	以下	口径にやや難あり
466	SB56		土師質土器・小皿	6.0	4.4	1.0		細: 石英少・長石少・火山ガラス少	外・内: 7.5Y8/4 淡黄橙 内: 5Y8/1 灰白	良好	口縁部: 回転ナデ 底面: 回転ナデ?	口縁部: 回転ナデ 底面: 回転ナデ?	口縁部: 回転ナデ 底面: 回転ナデ?	以下	口径にやや難あり
467	SB56		土師質土器・小皿	8.6				細: 石英少・長石少・火山ガラス少	外: 2.5Y8/2 灰白 外: N8/1 灰白	良好	口縁部: 回転ナデ 底面: 回転ナデ?	口縁部: 回転ナデ 底面: 回転ナデ?	口縁部: 回転ナデ 底面: 回転ナデ?	以下	口径にやや難あり
468	SB56		土師質土器・小皿	8.9				細: 石英少・長石少・火山ガラス少	外・内: 10TR8/2 灰白 外: N8/1 灰白	良好	口縁部: 回転ナデ 底面: 回転ナデ?	口縁部: 回転ナデ 底面: 回転ナデ?	口縁部: 回転ナデ 底面: 回転ナデ?	以下	口径にやや難あり
469	SB56		土師質土器・小皿	9.4	6.6			細: 石英少・長石少・火山ガラス少	外・内: 7.5Y8/4 淡黄橙 外: N8/1 灰白	良好	口縁部: 回転ナデ 底面: 回転ナデ?	口縁部: 回転ナデ 底面: 回転ナデ?	口縁部: 回転ナデ 底面: 回転ナデ?	以下	口径にやや難あり
470	SB56		土師質土器・碗		4.6			細: 石英質・長石質・黒雲母少・火山ガラス少・赤 色粒少	外: 10TR8/2 灰白 内: 10RA/1 褐灰	やや軟	口縁部: ヨコナデ・摩滅 底面: ヨコナデ?	口縁部: ヨコナデ・摩滅 底面: ヨコナデ?	口縁部: ヨコナデ・摩滅 底面: ヨコナデ?	以下	口径にやや難あり
471	SB56		土師質土器・碗		3.6			中: 石英質・長石質・火山ガラス少・赤 色粒少	外・内: 10TR8/4 淡黄橙 外: N8/1 灰白	良好	口縁部: 回転ナデ 底面: 回転ナデ?	口縁部: 回転ナデ 底面: 回転ナデ?	口縁部: 回転ナデ 底面: 回転ナデ?	以下	口径にやや難あり
472	SB57		土師質土器・小皿	5.0				細: 石英質・長石質・火山ガラス少	外・内: 7.5Y8/4 淡黄橙 外: N8/1 灰白	良好	口縁部: ヨコナデ 底面: ヨコナデ?	口縁部: ヨコナデ 底面: ヨコナデ?	口縁部: ヨコナデ 底面: ヨコナデ?	以下	口径にやや難あり
473	SB57		土師質土器・小皿		8.6			細: 石英少・長石少・火山ガラス少	外・内: 10TR8/4 浅黄橙 外: N8/1 灰白	良好	口縁部: 植生・回転ナデ 底面: 植生・回転ナデ?	口縁部: 植生・回転ナデ 底面: 植生・回転ナデ?	口縁部: 植生・回転ナデ 底面: 植生・回転ナデ?	以下	口径にやや難あり
475	SB59		土師質土器・皿	9.9				細: 石英質・長石質・火山ガラス多	外・内: 10TR8/2 灰白 外: N8/1 灰白	良好	口縁部: 回転ナデ 底面: 回転ナデ?	口縁部: 回転ナデ 底面: 回転ナデ?	口縁部: 回転ナデ 底面: 回転ナデ?	以下	口径にやや難あり
476	SB61		土師質土器・小皿	9.1	5.7			細: 石英質・長石質・火山ガラス少	外: 5Y8/6 稨 内: 7.5Y8/2 灰白	やや軟	口縁部: 植生・回転ナデ 底面: 植生・回転ナデ?	口縁部: 植生・回転ナデ 底面: 植生・回転ナデ?	口縁部: 植生・回転ナデ 底面: 植生・回転ナデ?	以下	口径にやや難あり

報文番号	遺構名	層位	器種	口径	底径	器高	胎土	色調	焼成	外面調整	内面調整	残存率	产地等	備考
477	SB61		土師質土器・小皿	8.6	5.8	1.8	細：石英質・長石質・火山ガラス少	外・内：10YR8/3 深黄橙	良好	口縁部：回転ナデ 底面：回転ヘラ切り後板	口縁～底部：回転ナデ	口縁部2/8		口径にやや變あり
478	SB61		土師質土器・小皿	9.3	6.4	1.7	細：石英質・長石質・火山ガラス少	外・内：10YR8/3 深黄橙	良好	口縁部：回転ナデ 底面：回転ヘラ切り後板	口縁～底部：回転ナデ	口縁部3/8		口径にやや變あり
479	SB61		土師質土器・小皿	9.1	5.7	1.8	細：石英質・長石質・火山ガラス少	外・内：10YR8/3 深黄橙	良好	口縁部：回転ヘラ切り後板	口縁～底部：回転ナデ	口縁部5/8		
480	SB61		土師質土器・小皿	8.7	5.9	1.7	細：石英質・長石質・火山ガラス少	外・内：10YR8/3 深黄橙	良好	口縁部：回転ヘラ切り後板	口縁～底部：回転ナデ	口縁部7/8		
481	SB61		土師質土器・小皿	8.6	5.7	1.9	細：石英質・長石質・火山ガラス少	外・内：10YR8/3 深黄橙	良好	口縁部：回転ナデ 底面：回転ヘラ切り後板	口縁～底部：回転ナデ	口縁部6/8		
483	SB63		瓦器・碗	13.4			細：石英少・長石少・火山ガラス少	外・内：N2/ 黒	良好	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ後端文	以下		
484	SB64		土師質土器・小皿	6.3	4.6		細：石英少・長石少・火山ガラス少・赤 色粒少	外・内：7.5YR7/3 深黄橙	良好	口縁部：回転ナデ 底面：回転ヘラ切り後ナデ	口縁～底部：回転ナデ	口縁部1/8		口径にやや變あり
485	SB64		土師質土器・小皿	8.3	6.6		細：石英質・長石少・火山ガラス普 通	外・内：10YR7/2 にせい黄	良好	口縁部：回転ナデ 底面：回転ヘラ切り？後ナデ	口縁～底部：回転ナデ	口縁部1/8		口径にやや變あり
486	SB64		土師質土器・小皿	7.9	6.2		細：石英少・長石少・火山ガラス少	外：2.5Y7/2 淡黄	良好	口縁部：回転ナデ 底面：回転ヘラ切り？後ナデ	口縁～底部：回転ナデ	底部1/8		底径にやや變あり
487	SB64		土師質土器・小皿	8.1	6.4	1.7	細：石英少・長石少・火山ガラス少・赤 色粒少	外・内：10YR8/2 反白	良好	口縁部：回転ナデ 底面：回転ヘラ切り？後ナデ	口縁～底部：回転ナデ	底部1/8		底径にやや變あり
488	SB64		土師質土器・碗?	11.4			中：石英質・長石質・火山ガラス少	外・内：10YR8/2 反白	良好	口縁部：ヨコナデ	口縁部：斜めナデ	口縁部1/8		
489	SB64		土師質土器・皿?	11.6			中：石英質・長石質・火山ガラス普 通	外・内：10YR8/2 反白	良好	口縁部：回転ナデ?	口縁部：回転ナデ?	以下		口径にやや變あり
490	SB64		土師質土器・杯?	12.9			細：石英少・長石少・火山ガラス少	外・内：2.5Y8/2 反白	良好	口縁部：回転ナデ	口縁部：回転ナデ	口縁部1/8		
491	SB64		土師質土器・碗	11.8	4.8	4.0	中：石英少・長石少・火山ガラス少	外・内：10YR8/2 反白	良好	口縁部：ヨコナデ 底面：ナデ	体部：ヨコナデ 底部：ナデ	口縁部5/8		吉備系
492	SB64		土師質土器・碗	5.4			細：石英少・長石少	外・内：2.5Y8/2 反白	良好	口縁部～高台：ヨコナデ 底面：ナデ	高台：ヨコナデ	吉備系		見込み重ね焼痕
493	SB64		瓦質土器・甕?	30.6			細：石英少・長石少・角閃石？少	外・内：7.5Y8/1 黒	良好	口縁部：ヨコナデ 底面：ナデ	口縁部：ナデ	吉備系		見込み重ね焼痕
494	SB64		土師質土器・土鍋				中：石英多・長石多・黒雲母多	外・内：5YR8/8 程	良好	口縁部：ヨコナデ 底面：ナデ	口縁部：ヨコナデ	吉備系		見込み重ね焼痕
501	SB65		磁器・碗	11.1			—	釉：10Y8/1 反白 胎：9.5 白	良好	口縁部：施釉、端部磨始	口縁部：施釉、端部磨始	吉備系		在地
502	SB67		土師質土器・碗	4.8			細：石英質・長石質・黒雲母少・火山ガ ラス少	外・内：10YR8/2 反白	良好	口縁部：ナデ 高台：ヨコナデ	体～底部：ナデ 高台：ヨコナデ	吉備系		吉備系
503	SB67		土師質土器・碗	4.7			細：石英質・長石質・火山ガラス普 通	外・内：10YR8/2 反白	良好	口縁部：ナデ 高台：ヨコナデ	体～底部：ナデ 高台：ヨコナデ	吉備系		吉備系
504	SP2350		土師質土器・碗	11.4			細：石英少・長石少・火山ガラス少	外：2.5Y8/2 反白 内：5Y8/1 黑	良好	口縁部：ヨコナデ 底面：ナデ	口縁部：ヨコナデ 底面：ナデ	吉備系		内面見込み重ね焼痕
508	SP2484		須恵質土器・甕	27.2			中：石英少・長石少	外・内：N4/ 黑	良好	口縁部：ヨコナデ 下端部微ケシリ	口縁～底部：回転ナデ後 下端部微ケシリ	吉備系		吉備系
509	SP2639		須恵質陶器・溜盆	30.0			中：石英質・長石質・黑色立少	外・内：2.5G7/1 黑	良好	口縁～体部：回転ナデ後 底部：回転ナデ後 鉢身	口縁～底部：回転ナデ後 底部：回転ナデ後 鉢身	吉備系		十瓶山周辺
510	SP2653		瓦器・碗	5.1			細：石英少・長石少・火山ガラス少	外・内：2.5G7/1 黑	良好	高台：ヨコナデ 高台1/8	和泉型			
511	SP2666		須恵質土器・碗	12.9			細：石英質・長石質・火山ガラス少	外・内：5Y8/1 反白	良好	口縁部：回転ナデ 底面：ナデ	口縁部1/8 底面：ナデ	吉備系		十瓶山周辺
512	SP2697		須恵質土器・碗	13.7			中：石英少・長石少	外・内：N8/ 反白	良好	口縁～体部：回転ナデ 底部：回転ナデ後 ミガキ	口縁部1/8 底面：ナデ	吉備系		十瓶山周辺
513	SP2774		土師質土器・碗	10.8	4.8	3.3	中：石英質・長石質・火山ガラス少	外・内：10YR8/3 深黄橙	良好	口縁～底部：回転ナデ ナデ 高台：ヨコナデ	口縁部2/8 見込み：高台剥離痕	吉備系		

鉢文番号	遺構名	局位	器種	土師質土器・小皿	口径	底径	器高	底面	外表面調整	底成	外表面調整	内面調整	残存率	所在地等	備考
514	SP2773		土師質土器・小皿	6.4	5.1	0.9	石英質・長石質・黒雲母少・火山ガラス少・赤白	内：7.5YR8/6 深黄橙 外：7.5YR8/2 赤白	口縁～底部：回転ナデ・摩滅	やや歓	口縁～底部：回転ナデ・摩滅	口縁部2/8			
515	SP2796		土師質土器・小皿	6.8	5.2	1.0	石英少・長石少・火山ガラス少	内：10YR8/4 浅黄橙 外：10YR8/2 赤白	口縁～底部：回転ナデ	良好	口縁～底部：摩滅	口縁部4/8			
516	SP2796		土師質土器・皿	9.1	5.8	2.0	中：石英少・長石少・火山ガラス少	外：7.5YR7/8 深黄橙 内：7.5YR8/3 深黄橙	口縁～底部：回転ナデ	良好	口縁～底部：摩滅	口縁部8/8			
518	SP2861		土師質土器・杯	11.8	7.4	2.6	石英少・長石少・火山ガラス多	外・内：2.5YR8/1 灰白	口縁～底部：回転ナデ	良好	口縁～底部：摩滅	口縁部1/8			
519	SP2861		土師質土器・杯	5.9			石英少・長石少・火山ガラス多・赤	外・内：3YR8/1 灰白	体～底部：回転ナデ	良好	体～底部：摩滅	底部2/8			
536	SP3301		土師質土器・小皿	7.9	6.1	1.5	中：石英質・長石質・火山ガラス質・赤	外・内：10YR8/3 深黄橙 色粒少	口縁部：回転ナデ	良好	口縁部：摩滅	口縁部8/8			
537	SP3310		磁器・皿	10.9			—	釉・7.5YR7/2 赤白 胎・N7/灰白	口縁～底部：施釉	良好	口縁～底部：摩滅	口縁部1/8			
538	SP3329		磁器・皿	3.9			—	釉・7.5YR7/2 赤白 胎・N8/灰白	口縁～底部：施釉	良好	口縁～底部：摩滅	高台1/8			
540	SP3330		瓦器・碗	15.0	4.0	4.9	—	—	口縁部：回転ナデ	良好	口縁部：摩滅	口縁部4/8			
541	SP3385		土師質土器・足釜	23.0			中：石英質・長石質・足釜	外・内：10YR5/3 にぶい黄 褐	口縁～底部：ヨコナデ	良好	口縁部：ヨコナデ	口縁部1/8			
542	SP3351		土師質土器・碗	14.2	6.6	5.4	中：石英少・長石少・黒雲母少・火山ガラス少	外・内：7.5YR8/3 深黄橙 色粒少	口縁部：ヨコナデ	良好	口縁～底部：ヨコナデ	口縁部8/8			
543	SP3364		土師質土器・碗	4.4			石英質・長石質・火山ガラス少	外・内：2.5YR8/1 灰白	口縁部：ヨコナデ	良好	口縁～底部：ヨコナデ	在地？			
544	SP3364		土師質土器・碗	4.5			石英質・長石質・火山ガラス少	外・内：3YR8/1 灰白	口縁部：ヨコナデ	良好	口縁～底部：ヨコナデ	高台8/8			
545	SP3364		土師質土器・碗	—			中：石英少・長石少・火山ガラス質	外・内：2.5YR8/2 灰白	口縁部：ヨコナデ	良好	口縁～底部：ヨコナデ	吉備系			
546	SP3364		土師質土器・碗	11.3	4.8	4.1	中：石英少・長石少・火山ガラス多	外・内：10YR8/2 灰白	口縁部：ヨコナデ	良好	口縁～底部：ヨコナデ	高台3/8			
547	SP3333		青磁・皿	9.8			—	釉・N8/灰白 胎・7.5YR6/2 赤オリーブ	口縁～底部：施釉	良好	口縁～底部：施釉	高台3/8			
548	SP3381		土師質土器・小皿	5.9			石英質・長石質・火山ガラス少	外・内：10YR8/4 浅黄橙	口縁部：ヨコナデ	良好	口縁～底部：ヨコナデ	吉備系			
549	SP3363		土師質土器・小皿	9.0	6.1	2.0	中：石英質・長石質・火山ガラス少	外・内：10YR8/3 浅黄橙 内：10YR8/2 灰白	口縁部：回転ナデ	良好	口縁～底部：回転ナデ	口縁部5/8			
550	SP3428		須恵質土器・碗	13.6			石英少・長石少・火山ガラス少	外・内：1.8/灰白	口縁部：回転ナデ	良好	口縁～底部：回転ナデ	口縁部1/8			
551	SP3464		磁器・蓋？	—			胎：N9.5/白	胎：N9.5/白	体部：施釉	良好	体部：施釉	以下			
550	SP3505		施釉陶器・皿	11.9			精微	釉・7.5YR8/3 灰オリーブ 胎：N7/灰白	口縁部：施釉・端部露胎	良好	口縁部：施釉	中国・白磁			
561	SP3484		土師質土器・碗	14.9	6.0	5.4	石英多・長石多・火山ガラス多	外・内：2.5YR8/1 灰白	口縁部：ヨコナデ	良好	口縁部：ヨコナデ	口縁部1/8			
562	SP3561		瓦器・碗	4.2			石英質・長石質・火山ガラス少	外・内：N3/暗灰	口縁部：ヨコナデ	良好	口縁部：ヨコナデ	口縁部1/8			
563	SP3576		須恵質土器・壺鉢	—			中：石英質・長石質・火山ガラス少	外・内：N4/灰	口縁部：ヨコナデ	良好	口縁部：ヨコナデ	口縁部1/8			
567	SP3585		瓦質土器・土鍋	—			中：石英質・長石質	外・内：N3/暗灰	口縁部：ヨコナデ	良好	口縁部：ヨコナデ	口縁部1/8			
568	SP3586		瓦器・碗	5.1			石英質・長石質・火山ガラス少	外・内：N3/暗灰	口縁部：ヨコナデ	良好	口縁部：ヨコナデ	口縁部1/8			
569	SP3590		土師質土器・小皿	8.1	6.0	1.3	石英多・長石多・火山ガラス多・赤	外・内：10YR8/1 灰白 内：7.5YR7/4 にぶい橙	回転～底部：回転ナデ	良好	回転～底部：回転ナデ	高台7/8			
570	SP3590		土師質土器・小皿	8.5	6.4		石英多・長石多・火山ガラス質	外・内：7.5YR7/4 にぶい橙 内：3.5YR7/6 垂	口縁部：回転ナデ	良好	口縁部：回転ナデ	口縁部1/8			

朝文番号	遺物名	層位	器種	土師質土器・小皿	口径	底径	器高	始土	外・内 : 7.5VRG/6 空	焼成	外面調整	内部調整	回転ナデ	残存部	产地等	備考	
571	SP3590			土師質土器・小皿	8.0	6.8			中 : 石英質・長石質・火山ガラス少	良好	口縁部 : 回転ナデ	口縁部 : 回転ナデ	口縁部 : 回転ナデ	口縁部 1/8			
572	SP3590		土師質土器・小皿	8.3	6.2	1.8		細 : 石英多・長石多・火山ガラス多・赤色粒少	外・内 : 7.5VR7/4 にぶい 外 : 5/4/1 砂	良好	口縁部 : 回転ヘラ切り 底面 : 回転ナデ	口縁部 : 回転ナデ	口縁部 : 回転ナデ	口縁部 2/8			
573	SP3590		瓦器・皿	8.1				細 : 石英少・長石少・火山ガラス少	外・内 : 5/5/1 砂	良好	口縁部 : 回転ナデ	口縁部 : ヨコナデ	口縁部 : ヨコナデ	口縁部 2/8	和泉型	口径にやや難あり	
574	SP3590		瓦器・皿	10.3				細 : 石英少・長石少・火山ガラス少	外・内 : NS/ 砂少	良好	口縁部 : ヨコナデ	口縁部 : ヨコナデ	口縁部 : ヨコナデ	口縁部 2/8	和泉型		
575	SP3590		瓦器・皿	9.2		1.9		細 : 石英質・長石質・火山ガラス少	外・内 : 7.5VR/1 砂	良好	口縁部 : ヨコナデ	口縁部 : ヨコナデ	口縁部 : ヨコナデ	口縁部 2/8	和泉型		
576	SP3590		土師質土器・碗?	15.2				細 : 石英多・長石多・火山ガラス少	外・内 : 10VR8/4 深黄褐色	良好	口縁部 : 伸正・ナデ	口縁部 : 伸正・ナデ	口縁部 : 伸正・ナデ	口縁部 2/8	和泉型		
577	SP3590		土師質土器・碗?	25.2				粗 : 石英多・長石多・火山ガラス少	外・内 : 10VR8/1 黒 内 : 7.5VR5/6 明褐	良好	口縁部 : 伸正・ナデ	口縁部 : 伸正・ナデ	口縁部 : 伸正・ナデ	口縁部 2/8	和泉型		
578	SP3590		土師質土器・土鍋	33.6				粗 : 石英多・長石多・黒雲母少・火山ガラス少	外・内 : 10VR4/1 関灰	良好	口縁部 : 伸正・ナデ	口縁部 : 伸正・ナデ	口縁部 : 伸正・ナデ	口縁部 1/8	和泉型		
579	SP3590		土師質土器・熔?	47.1				中 : 石英質・長石質・黒雲母質・火山ガラス少	外・内 : 10VR4/2 灰黃褐色	良好	口縁部 : 伸正後ヨコナデ	口縁部 : 伸正後ヨコナデ	口縁部 : 伸正後ヨコナデ	口縁部 1/8	和泉型		
580	SP3609		磁器・碗	14.6				—	釉 : 5/8/2 砂白 胎 : 2.5/8/2 砂白	良好	口縁部 : 施釉	口縁部 : 施釉	口縁部 : 施釉	口縁部 1/8	中国・白磁		
585	SK50	上層	磁器・杯	5.0				—	釉 : NS/ 砂白 胎 : 7.5/8/2 砂白	良好	口縁部 : 一部施釉・型作り	口縁部 : 一部施釉・型作り	口縁部 : 伸正系白磁	口縁部 3/8	和泉系		
586	SK50	下層	施釉陶器・灯明皿	8.6				細 : 石英少・長石少	外 : 2.5VR5/4 にぶい赤褐色 内 : 2.5VR3/3 砂赤褐色	良好	口縁部 : 回転ナデ	口縁部 : 回転ナデ	口縁部 : 回転ナデ	口縁部 1/8	備前窯		
587	SK50	上層	施釉陶器・灯明皿	8.5	4.2	1.5		粗 : NS/ 砂白 胎 : 7.5/7/2 砂白	良好	口縁部 : 伸正系白磁	口縁部 : 伸正系白磁	口縁部 : 伸正系白磁	口縁部 1/8	和泉系			
588	SK50	上層	施釉陶器・灯明皿	9.0	3.5	1.6		精微	釉 : 7.5/7/1 砂白 胎 : 7.5/7/1 砂白	良好	口縁部 : 伸正系白磁	口縁部 : 伸正系白磁	口縁部 : 伸正系白磁	口縁部 1/8	和泉系		
589	SK50	上層	施釉陶器・碗	3.4				—	釉 : 7.5/8/2 砂白 胎 : 5/8/1 砂白	良好	口縁部 : 伸正系白磁	口縁部 : 伸正系白磁	口縁部 : 伸正系白磁	口縁部 1/8	和泉系		
590	SK50	上層	磁器・碗	5.6				—	吳須 : 緑みの暗い青 胎 : 5/5/3.5 脳 : N9.5 白	良好	体部 : 伸正系白磁 底部 : 鏡胎	体部 : 伸正系白磁 底部 : 鏡胎	体部 : 伸正系白磁 底部 : 鏡胎	体部 : 伸正系白磁 底部 : 鏡胎	高台 1/8	京・信楽系	
591	SK50	上層	施釉陶器・水滴					精微	釉 : 7.5/8/2 砂白 胎 : 7.5/8/1 砂白	良好	体部 : 伸正系白磁・菊花胎	体部 : 伸正系白磁・菊花胎	体部 : 伸正系白磁・菊花胎	体部 : 伸正系白磁	京・信楽系		
592	SK50	上層	施釉陶器・土瓶	10.4				精微	釉 : 10VR2/2 黒褐色 胎 : 2.5/5/1 黑灰	良好	口縁部 : 伸正系白磁	口縁部 : 伸正系白磁	口縁部 : 伸正系白磁	口縁部 1/8	駿河系		
593	SK50	下層	施釉陶器・浅鉢	12.0				中 : 石英質・長石質	外 : 7.5VR3/2 黑褐色 内 : 5/5/6 單赤褐色	良好	底部 : 回転ナデ?	底部 : 回転ナデ?	底部 : 回転ナデ?	底部 : 回転ナデ	備前窯		
594	SK50	上層	施釉陶器・溜鉢	12.7				中 : 石英質・長石質・黑色粒少	外・内 : 2.5VR5/6 明赤褐色	良好	底部 : 伸正系白磁	底部 : 伸正系白磁	底部 : 伸正系白磁	底部 : 伸正系白磁	備前窯		
595	SK50	上層	施釉陶器・桶木鉢	17.0				精微	釉 : 5/7/4 深赤 胎 : 2.5/6/1 砂白	良好	口縁部 : 伸正系白磁	口縁部 : 伸正系白磁	口縁部 : 伸正系白磁	口縁部 1/8	美濃系		
596	SK50	上層	土師質土器・大甕					中 : 石英質・長石質・黒雲母質・火山ガラス少	外 : 7.5VR7/4 にぶい橙 内 : 10VR8/3 深黄褐色	良好	口縁部 : ヨコナデ	口縁部 : ヨコナデ	口縁部 : ヨコナデ	口縁部 1/8	和泉系		
609	SK52	下層	土師質土器・小皿	6.2	5.1			細 : 石英質・長石質・火山ガラス少	外 : 7.5VR7/4 にぶい橙 内 : 10VR8/2 砂白	良好	口縁部 : 回転ナデ	口縁部 : 回転ナデ	口縁部 : 回転ナデ	口縁部 1/8	和泉系	口径にやや難あり	
610	SK52	上層	土師質土器・碗	11.8				細 : 石英少・長石少・黒雲母少・火山ガラス少	外 : 10VR8/2 天白	良好	口縁部 : ヨコナデ	口縁部 : ヨコナデ	口縁部 : ヨコナデ	口縁部 1/8	吉備系		
611	SK52	上層	土師質土器・杯	13.1				細 : 石英質・長石質・火山ガラス少	外・内 : 10VR4/1 関灰	良好	口縁部 : 回転ナデ	口縁部 : 回転ナデ	口縁部 : 回転ナデ	口縁部 1/8	和泉系		
612	SK52	上層	須恵質土器・壺	7.9	5.2	1.9		粗 : 石英少・長石少・黑色粒少	外 : NS/ 内 : NS/ 砂	良好	体部 : 伸正系白磁	体部 : 伸正系白磁	体部 : 伸正系白磁	体部 : 伸正系白磁	和泉系	口径にやや難あり	
614	SK53		土師質土器・小皿					細 : 石英質・長石質・火山ガラス少	外・内 : 7.5VR8/4 深黄褐色	良好	口縁部 : 回転ナデ	口縁部 : 回転ナデ	口縁部 : 回転ナデ	口縁部 1/8	吉備系		
615	SK56		土師質土器・小皿	8.8				細 : 石英少・長石少・火山ガラス質・赤色粒少	外・内 : 10VR7/1 天白	良好	口縁部 : 回転ナデ	口縁部 : 回転ナデ	口縁部 : 回転ナデ	口縁部 1/8	和泉系	口径にやや難あり	